

尾崎紅葉著

紅葉全集

十千萬堂藏版



（小川一眞製版）

明治廿五年の紅葉山人

紅葉全集 卷之試

目次

目次終



伽羅枕

（一）

またしても女物語。京は女﨟の名所、とりわけ祇園島原は其粋を萃め、二十四番の風吹絶えずして、千紫萬紅の亂咲には、東夷もおのづから其色に浮れの一節、骨太の手に扇拍子を習ひ、魂忽然とろ〳〵と鴨川の水には刄金の鈍ること奇妙なり、延鏡借りて見よ、小鬢に愧かしき年齢してしげ〳〵なる揚屋がよひ、これも交際と、名はいかにとも附けらるゝものなり、と同役の陰言も聞流して、

浮世はとかく醉醒の水野石見守と云は、江戸麹町半藏門外に人の知る旗本なりけるが、此地に在勤中祇園町東井筒抱への藝子小鶴を我物にして、淺からぬ馴染に綺情は更に盡きねど、役目の年果て近々の別離といふに、杯の數はおのづと減りて、歌へど彈ど樂まざれば、小鶴いぶかしみて子細を問ど語ず、其樣に水臭お心とは知で、京女は馬鹿律義、我に比較べて誰もかうぞと、くやしや仇なる心中立して、見給へ此お腹を、これが假初にも旦那樣憎てなりますものぞと、老人の行届ける情に、小鶴も戀の外なる戀にはずみて、眞實いとしければこそ、石見が今宵に限りてそでなき隱蔽を涙まじりに恨めば、たゞ溜息吐くを愈々口惜がりて、日頃のお言葉は皆反古か空言かと石見の膝を嚙めば、我も武士なり二言はなけれど、役目濟みて此月半には江戸へ歸へるなり。さればこそ此頃の物思ひ。いとゞ捨て難きに我胤をさへ宿したれば、馬も輿もなか〳〵此心を送難くて、と凋れて二人ともに無言の中に、燈火の小暗き影に小鶴が

泣顔は、露けき小萩が夕月の下に枝を垂れたるごとし。石見物思ひの眼にも少時は美色に見惚れ、これを置去にして再會望なきかと、自失して夢見るごとし。小鶴聲を曇らせ、我はもとより卑賤河竹の流の身、旦那様は奥様おはす御身なれば、行末添遂む心など、有りても所爲なき事、其には露ばかりの希望なく、うか／＼と今の歡樂は花の七日、いつかは血に泣く思ひと、糺森に先達而杜宇聽にお同伴申せし折の言葉が、我ながら何となく忌まはしく覺えたりしは、まことに今宵の辻占なりけり、此身はともかくも、愁きは胎内の孩子にお顔を見せず、知らするよしなく、人恥かしき父なし子に生れて、蓑虫の仇に啼くこそ、とさめ／＼と涙を流せば、石見は故意と笑ひて、これが死別離といふにはあらず、來年は御用にてまた上るほどに、隨分身を大切に勤めよ、その時壯健なる孩兒の笑顏をも見むと、この度は其を樂みに其を力に一先立歸れば、其方も快心別れてくれ。老父のやうなる我に可厭な顏せず、これまで盡し

くれし情の程は、忘れはおかじ嬉しく思ふぞ、我も此年しての浮氣見ともなければ、止めむ今日は明日はと思はぬにはあらねど、其方がやさしき世話を受くるにつけ、娘のやうに思はるれば、懷かしさの忍ばれずして、つひ無勘辨なる深陷。人の誹譏を聞くにつけ、年効なき老人と其方も愛想の盡る事あるべし。我思ふまゝ自由にして、軈て手を斷り投出す今に及びて、かういはゞ身勝手とも思はむが、其方の爲惡かれとていふにあらねば、老父が置土産と思ふて辛抱して聞てくれよ。およそ勤めの身の女は、年若く色盛りの引手數多あるまゝにおのづと心驕り、相應の客つきて根引せむ、妻にせむと言寄るものありても、上が上にも上を望みて慾には際限なく、男のさほどなる眞實を塵ほどにも思はず、容姿身代に出まかせの不足をいひ立て、冥利といふ事を知らねば、其罰にて良緣數有りながら、慢心に血迷ひて悉く取外し、此方より結婚を急ぐ頃には、男みな背後を向け後退する理、白粉も小皺は紛らせず、酒毒に髮薄

くなりて色蒼ざめ、青年の淫行報いて、惡疾に玉の肌も腐れば、犬も喰ふまじき姿。これがむかし何屋の誰かと驚かざるものなし。これといふも淺ましき女の了簡より、短き色盛の姿を頼みて、法外の吾儘いひ散らせし應報ならざるはなし。其方は今年十九、今を眞盛の花の色、移はぬ間に眞實男見出しなば、金銀姿色に目をくれず、早く見斷りてさる男に添ふべきぞ、島原の遣手輿丁の女房などに太夫の果ありとかや、隨分見苦しき事なり。其方がいとしさに行末まで氣遣はれての意見、仇に聞かば恨なるべし、と益になる事の數々をいひ含て、肴を新ため燗を熱くして、三ツ四ツ對酌して別れけるが、數日の後抱主に二百兩とらせ、小鶴と手切の相談調ひて石見は江戸へ歸りぬ。

（二）

小鶴月盈ちて生落せしは玉を欺く女子なり。初産といひ、石見の紀念といひ、身に世に替へていとしけれど、我を省れば、淺ましや色商賣の身は、年齡一ッを百金にも買うてなりと、生涯十九廿歳に依然たき心願なるに。色香はよしや褪めぬにしても、子持なりとの名立たば忽ちに客落ちて、往時の小鶴にては通るまじ。さりながら子の顏視れば何も忘れて、只道理もなく可愛けれど、思へば愁いやら悲しきやら、その子抱いては置き、置いては抱き、産後の床に居ながら苦勞の種にして持扱ひけるに、四條柳馬場なる米相場師西岡屋の內儀祝義にとて見えたり。この女も主人は同じ東井筒の右龍とて、一時は賣りに賣りたるものなるが、西岡屋の重次郎に馴染め、仕盡せし浮氣を括めて、今は世帶持の可なりなる榮耀はしながら、何處にもありと見る苦勞に面影窶れ、さりながら歷とし

たるお内儀姿。折々は東井筒にも來て、むかし馴染の今も勤めの女に取巻かれて羨まるゝ身上なり。小鶴は別て親しく、姉と頼みし右龍を見るより幼子を突付け、これ見て下さんせ、水野樣に生寫。どれ〳〵と抱取りて、なるほど爭はれぬもの、口頭から顋のあたりはお前を其儘。今もいへば、わが胸の中はそれならで、勤の中の赤子は荷物と、今も今とて床間の人形抱へて、世話燒けぬかはりに樂みなき此身こそ恨めしけれと其を案じて氣の結ぼるゝ折から。……何にしても苦勞の絶えぬが浮世。

姉樣、重樣から音信がありましたか。されば、今月で八月餘りといふに、わづか二通の手紙、いろ〳〵家にも用事溜りたれば、我ながらうるさきほど狀を出せど、いつも〳〵片音信。ほのかに聞けば、大坂表に遁されぬ博巨利の商賣口、眼前にぶら下りて手の放されぬゆゑにといひ立て、實の所は一時新町に入浸りての揚句は、藝子とやら素人とやらを圍うて、爪彈の膝枕に馴てより、淀夜船の乘心が可厭になりて、いつ歸るやら知

ざる身持と、其に悋氣するにはあらねど、此地は本宅、それを餘所にしての惡性を、いゝわと捨てゝは、お前も知つてのあれほどの苦勞の報酬なく、いかにも口惜しければ、今一度重樣に逢て、少しいひ度事あれど、尋常の狀や使にては戻るまじき氣色なれば、其子を我貰うて生の子にして知せてやらば、鬼でもなき重樣も屹度一度は歸るべし。此前の狀にも、呼戻すべき拵事の種盡きければ、身重になりたりとまで言遣りし事あれば、此子を貰へば好仕合。お前は年も若く年季もまだありて、身體丈夫になり次第花を咲かする身の足手纏。又親方とてもお前の傍には置かせじ。到底知らぬ他人の手に渡さうよりは、西岡屋の子に下さらば、ゆめゆめ麁略なく養育み、眞實の娘にして末々惡きやうには計らうまじ。我手元にあれば毎日この子の顏見にも來られ、我はまた知る通りの子煩惱、必ず案じたまふに及はず。今日わざ〳〵其話に來ましたといへば、小鶴は手を合せて、願うてもなき此方の幸福。わが子なれば氣性我に肖る所

ありて、短慮、不愛想も知れねど、其所は我と思うてゆるして、いとしがつてやつてたまはれ。お前にさへ頼めばいさゝかも氣に懸る事なく、快心勤も成るべしと歡べば、右龍はなほ歡び、さらば今から此子は連れて行くほどに、少時惜別の乳をと小鶴に抱かすれば、乳房を含ませながら、しげ〳〵と子の横顏を視むる眼中に涙を浮べ、放しともなき風情は道理と思へど、右龍はわざと氣剛く、孩子を引取りて立上れば、片手に其袖、片手に乳房を掴みて、せめてはも一口。乳もよけれど過ては其もお腹を損ぜむ。扨も頑是なき母親かな、この子さへ泣かぬものを。明日また伴れて來るほどに、其樣に未練は出さぬもの。おさらば〳〵。

（三）

幼名は仙よ〳〵と、西岡夫婦に手中の玉と大事がられぬれば、この外に眞實の兩親あることを想はず、七歳八歳から女子のすなる遊藝の數を盡して、其々の師匠取して稽古を勵みぬ。餘所行の服裝には、舞子の姿を寫して往來の足を止め、魂入たる京人形と譽めぬ者はなかりき。是皆女親の指圖にして、其身のむかしをよき事と心得、今は町家のお內儀樣になりても其心失せず、如是躾ること大事の子に自墮落を敎ふるごとし。重次郞も華美好の男なれば、財寶あるにまかせておせんが身の皮を飾りて惜む色なし。京は流石にやさしき所とて、世間を見まねに物識らぬ輩まで、和歌よ蹴鞠よ香道茶湯と持囃す地なれば、是を知らでは上流の交際なり難く、第一人間下司になりて。匂はざる花はさもしかる可しと、風雅の道一通は學ばせけり。和歌の師と賴みしは、當時に聞えし鴨某と

て、重次郎が入魂なりければ、某亦おせんを可憐娘に思ひ、才能は有一節體、容色は拉鬼體と、酔うても譽ることを忘れず。おせん十一歳の秋の暮、重次郎心算齟齬の買置が破産の初手にて、其よりけちが附きたるかして、手を出せばいつも仕損じ、内證空虚になりて外見に知られぬ逼迫、おせんが常綺羅にも肩張るほどの左衽。これではならぬ、今度といふ今度は、市場中の銀を掻浚ひて、一日なりとも持〇と唱はれ、男一代の名聞には、伽羅のわり木を薪にして、珠玉を蒸して喰はでは死なず。大願成就なさしめたまへ、石の大鳥居を寄進すべし、と祇園社へ夫婦代る〳〵日夜の參詣。さて資本というても無ければ、鴨某に事を分けて賴みぬれど、親しき中にも金錢は他人行儀、抵當なくては土藏の錠開き難しとの挨拶。西岡夫婦當惑して通宵の不寢物語、あれか此かと好分別も出ざりけるに、おせんの部屋にて琴の音、夜深に調子冴わたりて聞えぬ。今頃何と思うてかと重次郎いぶかしめば、せんは此頃夜眠られぬ癖つき

て、それゆゑの排悶なるべし。それよそれよ思ひつきたり、あの琴音のぬしを一時の抵當に、鴨樣より銀借りたまはゞ如何にといへば、十七八ともいふならばともかくも、乳の臭失せやらぬ仙が何の益にか立つ可き。いえ／＼きつと抵當に不承知なき理由は、我鴨樣へ參る度に、先生のおほせらるゝは、せんは容色といひ、才といひ、藝といひ、いづれにも微瑕なき子なり。われ不幸にも今にして老後の樂なきを常に憂く思ひて、養子養女を賴みおきたるが、心に合ふもの今に一人とてなし。さるに欲しきはせんばかりなり。外に子持の西岡殿ならば、無理にもあの女は貰ひうけたきものなれどと、心底欲しさうな口上なれば、明日行て、抵當にとて此方よりまをし出て差上ぐ可き物もなければ、今は瓦解の姿なる我家に何もなけれど、此ならばとお望の品もしあらばとほのめかして見たまへ。彼方にてはかねての希願この時と、必らずせんの事をいひ出したまふ可し。これは身賣といふにはあらで、一時凌ぎの方便なれば、氣

遣ひたまはずとも其れにて首尾よく銀を借り、美々しく儲けてむかしの西岡屋に復れば、せんの身も無事にて戻る道理との女房の了簡に委かせ、苦しき時は鼻もそぐなり、鴨に行て抵當を望みくれとの趣を語れば、果して！期限に返濟ならずば、娘せんは此方の養女たるべしとの一札を認め、所望の銀を引換に請取りけり。後ともいはず其日より、せんは鴨へ引取られ娘分になりて、願はざる榮耀までさせられ、鴨の鍾愛は昔日に倍せど、血脉の情は風にも破れず雨も碎かず、里方榮枯の形勢に餘所ながら心を配りて、芝居遊山にと勸むれば、我一人の保養は天罰のほど恐ろしくと、さりながら神社佛閣に物詣を喜ぶこと、西岡屋が利運祈念の心なるべし。落懸る軒は蛛の糸にて繋ぐも所爲なし。その年の内は、西岡屋の身代有明の燈のごとく、あやふげに幽けく持ち答へ、春も見すぼらしげに越して二月の初旬、庭に愛樹の紅梅昨日あたりより綻び初めて、例年よりも輪の見事なるに、縮まりたる我等が身の置所。主家退轉の春

に匂ふも憎しと、よしなきものに重次郎愚痴をいひかけて立出れば、女房は其木の下に立寄りて離別を惜しみけるが、不圖春やむかしのと、せんが常々好ぬる古歌を思ひ出してそゞろ涙を催せしが、せめては此家の記念、あの子への土産、と一枝手折りて裏口に待ちたる重次郎に之を見すれば、一雫ほろりと落して、世は秋なるに。

おせん只管西岡夫婦を慕ひて鴨には馴染まず、其は當座、今にと捨置くほどに、この一念逐日に熱して欲を立つれど、胸にのみ騒がして微塵も口外せざること、世話しくれるに何不足なき養家を嫌ふことを、氣の毒に思ひての遠慮なるべし。里方のかくまで懷かしきは何事ぞと、自心にもその理由は解らず、只戀ひし〳〵に惱て氣分勝れず、顏色惡しく、進退物憂氣なるを鴨は其ぞと推して、此家に居馴染ますべき工夫を案らせしに、好事あり。せんは藁の上より西岡屋に貰はれ、實母は東井筒の小鶴といふ事を知ず、彼が産後の肥立惡くて、ぶら〳〵と二月經て死せし事は尚知らず、今の兩親を眞實生の親と心得たればこそかほどには慕ふなれ。實母はかれが當歳に逝去り、實父は江戸の某といふまで實事の始末を物語らば、西岡夫婦に愛慕の念褪め、終には此方に懷くべしと、一

日おせんを一間に呼寄せ、此段々を語れど少しも信ぜず。憎き人かな、我懐かざるを恨みたまひて、よしなき空言して幼稚ものを欺むき、親子の中に水注して氣不味させ、果は我に引寄せむ心算と見えたり。さる根性の親は持まじきぞ、とてんから之を根無草と極めて更に疑ふ色なければ、鴨は進膝聲を潜めて、天地の照覽を誓うて明すまじき密事なれど、其方が疑念を霽さむばかりに語るなり。我言もし無根と思はゞ、此後家へ行かむ時、母親の簞笥か、手文函か、大事の品を入たりと思ふ所を竊に探して見よ。朱總つけたる古錦襴の袋入なる、九寸五分の護身刀あるべし。總黑漆に雲折葦の金蒔繪、目貫は金銀二羽の結雁、接葉鎺は銀造にして、作はいふとも解るまじけれど、祐定といへる名人の業物なり。錦襴の模樣は龜甲の中に牡丹花ありと精細に敎へて、其こそは實父水野石見守が歸國の節、汝が實母小鶴に置紀念とて與し品なるを、今は養母が所持すること我能く知れり。されど西岡夫婦が只管の嘆願なれば、我

も裹みて誰にも語らず、よしまた語るも益なき事と、今までは愼しみたれど、其方がさる事とも知らで、西岡夫婦を此の上なく懷かしがり、養家の我を厭ふゆゑに、物語りて聞かするも、惡意ありて彼等と無理に緣斷らせ、これまで養育の恩誼を忘れよと敎ふるにはあらざるぞ。實母は遠のむかしに冥土の鬼となり、實父石見守は其折五十路に餘れる老躰なれば、今は生死の程も知れず、幸ひに命壽くて存命し給ふとも、江戸には立派なる女房子あり、まして旗下といへば輕からざる身柄なれば、蘖子風情に馴染めたりなど、公義へ聞えなば罪科あるべきを怖れて、邂逅ふとも名乘はしたまふまじければ、之も亡人に異らず。さるからは生の兩親揃うて亡身は、西岡夫婦とて我等とて、二度目の親といふに何の相違かあるべき。西岡不運にして瓦解に及び、今は見る影なくなりて眞葛原の寂寥あたりに引籠、今日を暮らしかねたる難澁の始末。まことに氣毒ながら榮枯は天なり、是非なき世の成行とはいひながら、我もむかし

を思へば折々に寸志の驗を見すれど、燒石の水一滴及ぶ可くもあらず。其方もし我が養女とならで里方に居たらむには、賤手業はまだなる事なり、煎じ詰めなば隨分祇園島原の苦海に落ちむも測り難く、親の爲なれば其とても可厭はいへまじ。我方にあればこそ、西岡榮華を極めし時のおせんにて、木綿の肌觸を知らず、わが家櫻の名本と眺められて、末々は公家高家より好婿取すべき世間の取沙汰、われ等の心願。また西岡夫婦を大事に思はゞ、其方が養女の緣に繫がりて、我も少は合力となるべき今日の狀況、いづれにしても我を捨てゝは、自他の損といふものならずや。其方を引取てより以後、一度なりとも機嫌をそこねし事なく、いふまゝに擧動はせて、何一つ不足のあるべしとも思はれず、慈愛の上に慈愛を重ね、大事の上にも大事がりて、我子とてもあれほどにはならぬものを、あまやかしが過ぎて狗兒可愛がりと、世間の口もあるよしに聞くまでの、我が情は精一杯、此上はなきつもりなれど、心に合はぬ事あ

るにや、一向我に馴染まぬこそ愁けれ。不足あらば遠慮はいらぬ事なり、いうて聞かせよ、思ふ通りにして得さすべければ、百年の後は鴨家代々の墓に入るべき覺悟にて、わが死水をも取つてくれよ、と身に餘る果報の言葉に、おせん十二歳の兒心にも冥加おそろしくおぼえて、はつと兩手をつき、勿躰なきお言葉かな、日頃の御慈愛は眞葛原の父母もなかなか及ばず、御恩のほどは身に染みて寐覺に忘るゝ暇なけれど、離戀ひしく慕はしきは兩親にて、此頃の淺ましき身の成果を見るにつけて、いよいよ此處と彼處に離れ〴〵の住居悲しく、道理もなく涙灑れて袖の濡れぬ日もなし。容したまへ、此家を可厭とも思はず、また嫌ふにもあらざれど、鴨が怨言に怖て、聲懐き、眼濕み、幾度か頭を下ぐるにいぢらしくなりて、何の詫ることがあるものぞ、よい〳〵彼方へ行て遊べといへば、しく〳〵啜りあげて立ちけり。

（五）

京の町にて奇巧たる建築見たくば、西岡屋が仕舞屋造と、意氣過の江戸男にも二言といはせざりしほどの家宅を、やみ〳〵人手に渡し、眞葛原に蓬生の宿を借りて、格子戸開閉の賑はしきに馴れたる耳に、百鳥の啼音は哀に物寂しく、榮枯轉變の迅速なるは、夢か現か、我身上とも思はれず、奈良見物の客舍に降籠られし徒然の如し。湯盡て手を鳴らせど誰應ふるものなく、偖はと心附て米をも磨ぎ、釜下をも燻て、何爲るにも先立つは涙なり。重次郎不興にて、愚痴は見苦しきぞ、我も顔を賣りたる男一匹！此まゝに日蔭ものとなり放しに果つ可きか、開運一瞬時、と剛ぬ情の男なれば身の膏血を絞りて再擧の工夫に凝り、拱く腕は縛れる如く一日解くるとなく、夜は轉輾に枕の軋音休みなし。命は堪らず、精根かくてはいつまで續くべきと、女房案じての意見にも耳を潰して、こ

の事にのみ思凝ればいつともなく、血色蒼ざめ、頰瘦、眼落入り、月代苔深く、髭髯生て草を亂し、さながら書ける燈臺鬼の面影。見るに女房悲しく心細く、箸の轉けるまで氣に懸け、三夜續けての夢に、左の大指入墨せしあたりより腐りて落ちしは、病人の身に凶事疑ひなしと、神佛に禁物して全快を禱りけれど、納受なきは數多の男をたらせし罪の弱身に祟りけるか、假初の風邪の心地と重次郎横に仆れし夕より、大熱發して身中焚ゆるごとく、頭蓋今にも裂なむと呻聲凄じく、うつら〳〵と眠るかと見れば、無念の齒切をして、今一度むかしの西岡屋にと、譫語にまで我家の破滅をぞ苦にしける。枕元に女房唯一人途方に暮れ、此上はと鴨へ人を走らしければ、程なく息杖の音暴かに聞ゆるを、待かねしぞと迎ひに出れば、前なる駕籠よりおせん轉び出で、母樣！父樣は。懷かしや仙かと母は泣聲なり。後の駕籠には護衛の侍女、目錄包に見舞物を取添へ、主人代普通の口上述て立歸りぬ。お仙枕頭に坐りて父の寐顏

を覗き、母と顏を見合せ、母樣、是程の御大病を、何故早くは知らせて下さりませぬ。もし父樣と呼ぶにふと目覺せば女房進寄り、おせんが逢ひに見えました、よう顏見てやつて下されといへば、おせんといふ聲を力にむくと身を起し、瞳を定めて、やれ！仙か、懷かしかりしぞ、と枕紙にはら〳〵と愛着の雫を落せば、おせんは父親の肩にしがみ付き、涙に呼吸つまりて物も得言はず。父親其手を取り、苦痛の聲かれ〳〵て、鴨の父親は不便がつて下さるか。あい、其は〳〵勿躰ないほど不便がりたまへど、此家の父親母親の事は片時忘るゝ間もなし。鴨の家は可厭なれば早う呼戻して、やつぱり此家の子にして下されや。我は最早今日から歸らぬ心、と聞くに夫婦不覺の涙に沈み、貧の憂愁は何所までと極度なく、いろ〳〵に人を惱ますものかな。家分散の無念、瘦世帶は明日の苦勞、大病に屆かぬ醫藥の焦慮、是ばかりにても命は短るに澤山なるに、可愛々々一人女が身上のいぢらしさに、痞の種を一つ殖やしたりと女房

喞てば、いへばいふもの丶、われには仙の看病、其方には仙の手助、千両貰うたよりは數等力になりて、此上の歡喜はなしと、久しぶりの機嫌に女房も勇氣加きて、せん同心介抱に疎忽はなかりしが、定業！四日目の夜の拂曉、知恩院の鐘を聞きながら往生淸しく、南無阿彌陀佛、やがてぞ鳥邊山の烟となりける。されば四五日の暇もらひし仙なれど、この始末ゆゑに初七日を濟ませてと、初七日過くれば又二七日と、おせんは歸る氣なく、母も放し難く、鴨へはよき樣に事實をいひ遣はし、一日二日と長引くほどに家鄕心つきて、おせんは再び歸宅べき了簡なくなりぬ。一日佛事の用ありて母親の留守の間に、時めきし時節の紀念にと、是のみ殘したる重ね簞笥の扉を開き、抽斗中を見れば、果して鴨が言葉通りなる古錦襴の袋に入れたる護身刀あり。取出して見るに、裝飾も一々聞きしに違はず、是ぞ實父の魂と押戴き、可恐ければ鞘は拂はず、舊の如くにして舊の所に納めけるが、扨は我は西岡夫婦の實子にあらで、母は

祇園の藝子にてもはや逝去、父は江戸の旗下なりけるが、我生れし時五十路ばかりといへば、我は今年十二歳、其人は六十餘まだ〳〵死たまふべき歳にもあらず。亡母はよしなし、せめては眞實の父を尋當て、知らぬにいよ〳〵戀ひしきお顔を見ばや、江戸は此所より百里餘、飛立つ思ひはやる瀬なけれど行くに行かれず、幼稚女の身にして。旗下といへば立派なるお武家なり。我はその立派なる武士の娘なるよな。慕はしき父樣はいかなるお方なるかと、鴨に出入て我見知れる武士の、年寄りたる人々の顏容を、彼よ此よと思ひ出して、水野の人品を想像し、西岡の母の懷かしからぬにあらねど、之も忘れ難く、擧止言語の鄙びて疎暴しきに、今までは厭忌なりし江戸人が急に好になり、とりわけお侍が好きや好きや。

三七日を過ぐれどお仙戻らざれば、鴨よりは毎日の迎ひを、いつも空駕籠にて返しければ、なゝめならず立腹して、借銀は戻さず抵當は奪取り、世間の義理が其にて立つと思ふか。なるほど祇園氣質の薄情もの、人の物取る往時の癖が今に失せず、理非を辨ぜぬ無法の所爲と、小才覺ある辨口者を頼みて、手嚴しき談判に及べど、夫者あがりの西岡屋の後家は風を柳の浮波と受けて、強き事は少しも言はず、義理知らずとの御腹立はさる事ながら、我身になりて見たまはゞ少しはお心も解く可し。折檻せぬばかり毎日に歸れ戻れと言聞かすれど、假初にもあいと申さばこそ、只いやとばかりに道理をいはず、強く申せば泣出して、今も持餘しの最中。なほ一應異見の上、肯かずば肯かぬにて、明朝は引ずりてなりと私が連ますほどに、旦那樣へは今日の所をよきやうにお傳へ下されと

いふ。腕力にもならざる事と、その男はしぶ〳〵歸りて、約束の今日となれど音沙汰なし。其夕暮また行けば同じ樣なる挨拶に、鴨は業を沸やし、一條繩ではゆくまじきあばずれ女め、此上は心好き對談にては埒明くべき樣なし。之に物を言はせてくれむと、證文握つて立上りしが、待てよ少時、我も代々名家の末流に在ながら、賤しき商人輩のすなる公事沙汰に濁れる心やと世間に唱はれむも辱かし。ましてや幼女を抵當の貸銀とは、他聞よろしからぬ事なり。取るに足らざる無法者を對手にせむは、我と我品格を下ぐる道理。何よりも吾身大事と、無念ながら災難と諦らめ、此處は胸を撫るこそ大人しけれ。不義の子なればせんも不義不實を享けつぎ、恩といふ事を知らず。あれ程にわれ等をふりつけて馴染まぬものを、無理おしつけに養ふは野禽を籠にいれたるごとし。間隙を見ば餌器を蹴かへし脫出すべき了簡、さるものは何程いつくしむも甲斐なし。かへつて末々今にましたる無念の思ひすべしと、流石に書を讀み

理に聰き鴨なれば、賢こく鷹揚に分別して、二言とは仙の事をいはず、證文にのしを添へて淡白に宿元へ歸しぬ。氣味惡きほど大人しき鴨の所置に、母子今更のやうに氣毒がり、母親不面目の面押拭うてと、鴨の高き閾を跨ぎ、謝罪やら禮やら兼て行き、期限は何日と定めかぬれど、蟻が塔積むやうにしても、借銀は御返濟申さねば、今日の天道樣、死てからの後世も恐しくと凋れたる言葉に鴨も不便を催し、垢染みたる布子に百結の木綿帶、櫛卷亂れて鬢髮毛のごとく、貧と苦勞に身を裂なまれて、面影無殘に窶れ、榮華の時よりは老女になりけり。吁！是が西閣屋の内儀かと可哀身に染み、重次郎と酒飲みあひし事など憶ひ出し、手を引籠めて取らぬといふを、無理に袂の中へ心附の金子を押し込み、嬉し泣に泣かせて戻しけるは、和歌詠むほどの人の心は格別、世の哀れを知りてゆかしきものかなと、此女後までも人に語りき。女子の手に稼ぎの業なく、なけなしの道具は五六日の米の錢に沽却して、これが盡くれば母子

枕を並べて、餓死の外なき境界、成下がれば成下がる人の行末かな。此上はと母親お仙に因果を含めけるは、世間は見るごとく廣きやうなれど、金銀には人間蠅のごとく聚り、無くなれば散りて唾だに吐懸るものなし。我等母子が今の身上これなり。むかし助けてやりし人はあれど、今助けてくるゝものなく、さればとて營業は知らず金錢はなし、とても二人は世間の疎まれ物、佛神も見放したまひけるよ。我は餘生短かき身の、此處に死ぬるともたとへば花開きて散るに異ならねば、もはや此世の思出もなく、何時なりと此世を去り易けれど、無殘なは仙、其方ぞや、人貧に生れて榮華に果つるは、榮華に生れて榮華に果てなむより、數等ましなる幸福、いぢらしきは榮華に生れて貧に果つるなり。亡き父樣の木主に對しても、また母の心の我にしても、其方が出精ばかりを旦夕の心願なるに、所詮希望なき今日の形勢。これまで丹精して、やがて色香深かるべき其方を、苦にて腐らすことかと思へば、この母は身も世もあられ

ず、今となりて考ふれば、よしなき事をしてけり。鴨家と緣切らせしはわが一世の過失にて、これが爲に目に見えし其方が立身を碍げ、犬よ畜生よと我は思はぬ薄情を疎まれ、かさね〴〵不覺の仕損じゆるしてたもや。父樣聽かれなば御立腹かは知らねど、暖室に入れてなりと蕾を開かせたき一圖の親心より、其方が了簡聽きたき事あり。後々の出精を思ひて、其身は此處に干死せしとの覺悟にて、島原の太夫樣になる氣はなきか、少時は禿にてつらき目は見るべけれど、二年そこ〳〵の辛抱にてやがて太夫となれば、御大身出入の廓、間もなくよきお客樣に請出され、樂なる身となりて出世の頂上。もしまた此儘に決心わろく、白粉油氣なき貧乏女に生長ちなば、誰回顧人なく、精々よくて、小商人づれの煤け女房にて果てなむこと、いかにも口惜しからずや。苦界といはゞ苦界、玉輿への踏臺、思ひ切りて禿になりて、島原へ行てたもらぬか。明日のお米にも事缺き、餓死の其方も其ゆゑに助かり、また此母をも助けて孝

行してたもれ、知る如く、其方を抵當に鴨よりの借銀も、今に借りたままの不義理を、少しは其にて回復さば、西岡屋の汚名をも雪ぐ可し。其方一人の行爲は、父樣、母樣、其方と三人が浮むほどの手柄なるぞや。必ず苛き母とな恨みそ。合點が行たら得心して、あいといふて聞かせよ。可愛や、東西わかぬ幼稚兒を捕へての往生ずくめ。其方も悲しかるべきが、母は胸を裂かれて、この言葉に血も交るべき思ひと、手を合はさぬばかりの哀願に、此母は義理ある母樣、實母樣へよりは一倍の孝行せねばならぬ道理と、けなげにも泣顏せず、勤奉公せばおまへの顏が毎日見られまじと、其ばかりが悲しければ、朝夕尋ねて來て下され。親の言葉に子の背くべきやうなしと、此時おせん十二歲の、五月島原の「わちがひ」といへる「おきや」に賣られ、身代聞けば二十七歲まで十五年を金十五兩。實生の櫻は無代にて贈者もあれど、花の一枝に指一本は、名木になりての相場此處なるべし。

雛鬘の務、夜は太夫の揚屋入に附添ひ、閨房にまで連れられて湯茶煙草火の小事使ひ、將往に夜具の裾を叩くまで遣る方なく心得、やがて揚屋を出て路々夢の二場も見て、尾を履む犬の聲に驚き、おきやへ走歸りて横に仆るゝ間もなく、襟髪執て引起され、朝迎とて昨夜の揚屋へ太夫を迎ひに行くなり。夜更しの口舌に疲れて太夫目覺めぬ少時の間に、鳥邊山の妙見へ、開運出世を希願の朝参詣を慣例とせしが、雛養育は帯に小巾着をも附けさせられず、其もさもしき買喰などの用ならば知らず、殊勝なる神詣にも、半錢の影だになき身の悲しさは、賽錢にあぐべきものなければ、無心なる稚兒の了簡は可笑や、心願一通口の中にて申せし後、お賽錢を上げましたき心は山々なれど、今の身上はお鳥目なくして其事協はねば、自由きくまで何卒貸したまへ、と懐中なる延紙を取出し、其

ばかりを拈りて賽錢箱に投入れ、せめてもの心を濟ませしが、幾人の參詣人を見れど、貧富それ〲の身分に應じ、多少の賽錢あげざるはなきにおせん氣を揉み、我かく日參怠らずといへど、一文もあげざれば、神樣心願を成就なさしめたまはざる事もやと、一日之を苦勞にして、毎日の朝詣に馴染たる堂守の和尚に、いかなるものならむかと尋ぬれば、おせんが尋常ならぬ心懸を感じ、神は非禮を享ずとて、小判を賽錢箱の口切に詰めたりとも、信心にゆるみある男女に利益は與へたまはざるなり。今の内は紙のみのお拈にても苦しからず、程なく金銀自由ならむ時、一度に奉納せよとの和尚の言葉に、おせん安心していよ〲日參を勵みぬ。十三の歳七月の十一日、參詣果てゝ下向の折から、日出前朝霧立籠めて、四方なほ小闇きに、馴れたる道ながら足下危く、來懸る爪頭下りの左右を、緣取の小笹の茂生にがさ〲と動くものあり。わつと驚きて二三步飛退き、足わな〲腰を屈め、首を延ばして熟視れば、五尺餘りの縞蛇

笹の中を横に縫うてのたりゆくなり。鎌首此方に向かねば、此所に人ありと知らで過ぐるなるべきに、嚙みはせまじと爪立て、呼吸を殺しながらたしかに後影を見送りけるが、蛇は妙見の神使なり、我理を見しこと凶か吉かと、其場より引還してかの和尚に糺せば、和尚手を拍つて吉なり大吉なり。これ皆其方が年端ゆかぬ身にして、怠りなき信心を神佛へに感應ましまして、今にも利福を授けたまふ前徴に疑ひなければ、ゆめゆめ此事人に沙汰すべからず。早く蛇塚を造りて祭れとの指圖に、おせん勇みに勇みて立歸り、人に知らせじとて我手一ツに成り難き事なれば、此趣を宿の女房に打開けゝるに、其方が出世は家の繁昌、目出度事なりと、おせんが見しまゝに蛇を繪かせ、紙表具の小形幅物に仕立てゝ與へければ、間がな隙がな之を祈念の外はなかりき。

（八）

雪は白くして墨の黒きを疾めど、墨はなほ其黒からむを願ひて、臭き物身を知らず。淫魔色鬼の邪氣に觸れて、お仙やうやく根性を腐らせ、雛鬟の身にしては松の位羨ましく、廓を出て素人に歸り、母親に孝行して好婿取らん心は、何時やら何所へか遺し、太夫になりて八文字踏むの外は、天下に何の希望もなく、丹精を抽んで妙見への祈念も、此事と聞ては興覺めぬれど、此廓を苦界と言はで玉輿への踏臺と、よき敎訓せしは誰ぞ、無敎育の母は持つまじき事なり。雛鬟の内は苦海の磯傳ひ、寄する仇波に指頭わづかに汚れしばかり、鹽氣は鴨川に滌ぎても去るべきに、四圍を見やう見眞似に心おのづと其に移り、淺ましくも太夫を帝王ほどに思ひ込みて、漆のごとき泥水へ眞逆倒、落ちて歡び、悲む色なし、其境界墨なれば、雪とは相違の了簡、是非なきにあらねどまづは是非なし。

おせん十四歳の霜月九日、この日が一代の大邪淫、大妄語、大殺生、大貪婪、世間にあらゆる惡業仕盡しの發端。かねての大願成就、里花太夫と名乘りて突出しの全盛言葉に盡されず。其も道理と京中に知らぬものなき、大阪隨一の持〇鳥水の隱居が梳櫳客なれば、萬事の華美に盡さぬ隈なく、開闢以來とさゞめき、素見まで上の空になりて喜ぶこと限りなし。或は全盛の評判に見ぬ戀にあこがれ、或は道中の姿に魂魄を打込み、浮れ來る客晝夜の別なけれど、梳櫳客の隱居が當座の揚詰に、一同川越の花を眺むる心地して、懷中に小判の封を切りながら金でもゆかぬかと、世の中の自由ならぬに呆れ、足擦して歸りぬ。この全盛にてはまだ〳〵苦界の味は飲込めず、只おもしろく可笑しく、華美に賑やかに、うかうかと二年過ぎて十六歳の初春、二度めでたしと祝はれて身請は鳥水の隱居、此金子五百五十兩なり。

里花女子一人前にやうやく昨日今日成りて、戀は此からといふ時、苦勞

せぬかはりには此道にありといふおもしろ味も知らで、色氣なく根引されしは――よけれど――當年六十餘の圓頂光る君と朋輩に笑はれしが、なるほど我とは年齢を字に書き、遂に讀みて似合はしき夫婦。妻と名がつけば老父樣とも呼ばれず、病人の看護するやうに册き、嫉妬もなく苦說もなく、夜風にごほ〳〵と苦しげなる咳氣にする苦勞は、艶もなければ香もなし　思へば先月二日の夕べ、後にも前にも初會一度限のお侍は、年も十八九玉のやうなお方なりしが、同じ添ふならばさる人に添ひはせで、これが夫かとおもへば、見るもいまはしき骨と皮男、われを湯暖婆代、と身請の夕べ宿の亭主に物語られしを思ふにつけ、もとより此契の眞情からにあらざるは知れし事なれば、いとゞ「咳氣」の傍が可厭にてたまらず、金銀貴けれど情の補缺にはならず、責色は苦しくとも、誠に此色香を愛づる粹を見立、戀ひ戀はれ、誑し誑され、怨み怨まれ、泣き泣かれなば、いかなるものかと其を考ふるほど隱居は袖になれど、また冥加

をも思へば邪見もならず。內心はともかくも表面はあい〳〵と柔和删く
ほどに、隱居は孫のごとく可愛物に思ひ、京で出來るほどの贅澤させて、此上は我もあの世へ土產がてら、諸國の名所見物させむと、繪本にては見し墨摺の神社佛閣山河の風景を、極彩色にして數多く見ながら、足結せる草履の裏に沙もつけず、遠く長崎の果まで行き行きて、和蘭陀船といふものまで見て、所々の名物は欲しといふにまかせ、土產に買ふたは駕籠に六挺。歷々のお大名方もなるまじき寬濶を、陪從の牽頭、路々の田圃に黃金の種蒔と當意の秀句は、實に此折の入費を算用したり。京へ歸れば一門親類喧ましく、有金錢なればとて費ふには道あり、近頃年功なき不所存不所業と、本家の手前不首尾になりければ、此女を隱宅へ連込まむも無遠慮なり。別宅を造るにしても人目なき里あらねばと、しばらく家鄕預けにして兩三度も尋ねしが、外形しやんとしても心朽木は脆く、未だと思ひし隱居、これぞといふ病氣もなくしてぽつくり往生しけれ

ば、鳥水の本家より里花には暇を出しぬ。

十二にして雛髮に賣られ、十四は太夫の突出し、十五は全盛の根引。かかる事なれば我娘をも一時凌にと、世の不了簡なる親心を騷がせて、その身の好運を羨まれけるが、鳥水の隱居此世をさらばにして、老木ながら頼む蔭を失ひ、宿元に還されて、氣儘といへば氣儘なる母子生活。持歸りの衣裳道具、日毎に數減りて殘少になるほどに、母親また〳〵心細がり、それといはねどお花（落籍の後名を改む）疾に合點して、身の始末を思ひ廻ぐらすに、今の身上のしがなさや、裏に針はあれど裲襠の着心、馴るればまた其中に歡樂といふこともあれど、かく何といふ事なく、人氣なき所に物寂しく一日座りて、朝夕の思出なきよりは、われながら島原にての全盛を見れば、日本色町の何所へ行くとも恐るゝ事なし。かほどの玉を冥加なや草深きに投込み、露に見まがはれて消ゆるも惜ければ

と「自負」惡念を煽る時節に母も同じ心なるを見て、われ一度泥に染みし身の、生娘に回るべき希望果てぬれば、また色を賣りてなりと母樣にも安堵させ、我も浮瀨に遇ひたしといへば、なるほど、折角の落籍も何の益たゝず、又候の賤業は禁にもあらねど、往時にかはらぬ世帶の有樣。母子鼻突合せて居る處へ小判も降るまじければ、其方の分別に從ひ、やがて好賽目出でゝ、お位牌にお詫申すべき月日もあるべければと內談整ひ、扨祇園か、それとも馴染あれば島原か、此土地に引眉毛を愧かしく思はば、大阪へ行て新町なり島の內なり、了簡次第とあるにお花迷ひて心定まらぬ折から、木屋町の壽美とて、家は逢引に貸宿、其身は色の取持、妾月傭の世話する老女尋ね來りて、此方のお花樣を或御身分のお侍衆見染めたまひて、お召仕ひになされ度、私橋掛を賴まれましてと語れば、母親よりお花が耳を傾け、お侍衆とか。其は何國のお方と尋ねれば、江戶といふに胸跳りて、聽けば身柄に申分なけれど五十餘との事に又して

もと少し力落ちながら、「江戸」「侍」の二言にお花の内心は定まりたれど、母親に一應の相談せではと老女には挨拶を濁し、二三日中に此方よりいづれともお返事を、と歸せし後にて母親に向ひ、遊女と同じ賤業ながら、妾奉公は旦那一人の機嫌取。名こそ下婢なれ女房と異る事なく、我身をだに大人しく嗜めば、苦勞なしに樂なる世渡、その上野飼の鳥のごとく身體自由にして、孝行を思ひのたけ孝行出來るが川竹身のならぬ所、當座の入銀は少くとも、月々細く長く貢がるべければと、事を分けたる言葉に母親も納得して、やがて老女に頼めば、かゝる事は猫子を貰ふより易し。

（十）

お花が旦那といへるは、淺野家の前田新右衛門とて、京在勤の奥御用人なり。此年齢しての色里通ひは他人の耳目に憚あり、且は場所がらとていらざる虚飾張りて、おのづから散財の多分なるを喜ばず、華美なる戀は過ぎにし青年の事なり。唯一時の假妻、勤番中のかけながしなればと、少しも手輕なるを好みて、お花のその儘家郷に圍ひ、月の給銀に折々の心附して、何時なりと行かねば行かぬぎりに緣は隨意に切れ、後腹病めぬやうに初手から仕組みて、つれ〴〵を慰めの道具にしけるが、男女の間は巧に和ぎ、馴染むほどに然りとは憎からず、新右も流石に捨て難く泥みぬ。この道貴賤に不同なきはいふもさらなり。老若の差別も添うて見れば融けて、お花が容姿、心意氣、身の上、いづれか新右の情絆ならざるはなく、欛糸の改卷を控へても、お花の欲しき物は「おい、それ」にな

りぬ。ある夜の寐物語りにお花新右が言語の尾に附き、私可愛と思召さば舌頭てばかりいうて下さらずとも、一所に江戸へ連れて行て下されましと言へば、新右首肯き、さほど執心ならば此度の下向に連るもよけれど、何がよくて左程に江戸々々といふぞ。見ると聞くとは大相違、むさき國ゆゑむさしといふなどゝの悪口もありて、江戸一面が葺屋町堺町淺草の觀音樣にはあらず、眼につくものは伊勢屋稻荷に犬糞、一度見ば此京や戀ひしからん。尙又十五六の女の身にして、知音緣類なき遠國へ行きたきなどは膽太過ぎずや。それとも島原に勤めの頃の「樣」が只今江戸住居、約束ありて其を追懸ける心實かと弄れば、凋れて言葉なし。いよいよ其に極まつたり。この老父の律義なるに道中の無事を見込みて、ぬれ物用心の重荷に戀飛脚を勤めさせむ了簡か。いや〳〵と頭を掉ればお花當惑して、金輪奈落！褒むべき一事なれど、そのお狐疑ありてはかねての心盡しも水になるが可愁に、打開けますほどにかならず連て行て下さ

れや。一度は遊女の賤業、今も異らぬ營業の淺ましさに、申すは耻かしき事ながら、我生れからの下司婢女にもあらず。母は祇園の藝子でこそあれ、父親は江戸の何の某とて歷とせし旗本なれど、我胎内に在る時御下向なされてお顏を知るよしなく、姓名を申上げたけれど、父親の耻辱暴と此ばかりは裹まして下され。藁上より今の家に貰はれ、十二の歲まで此事を知らざりしがと、有し段々を逐一語りて、其故是非ともつれて行て下されまし。今生の希望はその眞實の父樣に遇うて、娘かとのお聲が聞きたいばかり、と思ひ入りての言葉に、新右衛門老年の情脆く、そぞろに心根を不便がりて、お花が緣離金百兩にて母親を納得させ、やがて手を引かれて下向りけるが、新右江戸には初老の妻あり。いづれ葛藤は眼に見えたるに、愛はなるほど六着心中の粘物！

旅は無事江戸に着せしが、女房の嬉しがらぬ土産なれば、新右お花を連れて家へは入り難く、四五日の約束にて竊に知音の町人に預け、其身は知らぬ顔にて歸宅し、やがて女房の手前を拵へ、七日目に首尾よく連込みしが、女房は四十六といふ老女にて、家中に名高き氣むづかしやの上に、お花は從來の自墮落奉公に筋骨弛みたれば、居づらきこと板挾の中に強て眠るごとし。やかましくとも火車鑓手は金轡を食まするに悍馬あることなし。新右の女房はお花の年少きに附入り、主の權柄づくに首頸を捉みて、我小事使のごとく逐つかふを、お花年こそ行かね、一度は島原の太夫、男女數百人に樣付けにして敬はれ、心に染まねば大身も長者もふりちぎり、子飼より意氣地を習ひし身の勘辨しきれずして、しきりに此事を新右に嘆けば、勿體なや其人も妾ある以來女房に一目置けば、

それゆゑ募る吾儘に虫を殺たまふ、近頃の御様子と心底傷はしき新右が、言葉を盡して我に免じて了簡せよとあるに、往時は往時今は今、人は其時々の氣の持ち方と、覺悟の上は何事も逆はず、女房のむづかしき機嫌取を義務にして、其身半分は新右、半分は妻女の奉公人、天に二日なきに、主二人持ちて忠義に不權衡なくは勤め難し。男ならば慳貪、武骨、邪智、執拗、何なりとも手中に轉こむ手管あれど、女子はなか／＼迷はすべきにあらず。これ先方に愛情といへる弱點なければ、十分せし事五分は利かず。其上に嫉妬ありて、女房にはお花のいふ事なす事第一から氣に喰はねば、よしや普門品を誦したりとも、此口頭からにては女房聞て墮地獄の想をすべし。最初はさしたりとも思はざりし悋氣の一日々々と募りて目に見え、火手燥になりて新右にも怪しからずあたれど、譽むべきにあらぬ其身の行狀を知れば、何事にも目を瞑り耳を潰し、世間を憚りて安穩に濟すべき心を見貫きて增長甚しく、お花もいよ／＼居愁け

れと、新右がこゝめられて手出しならざるを見るに、外を見て涙を拭く事あり。一時此趣を新右に語りて、此家の奉公はなか／＼苦界も及ばぬ所あり。其は此身の可愁と、二ッには奥様の悋氣強く、此方様の御迷惑。私參りてよりそよとの風なかりし此家に波立ち、世間の見る目もよろしからず、其罪は免れぬ所皆此身に在り。我一人居ずは家内安穏ならむは知たる事なれば、お暇を下されて此身の苦艱をも助け、第一は此方様をむかしの旦那様にしたき心願と涙を灑せば、新右頷き、よくも申したり。我だに我家のいぶせく、外家の却つて心安ければ、宅に居るを好まざれど、我留守ともならば其方一人前後はみな敵、袖の下る間はあるまじくと、其のみ心に懸れば、我顏だに見れば、奥奴が人の妻たるものゝすまじき擧動、あるまじき雜言、忍ばれぬを忍て家に在も、可愛き其方を保護むばかりなり。其にしても夫を夫とも思はざる奥の不禮、おのれ！と一徹短慮の起らむとせしは、これまで幾度かなれど、噫、原因を糺せば

皆我が過失と、無念の胸を擦りて、事なく今日まで過ごせしは格別なる我了簡、女房に怖るゝ意氣地なしと、心中我を哂ひなば其方を恨むぞよ。勘辨なるまじき恥辱を忍ぶこと誰ゆゑぞ、唯其方一人が身に替へていとしければなり。かほどなる我心中立も仇となりて辛抱しきれず、此家を出んとまでの其方が胸中は察したれど、此所を出て便るべき目的あるにや。かねて物語の實父尋ね當りて、其所へ引取らるべき相談ばしつきしか。さる事ならば我には異議なし、喜びて今其方に暇をやるべけれど、さうした目的もなく、唯この家に居愁きまゝ馳出して、其方は何所へ行く心ぞ。いはれて見れば然矣！故郷は山城此處は武藏。お暇願ひて參る所とてはなけれど、餘りに此處の可愁と、此身ゆゑに此方樣御難義の見るに見られずといへば、其事ならば心配は無用にせよ。我はまた其方のいぢらしさが見る眼を刺す如く、不幸もの！年齒ゆかぬに古郷にては散散の苦勞、他國へ來てまでもいびり散され、いとゞしく不便增して捨て

難きぞ。其氣ゆゑか知らねど此ごろの面窶れ、色も惡く頰も少し瘦けたるやうなり。顏を見せよと引寄せて頤に手を懸け、行燈の火口をさし向けて新右つく〲と視め、苦勞はすまじきものかな。

難有き實意の言葉に、お花も此所までといふ所まで辛抱する氣となりしが、とても〱、小刀針は透るまじき心を傷むる老女の邪慳に、飯も小砂利を嚙む想なり。果は女房の姿を見るだに怖しくなりて、物を言はるれば聲も出ず、邪も正、是も非、無理を道理に枉げられて返す言葉なけれど、夜間枕につきて晝間の事どもを思へば、無念口惜さに髮毛ぞつと立ち、肉顫へ血鳴り、寐衣の袂を喰裂き、蒲團のとぢ糸を引ちぎり、ぽろ〱と玉なす涙頰に熱く、此上は旦那樣何とおほせらるゝとも、また此身乞食となりて行倒れにならばなれ、明日は必らずこの家を出づ可きぞと、一夜は無念に明くれば新右に子細を語りて、何はともあれお暇を下されと無體にせがめば、新右も禁めかねて此上はと、外部たけ長の暇

を出し、數ふれば九月に來りてその年の霜月十二日この家を出でけるが、其實は箕輪に小家を借りて住はせ、律義らしき老女を附置き、新右足近く通ひて邪魔なき戀を此陰里に樂みぬ。

（十二）

當時和蘭陀舶來の色硝子を紫水晶と稱へて、世人大方ならず珍重せり。新右衞門元來武よりは文、文よりは理に長け、發明氣ある男なれば、之を見るより不圖思ひつきたる所ありとて、おもはくの藥品小量を用て試みしに、結果案のごとく面白く、今一度の工夫あらば、ともかくも紫水晶成るべしと大勇みに勇みて、それより製造用の器具を造らせ、藥品は極はめて高料なりけるを、所持の金銀惜氣なく摑みて十分に買入れ、其身非番の日は一室に閉籠り、其所を細工場に定めて、深夜に「吹具」の呼吸荒まじく、大石榴の裂れたるごとく炭火を泥爐に溢らせ、坩の中よりは五色の烟たち昇り、鼻をもぐばかり得ならぬ惡臭充滿たる中に、新右衞門裸になりて大胡座を組み、熱汗瀧を流し、湯氣雲を起し、溫氣に惣身充血して薄血を塗るがごとし。女房見るに淺ましく思ひ、我夫近頃天魔に

見入られけるよ。京よりは女子を伴ひて、年齢にも愧ぢぬ好色の不所業。其が欲むかと思へば今度は此始末。同僚の見る目、殿樣への聞達を氣遣ひ、仕事の最中は夢中なる耳へ何も入まじと、食事の折から女房言出しけるは、此度紫水晶御工夫とはいかなる御量見か知らねど、頂戴の御扶持に今日の不足といふ事を覺えざるに、何を苦みての細工三昧、武士たるものゝ假初にもすまじき業ならずや。それも一興なむどゝいふならば、隨分苦しかるまじけれど、兩刀をも佩むお身にして下司のまね事、仲間どもが草鞋造るを、かれも武士の一片なるに、あのやうなるさもしき手業させては、その心までがおのづとさもしうなれば、外に美くしき內職のありたきものと、日常のお言葉にも似合はざる御自身の行狀、脇指も衣物もかなぐり捨て、丸裸になりたる容體は、見苦しとも淺ましとも申すべき樣なし。些細の利慾に性根を亂し、作法も身分も忘れたる昨日今日、いかなる御所存か聞きたきものなり。いつか近所へ此一條知れ渡り

て、胸苦しき評判耳に入る度に、もしや此の不埒殿樣の御耳に觸れなば、きつとお嚴刑あるべしと心も心ならず。餅屋は餅屋とやらにて、子飼よりのその道のものだに、工夫ならざる紫水晶が、不躾ながら竹刀爐の手業にて參るべきや。よしなき事に金銀を費せし揚句、御勘氣など蒙りなば内外の難澁、其時の苦艱を思ひたまはゞ、此志を立所に飜へしたまふべき方法となるべし、と顏を赧め、疊を拍て詰寄れば、新右立腹して食半ながらからりと箸を投出し、二度言はゞ離緣と言捨てこそ細工場に入りける。かほどの執心おそろしく、女房も我と手轡して胸のみ傷けるが、新右の一念募りに募れば、十金二十金といへる高料の藥品を、一滴の液半縷の烟となして少しも悔ゆる色なく、この事もし成就せずば一命不用の覺悟。ましてや一握の扶持米が何程のものぞと、果は病氣をいひ立にして參勤を怠り、日夜かの一室に入浸り「心」を堝の中に打込みて千萬苦慮すれど、最初の試驗我を欺き、更に思はしき物成らむともせざれば、今

は死物狂になりて、百金二百金と有金を盡し、これはと思ふ藥品の數を取寄せ、忽ち火上に載すれば、何の驗もなくとろ〳〵と皆無になりけり。此條藩主に聞えたるよしなれば、今にして悔悟せずば好事あるまじ、と上役など親切に言へど新右取合はず。扨は此家遠からず斷絶と、女房獨り氣を揉むのみ、意見はいうても聽かれず、さればとて女の手に濟ふべき力はなし。思ひ詰め、案じ詰め、苦勞に苦勞を重ね、心配に心配積みて、可愛や精神亂れ、泥爐の前に手を拱きて眉を顰むる新右の傍に、女房一日二夜泣き續け、遺書もなく裏なる井水に身を投げて淺ましく果てけり。かくても新右ひるまず、さりとて到今小判の封紙だに殘らざれば、近所の目を忍び〳〵に衣裳道具を賣拂ひ、これも亦火上の烟となしぬ。武士にあるまじき不埒の段々お咎となりて、終に扶持離れの素浪人、賣餘しの家財を皮財布に小さくゝるみ、箕輪のお花が家に一所になりける時に、一車に「がらくた」を積みたり。何ぞと知る者に尋ぬれば、あれが水

晶細工の道具！まだ思ひ切れぬかしてあの始末、いづれ紫水晶は前田氏の死神。

（十三）

新右衛門落魄して箕輪に轉込みしは、お花二十の歳暮なり。僅小なれど餘財のあるに任せて、以前ほどの大懸にはあらねど、なほ紫水晶に斷念しかねて、一日一度は炭火に面を炙らねば心濟まず。目に見えて小判焚えて形なきにお花も心を傷め、此樣子にては多くもあらぬ身代、今にも灰となりて我等路頭にうろつくべければ、是ばかりは思ひ留りたまひて、そのやうに捨る錢の十分一なりとも、奥樣の佛事に喜捨したまへと折々口說きけるに、新右も長の月日、莫大の金銀双ながら徒事に費えて、今に露ばかりの驗なきにあぐめど、又思ひかへして藥甑弄は歇まざりき。かくては所詮覺束なき夫婦の行末、分別しやうなら少しなりと餘裕ある今の間と、お花がしきりなる取越苦勞を、さらば休て遣むと、吉原の廓内に、中萬字半藏松葉二間の家主の株を買て、お花が安心の種にぞしけ

る。此歳暮れてお花二十一の夏、一人の男子を設けしが、新右此時六十二歳の老翁なり、かくてお花の心落付きたるを見るより、新右また〳〵泥爐の中に、なけなしの金子をはたき込み始めしに、此度は少し見所ある結果にはずみて、此期を外さじと心のみは逸れど、薬品の料といふものなく、賣る可き品とても殘らざるに、新右の悶ゆること、此處に二三十金もあらば、大願成就せむずる想にて、千日の茅をこの一日に燒くことを悲しみ、えゝ！物はなし、引取人だにあらば此命を賣てなりとゝまて窮せしが、月の末とて地借の金子手元にありけるを、此許あらば事足る可きがと、抽斗より取出せしが、いや〳〵これ我物ならず、今は廓の家主なれど、舊を糺せば淺野家の前田新右衞門、武士なりと、其金子紙に引包て投込み、外に分別はとつく〳〵思案するに、我此金を盜むといふにはあらで、時借するなり。紫水晶だに我手に成らば、十千萬兩にしても返濟すべし、唐に尾生といへる男、女との逢引をある橋杭の下に約

して其所に待ちけるに、女子來ぬ間に汐滿ちて身體を浸せど、杭に縋りて動かず、一旦此處と約せし所は變へ難しとて其まゝ溺れぬとぞ云る。これを尾生の信とて臨機の所置を知らざるものと、後々までの笑草としけり。我此金を盜むとにはあらで、君子も貧しうしてはすべからざるにあらぬ時借なり。不正中の正、憚る所なしとその金にて藥品を調へ、また見事に仕損じけるより、千挫不撓の新右もこれには精神ぽつきと折れ、その失望の一瞬後より、心急に弱くなりて、まことに六十二歲、さもあるべき老人氣となれば、今までの所業を省みるにつけ、四五年來の後悔波の寄するごとく一度に胸に逼りて、前田家の沒落、女房の枉死、大金の消耗、今は身代の不如意、地借金の消費、幼子あり少妻あり、我は老體の不自由なるにと行末の配慮など、無い物のやうに忘れ果てたりし萬感湧上りて身の所措なく、これを氣病にぶら〱と煩ひつき、其冬の初霰笹葉に玉走る夕、此まゝ一人寐るも年齡なれば惜しまねど、わが一旦

の不了簡より二人のものを乞丐兒にさすか。其ばかりが冥土の障と呻きて、歸らぬ所へ赴きぬれば、お花は泣く可き力だになく、野邊の葬禮も貧の身は式ばかりの哀れなることいふべくもあらず。家財は賣盡して空家のごとき座敷に、只殘るは戶棚一杯の藥袋、堝と泥爐との遺物に無念と追懷の涙やまず。

（十四）

お花江戸に出し翌歳、父子の名乘すべき心にて水野の邸を尋ねたりしが、九千九百石の搆造嚴肅なるに怯え、且は其身尋常なる町人娘の風躰にて、此所の殿樣は實父よといはむも口幅たく、其人の恥辱にもなるべきかと、幾度か門前を往來して本意なく戻りしが、思切れずして其後二三度行きたれど、行きしばかりにて門內へは入らず、唯うろ〳〵して歸りぬ。新右死亡なりて一人に殘され、地を匐ふ朝顏の何にもあれ、蔓の所倚を求むる折からなれば、いまはいつまでか遠慮すべき、今日はと決心してすつと通用門を入れば、門番の老人希有なる眼をして視るに小腰を屈め、子細なく通りて玄關に着けば、其處に肩衣突張らせて幾人も詰めたる若侍、一齊にお花の姿に衆目を注ぎ、怪がりて希らしがりて好もしがりて見えけり。京のものにて殿樣に御謁見を願ひたく、御苦勞ながらお取次

を頼みまするといへば、侍衆いよ〱驚き、目授して相囁ふは胡亂、亂心、の二者にお花を疑うてなり。取次役威儀を繕ひ、たゞ京のものとばかりにては取次なり難し、姓名住所はいふに及ばず、御謁見願ひたき用事まで明瞭に申せと、肩臂怒かせて切口上の子細らしく述る。後には剛らしき武士ども額を鳩め、お花の顏を見ては否味たらしき微笑の目元。婦女と侮りて不禮なる侍衆かな。此家の御息女樣と知ざるかと、心中勃然とせしが色には出ださず、一言毎に恭々しく頭を下げ、京は下加茂中澤十兵衛の娘鶴と申す女のなりと、母小鶴の實家はもと伊丹に名だたる造酒家なりければ、其主人――小鶴の父――の名をいひ、又鶴といはゞ御合點と機轉の挨拶。して用事は？二十餘年前此方の殿樣御在京の砌、親父十兵圍碁のお敵手を申上けるより、格別に難有き御言葉を戴きけるが、家に秘藏の短刀ありけるを、特別御懇望遊ばしたれど、重代の寶とて此ばかりは御斷り申し上げるが、先年臨終の際に、かね〲の御執心

なれば御手許に献ぜよの遺言により、私はる〳〵持参いたしましたと、袋入の護身刀を注意がしに持替ふれば、少し控へよと奥へ入りて、やがて出で來りて此方へと書院に案内しけり。前栽の築山、泉水、立木、町家の造法とは姿かはりて、何所やらか嚴肅にして幽遠しく、閑寂なる間間に鳥の音聞え、氣澄みて水を打つが如し。座敷の結搆はいかさま第宅なり。お花微賤の身にあらねば、幼少の折には高家の館へも出入し、成長りては揚屋の大坐敷に、隨分善美の造作は目馴たれど、江戸の武家造の館の樣はまた格別と、京の太夫も此所に來ては田舍女なり。跫音しづしづと響き、襖開くと見れば顯はれたる、白髮交りの上品なる武士は用人なり。挨拶高ぶらず大樣にして威あり。取次より聞及ぶ條いかにも殊勝なりとの言葉に、お花若武士の風采を見るに、惡人とも思はれざりければ、慇懃に會釋して、只今お取次を以て申上げましたは、他聞を憚りての空言にて、かゝる事を申上げなば、殿樣のお身に拘らむかと差控ゆ

べきなれど、つひ直々に御謁見もかなひ難ければ、其方様まで申上ぐべし。私今の名は花幼名仙とて、殿樣御在京の折お情を蒙りし、祇園の藝子東井筒の小鶴と申すもの丶一女と、子細を洩なく語りて、其時たまはりたる御紀念はこれにと、護身刀を出して見すれば、用人首肯きながら點撿め、お花を視ていかにも氣毒なる面色、京の藝子に一子を宿せしよしは、内密にお物語りもありてかねて承知せるが、扨は此方樣にてありけるかと、坐を進めてお花の顏をなほつれ〲と見護り、御懷かしや！大殿の御面影、そのまゝ眼邊額邊に殘れるは、爭はれざる證據。さりながら聞かせともなき凶報、はる〲尋ねられたる効もなや……。大殿には十七年前に御逝去なしたまひしぞ！、あつとお花は膝なる手をすべり落し、見開く眼に用人の顏を凝視て、少時は瞬なかりき。驚駭はさる事なり。愁傷の程はさぞやと察し入れど、とさま〲丁寧にお花を慰め、當代の殿に此の次第を言上すれば、本意なかる可し不便の事なりとて、

私に御謁見を許され、數々の下賜物もありて、此事は家臣の手前あれば表沙汰にはしがたし。我とは同胞に相違なけれど、其地にて緣切りたるからは他人と思へ、此後は音信不通たるべし。我に一人の姉あり、今は柳生某守に緣組みたるが、其方の事を詳知りて、女子の同胞なき身は其子懷かし、一度は名乘りあひたきものと日常おほせ給へば、姉君喜びたまふべきに內密に對面せよかし。我より添手紙せむとの御意をかの用人取次ぎたれど、お花は思ひに思ひし實父亡なりたるに氣脫して、もはや窮屈なる思ひして、姉などに遭はでもと思ひけれど、賴なき身の杖になる事もやと、難有く御禮申して、御手紙と下賜物を藏きて歸りぬ。四五日經ちて柳生の邸を尋ね、水野よりの手紙を奧樣の御手許へと差出せしに、返事早速に、なつかしく逢たかりし思をくりかへせし文言は、やさしき言葉を直々に聞くがごとし。この二十一日は上野へ佛參の例日なれば、其日他事ながら對面の首尾すべし。三枚橋の左に立ちて待つならば、

此方は駕籠の窓を開きて、通らん折の一目を見外したまふな、時刻は何時と書たり。

（十五）

其日約束の刻限早めに、三枚橋指命の所に佇みて待間程なく、上野山より行列見えて美々しき事なり。眞中なる鋲打の乗物此中にこそと、お花首を延べて覗へど、駕籠脇には徒士女中附添ひ、其影を月に障りの雲と怨めば、同じ思ひなる柳生の奥方、駕籠の中より女中に聲を掛け、見る物ありとて片寄らせ、窓近く顔を現し、橋の上なるお花を見て目禮したまふ、毛髪は黒漆のごとく艶かにして束あるを片はづしに梳け、年齢三十路に及ばざれば、花枝頭に在りて風に一つ〳〵散初むる色姿。細面にして色白く、髮際火塔口に揃ひ、眉痕青々として遠山を横へ、眼は凜として涼しく、才氣其中に溢れたり。丹花の唇に烏羽玉の染歯少し見せたる、得なむいふべくもあらざりける。金銀色まぜに縫摸様せる裲襠の肩頭窓より見えて、胸のあたりに銀地の扇を半開きにあてがひ、おッとり

としたる體度、持て生れたる上品はわざとにあらで、花の香、玉の溫にや似たる可き。お花我にもあらで體搖き足進み、ずる／＼と乘物脇に近寄れば、奥方扇を擧げて忍びやかに制したまふに心注き、身を退かむとする時遲し、徒士の叱る聲に驚かされながら、見飽かぬ慕はしさに行列を離れ難くて、二町餘も駕籠に添ひて、せはしく本意なき對面なりけり。奥方もお花に目を離さず、もの言ひたげに顏を傾むけ、はふり落つる淚に目瞬などして、心に無量の思ひあるを知らしむ。何所まで追ふとも際限なしと、好程にして立留まり、小腰を屈めて訣別の會釋すれば、彼方にても頭を下げたまふ間に、乘物は行過ぎぬ。お花なほ立留りて目送れど、女中駕籠に遮られて物足なざる心地なり。お花思ひけるは、此身は運か不運か、あのやうなる姉を持ちて、……持ちながら妹はこの有樣。彼方は乘物にて三四十人の同勢。此方は隨行にも旦那にも只一人、小紋の重に煤竹茶の帶して、塵埃の中にしよんぼり立てる姿の、姉樣のお目に

はさぞや淺しく見えしなるべし。胤はかはらぬ石見守の女ながら、彼方は玉簾の御息女に生れ、我はかくし子の日蔭ものとて、下賤の土に根を持てば、そのまゝ草花と開ける此身上！羨ましきは姉樣なり。婦人の身にして、兩刀横へてゐかめし造りの胸毛男を、幾人も隨行に引連れて凄まじき勢力。其も一つ血系にあらざりせば、よき月日の下に生れたる女と眺めて、さまで羨望も起るまじけれど、我も石見守の娘ならずや、姉樣も石見守の娘ならずや。然に我は町外れの茅屋に、乳臭兒を抱へて木綿布子の胸をはだけ、亂鬢に埃を沐びて白く、薪脂を爪紅にして勝手業に手足見ともなく太り、煤けに煤けて苦勞に苦勞し、この後に是と頼もしき希望もなく、男女明日のお米を氣遣ふやうになりては末なり。苦界ながら里花と言囃されし頃は、後々かくぞとは思ひも懸けず、鳥水の隱居に連れられ、名所見物に贅澤いひ盡くせし駕籠の中にては、旅百般の可哀を芝居狂言のごとくに見過し、此分にては綾錦の手玉をとり、伽羅

の羽子板に眞珠の羽子をつき、珊瑚のさしやご彈も飽きて、長き一日の樂に苦しみ、貧富平等娯樂といふ戀は、對手老父にしてをかしからず。其人に嫉妬だになくば、業平の樣なる男に添してもゝらひ度を、只一つの不足にして、此身獨立にならむ日の來るを思はざりしが、尾羽枯せば枯るゝものかなと、姉といふ石見の長女が容躰を見しより、お花いとゞ世のはかなき恨骨に染みわたり、鬱々として我家に戻れば、隣家に預けし幼兒饑ゑきりて、乳房にゑがみつきて離れず。折から米屋の手代來りて、聞もくさ〳〵する例の催促、小癪に障りてけんもほろゝなる挨拶すれば、立腹して歸りぬ。其翌日姉よりの使者反物五六匹に目錄に添て、われ如きをも妹と思せばこそ、難有き事と涙ながらに請取りけるが、また思へば、人に惠みを受けむよりは、我から人を惠むべき身上にならむこそと、これも亦世を恨み身を敢果なみの種となりて、とかく涙雨は人の身の秋にふるものなりけり。

お花糊口の道を知らず、また活計を助くる人とてなければ、一日々々と貧は身に迫るばかりなれば、さるにても情深き柳生の姉より、月に必らず一度の心添はありながら、其にては凌ぐべくもあらず。凌がるゝにしても意地強きお花なれば、姉の世話にわが身を疎み、かくては何の思出ありて長命ふにや、心に問はれて愧かしき事なり。我二十二歳これよりを盛ともいふべき身にしてと、百計盡くれば、まゝよと女子の分別はいつも是に極まれる分別して、花が咲くか、果はならぬか、其は急場の今にしていふ所にあらずと、どうありても其事に臍を固めぬ。

（十六）

亡父新右衛門碁を好みて初段を打ちければ、箕輪の浪宅に碁友三四人入魂に出入りける中に、源七といへる女衒あり。新右も日常〳〵褒めける如く、此男業躰に似合ぬ善玉にて實意人なりけるが、新右死亡なりし時も縁者同樣に世話して、其後も折々〳〵訪問れ、心細きお花を慰めて、及ばぬながらお力にもなるべしとの言葉を憶ひ、ある夕暮幼兒を抱へて源七の住居を尋ねぬ。土手ちかき山谷の裏借屋に獨身のいぶせく、今夕飯とて鍋皿小鉢を散亂し、ぐび〳〵と獨酌の門戸を叩けば、誰だ〳〵。あの子の母親か、其樣に心配せずともといひながら破戸を引開け、此は思懸けなき前田の奥樣、お珍らしや、まづ〳〵と膳椀を無雜作に片寄せ、御覽の如き汚穢家へようこそといへば、御飯中にいかい失禮、お相談は後にてゆるゆるすべきに、さあ〳〵遠慮なくといへば、否丁度只今濟みました處、

坊様は早お寝か、さぞや重かるべきに少時此へなりとお横になされませと、我坐蒲團の埃を拂ひて其所に直し、お枕にと有し風呂敷包を出せば、お花會釋して幼兒を臥し、はだけたる襟を搔合せ、扨源七殿といひ懸けしが、此の男は夫の顏も知り、我も心易くし、この子ある事も知りたるに、我子を賣りたしとは流石に愧かしく、さればとて言はでは濟まぬ事なれば、勿論言出すべけれど、羞しからぬやう其となくほのめかして、先方の合點ゆくやうにと思ひつくまゝ、淨瑠璃の累が身賣をその儘と、後にて思へば、馬鹿らしくも愧しかりし。其時はさる氣もなく、源七心中に嘸かし笑ひたるなるべし。今夜參りし用事といふは、外ならぬ人の賴まれ事、女を一人吉原へ勤に出したきとの事なるが、今というて今相談のなるものにや、明日明後日に金子入用なればといへば、なるほど、此方は商賣なれば、何時なりとも御相談なるべし。して其女といふは。年齢少し更けたれど……まづ我に似たものと思ひたまへ。姿色優れたる

にあらねど、色白なるは百人の中に入れて際立つ可し。夫もなく其外の縁者もなければ、年長くとも仔細あらじといふなり。此はいかにといへば、其女人は生娘か但しは女房上りか。御近所の人か。直近所のものにて生娘……女房縁付きし事もあれど、今は娘なり。なるほど、姿色優れたるにあらざれば、多分の身代金は出し難けれど、色の滅法白きと云は相場のし所なり。惣じて遊女の身は、數百人の數の中なれば、姿色の好は至極なるに相違なけれど、第一は目立て見えねば客を引惡し。されば色白といふがまづ頂上なり。其は耳よりの事なるが、年齢は廿一二、姿色は十人並、色は其やうに白きとして、八十兩ほど借りたしといふに年季は何年なるべきやと尋ぬれば、源七額に手を當て、樣子の大畧は其にて知れたれど、代物を見ぬ内に相場は定め難し。速急との事ならば、今宵此より御同道申して、その女を見し上即座の御相談すべく、今宵に限らずとあれば、明早朝、お宅まで伺ふべければ、其旨を先樣へお知らせ

下され。いづれとも御都合次第といふ。お花行詰まりて無言なりしが、かくては當人我といふ事を曉られむ、曉られじと、推して何氣なき躰を見せむとて、俯けし顏を擧ぐれば、源七の眼の中に笑ふ色浮かむ如く、南無三と思へば汗湧きて背を流れ、頰熱して胸騷ぎ、いよ〳〵仕損じたりと思ふほど平氣を粧ほひ難くて、わくつく中にも思案すれば、明日に延ばしたりとて、いつまで我といふ事を裹むべき。明日になればとて不能言事はいひ難ければ、端緒の解け序に今こそと、此一時を一生懸命、其人は我と言放てば、源七大方はかくぞと前に察したれど、わざと驚き、其は奥樣か。淺ましや何故にさまでの御分別はしたまひしぞ。我其道に作らねば立行かざる渡世。願はくばその御分別を仕替へたまへ。尚又してといふは可笑けれど、遊女の身の地獄の苛責、鬼の心になりて罪業をのお世話申しては、亡くなられし新右衛門樣へ源七が一分立ちませぬと辭めど、最早此所までに乘懸けてはお花の氣強く、遊女の身の苦艱は我

とても知れば、酔興遊戯の身賣にはあらず、了簡も分別も仕盡しての上なり。新右殿亡くなられてより一倍の不如意に苦しみ、諸方に借財出來て足掻ならざる始末。其も好けれどこの兒を抱へて女人の身は稼ぎの業なければ、眞實の話は、いふもさもしけれど明日の食事も覺束なく、とても饑ゑて果つ可き身の、世間の何の恥辱あるべきや。新右殿が遺紀念の此子を干死にせむは、我萬人に情を汚されんより、數十倍も亡夫に謝罪なき仕誼なれば、我奉公して此子は里に遣り、見事に成人させて細くとも前田の家名を繼がせたき了簡なれば、偏にこの世話を賴み入ります。斷然亡夫に義理立して否みたまはゞ、外の手に懸りて身を賣らむに、賣れまじき事はあらじ。知らぬものゝ惡黨によい事されて、不便の目にもし遇ば。新右殿は其時誰を恨むと思ひたまふぞ。とても賣る身なり、源七どの骨打て下されと、お花の決心動かざるに所爲なく、新右衞門樣には相濟まざれど、奥樣のお言葉にも一理あれば、源七お世話を申すべし。

さしあたりては龜和泉といへる樓に口あれば、此に話を附く可けれど、吁！身を賣らむといふ女にいづれ可哀ならぬはなけれど、以前を知りて今を存じたる此方樣のお身上、餘りのお可傷に何とも申上ぐべき言葉なし。只此上は情ある大身に根引かれたまひ、御全盛に廓を出たまふ、お見送りの同勢の尾について、我も皺枯ながら性一杯わめきて、御祝義申上ぐ可き御運のほどを待ちまする。錦の裏なる廓の內幕、血池鍼山地獄道の苦艱に、お身體を損はぬやう隨分お大事に遊ばしませと、實意より滴る言葉に、覺悟の上なるお花も女氣の脆く、飜るゝ涙を亡夫の位牌に、名殘の水盃と手向けて、いよ〳〵奉公の年季三年八月の證文にて金八十兩。

（十七）

廓奉公の身に用なしと、錢高のものとてあらざれど、賣餘しの家具なきにあらねば、見倒屋を呼びて骨折障子、破壞火鉢、夜衣薄團、破襖、鍋、釜、膳、椀、鼠不入、火消壺、一つ竈、洗濯盥、手水鉢まで、座敷口に押並べて評價をさせけるに、呆るゝばかり無情なる事をいひて、强ては引取りたくもあらねど、折角此まで參りたるものなればと、足下を見てぞ二束三文の相場を附けゝる。此方にてはこの雜物不用なれば賣もすべきに、鐚一文にも引取人なくば其までの事なり、邪魔臭ければ賴むでも持て行て欲きほどなるに、とかく女子心は未練にして、法外なる見倒しを口惜しく、其ならば賣るまでもなし、合壁へ紀念分配にせんが優しなりとも思へど、此貧の中なれば多少かの補欠にはなるべきと、しぶ〱ながらいふなりの價値にて得心すれば、見倒屋の老人麻財布の中より緡

錢を四つ五つ取出し、たしかにお改め下されと其所に列べて、小跨走に門口へ出て荷車置て待てる男を連れ來り、攫うて行かるゝものは、箸一筋も馴染の品なれば、其物に心なきも、名殘は惜まれて快心地はせず。男が引擔ぐ四布薄團は、垢に汚れ肌に擦れ、亡夫の溫度冷わたれる夕より、夜每に泣明せし中形の磯千鳥も朧氣にて、今は聲をも得立てぬ想なり。襖障子がたぴしと持出す所へ、かねて賴みたれば隣家の女房、三河島の小百姓ながら困らぬ家と推擧して、其里親を同道して、御新造樣此女がと紹介すに、其女人は三十一二の見かけから土氣女房、可笑き圓髷に黃楊の木櫛を挿て、色黑々ときよろり眼、唇厚く鐵漿の際立て濃さは、今日江戶行とての修飾なるべし。律義らしき顏色にその心情も賴もしく思はれ、これはお世話樣な。其方も御苦勞で御座りました。見らるゝ通りの混雜にてお茶も上られませず。お賴み申しまするは此子の事、何分面倒見てやつて下され。さして虫氣はなけれど、咳氣が持病なれば寢冷

を氣を注けて、すこし強く咳いたる時などは、お醫者に見せてやつて下されや。其始末は此方にていたします。此二三日乳を吐すやうなれば、その妙薬二三貼此子の懐中にいれたれば、日に三度に一包を飲ましたまへと幼兒を手渡し、帶の間より財布を取出し、小判一枚紙に捻りて、これほど里扶持に渡しておきます。追而衣類は新らしく拵えて此方より届けますまで、少しなれども小包を出し、襁褓を四つ五つ、持馴れし玩具も此中に入れたり、と又若干か捻りて、輕少なれど家へ土産を買うて行て下され。外にはいふべき事も頼むべき事もなし。唯東西知らぬ乳臭兒を手放す親の心にもなりたまひ、其も不便此子はなほ不便と、くれ〴〵もいとしがつて面倒見て下され。この身上の敢果なさは、隣家のお萬殿よりも聞かれてならむが、可憂が上に可憂重なりて、いとし子に別るゝ此心はいかばかりぞと聲曇れば、里親欲眠る子を搖りながら、私とても子を亡くせしにてよく知れり。其子生替はりての此子と思ひ、假初にも

疎略にはすまじければ、安心したまひて御奉公大事に遊ばしませ。凡そ里子取るといふは、なか〳〵慾徳づくにてなるまじき事にて、夫は非凡の子煩惱、育てむといふ私はいふにも及ばず……吁！江戸生は格別の御容姿、早く歸つて夫にも見せて喜ばしたさに心急げば、早お暇を申しまするといへば、お花急遽涙を拭ひ、少時待て！今一度篤と顏見ての上とまた抱取らむとすれば、幼兒夢動きて少し聲を立て、さし延す紅葉のごとき手をお花口に含み、頰に頰を押付け、見る目は鬼も數瞬てかや。時刻時刻と源七迎駕籠を釣らせて來り、落着ましたらば參るべし。餘り遲はりてはよろしからずと急立つるに、此名殘盡きじと、そつと懷の子を里親に渡して、諄いほど賴みましたを繰返し、やう〳〵駕籠に乘れば、源七外より垂障を下ろし、それと舁出す時、中にわつといふ聲に里親唇を嚙み、源七眼を塞ぐに、勇ましきは舁夫の懸聲。

（十八）

歸咲のお花麗はしく、店名を佐太夫と呼びてその突出しの道中姿は、萬客の心を一攫に擄りしと聞こゆ。然もある可し、此女には着眼ありとて、樓主大奮發に奮發み、此一夜を女一代の大事と、入費の莫大なるは此樓前後に又なき例なり。お花はまた思ひけるは、姉の大名の奥方とて、見たりや、行列の威勢は飛鳥も翼を斂めむに、我その妹として味噌漉携て腐らむは、神ぞ、神ぞ、神ぞ口惜からずや。さりながら運拙くして夫を持てば皆死なれ、これまでの萬事末凶ならざるはなく、末々の辻占惡ければ、正路の立身出世は覺束なき事なり。凡そ人間に生れながら、良かれ惡かれ其名を唱はれずして土に返るは、蠅の夏に生れて秋果つるがごとし。芳名を傳へずばあられぬ名にてもあれ世に知られ、其れにて姉に楯つかむも面白かるべし。われ最初の一歩を踏違ひ、女人は貞操にある

べきものを、白銀に甜められ黄金に抱かれ、大事の〳〵戀と情を散々に玩弄ばれ、砂糖の甘味なく、茶の香氣なく、魚にしては脂膏ぬけたる三月比目魚、形はあれど其性なきは、其物にして其物ならず。女にして女にあらず、女ならざれど男にもあらず。外貌全備の不具なるこそ淺ましけれ。いでや！不治の不具となれるからは、大不具となりて世間を氣味惡がらすべきぞ。

江戸の傾城がどれほどの事あらむ。島原に雛鬟から仕立られ、やがて里花と全盛極し京女郎が手管と色姿に、見よや、この吉原の天を地にし、何百人の女郎があり來りの古手練を性なしにして、小山ほどなる大臼茶を碾かせ、揚句は江戸中の甍高なる家宅土藏を一揉に推潰し、勘當帳に反古の價を下げばや。その着手の今宵なればと、思ひを凝らし、心を籠めての色粧、鏡に我と微笑をくれて思はず顧視りぬ。

五月半の夕暮や〻おもしろく、嫖客一時出盛る五丁町一圓に人波打て、

どろ〳〵と待合辻に馳集る大勢の足音に、何かと見れば、突出し佐太夫が道中！　白絽の目を一面銀絲にて拾ひ、背筋は四寸巾に紅絲にて拾ひ、此に違鷹羽の定紋を金絲に盛上にしたるは、御簾に裲襠なり。領には小形銀鉤を附け、五色の下絲は地を曳くばかりなる眞藥玉を釣下けたれば、八文字の高足のッゝゝしりと踏下す毎に、此玉背に搖めけば、中に仕込みたる蘭麝四方に薫ずるやうに巧みぬ。突出しには垂結帶ならざる制なれば、目も綾なる大和錦を總角に引結び、その餘れるを兩肩にはねかけたり。前驅には花新造二人、いづれも愛々しき美色を選び、藥玉を色染にせる白絽の對衣裳、後に引添ひては小才覺あるらしき壯佼、花には露をいとふさしかけ傘、その後に藥玉の對衣裳なる二人禿、太夫の左右には番新佐山春日野おの〳〵姿を粧りて据腰に練行く、後詰は遣手若者、その後は魂魄脫殼の士農工商ぞろ〳〵と群集して解けず。警護の鐵杖淸爽に霞み、箱提灯の火影美麗に輝りて、遠く之れを眺むに下界の仙女天上夜遊

の宴に赴く風情あり。　えェ！黄金が欲しいと喚くは誰ぢや？

（十九）

大盡といふほどの男金銀の祟か醜男ならざるは寡く、今宵突出しの初客といふは、年齡五十四五なる大男、色黑からず目鼻立尋常なれど、唯一目に氣の弱き女人はわつと絕叫て氣絕すべし。顏手足の嫌ひなく大小の疣透間なく取附けるは、餠霰を貼けたるごとく、最初は醉興に假面など被りて人を氣味惡がらすにやと思ひ、佐太夫熟視れば確乎に正眞の疣なり。出產はまさしく下賤からずと見えて、擧動言語大樣なれど、江戶に馴れては可笑げなる大坂訛、原籍を糺せば其地の名物なる袋物店の旦那なりといふ。

年に一度は仕入をかねて色遊の江戶下向。其度此廓を旅宿にして入浸り、隨分見事なる散財に、疣大盡といへば裏田圃の蛙も鳴音を止むるほどの全盛。此春よりの流連なるが、其折の風俗は黑縮緬の羽織小袖に緋裏を

ちらつかせ、緋頭巾、緋繻子足袋、緋天鵞絨緒の塗下駄。夏季は墨畫牡丹の白絽に緋博多の帶して萠黄紗の投頭巾。何たる事ぞやと、纒頭もらはぬ人は淺ましがりけり。

色廓は男好くても持てず、黄金ありても持てず、自由めきて不自由なる場所なるに、此不具が何とする氣ぞ、掩すべき耻辱を外飾の場所に曝らしに、其もはる〴〵江戶三界までと、佐太夫心中に笑止がりぬ。

賣る身、買はるゝ身の疎ましさは、この疵にも好きな事を言はれ自由になりて、苦界は此所かとも思ひしが、佐太夫すこし癖ありて、他人の可厭といふ事を强て好めば、馴染重らぬ添臥に、大盡が滿身の疵を撫でながら、此男富貴の家に生れながら、いかなる業因か如此被厭の疵物に出來て、世に不足といふ事を知らぬほど、此不具を朝暮の惱として、天地を怨み、父母を怨み、其身を怨み、嘸や世中の敢果なかる可し。商賣我儘なる色里などにては、全備の人一兩にて濟む所を、十兩遣うてもさほ

どは利ず、身の弱點あれば万事に控へて可愁思ひ絶えまじければ、飲懸し酒も頓に味の變る事あるべく、此容貌にては誰も〳〵厭ひて、何處に行けばとて戀めける所には、穢多非人のやうなる心扱ひせらるべく、自身にもさりと大概は知りながら、なほ煩惱已み難くて通ひたまふ、心中の可哀さ可憐と徐ろに不便を催しければ、佐太夫凡人の精神を入替へ、心を盡して大盡を持成しけるに、果してこの眞實疣殿の骨髓に徹し、寢覺に佐太夫を忘れず、五十年來の喜悅娛樂、今は死ぬるとも露ばかりも遺る恨みなしと、折々太夫だけに語りて喜びぬ。されば所望せぬ金銀の貢簞笥の小抽斗に溢れ、物日の仕舞、仕着、配物、衣裳手道具、櫛簪其外萬端の注意神業のごとく、疣大盡が手一ッにならずといふことなし。

（二十）

むかしは數十二軒の土手の編笠茶屋、今十軒と成て、葦簀、床几、懸行燈に外面の手輕なることは、道中の茶店に異ならねど、土手下には小綺麗なる居宅を構へ、之も待合人の所望にまかせて貸し、此家より遊女屋へ案内さすと自在なり。廓内の引手茶屋は、揚錢の立替何やかや遊客に重寶なる事あれど、此家にては其なく唯送込むのみなれば、萬事に不自由なる上幅利かずとて行かぬ人多けれど、人目を忍ぶものは華美ばらぬを喜びて、大身などの行くもありて相應の繁昌なり。此頃山谷堀にも同樣なる引手茶屋ありて、これは船宿といふ事、本業を其まゝに呼慣はせしなり。

九月朔日の夕暮土手の往來絶間なく、帶屋の床几に三人連の勤番士、いづれも面躰はゐかめしけれど、この道には弱卒と見えて、その話とあれ

ば呂律亂れ、鬼をも挫ぐべき此方なれど、彼奴と組むてはとても〱、澁川流の手練が物の用に立つべきでないと言へば、その對坐の武人後反に左手を突き、右手の扇にて太刀の欛を敲きながら、いや松木氏の弱い事かな。そも〱武士たるべき身が人を斫るこそ本懷なれ、女ごときに殺さるゝとは近頃笑止の至りなり。殿今にも御成人なされ、伽羅の下駄など穿かせたまふほどの御寛濶を好ませたまふに於ては、さしづめ此大峯が色道の御指南番とありて、たしかに八百石がものはあるべきも、世に伯樂なければ千里の馬を知人なく、これほどの器量人にお長屋住居さすなど、はてさて無念の次第などゝ、多愛なき事をいひ散らして立ちぬ。
店口小影き片隅に身を寄せたりし五十一二の男、白痘痕にて髮毛薄く、古渡唐棧の綿入に、縞柄少し違ひたる同じ品の羽織を着たるは、有財商人の風俗。客の居らずなりたるを覗ひ、しづ〱と奥の床几に席を移して、今夜いづれにてか遊びたきものなれど、この廓に度胸よき女郎あり

や。膽太くして男氣あるものなれば容色には望なし、さるものはあるまじきやと尋ねけるに、女房小首を傾け、格別此女が度胸よしといふ遊女はなけれど、といひ懸けてはたと小膝を拍ち、それ、それ、龜和泉の佐太夫といふがこの五月の突出し、さしたる容色にはあらねど、氣性を買ひにとて夜毎の繁昌。是はいかゞといふに其男打笑み、御苦勞ながら其へ案内頼む。

（二十一）

此男深くは酒を飲まず、少しも戯言いはず、藝者の絃音も蕭條なるを誂へ、座敷しつとりとして好節に切上げて閨房に入れば、佐太夫も續いて添臥の夏夜の熱苦きに、厭はせたまはぬ御心の忝さと、團扇の風を配けて送るに、衣より肌より得ならず異香薫ずれば、いもせの山や無名たつらむと吟じて佐太夫が手を捉るを、商人にはしほらしき人と感じて、敷妙の手枕野の梅の花、と捉らるゝまゝに玉の樣なる細腕をさし出せば、客は首を擡げながら、さりとも見えねど恐しや、城を覆滅す力あるものかと、對話少し解懸る折から、佐山の連りに喚立つる聲すれば、佐太夫起出て何事ぞといへば、佐山手を擧げて秘密にと制し、小手招きするを訝かしみて其所へ行けば、耳に口を寄せ、あの客人は尋常人ならずと目色を變へていふ。何故にと聞けば、さき程あのお客これを冷き所にそつ

として置いてくれとて、重き小包を渡したまひけるを、何とも心注かず請取りて、この下戸棚に入れ置しが、今出すものありて之れを見るに、頼まれし言葉の思出されて、中は何ぞと開きけるに、これを見たまへ、恐しや身毛も彌立つと、棚の中に行燈をさし向たるに、覗へば包裹は六連發の短銃なり。佐太夫屹と閨房の方を流眄に見やりて、頷き、其品は元のごとくに褁みて、人目の觸れぬ所に藏し、佐山には口外すなと口留して、閨にもどりても此事を言はず、只管容貌擧動に注目すれど、是ぞと變りて見ゆる所なし。飛道具などを所持すればと思ふ眼にして見ば、さもあらざる事にも扨はと不審起るものながら、風俗に見せかけたる商人にては確にあらじ、之に就て思へば度胸よき女をとの客と帶屋のいひしは、一定子細ある事なり。何にもせよおもしろき事なりと、心を盡くして取成しながら、百方に言懸け仕向けて正體を顯はさんとしたれど、別に怪しと見るべきほどの事はなかりき。

朝になれば寐亂姿を見せじと、客の起きぬ間に佐太夫髪を撫付け、薄化粧して再び閨所に行けば、漸く目覺ませし所なり、煙草を吸付け、時刻尚早きに今一睡したまへといへば、紫縮緬の胴卷小袋の如く腹膨れたるを、づしりと太夫の膝下に置き、此にてよきやうに計らひたまへ、四五日の居續には足るべし、夏夜の短さに寢むき事はと、夜衣に包まりて後向になりぬ。大氣なる此擧動といひ、帶屋が言葉といひ、短銃といひ、この男いよ〳〵尋常人ならずと思へど、扨何者といふに答ふべき言葉なし。この四五日の中には素性を我から名乗せて見るべしと、佐太夫佐山を呼びて迎酒の仕度を命ずれば、怖れて流連かと尋ぬる顏は！

（二十二）

初會數日の流連に預けたりし黄金皆無となりければ、また近き内にとて此男歸りけるが、中一日置きて來りぬ。胴卷は例のごとく佐太夫に渡して、外に我衣類五重ばかりを衣更なればと預置きて、此所を居宅の棲心よさに歸ることを想はず。黄金あれど引摑むで擲るやうなる事はなけれど、新造、禿、鑓手、若者までも懷かれて、佐太夫の座敷は市を爲して賑はしく、十日餘かく遊び續けて、家の飯の戀しくなりたる頃と、夕暮よりふらりと出掛け、明れば午後また小判を抱いて來たりしが、これも十日不足に烟となして、竭れば歸り、來れば持ち、持てば竭くして大凡五六度も運びけれど、無盡藏の底見えずして、入用とあらばまた何時をも恐れざる氣色なり。かくまでの馴染に何時まで褻みたまふやらむ、お宅は何處ぞ聞かせ給へといへば、人生朝露の如し、草の葉末を轉廻りて、

何所と家此所を定むべき、唯我いとしと思ふ方こそ其なれ。お尋ねにも及ばぬこと、龜和泉の佐太夫方なり。あの邊御通行の折からは。ちとお立寄りなされなば、澁茶がはりの冷燗、有合にて一盃などゝちやかし、いつも〳〵其やうに家暮らしき原籍詮義、さればこそ捕吏なむどに情夫あらめと、我が疑ふに無理はあるまいがといふ、佐太夫男の背を敲きて、人もあらふに捕吏づれを情夫とは何恨ありてか。餘人ならば乞食にても、疾癩者にても、折助にても、願人にても、兇狀持にても盗人にても、世に日蔭なる亡命人にても、我を戀ひたまふものは我も亦憎からず、其人が情夫なり。捕吏と水臭き男は、器量ようても黃金ありても、外面實意や外見心切、えゝ！否々身慄がすると、立上らんとすれば男佐太夫の裾を捉へ、國法を犯せしおたづねものゝ中に、下賤下司は一人もなし。それを乞食折助、非義なる盗人、天刑の病者と一口にいはむは非禮なるべきぞ。佐太夫につと笑ひて、只今此身に捕吏の間夫ありとおほせられし

が、さまでにおたづねものを辯護ひたまふ此方様は、大罪犯したる日蔭もの〻中に、深しき御契約の御兄弟を持たせたまふにや。思ひ淺からぬ此方様の弟御様とあらば、我にも他人ならで見ぬ前より懐かしければ、連れ參らせてひそかに逢はしたまはれ。世間にてはよしや日蔭ものにおはさむとも、女人の魂といふ佐太夫が鏡は一昨日磨ぎあがりて、其光日輪様には及ばずとも。人一人ばかりを闇き身には致すまじ。廓何百人の遊女、誰か胎内より八文字踏むで生れ出たるものあるべき。今賣色の畜生がましき營業の身上を省み、某の子かにがしの女とは、流石に親の耻辱を思ひて迂濶に名乗りこそせね、其往時を糺さば、指切れ髪切れ、やれ血起請との無理難題は、恐多き客衆も尠からざるべし。

（二十三）

なるほど我も賣色の身なれば、一圖にすれからしの薄情ものとお思召さむは、多くの遊女がうたてき所業に目馴れたまひつればなるべし。唯此佐太夫は子細あつて黄金を好まず、好男子を好まず、一癖ものとの名は廓中に隱れもなし。情意氣張づくにしては隨分此命を吝まず、見事立派といはるゝほどの事をしてのけ、死後末代まで吉原の佐太夫はと、黄金一式の遊女を男の怨言の中に引かれたき身の本願。此所に賣色の日なほ淺けれど、四五百人の客の數に逢ひて、一々其氣象を見に、まことや大門を潛るほどの男に魂の脫殼ならざるはなく、利口らしき愚鈍、剛らしき弱助、楊枝一本たしかに削るべき技倆あるものなし。この廓に足踏入れぬ男をこそ粹とはいはめと、われ等が先達の言葉もおもひ出されて、かゝる身とならざりし以前は、世間に腐るほど技倆人はありけりと見た

りしが、此廓に來て弗と見ぬものは、それとなつかしき姉の顔なり。申すは追從に似て可笑しけれど、不思議の御縁にて此方樣に逢ひ參らせ、褒みたまふ御身分より御姓名より、何より先に觀察參らせしは、その非凡なる御氣性なり。もとより御年齢を召し給ひつれば、申すまではなけれど、色酒に蕩けて性根を亂し、遊女のたらしに現となりて、家を忘るる輩に似るべくもあらず。戲れの御一言、假初の御所爲の中にも非凡個所の見ゆれば、五月晴に月影を拜む思ひして、羞かしながら佐太夫其處に迷ひました。さりながら此方樣は、此部屋を御本宅のやうにかく寢食したまふとはいへ、外々の客衆のごとく、見所なき此身の色を愛でたまふにあらず、……いえ〳〵何とおほせらるゝとも其に相違なし、男らしくもなき世詞愛嬌は愼みたまへ。誰を戀ふにもあらず、誰に迷ふとにもあらで、この色里に入浸りたまふは、何にもせよ御所存なくてかなはぬ事なり。言語に擧動に心の色を見せ參らせ、その御所存を今日御口外な

さるゝか、明日か明後日かと心待にしたれど、さるべき氣色もなければ、堪へかねて此方より折々誘ひ申せば、外してあらぬ事に談話を移したまふこそ恨めしけれ。かく打棄みたまふほどならば、何心ありて剛膽不敵女をと帶屋へは尋ねたまひしぞ。尚又棄むべき御所存もなく、唯色を愛で情を買ひたまふばかりならば、好容色をこそ好みたまふべきに、剛膽不敵が添寢の友の何ならむ、御返事はいかにや　その御所存を打明けたまはむには、善かれ惡かれ其には論なし、佐太夫が一命捨て、露ほども御用に立つならば、後ともいはず即座に相果て御覧に入れ參らすべし。熊野の午王を誓に立て、行末添らじとの血起請書くは、賣色の花とて遊女にある慣例の空言妄語。其と此とは事違ひて、死ねとならば今が今死ぬ誓言、血路はなき脇指一衝を距離の對座、苦しめ給ふな此處を刺したまへ、と膝の突合ふまで進寄りて襟を搔開け、玉を延たる咽喉を曝らしていざといへど、男は首を垂れ手を組みて應ぜざれば、佐太夫袂を振ひ、

煙管を把つて丁と座を拍ち、未練なり、我一命を絶ちたまはでは、大事のお身上が危いぞえ！　やあ！　不覺なり、油斷なり、此方は一人、政府は多人數。秘したまふ事の露顯せで何時まであるべき。見たまへ是・と、袖の內より四折の紙を出して燈火の前に披けば、この男が武士風俗の繪姿！　や、や、や！

男は太呆れに呆れて、眼光鋭くじッと佐太夫を凝視れば、佐太夫片頬に笑みて男の膝に繪姿を投げやり、町人か百姓か武士か職人か、この眼が曇らぬ鏡面。また出入の度に放したまはぬ袋戸棚の中なる、大事のお祓、包の品は何といふものにや。指頭懸れば即席の雷霆、臭煙と人命の消ゆるといふ可恐物を、町人風情が何用ありて所持せむや。よしや要慎深かるべき武士なりとも、兩刀の外に卑怯なる飛道具を懐にしたまふは、まさしく世間に怖るゝ物あればなるべし。此の一つにても此方樣の素性は大概知れたる上に、世をたばかりの名は宗兵衛樣、實名田島……。叱！宗樣この繪姿は此方樣によう肖てゝはないかと、輪に吐く莨烟を其顔に吹懸くれば、宗兵衛頷き、扨は段々の言葉に相違なく、その一命を此方所望なるが言分なきか。何よりも易き事、用捨はいらぬほどに欲しき時

分に取りたまへと、微塵動ずる色なく、愛々しき眼中に微笑を浮べての挨拶。しほらしき不敵女と宗兵衛居直りて膝を正せば、暫時と佐太夫立上りて座敷の裏表を覗ひ、人氣なきを見濟して立戻り、枕頭にしやんと座せば、宗兵衛額を差寄せ忍聲して、女子ながらも氣丈の魂ありと見込み、その命を質物にして今や明す此身の一大事。繪姿既に回るほどなれば概畧は知りつらむ。我將軍の直參として鎗術の御指南役たりしが、水戸侯の御懇望斜ならざるに因て、改めてその家臣の列に入りて御採用淺からざる、田島弦左衛門といへば武士の數の中に衆にも容さるゝ身なりかし。君公に頼まれ奉る一大事は、水藩の興亡にも關らむほどなれば、我と見懸けて御腹中御口外の重きに、理まさに辭すべきなれど義として辭し難く、御領承は申しあげたれどもとても成し得べき事にあらず。成したりとて成遂ぐべきにあらざれば、其後折々の御諫言も御耳に入らで、切にと逼らせたまふなれば、事露顯の曉は罪をわれ一身に浴びて、首一

つ落なば濟むべしとの覺悟を極め、企圖に手も着かざる間に、弦左衛門德川家に私怨を含み、大望を思立つ旨其筋に聞えけると知りて、逸早く身を隱し世を忍ぶといへども、この本懷の遂られ難きは事の非理不義なるによりて自ら知れり。さりながら一旦君の御依囑を承引からは、事成ざるまでも努力せざるは士の道にあらざれど、天下の大患はわが大望成就と一時に起らむは眼前なるに、心弐岐に迷へば死せむにも死しがたく、うか〳〵と長らふ身の嚴しき逮捕を遁れ、此廓に立入て氣象ある遊女の袖の陰に身を忍ばむとは、天低く地高くこの世界に居所なき弦左衛門が、身の行末を佐大夫心あらば憐れと思へと、孝松霜に凋れて鶴夜鳴の聲細し。わが繪姿の其方が手に渡るほどなれば、此所の主人奴婢まで今は此身上を知らざるものあらじ。いかにと問へば、なるほど主人は知れど、先頃裏座敷普請の節は此方樣三百兩を惠みたまひ、其外萬事此身に花美を飾らせたまふ恩誼を感じてや、我にも窃かに申含め、力の及ぶほどは

お潜匿申上げよとの事なり。奴婢なむどは誰知るものなければ御心を煩はしたまふべきにあらざれど、此所は安心の隱家にあらねば、心當りの賣家の根津にあるを、明日にも見せに遣りて便宜の塲所なれば買取りたまへ。ともかくも我計らうて有るほどの力は竭し參らすべけれど、此方樣にもお身に一寸の油斷も見せたまふな。假初ならず馴染參らせしかひもなう、明日を知らぬ御身上に眞實を見すべき時なく、逢ふたびの樂み少なく、離別はかくていとゞ涙の多からんこそ、世に淺ましきわれらが契約なれ。それにも優て此方樣のお心の中はいかがあらん。武士ともいふべき身は、城に砦に立籠りて、寄手の軍勢を花々しく引受けんぞ本意なるべきに、遊女風情に大事を語りて、一身を頼みたまふ御運の末のいたはしさといへば、弦左衞門切齒に音たて、熱涙膝に落て霰のごとし。あゝ、昨日此頃の腹の切りたさ！

明日は歸らむとて宗兵衛出て行きしに、三日待てど音沙汰なければ、もしやと胸騒ぎて、五度六度續け樣の疊算凶のみなるに氣を變へて、机上なる書物を披き、一行目の頭字を見れば淚といふ字なり。其書を投棄て、かゝるべしと思へばこそ、晝間は止めて外出は夜ばかりと心を注けじに、うか〳〵と逍遙ひたまふからに憂目には遇ひたまひつれ。口惜しき男の擧動かなと一度は恨みけれど、また思へば、かの男とて其企圖を打棄て給ひたるにあらねば、用事あらむは尋常ならざるべく、三日が四日五日が十日、折には一月とも二月ともなるべきに、我流石は女人なりけりと、心を取直しても忽ちに亂れて、いや〳〵繪姿まはりて詮議手配嚴重なる中なればと、疑念に胸烟る切なさに、部屋を出つ入りつ、居つ立つ、ええ！とばかり湯呑に二三杯牛飲け、肱枕に仆れて浮世の外は此間なりけ

り。夕暮に近づけば、華清に玉を磨き、名花雨を帶びて化粧を急ぐ頃かと、人に驚かされて攪眠ませば、頰を撫づるものあり。貪睡眼をやうやう開きて視れば、天から降りたるか誰が捨てたるか、愛々しき男兒唯一人枕頭に在り。これはと飛起ながらなほ夢心地して更に合點ゆかず、兒の泣出す儘に抱上ぐれば、懷中に手を入れ胸に顏を當つるは乳を索すよと、出ぬながら襟搔分けて乳房を含ますれば、血の出るほどに吸へど思ふもの出ねば、なほ大聲に泣くにあぐみて新造を呼立れば、次間に居ると覺ゆる物音のするに、誰も出で來ざれば何をしてか、と立上る間も兒のむづかるに、其背をはた〳〵と敲きて小聲に子守唄を謠へば、屛風の後より宗兵衞ぬつと現はれて、古今未曾有の聞物太夫樣の子守唄、節濃かにして色ある聲には鬼も蛇も睡るべきぞといへば、襖の後にてどつと笑ふ聲して、春日野佐山禿戀路待夜崩るゝごとく亂入し、我に貸たまへ抱かしてと奪合うて、戀路兒の足を引けば、待夜手を執てやらじと爭ふ

に、兒はまた泣出す。佐太夫二人を叱りて、そのやうに無謀なる事せば泥で造れる人形にても壞るべし、嗜まぬかといふ聲の下より、お山を越えて里に行たと我身を搖りながらの一節、春日野呆れて、何所にてその謠は習ひたまひしぞ。子を持たぬ女にはならぬ事なりと、何氣なく尤めけるに佐太夫ぎよつとして、末々人の女房たるべき身の嗜に、京にて豫て習ひしと笑へば、京といふ所には香花茶湯のお師匠樣のやうに、お乳母樣のお師匠樣ありやと、佐山と二人して手を拍つて笑ひぬ。

(二十六)

宗樣ぬしの御秘藏かえといへば、如言、よう顏を見やれ、生寫ならむといふ。大勢も圍繞て視れど更に似たる箇所なし。佐太夫つれ〳〵と兒の顏を視めたりしが、つと面を上げて宗兵衞と眼を見合せ、あつと不思立てし聲を咳に紛らせ、おほせらるれば眼元などに肖たる所なきにあらず、ようこそ伴れたまひたれ、今宵は我と寢かしたまへ、せめてはこのお子を大事にして、奥樣の御悋氣を息めむものをといふ。兒は乳房を求めてまた泣立つれば、これ〳〵と宗兵衞の呼聲に、乳母會釋しながら座敷に入るを、佐太夫見てこれはとまた驚きぬ。乳母は何氣なき樣子にて、お坊樣お乳々と兩手を出せば、兒は雀躍して其の膝に移り、やがて音高く乳を吸ふを、佐太夫乳母の傍に附纒ひ、左右前後を廻りて兒に目を放さず、無心に見惚るゝ顏に心底の歡喜溢れて見えけり。乳母の懷に手をさ

し入れながらすや〳〵と兒は眠りぬれば、奥の間なる三蒲團の上に臥かし、今宵は情夫の來たりたるに粹なる宗様見免したまへと、佐太夫いそいそと添寢の床に入れば、宗兵衞乳母に食事を薦め、今宵は泊るに極りたれば、風呂へなりと行て遠慮なく寢よ。乳に泣く事もあらば起すべし。明日も家に用事なくばゆるりとして行く可し。兒は我と佐太夫が今宵確に預りたりとて、乳母は近き名代部屋に案内させて、後には春日野通路を對手に、宗兵衞樂飲に夜更るゝを覺えざりしが、禿が行燈の影に坐睡るを見て、其方等も寢め、我も川といふ字にと蚊帳に入れば、佐太夫なほ眠らで、團扇づかひ絕間なく兒を扇ぎけるが、宗兵衞を見るより身を起して、今宵の嬉しさはと小聲にいふ。三河島に一子を預けたる由豫ての話にて知れば、來度の土產に種の盡きけるよりこの兒の事を思ひ出し、是れに優す其方への土產はあらじと、今朝三河島へ尋ね行きて、わざわざ調へたる一品、此外にも所望ありやといへば、子にます寶の何かある

べき。お志の忝なきやら嬉しきやらにて、今も今とて涙の留め難くさへあるに、この兒の顏を見るにつけて、箕輪に在りし往時の事ども、一々眼に見るやうに心に浮び、藁席を被てなりと素人の身にてあらましものを、貧よりの不了簡より此有樣、母樣と喚ばるゝ身にしてあるべき事か、この兒には茜木綿を被せながら、躬らは緋縮緬の花衣、氣羞かしき事なりと、佐太夫の丈夫膽も親子の愛には蕩けて襦袢の袖口を沾らせば、宗兵衛眠る兒の頭を撫でゝ、身を果敢なめば世に誰一人として不足なきものあらじ。我ある間は折々此兒の顏を見せて進ずべければ、其をせめてもの消愁にして身の繁昌を勉め給へ。我も本國但馬には十三なる男子あれど、五歲の時別ればなしにしたれば、今はいかに成人せしやらむ。見世物玩弄屋の前など過るたびには、不覺の涙を催さゞることなし。嚴じき逮捕を忍ぶ身は網中の魚に異ならねば、思出す日を名殘としてまた遇ふ事を思はず。さほどの我身に比べては其方はまだ〱苦勞が足らざる

ぞ。その詮議嚴しきに、三日といふもの歸りたまはざりしゆゑ、万一の事もやと案じましたに、御無事のお姿と懷しき兒の顏と、一度に見る今宵はそもいかなる日ぞ。

(二十七)

宗兵衛千兩箱を幾個持ちしか知らねど、其上の入路なくして劇しく出る一方なれば、二月餘の後は景氣寂れて秋風立てるごとし。冷熱に移り易き此廓の人心とて、鑓手若者の顏色まづ惡くなれば樓主の機嫌も宜しからず。無念に思ひて、宗兵衛瘦我慢に綺羅を張り華美を見すれば、陰言は聞くに聞かれず、あれを見よ、長くもあらぬ壽命をいとゞ縮むる了簡の笑止さと、讎敵を譏るかなんぞのやうに、昨日まで此家の福神と追從いひし舌の、動けばとて色々に動くものかな、と佐太夫も衆の無情に切齒をすれど、此廓を人の棲む世界と思うては一日の營業もならず。又腹を立て通しにせねばならぬ所と宗兵衛を宥めて、とかくは此所に長居せぬが上分別なり。此方有福の間は樓主も神のごとく敬へど、黄金の光明失せて身の赤銹を見る時は、反對に廻るが人心、今宵を此廓此家の見納

にして、かの三浦坂の別宅に引籠たまへ。身の膏血絞餘の此方なれば、もはや打つとも撫づるとも黄なるものは出まじければ、樓主はさる者に何時まで關繫ふべき。まして犯せる大罪科に世を忍ふ身といへば、事露顯の上の連累を怖れ、手の入らぬ中に此方より訴人せむこと下司根性の常なり。今は一刻の猶豫も大事の基なれば、此より直に三浦坂へ落ちたまへ。其家は買ひしまゝにて疊建具はあれど、人の棲むべき用意なければ、此宵明日明後日の不自由を忍びたまふ内にいかにとも計ふべし。奴婢などは使ひたまふな、只寂〳〵と一人暮をしたまへ。日々の食事は此方より運ぶべければ、いざ疾と手づから宗兵衛が寢衣の帶を解けば、噫天なりと立あがり、此上は佐太夫其方一人を頼みぞや。今事新しくいふまでもなけれど、是までの焦慮は永年添ひし女房も及ぶべきにあらず、過分といはむか勿躰なしといはむか、其方が赤心弦左衞門死後までも忘れはおかぬぞ。女々しきお言葉かな。さる些細のことは忘れたまふとも何

かあらむ、暮々もお身の御要愼を忘れたまふな。此後はかまへてこの廓に足踏御無用ぞや。用事あらば何なりと言ひ越したまへ。仕度よくばさ早く〳〵と急くほどに、宗兵衞づか〳〵と閨房を立出て、中間にて顧視り、佐太夫！我も！武運拙くして今宵を名殘のと其手を執れば、振拂ひて、見苦しき事したまふな。此世はともかくも未來にて逢瀨はあるべきにといへば、善智識！見事に果てむぞ。此上のお願ひ。さらば。おさらばと佐太夫前に立て廓下に出づれば、あら、來懸る巡邏の捕吏。南無三！と裲襠の裾に屈む宗兵衞を包み、戀路や！

（二十八）

根津三浦坂なる宗兵衞が隱家へ、朝々人を賴みて一日中の食物を餉るに、この入費と手數の懸ること言語に絕えたり。廓の習慣とて臺屋物といへば、廓外に二三錢のもの十錢餘ならでは調ひ難く、煮炊不自在なる部屋住居は、飯も菜も臺屋より取よする外なく、其を餉らむとて人を賴むにも法外の賃錢を與へ、其心を悅ばして口を塞ぐなり。凡そ此處に一日の食料は廓外に十日を送るべし。佐太夫居常寬濶を好み、名を賣ることを專らにしければ、內證の逼迫なることは、我ながら色氣も興も醒むるほどの始末と常に笑へり。

去ども此癖は已まず。七月土用干といふに、座敷には銀金具綺羅美やかなる蒔繪の重簞笥もありながら、冬物などはいふにも及ばず、季物にだに用意なきほどなるに、此時面白し、目覺して遊戲して廓中の新膽を一

潰にして保養にせむと、表坐敷の青簾を高く捲上げ、本間次間居間の障屛を拂ひて三間一つに打拔き、通路に臨める檐前に透間もなく裲襠帶單衣の數々を釣りたるにぞ、此二階下に人の山を築きける。流石は龜和泉の佐太夫なり、負ける嫌ひの華美を仕續けの內證は、牛が曳ほどの火車と想ひしに、これを見るから恐ろしき手練ものと一人がいへば、かゝる女の腕に黒々と命と黥させ、これほどの衣類を始め雜物まで、一つ殘らぬまで居續せむほどならば、死しては土手に通神と祀られなむこそ此身の本望、といひたきまゝを言ひて此の下を去らず。樓々の太夫どもこの評判を聞くより、斥候の新造を走らすなど大方ならざる珍事なり。其明日はまた同じほどの衣類の數を曝せしに、一々前日とは品を變へて、大名などの召物とも見ゆる男物なども取り交ぜて釣りければ、人々唯呆れて、怖れて、怪みて、とても人間業のなるまじき事なり、とこの噂高く廓外まで聞えて見物に來たるものあり。その次日はいかにと廓中朝より

目を峙て、よもやと思ひけるに、また〳〵懸列ねたるを見れば、前日に似たる品とては只の一つもなかりき。佐太夫この三日は前面の茶屋に在りて、見物の品評を聞き廓の雜閙を見て心中可笑しく、世中は馬鹿の多さよ、誑しよきこの馬鹿殿の絶えぬ中は、吉原日々繁昌に趣く可し。凡そ女郎に賣るゝほどの身が、持參の大金あるべき樣なく、また鹽を甜めても半年一年にしてかゝる持物になるべきや。枕さがしなどしても數の知れたる事ならむにと鑓手に語りて笑ひぬ。虫干せし衣裳は淺草邊の損料屋より、一日借をして我物顏にひけらかせしなり。此事後に知れて天晴楠太夫と言囃しぬ。

（二十九）

子供だましのかゝる遊戯も賣色の花なれば、苦しき中の算段は愁けれど是非なく、其や此やの雜費に逐はれて、日々の切なさに血の出る身錢にて宗兵衞へ仕送ること、意地一ツの所業なり。二人が豫想に違はず、宗兵衞榮華の脂盡きて今は佐太夫が血を吸ふと見るより、樓主は忽ちに寐返打て、この腐縁斷れと息をも次せぬ意見の揚句は、乞食油虫と口穢く宗兵衞を罵りけるに、佐太夫勃然として、此方とても一度は死なるゝ身の、少しは後世の程も思ひたまへ、散々に引剝ぎ身の皮一枚に成果て、いかに拗る物無くなりたればとて、昨日の恩は今も形に殘るあれなる新座敷。隨分此樓の潤澤に、なりがらしとて蟲乞食とは近頃情なきお言葉かな。その御了簡にては、犬が首に財布下げて來たらば客にしたまふべしといへば、樓主烈火のごとく怒りて、默らぬか！彼奴を何者と思うて

の辯護だて、罪は梟首の亡命人。今までの義理もあれば知らぬ顏に持なし、首と胴とに膠をつけしはみな我慈悲にあらずや。我家に潜みたりし事お役人の耳に入りて、此間より嚴密の詮義、きつと尋ね出せとのお觸なり。其方がいらざる心中立して何所にか忍ばせ、萬事を賄ふ始末は我よく知れり。陳ずるともはや免れぬぞ、如實に白狀せよ。言はずば辛き目見せても泥を吐かせんと哮れば、佐太夫片頰に笑み、乞食は此月の上旬より來ずなりて、今は何所の小屋住居か。佐太夫とも云べき吉原の太夫が乞食輩の番をすべきや。ちと尋ね所が違ふやうに覺えますと、立上る裙を掴んで怒氣に任せてぐつと引けば、女の力の障へ難く樓主の膝に撻と仆るゝを、其儘組敷き兩手を捩上げ、それ！といふを相圖に若者水を張りたる盥を中庭の椽に運び、二尺餘の繩束の棒をそれに浸して差出せば、樓主把て一ふり揮り、佐太夫を引起して坐れる後に廻り、臂を目懸けて一打二打三打、水氣無くなれば沾らして四打五打、あとは數を知

らず無二無三に打つ程に、肉の響凄まじく見る間に皮赤剝けて血染出めば、佐太夫此所ぞと唇る裂るばかり喰緊めて苦痛を忍ばむとすれど、肉の離るゝばかりなる想に、我にもあらず悲鳴して聲細る頃は息も絶々なり。男に舁がれて部屋に戻れば、其まゝ仆れて身動きもならざる程なるに、其夜客あれば變らず勤めて惱める色を見せざれば、樓主は舌を捲きて恐れぬ。二日三日休みてまた樓主に招ばれ、いつも最初は溫和に利害を說きて宗兵衞の住所を言へとあれば、剛情一徹に知らぬとばかり言張り、果ては惡口交りに辱しむれば、かの繩束の亂打に死ぬべく惱まされて、拆檻の日數重れば樓主の拷問に馴れていさゝかも物を言はず、其前に行けばつッと身を投伏して足を揃へ、臀を上向にして打擲を促しけり。これ坐れる所を打たるれば、肉硬くして苦痛おのづから劇きゆゑ、俯視に臥して肉を浮かせ、輕く繩束を受けむとの意なり。さる事と知らねば樓主はこの不敵なる擧動にあぐみて、此女一命を捨物にしての秘胸中、

とても我手に合ふものならずとて、折檻は五六度にして廢めけり。この疵苦惱の眞最中といへども一夜も賣色を缺さず、朋輩の女郎この剛情我慢に感じて男子も及ばざる事といへば、力づくならば鉛の熱湯切身に鹽、何にもあれ此意地を挫ぐに足らねど、義理と情には脆くして人一倍の泣蟲と應へぬ。

（三十）

三浦坂の隱家の事薄々其筋へ聞えたりと曉れる節のありければ、即刻文して其由を知らせ、三河島の里子を預けし方は、人里遠き百姓の一軒家なれば、宗兵衞が身上を詐りて此處に同居を頼みけるが、都風俗の食客は人の目褄に懸り易く、嫌疑の端にもと其日より宗兵衞襤褸の筒袖を纏ひ、膝に色紙布の當りたる猿股引を穿き、鍬を手にして裏畑に菜作と身を窶し、夫婦の手助に日々を齷齪と稼ぎ暮す、埋木に花咲事のなかりしにと、音信の筆の序にしるして佐太夫の許へ送りければ、淺ましやとばかり涙を流して、世間は廣く人の數も多ければ、此身ばかりにもあらで傷はしき弦左衞門樣のお身の成果と、卷返して見る文に我兒の事を目に見るごく細密に認め、今は我にも懷きて老爺々々と呼び、抱かれて寢る夜もありとあるに、此男の陰なりとも邪見にせぬ赤心も知れて頼もしく、

其嬉しさは血に和して身體を浸せば、いよ〳〵命に替へても世話すべき念慮は鞏固りけり。

この音信ありて五六日後、晝より雨そぼふりて物寂しき夜なるに、珍らしく客なくて物足ず。まだ宵ながら家内靜まりて、何日になく絃聲も響かず。廊下をはた〳〵と睡氣なる上草履の音、時々近く或は霞み、樓外には素見のそゝり節犬の鳴立に途切れ、按摩笛冴々と毛孔に染み、物思ひなき身にも哀れなる夕とて、三河島の事を案出し、行末無覺束に思惱みて、覺束なき其また先を想へば、弦左衛門が血刃下げて捕吏を遁る景況、獄屋に繋がれて痩さらばへる姿、白洲に石を抱て吾血に坐したる體等、有もせぬ可忌き事の數々、心に浮びて逐ども〳〵去らず、手に觸る煙管を把て、味はぬ煙草を續吸に三四服吸ひて、火鉢の縁にて丁と打つ音に、座睡りたる雛鬟の待宵ふつと目覺し、我側なる壁をじつと視て立起り、茶棚なる湯呑を取來りて、鐵架の上の急須の茶を注ぎて、はい

きよと人も居ぬ方に薦めければ、寐ぼけたるかと煙管にて肩を衝けば、きよろりと四邊を顧盻し、宗様は何所へといふ。何？宗様が。今まで太夫様の傍に居たまひたるにといふに、佐太夫ぞつとして惣身に霜を浴びたるごとく、思はず身を慄はし、えゝ宗様が何しに來たまはむや。佐山春日野は何所へ行きしぞ、迎ひに行けと出遣りて、妙見に燈明を供へ、專念に其人の無事を禱りぬ。

（三十一）

この片田舍に潛みしより、日毎の膏汗に垢は溜まれど、肩までの湯に入るとなければ、溢るゝほどの朝湯に馴れし身體はむづがゆくして辛抱なるべきにあらず。少し遠けれど町まで行けば、江戸らしき風呂ありと聞くに彌肌膚痒くして堪がたきまゝ、宗兵衞一日の夕暮其風呂に行けるに、なるほど江戸にて、文身の背湯膨の端唄など見聞くもの一々、久しき籠居の心を動かさずといふ事なし。町の景色を珍らしく覺えて行くに、ある門を過るに幼女や彈らむ、拙き豐後節の音〆の聞ゆるに不思足を止めて、在りし世の廓の榮華も坐ろに懷かしく、時刻も折からなれば其所は極めて賑はしかるべし。佐太夫はいかに暮すやらむと駄菓子店を過ぎければ家の子を思ひ出し、一袋の菓子を買ひて、笑顏を見るを樂みに少し足を早むるほどに、漸く町は外れて田畝路に懸りぬ。

九月十六夜の月清みて磨きたるごとし。風爽かに度りて今新結の鬢に吹入り、湯あがりの溫肌を拭へる餘は、來過し群立の梢に鳴るなり。踏分る小徑の八重葎には、月影を宿せる露のきら〳〵と亂れたるが指頭に冷つき、蟲の千萬聲前後に音を爭ふなど、秋節の骨髓といふ處を我一人が物にして閑行のおもしろさ。一直線に見通しの木立一簇曇れる中に、一點星の燈火の影を我宿と眺めて、一屈曲雜木山の下なる細道を傳ひ行けば、月の位置變りて今まで見ぬ遠景色畫を展べたる如し。酒一滴なしに之を見遁す不風雅を我と無念がるばかり、世の氣樂なる人心になりて、幽憂も犯罪も忘れ果てゝ心意淸しく辿行くに、我履む下駄の音より外は爰に塵界の響なきに、後に當りて山の腹に落葉を拔足に履む音、其か！と身構へて怪と思ふ方に瞳を定むれど物の影なし。怯心の迷ひと心を息めて二足三足行きしが、また物音するやうに聞えければ立留り、少時四邊を見廻はせど目に入るものなし。されど胴騷き出して月も蟲も遠里の

景色もはや目には入らずなりて、直急ぎに足を早めて曲道の角、御用！と耳を貫ぬく聲に、骨散り肉飛ぶばかりなる不意の驚駭、衝れし如くたじ〳〵と二三尺身を退さり、體を搆ふる間もなく、大石の轉げるがごとく凄じき地響して山より飛來る大勢、物をも言はせず前後を圍みて、眼前に鐵砲の銃口を揃へ、身動きもせば只一射にせんずる有樣なり。宗兵衞左右を轉睨はして突立てば、捕吏の一人聲高く、御用なるぞ、抵抗ふか。　火遁陰形の術なくしては此中を脱るべきやうなしとや、宗兵衞覺悟したりけむ、躬ら手を回はして繩を懸けたまへといへば、二人の捕吏銃を棄てゝ取附き難なく捕縛してけり。危き器具や所持せむと懷中を調べ、袂を探るに菓子袋出ければ、捕吏輩思ひも懸けずこれは何事と呆るるに、宗兵衞は見てほろ〳〵と涙を流しぬ。この一滴に佐太夫は身を浮かすべし。

（三十一）

佐太夫の座敷には藝者牽頭まじりに客なきまゝの雜談、姦ましく相罵ひて興ずる所に、佐山顏色を變へてあたふたと關入り、今太夫樣へ南の番所から差紙がと喚けば、衆人聲を斂め、出懸し戯語も引籠み一座しらけてぞ見えける。佐太夫佐山を睨みて、噪がしや、遊女の身に連累はあり勝の事なり。其に物怖れして取亂すやうなる魂にて、何屋の誰とは全盛を唱はれ難し。其方も遠からず太夫とならむものを、我爲す所を一々見覺えて手本ともせよと言ひも果てざるに、樓主より人來りて樓下までと佐太夫を伴ひ行けば、殘れる衆人は興覺めながらつゐとも立かね、一團になりて連累の次第を推量問答の末、佐山にその子細はと聞けど一向知らぬことゝいふ。程なく佐太夫戻りければ、どうなされた始末と口を揃へて尋ぬれば、一同もかね〴〵贔負になりし宗兵衞樣、謀叛の大望あり

けるよしにて、此度其事露顯に及び、就縛になりけるより、馴染なれば此身にも嫌疑懸りての御詮議なり。明日は南の番所に出づべければ佐山春日野その用意せよと事も無氣にいへば、あるまじき不敵の言葉に皆呆れて聲も立てざりしが、一人の牽頭忠義顏に進み出で丶、太夫樣とも覺え難きお言葉かな。火坑海底より人の怖る丶番所へ、好むで引出されうとはいかなる御分別違ひぞや。一度其所へ行く時は生涯其不淨に穢る丶事とて、誰しも行かぬ算段する所なるを、緣起を祝ふ商賣柄にて、鶴龜鶴龜金輪奈落の底まで行くまじき塲所なり。其も政府の御威光にて理が非でも出ねば置かれぬといふならばいざ知らず、眞當人ならざる連累なれば、探偵吏に一兩摑ませなば一も二もなく唯々で埒の明くものを、御自身出たまふとなりては、第一に不淨の氣を受けて御全盛の光が銹び、第二にはいらざる事に莫大の御散財、往來の入費、借衣裳から總雜用ざつと算用りて三十兩、これより内にてはむづかし。御粹輿にも節はある

もの、このお催しはお廢止になされまし。大勢の料見はと回顧れば、その言葉に無理なし、此處は我等の言葉に從ひて思留まりたまへ。お聞の通り一同もあのやうに申せば、是非にお出掛は御無用になされませといへば、佐太夫首を掉て、皆が深切を無にするにはあらねど、思ふ子細もあれば此心を悛めじ。唯この上の賴みは、繁昌中を氣毒なれど、皆打揃うて美くしく我番所への送迎をして下され。身の不淨は其景氣にて拂はるべし。志は嬉しく受けましたれど言葉にはとても從はじといふ。一旦かうと言出したまひては、引かぬ氣性の太夫樣なれば、此上の御意見は無益として、さらば不淨除の隨行を華美にするがせめてもの寸志、と一同は坐を立ちけり。

(三十二)

さしては修飾はぬ風俗にて駕籠に乘り、休憩所は常盤橋外の柳屋なれば其所にて衣裳を更め、番所まで八文字の道中、廓の内を行くに異る事なし。襯衣より帶、裲襠、履物に至るまで、何にもあれ自身の物を用ひず、一切これを借りて濟ますは、番所の不淨氣を帶びて歸るを忌めばなり。簪は紋付の平打見る眼には立派なれど、廓の制規にては琴柱の簪を上格とすれど、素人を威さむにはと、此日は紋付の平打を光明のごとく挿翳たり。この一式の貸商は淺草三軒町にありて、品を借入るゝ時には附人柳屋までも出張り、此方にて衣裳明次第其を舁ぎて歸ること、當世の狂言の衣裳屋が素人に貸がごとし。衣裳一式の借賃最上等の品にて金六兩餘、頭上の飾金二兩二分より三兩までなり。茶屋、茶屋にて時刻の來るを待ち、やがて打出でむとする頃には、遊客の連累にて佐太夫南の番所へ召喚さ

るゝといふ事、江戸中に沙汰ひろまりければ、傾城の道中といふを見ぬもの、噂高き佐太夫の姿を見むといふもの、麗はしき夜の花を晝見て笑はゞやといふもの、十人十色の思ひ〳〵にて、四方より擧集れる老若男女數を知らず。柳屋の門より番所際まで二重三重に列なりて見物す。待設けたるは此處ぞと、佐太夫悠然として立出て、据腰強く身を反らせ、萌黄繻子に金銀の放駒の縫摸樣せる裲襠の裾を見事に捌き、きつと前向を凝視て瞬たきもせず、威を見せて自若として行く樣には、十分太夫の見識備りて見けり。見物の中に、商人にまれ武士にまれ、衣裳賤しからざるもの二人三人に、佐太夫道中の間に心ありげなる流眄をやれば、其夜客となりて來るか、少し日を置きて來るか、十人の內七人まではこの「一睨」に魂を蕩さずといふものなく、取止めて利潤になる客もあれば、この一日の入費三十兩は直に埋りて、その上わが顏は世間にいよ〳〵賣るる便宜となるに、多數の女郎目前の散財と度胸の小量とに身を縮め、番

所に出ることを厭ふはいかなる愚物と佐太夫心に嘲りぬ。前路に塞がる人數を掻分け掻分け、至短の道ながら時刻どり、身も疲れて大汗を流してやう〳〵番所に着けば、吟味役は池田播磨守、奥まりたる上座に威儀を正して席に即ける左右には、下役の面々おそろしげなる顏して居列び白洲には責道具を眼前に飾立て、兩側には人鬼とも見ゆる男四五人、袴の股立高く鐵造の毛脛を押曲げて控へたり。剛氣の佐太夫もはじめての場所なれば、怯ぢて胸騒ぐを此所に弱身を見せてはと押鎭め、白洲に座を取らむとして、胸より長やかに結下げたる蝦夷錦の帶の端を、右手に丁と敲きて片膝に敷き、右膝を立て身を反らせ、小役人には目も懸けず、播磨守の顏を流眄りて會釋も挨拶もせざりき。吟味の次第は弦左衞門と關繫の紛雜たる子細にはあらで、唯金子を貰ひたらむ、其は若干なるや、いかなる節に貰ひたるやなどの事なれば、佐太夫思ひけるは、弦左衞門我に難義の罹らむことを氣遣ひ、實事を白狀せずして、此身とは尋常の

客と女郎の間のやうにいひなしたるならむを、我より罪を求めて何をか白はむ。金錢などに於ても、貰ひし事ありといはゞ面倒なるべしと、何を訊問られても知らぬ覺えぬとばかりに多言せざれば、無罪放免？

（二十四）

霜月二十九日、忘れ難きは霜月二十九日但馬屋宗兵衛事田島弦左衛門は、無殘、無殘、無殘小塚原の霜と消えにき。力には剛くとも情には弱しと、躬らも云へりし佐太夫は、之を聞くと等しく愴惻骨を刺し、悲嘆腸を挘れば、咲誇りし花忽ち凋れて色香を失ふこと限なし。晝は人目を憚り、想に堪へかねての未練なる擧動を愼めど、夜は氣に染まぬ客と添臥の夢驚き易く、覺むれば懷舊の落涙やみかたなきに、幾度か枕紙を仕替へ、晝忍ぶ悲嘆を此時に放恣にして亡人を傷み、我身を悲み、世を詫び、天を怨み、百愁胸に沸騰りて一愁として慰むべきよしなきまゝ、ぢれて夜衣の衿に嚙みつき、身を悶えて枕を投げ、果は聲を立てゝ啼くに客の安眠を覺まし、何事と問はれて、羞かしや語るべきにあらねば、晝朋輩と口論して我に理あるものを、偏頗なる樓主口を添へて我を非理に陥した

るが、一生の口惜さとさらぬ事に言紛らせど、客は子細を知らねば、可笑しくもとやかくと慰め、何事も勤と辛抱したまへといふを機會に涙を拭ひ、あとは根もなき千話をしかくること、商賣とて草葉の陰なる人も見免したまふべけれど、一七日の中をもこの精進がならぬといふは、よくよく畜生に出來たるものよと彌果敢なし。

此までは兎毛ばかりもなかりし事ながら、此日頃の責色の可厭さ。人に物言ふも憂き身にして、日毎夜毎の客の數、この一々の機嫌を外さじと勉めむは、大石を負うて波に浮ばむとするにも似たり。されどこの一時の悲歎に行末の全盛を替へじと、思ひは思へど身は思ひのまゝには動かずして、數の客なれば隨分不勤もありけれど、宗兵衛の事より佐太夫は氣丈よ俠氣よとの名立ち、其に牽かれて來る客も多ければ、さしてはこの擧動を尤めざれば、新造鑓手が心遣ひ程の不繁昌はなかりき。凋れたる花の流石に散りもやらで二七日まで過ぎぬ。人目なき所に白木の位牌

を飾り、床間の花を摘みては手向るなど、飯事のやうなる佛いぢりに暮らして十六日目の夕暮、店口に佐太夫を尋ねて見えしは、年齢四十恰好の上品なる武家粧の女房。鼠小紋の下着に蒲色縮緬の小袖を重ね、紺のごろふくの帯して、手を引ける十二三の男子兄弟には、一樣に黑の紋付の羽織、仙臺平の袴、大小差させて、伴には下郎一人を連れたり。何處如何なる御方と尋ねさせけるに、直々にお目に懸らでは名乘り難しといふ。心當りはなきに怪しき事と思ひながら、名指にて來りしからは我に用ある女ならむ。まづ此方へと申せと新造を遣はしけるに、案內して座敷に伴ひしに、その二人の男子を見れば、心の迷ひか宗兵衛の幼稚を見るが如し。不思議にもあらず、希有にもあらず、いさゝかの思案にも及ばず合點したり。用事あらば喚ばんほどに、一同餘所へ行て暫時遊べと座敷のものを遠ざけ、座を下りて、この身が佐太夫と挨拶すれば、女房も禮を返して、餘義なき用事ゆゑに卒爾の推參、我事は田島弦左衛門が

女房、これは悴と紹介はすれば、その口上に連れて二人の兒は、しほらしくも一様に兩手を衝きて禮を施しぬ。

（三十五）

佐太夫二人の兒に擦寄り、お噂にはかね〴〵聞きつるがお見上げ申すは今が始めて。行末頼もしく賢こげに生長たまひけるよ。この姉は佐太夫とて父樣のお侍婢なれば、遠慮なう今宵は我儘をおほせられませ。遠きところをようこそ來たまひたれ、と兄弟の面貌を交代視て眼を數瞬き、遠き所を來たまひつる成績もなう、お父樣は……何處におはしますや御存じかと弟の背を撫づれば、弦次郎は見も馴れぬ佐太夫が補襠姿の目眩に呆れ、扇子の尾を啣へながらじろ〳〵流眄て返詞なければ、佐太夫重ねて、弦次郎樣には御存じなきやと問ふに顏を上げ、父樣お果てなされしゆゑ母樣とこの江戸に參りたりとの言葉に、母親は顏を背けぬ。承はればお二方ともに御幼少の頃、お父樣お國元を出たまひしとの事なるが、お兄樣はお父樣のお顏を少しは覺えさせたまふかといへば、弦介頭を掉

て、少しも記憶なし。さればこそお父様も焦れさせたまひて、今は道路にて遭ふとも識らぬばかりに生長ちたらむに、一目なりと見たきものと何かにつけて言出したまひけるが、如意ならぬを世のならひとて、月夜の影を逐ふ如く、お父様江戸におはす時にはお國に在りて、お國を出たまへば江戸におはさず、此上は逐ふことかなはぬ冥土の旅路。つひ此間まで、これ此疊の上にてお父様御酒を召上られ、何時も倚懸りたまひしはこの床柱……おゝそれ〳〵と茶棚より大湯呑を取出し、茶をなみ〳〵注ぎて二人の前に置き、菓子を紙に配分け、此湯呑の御紋は？といへば、二人とも聲を揃へて、やァ！母様家の御紋と引合うて茶を翻せば、佐太夫中に入りて、爭ひたまはずとも弦介様は兄様なれば了簡して弦次郎様よりまづ召上れ。これはお父様のお湯呑なれば、なか好くお二人して召上らば、お父様も御滿足のお歡喜といふ間に、弦次郎飲みてお兄様と差出せば、弦介受取りて、口を接くる前に推戴くを見るより、母親も佐太夫

も齒を嚙緊め、忍ぶに餘る淚を吾兒の手前愧かしと鼻拭むに紛らして、母親膝を進め、佐太夫どの、はる〴〵此方を尋ねました次第は如此ぞ、聞てたもれ。所天弦左衞門一大事の企圖ありしとの事も、それゆゑに世を忍ぶ命は風前の燈火より、安からぬ身上との事はなほ知るによしなく、只々この江戸に無事に勤められて、お上のお覺愈愛たき事とのみ想へば、我等家內一日も早く呼迎へられて、無恙再會を此上の慾にあらゆる神佛も祈盡し、今日は明日はと音信を待ちに待つ年月積りけるに、先月二十六日は朝より不吉なる事のみ續き、絕間なく胸騷ぎて物に驚けるごとし。遠國に人を待つ身は、さらぬだに物事を卜占にして我と心を驚かすものなれば、凶事あらむかと其ばかりの苦に此一日を暮して、夜の目はなほ合はず、近曙にとろ〳〵とまどろむ枕頭に、懷かしや弦左衞門殿の姿あり〳〵と顯はれ、一大事を企圖の段々より、此廓のまか〳〵の樓に佐太夫といへる遊女ありて、馴染薄きに義心强く、身に替へて我を世話し

くれたれど、非理の志は貫き難く、何月何日終に捕はれて、明日はいよいよ死罪と事極まりたれば、名殘を惜まむとて來りしなり。二人の兒は大事にかけよ、其方が身は草葉の陰より護らむ。爰に賴むべきは、われ亡後は佐太夫並に其方の生靈わが亡魂との三つを合はせ、三魂神社として祀りくれよ。思ふ事あれば佐太夫には一生所天を持つまじきやう傳へよ。かへすがへすも三魂神社の事は佐太夫とも相談してわが本願を遂げさせよ。もし此言葉に背きなば七生までの遺恨たるべし、とするすると進寄て二人の兒の寢顏を覗き、淚を落せしかと思へば、二人一時にわつと聲を立けるに、我も夢ならば覺めし心地して、起上りて行燈の火を搔立つるを見て、この子供等も目を開き今父樣がといふ。其日は朝より不思議ありて氣懸りずくめの折から、まざまざとせし夢に何の疑ひもなく旅立を急ぎ、今日着きて直樣此方を尋ねたりしも、吉原に龜和泉といへる樓のまさしくありとも知らず、また其樓に佐太夫といへる女のありとも

知らず、只夢知らせを心當に來て見れば、一々指すごとき不思議に身毛も彌立つばかりなり。かほどの執念を霽らさでは、成佛の障碍ともならむほどに、形ばかりなりとも三魂神社といふを建てゝ浮ばせたく、それゆゑの御相談にわざ〳〵此まで出向きましたと語れば、望む所と佐太夫も淺からず歡び、其夜は弦左衞門が生前の物語に更して三人を還しけるが、例のくるしき内證なれば是は僅少なれど佐太夫の寸志と、田島が遺族の前に出すべきほどの金子なければ、裲襠一枚引剝ぎ、手まはりの道具を添へ、翌日十五兩を調へてその旅宿まで屆け、萬事を指圖して日ならず千住のさる法華寺に三魂神社を建てけるより、母子は最早歸國と急ぎてせはしき訣別をまけるが、其より今に四十餘年生死を知らず音沙汰なし。

（三十六）

この玉手千人の枕に痿れて、夜毎の繁昌に更る客の數々、孰れか魂の位置動きて形までも崩れざるはなければ、悉本心の亂るゝ果は、無造作に身を滅し命を捨て、仇なる戀に犬死の奴多し。

田島弦左衛門全盛連なりし頃、土佐の「今山三郎」と遊女の口々に唱はれ、晝行けば家々の格子内に時ならぬ花の姿ならびて、その前渡を見物せざるものなく、一度見ては氣を遠くしく逢はむに心を惱まさゞるなく、此廓開闢以來の罪作、土佐藩士に小鈴木半之丞とて二十三歳の美男子あり。當世と人氣相違の往時は、「きぶき」、「苦味ばしりたる」、「凛々しき」などは女人の採用よろしからずして、おほくは人形を好きしものなり。それに伴れて色に遊ぶ男子も媚撫かしき扮装を専一として、一目に濡事師と見ゆべく勉めたりとかや。半之丞が鼠鳴して悦ばれし風俗は、黄八丈に五紋

の黒羽二重を重ね、白博多の帶に鮫鞘の大小おとし佩、額口より一寸巾に月代を剃上げ、厚鬢の下垂髱、大束の髷に薄紫の組糸を卷懸けて蝶々に結び、白天鵞絨緒の雪駄を鳴らして、欛の上に組手しながらゆらりゆらりと大門を入來る姿は、役者が花道を出でたる風情ありて、按摩の外に見ざるものなし。

一たび逢ふ女人は心より底より泥みて懷に忘られず、書信人橋矢のごとくまた〳〵の御見をと、今宵顏見ずば死ぬやうに哀れをいひ送れど、半之丞それらには眼も懸けず、われからも少しは凝りて足近きは、玉屋の白露大文字の花夕、この二人は擇りに擇りたる廓の名花にして、情仕懸の手管は勝負なき名譽上手の一對なれど、我よりする戀は七分の弱身ありて、部屋住の青二才に手もなく綾なされ、孰れも心火に身を焦して貢色を餘所に、この男一人の奪合ひに浮身を窶しぬ。

此沙汰一面に陰れなければ、その今山三郎といふはいかほど絕世の優男

なれば、あれほどの傾城二人を手玉に取る事か、と茶屋張の夕店前を過行く半之丞を見て微笑しければ、流石の太夫樣も迷ひたまひけるよ、と茶屋の女房新造等左右より弄懸れば、佐太夫頷き、まことに世に珍らしき美男なり。さりながら我賣色をして十餘年、男子に迷ふといふ事嘗て覺なく、噓にも情夫といふものなければ、百人の客を百人一樣に麁略なく勤むること、これを遊女の節操とやいふべき。生娘ならば知らず太夫ともあるべき身にして、人の所聞も羞かしく初心らしき事ならずや、二人揃うて顏に惚れ姿に迷ふとは。われ容姿は白露殿花夕殿に及ばむ事遠けれど、あれしきの若衆あがりを手に入れむはいと易き事をと哂へば、茶屋の女房利かぬ氣の女とて、佐太夫の廣言を其儘に措かせず、太夫樣なればさもあるべき事なり。私取持ちまして今山三樣を太夫樣方までさし上げますほどに、美事引留め引弄ぎて土俵外へ投出したまふや。くどい事と答へてかの談話は其まゝに消えけるが、二日經ちて小鈴木半之丞

佐太夫を指名にて登樓りけるに、これはと思懸なき折から、かの女房より約束通り今山三樣を上げたれば、其方樣にも誓文空言はない道理、今は一刻も早くお手際が見たしとの手紙逐かけて來りぬ。

（三十七）

小鈴木半之丞美貌に生れたるは其身の德か、行く所として女人の中に持囃され、色餓鬼若年のおもしろ味之に上越すものなく、德過ぎて身の損となり、放埒無賴に身を持崩し、父親亡せて女親一人と侮り、幾十度の意見に改心の色なく、亂行日々に募れる趣薄々上役の耳を駭かし、または家中の譏り草ともなりけり。

亡父が貯はへたる金子も九分摑出しけるより、母親僅少の殘金を藏して見せざれば、衣類大小手に當るにまかせて持出し、揚句は百方を借盡くす不行蹟に、母親はあるにもあられず日夜の憂慮に身を裂なまれ、いちじるしく毛髮に霜を置添へ、額は皺に刻まれ、頰は骨に貫かれ、乾く間なき涙に眼際紅爛の淺ましき姿も、半之丞家に尻の落着く時なければ能も見ざるかして、露ばかりも之を苦にする氣色見えず、たま〳〵戻るか

と見れば微醉の、醒るかと見れば影なし。まことに其の心中には主なく、母なく、武士なく、家なく、我もなければ世間もなく、只此一箇に萬事を見替へたる、佐太夫の面影のみ濃く染附きて裏面に透り、義理の水も分別の汁もこれを洗去るの驗なし。三日三夜續けて歸らぬ夜の女親の物思ひ、人間我子のごとく性根亂れては、再び眞人間に回復り難し。色狂の資本を仕送りの果、此家の壁落ち柱傾かむは、憎けれど心は可愛き子ゆゑなれば厭ふべきにもあらねど、半之丞が不埒かく日増に劇しくては、主君のお咎を急くに等しく、家督の不行蹟なれば小鈴木の家名爰に斷絕せむこと、實子の科にあれば我とても罪は同じく、御先祖への謝罪立ねば、未來にて所夫に合さむ顏なし。我子なれど此家の大敵、口を酸くし、舌を爛らし、落涙には血をまぜて、幾度の異見も聞ねこそ是非なけれと、女人なれど年老なれど武家氣質の義に強く、三代忠實の家臣と賴む藤藏を呼び寄、つぶさに腹中を語りて、とても生かし置くべき半之丞ならね

ば、明夜は闇を幸ひ吉原へ行きて人無き所に誘出し、斬て捨てよと聲を絞れば、藤藏あつとばかり魂消て目瞬もせず其顏を視入れば、半之丞の母ははら〳〵と涙を流し、其方が聞だにさほどの驚駭なれば、親の身の斷腸は推せよかし。天にも地にも唯一粒の愛兒なれど、この家には替難く、義理には人情を曲ねばならぬ世間なり。子を殺さむは無慈悲に似たれど家の爲なり、臣として主を討たむは不忠に似たる大忠義なり。藤藏きつと賴みましたぞといへば、身を退りて疊に額をすり附け、お家のお爲を思うて勇剛なる御分別はさる事ながら、餘りと申せば御無慈悲過ぎて若旦那樣がお傷はしや。今のお年輩にして御獨身には、誰しも有內の廓通ひ、人の娘をそゝのかすか、夫ある女を汚すかなどならば、不埒とも亂行とも申すべけれど、若き時代から一時の色遊は、此方樣のお口から斬るの殺すのと、さまでに御折檻の罪にもあらねば、これまで御勸辨の次手に今一度御勸辨あらば、藤藏命に替まして御諫言申せし上、なほ

もお行狀復らずば異議なくお言葉に從ふべければ、此度ばかりは平に平にと、我身の罪を詫ぶるごとく眞實面色に顯はれぬ。母親いかな聽かず、今に始めぬ其方が主思ひのその申分は忝さぞ。我とても一人の子を何好みて殺さんや、只この家が大事なればなり。勘辨も異見も爲飽きたれば、一太刀こそ此上の手段なれ。半之丞は早我子と思はぬからは、其方も構へて主從とな思ひそ。小鈴木家の大敵を討てくれよと頼むに、其方は聞ぬか、女人と侮りて主命を背くか、斬れ、斬れ、見事に斬て此の家再興の忠臣になりやれと、長持の中より刀箱を取出し、蓋を開きて藤藏忘れはすまじと差附くるを、おづ〳〵面を上げて見れば、半之進殿の佩料はと、家中の腕立者に唾を飲ませし無銘備前の業物なり。藤藏はつと頭を下げ、少時は不覺の涙に暮れけるに、主婦は曇れる聲を勵まし、この刀にて斬捨てなば、半之進殿手打にしたまふに同じく、其方が刃先に主人なし。わづかの恩愛に絆されて仕損じなば、小鈴木の家は其方が潰

すに當るぞ、この刀にも鈍刀の名を負はすぞ。さ、さ、早行け〳〵。行かぬか。はつ。行かぬか、未……練……者！

（三十八）

白露花夕の手管は未熟なりけるか、半之丞佐太夫に懸りてより弗と餘所の垣を覗かず、唯この色香に浮れければ、廓雀の今山三が行衞はと、誰眼を配らぬものなき男子の、ちか頃佐太夫方へ通詰との沙汰は忽ち弘まり、客も遊女も鳴らせる同志、これこそ面白き一對と見物にして、昨夜の口說今朝の和合——二人の擧動は巨細洩れて、餘所の酒席の語草ともなりぬる次手に、ふと誰やら言初めて、佐太夫最初の廣言には似ず、なるほど今山三を我物にはしたれど、萬更木佛を抱く心持はせず、自分からも陷りて待不來の明夜は、心からの悋氣に山樣當惑せし始末を、確に見たりとの言葉より浮名立ちて、佐太夫翫弄るゝを憂き事に思へど、苦肉の計畧は此所ぞと、囃さるゝまゝになりて顏を顰めねば、半之丞いよいよ魂を蕩かして家の不首尾を重ねぬ。

一夜遊客立込みて、佐太夫身體二つありても足らざる多忙中を潜り、一寸部屋に來て見れば、半之丞一人殘されて寂しげなり。とても今宵はゆるりと話す間もなけれど、明日一日は歸さぬお身なれば、たまには巢守も良藥なり。待身の可愁をよく〱味ひたまひて、此後我にもかうした憂目は見せたまふな。夜更けなばまた參らむほどに、それまで宵內其所等家外の景氣を、一周見物して歸られよ。此所に一人おきては大事の男を鼠に引かれむも氣遣はしやといへば、半之丞笑ひながら起立り、衣桁に懸けたる我小袖を指ざし、其をと帶を解けば、佐太夫簞笥より仕立おろしの我部屋衣を出して、其を着たまはゞ故鄕遽に戀しくなりたまひて、大門を脫けばなしに五六日迷子にならむは必定なり。其手は〱と、周圍は緋山繭に、雪折笹の飛摸樣ある黑縮緬の胴拔を被せ、紫鹿子の上帶を前結にして、此上は何所なりと勝手な所へ失せたまへと引出されて、其姿往來に氣耻かしながら、心中は此男が佐太夫の命のぬし、虛誕なら

ぬ看板は御覽の風俗と鼻高く、廓中隈なく散歩きして、二三十人はたしかに刀物なしに殺生せし氣は、揚々として馴染の茶屋に一服と飛入れば、家內異口同音に、似合ひました濡事の開山と喚くを、うるさしといふ顏に聞流し、太夫に逐出されて少時遠謫の身の景氣直しと、絃音に笑聲を交ておもしろき酒事に夜を更しぬれば、もはや太夫の待頃と、歸際の一言に散々打たれ抓られて此家を出でしが、醉を吹く風は末社どもの追從より、時にとりて心を浮かせ、ふら〳〵と大門を出づれば、闇夜ながら見知れる田圃の景色は薄隈に現れ、土手を急ぐ駕籠の火影見えつ滅えつ、今まで亂騷ぎに逆上せて重かりし頭に、風吹拔きて中なる塵芥を浚ふごとく覺ゆる心快に、また一足と進み二足と進み、土手の半まで來懸る後面より、御免と聲を懸けて、見向せもせず左の肩頭より、ばらりづんと浴びせし一太刀に、狼籍と叫ぶ力もなくよろめく所を、また一太刀さくりと腰車を薙がれ、半之丞仰天に仆れ、雙拳を握りて呼吸は絕えけり。

曲者は留を刺して刀の血汐を拭ひ、大地に跪きて幾度か死骸を拜し、不忠不義の謝罪は即刻あの世にてと、佛名唱へながら立去りたり。

夜明近きに半之丞戻らざるを佐太夫氣遣ひて、雛鬟を茶屋に走らせ、もし此方にもやと尋ねさせければ、八時頃歸りたまひしがとの返事に眉を顰め、此上は手配して尋ねむと騷立つ折しも、往來に人足繁く、土手の人殺といふ聲に膽を冷し、男を遣はして見せけるに、無殘や半之丞腰と肩と二ヶ所の深手に仆れけるを、早歸の武士などの所業とかいひ傳ふるは、この男あるゆゑに佐太夫我を振りたり、我を突出したりとさらぬ遺憾を被せて、手足の指を一つ殘さず根元より斷落し、剩へ面部に土足の痕あり、腹を突壞れる疵あり。目もあてられぬ弄殺は大勢の惡戲なるべし。二太刀に斬殺せしは家臣の藤藏、謝罪なしとて其曉一通を遺し、わが部屋にて腹搔切つて果てけるよし、數日を經て噂ありけるが、淺ましきが上に淺ましきは半之丞なり。明夜より一時廓に唱ひし歌は、容姿よ

いとて謙退ぶるな、土佐の小鈴木の末を見よ。

（三十九）

よしや敵百人の怨恨は結ぶとも、味方一人の反眼には替難し。世間は我一人對手一人ならざれば、味方同勢の心を攬らずしては、十百萬の大軍に當るべきにあらず。就中遊女の身に其廓の牽頭は獅子身中の蟲のごとく、生死は其口頭一つに在りとて之を怖れざるものなし。遊客の身體を縱橫に操りまはして、我思ふ遊女へ持運ぶこと人形を舞すより易ければ、大事なる客一人二人は棄てゝも、葉ぶりよき牽頭の心を傷ねざるを、其身繁昌の一つの秘傳とするなり。

高村玄養といへば名に高き有德の茶坊主、多財に任せての散財、餘所に見る人の心を冷つかせて、此頃佐太夫が隨一の客は是なり。藤巴といへる引手茶屋の二階に藝者牽頭打混ぜ、玄養朋輩の茶坊主と同勢六七人花札の賭博みしけるに、運敗の牽頭丹孝紙入を振ひて、損料屋の書き出し

二三本ばらりと落し、いよ／＼一坐の物笑になりて無念の血眼、今一と勝負に會稽山の恥辱をと瘦腕をまくりて力めど、軍用なき身は手出もならず、默然として二三番を見過せしが、其興味と失敗の遺憾に堪がたき容躰なりしが、つと起て下へ行き、また一二番濟むまでも來らざれば、瘦我慢の丹孝將軍旗を捲て間道から一騎落かと、大笑の眞唯中に猛然と現はれ、思知れやと血相變て懸りしが、少時の勝負に又負の綱と囃されて、折角切來し鬼の腕をまた攫はれぬ。

急の御用あれば一寸の御歸宅と宅よりの人に、玄養駕籠よ支度と騷ぎ、丹孝腰の物をといはれ、南無三！運の盡と驚きしが、太夫樣にお預け申して置きましたと、當坐遁の口上圖に當りて、先を急く玄養は唯々とばかり頷きて茶屋を出ければ、丹孝胸を撫でゝ、壽命三年ばかりも短めたり。かうしては居られぬ急場と、馳出でむとする顏色の非常を怪しみ、何事を仕出來したるぞと衆の尋ぬるにも應へず、一散に龜和泉へ驅込み、

佐太夫の坐敷に飛入りて、丹孝が一世の浮沈一代の難儀、お慈悲に好智畧貸して當坐を濟くはせたまへと兩手を合はせ、疊に領伏し、お慈悲お慈悲と泣聲になれば、佐太夫その思逼れる樣子に驚き、つひにない何事ぞ。申すも面目なき次第なれど、額を叩き、實は只今藤巴にて高村樣御一座にわれ等交り、花札を致せし所いかなる悪日か一番の勝もなく、見る間に輕少なる持合を奇麗に吸取られ、其儘に思斷りて手を引かれぬが勝負事の弊とて、口惜紛にと小聲になり、高村樣お預の例の黄金製の腰物を質屋に投籠み、金十五兩借りて其をも悉皆拂きたり。素よりどかと勝つ心算なればこそ、後ともいはれぬ旦那のお品を曲げたれ、またも負と知らば何程無念にても口惜くても、かゝる前面見ずはすまじかりしを。旦那お宅よりお迎見えて一寸御歸宅といふ際に、丹孝腰の物とおほせられし時は、早腰も拔けるばかり驚きたれど、いふにいはれぬ始末なれば一寸遁れに、此方樣がお預りのやうに申したれば、今にも旦那お戻りな

されなば宜樣にお周旋下されて、丹孝が扶持離れの大厄を逃れむこと、太夫樣のお慈悲ばかりを身の依賴と、凋れ返りての言葉に、佐太夫牽頭を流眄に見やり、以後は隨分愼みて勝負事は廢めたまへ。客の對手とならば何も業務餘儀なけれど、調子に乘りて身錢を絞り、難儀を思はぬなどゝは未熟のことなりと、好加減に懲して逐歸しぬ。

即夜玄養來りて脇差の事をいひ出しければ、羞かしながら當坐の無錢に質入して十五兩調へたり、堪忍したまへといへば、玄養苦笑ひして、然るさもしき事せずとも、これ〳〵入用なりと直に我に語らば、それしきは何時にても用立べきものを、是にて取戻せと小判を摑み出せば、席に居合せし丹孝飛附いて、拙者お使者にと一目散に驅出しけり。丹孝此禮との心にて大身三人まで引いて來て、佐太夫が身の膏血の客としけるとかや。

（四十）

阿部伊勢守家來にて高坂時雄といへる兎唇の武人、黄金は懐中に唸るほど持ちながら、堤の切れたる上唇の空隙より前齒三枚、露出せる顏の喰附くべく見ゆれば、何所に行くも可厭られて、一度逢ひしもの多は二度目を斷り、御威光の物が欲しさに三度四度を忍ぶものは、身内の梅毒に惱む如く、嬉しからぬ顏をゑながらも介抱をするなり。

如此ても此道は面白きか、好色の念彌〻堤しく、此所彼所と狂轉はりて佐太夫に打當りけるに、例の氣性の女子なれば、手一盃に浮せて上せて迷はせ、散々に陷められて筋骨ぐにや〳〵となり、性根もなく通ひければ、此までに大分減りし有金全盡き、衣類持物に贅澤を極めたりし男が、いかにも麁末なる大小佩して來るほどになりぬ。最早長くはあらざるよと見る間に、約束の夜の來ざりければ、まさに油盡きて車は止りたり。

當人が勝手に迷ひて勝手に破滅する事ゆゑ、もとより此方の知る事ならねど、一時大盡と仰がれし威勢は生神の如くにして、編笠紙衣被ねばかりの風俗になりても、煩惱色慾は今を愧ぢず、往時の意にて通ひ來る客の、末路を見るほど可厭なるはなし。兎唇殿殊勝にもあれほどの繋思を斷ちける歟、武士！と昨日話せし今宵また〳〵來りぬ。

新造ども色香なき挨拶して、小陰に入れば顏を顰め、居間の隅に蒂を立て、呼べば生返詞して尻重げに起つなど、一々氣に障る事のみ。時雄之れを見ての所感、十人切百人切の無法も、氣逸者は隨分志かねまじき理なれども、我に於てはかの本尊の太夫此身を不便がりて、眞實を盡すてと往時一倍なれば、其に免じて腹も立たゝねど、かほどに迷はでは武士やめて乞食にはなり難し。

座敷にて酒事の間は浮ぬとも見えざりしが、閨房に入るより、太き吐息を泄しては佐太夫の顏をじつと凝視め、幾度も同じ擧動を繰返せば、佐

太夫怪みて、心得難き御容子かな、深き物思に惱ませたまふと見えたり。推秘したまふは水臭し、兼てのお言葉に詐欺なくば、倶々に苦勞して此方樣ゆゑ痩せて弄られなば、此身の本望と持たすれば、時雄ぞく〳〵と寄添ひ、我から語るまでもなく、かく姿の此頃淺ましく成果てたるを見ても樣子は知らるべし。家中にては餘裕ありといはれし高坂の內證も、從來の我念入の放蕩に大穴放下て、なほ義理惡き借財の返濟覺束なきに、之には何より面皮を缺きて武士道の廢棄となるなり。さりとて徃時に還る便宜なき身は、死なむより外なし。いひ交せし言葉が反古ならずば賴むといひながら、蒲團の下より窃に持參したる白鞘の九寸五分を取出し、倶死にと眼を据ゑて佐太夫を睨めば、大方かうした事と覺悟ゐたりし女は、更らに動ずる色を見せず。身をなほ擦寄せ、其お願望はいと易けれど、死なむ事は何時にても死なるべし。散財過から思逼りて情死とは、近頃意氣地なき擧動と、大事の命を二個まで亡くしながら、死後の笑れ

草とならむを、餘りに無念とは覺さずや。尙又佐太夫をいかに不束なる女人と、見下げたまひての今の御言かは知らねど、借財ゆゑに死たまふお身の隨行は不足なり。添ふに添はれず、離るに離られず、扨は未來の夫婦を賴みに心中との事ならば、喜びても果つべし、願ふても死ぬべし。其にしてもいよ〳〵此世にて添はれぬ結極まで往きても見ず、誰が何といふゆゑ死たや、何が何したゆゑ死にましよと、思ひたまへ、人間一人につき命は一箇宛の規定ぞかし。

（四十一）

さりながらいかにしても此世は面白からず、此佐太夫をも可厭とあらば是非なき事なれど、若乃人目なき里に身を忍ばし、しだらなき水仕業も我ゆゑかと、辛抱したまふほどのお心あらば、我も其氣にて此樓を出奔すべし。出奔しても此方樣と添ふべし。可厭か、お可厭か、死たまふか、無分別なと白鞘を強奪て、可愛人を旣の事と疊に打附け、時雄の膝上に身を載懸けて、制規嚴しき中を脫出しても、添はむといふ此眞實が知れぬか、屆かぬかと作聲をして怨ずれば、望外の喜悦に時雄は心を跳らせ、佐太夫を抱〆めながら、神以て此方輩の女房ともなり給はむとならば、百萬年も長命したくこそあれ、何を思出に死を急ぐべきや。

さらば死なむ事は思止まり、明夜誰にても入魂の人に萬事を含ませ、初會にして我方へ遣はしたまはゞ、其人に連られて遁出すべし。さる事を

頼みたまふ男ありやといへば、時雄疑念の充てる眼色にて佐太夫を流眄り、甘々と此場を欺き、一盃陥むとの計略ならむも知れず、まづ試驗にと捨たる白鞘を取上げ、變易き女子心、明日となりていかやうなる料見にならむも測られねば、さる憂慮なしに今宵死出三途の同伴頼むと、脱放ちて胸部に閃かせば、佐太夫其手に縋り、かほどに申すも御疑念は霽れぬと見えました。申すは可笑けれど佐太夫とて、妻に妾にといふ客の三人四人、なきにもあらぬ身にして此樓を脱出し、いはゞ今は貧に魅入れたまひし此方樣と女夫になりて、苦勞難義に窶れむことを思はゞ、なかなか死るは可恐らず。我身は兎も角も此方樣を思へばこそ、生延びて添はむとも申せ、其れがお氣に入らずして、死ね――死なむとならばお言葉にまかすべし。さりながら何日は歯を染めまして素人名を呼ばれ、手づから調菜して御膳を上げて見たらばと、思ひに思ひし念願も口惜や水泡となる事かと、面を掩ふてさめ〴〵と泣けば、拔刀を鞘に斂めて、

其心を見るからは何とて殺さるべき。明夜は心利きたる男を遣はさむほどに、必ず用意して待て居よ、泣くな泣くな泣くなと、飽くまでのろくなりて女人の背を撫づれば、佐太夫なほ曇聲にて、眞實お心を飜へしたまひ、女房に持ちて行末長くいとしがつてたまはるか。嬉しや、一念といふものは巖をも透すといへり。前祝に一盃過したまへ、と躬ら膳拵えして侑めければ、時雄は今宵を極樂世界と、恐悦に面想の崩るゝを覺えず、喰醉ひて朝まで一息に就眠て、臨歸に萬事を打合はせ、其夜を契りて戻りぬ。佐太夫送出せし足を回して樓主に赴き、密談あればと衆を拂はせ、扨今歸せし兎唇の高坂事、漸く身の逼迫となれる苦し紛れに、昨夜は短刀を突附け、心中せよと血相變への強談、我ゆゑ身代果せし男子の申分を一々立てなば、此廓の女郎一夜の中に種切となるべし。愚味漢！否といふ氣色を見せなば、首筋捉へても刺しかねまじき見脈なれば、今宵此樓を脱出さむと口頭に轉がし、油斷さして一先は還したれど、名代の

邪推深にして蛇の如き執念ものなれば、此まゝ詐欺放しにして置かば、此後什麽な無法を仕懸けむも知れず。其後難の根を絶ち、二百兩はたしかに握つて歸る目算もあれば、少時この籠の鳥を放遣りたまはぬか。佐太夫の根性は大略見貫て知りたまふらむ、預物の千金の身を遁げ隱れして、此方に迷惑を懸けても素人になり濟さむなどゝ、さる卑怯に生れたる佐太夫ならず。神術のこの工夫に同意はしたまはぬかと吹籠めば、樓主思案にも及ばず頷きて、尋常の太夫ならば千兩箱三つ背負ふて、明日の朝戻るといふとも承引きがたき一大事なれど、對手が此方なれば異儀なし、見事にやつて退けて此上の技倆を見せたまへ。さりながら、之は苦肉の大手管とて、我も一味の上に力を盡すとはいひながら、抱女郎を大門の外へ手放し、二月三月と捨置む事は公然に許しかたければ、此方が情人抔ありて出奔し、其後にても八方へ手配して隨分手落なく詮義するやうに擬し、家の奉公人の前を繕ひて、此事この二人の外には洩らさ

むこと無用たるべし。　さほどに此方が味方したまふからは、憚るものなく恐るゝものなく、首尾よく仕遂げてお目に懸けむ。落着所は明日にもお知らせまをさむほどに、呉々も御心配なされな。　承知、承知。今宵人知れず裏の切戸の錠を外し、刎橋も一推に架るやう仕て置くべし。隨分首尾よく。　合點と囁合ひて別れけるが、佐太夫は新造雛鬘の眼を忍びて手荷物を拵へ、日暮を待けるほどに、やがて初會の客揚りたれば此男こそと胸轟きて、頻に床の急がるゝも可笑。　樓主も承知の上の出奔、其身は狂言の所作事、いはゞ兒戯をするにさへ、かばかり心の穩まらざれば、想ふに、人目を掠めて惡事を働く男女の膽はどれほどかと恐ろし。閨房に入るより早くかの客狀一通を取出だし、委細は此中に。　私は高坂樣へお出入の道具屋と名乘りければ、此度は手數懸る段を厚く勞ひ、此ものを案内に夜更を待ちて吉原を逐電。

（四十二）

佐太夫少時の責色の間に、色に陷め手管に懸け、誰樣は大身上の家を傾け、某樣は身の所措なさに縊れたりなどゝ噂に聞きて、氣毒な我ゆゑかと思ひはすれど、目前其形狀を見にあらねば、心に障る事は、風少し騷て戶障子の鳴がごときものなり。其生ながら貧窶不義理に責ぬかれ、やがて仆るゝまでの模樣に眼を曝させなば、いかなすれからしの女郎も、自身の惡業の心注きて身毛を彌立て、中にも胸狹きは逆上して即座に果もすべし。

佐太夫時雄の居宅に連られけるが、門口の搆造など一際にて由緒あり氣に見られ、いふがごとき家內の貧困は、外部に少も其氣を徹さゞれば、もしや我欺かれけるにや？さらば一層おもしろしと、佇みながら四邊を回顧す中、かの道具屋が咳拂を合圖に手燭の火影射して、久助殿か首尾

は什麼、旦那樣お待兼と門戸明けしは從僕の文七なり。年輩五十路に近く、瘠肉にして丈長く、色赭黑く皺多く、眼上に瘤あり。篤實の氣象眼中に溢れ、音調武骨に堀立のまゝなり。佐太夫を見るより恭しく腰を屈め、かゝる深夜によう こそと足元に手燭を見せながら、此方へと案内して玄關を入れば、佐太夫かと闇中なる一聲に驚かせしは、奧に落着かずして時雄が歡迎に出たるなり。手を執り導かれて居間に通りけるに、是はそも什麼、人間の住家か鼠の巢なり。唯大いなる鼠の巢なり！疊は緣斷れ表剝げ、襖は紙破れ骨折れ、秋の末の夜はやゝ寒しといふに、火鉢火桶やうのものはなく、竹箍の鉢巻せる古摺鉢に粉炭を熾し、雜煮箸を灰に突挿たる始末、是一ツにて全豹を思ふべし。明放せし戶棚の中を覗けば、荷物と思はしきもの何一箇見えずして、炭器、燗德利、皿小鉢、束菜、飯櫃等一隅に塊まりて、外はからりと明たり。佐太夫ひたと呆れ顏にてきよろ〳〵と四顧せば、時雄手近なる煤行燈の心を搔立てながら、

太夫此容體は什麼ぞや、君が一夜の情に此有樣、愛想盡かさば未練ながら怨恨に思ふぞ。伊達に見すべきものならねど、文七と從僕を呼び、二人が此姿を見たまへ、かくても武士か、阿部伊勢守は頼もしき御家來を持たまひけるよと、佐太夫を見、文七を見、自身を見て濶るれば、文七俯せし面を擡げ、御未練なり、そのお言葉はかゝらぬ前にこそあるべきを、今と相成て益もなき御繰言なれ。眞實ありて渡らせられたる太夫樣に怨恨がましく聞こえて、其篤志に背くに似たり。命を捨てても捨てかぬる遊女と、かねてのお言葉もあるに、主從淺ましき姿如きにて事濟み、かく太夫樣の御自由になるは願ふてもなき事、芥子粒ほどの御不足も得言ひたまはぬ理なりと宥むれば、時雄も滿足の顏色にて、其方には是まで一方ならぬ苦勞を懸たれば、明日よりは報恩に二人して大事に懸るぞ、と二人の物語の傍に佐太夫默然と坐りて、一家瓦解の有樣、主從困阨の始末を視て、是悉我口頭の惡戲か、迷はせば、迷はすもの、迷へば又迷

ふもの、虎皮より緋縮緬とや。女色の可恐を我ながら呆れぬ。

(四十三)

百姓町人の家にしても遊女風情の嫚娜せむは、世間の手前愧づべき事なり。弓馬の家中には八幡大菩薩の宿らせたまふに、と藩士の擯斥、主君の勘氣を畏るれば、晝間は空長持を佐太夫の坐敷として、闇中に人目を忍ぶ愁苦は、罪なくして配所の住居、眺めむ月もなければ花もなく、拵へ事の戀に身を惱まし、前髪に蛛巣を懸られ、手枕の傍に竈馬に啼立られ、物も言はず身も動かさず、陰事は幼稚時の遊戯、大人になりては一向に興なきものと心中に呟き、壽命の短む思ひを忍びてやうやく二日を過ごしぬ。此間日々食事を剝膳にて据ゑられしが、訝かしきは此貧家に似はぬ調菜なり。朝晩は味噌に澤庵、午飯は燒麩の汁ともあるべきを、刺身口取燒肴など、品類を變て心を籠けり。給仕は從僕の文七なれば、此一事腑に落ずと尋けるに、文七頭を搔き、申すは事がましけれど、拙者め

の寸志、ちと過ぎたる御放埓より、黄金裝の大小をも佩せたまひし旦那樣が、雜炊啜らぬまで羽尾打枯らしたまひしも御不便なれど、其をだに棄てたまはず、廓に在らば綾錦の夜具に玉の枕とやらむの此方樣が、かかる犬小屋に下りても旦那樣に冊かむとのお心が嬉しさに、美食のお口には豆腐梅干は石瓦を嚙むより可愁らむかと、餘閑を偸みて、手內職に貯へしわづかの錢も、薪醬油代に拂ひてなほ殘れるを掻集め、三度の菜を調へて進ずるなり。かく立入ての始末をお聞かせ申しなば、人間の肉を喫ふ心地したまひて、一箸も着たまはじと思へば、何所までも深く裹了せむと存ぜしに、お訊問に預りて下司のさもしくも腸を吐きたり。此御苦勞も此所少時、御家中に有德なる伯父御樣おはせば、不遠何とか始末を附けて下さるべければ、やがてぞ高坂の奥樣、安樂なるお身上ともならむを樂みに、此文七が寸志に免じて長持地獄の苦艱を忍びたまへ。此頃は三度の食も、腹膨るゝほどはならざる次第なれど、此方樣お入來

ありしより、旦那様の御機嫌優れて麗はしく、お身を御謹直に嗜まれ、其方はいかばかりか憂も迷惑にもあらむは氣毒なれど、我は此の上乞食になりても苦しからぬぞと、御本望のお顏をだに見ば、文七も乞食にならむことを厭はずと申せしに、辛抱してくれと涙を流したまひし、無二主從の心を汲みたまひて、必ず旦那樣を棄てたまふなと、杓子持つ手を震はせ、佐太夫を見てはら／＼と落涙しけるに、かばかりの至誠の一念佐太夫の胸を抉りて膓を掻撈り、かく佛のやうなる男を欺き、今にも二百雨攫つて古巣へ飛還る事かと思へば、其後の時雄が思、文七の心は、天裂地崩るばかり惱亂して、その怨念我身の皮を喰裂き、骨までも嚙碎かでやと坐に物怖しく、または文七が至情に融され、持來りたる小包の中より紙入を出して、此中に些少の金子あれば、此後は之にて調へたまへといふを、文七は無用といふ。佐太夫は取れといふ。取れ取らぬに聲高く爭ふ其中に、ぬつと入來れるは時雄の伯父なるに、文七不意を撃た

れて是はとばかり、面色土の如くわな／＼胴震して佇めば、伯父は罪ありげに二人を睨め、文七、此ものが佐太夫か。其方が佐太夫かといへば、佐太夫長持を匐出で、慇懃に手を支へて、時様とは淺からぬ契約の佐太夫と初々しき聲作。此方は時雄の伯父と其處に坐りて名るとも知らず、時雄周章て歸來り、驀地に坐敷に飛入れば、南無三、伯父君！合すべき顏なしと、引還して遁る刀の鐺を伯父に捉られ、何とも所爲なきまゝ物をも言はず平伏すれば、伯父は屹と容を改め、散々遣果せし揚句は、遊女を根引すべき金子のあるべき樣なし。この女をいかにせしぞと詰れば、年明の身の置所なしとて、一昨夜便りて參りしを、馴染の顏とて菅なくも逐返し難く、留置たる不埒の段は偏に御容しと詫入れば、佐太夫も言葉を合はせ、年明からは放鳥の、誰關繋のものなければ、賣色上のやくざものとお厭忌だになくば、人一人の命を助くると思召したまひて、一生御奉公申上げたき心願を協へたまへ。いま時樣に棄てられましては、

古郷の京の雨親は死斷えて緣者もなく、この江戸には猶更縋るべき家なければ明日よりは路頭に迷はむほどにと、凋入りて哀れげに訴へければ、伯父も時雄が此女ゆゑに、身を持崩したりとかねて知れば、さまでに思ふ女なれば、冊せて放埓を愼ませむか。其にしても此女の氣性は如何あらむ、取るも捨るも其次第と注目しけるに、佐太夫胸に一物あれば、萬事を内端に見せかけ、言葉の首尾に實意を籠めて其心を眩ましける上、昨日今日の顚末を伯父は文七に尋ければ、二日半日長持の芥塵に塗れて屈する色なく、唯家内の光景を見は勿躰なや我ゆゑの御零落かと、いと續ては涙ぐみたまふしほらしさと、正直一圖の心に唾液涙の愁嘆を眞に受て、感ぜしまゝを有躰に答へければ、伯父も心迷ひて、冠く玉藻は簪なりけり。

（四十四）

伯父をも睨着たりと見るより、立兵庫の大髷を引き拔き、家暮なる圓髷に結ひ、大事に拔揃へたる眉毛も手管の邪魔物と惜氣なく剃落し、緋鹿子の襷懸に縮緬の袖を括り、錆庖丁に大根を切り、釜を洗ひ、糠味噌を掻廻はし、坐敷椽板の拭掃除に片時身の休息を見せず、山出の如く色氣を捨てゝ立働らきければ、時雄は身悶えして氣の毒がり、文七はあるにもあられず勿躰ながり、伯父はまた小首を傾け、遊女の果と鯛の腐敗たるばかりは、何にもなるまじく思籠みたるに、此れはそもお竹大日如來などの御化身にや、世に有難き女人なり。責色餘といふばかりが愧かしけれど、得難くも天晴なる花嫁と、意見すべき伯父が音頭取になりて惚て懸かれば、佐太夫肩身廣く家一杯に巾のなるべきを控へて、なほ一家内の氣を損ぜぬやうに三指好の伯父には三指ずくめに仕向け、貞節仕懸

にしていよ〳〵時雄を上ぼせ、文七は長持の往時忘れざる實意三昧に綾なし、唯其身をいとをしがられぬるやうにと巧みし大手練圖に當り、內內は立派なる奧樣に成濟まして、大願十が七までの成就、二百兩はたしかに天井にぞ釣下りて見えける。

一夜時雄との寐物語りに、ふとせし事より相互に眞實の有無を言募りて、縱令いかほど口頭にておほせらるゝとも、此方樣の御眞實には是ぞといふ痕跡なし。女人は無慮なるものにて、舌頭の誓紙を眞に受け、廓を遁出して此頃の始末、惚れたる弱身とは申しながら、賣色の身にして客に陷められ、今にも秋風そよと立たば、緣桐一葉の投出されもの、やがて朋輩の耳に入りて、あつぱれ物笑ひになる事かと心細げに怨めば、時雄は辯解言葉に窮りて、其には劣るまじき眞實の見せたさに、伯父より固く止られたる唇封をうかと切りて、知らざる事とて冥加なき怨言かな。男の情といふものを見て其口を愼めと、夜衣刎退けてむく〳〵と匍出し、

一通の書狀を持來りてまづ之を見よと、自ら行燈の心を搔立てゝ佐太夫が枕頭に直せば、上封の手跡は女文字！見たくは御座んせぬと時雄の胸に投付けて、くるりと後向になれば、馬鹿め！　馬鹿は性質今御存じか。　馬鹿め！　怜悧ならば男に陷めらるべきか。　あれ、この馬鹿め！悋氣は後まはし、まづ見てから腹を立よと手紙を引出し、佐太夫にのしかゝりて顏の前に披げても、目を瞑りて見ざれば、時雄小音に讀けるを、耳を塞ぎながら聞けば、小判の音するごとく、時雄が放埒逐一國元の宅に聞え、剩さへ佐太夫廓を脫出し、此家に身を忍びながら夫婦同樣に暮すと知より、巣守の女房は十四五日路離れたる此所まで悋氣屆かず、胸に怨恨の數を疊み兼て、ぶら〳〵と名の知れぬ病氣に惱み、浴びるほど藥湯水のごとく驗なく、やがて思死に果べき容體、殺してよき妻ならば貰ひはすまじ。三才になる鎹が利かぬほどに根性腐りけるか。目と鼻の間に見事意見すべき伯父も居ながら、一言もいはで見て居らるゝ

は、平素の御氣質にも似合はざる近頃の不注意と、連累に餘人まで恨みたる國元の母よりの手紙なり。

此先は我讀むに忍びずと投出すを、佐太夫氣遣はしげに拾取りて見れば、時雄が不埒の段々を嚴しく責め、さつと其女に暇出さずば、病人を引連れ、母親自身に出向かむまでと、怒氣の面影目に見る如き文言なり。佐太夫讀了りて少時は顏を得上げず、やがて書狀の上にほろ〳〵と涙を滴し、かく歴としたる奧樣おはすが上に、お子樣まである事を曖氣にも出したまはず、此身をいとしがらせたまひしは御眞實が過ぎて恨めしや。かゝるお身上と初手知らば、なか〳〵迷ふまじきものを、今となりて此佐太夫を如何にしたまふ御了簡ぞ。奧樣か我か、いづれ一人は死なねばならざる成行。心中ならば奧樣に何劣るまじき此身なれど、賣色の中の相思と、親々容したまひての夫婦とは格別の相違あれば、いふまでもなく負は我に極めたり。ましてやお子までなしたる奧樣の御心根は、我胸

我下婢とも成り下り、一生奉公してなりとお側を離れまじき心なれど、奥様お物思ひの種ともなりて、お身に障る事やあらむも心苦く、且は好たる男を喩へば奥様にもせよ、他人に眼前に自由にさして、瞋恚の炎立ずしてあるべきや。一思ひに此家を出てお姿を見もせずば、此戀の色無く褪めざるまでも、他事に紛れて折々は忘るゝ事もあるべければ、永の暇をこの身にたまひて奥様の御心を休めたまへ。此まで淺からぬお情を受ました、此方様へせめてもの寸志。今となりていふは死亡し子の年齢とやらに似たれど、此方様はようもようも奥様あることを裹みたまひて、この佐太夫を翫弄物にしたまひしよな。いつも此傳にて男傾城の口車に乗せられ、無理算段に廓を出て路の柳の折放しとなり、根には返られず葉は枯々て、賤屋の茶釜の下にくべられ、見る影なき果の遊女は、朋輩にては先代の花霧殿、汐路殿、松葉の乙女殿、扇屋の夕顔殿、悉この手に懸りければ、手管の約束はともあ

れ、此方より心底命を懸けたる中の女夫の契約は、片思の獨心中にては末々の覺束なさに、うるさし、ねつしといひたまふほど、お獨身かと根堀り葉堀りお尋ねまをせし上にも、心元なければ如在なく手は廻して訊問せば、いよ〳〵奥樣はなき事に極まりたるに心をゆるし、かゝる目に遭てからは泣くも恨むも所益なしと、その女房の名から年齡から、容色の善惡、額に黒子のあるまで知りぬいて居ながら、今更のやうにわが不覺を悔み、恨めしくもなき怨言をならべけるに、他人の心を見通しの人なければ、武士の海鼠が〳〵。

（四十五）

其明朝佐太夫伯父の宅へかの手紙片手に馳込み、今が今まで時雄に欺かれたるを口惜がりて、涙に咽び、身を震はせ、袖を食裂き、狭き心は亂れたるやうに見せかけの所作。扨はと伯父も當惑の頭を掻き、見れば思逼めたる容子に、離縁の事は流石に言出しかね、當座ての欺かれし欺きしとの事は、悉其方が邪推といふものにて、女房ある事を時雄が推秘みしも、戀ひしき其方が心を引寄せむばかりにて、謂はゞ可愛さあまりなれど、今となりては成程欺かれたるやうに見ゆれば、其怨恨は一々道理にて、中に入りたる此伯父の當惑はといへば、佐太夫なほ鳴噎げながら、何事も御存じなき此方樣に、御迷惑を懸けます心にはあらねど、平素のお優しきに甘えてかくの次第、伯父樣、今日より花にお暇を下されまし。何、何、何と、と伯父は煙草を詰かけし煙管を捨てゝ膝の進むを

覺えず、顔を衝出し眼を睜りて、佐太夫が決心の面色を窺へば、思切りたる言葉の後に、またむら〳〵と未練の萌せるごとく、濁れて更に湧出る涙に、幾度か眼を拭ひ鼻をつまらせ、今日より花にお暇をくださるやう時様にも得心させて下されまし。そりや此手紙を見てからの覺悟か、但しは時雄めと口論などせし上に、彼が貧乏に飽て廓が戀しうなりたるか。えゝ！お情なや、えゝ、えゝ、えゝ！花がゝほどに辭讓くも果斷なる心中のほどを賞めては下さらぬのみか、貧乏に飽くの、いまはしき廓が戀しかろのと、當もなき怨言は恨めしきお言葉なり、無情お心なり。數年來の賣色の中に、唯の一人も此身を頼むべきほど眞實ある男に逢はず、漸く時様を此の人はと見立し、目鏡の曇らざるを心に矜りて、嬉しくも女夫落しの日數なくして、さしたる苦勞難儀にも出遇はざれば、花が思ふ程の實意の見せ塲なく、尋常の遊女果糊口の道なきまゝに、乞食にならんよりはましとの了簡にて、辛抱するかなんぞのやうに口に出て

こそはのたまはね、物堅き伯父樣などはさも思さるべし。さうなくては、唯今のごときお言葉のあるべきやうなし。果のなる秋ともならでは、花の色は仇なるが多くて其心計り難ければ、其お配慮もさら〳〵御無理ならねどさりとては、平素私へのお言葉にも似ず、御心中の水臭さ。唯世に哀れなるは花なり。馬鹿律義にも當座たらしの僞誓文を一圖に守り、われ一人女房になり濟まして、時樣は吾物顏に冊きし昨夜までを思へば、羞かしくもあり口惜くもあれど、其等には更へ難き戀慕の念は、此身を下婢にしてなりとお側を離れじとすれど、此身といふものあるを苦に病みたまひて、お國元なる奧樣は容易ならぬ御大病のよし、このお手紙にて知りまして、昨夜は通宵寐もやらず、獨痞を抑しての物案じ。とても人一人の命をとりて、無理に添ふ女夫ならば、奧樣のお怨念にても末々二人が身上も氣遣はしく、また此の身を逐出さずば、其御大病人を抱へて、年寄たまひたる親御樣此地へお出懸の上、きつと處置せむとのお手

紙なれば、いづれにしても時樣とは惡緣の、相思はかなはぬに斷念めて我より御暇を願ふは、一には奥樣のお命が助けたさ、また一にはいとしき時樣を此身あるゆゑに不孝ものにせむも悲しく、また我にしては、よくも義理を思ひておのれが戀の角を折、あれまでの、執心をおし曲げて、我から暇とる程の心のしほらしさはと、後々までも伯父樣時樣に、折々は不便のものと思出されなむ事を心ゆかしにして、此までを吉夢とあきらめ、何所になりと下女奉公に棲込み、一生所天は持たずに竈前にて果まする所存を。少しはいぢらしとも思ひたまへと正躰なく泣伏せば、伯父は感じ入りて、其方が謂へる通りいかにしても添はし難きに及びたれど、生木を引裂く思にて、此方よりは暇やる離れてくれ、とはいひ惡くくて進退谷りたるに、其方より今の言葉、其心中は重々禮言ひたきにも、何とやら他人の憂慮を喜ぶにあたりて、其方に對する此方の所思は通じ難けれど、必ず仇や疎かには思ぬぞと、此後二日三日はごた〳〵として、

やがて金二百兩伯父の手許より出で、身の所置着までの雜用との名にて手離とは言ず。佐太夫はいかにしても取るべき理なしと、剛情におし還すを、家内惣懸りにて不承々々に摑ませ、二ヶ月と五日目にてやうやく此家を飛出し、淺草邊の知己に身を寄せ、潜に樓主の許へ此趣を通じければ、知らぬ顏にて追手をさしむけ、知らぬ顏にて佐太夫も引釣られて龜和泉に歸れば、樓主外見の立腹太劇しく、部屋へも入れさせずして遣手飛懸り、太夫樣御定法と荒繩に縛られ、その日より三十三日間土藏の闇黑に閉籠められて握飯に澤庵。二百兩はそのまゝ其時窃に樓主に預けたれど、吾物にせよとて還へしぬ。この入牢中繩目の苦惱に踠きけるに、かく繩肉に喰入りてと、今も手首の傷痕を見せて、當代は規則改まりてかゝる事はなくなりしとかや。難有き御代なりと其手を撫て、老後の佐太夫著者に語りぬ。

（四十六）

和尚も大黒を拜む世に、武士なればとて八幡大菩薩摩利支尊天の堅い三昧では竹刀鍛錬の肩でも凝る。今泰平無事の天下に飾物の御太刀は細身細身！佩に輕うて第一女人輩が悦ぶことはと、養父の意見を聞ながらの胸中がそも〳〵如件し。我等が其方の年齢にはと、家康公の御遺訓讀むやうなる事を列ぶれば、なほ以て鼻頭に應待ひ、品川新宿と浮れ廻るに、容貌美しく其儘生寫とて、坂彥と持囃さるゝ面白さに身が持てぬは、太田備中守家來にて、奧用人の重役なる新堀左内が養子左源太とて、當年廿六の男盛。

空嚢も浪費盛に多財は堪るものか。養家の福々に魅入て相應に摑出すを、左内憂く思ひて强意見の百出なるに、對手も三才兒ならねば遺恨を含み、この禿顱、何がな落度あれかし、其尾を捉へて化皮を引剝き、此腹を癒

さてはと、當分は左源太身を愼みて、夜晝宅にいやに構へ、四角四面の忠義禮智信に、したゝか惱ましくれむとすれど左内更に屈せず、武士はさこそあらまほしけれなどゝ、機嫌好く見せ懸くるが惡し。知らぬと思ふか、ちら〳〵老年に耻ぢざる保養の噂は耳にすれど、其所行を衝留めざれば少時此處に、金鎚頭に鼻油布て滿月のごとく引絞りて待つとは識らず。今にも野鼠々々這出でなば、唯一箭ぞ。老年の根短く何時までか辛抱すべき、今宵か明夜かと養父の外出を窺ひしに、今夜は下谷の山部氏方に碁會ありと夕暮より出懸ぬ。吹たぞ天津風、十八年ぶりの遺恨思知れや、と左源太も續いて飛出し、陰見にその蹤を慕うて行けば、一二町にして辻駕籠に乘りけるより、左源太も急速駕籠を傭ひ、竊かに彼駕籠を追尾け、何處までも先者の行く所まで行けと急がせけるに、此方はわざと二三間引退りて、左源太は絕えず垂席の隙より左内の駕籠を視護りながら、何處へか志ざすやらむと、流るゝごとくに過行く輿外の景色

を眺むれば、おのれ禿顱め、禿顱め、たしかに吉原への御登城！こりや無上に面白いと扇に額を亂打に打ち、我を忘れて雀躍すれば、舁丁迷惑して旦那樣お靜穩にといへば、遲緩にはして居られぬ所、やれ急げや急げや酒代は望次第と、我尻に扇子の鞭を當て、やうやく大門を入れば、左內の駕籠は七軒の井筒屋に着くを、少し離れて見澄して駕籠を下り、其茶屋の前を過ぎながら樣子を窺へば、家主夫婦を先鋒に使役の男女店口に面を揃へ、これは新堀の旦那樣、よう此路を忘れたまはでなどゝ囃立てゝ二階へ導かるゝは、昨今の馴染とも見えず。唯々と獨合點して此所を立去り、京町江戶町の素見に時刻を移し、最早好時節と取て還せば、井筒の二階に人氣なく、左內疾に送込まれたる氣色なれば、ヅッと入て此方へといふ二階坐敷に通れば、引續いて挨拶に出ける女房に、最前見えし老年の客は、わが隣邸にて高名の好色ものなるが、此家の久しき馴染かと問へば、去年の花時分から御贔負に預りまして、二なき大事なる

此家の福神、此方様の御知己様か。否、物言ひしことは曾てなけれど、顔を合はさば先方にても識るべし。何屋の誰に通ふぞ。されば、一時は彼も氣に染まず誰も面白からずとお氣むづかしく、諸所方々をちらしに武者修業を遊ばされし末、其よりは今に變らずお心を寄せらるゝは、龜和泉の佐太夫様と應へけるに、左源太故意に呀といひて小膝を拊ち、南無三寶あの禿顱に一番鎗をつけられしか。我も佐太夫には見ぬ戀にあくがれ、かねての執心なりしに扨々無念千萬と悔めば女房笑ひて、遊女は賣物買物、何を其樣にお力を落させたまふぞ。御思召だにあらば此より直にお伴いたしましよといふ。左源太首を搖かし、もとより賣物買物なれば吾自由にならぬを苦にするにはあらねど、あの禿顱の二番煎を飲まさるゝがいかにしても氣色惡るければ、一手後れて待たのならぬが一代の殘念なり。さりながら目ざせし敵に背を見せんは卑怯なるべし。此上は鵯越を眞逆落に間道から拔懸して、彼が不意に出でなば勝利は手の裏。

鷲尾は居らぬか、案内頼むと立上れば、巴御前此にありと女房先立に階子を馳下り、お履物よ提灯よと喚きて、左源太徐々と打立ちけり。

（四十七）

左源太廻部屋に伸縮して獨寢の胸に手を措き、什麼してか禿顱めを撃破してくれべき。何處までも不知顏に鞘當の對手となりて業を沸させ、鱓の切齒を見て笑うてやらむ歟。但しは今宵此所にて立派に面を合はせ、父上ようこそなどゝ喰はして新膽も挫ぎ、逆捻の意見に散々膏血を絞らむも心快き業なるべし。孰れにしても網中の干魚、思ふさま玩りて嚙で吐出してと、憤怒の霽むづる歡喜に胸躍り髮堅ち、臥ても居られず起むも所爲なく、身悶して床上を轉輾る折から、ばた／＼と廊下に上草履の連響を、障子細眼に開けて其かと覗けば、養父左内寢衣姿のしだらなく酒氣に蹣跚けながら附添ひて介抱する左太夫に何やら言懸け、肩邊を平手に搏たれて半白頭を掉立て、又一言何やら言へど、笑うて應答なき佐太夫の頰を突き、抓らるゝやら抱附くやら、淺ましき擧止を左源太冷汗を

流して見物しけるが、漸く此方に近づくは、此廻部屋の後面なる手水場に來るならむと、左内の姿を見るに疊みたる無念むら〳〵と湧上り、何の思慮にも及ばず横手の障子を蹴開き、先回りして手水場に待つと知らねば、左内しどろもどろと足場を定めかね、操糸の斷たる人形のごとく風來々々と來懸り、渇く唇を舌なめずりしながら、又しても自慢の遠吼」げに逢ひ難き親と子の縁は盡せぬ契とて、佐太夫先刻の言を忘れまいぞ。日こそ多きに今宵しも、手水場に誰れやら居るではないか。此三井寺に廻り來て…。父上お危險ござると左源太ぬつと現はるれば、佐太夫したゝか呆れて此方樣は、と左内を背面に圍へば、その肩頭より皺面を出して、朦朧たる醉眼を見開き、何ぢや、父上？貴殿如き壯佼に父上稱呼を受くべき高齡にあらず。慮外ながらかほどの妙齡美貌妻あるものを、侶律も亂れたる爛醉の躰に、左源太手を附けかねて唯舌を卷たりしが、突然心を取直し言語を改め、父上、父上、これ父上、お眼鏡なりと懸て

篤と此方を見定たまはぬか。無謀なる愚息の放埒も心魂に徹する御意見を蒙りては、前非を悔いて行状謹直の武士と生替りたる左源太が、七時下りの雨に床板から新堀家の腐らむことを憂ひ、此所まで旱乞の祈禱に罷越しました、と半睡れる左内の耳根に喚べば、垂たる首を擡げて、いや誠に其方は左源太、好所にて逢ふたるものかな。これよ左太夫、御珍客を座敷へ御案内申せ。老爺大分酩酊の氣味なれば、失禮の段は御免を。一寸用を辨じてと、左源太が捉へたる袂を拂へど放さず。餘所々々しき其口上はまだ酒氣が醒めたまはぬと見承けたるが、或は面目なさの餘り、酒に紛らして此場を遁むとの意か。何にもせよ豚兒に意見を加へたまふほど御分別ある父上にしても、この道の甘味には頰を落し、耻辱も面目も忘れたまふばかりなれば、血氣盛の我等が一夜二夜外泊せむは、無理にもあらずと此宵始めて曉れたるべし。以來はちと家則を寛仁にしたまひて、折々なる左源太が色遊に、何怖顏は必ずしたまふな。家内に人な

ければ今宵は我歸宅して待ちますほどに、明朝は早々歸りたまふべし。またの日御見と佐太夫に目禮して、つと部屋に入りながら衣類をといへど、此場の始末何事やら一圓腑に落ちず、狐狸に魅まれたる思ひして、樣子知れざれば仲裁もならず、孰れも吾客なるに右にも味方し難く、左の敵にもなりかね、後に子細は知れむと、まづ左内を伴て閨房に戻り、床内に押込めば、枕を當がふ中に高鼾初雷のごとく寢入りぬ。窃と拔け出して左源太の部屋に行き、何事とも知らねど我に罪科はなきを、餘りに本意なき首尾かな。せめては枕を反べて一言二言嬉がらせたまふとも、怨言をいふ女はあるまじきにと、左源太が結懸たる帶を奪取り、床の上に引仆して起せず、吸付煙草二三服の絶ぬ烟に男を縛りて、爭論の樣子を聞ばしか〳〵と始終を語りけるに、その復讐の御意にてこそ此樓へは來たまひつれ、最早事濟みたまひしからは、再度と顏を見せたまふ御眞實はなきに極めたり。我好と思ふは女人の心に變りなく、誰しも好にや

とかく引付けて、洒落にも浮氣させぬやうに仕向けたれば、このお多福を不便とは思したまはぬよ。今宵を限りに入來なき男ならば、誓文還さじと抱窘めて離さゞれば、養父と一つ太夫を張合はむはいかゞとも思しなれど、此方が一味して我を助けたまふとならば、面白からむ隨分根良く通て見せむほどに、今宵は還したまへといへば、佐太夫其に得心して必ず味方して此方の武士の棄るやうにはせぬほどに、明の夜にも顏を見せたまへ、と左源太も容易く手捕にされけり。

（四十八）

養父いかなる顏をして歸るやらむと、左源太待ちに待つやらむと、玄關より容體咳の二ツ三ツを響かせ、澁面作りて入來れば左源太出迎へて、これはお歸りなされ。昨夜は面白きお手合も御座りましたか、お眼中赤みて瞼の腫上りたるは、痛く夜を更したまひけると見えたり。御老體のことなれば、血氣ものゝ對手となりたまひてはお身が續くまじければ、此後は隨分お厭ひあるべしと、眼の膜一層裏に冷笑を湛ふれば、左內悄然として手練の千本鍼に吹窘めらるゝ如く、たら〳〵と流るゝ額の冷汗を掌に拭ひ、好道なればさしては疲勞も覺えぬと、如何までも隱し通さむ氣色なれば、左源太も深くは窘めず、唯相睨にて此朝は無難に過ぎけれど、左內は心中焚ゆるごとく、昨夜龜和泉にての始末さへ憎き所、わが遊女を買ひて假初にも我に恥辱を與へむとする了簡、または弱身に附

入たる愚弄の過言といひ、養父を養父とも思はざる所置に、その胴骨一ト碎きにしてやるとも堪忍なり難けれど、この方にも落度あれば、親の權柄も此所には役立たずと、腸をしごいて憤怒を忍べば、不快おのづと眉に顯はれ、眼晃きておのれ左源太、わづかの麁忽だにあれかし、其に托して存分此恨を霽らさむと、角立つ眼を配りて油斷なしと見れば、左源太は卑怯なる量見を心中に嘲みながらも萬事に注意すれば、透間なき青岸の構へに斬込みかねて、左内が一擊微塵の大上段振冠れるまゝ、一歩進み一歩退き、左に搖き右に避け、一本試合の晴勝負と、龍蟠まり虎踞まるまゝ三日四日と過れど、打擊ふ音は絕てなかりき。少し間隙を見てお面を取むと、左源太五日目に所用ありと、午後より家を出でゝ夜に入とも歸らざれば、老たりとも色道に血氣の衰ふといふことなく、此年齡にしてもあるものかな、悋氣の角に新芽を萠き、彼奴もしや佐太夫方へかと疑念を起して、某氏が昨日求められたる名刀見になどゝさまよひ

出で、駕籠に形軀を載せて魂魄を息杖の下に轉がし、佐太夫の許に馳着て見れば、云はざる事か、左源太め先樣顏して坐敷の眞中に高楊枝の可憎はと、じだんだ履むで之を佐太夫に當れば、柳受にすべらされ、少々ばかり否味などいひしばかりにて歸されぬ。昨夜養父行きたりと知れば左源太今夜通ひ、左源太今夜通ふと見れば、明夜は養父必定出懸け、入替り立替り通ふ度の重なるほどに、左内の眼に子なく左源太の心に父なく、餓鬼一椀の腐飯を爭ふ樣は、臙脂ざしの彈指にも懸りぬ。

此遺恨を根に持ち、些細なる左源太が過失を養父事々しく責めけるに、言葉返しは不埒なりと散々に打着せしより紛議起りて、面倒なり緣離て逐出さむと左内がいへば、此方は望む所と惡たれ、相方折れず屈まず、死物狂になりて吼れば仲人も手を引き、此上はお隨意と放しけるに、水に入る糊付舟の難なく二ツに割れて、一家中の淺ましき手本と指をさゝれぬ。

（四十九）

父子競爭の放埒一家中に知れわたりければ、左內斑點まじりの皺面を見られむも愧かしく、當座は謹愼に縮まり、難去き用事を捨てゝも外出を憚り、此一條もしや上聞に達て、いかなる譴責に遭はむかと、色酒浸の心腸の醉もやう〳〵醒め際の不愉快。青呼吸を吐きながら主宰の沙汰を待ちけるに、仕合と珍事にも及ばずして、領分千葉に御用を領承はり、長くて二月の滯在と家內に言置きて發足せしが、あら熱やの苦惱も咽喉三寸を過ぐれば夢とばかり忘れ果て、懷ひいづるは佐太夫の事のみ。左源太は下谷なる實家の立花へ逐戾せしが、もとより富裕ならざる家なれば、渠も百羽搔して北國の空はいかばかりか戀しからむに、思ふにまかせずして草雙紙に書ける傾城にも心を動かし、自由なる物の不自由なるに、斷念て自づと手を退くべければ、言はでも佐太夫は此方のもの。

扨はや氣味好きこの胸中の日本晴、海上だに安穩なる旅日和を陸地の氣散じ。やがて戻らば直に行くぞ、と吉原を左に眺めやりて呟き、其日暮船橋に着きぬ。

薄闇き旅籠行燈に照らされ、骨柳を枕に老按摩が京阪談を聞かむも氣の竭きる穿鑿。八兵衞と下司なる名に呼れ、日光と汗の臭氣を此地には伽羅ほどに想ひ、二度と御見は覺束なき行懸りの旅人の慰情なれば、泣くも笑ふも一時と、後朝にしほらしき物を滴して見する事を慣はず、まことに情淡くして其交や君子、もかうして一人居の徒然に堪へず、と宿の下男に案内させて此所彼所見廻るに、いかに田舍なればとて隨分念入にむさくろしき家屋の結搆。さすがに菰簾にはあらぬ夜鷹小屋、と大籬を見馴れたる眼を驚かせば、案内のもの笑ひて、何事も旅中と我慢せむとおほせられましたは、此光景を御覽なき中の御了簡なり。かゝる家に御寢ならば、瓜や蕃瓜の化物に魘はれたまはむ。まづ〳〵無難にお歸りと

諫めけれど、これも筆話の柄とさる樓に入れば、年齡二十二三にして色赭黒く、でく／＼と肥料利きていかにも丈夫一式の女郎敵妓と定まりけるを、可笑の餘り「早乙女」といふ名にやあらむといへど下男合點せずして、此地にさる立派なる名はござなしといふほどなほ可笑しく、飲まれぬ酒に盃事は眞似ほどに濟ませ、此よりはまだしもたゝき藁が寢心好かるべしと思はるゝ、堅燒の煎餅蒲團はいとゞ老體にこたへて愁し、せめては御手枕を借用申て、面白き談話もあらば聞かせよといへど、江戸のお武家樣と敬まひ畏れて更に打解けず。隣座敷にて騷ぐやうな此土地の時謠など唱うて聞かせぬかといへば彌々身を窘め、可笑き訛にて知りませぬといふ。其方が名はと尋ぬれば、花と答けるに忽ち佐太夫を思出して、ありし夜の嬉しき事、面白き事など胸一杯に浮べば、急遽戀しくなりて得堪ずや、聞も氣の毒なる佐內の長太息に、花は少し身をすり寄せ、訝しや何事やらむ、我名を名乘ると齊しくどうやら御苦勞相なる御樣子と

尤むれば、否子細なし。今急に持病の胸痛と紛らせば、しほらしくも妙藥なりとて可怪なる丸藥をわざ〳〵持來り、壓ましよ撫りましよと介抱の實意を見れば、其名の花といふだに懷しきにと不便を催し、我側に終宵自由に寐かせ、歸際に少額の貨幣を捻りて取らすれば、伏拜まぬばかりなる喜色を、思ふ花の顏に見ばや一日も早く、と道を急ぎてやうやく千葉に入り、役宅に着くや否や、身持放埓の條不屆至極に付き宅番申付くるもの也、と江戸表よりいつの間にやら下りたる宣告書を示され、居宅は即刻釘付にされけるに、左內したゝか呆惑ひ、借となりて旅裝束のまゝ力なく仆れぬ。

其明日竊に番人を呼びて黄金を攫ませ、二通の書狀を賴みければ、日ならずして屆先は佐太夫方と本宅なり。

老人樣の末路いかにと佐太夫其文を披けば、懷かしき思ひの數々を書續け、賴みに賴みたるまたの逢瀨は徒事となりて、此身は亂行の譴責ゆゑ

に片田舍に逐籠められ、何日世に出でむ希望もなく、且は老年に愧ぢざる不行蹟を今更後悔に及べば、よしや世人に笑れざるまでも、天地に俯仰して餘命を偸むべきにあらざれば、藩主へは不忠不義の謝罪、藩士へは不面目の霽念、今夜皺腹屠割て相果るものなり。かく心志を飜へしながらも、最期の際まで其方が事を思ひやみ難くて、未練ながら一筆書遺し候とあるに、佐太夫仰天して、餘りなる藩主かな、あれしきの身持を咎立して、春秋なき人の命を取るまでには及ぶまじきをと、今は紀念と遺れる塗枕の其人の定紋に線香を供へて、心ばかりなる回向も殊勝なり。其夜左源太久しぶりに來たりければ、その後の始末は什麼と尋ねけるに、知らざるか老耄漢は千葉の宅番中に自殺して果てたり。我は縁切つてまた立花に戻り、此の後は對手なしに張合なけれど、此方の不實と意氣地競して通ふほどに可愛がりたまへといふ。扨も御不便なる事かな。いかなる罪ありて田舍へはおしこめられたまひけるぞ。されば罪は此方に惚

過ぎたればと戲言まじりにいひ紛すを、詰懸〳〵問ひければ、佐太夫へ心中立の意にや、あの禿顱あまりの可憎に、離緣の際に佐內が段々の放埒と、御用向にわが外に人知らぬ不都合の始末を、委細打明けたる書面を重役に差出したるより此度の仕合。老て子に從はぬ親父の果は大概かうしたものと酒に亂れて口外しければ、佐太夫思はず切齒をなして、おのれ畜生武士と無遠慮に夜衣を刎退けて立起る裾を、左源太引捉へて身を起しながら、何が畜生武士なるぞ。いかに女色に性根を亂せばとて、假初にも父と名のつくものを讒訴して、手は下さずとも殺せしは、人間業か人の心か、人非人よ、畜生よ、犬よ、犬よ、犬よ、犬武士の左源太！犬に太夫は潜上なり。夜鷹の寐顏なりと甜れといへば、おのれ！と攫む長襦袢の袖を力まかせに斷りて、廊下に馳出でながら犬武士と、振向て唾液を吐懸けたる氣象尊しと、此男一人落せしがまた繁昌の種とはなりぬ。

（五十）

歸咲の色なほ深き二十四の冬、節季近に好鳥と迷はせけるは、甲府八日町に數代の楠分限、土藏には黃金の俵屋と、家號まで福々の太物店の家督幸助、江戶の諸店へ年中の大懸金を取集めの逗留中、得意先の伴頭が馳走にて一夜龜和泉に遊びけるに、不運や、通銀江戶前の色師にも身動はさせざる、佐太夫が床山に上せられ、戀淵に打込まれ、恐悅ずくめに揉みに揉まれし揚句の身體綿のごとく正體失なり、懸金半分まで集めて革財布の口堅かりし紐此夕より寬み、中の物有るにまかせて引摑み、惜氣もなく蒔散らして、人の顏だに見れば誰彼の辨別なく、佐字が〳〵と喚くに、つひ先日までのおむくが、江戶はなるほど恐ろしき所と、附人の庄八が一存なる分別ながら、かく大束なる若旦那の御放埓はお家の大事、國元柳町あたりの色酒ならば數の知れたる事ながら、此吉原とあり

てはその底天竺の流沙川に續く大坩堝、佐渡一國をすつぽり入れてもたまるものにあらずと、日夜傍を放さず舌を爛らして歸國を勸めけれど、聞かばこそ、聞かぬはずは幸助天性の聾なれば、廓にては變名をから樣と命け、藝妓牽頭までが小馬鹿に廻はせど、堀立の山男は萬事に鈍なる上へ、むづかしき色里の風習いさゝかの心得なしに、唯我一人おもしろく浮かれて有頂天に舞昇り、脇目もふらず驀地に佐太夫が胸邊を目懸け、飛着て通來るほどののろ殿、傍で見るも氣毒なるばかり手玉に取られけるに、あれほどの男ならばと茶屋の爨婢も、小鬢の禿を撫て口惜がりけり。

總計六百兩餘の懸金、取立てゝは費ひ、費ひては取立てける威勢の凄じさに庄八舌を吐き、とても我手に合ふべきものにあらずと、急飛脚を立てゝ大旦那へ此始末を通じければ、早速の返書を幸助に突附け、この通り親御樣の命令なれば一も二も御座なし、お否とあらば引ずつてもお連

れ申さねば庄八の役目が濟みませぬと、主從喧嘩面にて發足せしが、隙あらば振切つて遁もすべき幸助の氣色に、庄八夜もおち〳〵と枕につかず、袖を捉むばかりにしてまづは無難に甲府に戻りぬ。

佐太夫手の中の如意寶珠を失ひければ、來る初春には目覺しき全盛をと心懸けし目算狂ひて、いよ〳〵歲末ともなれば、日頃は水晶骨に錦張の傘を伽羅柄にして翳せむなど、いひし客が、何處へか影を潜して呼吸も聞かせず。吉原毒斷とかく節季前に流行さへあるに、折からなる世上の不景氣まづ此所に影響けば、此暮は時ならぬ野分吹きて、一夜は明けても元が極月の三十二日、門松の色も發輝と綠ならず、獅子舞の撥音も冴えずして、此月かくはずまでは、二八月は年に二度の大厄不景氣月と、動かざる定則の如月後に待ち構ふるにと、心をさま〳〵に碎きて此中を端唄まじりに渡るべき大船もがなと、馴染の宿所帳を繰れど、今はみな昔時、名にのみ殘りて打絶えたるばかりなるに、路遠けれど甲府の聾は、

蓮の絲ほど折れ際に未練を牽きければ、もしや誘出しの文が助くる神ともなりて、熱氣冷口の戀を突衝き、首尾よく焚えてかの人を熏出さむも計り難しと、和歌の道にも少しはたづさはりし筆の運おもしろく、鴉を鷺と虛を實に書くろめ、やりくり事に物馴たる男を見立て甲府へ立たせけるに、日數を歷て吉左右の返事を握つて還りければ、土地の景氣、借屋の建築、分限の樣子を尋ねれば、其どえらさは江戸子の膽も冷えたり。土地にては商賣の甲斐守といひ囃すばかり、と聞けば逾賴もしく、待ちに待ちける其の月の十七日の午後、旅裝のまゝ汗を流して今着いたとの乘込を聞くより、したゝか饑ゑたる狼ども四方より聚りてとりまきけるに、一々好きなる餌を取らせて一先逐散らしけり。此夕は幸助何日になく生眞面目になりて、其方の量見が聞きたいとは、誰に敎へられたやら恐らしき口上を、鸚鵡の口眞似と心中に笑ひながら、聾の耳に口を寄せ、今改めて聞かむとは男といふものゝ無情證據、平素の擧止を何所に目を

附けて居て見たまふにやと其肩を銜けば、蒲團の端に載たる幸助、銜れて後方に身體の片重りするを、支へむとして銜きし手知らずに空を押せば、すてんころりと仰天に轉落ちたり。南無三！かうは手荒にせむとの心ならざりければ、氣毒にもあり可笑もあれど、此所を外らさば折角しんみりしかけし苦說無殘に崩るべしと、佐太夫あつとも言はねば身動もせずして、むく／＼起返る幸助を流眄に懸け、理ある此方の言葉に挨拶盡き、遁路なくなりたる苦惱まぎれに、わざと突倒されて言懸りの倒捻といふ古手かと窮めて見しに、少し隔たりたれば聞こえぬかして、顏を顰めながら、え何、何と耳を持來る擧動の可笑さ。これが佐太夫とあらうものゝ一の客か、世界は黃金の事と今に始めぬ事ながら頻りに感じぬ。

（五十一）

平素の擧動のみにては、どうありても此心の中が解らぬとの事ならば、何も此方ゆゑぢやもの申さいでかと、男の膝に身を寄懸れば、なるほど〱、浮氣半分の情契にて濟して置かむとならば、左右むづかしき言草はいるまじけれど、これ其方を女房に持つ氣ぞ、嬉しいか、嬉しいか、不得心か。何、此身を女房にせうとか。空言、空言々々、柳町の玉何とやらいふ美しいのとは違ふぞえ。誓文ぢや、俵屋の幸助ぢや、と此方ばかり激んで見ても埒明かぬは其方の量見。此廓に賣色するほどの身に、情夫とやらいふ附屬品なくては協はぬと聞けば、それは其方にも屹度あるべし。黄金でも買ぬは人の心、さあらば身請するも無益の至りと言せも果てず、幸助の顏を恨めしげに見遣てころりと横になり、我一人夜衣を鼻上まで引被り、彼方向に睡らむとすれば、幸助堪らず夜衣を剝取り、

これ！と言へどぐつとも言ず、なほ睡眞似すれば、又これ、これと腰に懸て搖る手を邪慳に刎退けられけるに、懲りずして又肩を搖れば又刎退け、枕を抱へてすつと起立るを幸助飛懸つて抱窘め、肩頭より女の顔を覗込みて、何としたる腹立ぞ、子細を聞かせよ、これなぜ子細を云はぬぞ、と再三問へど一向に返詞なく、じろりと幸助を媚睨に睨み、何やら言はむとして躊躇ひ、不意にえゝ！口惜やと幸助の上臂に嚙付ば、あッ痛、たたたたと身を捻りて倒るゝまに佐太夫も倒るれば、幸助紫色になりたる齒痕に唾を塗りて連りに揉みながら、其方にならば命もやる氣の男ぢや、これしきの傷か何とするものぞ。血の出るまでに嚙で見よ、と痛まぬ手をぬッとさし出しけるを、矢庭に引捉みてあッと一口嚙付けば、おのれ、あ痛ッ！と女の手を抓りあげ、嚙む――抓るに情剛く相互に放さず、苦痛の聲をふり立てゝ相嗅へば、折から入來りたる佐山は珍事かと胸を轟かして駈入めば、何たる事ぞ、この始末に呆れ、二人の皺面を見てわつと

笑へば、二人も漸く放れて笑を催し、痴話はこれ限に納まり、幸助旅疲勞におとなしく朝までぐつすりと睡りぬ。

此度幸助が出郷の次第を訊ぬれば、佐太夫が呼出文に威かされて、帳場の有金と母親の祠堂金を攫浚ひて夜遁同樣と知るに、所持金此限に盡て後は勘當の體か、國元から追手懸て引戻さるゝか、此二者の一つを免れざる身上なれば、何事も此間に手賢くせざれば、いつまでか人は無間鐘にてあるべき、敲くも擊つも血よりは外に出るものなかるべし。機會もよく聾殿より身請の相談を仕懸けたる圖を外さず、一日も早く廓を出づるが最期、蹈臺にして突放し、それからの思案も大概は附置きたれば、さしづめの手管はうまく〳〵乘せて身請を急ぐにありと、精根限にたらして見れば、筋斷れ骨蕩け、魂魄まで脫骸になりながら、不具者は僻見ありて邪推疑念始終附纏ひ、今日諾と呑込むかと思へば明夜直に裏返りて、東西南北難をいひ立てけるに、海鼇を塗箸に挿むばかり佐太夫も困じけ

るが、かゝる男は道具入の仕掛ならば墮もすべしと、鬢毛を斷て投出し、口頭に詐欺なき誓紙代と與ふれば、半熟なる江戸摺の男と違ひ、山奥のお坊養育はしほらしくも正直にして表面を飾らず、よく〳〵難有忝きかして、其毛を推戴かぬばかりに悦びて懷中にして、四五日して見ば、唐錦にて煙管筒の如く切髮袋を仕立て、其中に珍重して肌身を放さゞるほどなれど、邪推疑念はなほ薄らげる氣色にもあらねば、佐太夫は唯心急きて、一夜身請の一條を底の底まで口說きつめ、枕を仆して其上に懷紙を敷き、仰天に左手に小指を載せて、指頭に剃刀を當がひ、幸助に自身の枕を持たせ、此上を一擊にしたまへと迫れば、心弱くも顏色を變て、此ばかりは止めてくれよ、たしかに心底見えたれば明日といふ明日は必ず身請すべしとて、切に止めけるを無理に枕を振下させ、あつと事々しく叫びて剃刀の背を内に曲ぐれば、指頭の皮に唯肉少し添うて落るが秘傳、血は敷紙を恐ろしく染めなすと、さまでにもなき痛をしたるか苦み

て見するとの二つに、凡庸の男は驚きて、心中見えたと脆くも得心せざるものなし。幸助をも此手に載せてやう〳〵口説落し、後で笑はれぬほどに美々しく大門を出で、下谷摩利受天横町に小奇麗なる借店住居、後は知らず當座を幸助人に羨ませたり。

(五十二)

聾の幸助今年は二十六といふ立派なる男盛、才子は早一人前の事を仕遂げ、此所等で一先死にて惜まるゝ時代なるに、秘藏過たる舐犢愛に育てられし身は一向に世間を識らず、惚れましたといふ女人は必ず我に惚れたものと承知して、人間は譎詐を皮に裹みて目鼻を附たるものと悟るにも及ばず。さらぬだに瞞着られたる佐太夫が髮切指切の心中立に、我もし饑ゆらむ曉には、あの太股の肉を裂てくれもすべきほど骨髓信じて、さながら嬉しき夢を覺めて見るごとく飄々と其日を送れど、對手の佐太夫は更に面白き事なし。おむづからぬやうにと振皷を廻し鳩笛を鳴らし、晝夜お傍去らずに御機嫌を取り、我には氣霽といふものなきに、精根盡て隨分可愁業なれど、長年の廓住居に飽き〳〵したれば、米價を知ぬ新世帶は氣が變て一風可笑く、大仕懸の飯事して遊ぶ氣なり。

其上世間女房一代の御苦勞の本尊と、卌く所天の幸助はぼんやり。天下は我物、まだ〳〵盗出の金子を費果らざるに、甲府の實家は勘當と父親は獨力めど、月々の仕送金は母親の才覺にして絶ことなければ、衣食に贅を盡して萬事不如意を知ざる樂世帶に、心牽されて幸助を棄るに忍びず。一寸世上の光景を見渡すに、町人百姓は算盤鋤鍬にしがみ着きて齷齪と稼ながら、年瀨には每度縊死多し。又は四民の首座におし直り、今太平の世は純益の扶持を食て結構さうなる武家方だに、傘張揚技提灯の骨製等それ〳〵の内職、大事の命との合戰なれば是非なしや、とかくは額の血汗を舐めて渡る世なり。それに引替へて我身上の氣樂さは何に譬ふべき樣なきに、まづは辛抱の仕所かと、不思議にも此女賣色の中に間夫の氣もなかりければ、聾者の山出のうつとりはどうで心に染むまじけれど、さりとて外に氣を移すべき男を持たねば、此所を出てはさして行衞なきに屈まりて、居るともなく出るともなく四月五月は最早かと過ぎ

けり。

平生信心なれば、淺草藏前なる不動尊の縁日に夜參して紅勘横町へ回り、其所に升屋といへる貸本屋は、賣色の頃出入の馴染より、今もなほ花客にて借れる情書の續編を、通路なれば自身受取りて行かむと、當矢の提灯持は子女の松を先驅にして、險き横町の闇路を辿りけるに、曲角なる土藏の陰より黑き物ぬつと顯はれ、あれと言ふ間もなく提灯捥取られし小女は泣出し、素足になりて覆つ轉びつ遁行に眼はくれず、一閃と稻妻を短に光らせ、おのれ佐太夫！と振翳しける時、投棄てたりし提灯焚上りてぱつと立つ火影に認めたる男姿、淺黄手拭を眼深に冠り、黑紋附の裙褰に高く毛脛をむき出したり。盜賊と聲を懸れば、默れ！佐藤八郎を忘れしかと、一足切入る踵に食捨の西瓜皮を踏敷けば、ずでんと仰天に打覆りて、土藏の壁際なる小溝の石垣に、したゝか弱腰を撃れて遽に起も得上らず、微に身を搖かして呻くのみ。此時と佐太夫遁げむとせしが、

なほ可怖に振向けば、渠が仆れたる傍に短刀の遺ちたるを、窃拾上げて一目散に遁出せば、浮足亂れて二度躓き、膝と肘頭を三箇所擦剝き、されど一命を拾うて歸りぬ。

（五十三）

遁歸りたる松が報知に、そりやこそ一大事、と近所の衆を四五人賴み、舂米屋の三吉といふ力自慢を先棒にして唯今遣はしたれど、倉卒として落着ざる幸助は門口に徜徉ひ、其方を闇に透して憂慮の最中に、花は髮を亂して帶しどけなく、單衣を泥塗にして跣足のまゝ、奔惱まされたる呼吸急遽くよろめき〳〵迴來たれば、幸助走寄りてその手を握り、やれ無事なる顏を見て嬉しや、何所ぞに怪我はなかりし、かと戸内に引入るれば脆くも土間に俯地に仆れぬ。

松は心得て微溫湯を汲みて薦むれば、幸助は門戸を鎖し、奥に入りて藥劑を持來り、少時の介抱に漸く胸の動氣靜まりければ、足を滌ひ浴衣を被更へ、床を取らせて橫になりたる枕頭に幸助蹲まり、此短刀は什麽せしぞ、と手拭に包みて持歸りたる八郎が短刀を、土間に遺れたるを持來

りての訊問に、今夜の子細を白地に物語り、此一品の證據を握みし胸中を談さむかとも思ひしが、なまじひ弱虫に聞さば果然制止すべければと、紅勘横町にて盗賊に出遇ひ、あはや此刀一突になるべかりしを、不動尊の忝くも護らせたまふにや、其奴石に躓きて倒れ、急所など毆ちけるにや起上る事協はざるまゝ無念がりて、我遁る後姿を目懸て、手に持ちたりしこの短刀を投附けゝるに、左肩を擦りて二間ばかり前に飛びたるを、手懸の種にもと拾取りて歸りたりと欺けば、まづは無事にてかゝる目出度事なし。女人の女行は愼むべきものぞ、と暫時は枕頭に茫然坐りて煙草を薫らせしが、談話對手もなきに行燈との對坐もおもしろからずと、其夜は家内は惣早寢にしけり。

さしたる事にもあらねば、花が身體の疲勞直に消えて、目覺るまゝに念ひけるは、佐藤八郎といへる男は親父に劣らざる馬鹿者かな。かれの親父信介が四十面を提げての浮氣は二十代の若者に讓らず、其癖十兩不足

の無心を五度まで遁げ、紋日物日の前後を厄病神の如く避けて、無難息災の日を潛つて通ひ、二年が間に遣手が三度と笑うたを見ず。何も知らぬ雛髮までが嫌へば、新造若者茶屋の男女惣懸の隱言彈指も、信介が吝嗇の鍛練良に反還りて立箭はなかりけるより、はては眼前にて罵詈惡口を皮一重包みて辱しむれど、眞實解せぬか知らぬ所爲か、華美に遊ぶの、伊達を行るのといふは三十代の仕事なり。我等の年齡にしては戀の色のといふ氣は微塵もなく、唯藥喰の傾城、氣保養の色遊なれば、假初にも贅澤がましき事ありては、第一子息の手前面目なき事なりと、醉へば之を題目と唱へて、いとゞ氣障がられし老夫なれば、させる大浪費はなくとも小身代はがらりと傾くが上に、一層可愁は同藩の誹議と、堅氣なる子息の八郎なれば身も世もあられず之れを憂く意ひて、逆緣の意見を越權なり慮外なりと斥ぞけて取合はざるのみか、なほ亂行の募るを手放に見かねて、一夜八郎我を尋ねて親父に意見を賴むとありしを、折惡く小

癪に障れる事のありて、自暴酒の醉心に浮かれて散々に罵り、剰さへ親父の棚卸までして辱しめければ、此返報は必らずゝるぞと腹立てゝ還りしを覺えたり。

其後間もなく信介は好色の果の病に命を殞しける趣は、我廓を出る前日聞たりしが、扨は八郎奴其時の遺恨を霽さむと我を附覘ふものとは見えたり。八郎、末世の武人なりとも殺人庖丁をひねくるほどの手技はあるべきに、敵人は蒲柳女人ならずや、其を闇討とは身に請けし些細の恥辱を雪がむと、思立つ根性の武人らしきにも似合ざる擧動なり。人威の惡洒落が可憎に、此方にても返報の茶番の道具にもと、奪取りたる短刀を突付け、眞晝中佐藤一家に冷汗を握らせずば、とても此痞は治まり難し、まづ如此して如彼してと工夫着て、とろりと寢る間に夏夜は知く明けぬ。食事了めば幸助芝邊まで出懸しを此間と、一際美々しく裝立て、かの短刀は紫縮緬の帛紗に卷て所持し、駕籠を飛ばして丸内なる酒井雅樂頭の

上屋敷へ急ぎぬ。

（五十四）

佐藤の囑託にや門番の老漢執固き訊問立して、とかく門内に入れじとしけるに、此如時の尊さよ、格子越に窃と二分金一つ握らせければ、志賀寺の上人が戀にし御息所の御手に觸りたるより嬉しさうなる面して、線鐵入かと思はれし頸を自由に屈め、遽に權柄なる言葉を廢めて、佐藤の勝手口、坐敷の間數、物置場の有所、庭の桃樹に毎年何升の實が生り、何家へ幾箇づゝの配分といふまで精細に敎へぬるを、心急く折から不用雜談と悉皆までは聞かず門を入り、一列藩士長屋の東方端に、門前の車井戸を目的に着到き、八郎樣にお目に懸りたきものと申入るれば、留守なりといふ。樣子あつて明日は此地を去るもの、御歸宅は夜に入るとも子細なし、お待ち申してお目に懸りたき用事あれば、此お玄關の隅なりと拜借して暫時休息いたします、と袂より手拭を取出して板間に敷き蹇

褄して腰を懸け、悠々と扇遣ひして控ふれば、母親なるべし人品なる老女出來りて、八郎留守なれど我にて用事辨ずべきならば聞かせたまへといふに、子細なき由を答へて座敷へ通りぬ。扨其用事はと訊問も了らざるに、かの紫帛紗を卷返し、拔刀の短刀を其上に載せて、之にお見覺ありやと差出せば、老女見るより駭き、いかにして此品が……。いや確とお見覺がござんすか。紛べくもあらぬ此家の重寶。扨は〳〵此方樣は露御存じなき事、お出先遠くもあらぬ所ならば、八郎樣へ御迎を上られまして、眼前お尋遊ばしましたらばといふ。佐太夫が來し時は疑ひもなく八郎在宅なりしに、留守を遣ひて逐還さむとしけるを、佐太夫それと識りてわざと情剛く、夜更る迄も待むと搆へければ、様子知ぬ母親は是非に會と云を會はぬといへば、さる事ならば我會べし、と止るも肯かず玄關に出けるより、堪らぬと勝手より擦違に奔出ければ、いづれ長屋の何家やらかに遁たるべし。

老女彼方へ立ちて下女に囁けば、捜索に出でたるにや間もなく八郎と連立て還りぬ。

母親は短刀を八郎に附衛け、什麼せし始末ぞ飾言ば肯きませぬぞ、と詰め懸くれど返詞はなく、佐太夫を睨めつけて、おのれ毒婦此八郎まで惱まさむ心か。母上此女が吉原の女郎佐太夫なり、と聞くより老女面色を變へ、汚らはしや士分の家に汝風情は容れ難し。行け、行けと、所天を食殺されし嫉妬ばらしに眼を角立て罵れば、八郎も母親の味方に力を增し、長煙管を杖に張臂して居丈高になり、佐太夫此短刀が何とせしぞ、此短刀が我物ならば何とする氣と鼻頭の冷笑。佐太夫自若として激する色なく、媚めしき細聲にて、士分の家に女郎風情は汚穢とおほせらるれど、千石二千石の御大身にも添寢しながら、此方から可厭でふるほどの佐太夫、穢多の娘でもござんせぬ。また八郎樣此短刀を何とするとは、天道樣の前にてちと立派過ました御挨拶。月もなき闇夜の恥辱とはいひ

ながら、お星樣の二ツや三ツは見て居られましたに、と扇を口にして笑へば、樣子有氣なる言葉の端に母親棄置かれず、何はともあれ此始末を語れと八郎に迫れど、左右に言紛らしての果は佐太夫を罵るばかりなれば、佐太夫八郎を流眄に懸け、武士が魂魄を溝畔に遺忘れたる御話、餘り名譽過ぎて御自分のお口からはおほせられ惡からむ、佐太夫代りて大概を語るべければ、遺たる箇所は傍から補助ひたまへやと眞綿縊に縊附け、昨夜の紅勘横町にて狼籍の始末を語れば、母親は唯呆惑ひて、驚かせし女人は我も憎き〳〵女郎の佐太夫なれば、小氣味好てならぬのみか、頰桁の三四寸も斬付ざりしがまだ物足らぬ心地すれど、愚鈍の八郎おろかにも證據を押へられ、剰さへ對手がこれほどの惡徒なれば、面倒なる事にも及ばむか、と今ほどの氣色にも似ず凋れて見えければ、八郎不滿なる面して、母上何を心に懸たまふぞ、其樣に弱味を見せたまふゆゑ彼奴めが増長して、此上怎麽ことを言放さむも知れず、いさゝかも御心配

は御無用になされませ。佐太夫今日は何用ありて失しぞ、早く言ふて早く還れと、兩手を膝に載せて眞正面に睨めば、賣色身は粹好みして失禮ながら野暮なお武家は嫌ひ、今商人の女房となりましては、尙以てお武家方に用のあるべき理なし。さるに今日お尋ね申しましたは、參らずともの事ながら、父御信介樣とは御馴染がひの寸志、これから雅樂樣へお恐れながらと訴出て、女の身の力なければお上の手を借り、昨夜の復讐をする氣なれば、一寸とその御沙汰に上りまして、きついお邪魔を致しました。欲うはござりませねど證據の一品なれば、今少時御秘藏を拜借いたします、とかの短刀をまた帛紗に卷て立上る袂を母親捉へて、先刻の過言は重〻親子の過失、お心濟樣にいかにともお詫はすべし。先少時少時と切に留めけるに餘義なく坐に着けば、母親改めて言語を卑くし、子息が若氣の不量見より、此方を害せむとて我知らぬ間に持出せし其短刀は、佐藤家一子相傳此家守護の重寳なれば、先祖よりの遺誡ありて、

主君たりとも他人には借す事を禁じたるは、其刀一日此家に在ざれば必然災禍到る例數ありければなり。何卒金五十兩にて持主に戻したまはるまじきやと云へば、八郎母の袂を牽き、無用なりとの意を目語すれば、母親も目語を還すは我に委せよとの心なり。

佐太夫五十兩と聞くより血相變へて、佐太夫を盜人といひたまふか。ええ、あられもない！　否、否、五十兩にて此品を持主に戻せとは、何とおぼし召されてのお言葉ぞや。證據の品なれば少時拜借とこそ申せ、拾ふたれば我が物なり、欲しければ與よと申せし覺えなし。さるを五十兩にて御自身の短刀戻せとは、此身を脅迫騙拐と見たまひての御挨拶。佐太夫何時までか女郎ならむ、今は甲州の絹商人俵屋の內儀でござんぞえ。百や二百の目腐金が欲くて此所まで恥辱掻には參りませぬ。町人は心ざま賤しくして、小判一枚出せば撥鬢首の二箇も買るものゝやうに、お心得のお武家根性が憎うてならぬ。曲りなりにも非は通させぬ江戶の町人、

其心清きは神田上水を見ても知たまへかし。此後はちと嗜まれて黄金の事なら乞食に語りて悦ばしたまへと、袖を拂つて立起るを母親玄關まで逐懸け、詫證文なりとも望むまゝに書べければ其にて了簡したまへと、此度は八郎まで頭を下てしたゝか詫けるを、其には及ばぬ事、たかゞ人を嚇したるまでの刄物三昧、さほどの御心配は過たりと、なほ留るを振切り、其足にて此始末を重役人まで訴へければ、八郎呼出されて吟味の上、閉門三十日との宣告を聞きて戻り、思へば罪な事と語りて幸助を驚かしぬ。

（五十五）

狐疑嫉妬は人間一倍の上盛なれど、對手にしては木偶人の幸助、粋の粋に飽食の佐太夫には、木片を嚙むごとく味なくして有興からねば、往時世話を受けたる客訪と搆言て、一日隔には巣を空けて其所等を狂ひ廻りぬ。

淺草並木に笠屋といへる袋物問屋ありて、その家督の正助は二十六歳といふ豪遊盛。廓遊びに懸ては、他人の眞似もならぬ放業の名取にして、無先見の無賴なり。小倉庵の長次櫻川善孝を股肱の佐輿に引連れ、吉原を出店にして日夜を分ず入浸ける頃、佐太夫に陷られて大分取亂しければ、一手後れて甲州猿に此名木を根こがれけるを、何かの端には言出して悔みけるほど思染たれば、人の女房となりけるものを呼出しては、酒の相手に戯れて垣越の花を樂しむに、此男とて佐太夫氣に染みたるにあ

らねど、沒分曉田舍漢に纏附かれ、色も香もなき茶漬の對膳よりは、藝人まじりの華々しき酒席は、もと其に起臥の故國とかく忘じ難く、しかも氣が腐らずして可笑ければ、月に五六度はこの仲間に入亂れ、飲みながら折入てと正助の依頼を何かと聞けば、今天鵞絨の出物ありて代價は相場の半なれば、外へは散らさず一手に專買めたきものなれど、百五十兩ほどの不足いかにしても工面の着ざるに當惑せり。平素の馴染がひにといふも女々しき口上なれど、幸助殿をその御口頭にて御丸め、今月末までの融通を賴みたしとあれば、此方如き御氣象のしかも男子の口から私風情に賴むとの一言がしほらしくもおいとしければ、手元だにあるものなら今夜にもお間に合せたけれど、知らるゝ通り幸助殿の今の身上、大盡の息子とて唾が黄金になるといふではなし。我ゆゑに今は勘當の身なれば、國元の母親からあてがひ扶持の月の金額より入路なく、なかなか餘裕の餘の字も覺束なし。もしまたあらば此佐太夫がおめ〳〵と虎子

にして生しておくものぞといへば、一座顔を見合せけるは案に相違かと氣毒には思へど、假初にも請合ふ可き目的なければ、手持不沙汰の苦しまぎれに、佐太夫受て置たる盃の冷たるを飲干しぬ。

其時善孝進出て、御如在もなき此方様には釋迦に説法土佐珠に彩色、ちと憚多き小才覺と御譴責のあらむか知らねど、鳶細川の石室様は什麼なものでござります。此方様のお一聲は鴻池の連判より請合といふに佐太夫小膝を擣ち、其よ〳〵、思寄らざりしが石室の富四郎様といふ長者おはしましけり！之に口を掛るならば、十に九ツまで纏まらずといふ事はなかるべし。さらば何分にも其方にと此場の相談は整ひぬ。

それより二日經て約束の當日は初雪ちらつき、向島を次手ながらの見晴と、吾妻橋際なる河岸通の小奇麗なる鰻屋に正助と落合ひて、其所より川向なる細川の邸内へ迎手紙を持し遣けるに、とかく男子はお武家も女には弱く、寒氣は褄革を染透す雪路も、君を思へば徒足も厭はず、と來

て見れば遂に識らぬ男の一坐なるに落膽して、希有なる面色にて何用ぞといへば、佐太夫巧に其場を繕ひ、相互に紹介はして、いづれも在昔のお客同士、佐太夫も今は所夫ある身は色氣を捨ての親類交際。此方樣方も此身を緣の棧橋にして、以來はお心易うなつて下され、と銚子の數を更て一坐膝崩れて熱き呼吸を吹く頃、借財の相談を仕懸けて事實の段々を語り、佐太夫が證人に立ちますからは、女ながらも身に引請け、屹度御迷惑は懸ませぬほどに、百五十兩ほど御都合なされましてと正助相俱只管賴みけるに、今此所に持參なければ我は一足先に歸り、其ほど調へて待べければ、時分を見計ひて我窓下まで來るべし、と目前にて證文を書かせ、之は金子と引替にと立上るを引留め、また數獻を勸めて歸際にはわざと佐太夫一人見送り、階子を降ながらそつと合羽の袖口に手を差込み、富四郎の腕を有情の一握、あら忝やとばかり名代の好色者、眼尻を垂てにた〳〵笑ひに相好を崩し、女の手を占返して、此方も其方

の依頼を聞からには、其方もよもや此方の依頼を。おほせらるゝが諄し。少々身に協ぬ事なりとも無理して、屹度お依頼を協へて見すべしと返せば、ぞく／＼と肩を顫はせ、其や眞實か、眞實かと女の顏を覗き込めば、之が欲さにかと流眄をくれてやれば、涎を啜込みて輕く背後を擲き、空言いふと肯かぬぞ。　空言でない證據見せうか、と富四郎の首筋に手を懸る時下女來合せければ、其儘お危いと二三段辷足に降りて、うぢ／＼と下駄を穿く富四郎の後より合羽の襟を正して、只今直にお後からといへば振返りて、お花、正助などゝ……承知せぬぞ。　此方樣とは違ふぞえといふを、例のにた／＼に聞きて早く參れ、と詞よりは思ひを遺して歸りぬ。この石室富四郎は、細川家に普代の金方元締なれば、藩主の財ながら黄金に身内冷えて、持病は疝氣それゆゑか。同じ苦い目をすることならば、疝氣が一生立續けに病で見たいと、善孝が人を笑はしけり。または同じ扶持に頭を下ぐるものあらば、一生の内に一月にても此役が

勤めたしなど丶藩士の囈語。それ〳〵の役目はいづれか主君の爲に心を竭さむに輕重あるべきにあらざるを、かくまでに此役を人の羨む事、全く金錢出入の自由なるより、才覺次第大小の幻術を遣ひ、人血にて身皮造る世上一般の風習。さしたる扶持米、給金にはあらねど、士分町家を論ぜず、總じて大搆の家の財布底を握るほどの役を勤むるものに、いづれか内福ならぬはなし。是皆不義不德のやり繰、富四郎醉うた紛れに往日佐太夫に語りけるを聞けば、月々の末には勘定撿査とて、一月の仕拂帳を巡檢の家老に見せ、減殺て預りの金額を曝す家法なれば、千兩箱を積累ねて見分に供ふれど、一々其裏を檢むるといふにあらねば、預金私費の月には下積の箱に石瓦を詰めし事二度まであり とかや。さもなくては協ふまじく思はれぬ。

佐太夫に打籠て通ひける頃は、その歡心の得たきばかりに、欲しともいはぬ頭飾髮を買與へし、小間物屋の月の仕拂證五十兩を下らず。これに

揚代を第一として色遊の雜費何くれと積らば二百にも上るべく、或は高利を貪りて貸金の未納等一切を算用せば、隨分一箱空こともあるべし。此度の百五十兩とても此箱の中なる一包半なれば、公然に町人女子などの入込むは、藩士の手前も後護ければ、窓下に呼びて渡さむとの手順なり。

好時分と二人窃に石室が武者窓の下を過ながら、佐太夫が咳拂ひを合圖に、富四郎顏を出して四邊を覗ひ、長き紐頭に金包を結着けて往來に投出せば、正助手早く引解き、懷中の證文を出して結付くると、内より手繰込みて雙方も挨拶なしに目禮して立去りけるを、折から筏を流す篙夫が不思議さうに見て過けれど、人は知らぬつもり内證〳〵。

（五十六）

前祝儀、珍らしき物の降れるを好機、これから舟で上流と、百五十兩の懷中に寒氣を知ぬ雪見舟、櫓拍子徐に巨燵の上の小酒盛。なるほど女子のいふなりにぞくりと出すほどの男は。如何したとえ？ 一盃飲盡て佐太夫に侑しながら、御人相見るから知るとの一言小癪に障りて、此罰中め、我はむかし隨分世話になりたる廉もあれば、かく氣を揉みて石室にまで迷惑を懸けさせぬ。いはゞ義理は我より貸主にあるものを、白痴と云はぬばかりの口上、自己は情人の所存が憎し。一寸舌を見せたまへ、斷れはせざりしか、言へば言はるゝとて無法なおつしやり樣、此方樣にはどれほどの白痴に見ゆるか知らねど、佐太夫の眼には一知半解の美男よりも、實意ある蕃瓜が好もしい姿に見えまする。內の幸助殿と二幅對の業平樣、餘り惡くいふて下さんすな。ほう、是れは知ざることとて失

禮御免、兎角當世の女悦は、井出の玉川山吹の色男とは、酒機嫌の惡詭半分か知らねど、さりとて面憎き言草、その頰骨に噛着いてやりたし。其よりなほ痛き事してこの鬱忿を霽さんものと、遽かに酒に亂れたる風して、其往昔正助と首尾の夜の光景を彼此と語出せば、忘られぬ思ひを煽られてもや／＼と心亂れ、膝を崩し、身を振り、箸も盃も捨て夢現になりける、なほ、思ふに思はれぬが戀の通例とて、我も終に家暮に根引かれて、かく世話女房に窶れて果つるかと思へば、女子と生れたる身が一生の無念と、心あり氣に喞ちぬる粹ごかしに脆くも仆れて、人の弓は彎れぬ世諺、我も見過々々口惜事と、なほ心あり氣に答へければ、もどかしや、義理といふもののなき世間ならばと、有情の流眄に正助力を得て、大丈夫此方物と無遠慮に擦寄り――ひたと兩體を密着けて、此で義理も糸瓜もなき世間と障子を立切りぬ。

此日暮正助歸宅して醉醒め、財布の底を叩けば、ころりと五十兩一包。

ちェえ！馬鹿な事を、不了簡なと嗑めども嗑まれぬ臍緒切ての失策。おのれ、狐め！えゝ夢であれ〳〵。

（五十七）

色狂の果は紙衣、その離の時節ありて、幸助の母親死去ぬ。原因はといへば子が可愛さ、積る苦勞に支柱の老木折れければ、仕送金の路忽ち絶えぬれど命は惜しや、さしあたりて饑渴の苦しさ紛れに明日の思慮もなく、衣類手道具あるにまかせて賣沽却すほどの境界に逼められながら、むかしの榮華は口に目に身に染着き、朝から鴨を好む始末に家内はだらしなくなり、揚句は拗りて喰はむ疊まで失くなし、高價買ひし家宅を、頭下げて無代同然に人手に渡し、何というても甲府は此方の古里鬼も棲むまじ、まして御父樣の御息災なが愁の中の歡喜。まづ此へ志ざして二人糊口の蔓にも有附かむ、と佐太夫の言葉はさる事ながら、我も俵屋の幸助、乞食はづかしき夫婦連にてうそ〳〵と、故鄕だけに行かれぬ不面目。此身の意氣地なしを披露に罷趣す分ならば我慢もなるべきが、俵屋

の大事な暖簾に江戸の泥をわざ〳〵脊負て行て塗る事は、かくても畜生ならぬ幸助には出來かねる、と道理は至極なる挨拶なれば強てとは勸め難く、さればとて饑らむ島はなし。佐太夫一氣象の女人なれど、乞食までに成果てむとは思懸けざりければ、案じて案じぬきたる結極、ふと思出ぜしは上州松平右京の藩士に、貝原源八郎といふ武人あるはずなり。この士佐太夫が二十三のまる一夏より秋へ懸けて通徹けるが、田舍氣質・の實意に附込み、家暮誑の血起請を書きて、此身廓を出し後身の寄邊を失はゞ、何時なりとも尋ね來次第妾にすべしとの誓紙を取置きたるは、人の行衞は測り難く、もしもの事あらむ時の、役に立たむは好もしき仕誼ならねど、一先此士に哀訴き若干の支度金を貰ひ、それを此方樣に渡しますほどに、手切と思うて其を握つて志す方に身を寄せ、お一人だけの活計を工夫したまへ。商人の家に生れても算盤など持馴れたまはぬ此方樣の事なれば、とても二人一所に暮さむほどの渡世は覺束なし。御縁も

あらば重ねて。名殘は惜しけれど暫時離縁て下され。何事も此方樣のお益と因果を無理合にして、現時は二人ともに江戸が故鄕、上野の鐘も今宵を聞納めと進まぬ足を引きずり、上州高崎に賣れたる親分顏、荒町の關內惣右衞門といふ旅籠屋を便り、此所を足溜にしてまづ貝原と尋ねれけば、其人住むと聞くに船を見たる流人の歡喜、幸助は淚を流してやれ嬉しやと安堵の緩氣より、旅疾出で身動憂く倒るゝほどの初心さ。之を手放しなば百兩持しても、一月の內に乞食と流石に不便を催しぬ。

久しぶりにて懷かしや、ようこそ尋ねたれとは口上ばかり。源八郎の姿を見れば昔と變りて、何所となく影の薄さに胸まづ轟くを推鎭めて、零落の段々を語れば頭を搔きて、なるほどその約束はしかとしたれど、我も浪費過度に首尾惡く、女房子を荷厄介なる身上のしがなさ。空言とも思はゞ恥づかしながら宅へ來て見てもくりやれ。さりとて武士の口より一旦かうと交へたる言葉は背かじ、力の及ばん限り算段して見むとて立

歸りぬ。
其翌々日の早朝十兩を懷中にして來り、秘藏の一刀まで質入して、工面の金子が纔如此！思ふ百分の一なれど寸志なり。金子と思はゞ腹も立つべし、寸志を受納くれよと氣毒顏に述ぶれば、大概源八郎の身元も人に尋ねて、其言葉に相違なきを知れば、取に足らざる十兩も、ある家の千萬兩に越えたり。その實意はなか〳〵嬉しく、突還さむは心無やうなれど、これしきにては此所までの路銀にも消ゆべしと推戻せば、源八郎薄氣味惡く、此上は身を絞りて血は出もせむ、金子ならば一錢も才覺の方なし、と膏汗を流して途方に暮れけり。

（五十八）

此一間の客の所爲、可怪と覘みたる惣右衛門の鑑識違はず、果してかうした事と、障子の外に立聽せしが見兼て飛入り、及ばずながら雙方の便益に惡からず計らはむ。ともかくも段々の始末を委細聞せたまへとあるに、佐太夫自一至十を語れば、之はいづれも樣に一理あり。お宿を致たるも何かの御縁なれば、此場は亭主が貰ひまして、些少ながら持合の五十兩お立替申すべければ、御不足なるべけれど其にて御了簡なし下さるまじきやと言ふ。當の敵は古鍋ほど金氣無きものを、何を目的に此上に慾を張らば、もとより關係無き宿の主人に手を引かれ、虻蜂取らずにならむも口惜し。了簡の仕所、足手纏ひの幸助だに拂ひなば、世間に男子有む限りは、此身はいかにともなるべしと分別したれど、例の氣象なれば、因縁なき金錢受けむは不愉快、と辭するを亭主笑ひて、それしやの

果とも思はれず家暮堅い事。金子を無錢請るが可厭とあれば借た分になされ。五十兩は幸助樣にお渡し申して、お花樣はその抵當に惣右衞門當分預りて、來年三月の晦日までに右金子御持參の上お迎ひにお出なされ。もしまた一日なりとも期限過なば、お渡し申す事成難しとは、世智辛さ世中に五十兩、わけもなく借むは神か佛か、慈悲なる心掛と驚きしに、なるほど此所かと佐太夫其意中を見貫きたれど、もとより幸助と離れたき心願なれば、好機會に得心して金子を納むれば、此場はさらりと落着して、源八郎呼吸を吹返しても、來しり時の威勢はなく、店のものにまで挨拶して歸り行くを、亭主見送りて帳場の女房に向ひ、長いものには巻かれよといへど、其長いものを巻くは……其ゆゑにちとお稼ぎなされ。いや、とんだ所でお談義。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

何を其樣に鬱ぎたまふ？　圖らず五十兩も手に入り、之を資本に此方樣

の心懸次第、商賣に大吉利を獲るならば、勘當もゆりて五代の俵屋幸兵衞となり給ふ今日が首途に、今までは一所苦勞せし花にも、ちと嬉しさうな顔見せて喜ばせて下され。　喜びたくば勝手に喜べ、おれは悲しいと渇るゝ意氣地なし。　想ふに離別が可厭の未練と擦寄、悲しいとは何事か聞かせたまへと言へば、流眄にかけて、薄情女、悲しくはないか。扨は此度の離別か。　いや、悲しくはないかといふに。　それゆゑに離別かと聞きましたに。　知れた事、離別が悲しくはないか。　我男子さへ何となく心細きに平氣なる其方が面。我は知つたぞ、薄情女め！　知つたとは何を？　えゝ言ふな、知つたぞ！　此方は知たか知らねど我はすこしも知らぬ事。　えゝ言ふな、知つたわ！　えゝ此人は沒分曉漢、知つたとは何を知たのやら、獨合點せずとも理由いうて聞かせて下され。汝はぬけ〳〵〳〵と能く其様に言はるゝもの哉、五十兩如き小額を推戴き、所天ある身にして我まゝに身體を抵當に置きたるは、元木に勝る

末木なしとや、かの源八郎に戀を焚して貧き我に見替へ、金子も彼奴の手より出だるものを宿の亭主が義氣に見懸け、往生窘に納得させて、此幸助を手もなく逐拂はむとの姦策、江戸にて喰詰め、還るべき家はなく、渡世の方はなほ無く、此儘二人密着て居ならば乞食なりといふ。此身は世界に其方に見替ふる家もなく財寶もなし。たとひ食ふや食はずにあるとや一つ酒菰に添寝して、草枕の夜露にぬるゝを無上の娯樂なれば、乞食とはおろかなる事、死ねとならば——一所に死ねとならば、其さへ可厭とは言はぬ心なれど、身に替へて可愛き其方を乞食にさせむ事の、不便さばかりに引ずられて上州くだりまで來たれるものを、この眞實の百分一も見えたらば、いかな惡蛇でも害は爲まじきに、馴染なき國にまでおびき出して、怨恨に死ねとの惡戯か、罪深過たる我を翫弄びの仕様。腹が立つ、口惜しい、無念だ〳〵、と五十兩を疊に打着け、身を悶えて泣出せば、佐太夫わざと腹立たしく幸助を突遣り、これ喃邪推も節にし

たまへ。此家の亭主が聞かれたら折角の厚意を無にするのみか、無い腹を捜りての遺恨立を立腹して、命の蔓の五十兩を玉なしにすべし。えゝ五十兩が何だ、命の蔓とは忌々敷言草、おのれまでが我を輕侮るか。不用わ、不用わ。此金子唯の今還して失せよ。其方にも今から暇を與れた、と狂氣のごとく涙まじりに叱るを、二時間餘に組伏せたは、兎角手管は吉原仕込の事。

（五十九）

佐太夫は蚊の喰ふほどにも思はざるを、幸助張合なき離別の涙に手甲を濡しけるに、これも一つの慈悲罪障消滅の端にもと、驛外まで見送りければ雀躍して實意を歡び、少時棒鼻の掛茶屋に憩めば、見る目は老女一人とて幸助憚らず聲を立て泣くを、空言八百に賺宥めてやう〳〵發足せぬ。

後は馴染なき地に同行なきも寂しく、なほ由縁なき家に食客の窮屈は、無錢にて飯喰ふ事を思へば氣儘に足も投出されず、客分に扱はるゝほどいよ〳〵可愁れば、何なりとも相應の役用を授けたまへ。自墮落上なれば一廉の用には立つまじけれど、客の給仕などは苦もない事、かうして一日所作のなきも切なきものなればといへば、吉原の太夫樣ともあるものを、此僻境の給仕女につかうたら、諸大名のお部屋方には何が成る、

冥加ない事はせぬもの。何程あればとて行水湧かすに伽羅は無益、急かずとも今に好買人の附くを待ちたまへ。食雜用々々々とて兎角氣毒がりたまへど、江戸と違うて田舍は、あれ、米俵が裏に轉げてあるものを、此方の二人や三人口が殖ゑたればとて、どれほどの損失が立つものにもあらねば、心置なく何日までも落着きて時節を待ちたまへといふ。其を推してともいひ難く、二月餘それなりに暮しぬ。

亭主に大事がられて奥の一間に起臥の姿は、旅人に見るものはなけれど、二百人といふ子分が出入劇しきに、何時識られて沙汰されて、親分の小指と唱はれける浮名女房の小耳を痒がらせ、家内可笑く紊れの樣子を見れば、此家も永き臀の据所ならずと覺悟の折から、岩鼻の代官なる松浦權平といふ好色家に見出されて世話さるゝに定まりぬ。何の事もなく此年は暮れて明る正月、三月懸にてやうやく此の老士を丸め、仙壽樓といへる大普請の料理店を開きて、庭つゞきの別室に權平が忍びの伽の同衾

は内證、帳場に構へて萬端に釆を揮り、庖人酌女その外の奴婢二十餘人を女の手一つに進退して、萬事を江戸前に仕立てけるが人氣に合へば、日増の繁昌に浮かれて此に身を定むるとの心にもあらねど、可厭にもあらで三月の末とはなりけり。

よもやと思ひたる幸助、薦は被らずむかしの姿になりて尋ね來り、五十兩を佐太夫に手渡して、之を引替に明日にも同道せんといふ。見らるゝごとく此店は惣右衛門殿の出店。金子の恩あれば奉公同樣に、我が預りまして是までに仕出したも、此方といふ所天ある身は妾手懸となりて色を賣るべきにあらず、さればとて女人の身の外にこれぞとの所業はなし。此商賣を思ひ着かれたを幸ひ假の主人となりて、此方樣の迎ひに來たまふを待ちに待ちました。今宵にも連立て行き度は山々なれど、今我が無くては此店明日より立行きかぬるを餘所に見むは、なんぼう借たる金を返すからはとて現金過ぎて薄情なる所業。さりながら待焦れたる此方の

顏を見れば、一日も此家に居る氣は爲ければ、惣右衛門殿と談合して好樣に計らはむほどに、今宵は關内に宿を取りて吉左右を待ちたまへ、と一先逐還して遠に惣右衛門を呼寄せ、權平方に人を走らせ、二人揃へてこの始末を語れば、いづれも當惑の眉を顰めぬ。

大畧は識れど此方の了簡をよく聞せたまへ、と惣右が詞を佐太夫笑ひて、誰しも聾の所天は下さらぬに、現時の商賣は不思議に性に合ておもしろければ、幸助とはすつぱり手を切り、仙壽樓の姉御の事と答へけるに權平喜びて、さらば爰に二百兩を離緣金に、怪物を拂へとの依託を惣右が唯諾、五十兩の封のまゝ差戻し、別に二百金を見せて幸助を談ずれば、去年は江戸を出る時、此樣にて古鄕へは足踏ならぬと、男子らしき口上吐たるものが、生木を裂れし苦惱には何事も替られず、のめ〳〵と甲府に立歸り、甘き親類をたらして首尾よく歸參の上、また〳〵二三百兩引攫ふて連れに來たりしほどの幸助なれば、實家俵屋の相續と、こ

の佐太夫を擇二にいづれといはゞ、これじや〳〵と佐太夫の腰にしがみ附くべき大墮落の幸助が、何として戯言にも得心すべき。女房の賣物は御座なしと刎返して、惣右一生の辯を此時と掉へど更に取合はず。相談は中絶にしてまづ此次第を二人に語りけるに、其儘捨置きたまへと佐太夫のいふに任せぬ。

待てども挨拶なければ、幸助仙壽樓に出向きて逢むとすれば、客衆に連られて留守などゝ、幾度行けど絶て對面ざれば、怨念の餘り突詰めたる刃物三昧に驚かされ、馬鹿の一心は可怖物と女人の方より詫入り、手を引れて甲府へ行くとも、直に遁還れよ――おつしやらいでも合點。

（六十）

引かるゝまゝに甲府へ行けば、幸助はまた〳〵勘當の身上とて、なほ財布底に微少の音するを頼みて驛外に世帶を持ち、二月ばかりの居喰に釜中に物盡きぬれば、浮む瀨もあれと甲府の廓に身を賣り、娼々屋の女抱となりと此國開國以來の八文字を蹈みけり。

江戸新吉原に名代の太夫落とて、色沙汰近國に陰れなく、四月にして信州松本在なる豪農細谷甚左衞門に請出されぬ。

貢色の間は幸助に月々貢ぎて、人知れず折々の首尾に悅ばせけるが、此度甚左方に引取らるゝ始末を語りて、長くとはいはず、二三月ほどにて必ず遁歸らむを待ちたまへ。其間は不自由せぬやうに彼地より餽餽らむといへど、幸助いかな肯かず。兄分にして同道せよと理非も分らず逼りければ、とてもゆかぬ奴と、甚左は一足前に發足して、後形附に殘れる

重手代に一十を明かし、門出は明日といひ觸せし前夜の五時過、闇に紛れて幸助を遣去に駕籠を飛ばしぬ。

半里餘を一息に馳けて、この坂道は一骨、さつと汗を拭いて一服と、舁夫等勇みに勇むで來懸る杉並木の蔭より、幸助跳出でゝ理不盡を言懸け、たとひ賣女にもせよ、所天あるものを一言の斷りなしに連行くは、勾引よ密夫よ、女房返せ、返さずば出る所へ出て取て見せう、と血相變へて手代に捻懸け、懷中に白鞘の短刀を呑みて、挨拶次第恐ろしき事せむ氣色なれば、かく魅入られては力窘にて遁れがたしと佐太夫曉りて、手代に相談を着け、甚左へは內密にして幸助を實兄と觸込み、松本へ同道と事極まれば後に可怖ものなし、と其夜は程なき次驛に宿り、三挺の通し籠にて松本に安着○

手代口を愼みければ幸助實兄にて通り、甚左にも殿付に呼ばれ、寢て喰ふまで難有き身分の樂なるに、心の中はもや〳〵と、我物を老夫めが我

物顔なるに堪へがたき悋氣を、破滅の端緒と佐太夫獨り心を傷め、人の見ぬ間を覗ひては其不了簡を諭せど、幸助いつも首を掉りて、冷たきものは猫の鼻と傾城の心、吁伊左衞門のいうた通り、おのれ襟元に着て幸助を袖にするな。義理といふものが其では濟まいにと、我耳の聞えぬより內證話の聲高なるを、聞者ありて甚左に告たりけるより、胡散臭と考着れて、幸助が無遠慮に纏綿ふ風情目に餘りければ、睦し過たる同胞も見苦き物、と案の定投出されぬ。

幸助人間は喰でも生らふものとの覺悟か、結句之を歡び、目的もなく佐太夫を引ずりて再び甲州に還り、善立寺といへる門徒寺の奥座敷を借りて、昔の影はなき淺ましの二人暮。佐太夫今歲二十八とて殘花の時節に及べど、なほ色香深く雜木山の一本櫻と、東郡別田の大造酒家葦澤茂右衞門に湯歸姿を見染められ、妾にとの所望をもはや可厭なりと言へば、幸助思入りて手を合せ、干葉の味噌汁澤庵の尻尾に瘠さらばひ、なんぼ

う寺に住めばとて、これ幽靈のやうなるむかしの榮華男を不便と思ひ、慈悲じや〳〵、拜むほどに少しの間なりと辛抱してくれとは、何程好たる女人の傍が好ければとて、ひもじくては協はぬ理。眞實その心ならば一年が二年なりと、奉公はするに苦もない事。さりながら松本にて懲たれば、大概ならば斷りたきものと十二分に膏を絞り、必ず〳〵悋氣はすまじきとの契約にて、茂右衞門方に引取られけるに、二月とは辛抱ならずして、五月蠅ほど兄でござると尋來ると氣取れ、また〳〵永暇といふ所を、此男には露ばかりの未練なく、義理づくの女婦なれば、二世までの緣切りて幾久しく此家の御厄介になりたき心願。此方幸助に心殘こらぬ證據は、つひに一度の不勤せず、また首尾の外出だにぜざるにても知りたまへと、是ばかりは佐太夫が口から此までに幾度と數ふるほどの眞實の一つなれば、欺騙さへ實事に聞かする辯舌に律義なる老父は納得して、手離金百五十兩にて此後は他人との證文を取りければ、幸助も大概

に断念め、これを資本に連雀町に住ひて小金貸を始めけるに、慣れぬ業とて多數貸倒に弱り、何の思慮ありてか鰍澤へ引移りたりと聞きしが、翌年の五月十四日、あれまでにして戀を仕遂ず、傷しや病死と人の傳聞。茂右衛門五十路を踰えて衰弱の閨房疎遠を識り、養子二代の茂右衛門佐太夫に懸想し、夜々這忍ぶ事のうるさけれど、此心に從はずば春秋なき隱居亡くなりての後は、讎されて放逐られむも意氣地なしと、此子細を隱居に語りて暇を乞へば、貞實なる心を喜び、此身代今は我物ならねば、手元に有合せたるを心ばかりと涙金を貰うて此家を出けるが、世には女人に廢物なく、また鰍澤に豪家と聞えたる呉服荒物問屋なる倉田寅造とて、六十七歳の老夫なるが上、べろ〳〵に顏の崩れたる癩病者の召仕にぞなりける。

金が欲しさにかと聞けば其心にもあらず、心願ありて同衾はなり難けれど、唯作りける罪の無量なるを消滅せしむる爲なれば、及ぶほどはお世

話申すべしとて、我から勸めてまづ草津に伴ひ、それより道々の溫泉に一月二月逗留して、過るほどの靈場に參詣し、滴る膿を吮はぬ計り手篤き介抱に、寅造ほろ〳〵と嬉涙を滴して、旅枕の伽にこれまで聞きつる其方が罪業は、多くもあり深くもあれど、我への眞實はまた譬ふべきやうなし。此報恩の一念ばかりにても地獄へは我が遣まじきぞ、と夢にも口走りて歡喜にいよ〳〵張合つき、それより祖師波題目の靈蹟を拜み、一人は宿世の罪、一人は未來の罰を免がれむと、佐渡までおし渡れる頃には、爛れし病肉乾凝りけるより、引返して本宅まで送屆けぬ。

家内は擧りて神佛のごとく恩に感じ、長くこの家に留まれといふを夜脱して路に黑髮を斷拂ひ、再び男は持まじきぞと、二十八歲より今年六十二歲まで清淨無垢の寡居。今は知音の方に寄食て薪水の勞に奔走り、車に乘らず、魚を喰はず、絹物着ず、遊山に出ず、かねて谷中長安寺に一基の石塔を建て、三十四名の遊客の亡魂を祀りけるに、月々の墓參を老

後の勤務にして、其昔は千兩にも唾を吐けざりし身が二錢三錢を仇費せず、之を香花の料に回向を賑しぬ。

大悟道、大發心、その種には何が成りけむ、聞洩らしつれば實事を誤らむかとて蛇足を加へず。好事士の尋ねたまはむとならば、團子坂大松葉の寮に老女なほ住めり。

（二十四年十月）

おぼろ舟（二人女）

（一）

淺草第六天の後門前に年古る二階家あり。軒看板に雇人御請宿と律義に見せて、田舍茶屋、行娼妓出稼など、不德なる女人商賣のあらゆる事に口利かぬはなしといふ。この店の一切は、外貌一癖あるべき老女が手一つに切廻はし、むづかしき談判などもさら〳〵と埒明ける事、血氣の男子も及ばず。慾に逐ひ役はれて、寸白も血道も覺ゆる間なく、佞辯べちやくちやと喧ましければ百舌鳥屋と呼ばれて、相撲屋といへば如人寡なし。はや店口の暖簾とりいれ、豆腐屋の賣聲せはしく、腰高障子を立て釣洋燈を點す頃、淺草橋にて鐵道馬車を下りたる男二人、一人は濃鼠の中山高を冠り、黃絲勝なるすこッちの、題巾つきの二重外套をぞろりと引懸

け、裏白の紺足袋に極低の駒下駄を穿き、右手の羽翼をうるさしと後へ跳ね、琥珀首の小太きぱいぷを取出し、かめれの函に仕込みたるおるどごるどを挿して、蠟寸燐の擦火に一吹くゆらし、調子高に何やら話しかけられし今一人は、黑の高帽子を前のめりに載せて、縞すこッちのもおにんぐに、洋袴は藍と茶の牛蒡縞の綾織細く仕立て、羅紗入の釦占の深靴を穿き、俗に華族外套とて裾短なる、鐵納戸のおぶあこれとに同じ色の天鵞絨の襟をつけ、いかにも高等に見せたる扮裝。物言小音にて穏かに、容貌は同伴とは表裏にて、女にして見まほしき華車形なり。三十には少し間もあるべき年輩。新規の學士か、其にはちと砕過ぎたる所あり。官吏といふ所はてんからなく、是ほどの男前にては、通常嬌冶たきものなるを巧に避けて、小意氣に色めかさず見せかくるは、その道には狼が羊の皮冠なるべし。　和服の男は色黑くでつぷりとして、四ッ五ッも兄と見えたり。　風俗骨格是は商人に紛れなし。なれども店に物品を列べ、

常住帳場に萎びつかねばならぬ業躰ならで、錢になりて身體の樂なるより、夜は家に寢られぬ曲者の種族なり。この男高笑ひして、今日は餘り取急ぎ、湯へは流石に入りしが、髭を剃るのをはたと忘れた。此處に剃刀のあたらぬばかりに、二割方男を下げたりといへば、洋服の男も笑ひ、八九分まで吸ひつめたる葉卷を捨て、唾を吐きて、まだ色氣があるのか。尙とは何がまだ？　面皰ふく十六の春から其年まで、一日も欠さず香水を用ひつめ、大方二萬六千ほども瓶を空けしなるべし。其をほやのこはれにやりし錢にても、小袖の一襲は出來るほどなれば、正味のまゝ唐物屋よりの仕入高は、思ひやるだに身の毛も彌立つばかりなれど、その割には格別羨ましき話もきかぬが、香水を媚藥と心得た了簡が初々しくて嬉しい、さればこそ花簪どもはとやかういひもせめ。年增と御座らばまづこの方の繩張内と、頤を突出して撫でぬ。此挨拶にて此男の人相はあらかた知れたり。同伴の男は笑ふて聞流し、淺草橋を渡りさる

時、柳橋あたりより風が持て來る連彈の絃の音に耳を立て、あれ〳〵黄金の飛ぶ音がする。極樂淨土にありと聞く、妙なる音樂とても及ぶ事ではあるまいといへば、其天樂も聞古し、歌舞の菩薩も普賢樣も鼻について可笑からず。遊蕩も大方盡きたり窮めたれば、色戀は世間の家暮にまかして、我等は此道の非職願。されど呼吸の通ふ間は、何がな樂みなくては忍び難く、其心を外に慰むるよすがもがなと、貴公が註文榮耀の餅の皮、其もまた味のあるものなるべしと、色々求むれど扨ないものなり。去る家暮てんが語草に、いひ出したる尾を摑むで探訪して見れば、いやいやうかとは死なれぬ。世間にはいくらも人知ぬ面白き事ありて、聞捨にならざる別世界。これを錢をしみの奴輩に、こそ〳〵と獨占にさせておくこと無念といふべし。さりながら其も色氣ありては興少し、貴公などはまだ〳〵如是畜生なれば、我の如くにはゆくまじけれど、もし執着の一念動きなば‥‥。やれ待つた。さほどの大智識がなぜまた髭を剃ら

ざりしを、今じだんだは蹈みしぞ。數の仙人の中には隨分戀に脆きがありて、井戸端に落ちたりし例もあれば、其格かと嘲れば、額を叩いてははと笑ひ、婦人に見せうとて髭を剃らんといひし覺えは曾て無けれど、總身髭などゝいふものは、鼻の下に空地のあるやつが蒔くものにて、通の爲ぬことなり。われ是を剃らずば、延ばさん下地かなぞと、人の思はんも愧かし。我家秘傳の一卷に曰く《黃金のある間は髭を生すも苦しからず》とかく戀には緣なきものなりと、多愛なき事を言合ひ、百舌鳥屋の門にて立ち留り、何やら耳語して、すぐ其隣の狹き路次にいり、闇を手探りして犬の足にも踏當てず、勝手はよく知る樣子にて、和服の男案內し、一間目の格子がらりとあけて、婆さんとよべば老女飛び出し、おや大分お遲いお入來、お待ち申しました。一同揃うてをりまする。さあ〳〵といへば、和服の男、格子の外に立てる同伴に聲をかけて奧へ入りけり。よく見れば此家も百舌鳥屋。不！思！議！

(二)

婆を先に立てゝ階子しと〳〵と昇れば、三尺巾の廊下を堺にして、座敷二間に分れたる二階なり。表座敷の紙門に火影洩れて、二人が昇らむとせし時には、話聲のするやうなりしが、足音響くと等しくばつたりと寢めば、二人は顔を見合せ、微笑を交しつゝ、年少男が和服の男の腰を突けば、振返へりてまた笑みぬ。老女は裏座敷の障子を開けて此へといふ。八疊の座敷なり。疊は大分汚れて居心惡げなれど、床間の前に更紗の座蒲團二ッ直して、其前に眞鍮の燭臺二ッに百目蠟燭を點し、それから二十分も經ちたるかと覺しきほど蠟涙流れて、心黒く光明薄ければ、婆は心切りて少し燭臺の位置を替へたり。北の圓窓に、胡麻竹の格子をいれて、西は茶壁一間押入一間なり。　二人は蒲團の上に胡座を組み、桐の角火鉢を引寄せて、手持無沙汰に後方を見遣れば、可笑や！　床には無

くてかなはぬものと覺ぼえたるもしほらしく、紙表具古びたる細物の幅を掛け、篆書に髯題目を等分したる筆意に壽の字を認め、是にも落款はあり。八兵衞謹書とでも有しなる可し、蟬形の籠花活を四谷丸太の床柱に掛け、苔のまゝ萎びたる梅の枝振惡きを投入れ、不思議なる形の自然石を、緋めれんすの三蒲團に載せたるは置物の心か、疎まし。老女は木綿ずくめの小清淨としたる打扮。白髮まじりの髮をおばこに結ひ、飴色の笄兩端短く、斑點の油つきたる櫛をさして、客の前に額づき、手を叩きて茶をせき立つるも馳走の一ツなり。旦那樣生憎今夜は、よき子兩三人かねて目星をつけ置きしものありましたれど、家に故障あるよしにて參られず。されど昨日一昨日の二日といふものは、八方に手を分け、醜からぬのを撰集め、漸く七人まで呼びまして、彼方に一同待たせておきましたれば、只今直にお目に懸けまするといへば、和服の男頷きて、美好が來ぬとは口惜しき事なれど、來ぬものは是非なし。下谷より

淺草くだりまで、お多福拜みに態々足を運びしにはあらねど、來た序でなれば辛抱して眼を貸してやるべし。先づ其處へづらりと並べて見せよ。日和に今戸をぶらつけば、幾個も乾してある代物なるべし。これは荒物の買ひ出しに來たやうなと笑へば、老女は右手を擧げて打消し、聞えますぞえ、お口の惡い。お子さん等の前にてそのやうな事は決して仰せられな。眞實の生娘なれば居たゝまれで遁げて行かれましやう。扨子からが惡いと申しても、此老女が目鏡を懸て、とッくりと下見せし上の七人、惡いにも種類がございます。見もならぬ先から其樣におけなしなされて、萬一御意に合ひましたお子のありました曉には、旦那樣は何と仰やります。其時になりて此老女に頼むとお手を合せたまふな。いや、また此老女も頼まれる事ではござりませぬと、すぼめる口に手の甲あてゝ、黒光りの齒を少し見せて、ほゝと笑ふさまは、氣の善いやうに見えながら、又物凄き所あり。客も哂ひて、其程強い口上をいふには、腹に應がな

くてはなるまじき事なり、何時までも氣を揉ませずと、手なり足なり合せて頼むやうなのを、早く拜ませてくれぬかといへば、老女はかしこまりて障子の外に向ひ、お仕度が宜しくば何卒お一人づゝといひて、座を壁の方へ下ぐれば、障子の外には四十恰好の番頭、かねて呼出しの役とて待かけたるが、老女の相圖を聞くより表坐敷の紙門を開け、入口近き女人に向ひ《あなた樣》といふ。此座敷を見るに、かの老女に召集められ、日暮より控ふる女等の屯所なり。十六七の少女あり。又は八九のもあり、廿歳越したるもあり、三十に近きもあり。少女粧の年若き女には、一一母親らしき者附添て、後面より襟を正し、髱に心を附け、帶を引張りなどして、時刻今やと待構へたり。中に藝者風の婀娜に粧りたるは、二十四五より三十近き女に多く、此等には介添といふものなけれど、更に憶せぬ顏にて我と姿をつくり、つんとして煙草をくゆらすなり。これらの女人どもを何かと尋ぬるに、孰れも妾奉公圍者、一月定の閨房の

商業を望みにて、此を受宿に頼み置けば、妾欲しきといふ男の申込み次第、日を定めて目見させ、其上にて客の氣に合ひたる女人は、此處にて給金を定め、明日からは旦那の出來る事なりといふ。今宵はまさしく其目見なると覺しく、先第一にいかなる女人や顯はれんと、客は膝を組正して障子の開くを待ちかけぬ。

（三）

障子さらりと開く。それ！と見れば、見たる處廿一二なり。老女が後方をおづ〳〵と通り、燭臺に遠ざかりて坐れば、も少し前へと老女の言葉にじり〳〵と進み、頭を下て手を支へぬ。此奴心意氣が知て最初から可厭なるは其結髪なり。お部屋樣は如此あるものと覺えたか、漣うてる赤毛を三輪に結ひて、紫鹿子をふさ〳〵と繋け、絹縮の二度染ねぼけたる黑の羽織に、洗晒らせし緋裏をちら〳〵見せて、八丈の黃色濁れる小袖一枚着て、見すぼらしき姿は我慢もなるべきが、ちよつぽり眼眉間遠に離れ、鼻低く頰紅みて脹れたるに、面皰犇と吹出したるを、委細搆はず厚塗の白粉斑點づきにして、口紅けは〳〵しく光り、其顏にて差しげに見向かれし時、二人はくッと笑ひを呑み、我と股を抓りて堪へぬ。老女は優しき聲音をつくり、貴孃は何處にお住ひなさる〻やと尋ぬれば、

蟲のやうな聲をして赤城下といふ。御兩親樣は揃ふてお壯健かと重ねかくれば、揃ふて居りますといふ。話し斷れてはしよげると見て、老女はまた、其はお仕合せな事哉。何の御商賣を遊ばしますと問へば、商賣なぞは致しませぬ。父親は印刷局へ勤めて居りますといふに、此女大方後家人抔の娘ならむ。商賣などと賤しみ、官員といふが自慢の心中可笑かりし。お名はと聞けば玉江といふに、愈可笑くなりて、玉は玉なれど珠數子玉か、但しは評判の玉江と囁きけり。　年齡を尋ぬるが目見の最後にて、彼方へと老女がいふに任せ、立たむとせしが、嬌羞に足がすくみたるやら、見苦しく震慄、面を火のごとくにして挨拶もそこ〳〵に出行けば、入違うて顯はれたるは年輩二十七八とも見えて、眼凹みて臉色づき、黒元結の汁に薄眉毛を塗抹たれば、首尾氣味惡く際立ち、骨ばかりにて頬こけ、唇薄く口大く、齒列惡きが上に煙草の脂に染まりて黃色に、闇に出遭はゞたしかに幽靈なり。つぶし島田に葛引を繫けて、小粒

なる紅玉の後ろ挿を穗長に突込み、少し身を反らせて眉毛をぴり〳〵と動かし、更に人におぢず、悠然と押出したるは物凄し。赤絲まじりのからみ縞のお召に、星のごとき切附紋したる黑縮の羽織、海老色の短かき四打の紐をちよッきり結び。ちらと見し下着は紙のごとき地薄の縮緬、白茶地に置形の古代更紗。帶は唐繻子に綿繻珍の腹合、延紙にくるみたる懷中物を帶の間に淺く挿し、袖の中に張臂して小褄をとり、萬事藝者に紛らはしたき風俗。之も長座は神經の害とつぶやき、老女が住居を尋ね、年齡を問ひ、兩親の有無などを聞こと前に變らず。どうで用なき代物と其には耳を借さず、匆々追戻しぬ。其次のは少女造。唐人髷を大きく結ひ、兩端に菊の花のつきたる鶸茶の小狗懸をして、櫛は黑塗蒔繪の三日月形、簪は洋銀足に何やらうるさく飾りたり。甲州紬の鹿がすりの仕立おろしに、木綿八端の下着とは見るに可笑けれど、此女を目見に連れて行くが爲に、なけなしの膏血を絞りての算段かと思へば、哀れに

も覺えたり。帶はめれんす友禪、紺地に處々の扇流しを色入に染めて、半襟は海老茶の唐天、何から何まで至らぬ隈なく安いものずくめなり。顏はいかにと見るに、是ぞ堀出し、ぽちやりとして色白く、強ひて言はねば何處といふて難なく、頸足美しく生際濃やかに、丈はすこし無けれど、無様といふにあらねば、相場だに氣にむかば隨分相談ものと、柱に凭れし身を起し、屈みてじつと見むとするに、蠟燭の火に曠がましと、背けたる横顏可愛く、御心なきにしもあらねば、住所を語るに耳を立れば、じき黑船町、父親は去年身まかり、今は母と弟一人ありといふ。商賣を尋れば小聲にて何といふのやら聞えず、二度三度問ひ返へせば、漸く聞えたり、荒物屋。年は、十一月生れの十八、よう〳〵！　こゝな花盛め。散も始めず咲きも後れず、今が丁度賞翫と。之に少し現をぬかし、和服の男乘出して見るを、洋服の男は獨りくすり〳〵と笑ふにも心を留ず、尙頻りに眺めしが、其女が立上る時顏を見合せ、あッ！といひ、ち

え！と舌打すれば、洋服の男いよ〳〵笑ひながら、お氣がつきましたか。藪睨みとは知らざりし。

（四）

おひ〳〵と出て來るに、頰脹れて紅く、手の指新芋を揃へたる下司造りは、今まで何處かのお屋敷にお末などせしものなるべし。此顏にても錢を取る心持が恐ろしく。肥滿の後には瘦細りたる年増の泣顏なるが顋はれ、髮毛のぬけ上りたるに凄くなりて下げさすれば、十四五かと思はるる小娘がちよろ〳〵と出て來て、家の娘かと思へば、これも妾の目見得なり。惣勢七人七色の姿、その中に最後より二番目に出しは、葉草の中の花菫、年齡は十七八にてもあるべし。大柄なれば打見は九か丁度なれど、おのづから仇氣なき風情見えて、これには四ツの膝も思はず進みぬ。御守殿風の高髷に紫の菅糸を繫け、後挿は定紋付の銀の平打なり。丸顏にして肥えたるにもあらねど、肉つきしつくりとして肌理濃かに、色は透通るまで白きが、膩づきて潤澤けく、口元しまりて莟める花を含むが

如く、物をいふたび片靨深く入り、眼は畫美人に見し鳳眼といふに髣髴にて、これに滴るばかりの愛嬌籠り、眉は三日月を懸たり。鼻筋のつんとしたるは、女人には權あり過ぎてしほらしからぬものなり。此女のは高きにあらねど低きにもあらず、眉間下より靜に山を上げて、鼻頭尖らず、そつと撫でたるごとく、小鼻ふッくりと座り、額は曠き方にて生際少し亂れたり。　鼠地に中形の尾花を、一面に亂したる奉書紬の小袖に、疎き三條格子の黃八丈の羽織を着て、袖裏の燃立たぬは氣の毒なり。　歩行にも坐るにも屈む癖あり。　よき事にはあらねど、內端なる氣質見えて、處女の難有き所なり。　見る如き衣裳にて、世間の流行を逐はれぬ悲しさには、其身が小娘の折に仕立てたるを、縫直せし小袖らしく、此歳にしては模樣は不釣合なり、織物は不粋なり。　されど其にはめげぬ容色、西子も若耶の水に襷懸せし折からは、誰も心はつかざりしといへば、是に今樣の物を衣せたらばと、二人は身を顫はせて坐に悅びぬ。　目見濟

めば老女は坐を進めて、お目に留りましたお子が御座りましたかと、其女に氣のあるを見ながら、知らぬ顏にて尋ぬるに、和服の男太き溜息を吐きて、勿躰なしといへば、今一人は美しいものだと呟き、老女に向ひて、扨手を合はせて拜まねばならぬは、最後から二番目の女なり。若干金にて相談調ふべきや。　御意にいりましたはあのお子の仕合。母親のつき添へば、まづ尋ねて參るべしと坐を立ち、表坐敷へ行きて何やらいへば、遽にがたぴしと犇しめき合ひ、階子を下てぞろ／＼と人の出てゆくは、合格せぬ女どもの歸るなり。あとより兩三人の足音して靜に下りゆくは、老女が其娘と母親を下座敷へ伴ふと見えたり。

（五）

後に和服の男火鉢にとりつき、あれほどの容色持ちながら、妾奉公とは慾を知らぬといふものなり。一思ひに娼妓にせば、五六本は我が請合ふて見るべし。貴君一人の自由にさすは惜き物といへば、笑ひて、まだ相談もつかぬに我物とは逸りたる言草なり。あの容色にて處女とならば、眼玉の出るほどの事をいふべし。人手に渡すは無念なれど、素が洒落なれば高くは出し難し。もはや錢金づくにあらず、給金高くして君が手にあはぬとあらば、此男が借金を質に入れても圍ふて見すべし。あれほどの女がむざとあるものならず、我等の伽には職過たれば、籠入にして樟腦をいれ、眞綿に顏を包み、年に一度づゝ出して拜みてもよき慰みになるべし。蕩遊飽果の仙人が、今度此度の惑溺、如是畜生とはそもそも誰の事。今夜の催しといつぱ、一時洒落との約束にて、いかに心に稱

ふ女人ありとも、決して不了簡出すまじくの一札を、取交さぬばかりに誓ひたりしを、精神亂れて眞劍とは、若い〳〵。さほどの執心見るに不敏なりし。奇麗純潔貴殿に讓らむほどに、心置なく寵し給へといへば、準備の好い、もう嫉嫉かと、手を拍ちて高笑ひする時、老女はいそ〳〵として入來り、旦那樣あなたは何たるお仕合と、言はせも果てず、なに仕合とは、あの女が此方を見染めて、妾に欲しいといふやうな事かと、和服の男が眞顔にいへば、老女は笑ひて、まあそのやうなことで御座りまする。只今あのお子の母御樣に尋ねましたれば、何程なりともお思召次第と大人しき言分、あなたはお仕合せで御座ります。何？　お思召？　お思召？　と二人は顏を見合せぬ。老女は語を繼ぎ、先刻も此處にてあのお子がおつしやられし通り、父親は去年亡くなられて、あとには稼人なくなりたまひたれど、今まで月給の四十圓もとつて居られし方といひ、もとがお旗下なれば、活計も見苦しからず、よき道具等のありけるを、

ぽつ〳〵と賣喰にして今までを繋ぎたれど、今日となりては絶躰絶命、賣る可き品はなくなり、便るべき血族も無まゝ、おいたはしやあのお孃樣を奉公に出される仕誼、私も參つて存じて居りまする、お住居などもさまで見苦しからず、またあのお子の母親といふ人の人品のよさ、よしある人とは誰目にも見えまする。御覽遊ばしませ、彼御子樣の初々しさ。此席へ出ると上氣して、碌々お口も利けず、されど行儀作法の正しさこと、なかなか奉公に出さう、出やうといふおはねとは違ひます。私も年來の渡世、幾百人のお子の世話を致ましたなれど、あのやうな容色の美い、おとなしい子を手掛けた事は覺えませぬ。今開化の世は、華族樣方のお姫樣すらお世ずれ遊ばされ、男などを芥ほどにも思されず、其は其は厚皮しい事と申したら、矢場の姉さんかとも思ふ世の中に、あれ位のお子は鉄の草鞋でも、二人と有ものでは御座りませぬ。容色がようておとなしうて、身柄がよいと三拍子揃ふた上に、何程にても給金は此方の

いふなり次第とは、いかな御仕合な事でござりまする。年寄たれど私もし男ならば、あなた方のお手へ渡す事ではござりませぬといふ。お思召とは難有けれど、さういはれて見ればまた此方から若干とは切出し悪し。美醜によりて其方に價格もあるべし、まづお前の量見にては、どれほどの相場か聞きたし。不當に蹈み倒すも無慈悲なればといへば、老女は少時思案し、御容色相當に申しなば隨分なるべけれど、先樣にても此方のよき樣にといふ事なれば、之は此方樣のお德として、これほどにてはと、片手に「はさみ」を載せて見すれば、拜む／＼老女大日如來。

八萬騎の一人なるわと、東叡山の花の中に長刀ひねりまはせしが、今は木枯の夕暮、三橋の袂に泥障のゆるみたる二人乘に、客を待つ間の轉寢覺め易く、糸眞あはや盡くれど繼易ゆる錢なく、世を恨めしき人は數ふるに盡じ。

その昔思ひの露にしめり勝なる丗子住居、下谷西黑門町の裏通りに、曲みなりにも格子戸立て、出牖の障子は紙煤びて、其處に出せる鉢栽二つは、塵埃に汚れたる萬年青と葉蘭なり。湯歸りの娘お藤が門口にて、隣家の女房に挨拶して、すつとはいるを見送り、つひになき此女の朝湯に首を傾け、これも內へいりけり。

お藤は母親の前に兩手を支へ、只今戻りました。大分速かりし。すぐと化粧せよとあれば、手傳ふて下さりましと、連立ちて二階に昇り、東

窓の前に鏡を据ゑ、其前にお藤帶を寛めて兩肌脱げば、刷毛よ水よと母親は前後に走廻り、いとゞ美しくぞ仕立ける。やがて髮を理し衣裝を更へさせ、母親は威儀を正して、今事新らしういふではなけれど、女人の第一に守るべきは貞操といへり。されば其身を失ふまでも、此ばかりは破らぬ女を婦女の鑑として、誰もかくあるべしと、知らねばいざ知らず、よく合點の上にて、此度そちに情を賣らせ、大事の身體に玷をつけさせ、掛替なき秘藏のわが子を、一生の棄り物にさすこと、お前から言出し、得心もしての事ながら、その不心得を譴責べき親の身にして、今日男に見せむ爲に色づくる、手傳までしやうとは、我ながら我身の畜生に呆れたり。親父樣が二三年前兩國橋にて、山村の正五郎樣にお遭ひなされ、十年ぶりの對面懷かしく、見れば山村樣は暑中といふに破袷の引ほどきに、襷の樣なる帶をして、申すも失禮なれど乞食同然のお姿。いろ〱とお物語りの内に、お蓮樣の事をお尋ねなされたら、山村樣は涙を飜し、

萬事は推慮したまへ。いとし娘を苦界に沈めて、もはや五年になれど、今に身脱がならずして、此上は行末二階廻とやら鑓手とやらになりて、生涯眞人間になられまじと、お蓮も生きながら地獄へ墮ちし覺悟なりと、山村樣のお話しを、お歸りの上お物語ありて、まだ〳〵我等は仕合せなるぞ、美衣美食はせずとも。お藤は立身させてとおつしやられしを思へば、山村のお蓮樣の事を思ひ合せて、お前の行末が氣に懸る。たとひ餓ゑて死ぬとも、なか〳〵お前にいやしき事はさせまじき心は山々なれど、二人枕を並らべて餓死の境界に近づきて見れば、口には立派な事をいふては見たものゝ、卑怯な心や未練な了簡起りて、かほどまで淺ましき身の上となりけるか。思へば死なれし親父樣に申譯なく、今日からはお位牌に合はす顏がない。お藤！どうしやうと泣出せば、娘もいふ可き言葉なくて、涙に暮れしが、なるほどおつしやれば其樣なものなれど、お親父樣も我等二人の餓死を、よい氣味とはお思召すまじ。さればとて、申

せし如くお金のはいるべき道なければ、もとより心には染まぬ事ながら、この樣な事を思ひつき、先々月あたりから、毎日のやうにおせがみまをしたれど、露ばかりもお聞入れなかりしにて、お母樣、あなたの御了簡は、あの世の親父樣もよう御存じで御座ります。何科ありてあなたをお怨みなさるべきや。たゞ此藤一人の淫行にして下さらば、それにて事は濟むべし……。　これ藤！何をいふ。お前を淫行ものにさせじと思へばぞ心も碎くなる。われ一人好名をとりても佛樣が見通したまふに。又さる無慈悲を得働く母と思ふか、情けなや。

（七）

お藤は母の言葉を打消し、思も寄らぬ事をおつしやります。さら〳〵左樣した心ではなけれど‥‥若母上樣、今更いふても益なき事、もう言はずと置いて下さりまし。たとひ賤き營業をすればとて、此心を正路に持たば、何日か春風の吹く事あるべし。人を突倒し自分一人いゝ事して、幾萬圓の身代に成上る人もあれど、それ等には優して我等は心安し。二つには又娼妓の勤とは自から異りて、夜毎に枕の變るといふではなければ、あながち肌身を褻し、貞操を壞るといふにもあらず。權妻となりて只一人に冊く身なれば、山村のお蓮樣に比べては、幾段良いか知れませぬ。此上はその方に貞實を竭し、後々冥利よろしき樣、疎略に扱はぬ樣にいたしますほどに、あなたも御苦勞なされず、屆かぬながらも氣樂にして、何時までも年を老らずに居て下されと、手をとり腰を押して、坂

道を辿らせらるゝやさしき言葉に、母親はいとゞ涙を催して、生む時は老の今に心着ねば、我等に孝行せよとも祈らざりしが、此までの養育甲斐ありといふも面伏なお前の心意氣、我子でなくば拜まうものを、お藤嬉しいぞや。不運な親父樣は——！お前のやさしい看病でさへ泣かれしものを——これ程の事を見ずに死なれしはなんぼう御無念なるべし。さりながら如此嬉しきお前の志しを見るやうに成下りたる此身は、運か但は不運か。さしあたりて此處にまた一つの當惑が、胸に痞へてとお藤の顏を見れば、そりや何事でござんす、聞かしてと進み寄る。母親はと息を吐き、お前の旦那樣の事が心に懸る。そりやまた何故に。お前は昨夜お目に懸りたれば知るべし。如何樣なるお方ぞ。人品は什麼、風躰は什麼。人は容貌にて心の善惡の知るゝものなり。お前の見し處を聞かせよとあれば、お藤はさつと顏を赧め、あの座敷には男衆二人居たり。それも年老やら若き人やら見別らず。障子の内にいりしと思へば、どきど

さと胸跳り、顏は焚ゆるごとくほてり、わく〱と頭重くなりて、蹈みしむる足元もさだかならず、只夢の中を辿るやうにて、人顏など朧氣にて、霧につゝまれしごとく……といふに、母親合點して、然もありしならむ。さりながら心に懸かるといふは、其旦那樣の氣質の邪正一つによりて、此方の身の行末、破壞もすべし。將實熟もすべし。金錢に身體を賣るにもせよ、常住睦み親しめば、世間不知はなほの事、其人に揉まれて蓬の叢に獨り直には生難し。世中に惡婆とかいひて、女人の不敵ものの數多けれど、生れしまゝの惡婆は只の一人とてなく、もとはといへば、玉にも花にも比ふべき處女なりしを、言葉に蜜を含みて、舌に劒鋭き「美麗なる鬼」に仕立る事、みな男子の仕業なり。とはいへ、男子ばかりの罪にもあらで、情商賣するものは、浮きたる苦勞こそすれ、身の利益となるべき極楚といふを知らず、針は持たねど小袖にくるまり、甘い物ぐひしながら米醤油の相場知で濟み、いさゝかも家事の心配なきのみか、姑

の氣兼なく、出入るものに行儀を崩し、朝寢、芝居よ、湯治、遊山とふざけまはり、入浴粉粧と氣褄を取るとに可笑き苦勞を少しするといへり。旦那となる人も、氣保養に置く女なればとて、怪我にも身のため家のためを念ふての艶氣なき談話は好もしがらで、いつも〳〵戀慕のうかれ節、僞口說、作嫉妬、そん事を此上もなく嬉しがれば、女も自然其に馴れて、我知らぬ間に自墮落に成果て、庭の熟柹の地に腐れて、一生拾ひてのなくなることぞ淺ましけれ。

百舌鳥屋のに旦那樣の樣子を薄々聽けば、學問衆に優れて世才に長け、年若なれど或商會のよい顏にて、お國の御兩親は去年までに此世を去られ、あとには兄弟もなく、番町邊の官員樣の御內方に伯母御あるよし。今の所は御獨身にて上野邊に借屋し、傭婆を置きて炊炙の世話させ、性質やさしく萬事に行渡りたる旦那と、あの婆のいふ事なれば、虛言半分に聞てはおきしが、其實半分の中に、性質のやさしきといふ事入らば、それに增したる屬望なし。さりながら其は此方の未練とやいはむ。今日から我等二人の守護神ともいふべき旦那樣を捕へて、申すは恐れ多き事ながら、たとへば靑年にもせよ、妾手懸を置くといふ事、誰聞くとも美事とはいふまじ。親人ありて夫と聞かれなば何とかいはむ。親類は申すにも及ばず、物堅き御朋友の耳には、微塵も聞かせともなき行蹟なり。

さほどの事を爲たまふ方に、まづ賴もしきはなしといふを、杓子定規とはいはせじ。十人が九人までは心元なかるべし。淫行男の模様の大體を見るに、茶屋小屋這入、娼妓藝者をとらへての色遊を第一着として、妾狂ひは惡行に劾を經てからの蕩樂なり。之を思へば旦那様の性質が氣遣はれ、母が附添ひながら何事ぞや、娘を惡婆にすること、一時は思ひ切りて面謁まで濟ませ、いよ／＼といふ今日に逼りながら、流石心に愧らひ、益なきに長々しき繰り言を、毒を飮ませてから藥を勸め、舊惡を蔽はむ詭計などゝ恨むでたもるな、お前をいとしう思へばなるに。お藤、無理なる賴みなれど、お前も男の玩弄物にて果つるにあらねば、常に其注意を忘れず、必ず身持自墮落にならぬやう氣を占めて、大事に奉公してたもれといへば、お藤も成果淺ましき我身の情なく、かゝる事に「すれからし」の行末は、どうなる事かと心細く覺えて、男子ならば人力車を引てなりと濟むべきに、なまなか女子に生れたるを悔みぬ。心弱くて協は

じと、お藤は立上り、御母様まあ此處を形附けましよ。おつしやる通りに相違はなけれど、何事も時節とあきらむるの外なし。果敢なき事を言募らば、馬車にて往來たまふ貴顯にも、其相應の御苦勞はあるものを、たとひ貧すればとて、氣の持樣一つにて、さまでの苦なく日は送らるべし。樂にもなき身上に、いらざる心配を求むるは、壽命を我と縮むるに似たり。もう〳〵噯氣にも其樣な事は言ふて下さるな。ようぞ言ふてくれしと母親は濕める眼元を拭ひ、取散らしたる化粧道具を形附け、脱捨てし衣類は袖疊にして押入に納めて、お藤は髪に手拭置き、紙麈を把れば、母親は階子の欄干側の柱に懸けたる、みご箒に手を懸けながら娘を制し、此處の掃除は私がする。衣物も着替へ、化粧もすむだに、お前は下へ行てお茶道具を奇麗にして、火をよく熾して 。あい〳〵。

（九）

女人二人の夜間恐ろしく、燈火點けば表口を鎖すに定めしに、今宵は戸を一尺も引殘して、外面に障子越の火影を見せ、今や〳〵と、巡査の靴音、素通りの車の響に耳を峙て待つ間も、何時來らむも圖られずと、聞き苦しき内證話を愼み、お藤は紙門に映る我影を見ては、幾度か髮に手をやり、から〳〵と湯氣吹く鐵瓶を、下して懸けて、懸けて下して、もう今にと言ひ飽きし頃、人力車門を勇ましく轢り、四五間行て留りしが、車夫の聲らしく、五番地は此三軒といふ。母親頸を延ばし耳を澄ませば、お藤は胸を轟かし、頰の熱氣強く、目を瞑りて火鉢に凭れ、我にもあらて身を縮めぬ。我姓を呼びて、彼處といふ聲聞ゆるかと思ふ間に、其車後戻りして我家の隣に引留まり、違ひますといふ聲して、此度はいよいよ我門口に轅をおろせば、紛れなし、其と母親は立上り樣に、お藤と小

聲に呼び、戸外に目語すれば、お藤は立ちもやらず、母親を見上げて顔を背くれば、彼は一人して入口の障子まで歩寄ると同時に、格子を明けながら御免下さいと柔和かなる案內。はいと母親も障子を明くれば、黒く軟かき髮を眞額に分けたる、細面の色白なる男、黑博多の帶の横にからみたる黃金鎖を、縞一樂の羽織の陰よりすこし見せて、黑の帽子を手に持てる立姿、見るに嬉れしく、お出遊ばしましと慇懃に挨拶すれば、男は小腰を屈めて「松本」と名乘を聞くに、其人ぞと、お藤も火鉢の傍に見ては居られず、おづ〳〵母の後に膝行寄り、何とも言はず唯同じ樣に挨拶したり。まづ此方へといへば、會釋して男は上りながら、車夫を呼びて風呂敷包を取寄せ、車を還して、火鉢の傍に座らむとすれば、此處は餘りに汚穢し。同じ汚穢ながらも二階へと母親先に立ち、お藤、お茶をよ。貴下おなぶなう御座りますと、爪頭のあたる函階子の急なるを攀づれば、二階は六疊一間の二疊に赤毛氈を敷き、三分眞の洋燈を低く釣り、

家飾具とては何にもなけれど、壁に寄せて萠黄古びたる袋入りの琴は一面ありけり。東西に窓ありて、東には細き格子を入れ、西は二枚の障子、この外は朽りたる物干なるべし。母親は武家氣質の當世に碎けず、此度世話になる事、世間見ずの娘が我儘なる事、行屆かぬ處は譴責てくれとの事、行末ともに賴入るとの事、くど／＼と列ぶるほどに、當世風の男は挨拶にあぐみ、只頭を上下してはい／＼と應答へ、やがて持參の包を解けば、何か知らねど反物一反、つまらぬものなれど手土産のしるし、貴孃の半天にでも。外に半襟二懸をお藤さんへと出せば、母親は一々押戴き、御念の入りました銘々へのお土産と、言葉數をいはず幾度か額づき、下に向ひて藤やと呼べば、はいと茶盆片手に、階子をのぼる一段づつの煩悶。欲見はあれど見らるゝが可厭なり。見らるゝが可厭にはあらねど、‥‥見らるゝが可厭にて、小憩しつゝ昇れど、限ある段數の何時まで盡きである可き。えゝ差かしや！欄干に手の懸る時、其氣もなく俯視

し顔を擧れば、男の顔にはたと遇ひ、南無三！と思ふ間もなく見られたり！見たり！此時の心中人には語りがたし。お藤はいとゞ羞しくなりて、誰か、力量ある人に後方より抱きすくめらるゝ樣に覺えて、おのづと身躰窘み、上段に屈みてこは〳〵茶盃を母の傍に差出し、遁るが如く下りむとするを、母親に呼留られ、此處へといふ。其處は其方の正面にて、火影も耀ゆく、いかにしてそんな處にゐらるゝものぞ。心中には、御母樣御自分さへ可厭なれば、其處を避けて居たまふにと、男よりは少しも遠ざかるやうに、母親の右側に陰れて後下に小さく座り、ようお出遊ばしましと、思切りたる口上、幽にして聲の影の如し。土産物を母に見せられ、丁寧に一禮述ると壁に顔を向け、一の難所はまづ越てと、ほつと安堵の呼吸をつけば、心付きて氣味惡き鳩尾雨腋の冷沛、顔はまた赫々として生際に熱汗をにじめば、袂のはんけちを取出し、忍やかに拭ひて、何時までさらぬ方を向も何とやら不躾がましく、さればとて正面になら

むは、横顏を見らるゝかと氣が引けて其もえせず。母親の肩に陰れて、是ならば見られじと流眄づかひに覗れば、目鼻立口元孰れか心に染ぬはなく、態度は品つくるにあらでおつとりとして、物いひ柔和なれど媚かず、妄りに聲も立てず、さもなき事にむだ笑ひせず、粹で高等とやらいふは、我知らねど如此人をやと、なほ隈なく見まはせば、右眉の端に小さき黑子あるを見つけし時、男は何やら言ひながら首を傾け、右の横顏の陰にならむとするを、我眼に逐ひかけて、動きし顏の生憎母の肩に觸れば、えゝと我方に向くを、いゝへといへば、男はそれを好機に、お藤さん此處へお出でなさいなと聲を懸けられ、可厭でもなく、恐ろしくもなきに、ぞつとして背中にまた冷汗。

(十)

松本は紙幣一葉取出して母親に渡し、お手數ながら御酒を。肴には所望なし、何なりと見繕うてといへば、承知して、お藤、私は横町へ行けば、其間此處にてお相手をと立上れば、あれ！私が參ります。其には及ばぬ。直に行て參りますれば、少時お待ち遊ばしてと、母親は階子を下りゆく。お藤は一人殘されて、片隅に小さくなりて、袖を掻合はせ俯向きて、針の蓆に坐る想ひなり。男は「ふらぐらんど」を卷きながら、お藤さんと呼べば、顏を一寸擡げながら屈みて、小聲にはいと答へ、居たゝまれぬばかり羞かしがる風情を見るに、如此處に——目には見えねど……情見が舞狂ふなるべし。お藤さんとまた呼べば、前の如き擧動をして、はいと返事も果てぬに、一寸此處へと輕く疊を打ば、其を見ぬやうに見て、會釋して俯向きぬ。この時のお藤の思は、夢に惡鬼に攫らはれ、盜人に

白刃揮りて逐はるゝなり。二度まで呼ぶに、石のやうになりて動かねば、松本も察して強ては言はず。巻きし煙草をふかしきりて、茶を注いで一杯にてしたみたれば、急須を取上、何氣なき顔して、これにお湯をさして來てたまはらぬかといへば、お藤も何氣なく立上り、急須を持て下りける間に、松本は前に在りし茶盆を我右側に移せしは、難なくお藤を引寄せむ詭計なり。しと〳〵とお藤は上りて見るに、茶盆の位置可笑處に替りたれど、さほどの事ありとも心付かねば、羞かしと思ひながら、急須持つを好機にすつと行きて茶盆の前に跪けば、電光石火！男の手は、はつとの間にお藤の左の手首に懸り、ぐつと牽れて無理やりに膝を並ばされ、遁むにも女の力の敵ひ難く、顔ばかりは他所を向けど、暖鳥の所爲なし。あれほど呼ぶに、聞えながら何恨みありて來てはたまはらぬ。此處に唯二人さへ心細きに、遠く離れて居て、話一つせぬにいよ〳〵寂しく、長居せば鼠に喰はるゝも知らず。其内にまたゆるりと晝參るべし。

今夜はさらばと、お藤の手を放して歸り支度を見すれば、お藤は可愛や當惑顏して、只今お歸しまをしては私が母に叱られます。少時、せめては母の歸るまで、何卒々々と詫れば、松本は微笑を含み、折角おつしやればば歸る事は見合すべし、其代りお前も此處を遁て下さるなと座れば、お藤は男の心を解せしか、につと笑ひながら顏を背け、母に叱られますと、朱唇を袂に裹めば、叱られなば詫びて進ずべしと、傍に在りし火鉢を二人の前に直し、この寒いにと、引こむるお藤の手を執り、いかなる戀をしてかくは細りたまふか、少しは聞かせたまへと指を撫づれば、存じませぬと手を袖口に引入れけり。格子の明く音にお藤は惶てゝ飛退き、もとの席に復らむとすれば、男は手招きして、聲を低め、まだ酒の燗やら膳立やらに暇取るほどに、其間此處へ〳〵といへば、お藤は階子の昇降口をのぞき込み、拔足して男の傍へまた寄りけり。何がそれほど母親が恐いかと聞けば、何も言はずに笑む顏より、愛嬌液體ならば滴るべし。

(十二)

肴來るまでまづ一杯と炙海苔にて勸め、軈て椀と二三品おし列べ、お藤がわなゝく手の酌を、其味何ともいへぬ佳肴にして、男は二三杯對なしに傾け、盃洗なければ此まゝ御免と母親に進ば、戴きますと受けて、獨語のやうに、家墓にて成らぬ口なればといへば、お藤は合點して擬似ほどに注けり。男は如在なく、お肴をと皿に手を懸れば、惶てゝ壓へ、甜めるほどの口にお肴はいりませぬ。まづ貴下と其猪口を戻せば、お藤に注せながら、眞實成りませぬかと尋ぬるに、母親は首肯き、亡夫は少々成りましたれど私しは一向不重寶なれば、對手なきゆゑ甘く飮めぬと、不斷獨語さましたと笑ふ。男も笑ひて、性來の嗜好でなくては、獨酌は味のなきものなり。お藤さんは？一つさしましやうと飮乾しぬ。進れてお藤は手をも出さず、私はといひ懸けて會釋すれば、折角あなたのお進

遊ばしたを、受けぬは失禮なり。失禮の不禮のといふほどにはあらねど、少しは成るならば對手を頼みたし。やあ！見事々々といひながら母親を見向けば、母親は娘の顏を見て笑み、親父に似て娘は少しは頂く方なれど、妙齡女の飮むは憚しとて、親父も許さゞりしが、我等の及ぶ事では御座りませぬ。座輿にいひしを、辱しめられしかとお藤はしよげたり。松本はまた盡して、御母樣に進る所なれど、汁粉の方ならば無理强は御迷惑なるべし。また一ツお藤さんの見事なお手元が見たしと進せど、前に懲りて手出しをせず、貴下まづと德利を持てど、男は肯ずして頻に勸むるを母親見かねて、お藤、私に替りて對手をせよ。苦しくならぬほどは戴けとあれば、それ御母親の御許容と盈々注げば、殘少なになりけるを見て、母親はその德利を持ちて座を立ちぬ。お藤はまた殘されて、其人の傍の可厭にはあらねど、初見の馴染薄さにおのづから座敷のしらくるを、紛すべき接應もならずして、ゆかしきながらも可恐は男子なり。

何を言はれ、何をさるゝか知れぬと思へば、此處に其身の在る空はなかりき。下にて藤やと呼聲すれば、やれ嬉しや血路を得て、いそ〳〵と男に會釋して下けり。長くは待たせず昇來るを見れば、お藤に熱燗の銚子持たせて自身は出て來ず、物堅くとも年齡だけに母親は粹なりと男は感じぬ。お藤は返盃してお熱いのをとも言はず、酌せむとせしに、徳利の熱に持ちこらへず、はつと落せしごとく下に置き、麁想を紛らし笑の身を捻りて、「はんけち」をあてがひ徳利を持たむとせしが、きたなしとや思ひけむ、袂を持添へての酌は、處女なる機轉なり。此も珍らしき肴の一つに松本は快く傾け、御母樣はと聞けば、呼で參りましやうかと立懸るを、月に松は風情な時あり、邪魔な時あり。御母樣居ては、酒を過させば小言をいはれむかと、氣がつまりて飲めど身に染みず、それよりは二人して中好く。其處に居ては遠くて話が通ぜず、此處へとまた傍に引寄せ、飲めぬといふは助てやり、其恩返へしに助けさせ、此銚子も雫殘さず虛

たれば、取に下りむといふを引留め、時計を出して見れば十時なり。長いは御母様も御迷惑、もはや寐まんと傳へたまへといへば、海棠雨に頷きぬ。

(十二)

戀は阿片の如し。其味を知らねば知らでも濟むべきに、唯一時の一口より心亂れて、(月も花も何でもない事戀の道)、世界廣けれども萬物多けれども、是に換ふ可きものなく、此一念驕るほどにおもしろき世も氣味なく、果敢なく、愁く、恨し。男、女、智、鈍、何れにしても初戀の對手の懷かしさは、死しての曉白骨に其人の名を記せし處は、灰の中にも焚殘るべし。我より戀ひしにもあらず、或は好ましからぬにしても、情愛を敎へられし人は、朝夕の思ひに戀慕の面影去らず、まして初見より幽しきには、其後の熱着一層深きの理なり。お藤は十八年の今まで、一々知らざりし事を覺えて、二十四時夢と現に責められ、眼に其顏ちらつき、耳に呼聲聞えて、あるまじき事ながら、母親にそれとなく松本の噂をしかけて、來ぬ時の消悶にぞしける。多くも度重らねど、雄物なる男の打

解けたるうれしがらせに、つひ笑ふ事あり打つ事あり、叩く事あり抓る事あり、雜作なく他人行儀を崩され、肉身にも憚るべき、我儘氣儘をいへどいふなりに通され、甘ゆればあまやかされ、父母のとは別物の慈愛に甜られて、憂は此人に語り、愁は此人に慰められ、おもしろき手管にかゝりて、命はいらぬまゝ參る。

早おふぢの馴染めるを見て、母親は松本の對遇に出ることなければ、水不入の小酒盛、少し醉がまはれば男は其處に倒れ、お藤の膝枕して、頭が痒し、五分に摘ばやといへば、短くはしたまふなと、鬢梳の油を拭きて、雲脂を取るやら梳くやら、其後は耳垢の掃除して、男の眉を撫でながら、此眉毛が欲しやといへば、お前の眼と取替へて、世界の男を南極から殺して見たいと、卒のなき挨拶に返しかねて默れば、松本はお藤の膝を叩き、此間一處に連し男が……。　三谷樣か。　はや名を覺えてか、其はいよ〱油斷がならぬ。三谷が心底お前に焦れ、是非今一度伴へと

いひしを、誰の思も斷腸ものと、粹を通して此次には連むとまで約せしが、おまへもどうやら最上の稻舟、迂濶とは伴れ難し。平常堅い口上に氣をゆるさせ、露顯の上は其日の出來心とぬけるつもりかと、お藤の手を握れば、痕跡もない濡衣、此方よりまづ心の知れぬは誰樣かなり。此前夜はどうなされし事ぞ。御酒も澤山はあがらず、平常のやうなる御機嫌にもなく、物思はしさ風情にて、ふいと夜更ての御歸宅。たゞ用事があるとのみにて、仔細をおほせられねば、必定此身に落度ありて御氣を損ねしと、どれほど母に叱られましたか知れず。其に引替へ貴郎はさぞかしの御愉快、其は棚に上げて、此身になき名を立てゝ困らせ、澤山お慰さみになさりませ。さりがたき用事のあればこそ、夜深に歸る不愉快を察せぬか何ぞのやうに、とやかくいひ囃すは、扨は今夜も早く歸れとの謎なるべし。明朝までゆるりとせむと、樂みにして來たりし身の歸りともなけれど、三谷の奧樣が折角のお言葉なれば、箒の立たぬ間に參るべ

し。此方ばかり惜き離別の名殘に、お可厭でもあるべきが一服つけて下されと、露西亞革の卷莨入をお藤の面前へさし付れば、拂除てそしらぬ顏の外見なり。松本は莨をとり出し、是れをつけてたまはらぬか。返事のないはお否か。三谷樣の外は誰のいふ事もきかぬといふ約束ありしと見えたり。無理に賴まば怒る男あらむ。　こゝろざしの煙草ならでは喫むも味なし。早く返りて獨寐の肌寒く、風を引く夢なと見るべしと起上れど、お藤は手強く、見向もせざれば、立上りて帶しめ正し、窓下に疊みてありし羽織を索せど見えねば、羽織を知らぬかといへども答へず。お藤の後方へまはりて見れば、袂の下に隱したるを、心付かぬ風して、なるほど思へば羽織は衣ては來ざりしと、帽子を冠りて梯子の口までづかづかと行けば、物をも言はずお藤は走付き、其手に縋りてぐつと引戻すまゝに引かれ、三谷樣への御傳言か。何なりと賴るべしと立懸りていへば、お藤は其裾にとりつき、俯首ける樣子を怪しと見れば、袖を噛み

てすゝり上げ、どうぞしたのかと尋ぬる言葉に、啼聲立むとすれば、松本は後方より抱上げ、腋の下へ手をやり、それ！それ！今啼た烏がもう出て笑ふ。

此夜の寝物語に、五六日は煩忙て顔を見られねば、眼に染入ほど思入見置をせむなどゝ戯れて、其朝は休日にもあらぬに、長寐せし上午後まで遊び、美味をとり寄せて母子を喜ばせ、お藤が長らく芝居を見ぬといふを不敏がりて、いつか一日は好む劇場へ連れむと思ひしが、人寄場は観る目ありて、會社のものに出遣はむも知れねば伴ひがたし。是れにて二人して見物したまへと、外に小費まで添へて母親に手渡し、今日は是にて歸るべしといへば、母親は、男子といふを持ちし事なく、また良夫に別れてよりは、世間に頼む處なき女人ばかりの心細さに、いつも〳〵やさしくする松本を、婿か我子のやうに懐しがり、今日も今日とて嬉し涙を浮べて、さらば御用の濟み次第、一日も早くお顔見るのを母子に樂みにお待申して居ります。此頃のやうに夜毎の火事沙汰に、この家内なれ

ば其が苦になりて夢さへおち〳〵結ばぬに、貴下のお出の晩が此の身の極樂、氣丈夫にて朝までぐつすりと、よい保養を致しますと、それより離別の挨拶濟めば、お藤は一寸と呼留め、一散に二階へ昇れば、用ありげなりと松本も尾て昇り、「遠方御苦勞」などをいはば背かぬぞといへば、お藤は兩眼に涙を浮べ、松本の手に縋りて、何とも言はでつれ〳〵と顏を見護るに、男は心得難く、怪しからぬ樣子かな。心元なし。用とは何事なるか、早く聞かせよとあれば、お藤は袖にて眼を拭ひ、貴郎の今日の樣子こそ一々合點なり難けれ。もしや此まゝの御訣別にと、縋る手に力を籠めてはら〳〵と涙を滴せば、松本は呆れ顏にて、思ひも寄らぬ！何を見當にさる事を考へつきしや。長くて一週間とは待たせじといふに、それまでに芝居へ行て、とつくりと見物せし上、狂言の筋を面白く話して聞かせたまへ、其を今度來る日の樂みにして居るぞと、袂より白縮のはんけちを取出し、涙を拭けといへば、お藤は袂より對のはんけちを出

して眼を拭ひ、さうおつしやるを疑ふではなけれど、きつと見捨てゝたまはるな。天成愚鈍は悔ゆともせんなし。唯此女不敏と覺召して、必らず見捨たまふな。もし五六日の中にお入來がなくば、神々樣かけてお恨み申まする。心には思ふ事積りて山を成せど、口不重寶にはあり、よしや言うて言はれぬ事なくとも、女の口からとやかうと羞かしい、勤の身のする事と、萬分の一も得申さず、何事も差控へて居りまする。其心中はよく了解て居ると、かね〲おほせらるゝお言葉が、何よりの依賴なり。いふまでもなき事なり。約束せし日より必ず早く來るを見て、今更のやうに此男の信實に喫驚すなと、肩を打いて別れぬ。

（十四）

指折りて待つ日は長く、母もとも〴〵にいひ暮して、遲くともといひし日限來れば、今宵こそと化粧に心を凝らし、二階は晝より塵埃を拂ひし毛氈を敷き、火鉢の灰をふるひ、暮れかゝるより洋燈を點して、氣もわくわくといつもの時刻過ぐるに見えず。お藤は二階へ昇るやら降りるやら。母親は格子明けたり立たり。果ては火鉢の前に顏を見合せ、推測の數々を語盡し、今宵はとても賴みなし。十二時過ぎたればお藤は母親を寢かして、我は二時まで床に入らざりしが、此上は明日を賴むの外なしと、うと〳〵寢入りても、鼠に目覺まし風に驚き、夢にはそれが格子の明く音なり。翌日も其翌日も剩啄なくて、離別てより十日は無雜作に過ぎぬ。此間に約定の一月經ちければ、かの請宿より人來りて、先の旦那樣御出がなくば、また外に許多もお客樣あれば目見に參らるべしと再々

の使なり。是を聞に、外姿の置こと一月を一期として、男其女が氣に入らば、末々長く通ふは勿論の事なれと、心にいらぬか、または外に事情ありて、廢止にせむとするには、その女に子細を語るに及ばず、給金拂ひし月だけ通ひて、次月より足を止むれば、それにてさつぱりと關繫絕ゆる事默約なりといふ。受宿は我周旋せし旦那の通ふ間は、月々女の家へ口錢とりに行くなり。其序に松本の來ぬと聞きて、目見に來よと頻に勸むれど、お藤は一天下松本に見替ふる男なければ、是に心を傷め、其人の事氣に懸れど、もしいひ出して母親が、此身に飽きたらむ人を待つとて、再び來たまはんとも覺えず。今日の活路に逐るゝ身上なれば、了簡せよといはれなば、とても逃るべき道なし。我が身一人ならばともかくもすべけれど、大事なる親を干死にはなし難く、つまる所は外の男の玩弄物にならねばならず。其上に、外の男を定めてから、萬が一松本樣が思ひ出されて尋ねてくださらば、とりかへしのならぬ遺恨は、死ぬる

にも替へ難く、今想ふさへくやし涙を催せり。御母様も常住おつしやるごとく、あの方に限りては、嘘無根をいふ事なく、眞實あり餘りて外面に顯れ、誰にもやさしくて深切なること、今のわかき人に似合ずと讃めたまへり。あれほどまでに見捨ぬといはれしものを、よもや見捨はしたまはじ。お出あり度もいろ〳〵御用に取紛れ、それに相違あるまじ。さりながら其ならばお手紙の一通は下されて——この身の苦勞性なを御存じありながら——安心させてたまはるべきに、それさへなきはもしやと思ひながら、また種々と身勝手よき樣に思ひ直せど、いや〳〵男の心はと、狹き胸は亂麻のごとく、斷然此判斷は御母親にと、口頭まで走りかかるを呑込みけり。母親の思ひとても變らず。あれほどの方はまた有まじく、お藤のいとしく思ふて居るものを、今更心に染まぬ人に嫁かせ、氣弱き子なれば病氣など煩はれて、……さりながら此儘誰を待つともなしに、二人面を並べて營業なしには暮しかぬれど、此度且那を取らせしさ

へ、お藤の手前恥かしくもあり、氣の毒にもあるを、また新らしき男持てとは、どの口にていふべき。賣女の母親根性になりしかと娘の思はくもいかゞと、これも思案に屈しぬ。其月の十五日近くになれどそよとの音信あらざれど、母親は外に旦那取せよとは壁訴訟にもいはず。日毎に竈の烟糸のごとく痩すれば、近所の人に頼みて、此程より鼻緒の前緒を撚る事を始めて、麻に手の皮剝きながら、千も撚りて十錢不足の內職。お藤は見るに勿躰なく、母の手業を見傚に、私も手傳ひましよといへば、妙齡女の遊戯にもする事にあらず。手掌革のやうになり、指は太りて節立ち、これより出世すべき姿の損ずるほどにといへば、かゝるさもしげなる事したまはずとも、賃仕事をなぜしたまはぬ。それならば針の運動鈍きながら、稽古がてらに私も手傳ひ、其上に此にはましたる賃錢も得らるべきに。其をお前に敎へてもらはうか。かく貧窮に暮しても昔時に變らぬお前の世間不見。縫仕事あらば馴れたる事とて樂にもあれば、

いかで爲ずに置くべき。今は世上一般不景氣に寂れて、其職のものが安直に仕事をとれば、なか／＼素人の手には渡らず。この鼻緒すら望み手多く、知らぬものが行たとて、問屋にて仕事はくれぬほどなれば、塗師屋の女房のを分て貰ふた仕誼と語れば、お藤は聞に身も世もあられぬ切なさ。身を顫せて、お母様！　えゝ喫驚した。私は外の旦那を取ましよと涙を浮ぶれば、母親は心快く笑ひて、此の世にも一人松本様のやうな人物あらば、お前が可厭でも旦那にさすべし。さもなくば此母が不承知と、お藤が心にもなき言葉も我ゆゑにと、其心中思ひやりて、顏を背けて目をしばたゝけば、娘は聲を立て泣入りぬ。見るに不敏や、おのれ！其男、引捕らへて逢せてやりたし。

(十五)

お藤の母は子を思ひの闇に、煤けたる小提灯照らして、上野花園町にやうやう松本の住家を尋ねあて、格子戸の戸外に佇み、もしや遠慮すべき人ありてはと、戸內の樣子を窺ふに、火影ありながら人氣なきやうにて、沓脱に老女の穿くかと思はるゝ、古びたる桐の後齒脱捨てたり。家が違ひしかと、また提灯を擧げて見れは、表札の番地姓名、これに紛れなしと、小聲に案內すれば、誰方樣といふは青年女の聲にあらで、出て來しは果して五十餘の老女、衣類麁末にしてしかも前垂懸なり。人品も下賤なるに、拵心付きたり、傭婆と二人の家內と、松本樣のいはれしに違はず、是ならば多く憚る事なしと胸を落付け、旦那樣御在宅ならば一寸お目もじ願ひたく、夜中不躾ながら參じました。それはお生憎な、旦那樣は御留守でございますといへば、お藤の母は老女の顏をじつと眺め、

殘念らしき面色なるを、氣の毒に思ひて、折角のお出の處を……、まづおかけなされて一服遊ばしまし。して貴孃は何方樣。　はい西黑門町よりと、お歸りの上は御傳へ下されまし。此はいかいお邪魔を致しましたと、此家探し當し時の元氣に引替へ、しほ〳〵と行く姿、枯柳霜に惱む池の端を過ぐるに、水禽の鳴音身に染みながら、風に堪へず寸白も起さず、子を思ふ一念これにつけても難有し。明日の夕暮また尋ねて行けば、昨夜の婆がまた出て、まだ御歸宅はなしといふに、先方を疑ふやうにて惡けれどと思ひながら、何處へお越し遊ばしましたのやら、お聞せ下さりませといへば、會社の御用にて函館の北海道とやらへお越しなされました。えゝ口惜や、偖は今朝お立になりましたのか。　いへ〳〵、先月の二十九日の御出立、來月の半過には御歸京のよし、申遺されましたと手もなく言放ちぬ。餘りとや思ひ設ぬ事なれば、お藤の母は得心せず、これはまさしく留守をつかひたまふと覺えたり。お藤が生娘にておもし

ろき對手成ぬに興を薄がり、外に外妾をお拵へなされたを我等が聞つけ、面倒なる事をいひに來たとお覺召されてお逢なされぬのか。なか〳〵去事にはあらぬを、地獄には慈悲の鬼なし、さもしき事をする娘の親なればと、邪推なされて隱れたまふかや。身貧にはならぬものぞと、無念の涙を呑むでぞ歸りける。かくまで賢き了簡つきながら、一日置てまた花園町を尋ねぬ。何事かよく〳〵深き子細ありてなる可し。衣飾のよからぬを自ら耻ぢもし、また松本が家内のものゝ手前いかゞと斟酌して、晝間は避けて行かざりしが、いつも夕暮ときまれば、其人時刻を量りて不在すべければ、今日こそは一か八、身にも人にも替へ難き一大事。會社よりの退社を窺ひ、否應なしにお目に懸りてと、三時過に、老女がいやな顏を承知にてまた尋ねしに、其口上いかにも眞實らしく、坐敷まで見せてもらひしに、主人不在の有様に極まれば、お藤の母は面目を失ひ、此までの不禮をひたすら詫ぶる言葉に、動作に、面色に、心の愁見ゆる

を、老女はいぶかしみて、この間より見馴れぬ貴嬢が度々のお尋ね、お名を窺へば唯だ西黒門町よりとばかりにて、何の事やら子細わからず。一圓合點が參り難し。いかなる子細やらお話しなされて惡からずば、委細をお聞せなされませぬかと、情籠れる言葉に、お藤の母はほろりと落して鼻をつまらせ、如此事は貴嬢にお話し申して、よいやら惡いやら存じませねど、折角のお言葉に甘えて何もおつゝみ申しませぬ。先月より一女の藤がお世話になりまして、今月は旦那樣のお出なきほどに、母の口より申惡くけれど、一女の樣子を見るに、旦那樣をお慕ひ申すの餘り、食事はいたさず、夜は寐まず、ぶら〳〵と煩ひの床に倒れ、日ましに瘠細るを見につけ、お察し下されまし、私は氣も半亂、此身は長く生きて望みなけれど、壽命長き娘は、可愛や十八ばかりを一期にして、殺しともなけれど、其良藥は旦那樣、もう廿日と待たずして花は散るべき景色、く

ちをしや！無念や！助くる手術あらば教へたまへかし。

（十六）

お藤が母の物語に傭婆も貰泣して、なるほど旦那様にお逢せ申したけれど、函館へ御巡視の役目にてお越しなされ、一處に足を留められねば、お手紙をさへ上げ難し。是は私等の思案に及びかぬれど、今お話にお同伴がありしよしなるが、旦那様が無二の御別懇といふは、瀬戸物町の三谷様といふ御人ならではなし。思ふに其時のお同伴は是なるべし。應、三谷様とおほせらるゝからは其人なり。參りてお願ひ申すも苦しかるまじきや。　よい段では御座りませぬ。番地はしか〴〵。鐵道馬車にて何處まで行き、どの角をどう曲り、三目の右の横町の中頃と、懇に敎へられし通りを、其翌朝辿りて折よく三谷に過けり。

男は流石に心強き所ありて、傭婆のやうに迂濶とは涙を滴さず、たとひ處女にもせよ、今時戀病ひとは時代過て合點がならぬと、心中にはこれ

を狂言のやうに思ひなして動ぜぬ景色なれば、母親は頼の綱を切られて、いふべき言葉につまりしが、其よ！至誠には水中の鐘にも聲あり、此一念などか通らざる可きと、目色變りて膝は進み、旦那樣に逢ひたしとは、またお世話になりたき心かとのお覺召はさる事ながら、神も佛も照覽あれ、子に替ふ可き寶はなきものを、其命助けたきばかりの此苦勞、長くとは申さず、只一目にて滿足すべし。此事もし協はずば、無殘や、娘は思死に死して永劫輪廻に迷ひ、私とても前途の樂みをなくなし、生効なき身の何日まであるべき。母子二人の命を助けるも殺すも、貴下お一人の御了簡にある事、二人見殺しにして不敏とも何ともお覺召さぬかと、あとはしやくり上げて袖を濡らしぬ。三谷は默然と手を拱きて下俯くは、投懸けて頼む色なる樣に、松も捨難き思ひなり。母親は曇聲にて、老て此苦勞をするも、誰をとてわが身の外に恨むべき方なし。娘に淺ましき事させしが我畢生の落度なり。それも當人心に染まざりし男に逢ひもし

なば、可厭といふを無理往生に得心さするに、かほど胸は傷めまじきに、なまなかやさしき男に逢初めしばかりに、かうした事になりましたと、哀れに掻口說ば、三谷もさらぬ躰に鼻かみて涙を紛らし、一々至極なる言葉なれど、其はかうなりたる今になりては、いふても詮なき事なり。まことお藤殿がさほどまで思ひつめし事ならば、いかにもして逢はせ申可し。なれどもお藤殿がたしかに戀病にきはまり、自身の口よりも逢ひたきよしをいはるゝか。乙女心の萬事に羞らひ、なほ又內端なる氣質なれば、親にも思ふ事をつゝみ、獨りくよ〳〵と物案じする性分なれば、旦那樣に逢ひたし、逢はせてくれとは得申さねば、最初の程はそれぞとも心付かざりしに、旦那樣のお出があるやうに申せし日二日三日過るより、私に向ひて、旦那樣は如何遊ばされたやら、もはやお出はなき事かと、日に四五度も尋ねしが、お音信なき日數の積るにつけ、一時間に何度といふ數を知らず。たゞ其のみをいひ續けて案じ煩ふを、明日は必ず

明後日は必ずと、よきやうに挨拶しながらも、若やと容躰に心を付て見れば、朝起るより柱に凭れ火鉢に倚り、座れば其まゝ動くことなく、半日一口も物言はずに何やら思ひつめながら、間がな隙がな、旦那様はどう遊ばされたのやら、もはやお出ではなき事かと、是ばかりは聞くにうるさきほど尋ぬる上、古き新聞など取出して、少し讀みては深く考へ、心細げなる溜息つきて其も打遣り、袂より絹のはんけちの疊みたるを出して、膝の上に置き手にとりあげ、顔におしあて懐中に入れ、片時もこれを放さず、夜は枕頭におきて寢つくまで眺むるは、せめてもの思出草か、忘られぬ餘か。これ旦那様が下されしものなり。親の口からあるまじき、娘が失德の段々、必ずおさげすみ下されますなと、細やかに語るに虚言なく、また此女虚言をいふ可き人にあらず。世はさま〴〵や、お藤が因果、松本が果報。

（十七）

お藤の事心に懸りながら、三谷は商用の繁忙まゝに、母親が尋ねし日より二日打捨て置きしが、其日の夕暮母親また來りて、旦那様のお音信はあらぬか、お歸京のほどは知れぬか。お藤の容躰日増に覺束なく、霜に畫ける花や、見る間にじめ〳〵と衰へゆくにと、血眼になりていふことも後や前なるに、三谷も驚きて、其明朝不取敢西黒門町に行けば、母親は轉び出て之を喜び、三谷へ挨拶かた〳〵お藤〳〵と呼ば、枕屏風の陰より返事もなく差出す顏は、見るも無殘や、戀に削られ思ひに枯れて。明朝までとは見えざりき。かほどまでとは三谷も思ひ懸けねば、唯呆れて見護るに、色は褪め艶は失せ、頰は皮を殘して眼は深く落入り、小鼻高くなりて凄かりき。されど哀れなるは、油濃く島田に結ひて、鬢に髱に、一筋の亂毛なく、薄化粧して唇に臙脂をさしたり。憫然ともいぢらし

ともいふべき樣なく、戀なればこそと、三谷は此一事にお藤が心中を見貫き、心底より此一命助くる所存になりぬ。當住松本の話に、三谷は兄弟同樣なりと聞き、伴合ふて酒飲に來りし事もあれば、お藤は三谷の顏を見るより、其人に思寄せて飛立つばかり懷かしがり、世に嬉れしげなる面色して、床の上にかしこまりて挨拶すれば、母親は傍に此躰を見て、はら〳〵と涙を流すは、幾日ぶりのお藤の笑顏に、嬉しさ餘りてなるべし。お藤樣御心持はといひながら、三谷は枕近く膝行寄り、お見舞のしるしにと風月堂の菓子折を出して、此の中は松本が大好物なれば、お前樣のお口にも乾度合ふつもりにて持參せりと、憎いほど物馴れたる口上。つまらぬ物も是ゆゑに良藥、お藤は莞爾と笑顏を袖に陰し、嬉さは之に見はれぬ。母親はなほ喜び、手のない中を炭をつぎ、湯を沸らせ、何卒御ゆるりと〳〵幾度か繰かへしぬ。三谷は言葉をあらため、今日何よりのお土産といふは、お藤樣、今朝函館から手紙が來て……といひ懸れば、

お藤はえゝと乘出し、母親は茶碗を持て走り寄るを、三谷は眼語せすれば、母親は呑込みて、まあ〳〵其は結構な事で御座りました。何も異狀なうお暮し遊ばすかと調子を合はせて、火鉢の傍に戻れば、三谷は其方を顧みてまたお藤に向ひ、今月末には遲くとも歸京るべければ、其旨を此方へ通知してくれよ。この寒氣に母親は病氣もおこらぬか。お藤は壯健でゐるか。定めて此頃は人が惡くなりて、殺文句など覺えしなるべし。我歸るまでは浮氣せぬやう、時々行きて異見してくれと、四五尺もあるべき手紙に、眞面目な所は最初五六行、あとは殘らず愚にもつかぬことを、長々とお前の惚話ばかり、今日は是非とも御馳走うけに罷越したと、仇口いひて高笑すれば、お藤は眞にうけて、眞實旦那樣からお手紙で御座りましたか。勿論！虛言いひに此處まで何しに來るべきや。　さりながら今のお話は虛言なるべし。　其惚話の一條かといへば、返事なしに笑むを曉りて、それほど疑ふと知らば、持參して見すべかりしを、我癖

としていつも手紙は見ると鼻かみて棄つるゆゑ、無證據となりて御馳走の喰はぐれをしたり。殘念至極と拳にて膝を叩きぬ。

（十八）

三谷が見舞ひしより、お藤の心少し開きて見えしは、松本が入魂の友に遇ひしと、二つには音信ありしといふに力を得てなれど、閑寂なる夜深に、母親が看病疲勞の小鼾を聞きながら、寐もやらずして此の事を思ふに、松本より三谷への手紙は眞實なるべけれど、我事を書列ねたりとは、我手前への諛言なる可し。さほどまでに思ひたまふ方の、何として今まで沙汰なしにして置たまふ可きや。函館へ行かるゝ事は以前に知れてありしを推褁みたまひし事、此身に心あらぬ確乎なる證據なり。もし又其日に沸つて湧きし旅行ならば、先方へ着かれし時、一寸一筆旅館にて次第を認め、安心させて下さるべきに、其等の事はなくして、歩行るゝ先行よりも一通の音信をだにしたまはねこそ怨めしけれ。之を思へば三谷様の今日のお話は悉盡造事にて、松本様が口癖のやうに、お前が其氣な

らば行末長く見捨ぬと、おほせられしもみな虚言なり。なるほど松本様は氣質やさしく御容姿はよし、世にある女人の一目見ば思にあこがれぬものはあるまじく、行處々に持囃され、萬事に如在なく行届きたる藝者などの、心を籠めて御意をとれば、なか〳〵此身如き野暮なる女が、兎角思ひても唾もかけたまはじ、及ばぬことなり。動かぬ石に手をかけ、心なき水にものいひて、答へぬ山はと恨むもよしなし。覺束なき思ひに惱み、世中を我から果敢なく考へ、いつそ死ぬがまし、死にたやとまでに幾度か思ひつめしこと、返す〴〵も不所存なりき。我もし亡くならば、あの大事の御母様を誰が何とすべき。此病氣につきても一方ならぬ御苦勞をかけ、看病の枕もとに鼻緒の手業しげく、それに得たる鳥目に高價藥を飮せて下さるに、われは獨り勝手なるいたづら心を增長さすこと、後世よりも冥加よりも、今日のおそろしさ。一日も早く床を上げて、御母様を喜ばすが何よりの孝行なり、御恩報しなりと、了簡もつき、其氣

にもなれど、戀は惡魔か、其手に握る「未練」の毒槌に、「分別」紛微塵に碎け、捨難き思ひむら〱と沸きて、せめては一眄なりと首尾して、其袖に縋りて泣き、其耳に口寄せて怨み、其の聲も聞きたく、其顏もとつくり見たく、此身に飽いたとたしかなる御一言を聞きし上、殺して下さらずば見事我手に死でのけ、沒後までも不敏のものやと、折々の思出草ともならば、死花の咲くが何よりの樂みなれど、男心の強くして、此心を聞知りたゞとふも、捨たる女に用なしと、餘所にいとしがらるゝに紛れて、薄情ならぬ松本樣も、藤の事は思ひ出しても下さるまじ、顏見せても下さるまじ。いつも醉ひたまへば、美聲して、(墨田川さへ棹さしやとゞく)との唄の耳に殘るにつけ、此身はよく〱御心に合はぬ因果のものなり。これにまた思屈する餘り、神經狂ひて何事も夢のごとく、折々可笑き事を口走り、しほ〱と欝ぐかと思へば、身を震はせて袂を喰裂き、食事も藥劑も打遣りながら、朝々の化粧は忘れず、松本の事を尋ねて已まざ

るに母親は涙を流し、此月の晦日も二三日なれば、其まで生て居てたもれ、命に替へても旦那様に逢はするぞ。今此母一人殘して逝く事はならぬといへば、お藤は枯枝のやうなる手を合せて、御母様濟みませぬ。此お詫はあの世から。　えゝ鶴龜々々。

（十九）

三谷は其後一度見舞ひて、十日ばかり尋ねざりしが、お蕗の加減よろしきかして、母親泣付きにも來らず。此分にてはあれまでに近きし臨終、まづは四五十年延びたり。何はともあれ、色男め早く歸ればよきにと、今朝も今朝とて思ひし午後、松本は其地の名産を持ちて、昨夜遲く歸京せしとて來れば、三谷は我を忘れ、手を拍てよく歸つたと大聲揚ぐれば、松本は膽を消し、いつにも似ず、其歡喜はどうした事。雪に凍えてあの地に死ねばとて、涙一滴手向けてもくれまじき薄情男が、これは珍らしい。旅費に剩餘ありと當込み、此若旦那をそゝのかさむ下心かといへば、三谷は横眼に睨み、そのやうに惡まれ口を叩く男に、何處が好うて死ぬほどまでに焦れしやら。　男にはつれなくとも女子には大眞實、それゆゑに一度逢はゞ忘られぬと誰やらがぬかせしと、お蕗の事を知ねば何氣

なく言伏せ、久ぶりにて一酌、支度々々といへば、三谷は口を尖らせ、それ處か、お藤が戀病をして、今宵もしれぬ風前の花を是より尋ねてやり、顔を見せて人一人助けよとあれば、松本は冷笑ひ、餘り旦那取が過ぎての戀病なるべし。それを此方の知る事か。藤一人が女人でもあるまじきに、初心らしく何時まで係りあふべき……。と後は言はせず三谷は居丈高になりて、此罰當奴！何が面白くて貴兄を釣るべき。有無は此處にていふには及ばず、と衣服を着替へながら、一人乘二臺大急と下女に命じて、獨そは〳〵するに松本はいぶかしく、三谷、此はどういふ洒落と尋ぬれば、三谷は眼を瞋らせ、罰當奴！洒落とは何が洒落？暫時に此男天晴なる田舎漢に成濟し、分別鈍き土百姓め！お藤が今日翌日おのれゆゑに焦死するといふを、不敏とは思はぬか、可愛とも思はぬか。車はまだか、來りしと、松本來いと、敦圍暴く其手をとれば、松本は嚙付く如く罵られしに氣を奪はれ、立もやらできよろ〳〵三谷の顔を視れば、

なほもどかしがりて急立るを暫時とおさへ、言葉を和げて仔細を尋ぬれば、ありし次第を手短に語れば、松本は夢か小說かと呆れて、あるまじき事とは想へど、三谷が容子の尋常ならぬに、もしやと半信半疑ながら、急かるゝまゝに車に乘れば、虛とも實とも分別定まらぬ間に、お藤の門口に着きぬ。車をかへして、三谷が先に格子を明けて、馴れし聲音の案內に、母親轉出れば、三谷と松本の立姿、何ともいはでじつと眺むる眼中より、湧くがごとく淚を流せば、氣遣はしや、何事ぞ。お藤の病氣はと尋ぬれば、がばと伏して啼聲ながら、亡くなりました！　南無三寶！と二人も昇降口に臀をつき、見合す眼の中を溢るゝばかり濡らして、松本はそつと奧を覗けば、線香の香鼻を掠め、逆屛風の前に机を直して、一莖樒枕團子、盛飯に立たる象牙の箸も、水を供ふる九谷の湯呑も、一々見覺えありて、我買ふてやりしを斜ならず喜びしものなり。見るに悲して、三谷に背向けて留度なき淚を拭へば、三谷は曇聲にて、何時の御臨

終と問へば、やう〳〵顏を上げて、呼吸をつまらせつゝ嚙占る齒の間より、昨夜の二時といふに、挨拶しかねて默れば、母親は松本にむかひて、旦那樣何卒死顏なりと見てやつて下さりまし。應、松本早く佛に逢ふてやれと、二人は座敷へ上りぬ。母親は茫として魂離れしごとく、最期の有樣、病中の容躰、臨終の一言、旦那樣はと眠りし眼を開きてと、唯其のみを繰近し、行末の賴みなき事など、心細げに喞てば、聞くごとに二人は身を絞らるゝ思ひに咽び入り、吊詞もいはず、慰めもせず、諸共に泣くより外はなかりき。松本は旅費の殘金三十圓を紙に包みて、心ばかりの香奠とさし出せば、母親は幾度か押戴き、これを靈前に供へて、お藤これ見よと、生ける人に物いふごとく、お禮を申せの、嬉しかろのと、有程のいぢらしき事して、果は絕入ばかり泣狂ふを、二人は見るに忍びず、瞑目して合掌し、口中にて頓生菩提南無阿彌陀佛。

（二十五年二月）

むき玉子（二人女）

（一）

小梅の奥に閑棲の扉を鎖て妙想を練り、一日或は一水、多畫を貪らずといへども筆は日々採らざるなく、採れば花と咲き鳥と歌ひ、山岳峙ち江河深く、英雄劍に仗り、小女蝶を逐ひ、大舶覆へり、高樓焚ゆるなむど、萬象畫到らざる事なけれど、悉意に適はずとて引裂棄つるほどに、自適の畫といふもの曾てなければ、世にも出ださず、識る人も希なれど、大久保蘭谿とて斯道に熱心の畫工あり。二十三歳にして佛蘭西巴里へ渡り、名工二三の門に歴遊して六年間の修業を積み、歸朝後四年に及べど鍛錬の手腕を秘して未だ售らず。もとより之をもて營業とするものなれど、亡父は某藩の家老とて、大分の遺産を讓られたれば、敢て糊口に畫くに

あらず、「あぼろ」に供せむが爲なり。我は蚤く母に別れて去年は父を喪ひ、骨肉の係累なき身は天下に唯我の一本立、これぞ樂き。理想の婦人は絕世の美色にして、是ならば偕老の伴ともすべし。有象の女子に心に染みたるはなし。「みけえるあんぢえろ」のいふた所が美術家の眞面目！と心に鏤みぬ。

三年飛ばず鳴かず、鳴かば人を驚かさむとの御量見かは知らねど、不肖此方に入門いたしてはや三年にも餘り、幾百の畫を畫たまひけれど一面も世に出だしたまはざるは何故ぞ。この分にては何時鳴きたまふのやら心細し。來春は大共進會もありといへば、今より準備して天晴逸品を仕上げたまへと、門生の蘭山切りに勸めけるに蘭谿頷きて、なるほど一升升に二升の水は入らず。われ惡女の姿にして小町貴妃の貌に及ざるを愧ぢたらば、一生門外へは出られまじ。先達の名手に比べむには、われ幾千萬の自畫を引き裂くとも、なか／＼意に適ふものあるまじければ、大

久保蘭谿が筆として凝得むほどの丹情を凝らして見るべし、と即日圖案に肝膽を碎き始めけるに、彼此と心に浮ばぬにはあらねど、いづれも陳腐して面白からず、新案と思ふには無理ありてなほ面白からず。夜深まで頭顱を抱へて案ふれば、案ふるほどいよ〳〵迷ふて影を逐ふがごとし。自暴て寐床にもぐり、百慮を放擲て睡らむとすれば、胸に物の支へたる心地して睡られず。萬象雜然と腦中を襲ひて心の激するまゝに蹶起し、再び洋燈を點して古畫帖を披けば、古人は神か聖か、名案は唯此裏に網羅して後人に遺す所なし。これより翻案せむとの勇氣もなく、畫帖を捨てゝ枕に就けどなほ睡られず、睡られねば案ずれど案じ得ず。過たるはなほ及ばざる如し、今夜は斷然思ひ捨て、明日は一日散歩して得る所あるべしと、やうやく分別を定むれば腦も之に穩まりて、三時頃より翌日の十時まで身動きもせで睡りぬ。

（二）

ふら〳〵と隅田川を對岸へ渡り、何の心規なく逍遙の途中、眼に入るものは多けれど、眼を貫して腦に染むほどの景なく象なく、午後三時を過るまで歩行づめに歩行きて疲勞を覺えければ、上野公園の奥に凉しき木下蔭の床几に倚りて憩へば、そのまゝ足重りて歩まむ氣力はなかりき。七月末の日影ぎら〳〵と町家の瓦屋根に照るを見るさへ汗の種なるに、絶間なき蟬時雨に耳遠くなりていよ〳〵得堪へず。この森の裏さへかばかりなれば、砂埃の大道はもはや行かるべきにあらねば、此所に夕暮を待ちて歸らむものと、腰を据ゑてまた圖案に工夫を費しけるが、昨夜の睡眠足らねばいつかうと〳〵となりて、幸ひに巡査にも見尤られず、醫學部の時計臺の後に茜色の雲薄れゆきて、不忍池の黒くなる頃、耳近に撞立てらるゝ鐘に驚き、嚏二つして身を震はせ、足早に山を下りて小梅

へ志しけり、夕月おもしろくさし昇りて、兩側の軒下に團扇の搖く小路を驀直行けば、所の名は知らねど、建家疎に庭とも畠ともつかず、地面を濶く取たる中に、荒たる小家のちよぼりと立てる樣は、いかにも田舍めかしきところに出たり。三方行止りにて戻るより外に道なきを、うろうろと垣間の細徑に入込めば、これも行留り、人家の裏口なり。垣隙より何心なく覗へば、車井戸の側に汲餘の水こぼしにも用ゆると見えたる小池に、河骨ひしと生茂りて黄金の花競咲の汀に、大樹の柳ふさ〳〵と枝を垂れて、青き幕を懸けたらむごとき陰に、白き物の蠢くを何ぞと瞳を凝らせば、年少女子の行水するなり。好圖案！と惣毛立つばかり嬉しくなりて、邪魔なる垣の杉の小枝を推分け、顏さしあてゝ男の熟視ると知らねば、女子は湯浴果て立上り、柳の幹に片手を懸けて及び腰に體を拈り、此方へ七分の前向になりて足裏を拭ふ下視の頭より、肩に亂し懸けたる洗髮に風が戲るれば、乳の肉豐の邊より太股の半面に月は蒼白き

光線を浴せかくれど、女子は更に繕はぬ無心の立姿に、いみじくも蟲音を緩にあしらひたる、人界の顯象にあるべしとも念はれず。ましてや丹青のよく寫し到るべきにあらず。このまゝ金縁を施めて壁に懸けたらばと、蘭谿そゞろ心に見惚れける間に、女子は柳の根方にありける浴衣を引懸けてついと内へ入りぬ。

なほ忍ばしくて行水の蹟を眺むれば、まぼろしに女子の姿在がごとく、彼腰をかう拈りて胸をかう張り、背はかう見せて顔はかう向けて、柳に支へたる手は今少し上に張らせて、如是と思はず木戸を推せば、すつと音もせで明きしは天の賜物と忍入り、其蹟に行きて柳の木振を見やり、池の容を檢べ、自から女子の位置に立ちて足を揚げ背を曲げ、繪にしてはおもしろからぬ女子の姿を、わが容に添删して餘念なき折から、家内より人の出來る氣勢に慌てゝ遁げむとふみ出す足を、捨てたる湯の泥濘にすべらせ、これはと起上る時下婢らしき女の出來りて、わつといふ大

聲にいよ〳〵轉倒し、足袋跣に駒下駄摑むで一散に驅出せば、木戸の柱に耳を撃着け、直走りに遁げのびて車に乘りて歸宅れば、蘭山耳の血をこれは什麼と訊へば、撫て見て、是はな……是はな……。

（三）

其翌朝蘭谿は機嫌麗はしく朝餐の膳に向ひ、昨夕思ひ附たる圖案の摸樣を逐一蘭山に物語れば、これも斜ならず歡びて、此度の大共進會には出品の畵夥多といへども、恐らくは比類あるまじき新圖案。先生出世の筆にてもあるべければ、願くば十分丹精を籠めて、無垢に純潔に高雅に寫出したまへ。我朝の畵史には破天荒の圖案なれば、千に九百九十九の俗眼は之を淫猥なり、不潔なりと排斥せむはいふにも及ばず。この非難に敵ふて挫けざる楯を造らむには、其自然の美を專念に發揮したまひて、苟且にも人意の微曇を容れたまふなと勵ませば、蘭谿箸を捨て一室に馳入り、埃塗れの繪卷畵帖山のごとく取出して、其中に頭を埋め、參考ともなるべき數十面の圖を撰み、半日計りも繰返し〳〵打眺めて架空に下畵をつくれども、古人の餘唾に陷ちて我から滿足するほどの象成らねば、

それらの書は悉皆片寄せて妄執の邪魔を拂ひ、大字に仆れて默想の裏に、昨夕見たりし行水の女子の姿を憶起せば、一點も忘るゝ所なく明瞭胸に浮び、蟲吟までが爽かに聞ゆるごとく感えぬ。

眠れるごとく死せるごとき蘭谿は、むくと刎起きて筆を摑み、一心を畫布の上に聚めてさら／＼と略圖を成せば、斷續模糊の墨の蹟に、蘭谿が眼には活動の精氣溢れて見ゆるに雀躍して歡び、筆を擱きて右視左瞻、或は眉を顰め或は頬笑み、首を拈り手を擧げ、狂氣の有樣にて多時見入けるが、亦筆を採りて幾箇所を添删し、椅子を離れて望見て頷き、蘭山蘭山と喚べば入來りて之を見るに、平素見慣れし下圖に巧拙異る所なけれど、蘭谿が面上に得意の色見ゆれば、なるほどゝばかり挨拶して、これも亦仕上げて心に協はず、例のごとく引裂かるゝ代物かと心元無がれど、蘭谿はしきりに熱して、喝采賞賛の聲何所ともなく聞ゆる心地して十二分の希望を懷けば、急激蘭山に命じて縱一間横四尺の畫布を張らせ、

おのれは其間を門外に出て、新鮮の大氣に俗想俗慮を一掃し、自然を呼吸し感應して、氣を養はむと近き四邊を散歩せしが、心のみ逸りて筆を採らざる素手のむづ痒く、優々としてあるべきにあらざれば、急足に取て還し、庭より廻りて我室の窓より覗へば、今蘭山が張りあげたる所なり。蘭谿は餓虎の羊を認めたる想ひして一散に驅込み、光線適宜所に畫布を置して下圖のまゝに寫し始むれば、筆に神の宿れるか、我わが身に驚かるゝばかり、いさゝかの澁滯なく、走りに走りて意の向ふまゝならざるなければ、此機を失さじとなほ全力を灑ぎて筆を飛ばせば、其日暮までに女子の立姿の略圖は仕上りぬ。

（四）

夜に入ればそよとの風もなく蒸熱きに、洋燈を二箇點して瀧のごとく汗を流し、左右袒に寄來る蚊を拂ひもやらで筆を採れば、一時近きまでには、池の河骨も汀の柳樹も畧圖は成りて、從來に覺えなく滿足に寫出しぬ。

氣力はなほ壯にして、眼も衰へず手腕にも疲勞なければ、斃るゝまで試みむと思ひしに、蘭山忠告して、まづ腦を養ひ氣を休め、虚心平氣に復りて後しづかに點檢したまはゞ、氣に任せて走らせし筆には、今心着かざる破綻を發見したまふべし。逸りて成せる物は善なりとも狂心の善と想ふ所、美といへども眩目の美と見る所、眞善眞美にあらざれば、此宵は餘勇を收めて愉快なる枕に就き、萬事は明日の事にしたまへといへば蘭谿不與にて、扨はこの下畫は亂心狂氣の筆なれば、欠點多しと其方は

見たるか。明朝を待ちて我が撿るにも及ばず、難あらば今指點て知せよ、助言をうけむと、平常に似氣なく暴かなる語氣に蘭山頭を搔き、我等が眼に瑕瑾を發見さむなどゝは思ひもよらざる事なれど、唯所慮しまゝを御注意までにまをせしが、無用干渉とお心に障りたらば、幾重にもお免し下されと、只管詫入りて出行くを、蘭谿じつと目送り、仆るゝ如く椅子に倚りて筆は握れど、蘭山が邪魔に乘たる膏失せて、今まで氣もなかりし疲勞の一時に發して枕に仆れしが、思ひに繫る物あれば晏起の蘭谿も未明に目覺まし、顏も洗はでかの下書を見に行けば天なほ薄闇し。洋燈の光に照して蘭山が起出るまで眺入りしが、四方明るうなるを待て筆を採れば、食事を通知らるれど椅子を離れず、唯之に心を奪はれて午前十一時になりぬ。

折から面會て協はざる來客の爲に筆を擱き、午飯は對食して、三時を過るまで應接する間の長き事は。至一日のごとく、心も心ならねど逐還しも

ならず、しぶ〱對手して、やがて送出せば驅込むやうに書堂に入り、茶を喚び、長椅子に凭りて、仔細に下書を見れば、女子の腰付にいかにしても心に染まぬ點を發見したり。これをさま〲に寫改れど、後の筆は前よりいよ〱鈍く、改れば改るほど心に背くを辛抱して、ともかくも我慢のなるほどまでに書得たれば、此外にもかゝる所あらむかと注目するに、肩よりかけて腕の筋肉に非難あり。見るから蘭谿性急〱してまた改寫始むれど、心平穩ならねば筆は更に思想に伴はず。消しては書き、書ては消し、この日一日唯此一箇所に役せられて成たるものが、無殘や拙、拙、大拙劣！筆に氣なしと平素罵る蘭山が書にさへ劣るまじきに、烈火のごとく心中焚て、自ら憤り自ら恨み自ら卑み、燈を點して後再び書けば、愈拙なり、抹殺てまた書けば愈拙なり。蘭谿無念の涙を浮べつつ、其身にあるほどの能力と熱心を絞りて夜半まで筆を放さず、額に膏汗を流し、血走る眼を凝て唇を嚙緊め、肩息になりて心血を灑ぐに効な

く、畫くも畫くも悉皆思ひの十分一にも到らざれば、根も竭き、精も盡き、氣も脱け、力も失せ、筆をば壁に打着け、頭顱を抱へて椅子より眞逆に倒れ、床の割るほど足掻して呻きしが、やうやく起かへりて又かの畫を見れば、女子の體格淺ましく崩れ、胸張り脊曲まり足腰不樣に、孩兒が畫く馬さへなほ其象はあるものを、蘭谿未熟なり！といひざま有合ふ洋刀を逆手に把りて、其畫布を寸斷々々に。

（五）

蘭山は先刻より畫堂に消魂しき物音を何事と見に行けば、畫布は無二無三に引裂れ、蘭谿は仰天に床上に仆れたるに、息もや絶えたると、一方ならず驚きつゝ進寄りて顔を覗けば、眼を瞬りて天井を睨みたるにまた驚き、手も出さで先生々々と喚べば、蘭谿は徐々瞳を蘭山に轉じて大息吐き、蘭谿なほ未熟なり！と首を掉れば、異な事をおほせらるゝものかな。何と思ふてその樣にお心弱き事をおほせらるゝ。見れば下書を壞られたは、また之も御心に適はざるとてか。出來不出來は機會もの、お心に適はずば何百枚なりとも書改し、一命は犧牲にして、思立ちたる初一念を貫きたまはむこそ名人上手の心懸けともいふべけれ。さるを唯一度の不出來ゆゑに氣を腐らせて打棄てたまふなどは、日頃の篤志にも似合しからず此道を麁末になさるゝ所爲。男子は初一念を挫くを無上の恥辱

とせり。と蘭谿を抱起せば、氣力なく立起りて引裂きたる下書を凝視ながら、後退に撻乎と長椅子に身を投げて、蘭谿未熟なり、我ながら愛想が盡きた。　又してもさる無氣力き言はおほせられぬ者なり。先生が畫を破らるゝ事は此度に限るにあらず、先生は繪を畫といふより寧ろ裂と言むほど、畫もの〳〵心に適はずとて裂たまへば、此畫を仕上げたまはむまでには少なくとも四五度は引裂きたまふべしとは、他人ながら蘭山覺悟したれば敢て珍らしとも思はざるに、いかなれば御自分はさまでに氣力を落して未熟なりなどゝ喞たまふや。合點の行かざる事と詰れば、蘭谿其顏を流眄に見遣りて、合點ゆかずとは合點行かず、貴樣にも眼あればあの圖を見よ。　幾度か見ましだれど何の子細もなき樣なりしが。なくてか〳〵。彼行水の女子を見よ、顏はともあれ體格の不樣なる、駱駝が柳樹に縛れたる狀ならずや。虎を寫して猫に肖るを畫工の下手と諺にいへど、我は人間を寫して駱駝に肖たるは其上の下手といふべ

し。之を蘭谿未熟なりと自罵るに無理はあるまじ。我從來多數の繪を書きしが、悉皆心に適はずとて引裂たれど、此書ほど拙を極めてしみ〳〵可厭なるはなかりし。されども心を勵まして幾度といふ數知れざるほど改寫めしに、美人は遂に駱駝となりぬ。かく蹟きては到底も此書は完全になり難ければ、さッぱりと斷念て外に何なりとも書くべしとあれば、蘭山少時思案の小首を傾け、かほどの新圖案をやみ〳〵棄つるはいかにも口惜しければ、今一度奮發して試みたまへ、拙者好き模型をお目に縣くべし。

（十八）

模型を我に與へむとか、と蘭谿纔に氣力づきたる面色なり。蘭山また少しく思案して、いかにも拙者の盡力にてお目に懸くべし。なれども容易の事ならねば先生も誓ふて志を變へず、百難を冒しても屹度成就したまはむ御量見ならでは、拙者が折角の骨折も徒勞とならむは無念なり。必然仕遂げたまはむ御精神ならば兎も角もして模型を同伴るべきが什麼とあれば、蘭谿衝と身を起して膝を進ませ、その言葉に虚僞なく見事其方が模型を周旋するよな。もし言葉の如くならば我が何とて奮はざるべき。天晴なる名畫を仕立て必らず其方が勞に酬ふべし。さりながら模型とならむ女子の心期あるにや、覺束なし。なるほど歐洲各國には美術學校の比隣に、或は手腕の美しき、或は腰邊の好しき、或は腹形の好き、各自特所の美ある婦人無數住ひて模型に傭はるゝを營業となすよし、先生の

御物語なれば、模型はいかやうなるも、錢ずくにて好次第なれど、我國にては書道さまで隆盛にもあらず、第一裸體の圖といふものなければ、自から其模型の需用なく、需用なければ供給あらざる理なり。されば今之を需む事の難きは言ふを俟ざれど、吾師に盡す道と思へば、容易事なりとあるに蘭谿歡びて、さらば此より直に車を走らせ、心期を尋ねて吉左右聞かせよ。此度繪の成らむは全く其方が模型を獲て來らむばかりを依賴なるぞ、十分に希望を繫くるぞ。もし失意して歸らば蘭谿も失意して、來春の出品はせざる覺悟なれば、その意を汲みて盡力せよかし。

任重くして心元なけれど、十中八九は仕遂ぐべき所存なり。心期といふは外にもあらず、淺草三筋町なる我無二の親友某の下宿近所に區內第一といふ美人あり。容貌好ことは勿論なれど、なほ獨特の美は其風姿なり。日本婦人は容貌好けれど惣じて體格の不樣なる、衣裳着たればこそ衆人も嗤はざれ、化の皮を引剝ぎなば出臀、猫背、臼腰、行燈股、骨太にし

て肉厚く、寫生して繪となさば孰れか百福圖中の物ならざるべき。われかの娘を見しに、衣裳の上からなれば皮相の見か知らねど、風にも得堪ふまじく華車なるは、まさしく美人骨を具へたるものと見たり。彼ならば皮は剝ぐとも喫はせ物の憂慮なかるべし。其に憂慮はなくとも模型に借すやら借さぬやら其點の覺束なさ。其方は十に八九まで憂慮なしと認めたる所あるにやと訊はれて、蘭山言葉に窮りしが、其所が則ち盡力のしどころ、衝つて碎くる心期なれば、今宵は歸らず明日全日お暇を賜はるべし。いかにも漕着けて還らむと若干の金員を入費に乞受け、淺草三筋町なる親友の下宿へ急ぎぬ。

（七）

蘭山三筋町に友人を訪ひ、何は扨置き、かの美人は御機嫌麗はしくおはしますかとの尋問に、訪問せる主人の起居も聞かざる先に、馴染もなき女子の安否を問ふとは怪しからぬ事かな。我不肖といへども天下の學生なり。讀書の眼は此所に二つ持てど、女子風情の張番する仇眼遣ひの餘暇なしと言放つ。蘭山冷笑ひ、國事を談ずる舌にて曩日は張番せぬ女子の假聲を遣ひしと覺えしが、少し見ぬ間に道德堅固の君子となられしよな。此所が所謂士三日見ざればの本文ならむ？我等が及ぶ所にあらず、敬々服々と立上れば、其男合點ゆかぬ顏して、蘭山何所へ行く？　先生此度裸體美人を畫かむとて模型を索らるゝに、我かの女子を推擧したれば殊外歡ばれて、是非とも寫生したければ、一月ばかり借て來れとの依囑を請けて此方に來りしは、貴君に媒介を賴み、宿の女房を使者として

先方へ掛合はむとの腹なりしが、惜むべし、貴君は昨日の貴君にあらず。もし依然たる昨日の貴君にして、及ぬ戀を志賀寺の上人と同じ思ひに、なほありたらむには、此媒介が縁となりて言葉をも交はせ、御手をも得握らむものを、我人を鑒るの明なく誤りて清耳を汚したる不念さ。之より宿の女房に會ふて委細を頼み、今日中にも先方承諾するならば即刻かの美人と同車して、嬉森を前方に望、渡り樂しき枕橋、君子以ていかむとなすと梯子一段下りに懸かれば、友人飛來て蘭山が手を取り、机の側に引据ゑて、實は我依然たる昨日の我なり。此媒介の大任に朋友がひに我に負はせたまへ。滔々と女房を說破し、頓てかの女子を手に入むは、網中の魚を捕ふるよりも易しと、手を鳴らして女房を呼寄せ、始終を語て禮金の一段を香はせば、女房涎を嚥らぬばかりに喜悦の眼を纖め、知らるゝ通り彼娘の家は尋常ならざる火車なれど、娼妓藝妓妾奉公などは兩親堅氣にて一切相談に乘らず。あれほどの容色は萬人の眼に着き、誰

も野咲は見免すべきにあらねば、これまで受宿が幾十軒入込みしか知れねど、一々刎ねて受附けねば、後には誰も知りて無効と諦め、さる相談を持込むものもなくなりぬ。さもなくて、女子は黄金の今の世に、あれ程の娘をむざ〳〵と十八まで、不經濟な事、貧の中にてあの樣にして唯置くものぞ。此度のお話して裸體になるだけがちと可厭なれど、情を賣るといふ事ならねば相談纒るや知れず。日一圓の給金にて糊口は先方賄とは、女人の手際には類なき內職。私ならば二ツ返事飛でも行べき所なれどゝいへば、友人呵々と笑ふて、此方なら雌豚を畜く時辨當持參にて一日四錢五厘ならば周旋もすべし。女人の模型には肉があり過ぎて迷惑と嘲ければ、女房も口に手を當て身を反らせてげら〳〵笑ひして、肉にしたらば女子三人前の量あるべければ、三圓が物を四錢五厘とは屑屋も得言はぬ廉價。それはつぶしにしての談なり。自分からも肉を賣る氣はいよ〳〵豚に極まりたり。此方の名はおうたと聞きしに、道理こそ御

亭が呼ぶを聞けば、どうやらおぶたいくと聞ゆるなれと哄と大笑ひの中に、女房立上りながら蘭山に向ひ、此より一走り行て話して見るべければ少時お待ちなされまし。

禮金の所に如在はなければ、隨分骨折りて好返事を聞かせたまへ。此道には少し覺えの私吉左右はやがてく。

（八）

女房其家に行きて言辭巧に此始末を語れば、兩親顏を見合せ、互の心中をはかりかねて少時は返詞もなかりしが、父親重輔やがて膝を進ませ、願ふてもなき好き口なれば即座にお請もいたしたけれど、只今は娘も留守なり、一應は彼にも話して見ねば、肝心の稼人が如何樣なる挨拶をいたすやらむ、親の威光にて壓服くる譯にも參らぬは、尋常一樣の奉公ならねばなり。程なく娘も歸宅るべければ篤と彼の胸をも糺し、なほ夫妻相談の上にて御挨拶申すべし。今宵九時頃までお待ち下されといへば女房首肯き、さる大家よりの御註文にてその繪がお急きとの事なれば、此方さへ御得心ならば今にもお娘子を伴れましたき御樣子なれど、おつしやる通り尋常の奉公ならず、御當人のお喜代樣も御留守のことなれば、旦那樣に子細をまをして今宵の九時まで待ますほどに、可成は好い返事

をして下さりませ。諄う申すやうなれど、肌身を汚ず奉公ならずして、給金は妾手懸より三層倍も餘分などは結構の上盛、又となき奉公なれば隨分御思案をなされませ。妾奉公所望の女子に聞かせなば、二返事で顚附くは知れたる事なれど、此方はお物堅くお娘子も今めかず、おとなしくお上品なる所に惚れまして、蓮葉ものゝお跳にかゝる甘い口をしてやらるゝが惜しさに、慮外ながら御相談に參上りました。私の顏をも立てて此話をお纏め下され。吉左右を待ちますると下宿の女房は歸りぬ。

重輔妻のお勢に向ひて、其方の量見は什麼？　この月は何やら角やら目に見えぬ入費立ちて、月末の心元なき折から耳よりの話なれど、從來家内一日絶食しても、淺ましや娘に畜生商賣は得爲せぬと我慢せしに、今となりて縱令情を賣らするにはあらねど、まづは似たる奉公、膚を見せて錢取るとは、見物に一人と大勢の相違はあれど、羞かしき姿を見世物にすると同然の始末は心快き事ならねば、お勢これも謝絶ものかと、金は

欲し――女子は惜し、何方をと思案の投首。お勢は下俯けし顔を擡げて、長年の貧に萬事の不如意は慣れて物屑ともせざりしが、今月といふ今月の苦しさ。此方が二月餘の長病にお役所の方からは依賴の金は入らず、彼と私が手内職にやうやく粥を得啜る次第、夏なればこそかうしても居れ、見たまへ冬ならば饑ゑて凍えて、家内三人命は覺束なき急場。私一人は死ぬともお金の欲しき此月の事なれば、此間も話す女ありしゆゑ、一思ひに柳橋から藝者に出し、藝一方にて身を愼しみなば、吉原勤妾奉公よりは泥水の濁も薄して、撥だに捨てなば純潔身に還らむと思ひしに、此方が物堅くして家庭嚴かりしゆゑ、物讀み手書く方は知れど、三味線の持方一ッ心得ぬ喜代なれば、ならぬ事と斷れば、藝は少しも入らぬ事、抱主が眞似方だけを習はせ、やがて座敷へ出る身とならば、不彈でも濟むは容色の好ゆゑと、其理由聞けば何の事ぞ！娼妓に違はぬ情の切賣。それから見れば羞かしき姿は見せても、膚だに汚さずば婦人の道は廢る

まじ。

身を斫らるゝ貧の中に、賣らば百圓二百圓といふ重寶を所藏みつぶして、今朝も飯喰はぬ切なさ。賣て差支なきものならば、十圓にても手放したかるべし。不良に染みざる親心は、其身死すとも女を生きながら畜生道へ突落す事は得爲まじけれど、貧は惡魔の使とて、とかく善事を人に敎へざれば、娼妓藝妓は汚らはしく、妾手懸は淺ましと、さすがなる志も金力の動かし易く、肌膚の見世物はしても身を潰すといふにあらねばと、妻のお勢は其氣になりて種々に理を附け、進まぬながらも萬更ならぬ口氣にて、先方から陷るやうに彼此と說勸むれば、なるほど、いへばそんな物と重輔も小首を傾け、應と確とはいはねど否といふにもあらず。眼を見合ひて吐息を交す所へお喜代歸來り、常に異れる兩親の樣子訝かしく、子細を母に問へど應ず、父親に問へど同じ樣に言葉はなくて、じろ

じろと顏を視るのみ。何事でござんす？また例の木村が來て、口惡く借金の催促して行きましたのか。子細を聞かせて下され、心元なしと母親に詰め寄れば、お勢は重輔の顏を見るに、かの一條を語れとの目語。喜代、此方に聞きたき事ありと母子の間には正肅たる言辭の、娘は何やら知らねど薄氣味惡さに身繕ひして、いかなる事と問へば、母親の躊躇ふ風情なほ合點行かずと重ねて問へば、心羞かし氣に、繪工の摸型に傭はれてはくれぬかと其概略を語りぬ。

お喜代はつく〴〵聽きて、卑賤奉公ならねば私に可厭はなけれど、お父樣もお母樣も御得心の事かとあるに、母よりは父親冷汗を流し、その樣にいはれては面目もなけれど、知る通りの家の始末………。え丶何の面目ない事のあるべき。いかな事しても親の難義は子が救ふは道なれば、繪工の家へ參るべし。其と定りしからは明日も今宵も同じ事、私は得心でござんすと、すつぱりとしたる挨拶に重輔いよ〳〵面目ながり、母親

もうぢ〳〵と報知に出かぬるを、お喜代から勵まして出しやれば、あとに父親が悄然と首を俛るゝは、良心に責られてなほ決心の絲の繫がりて斷れぬなるべし。お喜代笑止に思へば進寄りて、何をその樣に思案はなさるゝぞ。私の身上のことならば必らず心配は無用になれさませ。心配といふにはあらねど、爲せともなき此度の奉公。其方は何の苦もなく得心の樣子なれど、赤裸になりて男子に視らるゝを、羞かしとも可厭とも思はぬかと不興なる顏色に、お喜代は身を窘めて眼を峙て、おつしやるまでもなく男に羞かしき姿を視られむは、譬へむ方なく辛き事なるべけれど、卑賤奉公には替へられじと想へばこそ、心快く得心も致しましたれ。自ら好き好むで是が成ります事ぞ。否ともいはず可厭な顏せぬ私の心中を察したまはゞ、よう得心したと賞めはせで御機嫌惡きお顏は恨めしやと、道理なる言葉に父親額を撫で、腹を立てな。不興な顏せしは此方の志が氣に入らぬとてにはあらで。親として子にかゝる事勸むるを心

に羞かしく、お勢を返事には遣りたれど、なほ分別に迷ふむしやくしやのつひ色に顯はれ、言葉にまで角の立ちしも皆其方を思へばなり。心に障りたらば免してくれ。さりながらお喜代、從來物堅くして世間の譽物となりし名を惜み、身を愼みて淫行なる事のないやうに、是ばかりが父親の依囑なるぞ。

挨拶に行きしお勢は二時間ばかりを經て歸來り、相談調ひて半月分の給料を請取り、お喜代は明早朝小梅の大久保方へ蘭山同道する次第を語りて、十五圓を父親に渡せば面目なげに推戴きぬ。

この紙幣十に刻ても使用ひたき入用はありながら、我子の稼ぎといひ、または其の可愛さもあれば、お勢重輔に語りて其内の幾分を摑みて質屋へ馳着け、お喜代が命から二番目の櫛、三番目の衣類、其身の同行の衣類など請來り、手燭の心も常よりは多分に出して、お喜代の髮を母親が手束に島田に結へば、泥水のやうなる鏡に幾度か映して、嬉しげなる顔を見れば兩親は流涕なるべし。

十二時を過ぐる迄かゝる騷動に、早寝の重輔も今宵は睡らず、お勢に口を添へてあのゝものゝとの指圖、風呂敷包の衣裳、取散せる髮道具、家

内の樣子何となく賑はしきに、六七年前かくは貧せず下谷に住ひし頃、地主の娘に芝居見に誘はれし前夜の支度を憶出して、癡心の浮き〴〵と得も言はれず娯しき想しけり。

やがて家内臥床に入れば兩親の鼾も聞ゆるに、お喜代は彼方此方と枕爲替へても就睡かれず、明日におもしろき希望あるがごとく胸噪ぎぬ。

あの衣裳着て母親と車に乘りて小梅へ行き、旦那樣のお目に懸りて母親還れば此身一人。其奉公といふは飯炊にもあらず、水仕業するにもあらず、お針にあらず、小間使にあらず、其旦那樣は畫工にて、私を模型にして女の繪姿を畫るゝとの事なれど、唯このまゝにて模型になるにはあらで、裸體になりてあられもなき姿を寫されむと、想へば胸遽に轟き、我にもあらず身を縮めて、枕に顔を掩しぬ。

淺ましき姿は思ひも懸けず見らるゝさへ、所爲すべ知らぬほど羞かしきを、自から衣裳を脱ぎて男子の前に立塞かり、孔毛までしげ〴〵と視ら

れてその樣を書に寫かるゝ辛抱がなるべきぞ。所詮勤まりかねる此奉公は廢止にして妾……？其は畜生奉公とて許容したまふまじ。なるほど女の道の壞るゝ業なれど、明日からの奉公とて眞人間のする業にはあらじ。道の缺くるに大小ありて、妾奉公の卑賤は此上なきに相違なけれど、眞晝中素肌を男子に見せむは、女子の淑德を壞りたる是も同じく畜生奉公！男子にても我はと進むものはあるまじきに、藝妓にても娼妓にてもあるまじきにと、想へば身毛立ちて夜衣を緊と引被ぎぬ。同じ卑賤ながら――道に缺くるは大いなりとも、これよりは人の妾にならむこそまだまだ勝なれ。妾はあるまじう口惜しくも情を玩弄ばるゝながら、其人に貞操を立てゝ萬人女人の道を守りなば、我心に慚づる所なく、人の嘲笑物ともなるまじきは、常盤前も妾なれば靜も妾なり。妾奉公は卑賤きものと世人もいひ、父樣母樣もおつしやれど、見世物に曝さるゝを卑賤とは思召さぬのか。この奉公はなるまじき事、爲まじき事！母樣にいふて。

（十一）

その明朝お喜代眞先に目覺めて、いよ〳〵此奉公廢止に決心し、兩親の起出るを待ちて意中を語らむと構へたるに、母親起出れば今朝は茶漬なりとて、朝餉の支度と云程の事もなければ、何ともいはぬに鏡を出して亂髮を新梳けてやらむといふに、今起きたりし父親の見えぬを訝かしみて何所へと問へば、お前の木履買に出られしと聞けば、さほどまで他人を騷がせ、此期に及びて當人のおのれが可厭といはるゝ義理にあらず。これまでに運びたる上は何も孝なり、死ぬ氣になりて行かむかとは思へど、但怯氣立ちて、十分二十分と過行くに、死期の逼れる心地して可厭なる事いふべくもあらず。思案に沈める娘の顏を母親鏡裏に見て、氣分惡きにや、優れぬ色は心懸りなと尋ねられしを好機會に、此奉公の心に進まざる事をいひ出さんとする所へ、生憎父親呼吸急き歸來りて、お喜

代之を觀よと、喜ばるゝ氣にて風呂敷を解き、鶸茶天鵞絨の鼻緒すげたる木履を取出して衝着けらるゝに胸逼り、言葉はなしに唯會釋すれば、父親は思ひの外なるお喜代の機嫌に、我鑒定違ひて其方の氣には入らざるか、入らざるならばまた一走行て嗜好のと交換へて來るべし。其方の嗜好を聞かせよと難有過ぎたる厚意に、どの口から可厭といはるべき？否々氣に入らぬ所ではござりませぬ。結構過ぎたる木履といふては見たれど、是が我を見世物小屋へ無理送りの木履と思へば、手を觸るゝさへ心快らねど、折角の志しを戴かざるは勿躰なしと取上けて視れば、父親は滿足なる機嫌にて、お勢髮がよくば早く飯にして行け。おつゝけ人力車の來るやうに、角の相撲屋へ誂へて來たとの言詞はお喜代の胸を貫き、はつとばかり落膽して、扨はいふても可爲なし。昨夕あのやうにお父樣のおつしやりし時、此奉公は心に染まざればといふて退けたらむには、もと／＼思はしからずお思召さるゝお父樣なれば、此相談は中止になり

たらむものを、彼時は什麽なる心にてありけむ、我口から我心から此度の奉公を望みて、不服なるお父樣を口說き、今朝はかく老實しくその支度の世話なさるゝまでにお勸めまをせしぞ、我と我心を今にしては知り難し。昔氣質のお父樣なれば昨夜は此口から無理に望み、此出懸といふ際にまた此口から可厭などゝいはむには、親を玩弄物にする所爲と御腹立は知れし事なり。さりながらそのお腹立は一時、この奉公ゆゑの我身の破德は一生涯の疵なれば、お父樣腹立ちたまはむともお母樣が叱責りたまはむとも、一思ひに打明けてと舌頭まで言葉の出でし時には、兩親に急立てられて衣裳を更へ、帶を路考に母親後へまはりて結び、父親は前より見上げたく\〳と心から嬉しげなる顏色。いつにもなき此機嫌を我唯一言に損ぜむ事の惜さ氣毒さに、舌頭まで浮きたる言葉は忽ち消えて、泣いても喚いても行かねばならぬに、胸は早鐘撞きて物恐ろしき事いはむ方なし。

支度濟めば早く一膳やれと、父親に急着かれてしぶ〳〵膳の前に坐りたれど、箸を取らむも物憂く、膝の上に重手して眼を瞑り、物思はしき風情を父親がまた見尤めて、何所ぞ惡きかと尋ねらるゝに氣を回復して、否々何所も惡い事はござんせねど、何やら胸一杯にて御膳も欲くなければ、お煎花ばかり啜きますといへば、無理にも一膳は食べて行きやれ、先方へ行きて空腹うなり、午飯をさもしく多くなど食べなば下品ものと嗤れむのみか、貧乏人の娘なればと他人の思はむも慚かしき事なりと、これも我をいとしき餘りのお言葉と、輕く一膳を咽喉へ通す苦しさ！母親はそこ〳〵に身支度して、忙はしく食事を濟ませし頃人力車來れば、お喜代もこれまでと覺悟を極め、機嫌好く暮したまへと言遺して母と倶に車に乗れば、父親戸外まで見送に出て膝蔽の世話までして、無事に勤めよ身を愼めといふを、首肯に受くるや否や車の走るに、一月ばかりの離別も我家は懐かしくて振返れば、父親はなほ此方を見送りて佇みけり。

（十二）

お喜代が車上路々の想は居所へ牽るゝ羊に異らず。前には蘭山の車走りて吾妻橋間近に來たれば、觀音詣の群集の中に一際着飾れる女子、新形の帽子冠れる男、風船玉持てる洋服の可愛らしき小兒、車夫の喧嘩、交番前の群集、それ〳〵目に着くものあればお喜代に見せむと母親心着くれど、浮かぬ顏にて其等には目も懸けず、唯奉公の一條を案じ煩ふても、及ばぬ事はなほ弦を放れし箭を逐ふに似たれど、思諦らめかねて口惜く、二ツには先方へ行きて逃れむ術なく、給金受取りたる上は我身體にして我物ならねば、可厭といふても泣いても、肯かずば手籠に遭ふて無理往生に衣類を剝がるべし。

父親が世盛の頃、南傳馬町の何とやらいふ繪師に二百圓用立てゝ倒されしのみならず、引据ゑて蹈着けられしやうなる目に遭ひたりとの話を聞

きおよび、同じく繪師とあれば亦その樣に苛き男なるやも知れず、と幼稚き了簡を起して我から恐ろしがり、堪難くなりて思ふ子細を車上にて窃に母親に語れば、母親は今に及びての不承知に膽を消し、種々に宥め賺して、心からか外面かは知らねど、やう〳〵唯と言はせ、長い事にはあらず唯一月の辛抱なり。さる事を父親聞かれなば、苦勞性とて容易に心を傷めたまふは知れし事なれば、此度の所は我慢してくれと、義理責に搔口說聲の耳にや入りけむ、數度蘭山が振向を母親認めて談話を止むれば、間もなく大久保蘭谿と門札打ちて、廢垣を扣ふる衡門に車は留りけり。

蘭山まづ內に入れば、二人は玄關に立ちて四邊を顧視すに、古天井煤けて壁に龜裂多く、入口の庭は荒果て、一叢竹の葉の砂埃に染みたるなどいかにも貧乏臭きに、月三十圓も出して女子を傭ふほどの畫工の家は、何から何まで綺麗ずくめにて、升形の門構嚴しく、玄關には金の衝立な

どゝいふ結構か、さなくば小本の口書にあるやうな風流に小結構なる家と思ひの外、奥にては主人何かの内職をして在すべき小旗下の破屋めきたるに、母親俄に懸念の胸を傷め、繪の手本などゝ詐りて女子を引寄せ、慰物にして還さず、肯ねば女郎などに賣らむといふ惡計に罹りたるかと疑念起れば、奥の方の話聲も何を牒合すかとそゞろに怯氣立ち、人の出て來ぬ間に遁げむかとは思ひしが、金子の請取たり、住家とても知れてあれば、毒蛇に魅られしも同然、いづれ難儀は遁れぬ所！しなしたりと取て還しのならざるを悔いて、心も心ならず女子を見れば、下俯きて思案に暮れたるは、さりとも心着かでこの奉公の可厭を思ひつゞくるなるべし。

やがて蘭山出來りて此方へと導かるゝまゝに昇れば、此所はさまで汚穢しからぬ一間を扱けて、客間と覺しき西洋室に通されぬ。機關か、賊の棲家か、此室の見事さ、美麗さ！絨氈に花を蹈ませ、椅子には錦を惜

まずして、之を敷く事勿躰なく、遠慮して腰も懸けず四壁を視れば、女神、武者、花卉、鳥蟲、夕暮の山、曙の湖、いろ〳〵様々の額面大小透間もなく懸聯ねて、大いなる唐木の飾棚には、女人には解らぬど世に珍らしと覺しき古器物を陳列べ、壁天井より釣下したる洋燈の見事なる繪にても見し事なし。卓子蔽を二人して撫て見て帯にしたらばなど丶、娘はなほ幼癡にて見も馴れざる裝飾に心を奪はれ、彼方此方と物珍らしげに見廻りて少時は憂を忘れたるごとし。

老年は勘辨ありて母親はいよ〳〵訝かしがり、戸内はともあれ門外を飾るが尋常なるに、此家は門外を放擲に汚穢くして、此室の美しき事大金持の居間のごとし。子細なくてはかなはざる事と、主人の身上を怪しみて胸穏からず控ふれば、蘭山茶を持來りて、切籠細工の硝子の器に、ボンボンとかすてらを盛たるを置き、只今主人お目に懸るべしといひ捨てて退けば、やがて戸外に足音の響くは其ぞと、二人ともに椅子に身繕ひ

して待てば、戸を捻る音は、母の胸にも女子の胸にも響き渡りぬ。

（十二）

入來る主人を見れば年齡三十路を少に越えたると覺しく、中肉にして身長あり。人品の好は華族とも思はるべく、圓顏にして色白く、肌理濃に、頭髮薄く柔軟に、八字髭は眞黑に短く、金緣の鼻眼鏡を懸けて物を見るに少し仰ぐ癖あり。

洋服は黑の上衣に華美なる縞袴を穿きて、胴衣には黃金鎖を山形に繫み、體の擧動に樣子造る氣取なく、滿面に小兒らしき愛嬌深く、縱からも見、橫からも見て、心中に一點の邪氣なき相なれば、母親は案に相違してまた驚きぬ。

氣輕に初對面の挨拶して、頻に茶を勸め菓子を勸め、お喜代を見向きて之がお娘子かといふに、母はあらためて紹介し、不束ものなればお目懸けられましてなどゝいふを好きほどに遇らひ、やがて浮世話を始めし隙

に、お喜代は見ぬ風して忍びやかに蘭谿の風姿を覗へば、對坐に居らむは物羞かしきばかりの美男子なるに、此人の前にて衣裳を脱ぎ、裸躰を視らるゝ事かと想へば冷汗流れて、丸木橋の下に渦巻く水を覗かむごとく、可恐樣にて、又其にもあらず一種異樣の感情起り、自然顔を赧めて餘所を向きけり。

我家とは事異りて居心好き此室の結構なるに、同じ奉公せむにはかゝる住家に起臥の望ましく、また同じく主人に持つならば斯る温和閑雅なる美男に仕はれむには、おなじ小言をいはるゝにしてもさまでは腹立たしからず。此家に居て此の主人に仕はれなば、給金などはなくとも此方より望む所なれど、其は下女奉公か、其上の慾は小間使などの事にて、この主人だけになほ〳〵可厭なるは見世物奉公なりと、また蘭谿が方を窃に見遣れば、馴〳〵と母親と物語の中に機嫌好く幾度も笑ふて、笑ふたびの唇頭の可愛さは、嬌羞も忘れて見惚るばかりなり。

少時の間の會話なれど、母親は蘭谿の恃もしき男なりといふ所を大方見極め、潮のさしたる小舟を捨て、親船に移りしほど安堵の胸を撫で、ほくほくと喜びて繰返し〱娘の身を頼みて暇乞し、お喜代には旦那樣大事に仕へよと言遺して玄關に出れば、蘭谿、蘭山、お喜代も見送り、母の車の今引出さむといふ際の心細さは顏色に見はれ、物は言はねど其車少時、母樣待てといふ意は眉目の間に知れて、性根の可愛らしさに蘭谿思はずじつと其顏を視れば、羞ぢて俯く時車は出でけり。

客間の後に六疊の一間あるを居間にせよとあれば、蘭山お喜代に手傳ふてざつと掃除し、持參の手荷物を此所に始末して、やがて午飯は三人一所に卓子の上にて、いかに人數少なしとて惣菜の奢りたる、我等が誕生日よりも、とお喜代の心に驚くこと大方ならざりし。

蘭谿食事後の茶を飲みながら、お喜代に早く馴染ませむと樣々に談話を爲懸くれど、十言の尋問に一言の應答も得爲ず、うぢ〱と穴もあらば

入りたげに羞かしき様子を氣毒がり、居間へ行て風通よければちと午睡なりとせよとの言葉に、お喜代は虎口を遁れし心地して我室に退き、今にも召ばれて裸體になれといはるゝかと、其のみ心構して恐ろしがり、氣はわく〳〵と胸躍り、今や〳〵と待てば、蘭山と呼ぶ聲もそれかと耳を貫き、戸の響、人の足音、蘭谿が咳拂までずき〳〵心頭を刺せば、心勞の過激に上氣して氣を遠くし、懵となりて其所に身を伏せけり。

室に入來る人の氣勢に、心着きて面をあぐれば蘭山なり。扨はと遽に胸轟き、可恐眼をして蘭山を見れば、見られし方は驚駭の眼を睜りて、彼方へ行て茶を煎れて先生の所へ持行きたまへといふを、我を呼寄する方法と思へば腰弱りて、立ちかねつゝ唯と答ふれば蘭山は出行きぬ。

茶を煎れよといはるゝに行かぬは惡かるべし、と戰々立て蘭山の所へ行けば、鐵瓶烟を吹きて沸音を立て、茶道具は火鉢の側に取出したるに、早く煎じてと促され、煎じ了ればまた早く先生の所へ持行きたまへと急

かれ、いよ〳〵時到れりと顫ふ足を踏緊め、教へられし書堂の戸を徐と開くるか開けぬかに、裏にて茶かといふ聲、ぎよつとして小聲に唯といへば、此所へ〳〵といふに力着きて入れば、蘭谿は斜面に書布架を搆へ、繪具版片手に筆を休めて此方を見てぞありける。

お喜代は恐る〳〵茶の給仕しながら、今にも發言すかと、蘭谿を流盻に懸けて待どもさる氣色は見えず。一口二口茶を啜りては側なる卓子の前に置きたる粉本を眺め、また一口啜りて畫布を視、三椀茶を更へて急須に一滴もなくなりければ、只今注して參りますと茶盆を持ち行くを呼留めぬ。

（十四）

南無三！　唯といふ聲も十分に出ず、足は床に吸着きて取れざるを、やうやうの決心にて體を捻向け、薄氷を覆むがごとく二足ばかり進めど、蘭谿は餘念なげに揮毫せるに立留りて、御用でござりますかと問へどなほ顏も向けず、言葉をも發さずして筆を走らすれば、流石に裸體になれとは氣毒に思はれて、躊躇ひたまふなるべしと思ふほど、今にも出でむ一言が運の極と鼓動く心の鳴高く、蘭谿が橫顏を凝視めてあれば、やゝあ

りても何とも言はざるに重ねて何の御用と問へば、最早茶は入らぬ、蘭山と相談して晩には何か味美ものを食はせよといふ。

足下に落雷したる想ひして唯と答へ、また呼ばれなば此次こそは例の事と、腋下に冷汗を流して急足に室を立出で、蘭山の許へ行きて主人の言詞を傳へ、お使にでも參るべきか、お掃除でもいたすべきか、洗濯物などあらばいたすべしといふも、奉公に來りしゆゑの世辭にはあらで、日毎貪に使役はれし身は、遽にお孃樣のやうに端然としては居たゝまれでいひしものを、さる事は此方がするには及ばずと、蘭山は下女の業を賤しみて、お喜代を大事にしての言分なるを、さりとは解らで、此身を裸體の奉公女といはぬばかりの心を恨みながら、もし御用もあらばお呼び下さりまし、襷まで持て參りましたればと言捨てゝ退きぬ。

今にも呼ばるゝか〳〵に此日を待暮して、夕月おもしろく庭の松の葉越に影させば、椽に蒲莚を敷きて、蘭谿仕立おろしの浴衣湯上りにしどけ

なく、白縮緬の三重帶ゆるく前結にして、膳立の手傳ひせるお喜代を自ら呼びに來り、出來たらば早く持來れとて、庭前の座敷の隅なるぴあのを鳴して何やら小音に唄うて待てば、お喜代は膳を椽側へ運びてよろしうござりますとの報知に、よい月影ではないかといひながら座に着きて、お喜代にしやんぱんの酌させて一盃干し、對手なくては物淋し、少し飮まぬかと盃をさゝれ、一向に頂げませぬと會釋に屈む時、見ともなく足の捻れたる銀の古簪を落し、顏を赧めながら手早く拾うて挿せば、飮まぬならばとさし出す盃に酌すれば、手元狂うてどッと出る酒は、蘭谿が手に懸りて膳の上に雨泄の如く落つれば、お喜代は身の置所なきまで面目ながら、重々しく頭を下げて麁忽の段を詫入れば、些細の事に可愛らしき初心めと蘭谿笑止がりて、膳が醉ふたら其方に介抱さすぞ。

(十五)

この夕酌人の心に適ひたるにや、蘭谿うか〳〵と平素よりも過ごして、微醉の口輕に、一義を語り出して、今日にも臨摹すべき心規なりしかど、其方がいかにも世馴れずして、初心なる風采を見るにいとしく、怯氣が發て、睡れる蝶を捉へて翼を引捋らむごとく、苛たらしくも不便さに今日は思ひ留まうたれど、其繪は要急の註文なれば、際限なく猶豫はなりがたし。兩三日の中には是非に及ばざる事あらむ、氣の毒なれどその覺悟あるべしとの言葉に、なるほど覺悟の前ながら、いざと死刑の宣告を受けたらむほどお喜代の胸は轟き、小さくなるたけ體を窘めて、心底可厭なれば可厭といひたさは溢るゝほどなれど、此塲にては否とて舌が働かず、しぶ〳〵頭を下げての挨拶は、心に染まざるゆゑと蘭谿いよ〳〵氣毒に感え、どうやら不得心の樣子？　道理なり。誰しもさる羞かしき姿

を見せむは、進まぬ事ならむとは知れど、條理を聞かば氣の持方唯一にてまた辛抱の瀨もあるべし。日本にては從來曾てなき事なれど、外國にては更に珍しからで、これを渡世とする男女許多ありて悉皆有福に暮し、畫道には無くてかなはざる摸型なり。なほ又數々の名畫を產出す大事の母なればとて、開化の民はこの職業を蔑視むことなく、貴人高家の令孃といへども、名ある畫工に所望さるる時は、更に憶せざるのみならず、わが姿の好ければこそ、と此上もなき名譽に思ひて自由に肉體を見せて、羞かしさの恐ろしさのなどゝは夢にも知らぬ事なり。

また或やむごとなき御息所は、優れて畫を好ませたまひ、容顏世に比類なく絕美におはしましゝかば、特に御自身の肖像を畫かせたまふ事を歡ばせたまひ、千狀に畫盡くされて御樂の爰に絕えなむを悲しませたまひけるに、不圖陰神の雲中に戲むるゝ姿繪より思ひつかせられ、みづから御肌あらはにならせたまひてその神の容を學ばせられ、當時隨一の畫工

に命じて寫させたまひし例もあり。日本にては誰もせざりし事とて、あながち愧づべきにあらず。秘すべき肉體を人の玩弄に見せむとならば、いか樣羞かしかるべし、蘭谿が一心を籠めむ大事の繪の摸型となりて我を助け　日本國に未だ開けざる繪の道の爲と、心を大きく氣高く構へなば、何の子細もなかるべきにと、方便半分に賺せども、分別爲替たる氣色も見えず、浮かぬ顏してしみ〴〵愁さうにさし俯首きて、此度は挨拶もなく、挨拶の體度もなく、人形を据ゑたらむやうなるお喜代を見遣り、可厭ともいはざりしものを此方から無理に可厭にして、つまらぬ俗說に退屈させ、空腹くもあるべし、迷惑にもあるべし。そのやうに濟まぬ顏せずとも、機嫌直してくれぬかと、有合ふ團扇にてお喜代の胸を戯れに扇げば、はつと心着きて、否々何も心に濟まぬ事などはござりませぬ。

（十六）

運命いよ〳〵この兩三日に極まると聞けば、其とは知れど聞かざりし時の取越苦勞に輪を懸け、刄冷やかに頸を度る想の苦しさ。此夜は神經鋭敏に睡眠を成さず、更け行くまゝに疲れて纔にまどろめば、わけもなき恐しき夢に魘はれ、冷汗に心地惡く目覺めては、胸に塞がり、思ひを摑むは其事なり。

かく幽囚同然の身となりては、今更逃るべき路はあるまじけれど、逃れ得む所まではと精を凝して考ふれど、兩親は承知の上なり、給金は前借したり、毛筋ほども縛繩に弛みなし。無けれどももしやと百搔て見るも、未練は事に當りて有るものなり。

所詮かなはぬ所！死したる氣になりて、同じせむものならば惡びれずに、鯉といふ魚俎板に上る時は、生きながら尾鰭だに動かさず、おとなしく

庖丁を受くるとて、誰も居常此心懸はあるべきものと、父親のよく話さるゝはかゝる時ぞと念へば、我とても不幸にして網に罹り、水を離れて俎板に上るも遁れぬ運なり。不運と諦め、人として鯉に劣らむは無念なり、此上は唯潑よく覺悟せむ。かく夜の眼も合はさでくよ〳〵思ひ煩へばとて、何の效もなきものをと枕を仕替へ、夜衣引寄せて睡らむと勉むるほど、目は洗ふごとく冴えて、冴ゆれば心活動きて、活動くは其事に活動くなりけり。

もとより無理推附に推附たる覺悟なり——分別なれば、決定りたるも露一滴蛛圍に懸かりたらむごとし。少しく心の風噪げば、ゆら〳〵とし始めてお喜代の分別また迷ひぬ。

旦那樣のお談話には、外國にてはやん事なき方々まで、繪の爲には裸體姿を厭はせられざるよし。外國は知らず、此國には此國の習慣あり。連添ふ良人の外には、神樣にも、夢にも人に見せまじきものとは、いかな

る下司なる女も知れり。

縦令目前にて高貴の姫君様が先進になりて肉體を見せたまふとも、他人は他人、我は何所までも羞かしければ其眞似は得爲じ。

見世物になりて大勢の玩弄になるにはあらず、我國の畫道の爲とやら旦那樣はおつしやれど、此身は畫工にあらねば畫が好といふにもあらず、また世間には幾人も女人ある中に、我一人が何科ありて、何の醉興にて、何の爲とて、他人の畫の模型などになるべきや。

人の娘と生れては、兩親を大事に懸け、所夫を持たば所夫に貞實に、子を持たば其子をよく躾けむぞ役目なる。その兩親貧なれば其貧を救ひ、大事に懸けむとての此奉公といはゞ、盗奪しても兩親の爲ならば、其にて世間は許すべきや。かゝる淺ましき業は畢竟は兩親の名折、此身には大瑕瑾附きて、人知らば、結婚人もなくなりなむ果は、妾奉公か娼妓が關の山なるべし、と身を念へばかゝる事も考ふれど、それよりも何より

も眞先にこの事の不承知なるは、何故と聞かれなば返答なけれど、唯羞かしければ可厭なり。

(十七)

模型になるは何日の事と、明日窃に蘭山に訊ねければ明日と答へぬ。いよ〳〵明日かと念を推せば、いよ〳〵明日に相違なしと聞くより、胸潰れて室に還りけるが、かく時迫りては羞かし恐ろしといふ念慮のみに、心は空になりて思案の分別のといふ間なく、此家を逃出したりとて遂に逃るべきにあらずと知りながら、壁の彼方まで大浪の寄來りて、今にも此身を捲込まれむかと怖ろしく、周章狼狽前後を忘れて裏口より脱走だせしを、二人ともに知らざりけり。

お喜代は重荷を下したる心地して、一心に道を急ぎて吾妻橋を渡れば、家に近づく大道の、其所の店此所の看板など馴染あるに、雨親の事思想に浮めば遽に足進まずなりて、此まゝ還りて何といふべきや、と思案に暮れて行けば、人力車の道に塞がりて罵られ、馬車の音に駭かされて、

人行少なる横町へ折れ、小溝の端を投首して行く足の捗らねど、兩親へ言譯の工夫着かぬ間に、いつか我家の一ッ手前なる横町に着きけり。取て還して脇路の小路に入り、歩行ながら慮ふれど逃歸りたる申開きなし。最初より自身も知るごとく唯可厭にては通らず、申譯立たずば屹度譴責るべし。譴責られて逐ひ戻されむよりは、これより還りて其所等まで買物に行きしと言立て、おとなしく奉公せむか、脱走せし程なれば其も可厭なり。還りて兩親に譴責るゝも辛し。行くべきか還るべきかの分別に迷ひ、幾所となく横町を廻り廻りてなほ心の定まらぬに、客待の老耄車夫が後を跟けて、還り車を安く召してといふを辻占に力を着け、此所にて思案せむよりは當つて碎くる覺悟して道を急げば、午後三時とも覺しき頃我家の二三間手前まで來り、出窓に風鈴の短冊のひら／＼するも目に入れど怯じて近づけず、三四間引還せしが思切て踵を回へし、やうやく隣家の前までは來りたれど、一歩も出さじと誰やら抱窘むるごと

く、體は退くに輕くして進まむに動かざるを、振放して馳出すばかりの氣組にて、格子まで行きしも開けしも夢中なりし。母親と顔を見合はせ、心臓裂けたりと思ふほどはツとして、上らむともせで框の前に佇めば、思ひも懸けざりしお喜代の歸宅に驚き顔にて、何と思ふて歸りしぞとさり氣なく尋ねけるも。お喜代には鰾膠なく聞こえて、話説もせぬ内からの不興と可恐々々上り懸くれば、この暑いに好くぞとは、父様は堅氣一遍なれば此身が逃歸りたりとは、噓にも思ひ懸けたまはずしてのお言葉と、母親の不興なる挨拶より一倍腸に染みて恐ろしかりき。

（十八）

何用ありて還りたるぞと右左より詰問めらるゝに、此場遁れの虚言は言はむに言はれじといふ事なけれと、今にも蘭山逐懸け來らば自一至十露はるべし。其よりは今此所にて打明け、譴責らるゝものならば譴責られて濟まさむと心を決めても、餘りに法外なる仕業と良心我を責むれば、唇頭へは出しかねて、榨に懸かる心の煩悶容に表はれ、顏を赧め、體を窄め、忙しき流眄の罪科を恐れ氣なるを兩親ともに曉れば、嵩に懸かりて問懸くれどなほ得言はぬに、母はもしやと思着きたる事のあり貌に、重輔に目交してお喜代を二階へ伴行き、旦那樣其方に御戯言などおほせ懸けられしゆゑ逃げ歸りたるか、然ならば然といふべし。裏む事もなければ恐がる事もあるまじきに、と考違の言葉に驚き、否々決してさうした事ではござりませぬ。　そんならお弟子樣が？　お弟子樣は少し

もその樣な……。　そんならお役に立たぬとてお暇が出たるか。　否
否。　何か麁相して申譯なさに還りたるか。　否々。　扨は其方
が奉公を厭ふて？　唯、免して下さりましと面を背くれば、母親當惑
して、我等を泣かせる氣か、頑是なき年齢にてもあらざるに、其やうな
る我儘して貫徹と思やるか。さほど可厭ならば何故最初に得心せしぞ。
此母が大久保樣に合はさむ顔なしと萎入れば、お喜代は笑止さ膽に徹へ
て、なほ顔は背けたるまゝ小聲に御免なされてといふ。まづこの仔細を
お父親樣にもお話し申して御相談せねばと下行けば、お喜代も悄然跟て
母親を小楯に座り、かく〳〵と話さるゝを後にて聞けば、一言毎に犇々
と胸に針刺たるゝ切なさ。其度に父親の顔を覗けば、眉蹙みて眼色恐ろ
しく、此方を睨むを避けて俯首けば、熟と聞了りて腹立の小言もやと、
また窃と覗へば苦き顔して、今となりては可厭といふとも通れぬ所なり。
さほど不得心のものならば最初からぴしやりと斷わりたるべきに、給金

まで前借して遁歸るなどとは以の外の事ならずや。半月たりとも一月たりとも年季を定めたる奉公なれば、その期の内は主人の身體にして、主の命なくては一寸たりとも外出もなるまじきに、書の御註文せはしく一日も惜しき折から、奉公の仕時を外してかくの始末に及びたれば、何より申譯なきは、主人は之が爲めいかほどの御迷惑をなさるゝか知れず。また此方にしては給金拜領きながら、御用を勤めずして還りたるは騙拐も同じ事なり。よしや大事の一人娘を川竹の濁流へ捨つるとも、一家内そろふて騙拐の汚名を受けむには替へられじ。武士の一言は金鐵のごとしとて、一旦番へし言葉を理由なしに反古には爲難し。かゝる事の起因は喜代が最初に無勘辨なる得心にあれば、おのれが過失ゆゑと思ひ諦め、神妙に奉公せよ。勢、其方とてもまた無理往生に得心させしは過失なるぞと言へは、其様におつしやらば、否とはおつしやらざりしお前様とて罪なしとは申されまじ。今更その様な愚痴はおつしやらで、喜代によく

合點させて心快く還るやう御意見して下されと、母は坐を少し變へて、陰なりしお喜代を父親の前に現せば、只管面目ながりて兩親の言葉を聞き、始終を慮ふれば、なるほど可厭とばかりに我儘は言はれぬ仕義、立還りておとなしく奉公して、兩親に安堵させむものとの念起り、いらぬ苦勞を懸けたる事がしみ〴〵氣毒になりて、一旦の不了簡、心を悛めて大久保樣へ參りますといへば、兩親も稍心落着きて、辛抱してくれと我子に頼みの口氣、勿躰なくなりて、此後また御心配は懸けまじと、やうやく事の定まれる所へ案のごとく蘭山車を飛ばせて來り、預りのお娘子不圖行方知れずとて主人殊外氣を揉まれ、内氣なるお喜代樣なれば遽に兩親が戀ひしうなられて、顔見に一寸戻られたらむも知れねば、まづお宅へ見に行けとの言ゆゑ不取敢馳着けましたに、此方に見えられて安堵しましたと、仔細は大方承知の上にておとなしやかなる挨拶に、兩親は娘の不調法をいとゞ悔いて、背長ばかりは延びながら、まだ幼女のや

うなる無勘辨もの、今も今もて折檻いたしましたれば、かゝる不始末は此後決して爲まじきと只管詫びますれば、送還さんとせる所へ折よきお迎ひ、この暑き所を何とも恐れ入りました、旦那様へはよしなにお應接を頼みますと、夫婦口を揃へて詫入る後に、お喜代も面はゆげに頭を下げて、やう〳〵上ぐる顔を蘭山に瞥見れけるに、また薄氣味惡く物恐ろしくなりて立ちかぬるを、急促れて車に乗せられぬ。

（十九）

お喜代は蘭山に伴れられて還りけるに、我過先の面目なさと、主人の立腹を豫想り、心配の餘り現に逆上せて蘭谿の面前に引据ゑられぬ。唯俛首きて今や雷霆の一撃と、此所に身を措く空なく待てば、例の濁音を帶びてゆたかなる聲は、春風の耳元を弄る如くやは〳〵と、兩親が戀しくば毎日にても少時の暇はやるべし。無斷に行かれては無用苦勞せねばならねば、此後は一言言遺て行けと慈悲深き言葉に、お喜代は嬉しくも勿躰なくも愧かしくもありて、段々の不了簡を過れば、其には及ばぬ事と何所までもやさしき言の數々をいはれて我室に退りぬ。

宿に還りてはどれほど譴責られむかと、限り知らずに怖れたりしも、させる程の事なく引戻されては、親とは違ふ他人の事なれば、憂目を見せられむを遁足ながら覺悟して還りたるに、針の莚を眞綿の厚蒲團に更へ

たる對遇に張つめし心は弛みて、世に又なくも溫和き親、慈悲ある主人を喜びて氣も霽々となり、裸體の一條は無き事のやうに遺れて正午も過ぎぬ。

三時頃書堂に呼鈴の鳴るに室を出づれば、蘭山は反古の如き西洋書の巻きたるを二十本も控へて、いそがしげに調べものしてありしがお喜代を見て、今此通り手が塞りたれば、代りに御用聞て來て下されといふ。

書堂に行けば、蘭谿散亂せる雜物を親から片附くるに、お掃除でござりますかと問へば、男寡居ゆゑ蛆の虫拂する所と笑はせられぬ。

蘭谿が席には大いなる畵布架を据ゑ、其正面の壁の前をかく掃除するは、もしやと心着くに、胸は早鐘撞くごとく轟出してあるにもあられず、ぶるぶると慄く足に力を籠めて踏應ふれど、なほ寒氣立ちて恐ろしき事限りなし。

蘭谿四邊を見廻し、窓帷を上下して光線の具合を鹽梅し、一寸といひな

がら肩に懸けられし手頭は、骨も拉げむばかり五體に徹へ、呼吸は其時止るかと想ひぬ。

はやお喜代は現心になりて、聲も出さず遁げむともせざれど、蘭谿が手には凄まじき戰慄を感じけり。其心根を思遣りて無慈悲の殺生と哀を催せど、さればとて已むべきにあらねば、見測らひたる位置に立たせて前後左右に廻轉り、手を擧げさせ、足を蹈更へさせ、支に卓子を持來りて、かの行水の女子が體を拭ふ姿を扮へむとするに、お喜代は滿面火のごとく上氣して、額際より玉なす汗を流し、手も足も粘る程汗ばみ、體は窘縮勝にして筋骨の硬さを、蘭谿も察したれば、彼の此のと剛きことは遠慮して言はざれば、宛然重きものを扱ふごとく疲勞を覺え、其身も汗になりてやうやく姿勢を裝へぬ。

お喜代は半心死して殆ど前後の辨別はなかりし。

(二十)

お喜代を行水の姿勢に扮へ、蘭谿書布架の坐に復りてつく〴〵と打眺め、少時してお喜代の身近に來り、衣裳を解げと聞くに胸潰れ、手を抱緊めて立竦に竦めば、蘭谿少しく身を退き、我一人の外に誰も見る者とてあらざれば、其樣に羞ぢらはずとも、一寸脱ぎて少時の間の辛抱なり。我は職業とて佛蘭西に在りし頃は、日毎に女子を裸體にして見しに目慣れたれば、人形を見ると更に異る事なし。

男に肉體を見らるゝがさほど羞かしと思ひながら、其方は洗湯へ行きて衣裳のまゝに風呂へ入るか、さる事はあるまじ。肉體は近所の大勢に見られ、立働く三助にまで見られむに、それは羞かしとも思はざるべし。我とても肉體を手本に繪書くが商賣なれば、其方にしてもいはゞ之が商賣ならずや、商賣同士にて相互に羞づべき事も可笑き事もあるものなら

ず。其方が肉體姿を見ればとて世間へ吹聽するにもあらず、又此室の突然に客の來らむ憂もなく、蘭山にも言含めて立入る事を禁じたれば、忌憚なく衣裳を解ぐとも何の子細なし、と帶際に手を懸けられ、絶躰絶命の淵に臨めばもはや遁れぬ所と覺悟はしても、外には人なき室に男一人と居るだに、何やら物恐ろしげに羞かしくして、席には堪ふまじき乙女心に、應とはいへず、否ともいへず、無言てあらば手籠にも遭むかと恐ろしく、さりとて男の目前にて帶は解れず、三つ四つの思ひに身は唯一つ、應か否いづれの返事もしかねて口を閉ぢ、帶に懸かる手をも拂ひ難く、自から帶解かむ氣力はなほなく、じつと身動きもせで顏を背け、蘭谿何といふか、何と爲るか。言はむも爲むも身の窘むべき事なるに、膽を冷し、呼吸を殺しておど／＼と顫へば、蘭谿手を放して、時刻移らば光線の具合狂ふて今日は寫生なるまじく、さすれば明日も亦たこのやうに可厭な思ひに苦むべし。いづれにしても何日一日肉體を見せでは濟む

まじければ、長くこの苦惱を受けむよりは、今一思ひにやつて退けなば後の心安からむと、いはれて見れば其に理あり。一日延ぶれば一日の心切と、聞えぬほどの忍聲にて、お目前にて衣裳は解ぎ難ければ、其間此所に私一人をといふ。

蘭谿首肯きて、衣裳を解ぎたらば合圖に此呼鈴を鳴らして知らせよ。隣室にて待つべしと行くを留め、貴方の外には誰も來ぬやうに。其には氣遣すな、早くぞと言捨に立出でけり。

蘭谿隣室の椽なる藤細工の寢椅子に憩らひ、引立耳して鈴音を待てども待てども鳴らず、又脱立しもやせむと想ひけれど、一方口なり、窓より出でなば此所より見ゆべし。さる事はあらじと待つになほ鈴鳴らざれば、何してかと氣遣はしく、行て見むものと椅子を離れしが、例のごとく羞て躊躇の最中へ飛入らば、折角の決心を摧きて、また盛かへすに手數の懸からむを恐れ、室内を散歩して大凡長湯の女三人ほども待たせたりと

覺しき頃、鈴の音微に響きぬ。扨こそと蘭谿も胸は躍れど、わざと落着貌に優々と戸を開けば、時ならぬ雪一團！埋れぬ紅梅の蕾と見しは、わづかに色づける乳房なりけり。

後篇むき玉子

（二）

灸も皮切の熱さ、四箇五度と重るほどに馴れて、なるほど赤裸を見らるるは、見られざるに越したる事にあらねど、羞慙は兎も角も薄らぎて、最早遁ぐるの、走るの、死でも辛抱のならざるほどにはあらずなりけり。灸とても身の毒とならば、肉の爛る苦痛を誰忍ぶものはあるまじきに、膏汗になりて堪ふるも命思へばなり。お喜代はこの家に居馴染みて主人蘭谿が一擧一動を見るに、其心には一點何の汚濁もあることなく、見る眼に、笑顔に、物言ふに、爲す事に、行ふ事に、溫和、慈愛、哀憐等、享くる身にしては嬉しき事ずくめなるに、敬慕の念起りて日增に深く、夜は枕頭に其面影去らず、朝は目覺むるより其姿を見むとての愉快、見

れば飽くこと知らずして、その眼前に我身を措く事の心快。主從の義務ゆゑに尋常働くなどの、奉公人了簡は氣もなくて心から用を樂み、此家を去りがたく思ひけるに、また我前に筆把りて、曲線一畫にも精神籠むる蘭谿が、眼中に畫の外なく、心中には畫くといふ思慮の外なく、摸型として我姿を一筆毎に見入る眼波に浮きたる色なく、實に我を非情の石像と見るか、若しくは自家腦中に現はるゝ無形の裸體像と見るか、孰にしても不純潔の思想を抱きて、玩弄の眺め物にせんとにはあらざる事、連日の觀察にてお喜代も會得したりけむ。

また我身にやさしく頼もしき人の情を、肝に銘じて嬉しければ、其に報はむとの念慮出づるは、人として避けがたき常情なり。我姿摸型となりて其人の筆思ふまゝに馳せ、滿足なる畫の成らむとならば、何にも増さらむ報恩の業なるべしなど、此等の分別よりとは明瞭に自身は識らずして、此等の分別さしもの羞慙を摧き、帶解く手もおのづから顫はず、一

片の覆物なきに立つ脚の震慄も止まりて、蘭谿が指揮のごとく姿勢の調はざるを氣遣ひ、其人是といふまでにともかくもして調へば、此度は筆が思ふまゝに動かずして、蘭谿が不滿の顏を見る度々の氣苦勞。其等にこそ今は心を痛むれ、身の淺ましき姿なる事は忘れて、石像木像扨は畵のごとく我を想做すまでになりぬ。

日は三十餘日を累みてお喜代の役も果てぬれば、暇遣らむと主人が下命を蘭山より傳ふれば、お喜代は生返詞にて其坐を退き、明日蘭山まで申出でけるは、はや寫生の勤も果ぬれば、外に用には立つまじき此身なれど、此方の御樣子も大方は覺えましたれば、犬猫よりはお手助にもなるべきに、これまでのお馴染がひとて不束は御辛抱なされて、今日より勝手へ下げられて水仕業を私の勤、長く此家に御奉公申したき心願なれば、おしつけがましけれど此方樣より旦那樣の御意を伺うて、好樣に御周旋をと折入ての依頼、萬更別際の捨世詞とも思はれず。蘭山も男子の身、

且は修業盛の身にして、煮炊の世話の小面倒なる折から、一月餘朝夕を同じくしてその氣質を見貫たるに、無垢の娘の世磨れず、兩親が敎育のいさゝか鑄塑に方も圓もそのまゝ、物堅くおとなしく出來て、人物には非難の打所なき女子と見たれば、さほどのものを下婢には難有く、其氣ならば先生に申上げてと蘭谿に語りけるに、少しも異存はなくて、冬にも向はゞあの手を胼胝に、玉を瑕つけむは無下に心なけれど、我等が爲に働きくれむとの志の嬉しさにと、早速親元に懸合ひければ、緣沙汰のあるまで御奉公申上て、世間不見の不束ものめを人らしうお躾け下さらば、此上もなき仕合との挨拶に、三方四方よけれども其日より改めて、仲働やら下働やら色々兼ての奉公。蘭谿よりは蘭山が喜悅、菜刀の柄を執りし間も筆を捨てざれば、此後の一日は今までの二日の修業と、身を思ふより他人を思うてお喜代を劬れば、世話効あるに精一杯働き、汚れたる手巾は蘭山にも持たせず、かほどの事は一々擧ぐるも冗し。

なるほど女子のなくてはならぬ世、と蘭山が始めて心着きたるも可笑や。

（二）

髭髭もじや〳〵の嚴格らしき眼光の男、其にさへ添ふて睦ましき女房あれば、人は容貌や再三の對面にては美い味の知れぬものにて、よく〳〵嚼占ての上、苦い所もある代りに甘露のやうな所もあり、彼と此と差引勘定して見れは、世間に嫌な奴はなきものなり。昵近になりては思ひ寄らざる襤褸も出るかはりに、錦の織文見事なる所はます〳〵目に染て好もしく、捨て難き思ひ慕れど、御方は主、此身は家來の遠慮ありて、心中を其と見せつけの所爲もならねど、家來同士の蘭山には打解け易くて、堪へぬ思ひを折々は婉曲に知らせもすれば、目も耳もある人は疾に曉りて弄れば、顏を赧めながら遁げもせず。其樣な戲言ばかりいふて、もしも旦那樣のお耳へでも入らば、私が面目なければ此後は、屹度いはずに、堪忍して下されと、儀式一遍の挨拶。二日も言はずに措くならば、三日

も此方へ御言葉も賜はらず、遺恨は三度の杓子あたり。拙者夫が可恐に色々と心を勞ひ、朝飯前に一度、晝飯前に一度、晩飯の前にまた一度、茶請に二度ほども弄り奉つるは、努々醉興の惡戯ならで、悉皆此方のお髯の、否何、お鬢の埃を拭はむ下心と、蘭山つれ〴〵の紛れに口を酸くして弄殺せば、そんな事をと言捨に遁出すを、用ありげに呼留むれば、言はるゝは可厭にあらねばこそ、何のかのと口小言をいひつゝ坐に復れば、蘭山遽に眞顔になりて、扨此からは眞實の話なり。これまでは不思議の緣にて段々のお世話になりて、今更お名殘の惜けれど、先生はいよいよ來月の上旬さる華族方より奧樣を迎へらるゝに極まりたれば、家内に生若き女子の居るは、先方の思はくも心苦しとて、今月限に喜代には暇取らせむほどに、その通りを話してくれと、昨夕先生のおほせつけなれば、今朝早々言はむかとも思ひしが、言ふたらばそれ……な……それ萬事は承知の此方とて好心持せねば、言そびれて今まで差控へたれ

ど、いつまで言はでも愜はぬ事と、思切てかくの次第。今月を限にて、また逢はるゝやら逢はれぬやら、知られぬ行末に思遣のなきほど、先生のお顔の見置をしたまへと語る中に、可哀やお喜代の元氣次第に衰へ、蘭山が言葉の了るが疾や遲し、其はあのある事かと膝を進むれば、嘘とも思はば念霽しの爲、其となく先生に聞ても見たまへといふ。

お喜代は思ひに胸も湧く夏の井に、氷を見る心地して呆れ惑ひ、後の事はともあれ、さしあたりての分別、言葉を盡して、いつまでも此家に御奉公いたしたければ、お嫁御樣お出の當坐は宿へ下げらるゝとも、下婢なくてはならぬお宅なれば、新參ものゝつもりにしてまた召還してお遣ひなされて下さるやう、後生一生のお願ひ、此方樣からお願ひ申してと、手を合さぬばかりに頼み入れど、頼み難きは人心とて蘭山動く色なく、しかもお喜代に不利なる道理を言募りて取合はざれば、かくまでに不實不深切の人とは思ひも懸ざりしがと、最早未練を捨て他人は頼まず、部

屋へ還りて獨分別、しては見たれど好思案は浮まずして、世の味氣なく身の敢果なき事ばかり。餘りに鬱ぐを不便とや蘭山の慰めけるは、先生とて常々此方が氣質を褒め、勞動を感じたまへば、手放したき心はさらさらあるまじけれど、先刻にもいひし子細ゆゑ暇遣らむとはおほせけれど、此方が自身に願ふても見たまはゞ、御了簡翻りて、此儘に置かむとか、お輿入の當坐だけ假に宿へ下げられて召還さるゝとか、此二つにいづれは相談の成る事もあるべし。獨り其樣にくよ／＼案じたりとて、益もなき事ならずや。此所は我口から取次がむより、直々に此方からいふが優ならむと智慧を貸せど、强薦業と愧かしくて、確乎とせし返詞もせず、なほ案じ煩らひて其夜は寢ながらの思案。外にこれぞといふ思慮も出でざりければ、明朝は旦那樣の御機嫌を見合せ、敎へられしまゝにして見るべし。あの樣に慥さうに言はれしからは、旦那樣にも此方が居たき心ならば、置て下さるべきお心のなきにもあらざるべし、と其をせめ

てもの頼みに騒ぐ胸を慰めて、眠りし事は眠りしが、現のやうにいつしか明けて、啼鴉の不吉なりけり。

蘭谿盥嗽して座敷の裀に直り、口中清めて葉巻を薫らす所へ、お喜代は例の如く牛乳を持來りて主人の顔色を察へば、冬の朝日影障子を照して、群雀の餌に鳴く聲に心快けなる樣子なれば、後刻朝餉の給仕の折發言して見むと、其儘退りて程なく膳を運び、食事の半頃までもその機會なく、うぢ／＼と控へたりしが、茶といふに盆を差出す時、其方は寢の足りぬやうな顔色、いかゞせしぞと尋ねられぬ。

今朝には限らず、何時とても些細の事にまで心注けらるれど、取分け身に染みて嬉しく、語るに効ありと、お喜代は膝の上なる手を擦て、昨夜は終宵寐ませぬゆゑと俛首けば、蘭谿怪みて、病氣か　否。　何とて?

宿へ下りますが可厭さに、其ばかりを案じ煩らひましてと訴ふれば、蘭谿眉を顰めてお喜代の顔を仔細ありげに見護りて、宿へ下るが可厭さ

にとあるからは、暇取らせむとて三筋町から母親でも參りしか、手紙かと問はれて、忍びやかに蘭谿の顏を上目に視て、我愛情を運ぶと堀口樣(蘭山の姓)より聞かれしか、但は我が所爲にて曉られしか、何にもせよ此の身の心を繋くるよしは知りたまへば、流石に不便とも思召して、暇くれると御自身から堀口樣におつしやられし事は、我眼前にては氣毒にも思召されて、彼樣に知らぬ風をしたまふならむ。訴ふるも願ふも此所ぞと、委い事は昨日蘭山樣より承まはりました。いよ〳〵お近い内に奧樣をお迎へあそばすとの事、御目出度ぞんじまする、と慇懃に挨拶されて、蘭谿眼を圓し、お喜代の顏をじろ〳〵見て、其は何だ、何事？昨夜の夢の見續けか。喜代其方はまだ睡つて居るな。　その樣にしら〳〵しい何もお掩しあそばす事はござりませぬ。奧樣お入來に成まして……。　これ待たぬか、其方は氣が違ふたな。　否々旦那樣こそしら〳〵しい事を。何？　我が女房を持つ？誰がいふた。　堀口樣が申しました。　空言だ。

ハヽヽヽ洒落だ。　ハヽヽヽヽ。　其は蘭山が空言をいうて……。　否決して空言でも洒落でもござりませぬ、と顏を赧めて言募り、肯入るべき氣色なければ蘭谿當惑して、大聲に蘭山々々と呼べは、飛來りて何御用といふ。　其方は喜代に昨日何か申せしか。　一向申せし覺無之と言はせも果てず、お喜代は膝推向けて、堀口樣、覺えのないとは何事、旦那樣が御祝言あそばすについて私にと、眞顏になりて談じ懸けられ、頭顱を抱へてわつと笑うて駈出だせば、蘭谿も堪らず反を打て笑ひ、それ見よ、空言だわといへば、お喜代は面目を失うて居たゝまれず、袂に顏を掩してばた〳〵と走出て、蘭山の居室に飛入て貴下はなと取着かむとすれば、蘭山體を拈つて擦脱け、好氣味々々々〳〵アハヽヽと遁廻るを、お喜代は追懸け〳〵、擦脱け〳〵、家中をどさくさ、ばたくさ、どたばたどたばたと、家鳴震動何事と蘭谿が出て見れば、蘭山縁側にへたばりてお喜代が其腕に嚙着きたるに、御免々々〳〵と喚立つる顰面を見て、蘭谿腹

を抱へて笑ひながら、喜代しつかりやれ、蘭山の意氣地なし！

春は三月の末、東叡山の初櫻綻びて人心の浮立つほどに、隱居どのまでが一僕とほく〳〵ありかるゝ折しも、繪畫共進會の開會とて參觀人此所に山をなし、山に雲をなして近年無比の賑ひを極めたり。出る衆入る衆蘭谿か裸美人の事ばかり語合ひて、諸新聞も此評に筆戰每日の事とて、東京市中はいふに及ばず、日本全國の評判に、蘭谿一家は天へも昇らむ心地して、金牌掌中と筆者はいとゞ胸を轟かして待設けぬ。

蘭谿は日每朝より會場へ詰懸け、我畫の四邊を徘徊して士男の臧否に耳を欹けり。

我畫の三號室に群集溢るゝばかり夥だしきは心笑ましく、なほ其室にして我畫の前にのみ人山を築きて、推つ推されつ芋子を洗ふごとく、此室に入來る士男を見るに、脇目もふらずまづ衝と我畫の前に來りて多時立

留り、やがて殘餘の畫は匆卒と見流して行くに、鼻もおのづから蠢きて心地快事生れて以來曾て覺えもなし。されどその三分二は繪の事沒分曉漢にして、巧妙といふも無理な所を譽め、拙劣といふも無理なる所を貶し、揚句はあの裸體の女子の好容！實物でもし拜まば堪つたものか、骨も筋もとろ〳〵となりて、えゝ畜生めなどゝ見識らぬ前の人の臀を抓り、驚かされて逼行く眼垂男も數有り。人の若き女房おとなしき娘どもは、さらぬ方を向きて此所を足草に過ぎなから、又還り路に流眄して過行くものあり、鄙猥淫靡近頃言語道斷、怪しからぬ、心得ぬ、公衆面前白晝かゝる物をなどゝ、涎を手繰ながら三日續けて見に來るものあり。笑繪のあるのは此室かと頑固さうなる老夫の目鏡懸にて入來るもあり、毀譽相半すれど、兎にも角にも此度の共進會は、蘭谿一人の畫の爲に開かれたるごとく、人の眼も脚も之に留りて、世間騷せの大道具となりければ、蘭谿機嫌顏に勝矜りて歸宅し、先日より度々行て見よと勸むれど、何故

なれば喜代は否といふぞ。彼書のかく名譽を博したるも、其方が恥辱を忍びて模型になりし功績なれば、是非一日は參觀して、見物夥しくあの前にて評判する景氣の凄じさを見せて、倶々に悦ばせたく思へばこそ、先頃共進會への晴衣とて衣裳も帶も調へくれたれば、明日は否應なしに必ず行くべし。見物の取沙汰にて其方に聞かせたきは、多分の人は我繪を巧妙といふよりも、口を開けばまづ可愛らしき娘、美しき新造と、寫生したる其方が容色を譽めざるものなきぞ。我も其方のやうなる美人を畫たればこその評判を取りたれ、餘の物なりせば彼に數倍の盡力ありとても、此十分一が名譽も得難かりつらむ。されば繪よりは人皆其方の容色に迷ひてともかくも騷ぐなれば、半分は其方の名譽との戲言に、喜代は火のごとく面を赧めて全身に汗を流し、口の中にて御冗談をとばかり言捨に、勝手の方へ逃行きけり。

蘭山何とて喜代は彼樣に參觀を嫌ふにや、赤裸なる我姿が曝物になりた

りと思ひ込みて、羞かしきゆゑにやと問へば、其はお言葉に違はず、彼が常々申してをる事なり。

(五)

蘭谿は日毎お喜代にすゝめて共進會へ參觀といふ。小袖も帶も其ゆゑに新しく調へたるを、折角の厚意は辭しがたけれど、萬人の中に恥辱洒しなる、疎ましき我姿の寫生、悔ゆるとて及ばぬ事ながら忌々敷て、此日頃朝夕の懸念。共進會とばかり人のいふを聞くにさへ胸跳れば、新聞は恐ろしくて手にも取られず、何の此のと我姿繪の取沙汰、獨見るさへ冷汗は全身を浸し、この醜行を良心の責めて絕間なきに、我の心は知らず、蘭谿も蘭山も寄れば此繪の話說ばかりして、擧句は我身の功勞と喜ばるるも譽めらるゝも、譏らるゝごとく哈はるゝごとく想はれて辛き事際限もなし。さるを何とて厚皮に着飾りて手柄顏して會塲に行き、其畫の前に立塞かりて、此は我繪姿といはぬばかりなる擧動のなるべきや。此頃は知る人識らぬ人打交ぜて、出入の劇しさは悉彼畫からの事なれば、茶

の通ひに出づるを眼敏き人は遁さず我顏を視て、畫きたる裸女の模型とや思ふなるべし。心不快眼波してじろ〳〵と見らるゝさへ傷心なるものを、態々會場へ出向きて稠人の見世物とならむ事思ひも寄らず、と心中を打明けて參觀の謝絕いへど蘭谿承諾なく、なるほど我姿繪の前に立留り面影を見尤められて、彼女子こそ此畫のなどゝ細語かれむは心苦しかるべし、我は其方が見飽きたる彼畫を又見よと強ゆるにあらず。共進會中拔群の出來とて見物の評判高く、衆人々々其方が寫生の容色に憧れ、遍照が歌の樣ならねど、まことに繪に畫ける女人に心を動かす所の見せたければ、此より直に同道すべしといふ。容色の沙汰とてなほ羞かしく心憶して、その樣な事は見たくも聞きたくもござりませぬ、この儀は御免し下されましと、血相變て種々に詫入るは、心底嫌厭なるものを無理にといふも情なき業なりと此話は寢みぬ。

ある日の午後玄關に三四人の氣勢して、つひに聞覺えぬ聲にて案內を乞

ふものあり。お喜代取次に出づれば、六十路に餘れる老人の、顏の肉萎びて顴骨秀で、段鼻可怖きほど高く、大きなる眼の尾少し垂れて睚黒み、額際より手反まで一すべりに赤禿げて、後腦の邊に枯尾花のごとく薄白髮生殘り、黒縮緬の羽織は時代めかしく大きなる五紋、平打の紫紐を胸高に結び、黒羽二重の小袖に、何やらむ華美なる下着を召して、六月目ほどに懷中を膨ませ、太やかなる黃金鎖をだらりと下げて、腰をくの字に足を外面に構へ、滋籐の杖衝張てごほ〳〵と喘きながら、蘭谿は內にかと匆躰臭し。主人は宅にでござります、誰樣と問ふを引取て、家臣らしき四十前後の男、仙臺平の袴を綷縩つかせて、大久保殿御宅ならば老公の御入來と傳へよと橫柄に言放つ。其後には三十越したる男なほ二人控へて、お喜代の顏を視ながら何やら囁けば、四十前後の男も顏を向て眼語せして、老公といふ老人にまた憚りながら目交仕つれば、目尾をいやが上に下げられて御機嫌斜ならざる樣子。お喜代は氣味惡くなりてそ

ここに立て、蘭谿に此よしを次ぐれば自身に出向へ、はつと平伏して、これは〳〵、かゝる茅屋へ何と思召されての御尊來?冥加に餘る仕合せ。まづ此方へと客間に請じ、蘭山も喜代も主人の下命のまゝ、何やら子細は解らねど倉卒と衣服を更め、お細よお火よお茶よと立騷ぎぬ。蘭谿が次間へ退りし時に、二人して彼は誰樣と尋ぬれば、我藩主の老公なり。蘭山希有なる顏して、今までつひぞなき事、何御用のありて?其は我にも解らぬ。

お喜代が客間を退れば、奥には蘭山が紫檀の盆の上に硝子盃を列べ、シャンパンの栓を抜かむとする所へ行値せ、其前面に坐りて聲を潜め、彼御隱居樣は華族樣にも似合はしからず、誹議を申すやうなれど、擧止の下品なるお方にて、好かぬお人と獨言けば、蘭山壜口の木屑を拂ひながら、下品とはどの樣に下品なるや。

もう〳〵それは可厭な眼をして我の顏をじつと凝視め、其さへあるに三人の御家來衆までが同じ樣に我を視て、目授袖引きこそ〳〵話をするなど、可厭な方ばかりと、腹立たしげに訴ふれば蘭山頰笑みて、噂に聞けば彼老公は年効もなき好色漢とあるからは、大方は此方の事を聞及ばれて、上野は一重にて眺薄く、向島はなほ早ければとて氣を變へて、小梅の隱里に人は知らぬ花の眞盛、香を慕ふてわざ〳〵來らせたるに相違な

し。桃李は言はねど其下蹊を成すとやら、御果報のほどが蘭山骨隨羨ましきと弄れば、お喜代は赧らむ顔を背けて、又しても其樣な冗談ばかりといふ時、客間には主人が手を拍音のしければ、それお急ぎと蘭山硝子盃と壜をお喜代に渡し、老公のお待兼！減らぬものなれば澤山顔を見せて、春秋なき人に成佛さすも功德の一つと突遣れば、お喜代は廊下に出て顧眄き、蘭山を睨むまねして、また其樣な可厭らしい事を、今度いひたまはゞ旦那樣に申上げて、譴責せますが御承知かといへば、蘭山が事などは申上げいでも、外に申上る事が許多も胸に餘るべし。ちと御取次申さうかと竹篦返しにぎつくりして、盃も壜も其所に捨置き、貴下はなと取て懸らむとすれば、また拍手の音に手出しもならず、覺えて居たまへと客間の方へ急ぎ行きしが、多時ありて歸來り、堀口樣と呼ぶ聲もしほしほと元氣なき顔色を、いかにしたまひしやと蘭山が尋むれば、直に應答はせずに太やかなる溜息を洩しぬ。

寵相などして旦那樣に叱られしかと問へば頭を掉り、そんな事なら好けれど、此身に一大事が起りさうな。　一大事とは氣懸りなり。聞かせたまへ何事ぞと、蘭山も親身になりて問詰むれば、お喜代は一寸と手招きして立上り、偸に〱と足音を制して客座敷の次間に誘ひ行き、襖に身を寄せて手招くは、心得がたけれど忍足して蘭山も立寄りて耳を峙てぬ。

（七）

老公言語の中にごぼ〳〵と咳嗽を調合ひ、大久保那畵は頗る好出來じやの。人口に新聞に世間一體の評判よろしければ、其方が名譽は藩の名譽、我も此上なき滿足。會場を行覽きながらも何となう肩身が潤いやうな氣持がして。いや、彼ほどの技倆とは思ひも寄らざりしが、天晴々々ごぼごぼと咳入れば、恐れ入たるお言葉と蘭谿慇懃しく頭を下げぬ。

四十恰好の男は家扶の大淵、面色を和げて、大久保殿お聞きなされ。老公には殊外彼畫が御意に召されたりとて、今日までに十三反も御參觀あそばされ、いつも此方が畵をのみ御覽じて御歸邸なさるゝとは、阿と難有き事ならずや。かく御賞美の餘り近日御邸へ召されて、御酒を下されむとの仰せ出されもありけれど、其までは待たせられず、早く對面て技倆のほどを褒つかはしたしとの御意まかせに、今日も參觀の御歸途、態

態此方まで御車を枉げられしぞと、いかにも恩がましき口上。
蘭山は襖の此方にてお喜代に耳語き、何が一大事？異りたる談話の模様にもあらざるにといへば、最少し默りて聽きたまへと制す。ごほ〳〵の老公また咳きながら、大久保、あの畫の女子は見れば見るほど眞に逼り、今にも搖ぎ出でなむ氣勢ありて、實物のありて寫生したるやうに、世人噂すれど信にさる事もや。
お喜代はそつと蘭山の肩を衝て、それ、これからでござります。これからが大事かといよ〳〵聽耳立つれば、蘭谿が聲音にて、
なるほど衆の噂に差はず。惣じて人物を畫くには、最も實物寫生ならでは協はぬ事なるが、就中裸體は體格に不正ありては然るべからず。摸型にしたる實物に分釐の相違なきやう寫生せしよしを對ふれば、老公頷かせたまひて、然もあるべし〳〵。實物寫生とあれば體格のみにあらで、顏なども其儘ならむと想はるれど、此は什麼と尋ねたまへば、物陰なる

お喜代は蘭山の背を續様に衝きて、見合す顔に傷心の眉を顰むれば、蘭山も此の仔細會得の授目して、兩人倶に片唾を呑み、蘭谿の返詞如何と肉を硬くして控ふれば、

蘭谿何氣なく、おほせの如く顔も寫生と申上げぬ。お喜代は忽爾顔色を變へ、蘭山は眼を瞋らして、しなしたりと胸を轟かす。引替て老公の喜悦は目尾に表はれ、扨は察しの通り彼畫の摸型ありやと、家扶なる大淵を見向きたまへば、大淵呑込貌にて膝を進ませ、其婦人今尚お宅に在らば老公御覽じたき御思召深きに、大久保殿其婦人はお宅にかと、先刻承知の上にて識らぬ貌の尋問。

お喜代は面憎くも腹立たしくもあれど、此落着如何ならむと、其を念へば心も心ならず。此上の屬望は蘭谿が唯一言、宅には在らぬと答ふる計りなれど、敵手の容子口氣を見ても大方其とは知るべきに、顔も寫生とづか／＼言放たるゝ調子にては、先刻取次に見えしが其女子と、事もな

げにいひかねまじきは心元なしと氣を急れど、對河岸に火事とて所爲術なければ、冷汗を握固め、呼吸を殺して耳を峙つれば、案の如く蘭谿斟酌なしに、只今お茶の通ひに罷出しが、摸型にいたせし女子なりと語れば、老公絲の如く眼を纖めて、黄金の指環の輝く左手にて禿顱を摩り、心着かざりしがあの給仕女が其なりしか。大久保、今一度熟と視せやらぬか。老公には其が何よりの御馳走と、後に控ふる兩人が口を揃へて追從申せば、お喜代は座に堪らずして拔足に奧へ竄行けり。

（八）

蘭山はなほ身を潜めて樣子を窺ひぬ。蘭谿口頭に微笑を帶び、それは何より容易なる御馳走。唯今此へ招びまして、さりながら貴人の前に嫻れざる下司女、あり內の無禮は御免しあるべしと申せば、老公相好を崩させ給ひ、中々苦しかるまじ。唯早く／＼と急立て給へば、領承りて手を鳴す。蘭山倉皇奧へ遁行き、お手が鳴ると火鉢に悄然凭るゝお喜代を促せば、しぶ／＼顏を擧げて首を掉れど、客間にては手を拍つ音の激しきに、お喜代は一向返事もせざれば、短氣の蘭谿今にも腹立つべしと蘭山獨り氣を揉み、御用なれば一寸行てと、手を取て引くまでにすれど更に動かず。彼方にては喜代は在らぬか、蘭山は在らぬかと主人の疳癪聲。之に駭きて蘭山駈着けて御用は、と坐敷の入口に踞めば、蘭谿不興なる顏して、お客來中に其方等は何を爲をるぞ。喜代は居るか、呼べ／＼と

苦々しく言放てば、蘭山頭を下げて、お喜代殿俄に感冒の氣味にて部屋に臥し、熱など出て大分苦痛の樣子、見かねて私藥買に參りたる留守の御用召にて、思はぬ失禮の段は幾重にも御宥免下さるべし。何?喜代は感冒にて……、病氣とあれば是非なけれど、我慢のなるものならば推しても一寸參れ。急なる用ありと傳へよとあるに、返す言葉はなくてお喜代に此趣を告れば、掌を合せて伏拜み、よういふて下されました。髮も亂れて見苦しき姿して臥りたれば、御免下さるやう此方からよう申上げて下され。

承知々々。さりながらもし先生の參られて、此所に異狀なき此方の姿を見られなば、又御腹立のほども氣遣はしければ、部屋へ行て夜着引冠て呻つて居たまへと智惠を借せば、喜代が世に嬉しげなる顏色！其眼波が御隱居殺しと危急い所で一戲謔、身顫ひしてお喜代は我部屋へ駈入りぬ。蘭山座敷へ行てお喜代の言葉を、少し修飾て申せば、家扶の大淵仔細あ

りげなる眼光にて、蘭谿主從の顏を等分にじろり〳〵。やれ待たしやれ。髮が亂れたりとて肌が熱臭しとて、其等には毫毛も構ひなし。また氣分も惡しからむなれど一寸の御目見え、其が莫大御馳走になる事なれば。いらざる禮義立の辭退せずと疾々伴れらるべし。病美人これは尙好し、風に傷める花の姿、濃麗なる奇觀なるべしと太皷拍てば、老公ごほりごほり。いかにも亂髮ごときが何の苦しかるべきとのたまふ。末座なる男の一人が、亂髮より今一段なる亂姿を、繪なれども御覽じての上なれば、さる些細の事は申立てらるゝだけが冗なりと、寄て集ッて引張出す算段の相撃、撃たるゝ身の辛さ、蘭谿も默しては客への不馳走と、有意に目を瞋せ、老公の御意なるに、否を申さば其分にては措かじ。有無を言はせずに伴來れと、聲暴に罵りつけられて膽を冷し、遁るがごとくお喜代の部屋に到れば、待兼ねて、樣子は什麼？大變々々。

（九）

大變とは？　老公の御所望とて其方を招かれしに、返詞さへせざるを平素になきお腹立にて、病氣といふも肯いれられず、無理にも同伴れとの下命なれば是非なし、早く坐敷へ行かれよ。また／＼猶豫したまはゞ此方の迷惑。可恐事もなければ可怖事もなきに、何を其樣に思案なさるゝと、蘭谿が不興に荒膽を挫がれて冗談口も放かず、蘭山眞面目なり。また手を拍音に、早く／＼と足摺して急立つれど、お喜代は動ずる色なく、否でござんすと刎られ、蘭山きよとりとして、此方がいくら否でも主人の下命を背くは奉公人の道にあらず。茲で否を主張らば老公に對して此の上もなき先生の不面目なるべし。南無三寶、またお手が鳴る。お喜代殿どうかしてくれぬか、此方一人立つ瀬がなし。一寸出れば濟む事なり、と立寄てお喜代の手を執れば振拂ひ、此方も知らるゝ通りお座敷

へ私を招ばるゝは、小陰にて聞し通りの子細なるに、此身にもなりて見たまへ、いかに旦那樣の下命なりとて出らるゝものでござんすか。　理窟をいはゞ主從も親子もなくなる。無理も理に聞きてと賺す、肯かず。宥める、肯かず。座敷にては蘭谿待てども〳〵お喜代の來らぬに、二三度も手を拍てど最初のごとく蘭山までが應ぜずして、老公少しく不機嫌の色を、家臣どもが觀て取りて忠義貌の諷言、大久保殿いかゞでござるな。御祕藏の寶とてきつい御勿躰と一人がいへば、大淵は冷かに笑ふて、大分聲高に御門生が言爭はるゝは、女子がどうやら否をいふ樣子なり。そも〳〵奉公人の分在にて主に向ひ、我儘を申す事など主從尋常の關係にては構へてあるまじき事なるが、日頃情深き此方のお目懸けらるゝゆゑ、女子の淺ましくも增長りて否を申すなるべし。其もまた一入初心にて可愛きもの、と閨の伽か何ぞのやうに意を持たせたる言語の端に蘭谿赫となりしが、老公の手前を兼ねて恨を飲み、事もなげに打笑ふて、老

功家は纖細にお氣の注かるゝ事かな。其御疑念の霽るゝやう、自身に只今伴參らむほどに、少時失禮をいたしまする。大淵殿賴入ると會釋してお喜代の部屋に到れば、なほ口論の最中なりしが、お喜代は豁蘭の姿を見るより涕ぐみて、御免遊ばしましと平伏しけり。

其方は何を厭ふて座敷へは出ぬぞ。少時の間ゆゑ出てくれといへど、否とも言ばねば應ともいはず。蘭山小聲にて、實は襖の陰にて樣子を覗ひましたれば、大方羞らひてと設辭せば、樣子を知る上はなほ可、少しも羞づる事なければ出よといふ。お喜代はなほ無言にてさし俯くに、蘭山いよ〳〵聲を潛め、先生、老公が今日珍らしき御入來の子細を御存じなるか。　子細とは?　　御存じなきか。喜代を見むとてなるべし。　見むばかりにはあらずといふを目顏にて打消し、喜代來いと出て行くを蘭山追蹤けて、お喜代殿を老公へ差上げたまはむ御意にや、それは可憐なる子細あり。　喜代は....。　よいから早く出る樣に。　さりながら..。

えゝよいと申すに。

（十）

後は兎も角もなるべし、さしあたる急場の遁れ難ければと、やう〳〵分別して客間の口まで行きしが、閉てたる襖を引明けむ力なく、悄然佇みて聞くともなしに、裏なる談話聲の耳に入るは、家從口々に蘭谿を弄りちらして我と情事あるやうに言囃せば、迷惑の濡衣言語にては干すよしなくて頻に困じ入る樣子、其も此身の我儘がなせる業と、胸苦しきまで氣毒に思ひけれど、衆目にも情事のあるやうに見ゆるは嬉しからぬにもあらず、其中へ飛入てもしや所爲に氣取られむも羞かしく、第一には老公の可厭可厭眼にて覗入らるゝが、身顫の出るほど心に染まず。とかくに入兼ぬるを、我部屋の口にて蘭山が氣遣はしげに見護りて居たるが、手摸して早く入れと勸むれど入らねば、忍來りて早く〳〵と囁きぬ。之にいよ〳〵胸騷ぎて少し身を退けば、蘭山親ら襖を開き、お喜代を突入

れて後を閉てぬ。
不意に驚きてはつと思ふも遅し、はや其身は衆目の的となりて、搖く事もならず入口に小さく蹲まれば、大淵が眞先に聲を懸て此所へ〳〵といへど、主人の許可なければ會釋のみして俯むきて居たりけり。
今までざわ〳〵とせし話聲もぱたりと絕え、お喜代が出たるばかりに座敷風の遽にあらたまりたるは、衆の注意の我身に聚まるゆゑと思ふほど、頭は垂て重く、血は冷えわたりて肉の縮むごとく覺え、顏は熱りて汗は兩腋に沾ひぬ。
蘭谿老公に盃を献じ、喜代お酌をとは、我の氣を知らぬにも節のあるものと、恨めしけれど否とは言へず、おづ〳〵進寄りて酌すれば、老公の視線は盃の上を掠めてお喜代の眉目の間に遊び、うとりとなりて盃の手も引かず、やがて獨笑みして、大久保、美人じやのと御意あれば、蘭谿微笑を含みて、繪とは孰れでござりまする？と外らせし應答に、繪は繪

にて好く、實物は實物にてまた好とおほせられぬ。
喜代は此中に挿まりて一言も仇には聽かず。今にも妾を妾になどと老公のいはずば、小面の憎き家臣が發言さではおかじ。其に蘭谿が何と答ふるやらむ。主人なればとて他人の子は自由に成難ければ、何と言はるゝとも可恐事はなけれど、言ふは羞かしき思ひの其人に通ぜずして、此心の内を可愛とも可憐とも思はれず、横槍入るゝ男に惜氣もなく與れむやうなる意ならむには、此戀の末も覺束なく、悲しき目を見る事なるべし。唯賴むは蘭谿の心一つ、言葉ばかりと、衆目を偸みては蘭谿の顏に哀訴の眼波を運べば、我に其氣のあるゆゑにか、飲込みたりと目顏に見ゆるも賴もしく、稍力着きてありけるに、老公盃を蘭谿に酬し、お喜代の姓を問ひ、年齡を尋ぬれば、大淵は續いて親里を糺し、家內の樣子を詳しく聞くなど氣味の惡き事ばかり。やう／＼にして老公酒機嫌にはずみ出し、主人の前も憚らずお喜代に戲言を言懸け、遂には此所へと我傍に引

着けむとすれば、大淵心得て我座を少し讓りながら、お召なれば遠慮に及ばず、此所へ來てお酌をと、衆皆醉うて座敷の摸樣亂れかゝるにいよいよ物怖ろしく、衆の氣着かぬ内にじりじりと谿蘭の身近に座を寄せたるを老公の見て、大久保、喜代をちと我にも貸さぬかとあれば、お喜代は顏を背くるを、蘭谿その肩を衝て、老公に今一獻お酌をといはれて、しぶしぶ立ちて前面に參りて、銚子出す手を捉へられて、これ喜代と膝越に引寄せられ、あれと氣疎き聲を立てゝ座敷を駈出でてけり。老公も流石に面目を失ひ、再び招べとも言惡くかりしにや、之に興を覺してそこそこに立還らせたまひけり。

此翌朝家扶の大淵使者とし差向ひ、老公喜代に御執心の仔細を語り、此方にて異存なくば明日からてにても妾に欲しきよし。喜代が出世の談話、此方に異存などのあるべき理なければ、彼が一身上の事は兩親の量見にこそあれ、此方の存ずる次第ならねば、三筋町なる親里へ何分のお懸合あるべし、との蘭谿が挨拶に、大淵額を撫でゝ語沮げに、親里へ懸合ふは勿論の事なるが、まづ此方の御胸中を承はらではと存じてと推返せば、蘭谿更に合點ゆかず、何とてさまで此方の胸中をお心に懸けさせらるゝにや。喜代事は最初寫生の摸堅として抱へたるが、其期も過ぎて下げむとせしに、下婢となりてなほ奉公續けたき本人の心願に任せ、今日までも抱へ置くものなれど、下婢奉公の女子は外に幾人も代人あれば、何時暇遣はすとも此方に於て差支なければ、宿元に御直談あるべし。此方と

ても喜代が出世は倶々に喜ばしき儀なれば、いさゝかも故障など申すべき事にあらず。いつもながら老公は艶伯樂、恐入りたる御好心と笑へば、大淵膝を進ませ、左樣あれば此方の思はくも打明け、此話の成るやう御言葉添も願はしく、實の所お喜代殿は此方の愛妾と老公のお疑念あれば、拙者に實否を糺し、事に依らば貰ひ受けらるゝやう談して參れとの下命に、近頃無躰なることゝは存じながら主命とて辭し難く、今朝わざ〳〵推參に及びたれど、只今の御話にて、喜代は親元の指圖次第になる事と承知いたし、安堵仕つりたり。此上は三筋町を尋ね、相談を纏めて歸るべし。知らるゝごとき老公の好心ゆゑに、我儕までが折々戀の黐泥にて相應の苦勞いたすことでござる、と主ばかりが不良やうに。

お喜代は始終を立聽して、大淵が還るより蘭谿を居間へ逐行き、只今の話はと言懸くれば蘭谿頰笑みながら、喜代何か奢らねばならぬぞ。其方を老公の見染められて、明日からお喜代の方と册づかれ、お部屋樣にな

らるゝ果報もの、羨ましきぞと嘲謔れば、お喜代は顏を赧めて、私は賤しき血統の心性まで賤しくて、高家のお部屋樣よりは下女が好みてござりまする。只今陰にて樣子を承まはれば、親元へその相談に行かるゝよし。兩親とても人の妾に出すやうな、さる卑劣き心は微塵もあるまじとは慮ふれど、さにもあらず貧に苦し紛れの了簡より、もしも相談に乘るやうな事ありとも、何とか貴下がおほせられて、私の體を宿へは下げぬやうになされて下さりませ。たとへば今日にいたしても、私が妾奉公など好む女子か、そでなきかは、平素より御存にてあるべきに、他人がましうも、私の出世などゝは、餘りと申せば慢侮げ給ひたるお言葉と口惜う存じます。旦那樣のお口から今日すつぱりと謝絶いうて下さらば、後に心配も遺らで濟まむものを、と怨恨の數々を疊懸くれば、蘭谿椅子に投倚けたる體を起して、無理なる言を聞くものかな。其方がいかに妾奉公を厭ひたりとて兩親承知の上ならば、他人の嘴を容るべきにあらず。

ても喜代が出世は倶々に喜ばしき儀なれば、いさゝかも故障など申すべき事にあらず。いつもながら老公は艶伯樂、恐入りたる御好心と笑へば、大淵膝を進ませ、左樣あれば此方の思はくも打明け、此話の成るやう御言葉添も願はしく、實の所お喜代殿は此方の愛妾と老公のお疑念あれば、拙者に實否を糺し、事に依らば貰ひ受けらるゝやう談して參れとの下命に、近頃無躰なることゝは存じながら主命とて辭し難く、今朝わざ〳〵推參に及びたれど、只今の御話にて、喜代は親元の指圖次第になる事と承知いたし、安堵仕つりたり。此上は三筋町を尋ね、相談を纏めて歸るべし。知らるゝごとき老公の好心ゆゑに、我儕までが折々戀の黐泥にて相應の苦勞いたすことでござる、と主ばかりが不良やうに。

お喜代は始終を立聽して、大淵が還るより蘭谿を居間へ逐行き、只今の話はと言懸くれば蘭谿頬笑みながら、喜代何か奢らねばならぬぞ。其方を老公の見染められて、明日からお喜代の方と册づかれ、お部屋樣にな

らるゝ果報もの、羨ましきぞと嘲謔れば、お喜代は顏を赧めて、私は賤しき血統の心性まで賤しくて、高家のお部屋樣よりは下女が好みでござりまする。只今陰にて樣子を承まはれば、親元へその相談に行かるゝよし。兩親とても人の妾に出すやうな、さる卑劣き心は微塵もあるまじとは慮ふれど、さにもあらず貧に苦し紛れの了簡より、もしも相談に乘るやうな事ありとも、何とか貴下がおほせられて、私の體を宿へは下げぬやうになされて下さりませ。たとへば今日にいたしても、私が妾奉公など好む女子か、そでなきかは、平素より御存にてあるべきに、他人がましうも、私の出世などゝは、餘りと申せば慢侮げ給ひたるお言葉と口惜う存じます。旦那樣のお口から今日すつぱりと謝絶いうて下さらば、後に心配も遺らで濟まむものを、と怨恨の數々を疊懸くれば、蘭谿椅子に投倚けたる體を起して、無理なる言を聞くものかな。其方がいかに妾奉公を厭ひたりとて兩親承知の上ならば、他人の嘴を容るべきにあらず。

さるを此方專斷にて故障を申入れなば、あれまでに乘懸けたる大淵が、左樣かと指を啣へて退くべきや、其足にて三筋町へ行き仔細を語るは必定せり。其時兄にもあらず叔父にもあらぬ此方が、其方の身上に就きて彼此言立てたりと兩親の聞かれなば、此方其方に義理ずくの訂情など仕懸け、それゆゑに娘の身を抑留めむ爲、分にもなき故障立するかと、覺えなき恨を受けむも心苦しければ、聞かれしごとく返事はせしものゝ、此方とて戀を知らぬ木强漢にもあらねば、あの白髮を其方がとはよく識れり。事起らばともかくもして其方の思ふまゝに納めて見すべし。其樣に心遣ひせずとも晝飯の肴を味美調へ、其方ゆゑに昨日したゝか絞られし我肉の膏を元へ復してくれ、と自若としたる言葉の端は胸に確乎なる分別のあるゆゑと、心に餘る喜悦に眼波は自然の微笑、何分お願ひ申しまするど、話說盡くれば、此人の面前の好ましくても、主といふ畏敬、戀といふ嬌羞、居愁くて退らむとするを、呼ばれて唯と顧視けば、此所

へと目授に示す。つひになき事とて何やら氣味惡く、うぢ〳〵と躊躇ふをまた此所へと勵まされ、おそる〳〵圓卓の前まで進めば、蘭谿ぺたりと卓に凭り、葉卷の烟を含みてお喜代の横顏へ吹懸けぬ。

(十二)

お喜代蘭谿が午餉の給仕してありけるに、水口の戸の開く音のしければ、間を隔つる蘭山大聲に三河屋(酒屋)かと問へば、御免なされましといふ女子の聲にお喜代が首を傾くれば、蘭谿箸を輟めて誰ぞと問ふ。臺所にては何やら話聲の聞えて、さあ此方へと言捨てゝ蘭山奥に入來り、お喜代殿の御母樣がと傳ふれば、お喜代は何を思ひけるや、眉を顰めぬ。蘭谿此へと命ずれば、出行く蘭山に引違へて、母親閾の外に手を支へ、無沙汰の挨拶などくどいほど慇懃なり。節よく應接ひ、一寸失禮と茶漬にして搔込み、膳を片寄すれば、お喜代は持て退りぬ。主人の前とて親子外々しく、何とも言葉を交さず。

蘭谿お喜代を呼びて、御母樣にお茶を進げぬかと指揮して、遠慮なく進まれよといへば、式ばかりに少し膝行寄り、遽に心着きたる樣にまた退

りて、襖の外に置きたる風呂敷包を取り、鷄卵の折を出して、お驗しばかりにお羞しき品ながら、と目前を避けて側なる壁の方へ差寄せければ、蘭谿氣毒顏にて、來る度々に入らざる義理なり。却つて迷惑なれば此後は構へて無用にされよと、挨拶の最中にお喜代初煎を持來り、土產を流眄に懸け、如此見すぼらしき物をと羞らひ、云分ありげなる眼して母親を見ながら、蘭谿の前に湯呑を差置き、母親にも茶を薦めて、御母親何か用かえと尋ぬれば、母は首肯き、蘭谿に向ひて、此方樣の御主筋に玉木樣とおほせらるゝ華族樣がござりますか。扨こそとお喜代は談話聞かぬ前から卜胸を衝きぬ。

玉木の家扶にて大淵といふ四十恰好の男、昨日の午前行きしなるべし。おほせのごとくお入來なされて喜代をと言懸け、少し猶豫ふは流石に言出しかぬる事なればなり。

お喜代はついと立ちぬ。

誰に憚る事もなけれど、母親は聲を潜め、喜代を御隱居樣のお召使にとのお話しなるが、別に委細申さいでも御存じの事でございましよ。其に就きまして夫と二人にては分別に餘り、御迷惑ながらお指圖承に上りました。大淵樣のおほせられますには、此事は此方樣も同じ思召にて、其は至極好話なれば、倶々に取纏めたく思ふとの事なれば、小梅にては何時にても心快く暇を出すべければ、其方には差構ひなく、此塲にて我等二人の了簡聞きて、相談を取極めたしとて、金子などを見せられ、承知の旨を一筆書けと逼迫たるお話なりけれど、御存じの通りなる昔氣質の夫なれば、妾奉公などは思ひも寄らず、大淵樣が尋常のお方ならば、夫はどれほどか腹立まして、慳貪なる詞を申懸けます所なれど、御恩に預りまする旦那樣の御主人が對手とて、躰能く御挨拶申し、喜代の胸をも篤と聞きましての上とて、明日中に御返事申上ぐるやう、お約束申してお還し申せし後、夫は旦那樣を常々世間に又なく信仰いたして居ります

れば、小梅の旦那樣までが御奉公に上げよとおほせらるゝよしなれば、何はともあれ御慮を承つて參れ。さりながらたとへ高家へ御奉公申すにせよ、妾は妾なれば父親は好ましからず、と獨りして力身て居りまする。喜代が手許に居りし頃とは違ひ、此方樣へ御奉公に上りましてからは、過分なるお給金を下さるゝに、粥を啜らでもお陰樣にて生活の立つやうにもなりましたに、何を不足に一人の娘に賤業をさすべきや。かゝる心ならば此方樣のお世話をうけます前、疾にもその事さしたらむを、其が可厭にかく御迷惑を願ひました始末なれば、ともかくも玉木樣の一條は兩親ともに進まぬ話なれど、旦那樣の思召はといふ。蘭谿瞑ぎし眼を開きて髭を拈り、我も同意なりとは大淵が空言なり。先日老公の參られて、いかにも喜代に執心の樣子、召使に欲しきとは其翌日大淵來りての話なるに、喜代は此方の普通なる奉公人なれば、其を召抱へむといふを、成らぬといふべき權はなし。また其は宜しからずなどゝ拒絶せば、我が情

親元へ懸合ふて見たまへ、事などありてのやうに解らるゝも心苦しく、不得心とも覺しく、此方には異存なしと申せしが、喜代の樣子を見るに不得心とも覺しく、ましてや此事の譽むべき話にあらねば、我とても勿論不賛成なり。さりながら、玉木家は名たゝる富貴の華族なれば、妾といふ名は少し可厭なれど、喜代が身の利益には萬々惡き事のあるまじければ、遮りて破談にせよとはいはず。尙お二人にて熟と談合ありては如何と、お喜代は陰にて聞くに恨めしくも冷淡なる言葉に、また入來りて、御母樣この話は御父樣にもよういふて破談にして下され。其に私の口から二十二になる迄は、御奉公申すやうにかねて旦那樣へお願ひ申したれば、どのやうな事ありとも其までは下る事はならぬといへば、娘を見る母の駭き顏、蘭谿迷惑して、喜代二十二の老女は婿に來人がないぞ、馬鹿をいふなと紛らしけり。

（十三）

女子が如此までの情思を蘭谿の曉らざるにはあるまじけれど、更に情らしき事もなくて一月餘も過ぎけるに、巴里にて無二の友なりしといふ文學士の澤村某歸朝してより、三日に揚げず誘引すは柳橋にて飲むよし。蘭谿は裹まず之を二人に語りぬ。

保養なれば其も惡きにあらずとて、忠實なる蘭山も意見がましき事は言はざりしに、夜遊募りて已まず。晝も歸らぬ事續きて浪費目覺しく、さりとて其しきにて家内の經濟に大小の影響あるにはあらねど、金銀に不用どいふ事なし、湯水と費ふほどならば外に許多も費ふ道はあるべし、と蘭山心を傷めて一日此事を發言せば、柔和なる蘭谿の更に主人風をも吹かせず、その意見道理と會得して四五日は外出を節へけるに、澤村の文は箭を射る如く、車まで遣はして呼出せど、動かざるを蘭山も喜代も

歡びたりしに、不圖出て二日還らず。從者の手前も流石に面目なく、三日目の拂曉に悄然と還りて居間に閉籠り、一日筆を握りて神妙に暮しぬ。夜に入りて蘭山申上げたき事ありと言へば、蘭谿遽に眞面目になりて、何事なるか、御意見ならば許してくれ、此後は愼むべしと蹙塞すれば蘭山頰笑み、意見も二三度以上は野暮なものなれば不肖とても好ましからず。重ね〲差出がましく異な事を申す樣なれど、先生此頃御執心なる柳橋の小藤とやらむに眞實御意あるにや、承ひたしとあれば蘭谿打笑ひ、これは格別なるお詰問に預り、何とも羞しき事なり。其方はまだ見し事なきゆゑ、御執心の思召のといへど、小藤といふは梨花一枝まだ莟の小娘、其を何とて此方が野心などゝは思ひも寄らざる濡衣なり。扨は小藤は影にして外に御意の懸かれる正躰の御座あるならむ？　其は猶無し。唯小藤が嬌癡處いかにもしほらしく、酒飲む片手に飯事の對手となり、人形の傅同樣なる遊戲して遊ぶなり。子細聽かれて三十の髭男、色氣の

あるより一倍羞かしき始末。最早堪忍せよと頭を壓へて苦笑ひすれば、蘭山も相伴の苦笑。其もお氣晴しとならば難はなかるべし。さりながら一月許にして二百圓の散財は、稍過ぎたる樣にも存ずれば、少く御分別ありたき事なり。先生良耦のなくて恆はざる御身にして、かく獨身にて居らせらるゝは、第一生活の快樂を棄てたまふなり。第二に活計の不經濟を求めたまふなり。家内に快樂といふものなければこそ、一時とは申しながらこの度ごとき浪費を仕出したまふなれば、お心に適ふ良耦のさしあたりて見當らずとならば、妾を納れたまひては什麼。此思召はあらざるか。聖人君子といへども人間其期に達して其情の存らざるなく、あるからは其情の制すべきにあらざれば、妻持たぬ男は假の妻をも求むる、自然の必用より賣女などを玩弄ぶ心も起るべし。おほせらるゝごとく莟の花ならむには、情はなしに飯事のお對手にもあるべけれど、飯事のお對手にて事の濟むならば、彼處なる瓦師の子娘にても足りぬべしといへ

ば、その子娘の鬼を欺く面貌を念出して、蘭谿思はず笑ひぬ。
彼にてはよもや用は辨ぜざるべし。されば申すだけが家暮なれど、勿論小藤御贔負は、何の事はなくても其裏に家内の快樂に代ふる味のあるゆゑなり。されど彼をかうとの思召の女子なきを幸ひ、心性賤しからぬ妾を納れたまはゞ、お身の爲家の爲樣々よき事あれば、世間へは憚かる事ながら切にお勸め申せど、御意は什麼と問ふ。
蘭谿柱に倚りて少時思案し、一々道理なる言詞仇には聞かず。柳橋通ひは弗と思留まりたれば安堵すべし。妾の一條は好ましからず、其内には良縁もあるべしと答ふれば、蘭山躙寄て、容色は百人に勝れ、心性萬人にも類なき女子あり。之を假の妻にとの思召はなきや。更に無し。ゑかし其女子先生に焦れ……。馬鹿をいふな。否眞實先生に焦れぬき……。莫謂々々。とおつしやるからは其當人御存じか。笑ふて居らるゝからは。

（十四）

蘭谿出品の裸體畫は、まことに萬人の眼に曇なく、金牌の賞ありて名譽此上はなかりき。

二人が想ひしほどは蘭谿に喜色は見えざれど、日毎に客の來りて此事語出れば、髭を拈りて唯笑むは不快意事にもあらずと知るべし。蘭山は譯もなく嬉しがり、其日は一太白々々と飲めもせぬ酒を望み、五勺の雫に熟柿のごとくなりて足下覺束なく、坐敷の眞中にへたと坐りて廻らぬ舌に師匠の自慢、蔭にて聞けば自身の事のごとし。醒めてはそは〳〵と何事も手に着かず、時々思ひ出せしやうに蘭谿の居間へ行きて、幾度か祝儀を述べ、通宵睡らずして胸のみを轟かせけり。

喜代は蘭谿に祝儀を述ぶれば、其方が功績と賞還され、我を歡ぶ樣なる氣もして悊しけれど、蘭谿が寫生の折の苦心を今憶出せば、今日の大勝

利の胸中さこそと、我身の事よりは一倍心嬉しく、醉ひたる蘭山に提へられ、先生もいはるゝごとく半分は此方の功績、この褒美には何なりと所望の品を買うてもらひたまへ。黄金の指環か、縮緬の襲衣か、其よりも外に命に替へて所望の品は、蘭山ずんと鵜の鳥なり。鴉を鷺に成功を着けむも近日なれば、先生からの褒美よりは、まづ其禮には此方が何をゑたまふぞ、と有意なる言葉の首尾〲また日常の嬉しがらせかと思へど、此頃の二人の氣勢にもしやと、かねて少しは悟りたる處あれば、醉ふての左禮言ながら仇にも想はれずして胸躍り、他人事の嬉しきやら、我身の嬉きやうなるやら、喜代までもそは〱として、大久保一家を蘭山と二人して、祭禮の宵宮のごとく賑しぬ。

三日程經て喜代の母も金牌下賜の事を聞傳へ、飛ぶがごとく駈着て祝儀を述べ、老夫は狂氣のやうになりて無上に歡ぶよしを語りけるは、鷄卵一折よりも心利きたる手土産なり。

蘭谿窃に何やら語りければ、母親はまこと狂氣の有樣にて取るものも取敢へず、我家の近火と聞きたらむ樣子にて倉皇と駈還りぬ。跡に見好からぬ煙草苞の遺りたるを喜代が見出して押藏し、日頃沈着たる母の珍らしき輕躁と首を傾けしは、何か知らねどよく／＼意外なる話說を聞きしなるべし。

七月の廿日非賣品なる裸美人は金牌の錦衣て目出度返りけるを、客間の壁に懸けて其前に蘭谿喜代と對座、二者儀式の服裝。蘭山も羽織袴にて、同席は喜代の兩親、古りたれども紋附の衣紋正して控へぬ。女子の淑德を汚すは忍びずとて、此日假ながら式を擧げて、蘭谿喜代を正室と定め、明る朝早く手を携へて日光へ夫婦連の初旅。此次は一方ならぬお骨折懸けました此方樣には、私等が御恩返しに良花嫁樣をと、蘭山後に遺されて重輔夫婦に眞面目に嘲誂れ、額を撫でゝ、それは／＼！

（二十五年二月）

伽羅もの語（紙きぬた）

（上）

たゞ戀ゆゑの身請にあらず、扇子に骨あれば男子に意地あり、ふつてふつて振通せし遊女に——我も本町の廣惣！——衆の嗤ふほどの未練あるにはあらねど思へば遊女も當世の希物、是ほどの男子を袖にして、いかなる見所ありてか、舊時は知らず今は紙衣の淺といふ日蔭ものに情立て、かれがいひ慕らす理不盡には泣て詫びながら、わが與た小判には笑顔も見せず、さればとて金銀沙汰の物品に嫌はれ、念を斷ておめ〳〵手を退たりなどゝ囃されなば、無念や京町の猫兒にも哂はるべし、且はかうした氣性ものならでは、靡かしてからが曲なくしておもしろからず、と江戸日本橋の佐渡と聞えし本町の分限者廣島屋惣五郎、家暮とは知れ

ど物の行懸り、金銀ずくめに無理の風を吹かせ、無得心なる山本屋の初梅をひし折りてぞ我袖の移香にしける。

心を得ざればなにほどの榮耀歡樂も、宿醒の朝の食事にひとし、此身は腕に樣命の入墨を嘗めても、惣五が心盡しの膳の箸はとらぬまでの覺悟、ましてや二年ふり通しの枕の手前もあれば、首尾の譯のとは謎にもいはせぬ應待こそすれ、淺樣だにないものならば、底を覆して見せらるゝ信實に、よしや惣五が蛇にても、しつぽりと思ひを霽さすべけれど、神も立合はせたまふ起請は反古にしがたし、と初梅も惣五が實意に絆され、ある例の僞發狂か作病か、自暴て飽かれ仕懸の、女人にあるまじきはしたなき事せず、姉の如く劬はり、妹の如く冊づき、一月餘を一日のごとく、神妙にふるまふて倦飽色の見えざりければ、惣五更に合點ゆかず、厭忌は承知の上にて根こぎにしたる遊女、一家に居るとも側へは我を寄附けまじく、嫌ふことゝ思ひの外なる行爲、まことに白蓮はその香に其

色に汚濁なく、大家の御息所とあふがるべき朝夕の行狀、閨房の和熟こそなけれ、その外は髻頭から踏皮裏までのこる方なく、われ大事と注意の周密なるは女房にもない圖なり、さりとは吉原年代記にもまだ見ぬふり樣、かうあらうなら冷遇ながら廣惣の情もまん更の犬死ならず、もとが意地ずくからの身請、いづれ好事はなきに觀念せしには、拾物とも頂くべきを、慾の上に慾をかわかし、なまじひに否味をしかけて、煮かゝらし戀を水にせうよりは、果報は氣長く一人寢て待つ間に、時節來たらば初梅も自づから咲くべしと勘辨して、そのまゝ添ふて二月と過ぎぬれど少しも變れる樣子なし、唯顏色日に衰へて玉骨あはれに瘦せ、氣力の減却目に見えて病苦に責めらるゝごとし、惣五心を傷めて病狀を問へど應へず、醫師を薦むれど否みけるが、つひに得堪へずや床に倒れける夕、枕頭なる惣五に所願ありとの言詞に、何なりと聞くべしとあれば、初梅起かへりて膝を正し、眞實この身を不便とおぼさば、賤妾所望の醫師に

此一命をまかせたまはらずや、　さほどの醫師あらば何とて疾病のかく重らぬ前にはいひ出さで、我に仇なる苦勞を懸けしぞ、所望といふほどの名醫は何人なるか、唐長崎に住居の人なりとも苦しからず、即刻招待の衆をさし立つべしと急けば、そのお醫者はさる遠方ならで、つひ竹柴の浦に榮曜のしすごしから、おのれは貧病に惱みながら、我病には家法の大妙藥を秘したまへば、其許まで此身を送くらせたまはぬか、　彼所にさせる名醫はない理と小首を傾れば、初梅面を背けつゝ惣五を見遣りて、粹が戀の病の妙藥に心は注きたまはざるか、　扨て紙衣の淺めに思斷れずして此の病か、と少しく眼色變れば、初梅寢床をすべりおりて惣五が前に兩手を支へ、段々の御信實を餘所にして、かうした事は申されぬ義理ながら、淺樣との譯は今さら申上ぐるまでもなくよう御存じなるべし、此方樣を粹こかしにするではなけれど、これが尋常一般の此方樣ならば、いかやうにも誑して暇取る術はあれども、生きたる廓の守神と

崇めらるゝほどの粋を、二年が間寝こかしにして初梅の身に罰のあたらざりしを、この廓のお日様は西からでゞも出らるゝ事か、と風説あるほどの此方様の眼がねかるゝものぞ、むかしさる大將に生獲られたる陸奥のなにがしは、降參と見せて近侍となりすまし、さる雨夜の御微行のお伴に隙を得たれば、此時なりと車の內を窺へば、大將すや〳〵と熟睡の躰に、かくまで我に心をおかせたまはぬものをと、我から慙て刃向ひの心折れたりとかや、此方樣もその大將のごとく、淺といふ敵の腹心と御存じにて、憎しとも思さぬのみか、甘露とやらを口移にしたまはむばかりの御信實に、垣一重は忍出るに易けれど、義理といふ鎖に繫れて一寸も身動のならざるに、朝となく夕となく淺樣の姿まぼろしに見えての手招に悶え、この胸つひに裂たるにや、かるゝ症とはなりけり、彼の人には我十六の秋突出しの夕にして昵初め、樣も二十の初戀にて、それより待宵は夢に來たまひ、來ぬ日は文に招き、逢ふほどに、契るほとに、末

を誓ひの血起請も燒けば灰となるほどのものは賴みがたし、目前確實なる眞實競を、とかの人通詰むれば、此方も劣らず餘所の客をふり詰め、無理なる首尾の擧句は双方の身の逼迫と、初手より何の識ぬではなし、姉なりし花桐樣と歌樣が心中立の果をも見て、戀は苦しきもの、遊女の身の忘れてもすまじき事、と平生の覺悟も其場の益にはたゝず、一夜口說に別れて三日ほど影を見せられざりしを、茶碗酒に凌ぎてうつゝに仆れ、夢かや格子まで來たまひける姿は、夜半に嵐の吹かぬものかはとて、ゆふべまでは歡樂の夢、やぶれ布子に哀れをかぶる編笠とは、變り果てたまひたる姿を、淺ましや何事と縋らむにも隔絕の格子に泣けば、運開きて昨日の男子にもかへらば、重ねて逢ふべしと一通の封文を投げ込み、闇に紛れて走り行くを、忍びの首尾に聲は立てられず、籠の鳥の逐ふに逐はれず、この時の思ひ語るに言葉なし、ありがちの仇なる口說と事異り、また逢ふや逢はぬの堺に、男氣の餘りに剛强を腹立ちては見たれど、

行水のかへるにしもあらず、さりとてあれまでの契約をなきものゝやうに此の心を知らぬか何ぞのやうに水臭くも、おちぶれの我が身に我と愛想ばしつかされたまひて、他人もかくぞと僻見の豫想してか運開くまで逢はじとは、我を戀に死ねとの謎ならむ、富貴にて戀がなるものなら、大盡立腹せられて揚屋の嚊の泣く事はあるまじきに、淺樣の粹にも似ず、黄な物の思ふまゝある内は情の水も上ずまし、味淡くておもしろからねど、親持なれば勘當、家持なれば分散の後からが、眞情の見所見せ所といふ時、身を蔭したまひて半歳も音信なければ、夜毎に逢ふてさへ物足らざりし思ひの何とて惱まざるべき、煩ふにもあらず煩はぬにもあらず、この一事思ふに任せぬより萬事心に染まず、唯身を果敢み世を詫び、今にして思へばこの若年にと惜まるゝを、その時は一圖に佛の道の戀しく、飾を落さむかとは幾度も思ひ立ちけれど、その人死せしといふにもあらず、添はれぬ義理の柵むにもあらねばと、未練に引かれてうか〱と一

歳を過ぎけるほどに、さらぬ方よりの噂に聞けば、淺樣今は身の置所なく、竹柴浦の畔に鹽木の小屋がけに網すきの内職して、磯に漂ふ見る影もなく暮したまふと知り、人して探らせしに噂に違ふ所なし、こま〴〵と認めたる文に金子を添へて屆けたれば、なほ舊時の馴染を捨てざる實情の嬉さ、と男泣に泣て返事は下されたれど、傾城にかゝるものもらふ理由なしとて金子はもどしたまひたれば、衣類を調へて進ぜしにそれさへ受けられず、折角の好意を無にするに似たれど、傾城の懷中におのづと金銀の湧にはあらじ、悉皆客を誑しての不義の財なるを、我もむかしは大盡のはしくれ、腐りてもさるものは貰ひがたし、なほ又契りし遊女にもあれ、川竹の勤問は、其日その夜の客こそ夫なれ、われ通路絶たるものは時節到らむまでの他人なれば、良人の財を他人に贈りなば、贈るものも受るものも不義の同罪は免れ難し、文通とて理に相違はなけれど、これだけは神に願ふても許してもらはでは、飯櫃の蓋を膳に茶漬飯喰ふ

男の娛樂はなかるべし、と書來したまひぬ、なるほどさうした氣性の男なればと、心ならねどいはるゝまゝに仕送りはやめて、文の音信の折々なれば、此方樣に請出されましたも知らせしまゝにて、返事を見ねば樣の思はくも氣懸なり、此家を脫けて行かむはやすけれど、些少の金子さへ受けざる人の、假にも此方樣といふ主定まれる我を寄附けはしたまふまじきに、逢ふには逢ひたけれど行くには行かれず、思惱みての此病患、さりとは憎き女、と御腹愈にもならば此場にて撲殺したまはるべし、斬殺たまはるべし、いさゝかも恨みとは覺えませぬ、もとより戀に亂れての分別は、不正なりと見ても正路をゆかれぬが例なり、唯死したる後は、見苦しくとも亡骸は淺樣へ遣はされて、其人一遍の回向に妄執霽れなむと眞實の涙を滴しぬ、惣五默念の面を擧げ、殺せなら隨分殺しもすべし、其方が所望はいづれ？死たきか、長らへたきか、おろかや生としいけるもの、誰か命を惜まざるべき、さりとてこの身は百年まで生かしたまふ

とも、御心に從がはむこと思ひも寄らず、さるをもなほ未練に生かしおきたまはむ御所存か、千人が千人思籠みては、靡かせでおかぬに名うての伽羅男、不束なる初梅風情を身請までしながら、ふられたりとありては容易ならぬお名折此心は淺樣のものなれば、せめてはこの命なりと召して男の一分を立てたまへといへば、出來たる申分かな、なるほど一旦の意地より根引せし初梅も、性に合はざる土に栽ゑては色香衰へ、思ひしよりは風情なくて、やがて竈の烟とせむは、まこと花を愛づる人の心にはあらじ、此所は粹こがしに轉されても暇遣らむほどに、早く行て淺に添へ！と、氣色も損ぜず鷹揚なる言詞に、肉動き身毛立ち、盲者の日を見る想して、このお情のほどは初梅誓文忘るまじと云へば、惣五笑ひて懷中より百兩取出し、有合せの聟引出少なけれど淺殿へとあれば、初梅取上げて推戴き、淺樣に代りて御志だけを請けまして、これはおもどしまをしまする、此身の暇賜てつかはさるゝさへ御恩重くおもはるべき

に、かうした物を持歸りなば叱らるべし、紙衣への嫁入なれば寢衣のままこそ似合しけれ、と亂髮も梳かず其夜の未明、竹紫浦へ駕籠を飛ばしぬ。

（中）

廣島屋の惣五郎初梅を身請して、二年と經ぬ間に出雲の淺を晒ひし紙衣きる身に我もなり果のしやう事なしに、端午の節句前とて菖蒲々々と町町を賣りゆけば、第一に呼入まれし家にてわづかを價ぎられ、廣惣が賣るほどの菖蒲は小判十枚でも廉かるべきを、と口惜しがりてそこ〳〵に立出てしが、他のあやめ賣を見れば、一文二文の掛引に腰骨の痛からむほど身を屈め、追從たら〳〵商へばこそ買ふ人もあれ、我一人が菖蒲賣にもあらねば、これも傾城買の秘傳に違はず、金出して買ふものなれば、下女婢僕遇かひしても子細はあるまじきに、それは野暮とて雷のやうに厭はるれば、賣る身の世辭はなほあるべき事、と伊達鍛の根性を挫くも、貧なり、捨てにし金銀の難有味が今にしてやうやく知れたりと打笑ふて、なほ菖蒲々々と呼びゆけば、後より聲を懸るものあり、此所なめりと小

腰を屈め、おめしなされますかと揚屋の男が口上めかしく、我ながらいしくもいつて退けたりと思ひぬ、呼留めたる男は吉原風俗、何所やら江戸町の露平が面影に肖たりと見れば、其男進寄りて詞を卑くし、もしお人違ならばお免し下され、此方樣は本町の廣惣樣ではござりませぬか、と孔の穿くほど瞳を凝らさるゝに面羞く、案に違はず此奴いにしへは我露に濡地の下草、流石に見識りて言葉をかくるとは、しほらしき男と思ひながら、なり果つるにも節はあるものを、此風俗して廣惣とは、過去りたる名聞の瑕瑾とわざと眉を顰め、わたくし奴は小石川の奥に長年住む四郎助といふ百姓あがり、廣惣樣などゝは思ひも寄らず、此方樣ごときにお知己の御大身にわたくし肖ましたとあるからは、不日よい目が出て御意得まする時節もあるべし、とすげなく行かむとするを引留め、お裹みあるとは恨めしきお心かな、それがしを誰れとか思しめさるゝ、名乗るとてもとより聞こえぬ奴なれど、ありしむかしは此方樣の四天王と

も呼ばれ、股肱耳目とあまやかされし江戸町露平が一弟、たとひ見る眼は曇るとも、諢名もさふらふものを顎鼻の彌八、初梅樣御秘藏の名香まつ宵のうつり香、今なほ御肌に馥郁たるをしるべに、廣惣大盡とはお見請けまをしましたといへば、廣惣から／＼と笑ふて、これは迷惑至極な、此方の鼻がどれほどの名物かは知らねど、汗の香が伽羅に匂ふとは阿蘭陀舶來の珍品、御重寶なる御鼻、隨分大事になされと行かむとするをなほ引留め、まだ／＼褒ませたまふか、廣惣大盡に動かぬ證據は、と飛懸つて惣五が二腕引まくれば、惣五が初枕のおもはれ人、十九にして病死せし千歳やの藤原が一念の封印、自筆の戀といふ字を入墨の痕鮮明なるを、これまでよく存じたる彌八、もはや遁れぬ所とゆかしの御名を聞かせ給へとあれば、惣五もこれまでと覺悟して、問るこそ羞かしけれ、まことに廣惣が榮華の夢の寐覺の身、そちは見忘れたれど露平が弟か、おほせの通り兄めは御傍さらずの一人なりしに、私めは折々おながれを

頂くを冥加にせし程なれば、お見忘はさもあるべき事、扨また大盡が變れる御姿、あやめ賣とはどうした御趣向と訊ねれば、家暮な事戀の揚句は誰もかくあるべきぞと西に傾く日脚を仰ぎ、談話は盡きねど一刻をあらそふ際物賣、むかしとは違ふぞ、今日は此にて別れむ、露平にもよく傳へてくりやれと、與りたけれど物はなし、當座の祝儀ぞと菖蒲一束取らせて、後をも見ずして小路に遁入りぬ、

（下）

落ちかゝる軒に蚊柱立ちて柳にも風なく、やぶれ垣根の霧島月におぼろなる夕、晝おそく洗ひし浴衣の生干なるに、惣五赤裸になれば蚊のうるさゝに、裏へ蚊遣木取に行きてもどれば、門口に一人の沙門笠深く打冠りて佇むは、勸化か御無用と入らむとせしに、此方樣は確かに廣島屋の惣樣、となまめかしき聲にふりむき、お比丘尼殿に知人は持たざる惣五、誰樣ぞと言も了らざるに、比丘尼は笠もとらで惣五が腕に縋りつき、お懷かしやとばかり聲を放げて啼けば、惣五は呆れ惑ひて言句も出ず、さまざまに笠の内を覗けど闇くして見えざれば、心得ぬ、惣五が舊時を御存じの此方樣は？

あやなき闇に香も失せぬればと笠を取りて、落飾緑なす頭顱を撫で、初梅と名乗るは、夢よりもなほ信しからねど、まづ懷かしき顏を見せよと

手をとりて引入れ、油なければ蚊遣火の影に坐ゑて、紛れもなき初梅！惣様と、犇と相抱ふて先ぞ涙に暮ける。

初梅やう／＼顔をあげて、ようもかくまでは尾羽うち枯したまひけるよ、そゝけ鬢に埃白く、耳根に垢つもり、髭髯は葎のやうに生びて、額に見馴れぬ皺も頰の瘦も、悉苦勞めがなす業か、いかに人の行末のはかられねばとて、此有樣は何事ぞや、　男は裸百貫これも一時と苦にはならねど、人事よりは其方が姿、さる物もあるべきに鼠法衣とは心得がたし、もしも淺が身上に凶事もやと問へば初梅はら／＼と涙を流し、果敢なきものは人の命、　可愛や淺は死亡りしか、　されば同じ道にとも思ひしが、此人ありたればこそ此方樣に無理なる暇をも取りたれ、心のぬしなきあとは此方樣といふ此身の主あるものを、むざと獨り死ぬべきにあらねば、此方樣に逢ひましてお意中をも聞かまほしさに、本町へ尋ねて聞けば、其家はなほ在りながら主人はかはりて、先代は行衛知れずと聞く

に悲しく、之にいよ〳〵泡沫夢幻の世を觀じて、淺樣が形見の破屋を庵室に、念佛三昧の心の中を不便とも思はで、われを吉原の初梅を知る人ありて、好色の人蠅折々尋ねよりてうるさき事限りなし、とりわけ執心深きは近き所に隱なき分限者の子息、手を盡くして口說かるゝに疎ましく、庵室を捨てゝ町々を托鉢の朝、あやめ賣の背たりと見しは此方樣なり、緣盡きずして再會の歡喜よりも、名ある太夫に揉せし腰を平人に曲げて、はした錢ほしげなる顏色のおいとしさ、人一倍寬濶のお心には御辛抱のなるまじきところを、と法衣の袖を沾らして、初梅が心中へ立つべき時、と思案はせしが才覺の途なく、差あたりてはお住家の知りたさに此所まで慕ひ來て、ふか〳〵と竹柴浦の庵室にかへれば、その男なほ尋來り、眞實のほどを語りてやまざるより、珠數引斷りて身を委せむ事を誓ひて、と兩の袂より百兩包二個出して惣五が前にさしおき、身代とてもらひ受けましたれば、舊時ならば石瓦にもひとしき小額ながら、今

のお身には當分の入費にもと、さし出がましくも初梅が苦心をお納め下されまし、と封金をおしやれば、惣五眼をしばたゝき、口惜や淺を嗤ひし我も淺に嗤はれむ、初梅この金は納めがたし、其方みづから好みて還俗せむといふとも、淺に添はせしほどの惣五は見ぬ顔のなるまじきに、いさゝかの粹立を恩に被せて、佛弟子を破戒させて、不淨の財までわが物にせむなど、朽ちたりとも廣惣は男子なり、この金子は主へかへして珠數の緒を繫ぎ、明日は亡母が命日にもあれば、また尋ね來て其方が讀經を聞かせよといへば、初梅笑ふて肯かず、落魄ても粹は粹め、情深い事いふてこのお比丘尼を地獄へ墮さんとの惡洒落か、と藏したる吸筒の口を拈りて、また少時離別の盃とさすは、惣五がとらせし枕盡しを金蒔繪の朱塗の小盃、變るは人の身上！

（廿五年五月）

女の顔（紙きぬた）

箱根以東に化物無しと晝間の虚威張、丑滿の鐘に撞崩されて佛壇の鼠に愕き、窮理の智識開け行く世も臆病風は柳を吹きて、怨靈生靈の怪談絕ゆるとなく、干忘れたる闇夜の浴衣今朝の大笑となりぬ。

牛込の奥深く、生垣竹垣の細道蜘手に傳ひ行けば、新聞配夫大根積む馬梢をわたる落葉の吹溜り、年古る銀杏の角を曲れば、隣に遠く田圃近き處に、法外の安直は無料も同樣の貸家あり。

南向の二階造。瓦は吟味の兩面磨、物好見よとの編木蔀、精く見るほど木口を撰み手を盡して、金錢が買はれぬ西窓の風景、曙雲晩霞の富士を一呑にして、刈田の落雁、雪の林、花ある節の眺望は更なり、東は町々眼下に在りて、觀月には又の願ひ無き見晴し、遙に白帆とは慾に限無し。

下町の親類無沙汰見舞に來れば、酒も出ぬに一日の長座して、歸際には

壽命を延ばしたりとの挨拶、天賜清福の扁額を見て、信にと言るゝ居宅ぞかし。

表は引戸の冠木門吉野打の附庇、左右見越の土塀に目隱の萩を栽ゑ、中には五本の普賢櫻に三聖柳を交ぜて、春の錦繡某が妾宅の、舊時忍ばしき玄關脇の小待垣も、損所を其儘に荒れたる庭に、犬の古糞鳥の糞、いつの冬の敷松葉か、檜木の枯葉も亦汚く、三年前に可惜貸家札を貼られけるに、直塞がれば直換り、長くて一月を過せしものなし。其内に店賃おひ〳〵下りて今吃驚の種となりぬ。

近所のもの横手を拍、さればぞ思ひ當る。始めの家主なりし某の妾は、容貌なら氣質なら好も揃うて美しさに、晦せども顯はるゝ氏は往時に歷歷の息女も、身は寒く變る世の霜に馬骨が化粧して奥方となれるに、然りとはさま〳〵の憂目の末は、月闇の玩弄物。思へば口惜き世間の有樣ばかりと、他人の涙は旦那殿の涎、鍾愛重なれば本宅を忘れ、巣守の妻

は家督を鼻に懸けて、遠慮無しの悋氣強く、夫の不德を噪ぎ立つれど、聞かれざるに瞋恚の焰身を焦して、男め妾宅に今日もといふ日、後妻打に躍込みて詫入る妾の耳に喰付き、血を流しても心融けず。見兼ねて宥めに懸かる夫を小突廻はし、怨言も募りて散々の惡口、我過失と堪忍するほど直入り、首に繩こそ繫けね掣曳て伴還り、諸親類を呼集めて我口から意見を賴み、熱酢を飲ませて苦しむ夫の顏を眺めて、茶を飲む唇頭よりは志の憎さ。可愛き妾には即日暇を出し、向後の浮氣を愼むにて男の形は附きぬ。

女にはなほ執念く恨を遺し、離緣金代にくれてやるはずの妾宅を横奪して、野呂松どのが寄進の衣類手道具にも指はさゝせじ。さりとて賣女根性の用意、如在もなく今までに運出したる諸品も尠からじ。また信天翁がかゝるまでの餌食は足ると想ふほど、此家の塵一片も持ては出さぬ、と自ら出向きて火鉢の前に我張り、破竹がはりの長煙管に疊を打叩き、

逐出されて今更行くに宿無しの女子、乞食になる身を厭ふにあらず。御覧の通り落ちかゝるお腹は八月の懐胎、左腹は男子とや。濟まぬ事ながら旦那様のお胤を宿し、初産の樂み、念の霽るも後二月。物置の隅なりとも拜借願はゞ盥の陰も厭はじ。頓て産聲を旦那様のお耳へだに入れなば、情無き胎からの父なし子にせむには勝るべし。其上は血や病まむ身の匍出りても、此子を懐にして何地へも參るべし、と涙に詐りなく泣けども肯かで、輪に吹く煙草の煙は圓し、角ある人の心を怨みて、今一目旦那様に會はでは此處を動かじと、床柱に縋りて泣沈むを、大きな芥と箒に懸けて、わざと頭から塵埃を浴びせ、男を呼べば人足四五人無作法に亂入り、簞笥擔出し、姿見を引外し、流元の束藁まで殘さず、諸道具山の如く五車に積み、空屋の闇に妾一人殘して引拂けり。

此夕女の心狭く、産所と乞ひし裏の物置を親の死所、と帶揚を梁へ投懸け、澤庵樽を足場にして見るも淺ましき最期の姿、藤花は萎れて紫の色

凄く、暮れ行く春に一足後れ、旦那なる人案じて尋ね來り、協はぬまでもさま〴〵の介抱、遂に効無き死骸を抱き、前後不覺に男泣の哀れさ。醫士も警吏も貰ひ泣の涙を浮ぶる、情を知らぬ鬼には添はじ、と無理緣切りて素手を懷に養家を去り、夜店商人に成下りたるも榮曜の罰ぞ、と小買の米を躬から炊ぐ破鍋に蓋なく、ありし世の情忘れぬを、亡人の菩提の種と志しの難有きも、いかばかりなりける最期の無念は霽れず、今なほ此家に一念遺りて、其後人の住めば夜の十一時より二時頃までに、彼物置の戸の明く音して、旦那樣と二聲呼び、續いて口惜いといふ聲纖纖と聞ゆれば、恨めしげなる女の顏は、奧坐敷の硝子障子に映るといふは實か。忌はしき物置は取壞したれども、戸の明く音は前の如く、女の顏も映るよし。此噂場所は指さねど一二の新聞にも載りけるに、知らざる人もありて問ひ來れど、店賃の廉さ不當なるを怪しみ、近所に尋ねて祟ありと、聞くに驚きて傳ふる話弘まり、後には誰か問ふ者なく、家主

持餘して幽靈よりは損毛を怖がり、當惑の眉を顰めてさま〴〵思案するに、打毀ちて改築も無益なり。此上は我住居を貸して我等が其家へ引移り、一年も變無く住まば衆の疑團遂に霽れて、相應の店賃にて借手は幾許もあるべし。いかさま妙計を女房に語れば、顏色變へて恐ろしがり、緣切られても其ればかりは否といふ。
そんな事がと大言吐きしが張合ひとなりて、今夜は我が行て見る、と滋籐の弓の折の杖を手にして、內懷に呼子笛は何の爲やら、小提灯提げてぶら〳〵單身出懸けしが、途の蕎麥屋に足を休めて、膽の太くなる咒詛の酒一合、醉は其門に入ると醒めて頸元寒く、庭の植込に凩の音を聞、僻め、ぎよつとして彳めば自ら淸まさるゝ耳に何處か雨戶引く音、堪りかねて走出づる潛戶に提灯壓潰し、闇の小路を恐ろしさに駈出して、石に日和下駄の齒を缺き、散々の目に遭うて面目無げに立歸れば、家內中の笑草、懷中の物は何の用意にかと問かれて、されば幽靈に抵抗して如し

體の窘みたらむ時、吹鳴らして人を呼子と、彌〻大笑はれに笑はれけり。

世に化物あれば公平あり。猛者の種は今も盡きずして、陸軍歩兵中尉に名は武熊、樋口とある姓を誰も呼ばず、力みたる朱顏を兵士の見立てゝ金時中尉と諢名し、身丈の矮きを嗤ふ人に滿身是膽と誇れば、半は酒よといはるゝ飲抜け。四斗樽に手足を添たらむごとく肥太りて、面は毛髮と髭髯とに埋もれて、反古に褁める熟柿に似たり。笑ふときにも常人の怒るが如き相好にて、小癪に障れば双の拳を握る時、鼻は皺みて伊勢海老の悶くが如し、

故郷は中國に亦無き武道の國とて、壯佼輩不敵の遊戯を嬉び、一室に七八人車座の眞中に天井裏より鐵砲を釣下げ、端を持てきり〳〵と廻せば、撃鐵に結びたる絲を引きて、轟然と飛出づる彈丸の表に、おの〳〵體度を崩さず、四角に坐りて命を惜まず、佐藤嗣信之に扣へたる面色。之を運試と唱て怪我即死をびくともせざりし、と上臂に微傷の痕を見せて、

強い自慢の父親に育てられて幼稚より膽太く、砲術は親譲り、年の行かぬ頃より二代の得手もの。飛禽走獸目に入るものは射て取らざるとなく、或は戰事の野試合草相撲、礫を飛ばし水を泳ぎ、筍盗木菓取。喧嘩と聞けば箸を捨てゝ、丈より高き鐵の棒を引鳴らして眞先に飛出し、血を見て喜べば鬼童と、人に嫌はるゝを心に喜びぬ。

十四にして志を立て、我願くは東京八十萬禁軍鎗棒の教頭、と椎木の下に用心棒を揮舞はせしが、其より次第に武藝を鍛練して、腕は鳴れども辻斬はならぬ世に、驚破西南の戰爭、男兒名を成す時と雀躍して從軍の志願せしに、勇士入用の折から直に少尉に召出され、大砲小銃の彈丸の中を駈回りて、人の首の落樣、人肉の刃切、地雷火の花の香、生俘の面の色、いやはや言語に盡されぬ面白き見物して、惜まざりし命の恙無く、榮譽は身に餘る勳六等、中尉に昇進して今は國家の干城ぞかし。

稼ぐといふ事なしに酒のみ搔喫ひし身の行末を案じて、苦勞し死の双親

に、武熊か此姿を見せたらば、と禮服の袖を絞りて、果敢なや今は黃土一片石も朽なむとして、苔のみぞ獨り花の盛なる。

天下に孤立一人の米に餘れる月俸は酒に換へて、身に着く金は肩章の色さへ、寂寺の空座敷をかり住居、我も佛弟子と成りて正覺坊と洒落のめし、寒夜に豚を煮て茶碗酒を傾け、桐畠の月に對して劉伯倫や李太白、と嘯く聲は號令の高調子に、本堂の彌陀如來も打僵れて鐃鉢の倶鳴には、老僧もさぞや寢苦しかるべし。

其後世は平にして佩劒久しく血に渇き、彈丸も不便や生的の味知らず、新兵の面は生白く、卒どもの筋骨次第に鈍り、每日の練兵魂入らずして木偶に狐が憑き、洋酒店に何噪ぐか見苦し。樂隊は夜會の庭に見世物の囃子を賴まれ、其を善きことに心得たるも情無し。

なほ將校輩が軍服を華車にする心は綿のごとく猛き事を嫌ひて、勝負といへば球戲、碁、骨牌、隱居のすなる書畫骨董の樂。或は女業なる絲竹

小唄の隱し藝。野暮ぞ好ましき武官を無理仕立の粹にして、相撲一番と手を出せば、逃げて廻るに舞踏の足取。交際圓滑と名づけて幇間もこれは恐入る巧言令色、士官學校にはありとも想はれざる課目なり。

唉士氣海鼠のごとし、噫西戎健兒在り。噫我神州の士氣海鼠のごとし、噫西戎の健兒氣鋭に兵精あり。唉海鼠、噫健兒、海鼠なる哉。健兒なる哉。わか武勇のほどを人に見すべき事もがな、と思ふ折よく貸家の怪談耳に入るより、心そゞろに勇みて遽に家主を尋ね、此方の持家に幽靈出づる貸家あるよし。慰みの爲借用望みと申入るれば、呼子笛の老夫驚愕の中に大方の喜び、常ならば疏暴なる軍人の世話しても無き獨身は、家作大疵の基と鼻洟もかけまじき相手なれど、所存を聞きて其は／＼、近頃御奇特なる御志し、人助けの神や佛と敬ひ奉りて奥に請じ、去年の香奠返し今も大事の鷹爪の口を切りて、夫婦精々の歡待。交不思議を演立て、さも恐しき事のやうに吹聽するは、もとより客を見ての商略口、眞

に受けて聞くほど武者震ひ出で、、即坐に相談を取極め、家は見るにも及ばず、明日の日曜を幸ひに引移るべしと宿なる寺に還り、獨酌の相手旁和尚を招きて此次第を語れば、足下から鳥の起やうな不意に驚き、其はと圓き頭顱を撫で、、名殘を惜む盃の數重り、幽靈の有無什麼と和尚に問へば、五蘊空に歸すといへども、一念五百生、懸念無量劫。遺る怨に牽かされて、姿を幻に現はす事古今に例多し。貧道十一歳にして出家し、今年五十四歳まで四十四ヶ年が間寺に住みて、目前の不思議を見る事幾度か知らず。

就中馴れて尋常のやうに珍しからねば、新亡者寺入の前夜には必ず前徴といふ事ありて、始めはなか〱に恐ろしかりし。深夜に門の戸打敲き、人聲するを出て見れば誰も居らずして、定紋付けたる提灯の持手も無きに卵塔場の方へ獨り歩行きぬ。翌朝某の死去と告げに來りし家の紋は、昨夜の提灯に符合せし。

或は本堂の扉おのづから開き、椽に人の足音して寢間の障子にさら〳〵と物の觸るゝ事あり。佛前に人無くして闇に唱名の聲。鉦鼓のおのれと鳴る事もあり。是等は唯不思議にして本物の現るゝにあらざれば、平常律義なる亡者は生前の姿を現はし、未來を懇に賴みし事さへありけり。去年の秋の末、淺草邊の紺屋の後家殿六十にして死去しけるに、夫婦養子の女房の方はかねて耶蘇に凝りて、四十九日も濟まさず先祖代々の位牌を焚捨て、佛壇跡の戸棚に襤褸襁褓を投込みぬ。後家は我眞言の大信者にて、大師婆ともいはれし家の淺ましき邪敎に歸依する夫婦の不屆泉下に目を瞑りかねてや夜々現れて淚を流し、發心悔悟の意見を我に賴みし。今其時の有樣を思に、夢とも寤ともわかずして枕頭に人の來る氣勢、と首を擧ぐれば燈火は消えたるに、寢間の口に悄然と坐れる婆の姿に薄墨にて畫きたらむやうにて、顏色衰へて言語幽に、依囑の事は承引たりといへば、徹曉の燈火いつか赤うなりて、實に搔消すごとくともいふべ

く見えずなりにき。されば人の一念遺ることは疑ふべきにあらず。祟のある家などは往々あるよし、聞及ぶと語りぬ。

幽靈あるものと聞けば彌頼もし、無きまでも人の怖れて、あれほどの家の廢物となるは氣毒なり。此方退治して得させむず、と腕立の自慢おひおひ口中の獨語となりて寢入れば、和尚は本堂に護摩を焚きて丹精を凝らし、只管中尉の身の無事を禱りける志ぞ難有くも殊勝なりける。

今朝は移轉の暇乞の際に、和尚怨敵退散の護符を授けて、肌身に添へたまへとありければ忝く納めて、さらばと引出す荷物は二人乘に二輛。遊び居る所化を掃除の手傳ひにといふを斷りて、行程も遠からず午前に例の家に乘込めば、怪異の家に人が住むぞ、と近邊の士女駈着て見れば、醉興て來る程の主人の相貌頼もしく、彼なればと各自安堵して散りぬ。中尉紙塵を揮りて酒代をくれたる車夫を指揮し、拭掃除ざつと濟まして荷は居間の戸棚に皆納まり、一人には廣き家の不用の間の雨戸は晝より

閉ぢて薄闇く、二階は眞の闇にして幽靈待受けの用意はや調へば、まづと酒樽を友として、飯を餘所なる獨酌の樂窮無く、日の暮れかゝる頃には雫も殘らぬ樽枕して、轉寢の夢肌寒き夜風に破れ、大事の醉も醒めて眼を摩れば、庭の梢を透く空の闇きに瞬く星の薄光何所ぞの鐘か聞えて早化物の出端、と袂時計を見れば十一時を過ぎたり。土瓶は虛なり、醉醒の水を、と洋燈を點して裏の井戸に出でゝ見れば釣瓶なし。土瓶の鉉に糸を繋けて汲上げ、呼吸繼かずに腹の鳴るほど飲みて、歸りにふと物置の事を思出し、燈火を便に其墟と覺しき處を見巡り、裏表の戸閉して坐敷に還れば、火の氣の絕えて寒氣の堪へ難さに、夜具取出して潛り込み、今やと待てば犬の遠吼按摩笛、紋切形とおもへどうす寂しき夜の門を、一時風の颯々と來る時打敵くは、それかと膝を立つれば、まさしく女の聲してまた打敵く、店賃の直落女來たかと呟きて、のつし／＼と立出づる間も絕えず敲きて、何やら言ふも泣聲の悲しげなり。

玄關の戸を引明くれば、木戸の格子に火影透きて人の立てり。戸を推開けて何用だと髯顏を差出せば、きやつと魂切る聲に出しぬかれて、吃驚潜戸に頭を毆て首を縮むれば、遁げし女は恐々退歩して、中尉の顏を視めつゝ小腰を屈め、此御近所に伊藤といふ御醫者樣はございませぬかと問はれて興覺め、今更疼む頭の瘤を推摩りて、此方は今日此所に轉たるもの、近所の案内知らざれども、此先には人家無ければ立戻りて尋ねよ。急病人か。　暴に坊樣の絶息たまひたるに慌て番地を精くも聞かず、此邊と聞覺を賴みに駈着けたるに、不馴の町の案内知れず。心急くまゝ思はぬ不調法、申譯もござりませぬと謝罪いふを打消し、程近き交番所を敎て、夜更に女の身の一人歩行、氣を着けよとは顏に似ぬ優しさを何程か喜び、丁寧なる禮を述て走行く火影の見えずなるまで立盡して、提灯の紋は薄墨にて柳の丸。鬢は頸に亂れかゝりて眼光も尋常ならざりしが、坂田金時仕損じたるかと腕を摩りて内に入れば、蒲團の溫氣消えて鐵の延

板は、勇士の床と仰天に仆るれば、枕に瘤を壓して、あゝ痛し、寒し、冷たし、酒が欲し寐られぬ起きろと首を擧ぐれば、硝子障子に女の顏！出たなと視れば蓬に髮を振亂して、睨むを睨みて鼻の衝合ふほどに近寄り、熟視れば女とは不出來と思ひしも道理や、金時中尉の顏なりけり。何の事だと高笑ひして、盃中蛇影を見ると吟ずれば、門戶ほと〳〵と又打敲く、簷下の犬か、風の音かと耳の垢を滌うて聞けば、紛ふ方なく我門の戶を敲くなり。また物尋ねか門違へか。誰だと坐ながら大聲を懸れば、敲く音は絕えて夜は靜なる耳の鳴るのみ。少時してまたほと〳〵と打敲くを、誰だ、名乘れと叫べば、前のごとく歇みて、此方が靜まれば彼方が訪ふ。幾度も懊惱。用あらば戶の隙から這入はせで、手數の掛る亡者哉。と立出でゝ門を開くれば、いかにも幽靈か、不思議は物の影だにあらず。此度こそはお見舞ありけるよ、と門を出でゝ四邊を探せど、朧の形も見えずして、塀の中なる疎柳はた〳〵と門の庇を拂ふは、今此

所に消失せし名殘かと想へど、裏をも見むと横手の小路を、右より入りて左に出でゝ還るに、何の事も無きほど不審霽れねど、更行く寒さに逐はれて內に入らむ、と引戶に手を懸けて曳々と引けども／＼開かで、掛鐵の音のみがた／＼と鳴りぬ。

待設けたる中尉も今更呆れて、扨は狐狸の惡戲といふ事は世に在るものか。目前の怪異合點行かず、正躰見むと萩の切株を手懸りに、土塀を攀ぢて飛入れば、開けて出でたる玄關の戶の閉ぢて開かざれば、裏へ廻りて締せざりし水口の戶を開け、板の間に足音を偸みて、一間二間と襖を越えて手探に奧の方へ忍び入れば、燈火は消えて戶外よりも文無き闇に、煙草盆に躓きて寢床の側に仆れたり。匍寄りて探索當つる夜衣は脹れて撃つに硬く、撫上げ撫下せば中には人の在るに極れり、と飛蒐りて夜衣の頸を無圖と攫み、化の皮剝ぐぞ、と曳けば曳かせす大盤石のごとし。面倒なりと手を放して、胴骨微塵と踏付くれば、躍上りて首筋にしがみ

着く、變化の力の强さは鐵の枷を懸けたるに異らず。人がましやと拳を固めて脾腹に一ッ中つれば、少しく緩む利腕取て、呼吸を度り腰を捻れば、手放れ淸く背負投の化物は、大石の落つるがごとく足下に仆るゝ音の中に、物の破るゝ音して泉のごとくどつと水の流れ來るは、腹や裂けたると想ふ間に、闇に聲して又組付くを、心得たりと振解き、水車の如く拳を舞はし、雨や霰と撃て蒐かれば、腦天、横面、腋下、腹ともいはず胸ともいはず滅多打に撲かれて、變化も敵はじとや片隅に體を潛め、隙を覗うて躍り出で、中尉の毛脛を大根引に曳けば、風に遇ふたる彌次郎兵衛の如く、ひよろ〳〵と釣られて障子を推仆し、椽に轉出づる所を馬乘に組敷かれ、南無三と力を極めて刎反せば、變化は雨戸を推外して、ころ〳〵と庭に墮ちたりけり。

中尉も續て飛出せば、月影に臀を曝らし、俯地に僵れて呻くは、化物ならて大の男なり。引起して面を見れば、友なる歩兵中尉の藤倉力松。敷

石に尾底骨を毆て、立てぬ〳〵と苦い顏するを、化物は貴樣か。馬鹿するなと肩に掛けて內に入り、燈を點して四面を見れば、土瓶を碎け、煙草盆は摧げ、灰の雪降り酒の洪水。樽二つ潰れて机も壞れたり。我化物退治を聞きて弄謔にきをつたかと問へば、藤倉は挫傷の痛疼に苦笑ひして、今日寺を尋ねて和尙に一十を聞き、助太刀せむとて二升樽提げて來る路の、防寒の一口から心浮かれ、威す氣になりて此仕合。我より先に正物の幽靈は出でしか。　更に影も無し、と頤の痛いほどの欠して、不寐の番の始末を語る間に、鷄唱ひ、空白みて物賣の聲聞え、其日も暮れて其夜も無事に、中尉二月此所に棲みても變無き一人を淋しがり、舊の寺に還れば家賃遽に騰りけるに、住む人は今に換らず。春は門の柳綠に櫻咲きて、朧月夜に琴の音の主や誰、と幽しがらるゝ居宅となりて、これや護符の威德か、中尉の武勇か、藤倉愉快ぢやッた喃！

花ぐもり（上）（紙きぬた）

人間一生の春は今ぞかし。咲匂ふ花嫁を座右の觀にして、窓外箱根蘆湖の風景一望の旅店の奧に、初契日をかねて避暑とは旨い事。

新郎は工學士今泉耕造二十八歲、新婦鳥子は十八歲、實家は東京麴町區四番町に隱れもなき金滿家菅谷某の愛女。貴族女學校に通學中何所やらにて耕造を見染め、此玉を人に奪れじと大學修業中に結婚を申入れ、この六月の卒業遲しと式を擧げて、明日より此所に桃源の別天地を搆へ、わざと扈從の婢女を還へし、不自由を忍びて唯二人といふ所に申分あり。凡そ嬉しくて又切なきものは、衆中にゐて馴染なき夫婦といふを、初契月に遁れて世間に憚りなく、新妻の名を呼捨にするもよし、浴後の濡髮

を梳きまゐらすもよし、鏡の中に笑顔をならべて樂むもよし。障子明放しても見渡は一面の水誰に愧づべきにあらず。

孖山に懸る雲折から雨を催ほして輕羅につゝみたらんやうなるに、彼絕頂に登りて見たらば、と鳥子が誰にいふでもなく口走れば、耕造は刻烟草を卷きながら、我が背負て後刻に登りて見るべしと笑へば、お潰れあそばすがお氣毒樣なればといふは、耕造は瘦方の華車男なるに、鳥子は眉目美麗上の慾には、少しく肥肉なるを氣にしたる言葉なり。

耕造は先刻取寄せたる麥酒の栓を拔き、下物は無きかと問へば、鳳梨の罐詰ありといふ。其方が白酒飲むとは違ふ、最少し意氣な物をと笑へば、御好の品を誂へたまへと手を鳴すを制して。其は好もしからず、牛肉にても鷄子にても否はいはず、唯手づからの御料理、小鍋立がして見たい、と無妻中に大望の一ッに數へし忘想の實行を望めば、座敷に七輪など持出して、熱くとも御辛抱遊ばすならば。其はなか〳〵厭ふ所にあらず、

願ふ〳〵と悦ぶ。お氣に入らむ事は覺束なけれど、少しは見覺の西洋料理の眞似方にては？　大に善し。早くとの詞に下女を呼びて諸道具を取寄せ、むづかしき物は存じませぬ。「おむれッつ」か「びいふかつれッつ」。お手際拜見と熱いを厭はず、七輪の側に座を取り、鍋を覗きて中の物よりは蕩けさうな耕造の顏色。素人料理の思ひの外なる巧者にて、二品手奇麗に出來上り、玉の額に眞珠のごとき汗をかゝせ、味は此にありと舌皷を打てば、いかなる加減に出來ましたかといふを、富士見軒も及ばぬ手際。一口自身にも賞翫あるべし、と一臠肉叉の頭に懸けて出すを、あまり大きければ其半分を。このくらゐかとまた切て薦め、飲まぬ酒まて一口と勸めて、櫻色になりて額に手巾をあてやかなる姿、之を下物に平素よりも過ごしぬ。

譯もなく一日は面白ずくめに暮し、夕方には手を繫ぎて湖畔の散歩。行遇ふ人々の誰も羨ましげに見て過ぐるも嬉しく、我物になりたての妻を、

用も無きにつかふて見るも珍らしく、袂より手巾を出し、汗ばみたれば其汀にて一濯してくれとあれば、心快く受取り、汀に爪立ち、袂を啣へて、玉のやうなる手して、我垢づける手巾を洗ふと思へば、我身ながら我艶福のかくばかりなるに驚かれけり。

戯れてくれんと鳥子が洗濯に餘念なきを見澄まし、後より帯際に手を懸け、はつと突入るゝ眞似すれば、あれと聲立てゝ驚くを緊と抱とめ、見合はす女の顔色の變りたるに、免してくれといへば、につと微笑を含みて何ともいはぬ處、勿體ないほど難有し。稍ありて、落ちたらば何と遊ばして下さる。　我も同じく落つべしと答ふれば、巧言をといはぬばかりの顔色。

妻にして間もなければ、今までにかゝる感情の發表を見し事なければ、罪なれど之も變りて珍らしく、美女は顰みても笑ふても、それ〳〵の趣ありて可厭なる事一ツもなし。花は雨に看、風に看、露に看、朝に看、

夕に看るなど、同じ花ながらもまたそれ〴〵に面白し。女を見るに此理を發明して、當分は玩弄になる新妻は不便のやうなれど、快樂は夫婦にもあるべし。

（中）

此次の日の朝お手紙とて下女が持來るを看るに、家元よりの音信かと思ひの外、大きなる封筒に今泉工學士、同令夫人と筆太に暴書し、裏面には本箱根何屋方工科學生有志と認めたり。

何事かと披見れば、當地に御滯在とは少しも存じ寄らざりしに、昨夕方令夫人御携帶にて御散歩の睦まじさを拜し、一同羨望不斜候、乃ち今日麁酒麁肴の用意いたし置候へば、新婚御祝儀を兼ね、令夫人にも御目見えいたし度、午後三時より例の如くの三字に圏點して、御携帶御光來の程一同待入り申し候と認め、有志總代として可笑き匿名したるは某甲の手蹟と合點して、手紙を鳥子に示せば、讀下して微笑の面を合せぬ。

知らざりき彼奴等も此所に來りつるか。妻を同伴きしを早くも認めて、可憎可妬に謔弄々らむ趣向とは知れたれど、果狀を附けられて遁げむは

無念なり。とても事に反討にして一泡吹かせてくれむ、と鳥子に所思を語れば、酒など深く召上らて、日の暮れぬうちに早くお歸宿をといふを腸に染ませて、時刻に學生等の宿をおとづるれば、挨拶もせぬ内から、女臭い奴が來たと喚くもあり、目凹頬瘦漢！之を座右に置きて嗜みたまへ、と髭鏡をさしつくるもあり。茶も一ッ出さでまづ十二分に弄殺し、やがて大鍋に牛肉を山ほど盛上げ、わざと茶呑茶碗に酒を勸めて、此快樂また得べけんやなどゝ、何言ふにも針を持ちて傷められぬ。

足下の明きうち無理に暇乞ひして立出づれば、明早朝お邪魔ながら未明に鷄子一俵持て寢込に推參申す、と同音に威されて遁出し、湖水の晩景を餘所に道を急げば、汀に一艘の輕舸横はりて、折から纜を解かむとするは、農民帽子を冠りたれど姿は媚く女子なり。

夕暮に唯一人舟遊とは、何者かしほらしき志と立留りて看る時、女子は着座して、双櫂輕く一搔々かむとする手を遽に停めて、頻に此方を看て

ありしが、耕造が行かんとするを今泉樣かと聲を懸けぬ。はつと胸を轟かし、貴名はと進寄れば、また今泉樣かといふ。此度の聲は顫ひて調子高く、砂礫に底を摩るほど舟を着けて、お懷しやと素足のまゝにて馳寄りて帽子を取れば、入日の影の微明に其顏は見忘れぬ絲川下枝なり。

思ひも寄らざるに耕造夢かと惑ひて、少時は言葉なし。是非に舟へといふがまゝに合乘して岸を離れつゝ、下枝三年住時の事を語出せば懷かしき事のみなり。

此女さる學校に在りし頃、耕造より思ひを懸けて末々はといふまでに語合けるに、女の父親大野某といふ長官に懇望され、獨逸に遊學中なる子息に許しければ、倶々に修業させむとて伯林へ送らむ事まで定めたりしを、相談なかりければ下枝は知らで、耕造の情に心を浸され、一日餘所ながらも逢はでは物足らぬ思ひを不意に斷られて、伯林へ無理送りの遠

流の身。行て見れば夫なる男はとくより其地の雜穀屋の娘に馴染め、邪魔物に遇はるゝほどなほ口惜く、此由巨細文に認め、一念恚もなく海上千里を渡りて耕造の手に入りしかど、不實を恨みて返事だにせざりければ、逐懸け〳〵ての文も氣強く引裂かれ、下枝は世にある効の樂なく、せめてはと學事に心を凝らせしが、三年目に夫なる人は肺の患に身逝りければ、この六月の初歸朝して直に此地に來り、今は姥子にありと語り、伯林へ一言なしに行きし始末の、いさゝかも不實ならざる子細を涙ながらに訴ふれば、耕造今は鳥子といふものあるを忘れ、昔ながらのやさしき言葉を懸しを、折からの月も少し前の事とて知らじ。下女一人なれば今宵は私宿へといふを、兩親の案ずればとて我宿近きあたりに漕ぎ還し、強て問へど住所は明かさず。明朝は早く此舟にて夕刻の所までお迎ひに參るべし。待つぞ、待ちたまへの離別の接吻蜜のごとし。

耕造胸の轟きはなほ已まずして、道々もこの再會の奇縁嬉しく思ひ續けて行けば、摩違ふ男が旦那樣でございますか、とさしつくる提灯に我宿の家名あり。奥樣の御心配は大方ならず、お迎ひに參れとのおほせといふを勍りて同道して還れば、鳥子は梯子の口より覗きて、所天の姿を見る顏の喜ばしげなるが胸に痞へ、浮ぬ色にて室に入れば、片寄せたる膳の上に例の手料理らしき一皿まで添へて、自身も夫の歸りを待ちて食事の前と見えたり。

遲刻お歸りゆゑお案じ申しました。御朋友の謀計ありて御難儀などあそばされしか、其話聞かせたまへと膳を出せば、食事は濟みたり。別に話すべきほどの事もなしと菅なく言拂ひ、氣分惡ければ下女を呼びて床を延らせむといへば、下女には及ばず、と親ら寐道具の用意すれば、耕造

横になる枕頭に坐りて、尋常ならぬお顏色、御機嫌優れざる御樣子は心懸りなり。お腹の疼痛ならば良藥ありといへば、頭痛なりといふ。少し揉て進ずべしと食事を捨置きての深切を、其には及ばぬとくるりと背後向けて音も立てず。鳥子は更に合點行かず。いかに病氣なりとて今朝の樣子に變りたる鬼々しさ、と空腹に食も進まず、思案に暮れつゝ不絶耕造を扇ぎて十時も過ぎぬれば、戰々兢々蒲團の端に添臥も今宵は名のみ、隔離の一布こそ恨めしけれ。

十二時鳴れば耕造むくと起きて椽なる椅子に凭り、月に朧なる湖水の彼方を眺遣りて、欄干に頬杖つきて物思はしげなるを、鳥子はなほ睡らで纖眼にこの體を覗ひ、樣子ある事と所天が睡入るまでは此方も睡入らざる覺悟にて見護りけるに、食事を濟ませしとは虛言かや、菓子を探し食麵包の餘れるまで引出して食盡し、溫みたる湯を二三杯飲みて寢床に還來るに、鳥子は前後も知らざる風してあれば、寒しといひ樣搔卷を引懸

けて、横になりながら鳥子の寐顔を見入りて、これも不便のものと枕に轉げ、少時ありて鼾を立てぬ。明る朝は常にもなく耕造の早起したるを、いよ〳〵仔細あらむと想ひしに、朝飯そこ〳〵にしてまた本箱根の昨日の家へ行くとて出ければ、一足後れに鳥子も續きて蹤を跟くれば、まだ朝霧に遠くは霞める汀に一艘の船を繫ぎて、其中なる女？が手巾を揚げて麾けば、所天は帽子にて合圖しながら馳行き、舟に飛乘るを疾しや遲しと波を截つて遙かに漕出しぬ。霞隱れに見えず〳〵！

知らざりし〳〵、所天には隱妻ありて、初契月の中から首尾の淫樂、口惜涙に袖を絞りて宿に還り、夕方にも所天還り來たらばと悋氣の下組して、かく水臭き男をさへ待たるゝは、戀とはいひながら意地無き事と我心を叱れども、怨恨の半分は其女めに含みて、一入心傷ましく還家の待たるゝに、點燈頃より小雨降出しぬ。之が「やらずの雨」とやらになりて、もしや今宵は其所にと想へば、此方の一念の天に通じて、戀の闇を照ら

さむ月の影もがな、と立出でゝ空摸樣を見るに、遽に晴るべき雲にあらず。

下女の來りてお迎ひに參るべきや、お傘の御用意もなくてといふを、濡るゝ身に何の傘がと、外なる言葉も腹立しく、今日は昨日の所と違ふて遠方へ行かれ、夜に入らば一泊せむと言遣れたれば、迎ひは無用にせよといふ心苦しさ。此夜は寐ずに明かせしに果して歸來らず。堪かねて一艘の舟を仕立。二挺櫓にして急ぐ。此湖の彼方に人の逗留すべき所はと聞けば姥子なりといふ。さらば其所まで行かむ、少し探す人あれば、輕舸見えたらば敎へよ、とおのれも四方に目を配りて油斷なかりけるに影とても見えざりけり。偖は今朝までも歸らぬ心か、と妬さ口惜さに魅に取着きて身を顫はせけるに、喞へし手巾を落して、舟の早さに手はとどかざれど、漕戾さばそれほどの遲刻、と水に映るわが姿を見れば、淺ましくも顏色尋常ならず、寐亂髮を未理なるにいとゞ面影の恐ろしく見

えければ、櫛を水に浸して後毛を梳け、姥子近しといふ聲に先途を見れば、なほ遠くしてしかとは見えねど、汀に白きものは有恨の輕舸、其ぞとはや所天にも逢ひたらむ想ひして舟夫を急立つれど、舟の遅さに齒痒く、魂はぬけ殼の身を悶えて、やうやく漕寄せて上陸むとする所へ、脛深の夏草をあらけなく蹈みしだき、地響立て一散に馳來るは何者ぞと見るに、所天の耕造が顔色土の如くなりて、此舟を見るより早く飛乘り、横樣に倒れながら早く早く舟を出せ、と人に逐れて後を怖るゝ風情、鳥子も驚き慌てゝ早く〳〵といへば、舟夫は根限りに漕ぎて二十間ばかりも乘出せし時、身丈高く頰髯生へたる外國人帽子も冠らで逐來り、舟を目懸けて拳銃を放懸けしに、彈丸は外れていづれも恙なかりき。船頭も驚きて一生懸命に漕ぐほどに、盪すほどに、やう〳〵一町餘隔たりぬ。汀になほ立てる狼藉ものは、輕舸に乘りて逐懸けむ樣子もなく、唯此方を見入りてありけるを、鳥子は身を伏せながら覗ひ濟して、所天

を見るに息も絶え〴〵なる姿して、仆れたるに又驚きて搔起せば、眼を開きて鳥子の顏を視めて其方はと驚きぬ。

目眩みて誰の舟とも知らざりしにと語るに、他人あれば此場にては樣子を聞かず。宿に還りて婦人との相乘舟を見し事より、迎ひに行きし概略を語れば、耕造も今は裹みかねて、むかし馴染の糸川に遇ひて、引かるるまゝに姥子の假宿といふに行きて一夜を明かせしに、所天は病死して獨身なりとは詐欺か、其朝横濱より着したる獨逸人は、かれの所天か、旦那か。不義もの！と叫びて暴れかゝるに驚き、窓を蹴破りて竄出せしも、其方の舟なかりせば危かりし〳〵、彈丸に貫かれたらむものを、と委細懺悔して不實を詫び、命の親と其日より大事にかけ、此沙汰内證〳〵

内證唯二人。

紅白毒饅頭

（一）

某守が邸跡の新開地に、此度一町四方を取廻したる大普請。足代は虚空に網を張りて、上下する人夫は宛然蜘蛛の遊ぶに似たり。病院か、會社か、劇場か、旅店か、と近所の噂百般にして、是ぞと明めて識るものなし。日ならず竣工しければ、珍しき物見たさに、用無き士女も此前を過ぐれば、門には太しき立つる二尺角の杉柱、黒く塗立て澁なほ臭く、右手の柱に王蓮敎會と札打て、物の尊げに注連を懸け亘し、門内には石を甃みたる十餘間の參詣路の兩側に、これや磐戸山の榊を垣のごとく植列ね、御洗手水には高三尺ばかりなる御影石を蓮花狀に彫みて、心の蓮房に噴水を仕懸けたり。

正面に据ゑたる賽錢箱の大なること、寶珠の撲滿持てる人の心を驚かし、仰げば鰐口高く懸かり、五色交絢の縮緬の鉦緒は眼も眩に慢く垂れて、檜木造の段階朝日影に匂ひ溢れ、金襴縁の鉤簾梱外に低く捲たり。御鏡は蓮花に彫成したる白木の臺に煌々と耀きわたり、星のごとく圍繞せる不斷の神燈相映て、いかなる邪魔も退散しつ可く、神威嚴にぞ拜まれける。前には白幣帛を押飾り、御酒洗米所狹く供じ、勾欄、柱、扉、承塵等此處、彼處の金具燦爛として金色の光を放ち、なほ奥の方を窺へば、神や彼所に在すらむと覺しく、廣間の奥の小闇きに紫縮緬の幔幕をしぼり、其裏に赤地錦の戶帳を垂れて、拜殿の後の奥まりたる邊より、簫音の幽かに門外に洩れて聞ゆるなど、彌難有く尊く、心なき群集の士女も忝さに涙を催すばかりなり。之を見るにつけてなほ疑ひは霽れず。玉蓮敎會とは往古より曾て聞きも及ばざる宗旨なり。さりとて講中信徒の優れて夥だしく、繁昌なる神に

あらずしては、かく大構造なる社の建つべきやうなければ、東京には知れぬ神ながら、諸國には長く弘まりたるを、此度東京に御遷宮あらせられたるならむか、と對手欲しやに訝かる法躰の隱居老爺あれば、近所の老女と見えて、輪寶鼻緒の水仕下駄を穿きて、七夕の色紙短冊を聚めたほど百結の袖無羽織の上に、魚の百尋のやうなる襷したるが、南無まみ陀佛と唱へ捨てゝ、此頃に信州より何とやら樣といふ活如來樣の、當地に渡らせらるゝよし豫て聞及びしが、その活如來樣ではござりませぬか、喃もし南無まみ陀といへば、活如來樣の店前に御鏡が出るといふは、菓子屋の暖簾に酩酒と書いたより可笑い、と半解らしき男の情なくも、年寄られた女を洒落つぶしぬ。

又一人理窟好きさうな中老漢口を尖らせ、いかさま菓子屋の暖簾に酩酒は異な物なれど、もし又神樣ならば懸札の玉蓮敎會、蓮といふ字がよもやお思召に協はぬ理、と爲たり貌に說破れば、前の男挨拶に窮りて、少

時むづ〳〵と口を搖かせしが、金色の蓮ならばお釋迦の茵と極りたれど、玉の蓮ならどの羅漢輩も故障にいはれまじ。神樣にしても開闢以來劍を握りづめの立ち通しは何程か辛かるべし。さればとて榊葉にはお小憩も成難く、因以氣を變へ玉蓮といふ思ひ付き、流石に玉にされた所が難有い、と理もない言にいづれも哄と笑うて、其限に神佛の穿鑿は已みけり。

二三日して門に毎五の日說教と張札したるに、正體知れぬ物は喰はざる人心、近所の衆は言合せたらむごとく、誰一人聽聞に行くはなかりしが、日午頃より人力車の音絕えず、此門に市を成して、目覺しく戶外の賑はしければ、格子の外に駈出で、窓の中に面推列べて家並に見物すれば、或は前毛布の二人乘に駑馬を驅り、或は奏任仕立の赭輪を輾らせ、步行のもの、杖つくもの、手を牽かるゝもの、四方より落合ひて水ならば此處に渦卷くべく、總じて男子よりは女子多く、老たるよりは若きが多く、前後を爭うて詣づるもの、三時過ぐるまで引きも斷らざりしが、やがて

篳篥の音の高く聞こえぬ。近所いよ〳〵合點ゆかず。

（二）

ます〳〵近所の取沙汰となりて、區内より區外へ流布し、一二の新聞も之を掲げて、様子有氣に文を舞はしければ、某横町の化銀杏、鹽煎餅屋の六指娘、小間物屋の島田御家、辨天池の三目緋鯉、警察署前の四年空店、大横町の金瘤大屋の中に數へられて、此區の七不思議に唱はれぬ。說敎の當日にも限らず、門内に手車の四五輌待たざる日なく、歸りを待受けて見るに、いづれも服裝人品卑しからず、某夫人誰氏令孃とも見ゆる、年若き女人の參詣すなりけり。

夜深に四隣寂寞としたるに、何所ともなく二挺三味線の音占おもしろく聞ゆるを、諸人怪みつゝも聞流しけるに、一週に兩三日其夜を始めとして必らず聞かざる事なければ、後には思ひ〳〵に撥音の出所を捜せしに、疑ひもなく玉蓮敎會の奥よりと同音に言囃しぬ。

眞實ならば此一事も怪しからぬ事と人の眉を顰めしに、なほ怪しからぬ物を見たりといふものゝ語りけるは、一昨日の夕暮湯歸りに彼處の門前を過ぎけるに、拜殿暗うして人の氣勢もせざりけるまゝ、何心なく入りて、賽錢箱の陰に佇みて、奧の方をさし覗きしに、森として物の音なく、外なる御洗手水しよぼ〲と、耳に染みて何樣神威恐しく、立去らむとせる折から、はた〲と廊下に二三人の足音して、奧の通路の襖一枚颯と開きたれば、體を推屈めて透し視るに、十七八の眉目美しき女郎三人、一樣に高島田に結うて、衣裳は明瞭に見えざりしが、いづれも鶸茶博多の帶を太皷に結び、裾訯綷縩〲と此方に歩み來る氣色に、見咎められじと其儘逃歸りしがと泡を吐て語れば、それこそ三昧の主といふものあり。之を聞傳へ、女子が拜めるといふだけに、我も〲の信心の輩殖ゑて、鍛冶の勘助、桶屋の金藏、錺屋の瘂德、紺屋の赤久、それ見に行けと時機を見合せて忍び入りけるに、根善く六日續けて麝香の香芬も得嗅がず、

眼を空うしてすご〳〵立歸り、鶸茶の帶は虚誕なりと觸れ廻しけるに、竟に虚談に極まりぬ。

されども夜々の三味線は誰耳にも入りて、今に之ばかりは疑ふものあらざるに、此御神體無くてはならざる理なり。畢竟は皆の信心足らで奇特を見ぬこそ口惜しけれ、と若衆の中にも女色に懸けては蛇長といはれ、驚くばかり執心深く、今年裏新道の氷店のお玉といふ赤襷に思ひを懸け、錫の匙二十四本、唐三盃六斤、繪びら三枚まで寄進に附き、毎夜二錢づつ三月が間氷水を飲通して、こゝぞといふ時弶を脱けられ、今神田の「いろは」に炙生御一人前といふ聲を折々聞きに出懸けて、相變らず旨い話はないさうな。左官の長吉又の異名は一おしの長吉人に知らせず日參せしに、なるほど鶸茶の帶といふは絶えて影だに見ざりけれど、美男の神官は見たりといふ。

それにしても信心の御利益は難有きものかな、と前の連中長吉を取巻き

て樣子を聞くに、その神官は年頃三十三四とも覺しく、色白く面長にして、すらりとしたる華車姿、澤村源之助の面影あり。白羽二重の袷に玉虫色の袴を裾長に穿なし、頭髮は鬘のごとく梳りて、香油は滴るばかり。眉毛の剃つけ鹽梅、顏色のてらつき加減、役者の素顏を見るがごとし。境內を掃く下男を呼びて、これ〳〵、其處濟次第御洗手水の中をよくよく掃除しやれといふ柔和さ。音調の具合、鶯の囀るごとく鈴虫の歌ふに似たり。あの調子を振撒かれては、此町內の新造等彼奴が一手に鏖殺とならむ事、と素銅の煙管に唾壺を打叩き、たなごゝろを反すがごとし。其時痘德しや〳〵り出で、いかに列座の方々と聲作りして、誰は十七八の別品を見たり、我は源之助の神官を見たりといひ、いづれがいづれやら勝負知れがたし。其は扨置、何と皆彼社の座長を見たものはあるまじ、と我は顏にいふ此方とてもお目に懸かりし事なけれど、是も思ひ〳〵の噂にて、男なりといふもあれば、女なりといふもあり、若いといへば年

寄ともいひ、たしかなる事を知るもの無し。之を種柿といふ寸方にして、雌か雄か、老爺か老媼か、野郎か年増か、それとも一同の好きやる新造か、賭をして見やうでないか。二十錢の勝負々々と喚けば、もし野郎と張て老爺と出たら、半金拂ひはどうだといふは桶金なり。

おのれ鷹のしまつた言をぬかすなと撲されて引籠ば、そりや面黒かろ。

おれはまづ斷髪の老夫だ。おらは好男の二才だ。おれは切髪の水々した老媼とやれ。おらは氣を變へて下髪の凄い大年增。そこで赤久は新造子か。我等當分錢なしだ。

抑玉蓮敎の意とする所世の心學といふものに異らず。幽玄高妙の理窟を離れて、俗談平話の間に、善を爲よ、惡は爲なと誨ふるに在り。利益といへば家內繁昌息災延命、其外一切の諸願成就とありて格別の事なし。神體は何ぞと尋ぬるに、甚だ審かならずといへり。いと古びたる一軸の紙煤けて炙りたらむやうなるに文字あり。墨痕おぼろにして讀分け難けれども、光明玉蓮の四文字を大篆樣に書したるを、古金襴の護符袋に斂めて之を御神體と唱へ、說敎日には必ず持出して、今や開講といふ時恭敬しく白木の臺に載せ、一齊に光明玉蓮と呼ばせて、聽衆に禮拜せしむるを例とす。

月の初五の日の說敎には袋の裏より取出し、講師まづ三拜して紐を解き、さとおし披きて光明玉蓮光明玉蓮と口早に唱へつゝ、群集の前に振翳す

と風に雲の飛ぶが如く、過眼の迅速なるに目眩きて、何物とも見分け難しとかや。之を拝神とて、此日一日の參詣は、平常一年の信心にあたる利益あればとて、參詣の賑ひ大方ならず。拝殿の階段の下には、數斗も容るべき白磚の大甕を供へて、注連を張りたるに木札を添へて神水と書したり。

これ會司玉蓮尊師が夢想神授の靈玉を、三七日の間浸せし淨水にして、諸症の難病即治の奇効爭ふべからず。内の疾には服し、外の病には抹りて、輕きは平癒三日を出ず、重きも期月を踰えざる事疑ひなしといへども、信心深からざるに於ては驗も亦多からずといへり。

忝くも神託を蒙りて、普く諸人に施與するものなれば、之を乞ふもの大小思ひ〳〵の器を持參し、供物料として金二錢を供ふ。之れを神水乞とはいふなり。

傳聞かの光明玉蓮の一軸は假の神影にして、かけまくもあやに畏き神體

は、信心疎ならず、渇仰最も篤き輩にあらざれば、濫に禮拜を許さず、拜殿の後なる檜造の一室に白檀割木の宮を營へ、黄金白銀の錠を卸したる五重の扉の奧に秘め奉つるよし。信徒もし此事を口外し、或ひは神體の沙汰に及ぶ時は、立ちどころに冥罰身に報はむとて、親子夫妻の間にも堅く秘して語らざる神文の誓あれば、世間に絶えて知るものあるまじき道理なるに、訝かしくも囁くものあり、光明玉蓮の神體と崇むるは、尊師が夢想に授かりたりといふ玉にして、徑一寸五分許、其色は薄めたる牛乳の如きに、浮びて雲のごとく、消えて煙のごとき櫻色の斑紋ありて、其中に毛彫したらむやうに透徹りたる條の、色は水晶に似たるが隱隱として半開の蓮花の狀を成し、天然の奇工驚くに堪へたる名玉なりと。されども之とても正眞の神體にはあらで、尊師の故鄉日向兒湯郡宮村の我庭なる古池に根もあらざりしに、ある夏ふと一莖の白蓮生じて花咲きぬ。其狀更に尋常の蓮花に異る所なけれど、芳芬極めて高く、色の白さ

は雪に譬へて雪も及ばず、潤澤ありて透くばかりなるが、闇夜にも鮮かに見えけるを、希代の花なり、と散るに先だちて折取り、年久しく秘藏したるものなれば、今は赤枯れて何の事もなし。光明とは闇夜にも見えしより賞美したるまでの名なれど、今も然るにや覺束なし、と事識り貌にいふもありて、いづれをいづれと定め難し。

通鹽町に老鋪の縮緬店、信樂屋の隱居勘右衛門今年六十四にして好色名代の白徒。この老漢の青年想ふべしと今を見て哂はるゝ友禪染の長襦袢、緋縮緬の袖裏、靑地錦の幅細帶。米の賀もせぬ内から孵兒に還りたる無分別、人間の壽命百歳と積りて、六十七十は血氣の眞盛、と意見に餘る浮心、此家の下女年に十二人までは必らず更ることを家例とすといへり。外には妾狂ひ、藝者遊び、女郎買も否にあらず。此道に懸けては場數覺えの古武者なり。

月々三十圓の隱居料に不足をいうて、實直なる息子をいびり、口も衣類も本家に賄はせて、我は思ひのまゝに歡樂に飽くことを知らず。此人未來は地獄に墮ちて、目蓮が母の際長屋に住むべし、と瑞正寺の長老の噂されけるよし。

腰推の太皷には、此店に仕入する羅呉服の傳助といふ、名古屋仕立の放蕩漢。其地に先祖代々中位の呉服店を四代目にして見事壓潰し、食はで死ぬが否さに、此地に流れこみて無爲事の小商人。此身上になりても舊時の放蕩の戀ひしさに、錢無しで遊ぶ事を工夫せしに、信樂屋の仕入の拂滯りたる苦し紛れに隱居に取入りけるに、元來小才利の辯口もの、名譽御機嫌取の上手なりければ、御意に協ひて彼はとの御聲懸かりに、當人は殊外難有き仕合、店の方は迷惑至極、五十餘圓の掛金を首尾よく拂はず仕舞。

これより喰付となりて、隱居が氣息ある間は雷が落ても離るまじき腰巾着と糾纒つくを、傳助々々と御重寶の奴、家業は其方退けにして三日に揚けず入浸り、百般の惡智惠を假して錢の入る面白い事のみを勸めけるに、隱居現になりて傍若無人の放埒募り、一時目も當てられぬ不行蹟は暖簾の名に關はる事、と息子は火水になりて意見十餘度に及べと肯かれ

ざる內、諸親類嗅知りて合點せず、蒟蒻島の馴染の藝者屋に隱遊びの裏二階を增築し、今日を坐敷開の酒宴に醉過ごし、藝妓の膝に藥鑵頭を懸けて、湯氣の吹くやうな軒最中に、店の大番頭太助を連れて親類頭の五郎兵衞といふ苦虫に踏込まれ、耐らぬと傳助は逸早く裏階子から逃亡せけるに、隱居も起されて同じ道にと階子を踐外し、尾底骨を毆て悶く所を捉へられ、のめ〳〵牽かれて四日目の閾を跨げば、息子を始めとして諸親類十一人今やと待懸けたるが、顏を見るより俄に膝立直して、惣懸りに脂を絞られ、額を撫でゝ面目ないを百遍唱へても勘辨せず。しかと改心の見ゆるまでは、と隱宅を明渡して本家の二階に逐上げられ、淺草觀世音は代々の信心なれば、月一度の參詣は是非なし、其外は一切外出無用の身となれば、緋裏もいつの間にやら眞面目なる縹色に更へられ、加之茶天鵞絨の襟卷、白毛紦の足袋、我姿扨はや翁寂にき。

寢飽き、食飽き、欠も伸もしつくし、按摩疲れに小屛風の陰にごろ〳〵

して、朝夕友とする茶に心稍落着き、于葉の味噌汁に腸を滌うて浮氣も鎭まりたりと見ゆれば、卒に何處となく年寄られたるを、息子やさしくも氣毒に思ひ、自身親類中に詑事して、謹愼半歲足らずに解けて、また舊の樂隱居に復りぬ。
僞改心のまだ〳〵油斷はならずといふものもありしが、兎も角も殊勝なる當座の身持、至極質素にぢゞむさくなりて、少し空地のある所に移住へ、畑いぢりがして見たいなどゝ衆を喜ばしければ傳助一人惡黨になりて面目なく影を隱し、其後は消費方無さに溜めるともなく隱居料三百圓餘殘りたるを、息子は氣にして度々預らむといへど、肯かぬ勘右衞門が謀叛の異志、はや此時に表れたり。

（五）

一日勸右衛門淺草觀世音の參詣の歸路、雷門にて久しぶりの傳助に會ひぬ。其後は存じながら御無沙汰、申譯もございませぬ、と地を舐めぬばかりに腰を屈めて、扨いつも御變りもございませずといへば、隱居打笑ひて、色々と變りたる話を聞かすべし、と鍾を回して萬梅へ伴れられ、滿腹飮めとの御意、かしこまりてお話の筋を承まはれば、さるほどに扨も其の後長らくの禁錮、難行苦行の自一至十を語る。一々知りながら存じも寄らぬ貌して、それは〳〵とばかり。面を撫でまはして、膏汗が流れまする。惡き大罪人の傳助、御存分になりましても毛頭御遺恨に存じませぬ、誠にはやと眞顏になりて、子供だましのやうな言をいへば、惡き奴ゆゑ手強き成敗したけれど、今日は生憎責道具の持合せ少なければ、二三日の中に出直してきッと責めてやるべし。我も久しく白粉の氣

を絶せしゆゑにや、めつきり年が寄たやうな、と先方から持懸けていなんとぞ思ふ氣色。傳助もお達者に驚き入り、さほどの御窮命にもなほ懲りさせたまはず、一時の不了簡より方人仕つりたるを今更悔悟の傳助めを、再び惡漢にしてやらむお心かと僞善をいへば、勘右衛門上向になりて嘲笑ひ、此奴が身に應ぜぬ神妙な言いふな、知てゐるぞよ。其方が金襴の袈裟を懸け、涙の出るほど有難い言を聞かさうとも、此老漢が眞に受けて南無阿彌陀佛といふものか。長くてもゝう二十年は生きぬ勘右衛門、不便と思はゞ慈悲を出して、此世の思出といふやうな面白い目を見せてくれぬか。その功德を以て其方も此世から極樂の同伴、と年に似合ず氣丈夫なる言草。傳助そゞろ心になりて膳の上まで膝の進むを覺えず。壯氣なり〳〵。旦那樣にも去年に變らぬお心懸を見る上は、かく申す傳助めも本心を明かし、蒟蒻島の敗軍を回復したき素懷。就ては此所に一風變りて、どうも不思議、唯々恐入の感服、長命はしたいものだと申す

所あり。

明日にも明後日にも御都合次第御伴仕つるべしといへば、隱居一向合點行かず。何處ぞと問へば之より西南に當りて、そおれ後に高山峨々と聳え、前には大海漫々と横はり、鳥も通はぬ八丈の、下着に小袖は縞御召、孃樣粧の高島田、いづれ姉やら妹やら、菖蒲に紛ふ杜若、づらりと列びて十五人、擇取見取攫取、御意次第とぞ饒舌ける。

勘右衞門眉を顰め、聞及びたる上等淫賣か。何處ぞ明かにいはぬかと迫けば、淫賣とはあら勿躰な、淸淨無垢の素人なり。されども白い黑いをいふは此道初心の勞思といふものにて、遊びの面白さは一風變りてどうもいへぬ所にありと獨合點して、ともかくも明日は如何と唆かせば、塲所をいはねば行かじといふ。いへとならば申すに譯はなけれど、今此所、にて明しましては興薄しと存じて控へましたれど、斷てのお言葉なれば、と近く寄りて聲を潜め、外道どもの舌を吐て喜ぶ屈竟の魔所を敎へけれ

ば、勘右衞門はたと横手を拍ち、やつたりな、實に唯々恐入の感服、どうも不思議とは此事なるべし。之れを聞ては待つに日を過ごし難し。即ち明日の午後此方より其方の宅へ出向くべし。

恐入り候へども、御本家に勘氣を被れる身なれば、當分お宅のお出入も御遠慮申上ぐべし。只今の住所は是にと名刺を出せば、隱居打眺めて、いつの頃より宿替せしぞ。　何事も蒟蒻島が始まり、遁出しの後二三日して、お店からお人の可恐にと頭を掻けば、まだそれほどの心ある内がしほらしいとの御賞美。傳助も此時は苦笑して、やがて明日の手筈を打合せて別れ、勘右衞門歸れば驀直一間に入りて、かゝる事もやと心懸けの貯金を取出し、念の爲め算用して見るに、二百圓に十三圓七十錢足らず。丁度なきも心不快、益無き買物を悔みぬ。

勘右衛門思ひける、早朝半睡なる面して北方より車を驅らば、根岸の娃の方に通夜の歸路も、衆は放蕩隱居めが、と他人ながら意見したさうな顏して睨むべし。新橋の裏通り、芳町柳橋の小路、赤坂の待合村などは、孫の手牽くか、葬儀の見送ならでは、大方の用事には迂回して過ぎざること、艶疑の輩意見後の身の心得て嗜むべき第一なり。

そも〳〵傳助が話説の遊仙窟は、誰が見ても聞ても殊勝極まる敬神の御祠。六根清淨の法連懸け渡したる宮居の奥の榊の陰、天の磐戸の中に美しき鈿女命等が、細帶慢にむつちりとした乳あらはにして、しなだれ舞といふ奴をやらるゝこと、眞面目臭き神はとても御存じあるまじき理なり。こゝぞ實に隱居が日參信仰のいたし所、衆の眼を偸むに屈竟なる事は扨之を何にか喩へむ。

世間一日増に利口になりゆき、往古に思ひも寄らざりける重寶を發明し、金錢ある人の爲を慮ふる難有さ。之に就けても紙幣と申すものぞ徒爾には費へざりける、

さりながら茲に一事の當惑は、此方平素神佛ともにお難有を好かざるに、この度はまたどうした事であらうぞ、光明玉蓮の講中になりて夜泊日泊の參詣、信心肝に銘じて臀据わらず。御酒初穂何やかやの寄進に、月々〳〵四五十圓を費ふならば、金銀の入るだけに嫌疑懸りて、また〳〵氣早の子息めが承知せず、「どういふものでござりまする」を幕開に、列大名の親類どもが「ちとお年効に」と、此模樣の渡臺辭宜しからずありて、極「さあそれは」に凹まされは今より氣懸りなれど、此方にはまた神樣といふ歷とした後楯あれば、昨夜はお籠で御坐の候、今日はまた祭典の世話方でえすを以て、諸の五月蠅なす意見諫言を逐拂ふべし。

あら心地好やな、よいとこしよと枕に就けば、聽て常闇も明けゆく長鳴

鳥の聲に目覺まし、消えかゝる頤の霜を剃盡して、項に殘る枯草を刈揃へ、朝風呂に湯垢離を取りて、五體九竅いづれか清淨ならざる處もなく、二十指の爪々を剪り、六十分餘の沐浴に茹り、磨立て飾立てたる氣ばかりが若隱居の姿、これや拭込むだる神代杉の茶盆なるらし。

迂廻してわざと店前を過ぎず、もう好頃から車に召して傳助を訪るれば、待兼山の杜鵑お聲もお久しぶりにて懷かしや、と今は茶色なる濃紫とやらいひし古傾城が、今人の女房になりても手管の名殘接客好く、まづまづと手を取らぬばかりにして奥へ請じ、一枚よりなき大事の黃八丈の裀を取出して、お茶よお煙草盆よ、お菓子はお好みの梅屋の最中、御出とあるにわざ〳〵取寄せました、と傳助が支度の中は女房が有たけの追從を盡して、老人でも無上に嬉しがる水を手向けて、懇篤に御回向の功德は、それと手土産代の二圓、早速米代が浮み上がれば、女房眼色を變て種々の御禮申し、次間に足袋穿く夫を呼びて「あなたまあ」は、外出の一張

羅を疊み時、吹殼の燒孔を見たるに髮鬚たり。

傳助も罷出でゝ只管難有がり、一服仕つりつゝ御羽織を見て、天下無双の至裏と賞讃し、いざ御立といふ時女房小奇麗なる一人乘を仕立て來たれば、傳助之にゆらりと乘り、あとを賴むとよいふには應答もせず、隱居が車の障泥に摩附きて、御信心遊ばしませ、ほゝと笑ふ顏を勘右萬更否でもなさゝうな眼色。いかさま頭顱光る君は好色にておはしましけり。

今日は月毎の祭日とかや。玉蓮敎會の門の左右には、主待客待の腕車整整と轅を列べ、信心の老若男女袂を聯ねて絡繹參詣す。

往來の兩側に市を成す床廛の色々品々、われらよりは子供衆が御存じ、太白飴、煎豆、かるめら、文字燒、椎實、炙栗、柿、蜜柑、丹波鬼灯、海鬼灯、智惠の環、智惠の板、化物蠟燭、酒中花、福袋、硝子筆、紙製女郎人形、おッぺけ人形、薄荷油、薄荷糖、皮肉桂、竹甘露、干杏子、今川燒、まる／＼燒、煮染の田樂、浪華鮨、大見切半直段の蟇口、洋紙製小函、おためし五厘の蜜柑湯。櫛、簪、飾髮具、楊枝、齒磨箸、箸函老女の常磐津、盲人の琴、玩具、繪双紙、銀流し、早繼粉や手品の種本。見世物小屋は女輕業力持、切支丹の首切、猿芝居、覗機關、手無し女、日光山の雷獸大坂仁和賀、天狗の骨、姦しく呼び立て囃し立て、大道の

雜閙此神の繁昌を知るべし。

車を下りて傳助先に立ち、群集を推排けて段階の上に到れば、二百人に餘る履物此所に脱放して誰守るものなく、唯是焦土に瓦を捨てたるごとし。

隱居不用心と呟くを傳助笑うて、かほどの下足に番なくして、脱違へるものなく、失せる事の曾て有らざるも、偏に神德として如此の仕合と誨へて、入口に控へたる神官に知己らしき挨拶して說敎場に通れば、男女は大廣間に溢れて足を踏込む餘地だにあらざりけり。

左手に青竹の欄を結ひて毛氈敷きたるは特別席と覺しく、銘々の前に藍繪蓮花の茶椀を高脚の茶臺に載せ、書院煙草盆を一人隔に出したる所には、いづれか服裝の下賤は見えず。惣勢四五十人の内に男子十餘人、外は年寄りて人の母とも見ゆる婦人、斷髮の若隱居、圓髷の若後家。十八九の娘、二十四五或ひは三十越えたる、四十ともあるべき奧樣、衣紋繕

ひ袖掻合せ、行儀正しく列座たり。

通常席には、さまで身分なき女房の稍見好げに粧ひたる、其容躰いたく微賤なる長屋の嚊衆、小奇麗なる老女、小汚き老媼、小劇場好きさうなる女郎、律義らしき老夫、退屈さうな頑童、芋を洗ふほど肩摩つゝ、説教今やと待つに飽倦みて、隣同士後前の雜談、玉蓮樣の難有き事を始めとして、何所の燒芋が大きいといふまで、思ふまゝの事を種として萬の言葉とぞなれりける。

勘右衞門傳助の案内にまかせて特別席の虛席に入り、待つ事少時にして聽衆遽に噪立ち、人波打つを何事かと見廻せば、玉蓮尊師の御出座と傳助の囁きぬ。

ざわ／＼となほ鳴の靜まらざるに、早奥の方に警蹕の聲聞こえて、通口なる錦の帳の捲上がる時、叱々の聲一際高く、練出したる玉蓮尊師を拜み奉つれば、鳥襷を山藍に摺りたる小忌衣の下に、白紋綾子の三枚襲を

着し、古代紫の縧帶を前結にして、勾玉管玉を五色に交ぜて彩りたる頸飾を挂け、半白の髪を「おばこ」に結びて、水晶の細き笄を挿したり。肉肥餘りて長低く、腹便々として腰狀夜具の包のごとく、面大きくして色赭く、口小さからず鼻高からず、額濶く頤短く、皺多けれども淺く、眉無きがごとく薄し。白齒の疎なるに黄金の義齒して、黄金の太縁の眼鏡の下に、小粒の眼陋げに鋭き光を射て、見るに一物ありげの老媼なり。後には神子六人、いづれも十八九の玉揃ひ、白羽二重の袷に薄紫の袴を穿けて、襯衣の襟に緋無地の縮緬懸けたるは、雪間に南天を見る心地せり。腰より長き下髪の根に紫縮緬を巻きて繪髻を懸けたるが、體を正しく摺足して、脇目もふらず一列に隨ふ樣は、仙鳥の雲を凌ぎて碧落を渡る風情あり、氣高しとも尊しともいはむかたなし。

それと見より群集の聴衆御尊師様よと吶喊をなし、前なる男女を掻き退け、後を撞仆し、轉けつ輾びつ、匐ひつ伏めりつ、我一番にと乘り出し、尊師の路に塞がりて、裙に手を觸れ袂に縋り、泣聲を立てゝ光明玉蓮と唱ふるに家鳴して、踏れ蹴らるゝ呌喚には、天井も墮なむかと覺えて凄じきこと限りなし。

神女等は、芋を洗ふごとく前後に狂ふ群集を、御無禮になりますと聲々に制すれど、耳にも懸けでなほ打騷ぎぬ。

隱居またゝか呆れて、子細を傳助に尋れば打笑ひて、信者の尊師とて彼老女を敬ひ尊ぶこと活神のごとく、その衣服の端になりとも手を觸るれば、其の身諸の災難を攘ひ、其手もてまた疾病ある士女の痛む局處を撫づれば効驗ありとて、彼騷動と語る。隱居不審霽れずして、彼等も外面

着し、古代紫の繃帶を前結にして、勾玉管玉を五色に交ぜて彩りたる頸飾を挂け、半白の髪を「おばこ」に結びて、水晶の細き笄を挿したり。肉肥餘りて長低く、腹便々として腰狀夜具の包のごとく、面大きくして色赭く、口小さからず鼻高からず、額濶く頤短く、皺多けれども淺く、眉無きがごとく薄し。白齒の疎なるに黄金の義齒して、黄金の太緣の眼鏡の下に、小粒の眼陋げに鋭き光を射て、見るに一物ありげの老媼なり。後には神子六人、いづれも十八九の玉揃ひ、白羽二重の袷に薄紫の袴を穿けて、襅衣の襟に緋無地の縮緬懸けたるは、雪間に南天を見る心地せり。腰より長き下髪の根に紫縮緬を卷きて繪髻を懸けたるが、體を正しく摺足して、脇目もふらず一列に隨ふ樣は、仙鳥の雲を凌ぎて碧落を渡る風情あり、氣高しとも尊しともいはむかたなし。

（八）

それと見より群集の聽衆御尊師樣よと吶喊をなし、前なる男女を掻き退け、後を撞仆し、轉けつ輾びつ、匐ひつ伏めりつ、我一番にと乘り出し、尊師の路に塞がりて、裙に手を觸れ袂に縋り、泣聲を立てゝ光明玉蓮と唱ふるに家鳴して、踏れ蹴らるゝ叫喚には、天井も墮なむかと覺えて凄じきこと限りなし。

神女等は、芋を洗ふごとく前後に狂ふ群集を、御無禮になりますと聲々に制すれど、耳にも懸けでなほ打騒ぎぬ。

隱居したゝか呆れて、子細を傳助に尋れば打笑ひて、信者の尊師とて彼老女を敬ひ尊ぶこと活神のごとく、その衣服の端になりとも手を觸るれば、其の身諸の災難を攘ひ、其手もてまた疾病ある士女の痛む局處を撫づれば効驗ありとて、彼騒動と語る。隱居不審霽れずして、彼等も外面

信心の裏面は同斷例事かと聞けば、傳助袖を牽きて、聲高し〳〵。何の何の、彼等は殊勝にも心から有難き連中にて、御尊師此世を去らせたまはむ曉には、天樂響きて玉蓮の花降り、五色の雲に駕りて高天原へ歸らせたまひなむ、と心得たる御信心の輩ばかり。但この特別席に御坐ある方々の中には、御同樣の心懸なる人多く、いかにも神妙たる顏色したるに、油斷ならざるがまんします。向ふから三番目に、色淺黑く鼻筋道りたる三十四五の奥樣粧の婦人、あれは墺國人とかの外妾上り、二三千圓の財產持ちながら何の娯樂なさに、先々月あたりから御講中に加はり、はや五六百圓ほども寄進したる別口の大信者。なるほど〳〵。扨其次なる娘はと尋ぬる時、尊師說敎の高壇に着座ありて咳一ッ。眼鏡の下より聽衆を悠々と見渡して、至極滿足なる顏色。今や御說敎と一同耳を傾けて片唾を呑めば、場内深夜のごとく靜まりぬ。

隱居も義理に辛抱して耳を假せば、一々知れた言ばかりなるに、何が難

有くてか時々光明玉蓮といふ聲の脾胃に響くも愁く、二十分ばかりにしてはや退屈を催し、幾度か欠を面上に撫潰して、他人の愁さを想ひて傳助の面相を窺へば、眞面目一三昧に危坐たるが心憎さに、臀を衝けば吃驚して振向き、苦笑してまた舊のごとく眞顏に耳を傾けぬ。

對手無さに四邊を回顧せば、かの洋妾の次なる美しき娘の眼色、情を含みて物言ふごとく、折々微笑を掩さむとて俯視く樣子を見咎め、此奴ござんなれ、對手はと目を配れば、我側の中程なる若紳士と窃に電氣を通ずるなり。

味をやりをるわと隱居心を動かし、見ぬ顏してなほ二人の擧動を窺へば、男が何やら手摸すれば女は眼にて應へ、女顏を向くれば男舌を出して笑はせ、傍若無人に戯るゝは此一對と想へば、まだ〳〵外に、四十ばかりなる奥樣の十一二なる愛々しき女子を伴れながら、前面の柱に立てる神官の、いかにも矯めかしく粧れる壯年の男と、顏を見合せて娯むあれば、

御前なる若後家の帶を指頭にて訪れ、知らぬ顏する男もあり。かばかり繁昌の事はと存じも寄らざりしが、いかさま唯々恐入のどうも不思議と氣を呑まれて、此末どうする事かと想ひ煩ふ中、また一時光明玉蓮の聲湧ぐがごとく起りて、尊師は壇を下りけり。

說教訖れば入口の方より聽衆崩立ち、やがて人波退きたる疊の干潟に、貝を散せる塵芥紙屑の中に、遺夫物の手巾、煙管、誰が喰捨の芋の尾、青蜜柑の皮、玩具の壞破どもの目眩きを、教會の法被きたる男三四人飛出して手捷く掃除すれば、塵埃のかゝらぬ前に、特別席の士女は各自神官の案内に、中庭の松を左に見て長廊下傳ひに奧の方へ行きぬ。

勘右衞門取遺されて與を覺し。傳助どうしてくれる。はて大事の旦那樣をどういたすものでござります。まづ此方へお初穗を納められませう、と隻手を見すれば、胸をたゝく。然らば彼方へと事務所に伴れられ、傳助が指圖の通り五圓紙に包みてお初穗と差出せば、講中帳に住所姓名身分年齡を留められ、實印を捺して式は濟みぬ。

事務掛柱なる電鈴を推して、十八九の美しき神官を呼寄せ、彼所へ御案

內を申上げよとあれば、畏りて勘右傳助に慇懃なる一禮を施し、此方へと立上る。之に引添て左手の廊下を傳ひ、左に折れてなほ七八間の廊下を行くに、左右茶壁にして明窓を高くし、行當りに檜木造の觀音扉を鎖して、嚴しく錠を懸けたり。案內者立寄りて、右の柱の中程に片手を懸け、左の柱の本に足の指の觸るゝよと見れば、錠のまゝ扉は颯と開きぬ。中に入りて推せば、扉はおのづから閉ぢて、固きこと舊のごとし。なほ廊下續きたるに、明窓のいと小さければ、薄闇くして足下覺束なげなり。此處には片側壁にして、片側に列びたる小坐敷十四五ばかりもあるべく、その列の奧に着けば、かの神官行儀正しく膝を衝き、襖を開きて入口にかしこまり、二人を通して只今と挨拶して足早に去りけり。

勘右衞門呆れて言葉無く、坐りもやらず佇立りてきよろつけば、傳助さこそと微笑を含み、煙管筒拔取りて笏に衝き、何とどうでござります。將扨御有難い、かういふ時にこそ、それ光明玉蓮々々々々と二人して笑

ふ時、件の神官煙草盆を持來りて退れば、程もあらせずまた人の氣勢して、しづかに入來るは、ぎよつとするほどの花の容顏。此時隱居心中にて光明玉蓮を一息に十八度半唱へたり、と後にて傳助を笑はせけり。

（十）

この女子先刻に見えし神子の中には在らざりしが、とても〳〵彼等の等類にあらず。此處に此外數十人の美色を貯へたりとも、隨一は恐らく是なるべし、と隱居の心は虛になりてあくがれ出づる玉に目鼻、花の物いふは是かと眼も放たで眺め入れど、女子はさして羞らひたる氣色も見せず、紅白の腰高饅頭を奉書敷きたる片木に載せて、銘々の座前にさし置き、再び朱漆髹の茶臺に天目を擎げて持出で、體を退りて慇懃に挨拶する態、禮儀備はりて狎るべきやうなく、隱居の禿顱もおのづから下りて、手持無沙汰なる顏色。塲馴れたりといふべきか、不作法といふべきか、傳助飛懸りて、今恭しく挨拶する女子の肩をしたゝか喫はせば、女子は不意に驚きたれど騷ぐ色なく、傳助ごときに下賜はるは、いかにも冥加なき有情の秋波に滴るがごとき愛を湛へて、郎君御惡戯ばかりといひ立

に遁げむとするを、遣らぬと抱窘めて、此頃かの方の赤坂にて、さまざまの浮氣盡を知てかと顏をさし覗けば、緣切りました他人に何の關繫なしと傳助を擂退け、はた〳〵と縭を脫けぬ。

跡に傳助頭を撫でゝ、彼は小谷下枝と申す、此處に無二の色でござりますといへば、隱居は傳助が馴染さうなる擧動を驚き、其方とくよりの懇意と見えたり。果報ものめ、近寄りて委細を語れと羨ましげなる口氣。事實を申せば私去年の暮より、紹介を以て此所に入込み、呉服の御用をうけたまはりて精々お氣に入る中、品物よりは此男に見所ありとお鑒識に稱ひ、今は腹心の一味に連判仕つり、講中募集の人數に加はり、益になる旦那方五人まで世話いたし、月に十度は欠かさず出入の身なれば、神子にも知らぬ顏は御座なく、御尊師樣を始めとして、十三人の神官、五人の事務掛、神子十五人の容貌も暗に記えて、今の下枝樣は夢にも見まするとロ走りて撲され、賄が四人、男を交ぜず、お林にお勘にお久に

お喜代。なほ深き秘密は數々候へども、今申上げては殺生の種なれば遠慮いたして、詳しくはゆる／＼御參詣の上、御自身に御探偵あるべしといふ。

何は置て、今の女子は例物かと隱居眼を緘むれば、唯々御心まかせなれど、今日明日の間には合ひがたし、初の參詣には影も拜ませぬほど、この教會に珍重の神寶なれど、かくいふ傳助が盡力と、お初穗の額との御利益なれば、何事も諸願成就はお初穗の加減一つと思召して、此後とも隨分精を抽んで財を掴むで、御信心怠りたまふなかれと說示せば、隱居いかにも合點したれど、老人は性急なりとや、今日明日の間に合ひ難しと聞きて促氣味になり、その方此處を專と一働きして、どのやうにも都合して今日只今首尾のなるやう計らひくれなば、褒美はたんまりすべしと奮めど、之ばかりは眞實成らぬか、平常褒美と聞けば、親の頭まで蹴かねまじき傳助がしぶ／＼首を掉り、規定ありてとても協はぬ事なれば、

今日ばかりはともかくも御辛抱あるべしといふは、よく〳〵の事と隱居も否々納得し、扨はや飽氣なき事かな。今日は花の姿を一寸見の直歸、もう構はれぬ身の長居は無用。後髮引かれたら此毛髮は皆にならう、と愚痴を吐して歸りの身繕ひするを、傳助推留めて、今日お思召すまゝの首尾は無くとも、かの神子の酌にて御神酒を下さるべく、其内に神官の重役にて大槻十寸穗といふ評判の美男、挨拶に出づる筈なれば少時御控へあるべしと語るに、隱居機嫌を直し、御神酒を下さるとあるに載かざるは神慮に背くに似たり。扨傳助や彼のお酌はよけれど、御神酒は土器で一杯を有難く載く事かのと眉を顰むれば、野暮な事、一升飮うで祝詞謳ひ、神子に戯れて散々に心を和ぐるを、此神殊に納受したまふといへり。それてこそ信心いよ〳〵肝に銘じ、冗いやうなれど光明玉蓮光明玉蓮。

（十一）

やゝありて挨拶に罷り出でたるは、此處に十三人の神官の司とは見るから著き服裝なり。白羽二重の袷に白襟三枚襲ね、雲立涌の葡萄綾の袴の折目正しきを裾長に穿きなし、玉の頸飾を懸け、象牙骨の中啓を手にして、延黄金の指環を箝めたる指の淸らかに纎々としたる、美女の手のごとし。袴の紐に黄金鎖の太く逞しきを纏ひたるが、根を放れたる蔦蔓の松枝に懸かりたらむやうに慢く垂れて、その鎖の太く逞ましげなる、熊をも繋ぐべく想はれて氣疎し。髪は油濃く櫛齒鮮かに梳りたてゝ、頸を掩ふまでに延びたり。世間に噂する澤村源之助に肖たりといふは之なるべく、いかさま肖たる所ありて稍肥肉なり。年齡は三十路を四五歳越えたりと覺しけれど、二十八九にても通るべきは美男の一德なり。辯舌爽にしてひらり〳〵と剃刀を翳すごとく、尻聲の揚がる邊に少し訛あるは

何國の人にや。世辭上手にして談話の調子面白く、特に虚笑の巧なることと此道に華表數を越えたる證據は爭ひ難く、名譽女たらしの逸物、此奴に乘せられてはいかなる尼君も墮ちざらめやは、と隱居心に妬ましがりぬ。

開口に式ばかり信心の話說して、適宜に浮世雜談に移し、神を楯にしたる勿躰風は少しも見せず、言葉卑く客の氣を取りて喜びさうなる言を謂盡し、傳助にも冗談いひかけて隱居の馳走にし、後刻を契りて立出づれば。間も無く下枝が瓶子土器を持來りて床に飾り、更に二人の前に据ゑたる膳には、刺身口取椀燒肴、媚めける聲にて召上りまして、何所にも神臭きところなし。

下枝は九谷燒の金々たる德利を手にして進寄り、あなたと會釋して隱居に薦め、傳助にも酌して、少時用なき兩手を膝にしやんと控へたる姿は、宛然田舍源氏を油畫に見るがごとし。新梳の島田に華美なる裝飾を嫌ひ、

葛引の根懸、銀の平打の後簪、櫛は政子式、白羽二重の半襟、袷は紋御召の變裏、さつと裝りて薄月夜の梅の一入ゆかしく、赤氣に飽たる隱居どの喜悅心魂に徹して、此處に酒盡き腹張り、その御膝を枕にしてどうでも討死の覺悟と飲始むれば、お對手に傳助も醉を催し、てんと面白しに揃うて浮れ出せば、酒はいよ〳〵奮みて人を飲む頃、羽織は隱居の肩に堪らずすべり落ち、繻絆まで抽衣紋になりて、でれ〳〵と蕩けかゝる體を床柱に持たせ、下枝を引着けて寸間も放さず、凋びたる頤を柔かなる肩に擦着けて、此子やどうしてくれると呂律亂れて涎を啜る樣は、天蓼木の煙に寄せらるゝ無宿猫の悶ふるに髣髴たり。

今日はどうもならぬと知りながら、隱居謀叛の志し已み難なく、四時過より飲續けて先刻燈火の點きたるに、いかな歸るとは言はず、醉に紛らして下枝の膝枕に倒れ、此まゝに睡りなば事も成らむかと空鼾をかけば、傳助さりとは知らず、はや盃の納め時と搖起せど、目覺ぬ風して寢返り

打つ處を下枝に抱起され、なほ二人して呼覺まさるゝに爲眠もならず、本意なく立ち出づれば、外の座敷に幾處か未だ歸らぬ人のありけり。

（十二）

婬樂を此教の深秘とは、信者萬人の九千九百人まで虚言にも之を識らず。我等が朝々眵を洗ふ井水に、蚊の醉ふほど酒を滴らして、御夢想の神水と稱ふれば、一瓶二錢づゝ奉納りて有難く戴き、年に一二度の釣瓶錢を出し吝みて、口小言いふこそ愚なる人心なれ。されども些細なる金錢の事は扨置きて、命の大事と心の着かざるは不便の至りといふべし。

萬病に禱りて効驗ある神は醫者樣なり、と深切なる人の諭せども頑として聞入れず。あれは賣婬宿なりと委曲樣子を段々と誨ふれば、血眼になりて腹立て、散々に罵りつけて、其後は會ふても物言はぬほど大信仰の老女あり。渡世は煮染屋、住所は神田松枝町に、安くて風味好き總菜屋の名を弘めて、近年大分に仕出し、亭主は腰を曲めてなほ働きぶりの達者は、血氣盛の長男に讓ず。このお婆も未明より煮炙の手傳にかひ〴〵

しき筒袖の高端折、胼の手を水浸にして齷齪しながら、次女の勝は容色下作にもあらざれば、後來人の奧樣ともいはせたき緣を希望にして、賤しき業に馴らすことを憐み、十六の初奉公にさる方へ小間使に上げたりしに、女子にも眉目の美が瑕になる事ありて、其家の旦那樣に暗挑の袖を引かれけるを、喫ふぞと鬼に攫れたほど怖しがり、宿元に文して子細を告來しければ、以ての外に兩親驚きて、翌日ともいはず即刻暇取て後は、今時のお邸の油斷ならざるに懲りて、再び奉公には出すまじき分別なりけるが、半年家に遊ばせておく間漸次我儘出でゝ、手は懸かり、財は入るばかり、なほ未々の身の不爲と、兄が言出して父親が味方し、母親も遂になるほどゝ合點して、また奉公の事に極まりければ、此度は精精吟味の上、確乎たしかと見留めたる春日といふ公卿華族へ上げぬ。缺點は少しく吝嗇家なれど、奢美なる家には不取締ありがちなり。今は辛くともよく見習うて置けば、後來世帶持たむ時の良藥と、量見一つに

て其も好方に數へて見れば、聊かも不足無き主人と實家の歡喜に、當人も辛抱して老實に仕へければ、淺からず奧樣の御意に入りて、箸の轉けたにも勝や〳〵と御側を離されず、離るゝ氣も出さで大事に勤め續げて、十九の今年の夏、雨の徒然に奧樣御亭主にて殿樣は御上客、書生仲働もお席を許されて抹茶のお慰み、花にはお池の杜若をとありければ、お勝が剪に行きて歸途築山の岨にて足駄を辷らせ、石燈籠の陰にしたゝか轉びて、呼吸の絕るほど胸部を毆ちけるが、その時は障る事なかりしに、秋の初め湯冷より風邪を惹き、その夜惡寒發熱して胸部に尋常ならぬ疼痛を覺え、呼吸苦しく乾咳連りに發てゝ、白色泡沫痰を喀きて已まざりければ、感冒にはあらじ、と奧方の注意にて早速出入の醫士を迎へて受診せしに、創傷性の肋膜炎なり。聽診するに肋膜の摩擦音あるは病症の第一期なれば、痛く氣遣ふべきにはあらねど、この分にては濟むまじければ、ともかくも本復までに半月は間いらむ、と消炎法を行ひ、處方書

して明日の來診を契りて還りぬ。

（十三）

遂に肋膜の表面に膜樣の滲出物を生じ、血管より澄液を漏らしたるが爲に心尖を轉じ、肺臟を壓逼して、病者の苦悶想ひの外劇しくなれるに驚かされ、宿元へ人を馳せて此事情を通じければ、母親狂氣のごとくなりて驅着け、お勝の室に轉び入りたる時は、傍らなる人顏も眼には入らざりけり。

人の來りしほどなれば、もとより易からぬ事とは豫想けたりけれど、骨露に肉減ち、蒼白皮の床に橫はりて呼吸も不利なるに、絲のねぢれたる聲の纖けれども銳く、耳を刺貫すばかりに呻くも、枕を力なる風情に、母親魂も消ぬべく腹も斷れなむ思ひなり。

病症の種類によりては、何の〳〵上手の醫者も奇藥も利くものにあらず。かゝらぬ前に早く告げたらば、今頃はお禮參に行く法もありけむものを、

と奥方を前に置きて悔しまぎれの諷言も、啜涕に交りて涙と共に出づるを、禁めかねたる親心と奥方も笑止がりたまふ。

母は腰に着けたる風呂敷包の小瓶を解き、我飲みし茶椀の虛に中なる物を注ぎつゝ、口の中に何やら呪文して、老眼に見損じて疊の上に注溢したるを急遽手指に沾し、推戴きつゝ額に塗りつけ、お勝の枕頭へ進寄りて、これは近頃光明玉蓮樣とて世にも靈驗なる神のおはしますを、此母の日夜怠らず信心して、身もかく健全に店も追日に繁昌の御利益ある、神に供げたる靈水なれば難有く戴くべし。少量を殘して胸の痛む局所に布れば、倏忽にして苦痛を忘るべし、とお勝の口頭に持ち行くを、傍に奥方の苦き顏して觀てありけるに、お勝は母のいふがまゝに飲みて少しく餘せば、母は手元氣遣はしげに劬りつゝ娘の襟を掻き寬げ、此處といふ局部にかの水を布る手ごたへに苦み、切齒をして反返り、體を捻らせて悶ふれば、見かねてそこ〳〵に仕舞ひぬ。

感冒頭痛の手輕なる病氣と違へば、此方樣にも御迷惑、我等も憂慮。これより扶歸りたしと母親の暇を乞へば、他人の子を預るは心配なり。快方になるまではまだ〳〵時日どるべき病體なれば、ゆるりと療治したまへとはいへど、今見れば怪しげなる水を藥にして、神信心の外に他念なきを竊に心元ながりて、近所に上手の醫者を尋ぬれば、醫者樣とても過食ぎれば腹下す凡夫の身なり。人間の上に立つものは神ぞかし。其數八百萬の多き中に、別けて光明玉蓮樣の御利益は諸人の驚くところなり。指頭に折遺りし縫針が、神水のお蔭にて踵より六日目におのづと拔出でけるに、此針體內を一周せし證には、血に銹びて後前圓まりてありけると話す中に、また一條憶起して、今のは南紺屋町の仕立職人。爰に亦さる金貸の一女の眼病を煩ひけるが、十歲の年より今年十七まであらゆる名醫を求め、更に加持祈禱呪咀も爲盡して何の效もなく、いよ〳〵物の色の見えぬまでになりけるを、玉蓮樣を信心し出して三月と經ぬ間に、

不思議やな、さしもの眼病平癒して此頃は夜業に繼衣すといへり。此女には參詣の度々現に出會ふて、疑ひなき口づからの物語。此外にこれこれ云々と有難い事の數を語り出せば、奧方持扱ひて遁身を構ふれど、捉まりて散々に聽かされぬ。

（十四）

病根を指して抉る藥の効力にも出來不出來ありて、生死は測られぬ病毒を思ひのまゝに募らせ、いたづらの賴を神に懸けて、性の知れざる水などを便にすること饑ゑたる犬の鼻頭に、護れとて肉を置かむより。なほ危かるべき勝の命かな。

肋膜炎は餘病を肺に發し、それこそ不治の疾と聞けど、此人はいうても肯くまじと想ひければ、娘が當座用の衣類、手廻の道具を荷拵しに、次なる室へ母親の立ちける隙を見て、よしなき神信心は構へてすな。かならず〳〵醫者に懸かりて、懈らず藥を飮むべきぞ、と勝に奥方の囁きぬ。靜穩にして寐たるさへ胸の痛むを、人力車に堪ふべきにあらず、と吝き奥方の大奮發の釣臺來れば、はや蒲團を移さむと騷がれて、病人は苦しげに起出て、やう〳〵坐正りて離別の挨拶すれば、奥方は名殘惜げなる

面色にて、物をもいはでしげ〴〵とお勝の顏を視るのみ。三日の馴染も別離は愁き常情に、もとは給金取らす代りに働かせ、働く代りに給金取る、雙方重寶づくの會合とはいふものゝ、長く朝夕を倶にせる主從の、免れぬ事よりの無理離別は殊に情なくて、お勝も何とはなしに胸逼り、心細きやら悲きやら、遽に離れがたなき思ひして、明日からは見るに見られぬ面影の、飽くほど見らるゝも今ぞとや、じつと奥方の顏を視め入る中に、何を思出してか、ほろりと涙の墮れけるを、見る人の手前も愧かし、とさらぬ方を見向けど、なほ禁めかねたる涙は袖を堰きて、歔欷嗚咽遂には堪へずして泣きくづをれぬ。

用意は調ひたりと母親に勸められ、さらばといふ時奥方濕聲を勵して、時候のかはりめは氣を着けよ。身を大事にして一日も早く舊の體になりて歸來む日を待つぞとあれば、あなたにも御機嫌よろしう、と涙を掩へて後ろを見返れば、狹き室に擧りて詰懸けたる男女の朋輩は、お大事に

と各自友情を貽る。吁馴れたる面影のならびたるさへ懐かしきに、いづれか憂色を帶びざるはなく、常はがむしやらの山村といふ書生までが、悄然と柱に凭れて立てる姿は、特に心に染みて第二の故郷の去るに忍びざる心地す。

かゝる所に出られざる奥方の、我病に臥せしよりは夜に日に幾度となく尋ねたまひ、今日は特更枕を離れたまはずして、忝きおほせの數々、冥加身に餘るほどお勝の愁傷、母親の滿足これなるべし。

大勢に扶けられて釣臺に移れば、奥方なほ端近く見送に出でゝ、重ねて大事にせよとお勝の顏を覗きて、先刻にいうて聞かせし事をよとは、醫者に懸かれとの事と合點して頷けば、彼方も頷きつゝ笑む顏を、見殘して御暇。

（十五）

食物店に病人を憚りて、裏口より釣臺を舁入めば、父親も兄も吃驚顔にて走出て、不取敢手舁にして奥座敷に落着かせ、屏風よ夜衣よと馳廻る、兄の足音の無遠慮なるを叱り、父親の周章を罵りて、口舌も餘間なき母親の、心も忙しく帯結正して、是から一走り玉蓮樣へお參りして來る間の、留守を賴むといふをお勝は聽取け、夜衣の襟より顏をさし出して、少時と呼びかくるを、何の用ぞと座りもやらず、及腰して枕頭を覗けば、お醫者樣へかとわざと尋ぬるに、母は首を掉りて、玉蓮樣へ神水を戴きに行くといふ。

奥樣の御注意は此處なりけりと、神水を戴くは可けれど、醫者に懸りて藥をも飲みたければ、先醫者を呼ぶやうにと望めば、常々信心大嫌ひの兄の和助は、一日玉蓮樣の惡口きゝて、斜ならず母人の勘氣を蒙り、其

日より重寶せし内證私費の道を絶やしたる不自由に懲りて、またとは言はざりけるを、今日ばかりは妹の命にも關はるべき折から、と至極同意して、横町の多田醫學士を推擧すれば、父親もこの老妻の玉蓮狂に手を着けかねたるが、益には立たでもさしたる害なき常時とは違ひ、斯る場合には捨置かれずして、勿論醫者樣の事と合槌擊てば、母親は四面皆敵となりたるに小腹を立て、父親どのも和助も、かね〲見聞せる玉蓮樣の御利益を忘れたるか。揃ひも揃うて罰當りの人々やな。夫にも子にもこのやうなる不信心者のあればこそ、此私は衆一倍信心せずは、尚以て商賣繁昌家内息災は覺束なけれ。いづれもさほどに神が否ならば、あゝ否でよし、嫌ひでも搆ひなし。醫者か呼びたくば百人なりと千人なりと湛納するほど呼びたまへ。大方和助の嫁は藥種屋から來るであろ。勝は立派なるお醫者樣の御新造にしたかろ。何程玉蓮樣を詬しても、爭はれぬ神水の奇特は、此母が見せて驚かすべし。其方等は勝手に、醫者

でも僧侶でも頼みたいものを頼まれよ。此方は勝手で信心するに構はしやるな、いらざる世話を焼かしやるな、と入齒はさぞや舌頭に躍るべし。焦立つ手元は中氣病のごとくわな〳〵震へて、聚縫の仕合袋を懷中に捻込み、煙草苞を遺れて立出づるを、和助が心着けて渡せば、物をも言はず引取りて、腹をも突くべき勢にて帶に挿込み、眼色を變へて口頭を尖らせ、ぶつ〳〵と呟きつゝ出てゝ行きけり。

お勝は氣毒がりて、歸られたらば皆に代りて私が謝罪せうと心を勞へば、その事よりは醫者は、と和助親父の量見を聞けば、歸らぬ間に早く〳〵。合點其事と氣輕に飛出して、半町ばかりなる醫學士の多田寛齋といふを賴めば、早速來診して忽ならざる症なりと聞くに、いよ〳〵神水の恐るべきを想ひぬ。今日は折しも留守なればこそよけれ、老妻はあのやうなる心なれば、此後來診の節にいかなる失禮を爲出ださむも知れず。念の爲め委細を打明けて適宜に賴むに如かず、と父親老妻の神信心の事を語

れば、醫學士事も無げに打笑ひ、世間の老人は其類多く、幾度か出遭うて馴れたるものなれば心配ひに及ばず。神が疾病を治すものならば、我等も神と同商賣でござる。

（十六）

宿に下ても奥方の顔見ぬほどになほ案じたまひて、折々の見舞のお使には、お勝と中好の仲働、お銕といふ二十七の世帶崩、世の鹹に揉まれたる如在なき女の、見事に奥樣の御口上を傳へてしまへば、お邸からのお使者の格を棄てゝ朋輩の心易く、寢臭き床に擦寄りて、介抱も眞實からの手ざはり、藥の世話まで殘る方なく、行屆きたる擧動を家内中が喜べば、お銕の所爲一つにて御見舞も榮えて、いとゞ難有く思はれぬ。家に忠臣あれば國亡びず、良き家來は持つべきものなり。

到來の有合せなれど、其都度服藥後にとて菓子折を、あの奥樣の下さること、瓜の蔓に茄子のなるほど一方ならぬ鍾愛を、前後に此邸に例無き事と下女輩の羨みぬ。

諺に水火相容れずといへども、此處には水と藥との口論一日も絶ゆる事

なく、又しても神様と醫者樣との優劣論に、お勝は枕頭の躁がしきを厭ひて、母の志に負かず唯々と神水を戴けば、圖に乘りて藥などは廢めよといふ。

父兄の深切も無には爲がたしと取繕うて、服藥、養生を懈らざりける驗見えて、一月餘にてやう〱快方に趣きぬ。これ偏に神水の御利益、と母は無上に悍立てば、醫者組は多田先生と信仰を增して、父親の時は是非此國手と今から定めて置くもをかし。

危みしが幸に餘病も發かずして、見るさへ心元なげに擴りたる胸廓も常形に復り、呼吸も今は苦からずなりて、日を經るほどに顏色も見好げになりぬ。

大事の〱一女に命を授けたまひたるは、あら難有や忝やの光明玉蓮と、母は感涙を流して衆にも此奇特を語れど、蔭なる醫藥の功を奏して、かゝる仕合なりければこそよけれ。さもなくして屏風逆なる回向の悲し

き目を見たらむには、恐らく神の爲損じには小言をいはで、よしなき醫者の所業が玉蓮樣の御意に悖りたるお罰とや喚きたるべき。かうまで信心受けて御利益なき神は、天下にお一方も御座あるまじ。路上の廢鞋も石垣の蟹の死骸も、庭の竹箒も椽下の鼠の子も、此心もて拜みて利益のあらざるはなし。

このやうなる信者を持てる神樣は、いかにもお仕合の至り、我等も早速商賣廢めて神となり、寄進賽錢しこたまための尊と崇められ、にしめみせうりの國を去りて、富貴榮曜常世の國に若隱居を願ふと、和助近頃つくづくと私費に窮りたる愚痴を、それとなく父親に吐しぬ。

戶外を步けるやうにもなりたらばお禮參に伴れむ、と寢てゐる中から耳喧く母の言ひ續けゝるに、此頃は床を起出でゝ、戶外珍らしく店口を覗き、裏庭の猫の額ほどなるに菊の花の咲けるを眺めて、巣立の鳥の天を戀ふ元氣の出でたるを喜び、人力車なれば身體も疲れじ、日和よくば明

日にも玉蓮樣へと勸むるを、父親が氣配ひて之を醫者に問へば、早しといふ。

お勝も出ては見たけれど再發を恐れ、人力車にて搖られなば胸はまだ痛むべき氣味、と言免れに一週間も過ぎけるに、少しの運動は障らじと醫者の許しければ、日毎に迫く母の意に今日は從ひ、お禮參とても支度に騷ぐほどの事なし、顏手足の垢を熱湯に絞れる手拭にてさつと拭き、髮は亂髮を束めたるのみの櫛卷にも、なほ捨てかねる飾は蒔繪の鬢梳に見えたり。糸織の小袖の下に珍柄のふらねる、米澤琉球の長羽織に海老茶の短紐、病後の姿妖嬈に、そんじよそれしやの風あり。

（十七）

今日は常日なれば參詣の人いと少なり。門內に所有らしき人力車三輛、近所に車夫の見えずして控へたるは、身分ある人の參詣するやうに見せ懸けたれど、これぞ人寄の招牌なる、と樣子知れる近所のものゝいひける所以は、此三輛の車のいつも待たぬ日はなけれど、人の乘りて入りし影も見ず、また曳出せし音も聞かず。時々は何地へ陰すらむ、あらざる事もあれど、車の待つ日は、多くこの車にあらざるなし。されども神官の他出する折は、この車に乘るといふ事までたしかに見屆けて、疑ひもなく神に景氣を附け、信者に身分よろしき人ありと知する策略なり。人はかくいへど、彼等の人々の待たせたる車かとも想はしき風俗の婦人、廣間の片隅に神官と對談するあり。或は中庭の椽を紳士めかしき男の人待顏に行つ還りつするあり。

お勝は母の後に跟きて拜殿に昇れば、事務所の中より神官一人立出てゝ應對す。娘長々病氣の處、御利益にて此程命拾ひをいたしまして、今日のお禮參に伴れました、と母は帶の間を探りて金子包を取出し、これは些少なれど寸志をお供へ下されましと稽首ば、神官禮を返して、これにも限らず御信心が第一と、聲作の殊勝なるには似もやらず、異な眼色をして折々偸むがごとく忍ぶがごとくお勝の顏視るを、不氣味なる男とさらぬ方のみを見向けば、母のしかくる談話は棄てゝ、兎角おのれにのみ物いひかくるは、いよ〳〵氣障神官と、構はず衝立ちて、庭見にと椽に出れば、彼方よりは障子の蔭にて見えざりしが、其處に一人の若き紳士が、もおにんぐこおとの尾の下に兩手を入れて、泉水の緋鯉の陰見に游ぶを餘念なく眺めて立てり。

人の氣勢にふと顏を擡げて、お勝と見合はせる眼を彼方に轉けて、體をも少しく横にしたれど、お勝は端無く見合ひし嬌羞の醒めずして、己も

體を退きて障子の裏に隱れたる、が纔に見し面影のもしや其かと胸跳りぬ。

果してそれならば胸も跳るべく面も熱すべき、事情ある人の意中に在るより、いさゝか肖たるを妄眼に見損ぜしか、と思ひ煩ひしが、見合せし顏を遽に背け、體までも背けしは、曾て見ざりける人のすべき所爲にあらず。憖に識れる面を會はさむを羞らふ折に、自も他もする事なり。扨は彼人にや。彼人はかゝる處に來たまふべくもあらざれば、他人の空肖たるべきか。出て見むも羞はし、見ざるも遺憾多しと心亂れて、足はわな〳〵と慄ふを踏みしめ、そつと一歩進まむと思ふ折、其人我前を過ぎ行くに驚きて、後退りつゝ横顏を見しに、紛れもなく眞物の其人なるに胸いよ〳〵轟き、こはいかにせむと進退谷まる心地はすれど、嬉からぬにあらねば尙見たし、彼人も見よかしと、身も裂けなむばかりに滿てる嬌羞を忍びて、去りもやらで其處に立盡せば、椽の極まで行盡したる

紳士は、踵を回して再此方に向きて歩み來るを、障子の陰より忍びやかに見迎ふれば、其かと紛はしくもよく肖たれど違ふ處ありて、意中の人よりは色稍白く、額稍濶く、眉毛稍細し。其外は寸分違はずして、左肩少しく上り、前に屈みて行く所は誰見ても其人なり。

まこと其人なりせば、いかばかり嬉しからむと思ふほど、空宵の徒なる歡喜を悔ゐて、贋物めがと獨り腹立たれけるが、更に懷しくもありて、また徐々と身を半ば顯し、庭を眺むる風して窃に男の方を見遣れば、物案じ顏にて、此處に人の窺ふとは心着かざる氣色なるを幸ひに、思ひ遺す所もなく見しに、風采容顏意中の其樣に優るとも劣るまじく深く見るほど飽きたらぬ心地して、少時は我を忘れて夢寤となりけり。

頓て年寄れる神官出來りて、きよろ／＼と四邊見廻はし、皺枯聲して瀧澤樣と呼べば、其人應と答へて來らむとするに、急遽拜殿の方へ遁還り、襖の前に立ちながら、地紙の模樣を見るやうに見せて、とかくに眼を離

しかぬる紳士の方を見れば、かの神官とひそ〳〵語らふ顔は、眞正面に此方に向きて、話說の欲訖に小指の爪を嚙みて打笑ふ容貌、其人に生寫にて其人よりは愛嬌深し。

何を語りしか神官も笑ひ、紳士も前より強く打笑みつゝ、輕く一禮して足早に別れて、わが前を過るとて一寸顔を見られしを、お勝は怯て餘所を見向きしが、行過ごして後影を逐懸けて見送れば、紳士は振返りて我顔を見しは、いかなる心か、と後にて獨り種々に判せしが、遂ににつと打笑みけるを誰も知らず。御母樣御用心。

（十八）

其面影は心に印り、思ひにからまりて忘れ難さに、歸途の車の上にて母、親に裏問ひぬ。

我等より一足先に歸りし男の人は、學問ありげなる風體にて、年齡も亦神など信心せむには少しとも見ゆるにあのやうなる人も講中か、と虚を擣て實を衝きかくるを、母はしたり顏にて、あの方は山手に名たゝる瀧澤樣といふ華族の御次男樣。四年ばかりも外國にて學問御修行なされ一時は耶蘇敎の信者にておはしけれど、先頃より玉蓮樣を信心なされてより、西洋諸國にも種々難有き神はあれど、かく御利益の顯著なる神は遂に無しとて、近頃は講中にても屈指の信者なる上、富饒なる御身分なれば御寄進も思ふまゝになさるれば、玉蓮樣にても大事の〳〵お方なり。家にては父親樣も和助も、何かの端には玉蓮樣の惡口なれど、あれほど

學問なされたる方さへ、萬國に類無き神様とて御信仰なさるゝは、玉蓮樣の尊きことの爭はれぬ證據なり。其方もとも〴〵信心せよ、といはぬばかりの口氣に、得たりとお勝は進入りて、さほどの御信心なればいつも御參詣なさるゝか、と少しく鋒を見すれど母は心着かで、常日も大方見えらるれど、御祭日御說敎日などにはいつにも欠かせし事なく、折々は御尊師樣の依囑にて、西洋諸國の神々のお話など演說なさるゝ事あり。辯舌爽快にして水の流るゝごとく、種々の引事して誰にも解り易く、おもしろく話さるゝは、大抵の學問にてはならざること、と聽衆感に堪へざるなし。

お經三昧、功德、因果で持切る僧侶の御法談には、壁が立たとか、啞が物いふたとか、聽くから妄說らしき事ばかり。それとは違うて學問ある方のお話ならば、定めて益にもなり亦面白き事なるべしと誘ひかくれば、母親心に喜びて、其方も今までは一所になりて卑しけれど、あれほどの

大病が神水の力にて、けろりと癒えたるにて、始めて玉蓮樣の難有さを曉りたると見えたり。

いしくも發起したるものかな。凡そ人として信心なきは、物事に虞なりて志不拔ならず。第一諸難を免れて其の身其の家繁昌の基なり、と一心に說明かすれば、心の內は外面に知られず、頻に首肯きて、流石に神の宮居は、門を入るより何と無く心淸しくなりて、胸に積む苦も忽ちに忘れ果て、只管有難さのみ身に染みて、歸るが可厭になるも不思議といふべし。

此次には是非御說敎聞きに伴れたまへ。何日ぞと問へば母は指折り數へて、十五日なれば明日後日なり。參る氣があらば——殊勝なる事なり——伴れて參るべし、と子の心を親は知らず。

お勝が意中の人を誰ぞと知るものは、他人にては、天にも地にも仲働の鐵一人なれど、どれほどに思ふかは當人の外に知るものなし。

この戀人を誰とか駿河臺、住所の名もやさしく姿もそれよ、紅梅町に清原乙彦といふ子爵なむおはしける。

主なる春日とは格別の入魂にて、祝儀不祝儀、花に月、茶にも酒にも往來繁かりければ、華族方の客の饗應はむづかしげなるに、清原樣といへば、下々まで御馴染の御客とて心易く存じ上げゝり。

去年六十二にて目黒に隱居されたる、父君は名代の華美者、寛濶の爲過は內證の缺乏を、家內擧りて心を傷むれど晩年にして悔ひず、今も折々伽羅の下駄のやうなる事して喜ばれぬ。

乙彦君も其の質を享けて、先代に劣らざる散財家なれば、彼も此も普通の娛樂は爲盡し、餡は捨てゝ餅の皮食ふ其道の巧者にして、馬車の中に居ながら世間通覽の大通にましませば、鷹揚にして高ぶらず、貫目ある中に輕き處ありて、容貌美は天成、如在なきは黃金鍛錬。百人が百人好くべき品格を、お勝一人して千人分も好きて、乙彦君が折々の御入來を、

此處に奉公の餘祿にして樂みぬ。

されども此君には華族中容色隨一と噂高き御臺所ありて、御羨ましくも御相思のよし。之も亦高き噂なる上、彼方は階子掛けても及ばざる雲の上人、此方は煮染屋の下司娘、一命かけて思ふとも、どうなる譯にはあらねど、見たが因果、好てからは無理に厭嫌にもなれずして、唯世の中が隨意になるものならば、あのやうなる御方にと、協はぬに極りたる願ひを目的もなく心に秘めて、神に祈るにもあらず、人に頼むにもあらず、獨り思うて獨り果敢なみ、獨り考へて獨り悦び、お茶の通ひ御酒の御酌御出の度々にいつも懷かしき御姿を眺めまゐらせ、御冗談のうれしがらせを嘘に聞きながらも嬉しく、いよ／＼深く思ひ入ることの愚さを我と知れども、月に浮れて浦傳ひ、百里先へ行くとも盡きじ、同じ景色と思ひつゝも、なほ捨難くて憧れゆく、其思ひも異らずこれなるべし。

（十九）

參詣人には瀧澤尹明樣、山手の福々華族と觸れて、服裝もいかさま貴公子。胸間の金鎖も正銘詐りなしの二十一金。なほ人品好きが爭はれぬ看板になりて、誰も此男を操人形と知るものなけれど、樂屋は吃驚の種。中國筋の流浪書生、法律修行は當初の素志なりしが、遊蕩を覺えて見れば名譽も糸瓜も入らぬほど面白くなり、借りた物は還さず、貸さぬものは盜出し、吉原の小店に馴染出來て、桑の葉に遇はれけるが時到りて蟲となり、女郎の身の皮を喰盡して肉に喰入るほど、八方に不義理を出來して、世間に五尺の身の置所なく、土手下なる新造の宿の一間に窘み、半年が間女郎に仕送られ、何處の馬骨かせゝり殘しの鰺の鹽燒、刺身の枕の煮附などを朝夕の肥料にして、性根はます〳〵腐り、かゝる境涯が何とも言はれず嬉しくて暮しけるが、女郎も遂に愛想盡して長竿に懸け

ぬ。
初霜の夕紅裏の胴着に浴衣を重ね、再び坂本の方へ迷出でける途、茶飯屋の呼聲空腹に響きて、飛びつく程に思へども喰ふ事かなはず、暖かさ烟を覰捨にして志ざゝむ方を思へば、便ともなるべき性惡朋友の、今人がましく暮すものはあらず。唯一人惡運強く玉蓮敎會にもぐりて、神官となれるものを的に尋ね寄りければ、一方の役に立つべき男と此が推擧のごとく、惡才長けて佞辯自在の白徒、妙なる事を創意きて其はと會司の心に稱ひ、手柄次第褒美は格別の約束にて、美服の品々裝飾道具の諸入費敎會持にて、別に月給は十五圓のよし。
神官等寄擧りて之を華族に遇ひ、信者にも貴人と飲込ませ、說敎日などには衆目の見ゆべき所に席を設けて面を曝させぬるに、美貌勝れて人目に着けば、浮氣なる女郎女房たち竊になりて之を悦び、光明玉蓮と唱へつゝ異なる流眄して、此男を拜みたさに神前特に賑はしく、こゝに不便

なる犧牲はさる高等官の令孃なりし。この「貴公子」の毒手に懸りて思ひのまゝに褻され、因果や惡報胎內に宿りて、今更の驚駭は遲し。兩親に辨解なしと色蒼ざめて訴へけるを、事も無げに呑込みて墮胎藥を勸め、墮せし後の體に障る事ありて隱事も露顯しければ、兩親無念と立腹の涙の裏に、浮名ばかりを記念にして病死は不孝を重ねぬ。

亡後は此娘の持物を調べしに、寶石入の金指環二箇、六分珠の珊瑚の金簪、眞珠の根掛、其外帶衣類凡そ一包不足したるといへり。

金錢になるべき婦人と見れば、色仕懸にして吸取るを此男の役目とすなり。笑ふべきは切味過鋭て、いつの間にやら會司玉蓮尊師も陥められぬ。

この起因を尋ぬるに、去年の暮大雪の日は朝より參詣無かりければ、奧の隱坐敷に幾處か置巨燵して、尊師を始め神子神官、一同打集まりて防寒の酒事。錢あるにまかせて氣疎き肴好み、惡魔穰に飲めよ献せよ、歌

へよ、畏まつたと白木鼎といふ美音の神官、祠辭は下手なれど端唄は得手物、こゝぞと咽喉を鳴らせば、赤坂の藝者上り、今は其の名も飛田安栗といふ神女、三味線擔出して彈始むれば、やんや〳〵瓢簞ばかりが浮きはせぬ、と一亂れ亂れて後また酒の落着きたる時、誰やらが發言して、瀧澤は古今の女たらし。彼がかうと思ひこむならば、凡そ天下に墮ちざる女はよもあらじと賞讚するを、また一人が段々御手際拜見いたして、實にも神業と驚入るばかりと舵を把れば、瀧澤潮に卷かれて頤を撫で撫で、今は昔なりけりと詞書して、功名話に取懸れば、尊師も覺えある曲者興を催して、このやうなる老女でもどうぞなるかと試むれば、易い事かな。剛きものはまづ和げて手に入れ、角なものは丸めてから墮し、枯燥たるは一通りふやかして綾なさむに、心の如くならざるはなしと笑へば、春にもならば日永のつれ〴〵に、其手際を我に見せずや、と尊師の戲れに念を推せば、いづれも盃を下に置きて、こりや面白しと乘出せば、

澤瀧尹明醉崩れたる膝を正し、扨々御醉興なるお言葉かな。御所望とあらば隨分御覽に入るべし、と話は其儘になりけるが、日永の春ともいはず年內に樣子怪し、と人々の認めけるに違はず、此正月より月給別に十圓と知れて、扨は其に極りぬ。

かゝる貪婪邪淫の狼婆を、知らざる事とはいへど、尊師などゝ崇むる士女の精神は、土足に懸けられて蹂らるゝも同じ事なり。

更に此鶴貌梟心の奴に思ひを運ぶお勝の身は、いとしや珠を取て巖に投着けむとするに似たり。

（二十）

お勝のいなむとぞ思ふ風情は、瀧澤の鋭き眼を逸れず。服裝は式のごとく、屠て脂肪を取るべき代物ならねど、女子の豐年といふにもあらざる折から、あれほど匂やかなる花の姿を、捨てゝ置くも惜きものと、玆に淫魔の舌甜ずりして待つとは知らず、日數も經ちたれば念入の手水行ひ、薄く化粧ひて、帶も大事なるをし、羽織もかへて黑縮緬の紋附。奥樣の結ふなる束髮にして、今日は御說敎日と立騷ぐを、母に勸められし樣子もなくて、と父親も兄も不審の眉を寄せて、各自考ふれども腑に落ちず。兎も角も可怪とは思へど、さうした事と知らざれば、寄席劇場へ行くとは違ひ、說敎といふからは藥にはならずとも毒にはなるまじ、といふがまゝに出し遣りぬ。

附添ふ母さへ、それとは一向に存じも寄らず。我娘の若年に似合はぬ信

心を頼もしがり、容色と此殊勝さを人にも誇らばや、と嬉々伴れ行けば、例のごとく群集は雲の如く、見渡せば瀧澤尹明特別席の上座に正坐り、今日は氣を更へて黒魚子織の羽織、縮緬紐の白の太紐を胸高に引結び、仙臺平のぱつとしたる柳條の袴に両手を差入れ、柳條一樂の小袖の下に黒八丈の重襟して、つんと身を反らせて鷹揚なる軆度。群集の肩越に眺めて亦佳、とお勝は肉動して悦びぬ。

されども此方は群集の中、彼方は距れたる別席なれば、鞾を隔てゝ痒き處のいとゞ痒く、何とぞして好手段も星合の、心盡しの今日を空にせじと悶ふれど、もとより面識の男にもあらざれば、目授の合圖は利かず。立て傍へはなほさら行べきにあらず。齒痒さに袖下に我手を摑みつめて、唯遠く視入りける間は短しと想ひしに、說教訖りて群集はゝや立懸くる。其人もやをら席を立ち樣に、隣席なる斷髪の女隱居と何やら語らうて、廊下傳に奧の方へぞ姿は見えずなりにける。

えゝ！と手巾を投捨て、心着きて母の見ぬ間に拾ひ取り、廣き庭ぞと聞えよがしに呟きつゝ、母を置きて椽近く歩み寄り、初の御見は此處ぞ、今も懷しき所に彳み、其人の影や見ゆると去りし跡を眺むれど、惜や惜や惜や〳〵袴の裾も見えずして心のみぞ殘りぬ。

勿躰なくも母親を欺したる罪も、手水行うて髮結ひし手數も、大事の帶巻めて紋附の羽織着て、「ぱちん」まで仕替へたる心勞も、心快くても病後の身の車に搖るゝ愁さの辛抱も、皆〳〵空となりけるか。

時間だにあらば其人の出て來むまでも待つべけれど、と顧れば、信者は大方去盡して、階段の際なる人聲薄らぎたれば、母親は今にも歸るといふべし。待つにも待たれぬ仕合、と廊下の彼方を視凝めて業を沸せど所爲なし。

案のごとく母親は追蹤て來り、はや歸らむと促さるゝに、留まるべき口實無くて、しぶ〳〵歩出だせど、心に懸かる奧の方を幾度か振返りて進

みかぬるを、病痛の再發たるにやと母は驚きて尋ぬれば、疑はれじと頭痛に紛らしつゝ、拜殿の口まで出でしが、なほ思ひ棄てかねて振還れば、念が通じてか其人の影！思はず母の手を拂ひて、手巾を遺せしと後戻りせしが、流石に羞ぢて立停まれば、瀧澤かの代物と見るより、思ひありげに笑ひ懸けて直に姿を隱しぬ。

この笑顏が勝の眼に染着きて、戀しさは腸に喰入りぬ。

（二十一）

かの時の笑顔ばかりに、お勝の戀慕は奮み出して、其後は參詣なほ怠らず。會ふ事はいつも會ひながら、彼方は華族の瀧澤樣、美男子の華族樣と皆衆の熟知る人物なれば、言葉懸くべき機會の無きのみならず、第一側へ寄着く首尾のならざるに苦しみぬ。彼女と覘を附けて、油斷無く窺ふ瀧澤さへ、人目は繁し、取着くべき手蔓のあらざるに困じて、さまぐ〵心を碎きたる遠責の色仕懸。互に物をこそ言はね、馴染こそ無けれ、機會だにあらば直に埒明くまでに睦を附けて、二人の胸にとくより電氣機の準備は濟みぬ。

お勝が母に伴れられて始めて參詣せしより、こゝに二月も過ぎければ、進退も自由なる健全の身體となりたるよし、繁々の見舞の使にて春日の奧方も知りて、此方の不自由を察して、一日も早く還りて勤めてくれよ、

と更に人を遣しければ、家内いづれも冥加に思ひて、其身體なれば憂慮なしと醫者樣もいはるれば、大分長き間お暇を戴きたる御禮に、早々歸りて御不自由を懸けなと勸むれば、嬉からぬ顔色して、まだ折々は胸が痛むの頭が重いのと、いひたき儘をいふて澁るも、心中は我等が戀ひしければこそ、と女親の甘き心から、悍立つ父子二人を言宥め、お勝の喜ぶ顔を眺めて、何歳になりても嬰孩と、或時は傅粉の助手もしてやる嬰孩の、男戀ひしがると、老人の愚に復るとは有る例なり。

お勝は母親を味方にして一方を禦ぎ、一方に責入る策を回すに、餘所の人目よりも何よりも、とかくに邪魔は母親なり。

此附屬だになくば說敎の後に居殘りて、一寸の首尾はたしかに成るべし。

つく〴〵彼方の樣子を見るに、此方ほどにはあらずとも、思ひは有るに極れり。これまでにして折角の戀を捨てむことの口惜さに、加へて瀧澤が誘ふ色の手管は焚ゆる心をなほ煽りて、お七が櫓太鼓もかゝる思ひの

前後を見ずして、意馬心猿の同狂、分別の羈絆も牽制るによしなくて、二日懸かりの智惠を出して母親を欺し、一人して參らむと乞へども許されず。されども甘き母と侮りて、なほ迫りて無理を言張るを、店なる父親の聞附けて、愚なる言いふな。若き娘のうか〳〵と一人外出するものにあらず。此間より幾度もお邸からのお人に、何というてお斷り申した。まだ十分本復せぬといひながら、朝から湯に入りて白粉して、衣服飾着りて遠出の所を、もしお邸の人に見られたら何とする。誰目にも御病人樣とは見えかねるぞ。

神信心といひ、母も一所に附添ふ事なれば、何も從來は謂はざりしが、凡そ人の娘といふものは、構へて稠人へは出まじきものを、一人してさる所へ行かむ抔とは以ての外の事なり。まこと奉公ならぬほどの病氣ならば、藥飲むで蒲團冠りて神妙に寐てゐよ。外へ出らるゝほどならば、今日直にもお邸へ還れ、と腹立聲を揚ぐる勢に怖れ、お勝は坐敷の隅に

呼吸(いき)を呑(の)むて縮(ちゞま)りけり。

（二十二）

甘き母さへ我手には乘らずして、其に輪を懸けて手剛き父親の見脈に、到底成らざる事とお勝も諦めて、其日はおとなしく忍びしが、堰るゝ水のいとゞ激して、穩まらぬ胸になほ種々の智慧を絞りて、此度の參詣には、是が非でも心の霽るゝやうな目を見ては置かじと獨契ひけるに、其日ともならざる前に、また〳〵春日から特派の御使、お鐵の來りて例の辯口にて、委細お邸の無人にて、奧樣御難義の次第を演べ、思ひのまゝに兩親を說得し、病後のお身なれば常の樣に働かれても若からず。お邸は土地も高く空氣も良ければ、御保養には持來いといふ塲所なれば、と我田へ水を導くやうなる言なれど、いはれて見れば道理なる言のみ。平素は無二の中好のお鐵の言葉も、今日はいらざる世話、とお勝の腹立ちて不機嫌なる愛想振に、長居して遊びて歸る心算のお鐵も當の槌が違

うて、そこ〳〵に歸際、血色も常の通り、擧止も大分確となられたる御容體なれば、御奉公ではなく御養生がてら、明日にも御出なさるやうにと殘す言葉に、母よりは父親が同意にて、道理と頷き、態々の御使も度度にて恐入りまする。明日は相違なく午前に遣しますれば、奥樣へも宜しう御傳へ下されまし、と獨斷の挨拶する顏をお勝は流眄に懸けて、つんと橫を向けば、かね〴〵殿樣御丹精の菊花の、今年は勝れて出來好く眞盛の中に、取分け「後庭花」の見事さ。今日明日を賞觀の最中なれば、明日は必ず御母樣御一所にてお出を待ちまする。奥樣のお聞きあそばしましたらば嘸かしのお歡喜、とお勝の耳には喧しく囀り散して歸行きけり。え〻腹立たしや。かくまでの心盡しも泡となりて、何もかも壞れたりと、人目を二階に避けて口惜涙を思ふさま滴して、此恨はお鐵に在り、父親に在りと袂を嚙めば、袂は裂けて齒を痛めぬ。此念はいかなる邪魔ありとも斷ち難し、斷たじとて氣取られなば、手に餘る邪魔も起るべし。氣

取られぬ前に用心して、爰は體よく邸へ還り、其上にて工夫もあるべしと涙を斂めても、腹立たしくて〳〵、戀ひしくて〳〵、此夜は二時までも寐られざりし。

（二十三）

其日の午前母に送られて、お勝は遂に春日の邸に還りぬ。家内變りなく、特に奥方は滿足なる面色にて、親しく病中の樣子を尋ね、此疾病の原因はといへば、雨日花を剪りに遣りけるばかりにと、格別氣毒に思へば懇篤劬りて、當坐は氣儘に勤めよとの御意を聞き、安堵して母親は歸りけり。

寛かなる兩親の眼よりは、嚴なる主人の眼こそ偷み易けれ。親の眼は裏面をも見るに、主の眼は表面にのみ光れば、掠めむにも亦表面だけの修飾は難の無き事。御存じの通り母は玉蓮信仰なれば、病中にも絶えず例の神水を飲まされ、全快までは屹度お祭日毎に參詣せねば機嫌惡く、今日も午後より、かねて同道に御參詣の約束致しましたれば、と無根事も眞實らしく、半日の暇を乞へば異議なく許されぬ。

今日こそはと心勇み、求むる物は早掌中に在る心地して、單身車を馳せて玉蓮教會に來て見れば、いかに常日とはいひながら、平素の常日に倍して拜殿寂しく、折から參詣人は一人もあらず。大廣間の入口なる襖は閉切りて、奥の方に談話の聲も聞こえず。神は今頃お留守の十月、天は時雨れて風寒く社內の榊を鳴らし、四邊の景色心細さはお勝の身に集まりぬ。

主人まで欺く程の首尾してやう〳〵來つるものを、一目も會はで歸るべきや、とまづ段階を踐みかけたるが、もし彼の人の今日も來てあらむには、何にとかして會ふ方法の無きにはあらざるべきも、かく物閑なる樣子にては、居たまむか心元無し、と力落ちて佇み、唯かく考ふるばかりにては埒明かじ。まづ廣間へ入りて樣子を見ばや、と拜殿に昇りて廣間の襖をそと引開くれば、天井高く疊平坦にして蠅の影も見えず。庭の方なる障子も一面に閉ぢて、一區破れたる紙のひら〳〵と、風に搖くのみ

ぞ獨り面白げなる。
多時佇みて四邊を見回せど、更に人の氣勢はせざりけれど、まことに人の在らざる理無ければ、此方の音を聞着けて、もし誰か出て來らむには序惡かるべし、と足音を偸みつゝ庭の方へ進寄りて、音せぬやうに椽の障子を開き、此處より續きたる奧の方を見遣れど、何處も閑寂にして空店のごとし。用も無き身のかく深入して、人に見咎められなば何と口實もあらじ、と危みつゝ此處まで來りたるに、なほ誰も出會ふものゝあらざるより稍心落着きて、先日瀧澤が説敎場より出て行きしは、何所如何なる處か。彼所に見ゆる座敷もや、と拔足して椽傳ひに進行きしが、後に人やあらむと氣遣はれて振向けば、大廣間の椽を大分距たりたるに驚き、思はざる狼藉したりと引還さむとして、側なる座敷の襖の細目に開きたるを不圖認めて、何心も無く差覗けば、何を語らふにもあらで男女の對座へる姿に胸轟き、遽に怖氣立ちて精しく見もせず、匐ふやうにし

て迯出し、廣間に駈入りて障子の隙より其座敷を覗けば、我足音の耳に入りしか、其襖より神官の半身顯して、じつと此方を眺むるに驚き、戀も逢瀬も忘れて、逐るゝごとく段階を駈下り、門前に徘徊ひし人力車に乘りて春日の邸に還りぬ。

（二十四）

思懸けなき男女の姿に驚かされ、我を忘れて遁歸りたるは何の事ぞや。今にして思へば寐ぬに夢を見たやうな、鈍き事をしてけり、と肉を抓りて悔ゐても返らず。またというても四五日は行かれぬ身の悶かしさ。昨日素歸の無念は今も胸に疊まりて、不機嫌なる顏色を、さりとは知らぬ婢女どもの、あれは病氣ゆゑと誰も手を着けて、悖はぬやうに遇ひぬ。かうして氣のむしやくしやした時、清原樣の御入來もあらば、疳も直に治まるべき妙藥、と本尊は流石に戀ひしくて、此願を竊にお鐵に囁けば、それよと膝を拍ち、不實のやうなれど忘れてゐました。此方は先月二十一日の晩夢でも見なんだかと、笑ひ懸けてお鐵の異な事を尋ねれば、今覺えねど、それぞと胸に應ふるほどの夢は無かりしがと眞顏になれば、扨は此方も口頭ほどは心で思うて居ぬと見える。清原樣は先月二十一日

何やらお取調の御用にて、大和の方へお立ちなされて、今年一杯お歸京は無きよしと語れば、吃驚。されば夢にも見さうなものを。それにしても此方は友達効のなき不實な女かな。その時一寸知らせてくれても罰は當るまじきに、不實々々と怨めば、もとより私ははい不實もの。夢にも見ぬやうな不實もの、と撲たるゝやら抓るやら、騷動は事情を知らぬ下婢に飛込まれて歇みぬ。

身に後暗き覺えあれば、幾日も經ぬに、またもや參詣と暇も乞ひ難く、全快は容體に知られて、奧方は何といはるゝとも、我爲べき事を外の婢女に勤させて、迷惑を懷手して見るに忍びず。勤むべき事は勤め振に、胸の疼痛も去り、呼吸の奄々ざるもおのづから表はれて、なほ勤めではならざる身の、參詣のお暇のとは、我一人遊山がましくて、言ひたき口も是非なく結ばれけり。

四歳になる和子樣の此頃夜啼を始め、連夜歇まざるに家内の驚駭淺から

ず。醫士を招きけるに、徵候確實ならざれど小兒急癇なるべしとの診斷に、一大事と騷ぎて、賴むは醫士よ、服藥は懈らせず。看護も此上なしといふ所までして、少許の効驗はあるべき理なるに、夜啼はなほ劇しくなりまさりて、或時は手足も斷るゝほどに悶き、さながら物の來りて惱ます如き有樣にて啼狂ひければ、今は下婢の中に交番の不寐番を置き、奧樣も午前を寢時にして、徹夜の介抱に心を碎き、精を費やせば、壯健なる身もいつか衰へて病人の姿となりぬ。

今宵はお鐵が不寐番に當りて、次間の火鉢の側に反古疊紙を廣げ、夜深の洋燈睡むげなる火光に、覺束なき針の運びも倦み、人の見ぬとて無遠慮の大欠の口に、目白の鐘冴えて腸に染みいる寒氣。此時と用意の燒芋取出し、炭を加ぎて煖めにかゝる時。和子樣の消魂しき啼聲。驚破と襖を開きて駈入る目前に、影の如きものほら〳〵と枕頭より舞出で、硝子障子を透して椽の方に消失せけり。

呀と立つる聲に、奥方驚きて何事ぞと問へば、今の物を御覧じましたか、と齒の根も合はで蹲まりぬ。

奥方は子のしたゝか啼叫ぶに氣を奪れてよくも聞ず、頓てすや〳〵眠入る子の背を摩りつゝ、何事ぞと又尋ぬれば、憶起すも恐氣立てる顔色にて、幽……靈と囁けば、奥方四邊を見廻して、愚なる事をと打笑ふ。

愚な事でも何の事でも、今のはたしかにと欲言て身震ひすれば、奥方鼻を利かせて、次問に何ぞ焦る臭が。　それよと駈着けて見れば、網の上の芋二つ、炭のごとく燻ぼりて、おや〳〵！

(二十五)

今朝になりて昨夜の怖かりし事をお鐵の語りければ、下婢等怖るゝ中に、今夜の番のものは取分け恐怖をなし、今より病氣を言立て宿へ歸らんと騒げば、奥方は理を分けて諭せども、お鐵の見しといふを證據にして一同も承知せず。されば是非なし、今夜から不寝番は頼むまじと聞けども、なほ怖がりて日の暮るゝを心細がりぬ。

夜に入れば五人の婢女一部屋に屯して、今宵よりは狹くとも此處に寢まむ、と誰も端を否がる陣取の爭論。其も濟みて家内やうやく靜まれば、庭に落葉のがさ〳〵聞こえて、今頃は影のやうなものが支度する時刻、と一人が言出しておの〳〵恐氣立ち、火鉢の傍に融けやらぬ女子の煮氷、ひたと寄添ひてなほ寒しと呟く折、勝手の棚に鼠の走る音に膽を冷して、後は哄然大笑になりけり。

十時を合圖に先を爭ひて寢床に辷りこみ、髮を厭はず額際まで引冠りて、一息に夜明まで寢通し、昨夜は不思議もなかりけるかと聞合へども、誰も寢通して知るものなし。奧の咳は奧樣はやお目覺と、お勝が寢間に行きて御容體を伺へば、昨夜は夜啼强からざりしよしなり。先はと安心の胸を撫て、和子樣も快方と家内さゞめきける夜はまた劇しく、打續きて四五夜夫婦も持餘すほど泣狂へば、藥も利かぬ時は利かぬものかな、と外には方術の無さに奧方は當惑の涕を流して醫者に無理をいへば、殿樣はまた疳を起して婢女どもの迷惑となりぬ。お勝の母は娘の容體如何と案じて見舞に來りたるが、其と聞くより、我子にとて持參の神水を、親の心は何方も一つ、差上げまして御苦勞を休めましたい、と折角の厚意を眼前に捨てもならざる、義理に飮ませし夕は夜啼暴かならず。之を不思議と勝手にては言囃せど、奧方は合點せず。

殘りの神水は捨よとの命に、兎も角も母の情の籠れるものを、と言葉を盡して願ひければ枕頭に置かれけり。

其夜また聲も絶えなむばかり啼出しけるに、賺す術計も種々盡して、其心とも無く有合ふ神水を啼兒の口に注ぎければ、頓て聲細りて苦もなげに寐入ぬ。

此事はお勝にも語らず。水の有る程試みけるに、三日目よりはたと夜啼止りて、不思議を驚くばかりなり。さりとは思はざれど腑に落ちかねて、此次第を窃に夫に話しければ、大いに笑はれて、藥の効能の見はれたるが、折好く打當りたるまでなり。實にもと思へば、なほお勝には語らざりしに、神水の無くなりたるを見着けて、これぞ偏に玉蓮樣の御利益。實は自分の大病の治りしもお蔭、と事々しく言立つるお勝が心の中は？

紅白毒饅頭後編

(二)

醫藥も効無かりし和子樣のお夜啼が、不思議にもはたと寢みたるは神水の効能、玉蓮樣の御利益なるを、御詣禮もせでは勿躰無し。御罰が當りて、再び和子樣の御身上に變などあらば、悔ゆとも復らぬ事なれば、此後の御信心はともかくも、今度は御禮詣を遊ばしまし、と先頃までは母の妄信に難を言しお勝が、宿下以來魂魄入換り、二言目には玉蓮樣といふやうになりて、懊惱勸めらるゝに奥方當惑して、何程いはるゝとも、さる愚しき事は信じがたし。もし神罰當りて此子が命を捨つるとも、必らず憾には思はざるべし。さほどいふものなら其方が代りて御禮詣せよ、と更に動くべき氣色は見えず。

お勝も之までなりと諦めたれど、奥方信者となりて折々參詣するにあらざれば、我一人して幾度も行く事は難かるべし。繁々行くと協はでは、かねての思ひ露ても其後の樂はなかるべし、と不滿なる顏色を見られて、代參は否かと奥方の言葉に、何のさる事の有るべきやうなし。早速正午後よりと。今日行くになれば、此後の事を思ふに遑あらず。胸は悸々氣は逸れども、化粧には念入りて午餐は吭に通らざるを、此新漬の菜の食頃にと勝手のものに惜まれ、此からと奥へ挨拶に行けば、車代とて下さるゝ小札を、陰に待受けたるお鐵が二かえ五かえと問ふ。奥樣は京の御生、勘定高き足駄の痕の二の字なりけり。

私の好きな何屋の翁飴は御通路、とお鐵の壁訴訟は、重ね〴〵散財の種となりて、これで逢ずに歸らば泣面に蜂、あ痛と躓く横合から、お安く召しませぬかといふ車夫は黒鴨仕立。見れば膝蔽の好さに惚れて賃を聞けば、高い〳〵。相當と思ふは躄者の乘りさうな襤褸車。いづれか氣に

稱ひしは無くて、うか〳〵一橋を入り、大藏省の裏門近く來りけるに、老實らしき中老漢の、服裝も車も見苦しからざるが聲を懸ぬ。少しは高しと想ひたれど、撰好しすぎて遂に乘はぐるもある事なり。足も大分疲れたる頃、と之に極めて乘れば、曳だしてから車夫は言語を懸け、此方樣は玉蓮樣御信心かといふ。

信心なりといへば少時默りて、何が御信心かと重ねて問はれ、何がとは知れた事玉蓮樣がといへば、老漢は額の汗を拭つゝ、未だ御存知ござりませぬか。

何を？何をかにをとまをして彼所の内幕は、大方の人は知る私窩子宿でござりまする！と駈ながらの大聲を來懸かる男聞尤めて、車の上の女に瞳を定めぬ。車夫は走りつゝなほ語りける、私は芝明船町のもの。五六軒先に經師屋ありて、一家内かねて玉蓮大信仰。何のかのと御寄進に入揚げて、いとゞ苦しがりながら譯も無く難有がりしに、今年の二月頃よ

り亭主病ふ身に一切藥を飮まで、敗酒を滴らした水ばかり搔食ひ、光明玉蓮と唱ふるも太儀に病氣を募らせ。母子は看病を餘所にして日參を怠らず。さるに驗の見えざるは、畢竟信心〱の足らぬ故、と神官輩に唆かされ、呻聲兩隣も迷惑なる病人を人手に委せ、母子揃うて今宵も參籠と騷ぎ、晝一寸歸れど染々介抱はせざるを、近所のもの見かねて意見せしより、それからは女房と娘更代の參籠。壽命のあるといふは恐ろしきもの哉、運好くも病氣は快方になりて、二、三、四、五月の末には健全の身體となりけるに、母子いづれの腹狀も可笑く、はや四月の懷胎と知れて、亭主烈火の如く怒り、相手を吐かせ、と二人並べて嚴しき折檻、裹みかねて淫行を白狀せしに、二人ともに重なる相手は玉蓮教會の神官といへば、重ならざるものは定めて參詣の中に紛れて、讀人不知とは淺ましや。

こゝに經師屋の亭主年來信心〱の夢覺め、床間に飾りたる榡の宮を踏碎き、三方御燈皿微塵に打壞して、男泣に無念の腕を拱き、これ皆我不心得か

らと、闇中の恥辱を其まゝに何事も勘辨し、亭主の胸一つにて事無く納まりしが、我も其より心を着けて世間の取沙汰を聞くに、隱れも無き私窩子宿。それとは知らずして參詣なさるゝ御方の氣毒さ。尊師とかいふ女郎は、何處の屎の骨か、憎い奴でござりまする。

（二）

先頃隙見せし小座敷の體裁に思ひ合せば、車夫の物語は然もあるべし。美男揃ひの神官、神子どもの媚めかしさ、皆其が爲の一粒撰と謎は解けて、恐ろしき姦計根深く、華族と觸るゝ瀧澤といふ人も、姿を變へたる囮か知れず。深入せば我も同じく經師屋の娘、と遽に怖氣立ちぬ。車夫に聞かざる前より、彼の教會の樣子に臭き處ありとは、お勝も薄々感付かざるにあらず。それぞ却て此身に取りて都合好きを喜び、神は口實にして旨い事仕放題の紛擾に紛れ、人知らず首尾は思ひのまゝ、と默慾の萌立つ心も未だ淫行の濁に染まず、無垢なる娘氣の流石に言ふに忍びざる他人の不德を聞けば、我を責めらるゝ心地して、愧を知か汗の背を流るゝ時、眠の攪めたらむごとく良心乍ち發りて、參るべき神にあらず。車を此處より回さむか、と幾度か車夫を呼ばむとすれば、憧るゝ瀧

澤の面影心に浮び、我と同じく思ひを運べる女郎の、今睦まじげに語らふ樣、眼に見ゆるごとく覺えて、見たさの募れば、其にも牽かされて留めぬ車は、善惡の岐に迷ふ心を載せて、一歩づゝ惡の境にふみ入りぬ。今日は此處まで出懸けたる次手なれば、ともかくも參詣だけして、其かあらぬか瀧澤の樣子を見屆けて歸らむ、と未練は藕の莖の折れても繋がる絲の、ふら〳〵として念の定まらざるに、車夫はなほ玉蓮敎を詰る言葉のはし〴〵、我不了簡の胸に徹へて、思ひとまれと餘所ながらの意見のごとく、切無き車に乘當てたるを悔みぬ。

車夫は敎會の門に轅を下ろし、內に入るお勝の後影を氣勢はしげに見送りて、子を持つ親の苦勞は盡きず、唉と轅を持上ぐる時、說敎の始まりたるか、鯨波をつくる光明玉蓮の聲に耳を欹て、屋棟に耀く金色の蓮華を睨めつけて立たりしが、汗もやうやく乾けば身內の寒さに、膝蔽取て肩に投懸け、車を曳て歸行きけり。

例のごとく聽衆堂に溢れて、足を容るべき地も無く、幾人か席に迷ひて後の方にうろ／＼する中に、お勝は母親の姿を認け、是はと驚きて身を片隅に潛め、人を小楯に母の方を窺ぎて、心に懸かる特別席を遙に見渡せば、いつに變らぬ見事さ、大丸白木越後屋が見本の袂をこゝに聯ねて眼も眩なる聽衆の服裝。車夫の話を始終眞實とせば、此席は志人の屑ばかりの集合、外貌を飾る內心は腐りて、錦繡に裹める腸樽の底溜。さりとは見えずして威儀嚴肅に、何事も御存じあるまじき顏して、淺ましきとは未だの事、野太き膽玉下民も及ばず。

人として色好まざらむはあるまじけれど、鳥獸とは類かはる心を持ちながら、邪淫は其罪人を殺すに同じ、と知りつゝの淫樂は、體にたまる惡血の所業と聞きしが、このやうなる方々にもさる惡血はあるものか。「愼まずはあるべからず」と折から尊師の御聲朗かなり。

お勝は特別席に瀧澤の姿見えざるに苛ち、何處にかと中腰になりてきよ

ろきよろと見廻し、母親の其處にゐる事も忘れ、ふと氣着きて又窘み、伸びつ、縮みつ、見れども、探せども、眼には入らざりけり。

（三）

今日說敎日に彼人の見えざる理なし、と心空になりて眼色も尋常ならず。此時罪も報も忘れ果てゝ、凝りたる一念は瀧澤の所在にあり。車夫の敎へは籠耳を拔けて、邸を出でし時の舊のお勝になりぬ。これほど探しても見えざるは、彼人今日は詣らざるに極まれり、と投首して後の柱に凭れ、物思はしき風情を隣席の老女に怪まれ、何處ぞ御氣分でもお惡くば、今戴きたての神水が此に、と瓶を出されて面目無く、然らぬよしと答ふれば、なほ怪しげなる顏して、何ぞ外に御苦勞ありての御參詣か。御信心が專でござりまする。おいとしや〳〵の後は光明玉蓮といひたげなり。

今までも見えざれば今日は見えられじ。當無き人を何時までか待たむ。徒勞と悔みて歸らむとせしが、遙の椽の障子に鳥影を見て、好辻占を賴

みに尚少し待つ氣になり、席正しき面白からぬ說教の長さ、と尊師の不出來なる顏をつく〴〵眺めて、家の橫町の下駄屋の下婢に生寫しの眼元。また特別席の眞中頃の奥樣が着たる小袖の色の好さ。家の奥樣にも春衣の出來る折にはお勸め申したし、と種々の事念ひ散らして待つ間に、說教もはや欲訖と覺ゆる頃、通路の幕をそと揚げて、特別席へは行かで、壇の前なる群集の端に坐たる人は、待ちました〳〵、瀧澤尹明！それと一目見たる時のお勝の顏色、大晦日に落せし金子を拾ひたるやうなりし。嬉悅ぞく〳〵頸元から風となりて、背筋を撫でまはる心地どうも堪らず、我にもあらで浮立つを、例の老女は彌訝かしみ、聲は懸けでじろ〳〵とお勝の顏を凝視るを、どうでもなさいといはぬばかり、衆目を忘れて覗きつ瞶しつ、其擧動額に嬉いと書たも同じ事なり。

說教訖みて聽衆歸を爭へば、母親に見られじ、とお勝は逸早く群集に紛れたれど、また瀧澤を見失はじ、と衆を搔分けて椽の方に出づれば、我

姿見よかしに小外套を臂に掛けて、其處に徘徊は其人なり。お勝は通り懸に一目見て、赧らむ顏を背けつゝ、足早に椽外まで立出でけるに、瀧澤も庭を眺むる風して椽に出でたり。

廣間には衆なほ彩しく殘りて、語らふ聲姦しく、椽に出たるも尠からざりし。其人傍に在れば、正しく顏を上げて見る事もならず、羞かしさにわざと遠かれば、瀧澤はさらぬ樣に裝しつゝ蹤を追ひて、間に士女はあれど二間に足らざるまでに近きぬ。

お勝はまじ〳〵と庭のみ眺めて、さりとは心着かで、何處にかと見やる顏のはたと合へば、瀧澤一寸挨拶して、最早お歸でござりまするか、と思ひも寄らぬ狎々しさに氣怯して、籠口の唯は聞えず、初々しく小腰を屈むれば、瀧澤はなほ二三歩々み寄りて、此間は久しくお見懸け申さゞりしが、今日はお一人かと結交久しき挨拶振。お勝は胸のみ頻に轟きて、嬉しさやら恐さやら思案に能はず。赫として頓に言葉も出でざりけり。

傍なる衆は樣子知らねば、お勝が思ふほどには思はずして、怪しとも見返らず、表に混雜の大分鎭まりたる頃、一人二人と去盡して、遺るは瀧澤とお勝のみ。

會はぬ前のお勝の心は、饑ゑたる鷹の餌を求むるごとく、瀧澤を見たらば抱着きて放れまじき勢なりしに、會へば何の事は無く、身を縮めて子猫の人に馴れざる風情なり。

瀧澤獨り工夫して樣々に話しかけても、十言いへば一言の、色も無ければ香も無く、さればかねて睨みたるは眼違にて、此女我に心あるにはあらざるかと見るに、遁もせねば遁むともせず、忉怛と去るに忍びざる氣色の中に、又それ云々宜しく御察しの廉ありとは、此道の本阿彌不思議の妙を得て、五年が間袖手して女で食ひし某と心に頷き、此處は寒し。彼方にてお茶一ツと誘へば、否にはあらぬ稻舟の、洲にかゝりてか少しく躊躇ふを、言葉を盡して義理に搦むれば、遁るゝ路の無きにあらねど、

なほ去りやらで世辭がましき遠慮する腹を見透し、口を酸くして根で勝ち、椽傳ひに奥深く伴れこみけり。

（四）

茶を一椀とて伴れらるゝは何處か、と心氣味惡く念ひつゝも、圖らざる首尾と嬉からぬにもあらで、今更遁げられぬを機會に、おづ〳〵瀧澤の跡に跟けば、長廊下の幾曲、右に左に左に右に迴り〳〵て、十五番と番札打てる小座敷の襖を開け、瀧澤先に入れども、お勝は閾の外に佇めば、人目に懸かりては拙し、早く此方へと急かれて、什麽なる事情か知らねど、我心にも後護き處あれば、異議なくお勝も座敷に入りて、立切る襖に背後の觸るほど端近に危坐まりて、席は距つれど瀧澤と對座、此座敷に二人の外に人はあらず。四隣寂にして庭に鳥の鳴聲、往來の車の音幽に聞えて、後は襖、前は障子、眼に入るものは瀧澤の姿ばかりなるに、羞かしさ心に充ちて身の所措無く、穴もあらば入りたし。夢になれと念ずる外は無かりけり。

今にして思へば、我ながら我膽の太さ。いかに好たる男に誘はるればとて、近己にもあらぬものに會釋も知らず、いふがまゝに率かれて、案内も知らぬ座敷に入込むのみか、此處はどうやら胡亂なる室なり。娘の身のかゝる所に來るべきにあらざるを。また此男の馴〳〵しげに此處に引込みたる心の内は、と遽に恐ろしくなりて、輕躁舉動をおのれと責めて、返らぬ事をしたり、今更いかに爲べき、と石の如く硬れる肉に冷汗の傳ふ心不快。

頸を縮め、俯むきて、膝の上に兩手を重ね、後悔の容おのづから愁然として樂まざるを訝かりて、大分お欝ぎでござりますな、と瀧澤が戲れかかる言語は耳の底に響きわたり。夢に惡鬼に叫ばれたらむ心地して、思はずぶる〳〵と身顫さへ出でけるに、なほ、其處は餘りに端近にてお話も出來にくし。只今裀をと、柱なる電鈴の鈕を壓され、長く留められては一大事、と義理も禮義も拋擲て、用事もありますればまた重ねて、今

日は是にてと挨拶する、お勝の調子遽に變りたるに驚き、慌てゝ駈寄り、之は何の事でござります。お勝先ともかくもお茶なりと召上りて、と手を執りて放さず。無理に引立てゝ上座に座らせ、まだ染々御挨拶もいたしませず、と名刺を出しかけて慇懃なる語氣。これが枷となりて、お勝は立端を失ひ、迷惑したる處に襖を開けて、十三ばかりなる男兒の玉の如く清なるが、白羽二重の小袖に濃紫の袴穿き、入口に兩手を支へて、瀧澤樣でござりましたか、御用はとあれば、お勝に物言ふとは蒟蒻と瓦ほど變りたる調子にて、豐丸か。茵と手爐と茶をもて參れ、といかさま華族めかしくおほせ出ださるれば、豐丸はつと額きて退出けり。
お勝は始終我心に咎められて、此狀人に見られなばと思ひ煩ふ折から、男兒の用聞きて去るまでは、かの名刺を打返して視むるは、羞しさに得上げぬ顏のやり所。先刻より絕えず俯ける頭の骨痛くなりて、切なき事謂はむ方なし。いかにとも辭を設けて此辛さを免れむ、と案じて案じ付

きて言出さむとすれば、話しかけられて機を失ひ、障子に映る日影は五時に近し、と愈心急きて矢も楯も堪らざるに、手爐は出る、茵は來る、茶は朱漆塗の茶臺にて恭しく薦められ、菓子は蒔繪の高坏に紅白の腰高饅頭。曾て覺えも無き姫君對遇は、狐に弄まれたるかと惑ふばかりなり。頓て瀧澤はかの豐丸を召して、晩餐の支度を囁くと見るより、お勝は益愕き、之は尋常事ならじと身をのみ案じて、瀧澤のいふ言は耳に入らず、上の空なる應答して、時ならぬに暇乞の挨拶懊惱、歸宅を急ぐ氣色の見ゆるは、扨は娘氣の戀はありながら、土俵際にて怯氣の出たるか、初心ものめ、此處を一息踐答へさせなば度胸座りて、旨い味を占めくさり、忘れられぬやうにして得さすべしと心可笑く、有るほどの秘術を盡し、舌頭に甘露を湛へて、心の落着くやうに話しかけても、一向恐怖を抱くお勝の心には、此時戀無く、目に瀧澤の姿無く、漸く車夫の物語を思ひ合せて、我は魔窟に墮ちたると悶ふる一念は、血路を開きて此處を竄れ

むとするの外あらざれば、瀧澤が得意の手管も空となりぬ。
此上の手段は酒といふ魔薬に、微醉心の浮き際に唆かさばと、幾度か電鈴を鳴らして支度を急がせむとすれど、豊丸の來らざるに焦慮て、瀧澤の出て行きたるは天の與、毒蛇の口を脱れたらむ想して、竊に座敷を脱出し、人目に懸からで拜殿まで來りたるに、奥の人聲！堪らず駈出し、足袋は汚しても其には換られぬ身ぞ。

（五）

それ阿彌陀も金で光る世に、神も御信心の輩無うては、御洗米も割麥と略され、花菱の御鏡も銹びては威德おのづから曇るべし。何は置きても信者の頭數を殖す事、是御託宣の大事たり。

抑我敎會には、華族豪商紳士高等官、其類種々に身分宜しき信者の數ある事、何千年來賣弘めたる佛門には其例珍しとするに足らざれども、我玉蓮如き新米の神にしては無類の大出來ならずや。

さりながら、石や瓦は多けれども玉は寡き世間に、錢持てるは錢無しの千が一にも當らず。日本國中の有りさうなる處を皆蒐めたらば知らぬ事、さうは參らで、東京の一部の財產家を寄せたりとて、此方から拍手鳴らすほど難有き御利益も無かるべし。其段になれば、一錢づゝでも百萬寄れば一萬圓。有象無象と罵るものゝ、實にや賴もしきは人數なり。

一條の絲は引きても斷るべきに、百條を縒れる紐は大石も釣るの譬喩。
人數を蒐めて人數に噪がせ、人數の錢を取るを商賣の極意とす。
爰に我敎會は思懸けなき大當して、信者永當々々と日每の群集、去るほどに神德遂著はれて、日出の勢ひ此期を外さず、なほ手に手を盡して人心を牽寄せ、信者を無上に殖して、永代繁昌の基礎を固むるこそ肝要なれ。
扨其信者の種類は、人數の多きを好めば、蛆の如く世に生ふ無智愚昧の下等動物を引入るゝを專とす。これ引入るゝに手易くて、而も一錢づゝ百萬の勘定なればなり。
いづれも一趣向の御工夫もあらば、敎會繁昌の源、續いては各位が懷中のお爲にもなる事なり。聊か腹藏無く所存の通りを語られよ。什麼々々と、隱坐敷の十疊に今宵密談の酒宴。上座に裀は綸子の三枚襲、寬々と坐したる尊師が、盃を取上げて座中を見回せば、神子神官二十五人整々

と兩列に居流れ、各自箸の手を休めて謹聽す。怪しからぬは男女の席打混りて、撞くやら抓るやら、好た同志の隣合とも見ゆるは、いかさま粹なる尊師の御計らひ、其代り我にも許せ、兩脇に鍾愛男の二粒撰。これぞ瀧澤尹明、宇佐美賢木、いづれも血氣二十七八、額に脂肪を浮かせて控へたり。

誰も應答の無き內、尊師の再びいひけるは、さりとて各位の趣向を無料取るも氣毒なれば、應分の褒美を出すべし。

一等賞は金二十圓、二等賞は十五圓、三等十圓、四等五圓、と蝦蟆虹を吐きて天を仰げば、一座哄と歡喜の聲を擧げて、神子等はちう〳〵鼠鳴。

衆を舎きて我は貌に申上ぐるほどの名案には候はねど、眞打は後の後、これは前座と思召して暫く御耳拝借といふを、誰やらむと一座〻之を見るに、容貌は申立にならざる代り、何事に因らず立案に妙を得て、大方の難題を懸けられても、「どでごんす」の格にて見る間に苦も無く埓を明けて、平素落を取らざることなく、尊師にも殊外重賓に思召さるゝ白木眞と、今神臭き名の舊時を聞けば、春風亭某の弟子の又弟子、百目蠟燭に面を曝らして、御客様方を南瓜糸瓜の皮とも思はず、兎角世中はお色氣、と黄な聲せし果とは見えぬ今の服裝。中啓をもて丁と席を拍ち、かの一山百文の有象無象を噪がせ、神前を賑はし、賽錢箱を重くする計畧も種々あれど、其中優れて確に是ならばと思はしきは稀なり。

熟愚案を回らすに、無智の婦女子が上の空になりて、騒ぐものゝ第一は

芝居に限れり。其芝居を悦ぶ意は、狂言見るにあらず、藝見るにあらず、美の好たのと俳優の色を愛づるなり。その證據には、傳聞く中村福助が家に商ふ白粉洗粉は、一日にして能く十圓を賣るとかや。（此時神子の中に不然といふ聲聞こゆ）されども福助自身に出て商ふ事を懊惱おもひ、後には弟子に代りて賣らしめけるに、客足忽ち絶えて三日に一人も來るものなかりし。扨はと又々自身に商賣を始むれば、繁昌舊時に回たりといへば、俳優といふ奴は薩摩芋の再生でゞもある事か、小癪に障るほど女に好かるゝ處が此方の道具。之を飾りて婦女子を牽寄せんは、油揚鼠を以て狐を釣り、天蓼木を焚きて猫を呼び、紙縷を入れて嚔を誘ふよりも易かるべし。

扨その俳優とても、我童權十郎には及ばず、乃至團八荒次郎もなほ過ぎたり。此處を去ること十餘町にして、木戸二三錢なる小劇場の屯する所あり。

其四面には長芋の如き、白瓜の如き、或は馬脚、猪頭、「いらせられませう」「申上げます」何のかのとて刎舞ふ輩眉毛を絲のごとくし、面皮を鰶の背よりも光らせ、乳母子守に色目の大安賣するもの、無慮百餘人にも及ぶべし。

此等は皆その御近所の御娘子様方が、簪根懸洋銀の指環の御紋となりて、御執心御最負斜ならざる役者なれば、此中にても純帳福助の噂高さ、中村福雀といふ濡事師を頼み、晝は芝居に暇無き身の夜中を買切り、表は信心と見せて毎日夕景より參詣させ、十時頃まで拜殿よき處は住はせて、眉をぴりゝの身を反らせ、ハテ利益ある神様じやなア、などゝ好みの聲を立てさせなば、それ役者が通ると聞けば、午睡する老夫どのを踏跨ぎても、老女までが駈けて出る心に何堪るべき、神をも憚らず珠數繋になりて、くる〳〵何程來る、ざつと算りて三萬三千三百三十三疋。山王様のさるほどに夜毎の繁昌疑ひなからむ。

これぞ昔楠正成が、千窟の城の朝霧に、立ならべたる藁人形、敵の射る箭を只取の計略。十圓が物はござるべし。

（七）

白木の發議に續きて我も〳〵と、有る立案を韞まばこそ、無い智惠まで絞りて、當意即不妙の建議區々なれど、いづれも褒美の金が欲しさの譃言ばかり、聞くに腹の皮の捻れる子供欺。其手を大人が喰ふものか、と尊師の耳は白木の趣向に傾き、罵り噪ぐ一坐を制して、一等賞は早定りぬ。

役者を囮にして女子を呼ぶとは天晴妙計、恐らく此右に出づる立案はあるまじ。よしや有りとても、白木の趣向は我意を得たれば、之を今宵の二十圓として、評議は輟めて酒にすべし。

扨白木に問はむ。其中村福雀とかいふ役者を手に入れ、毎夜參詣の談判は其方が請負ぞや。明日にも出向きて早速取極めよ、計は拙なりとも速なるを善とすとあれば、白木眞棚から落ちたる牡丹餅より、最少し旨い

目を見る、廿圓樣の御來降と隨喜の相好打崩れて、委細畏まりて候と平伏すれば、尊師近うと招きて、折目も無き五圓紙幣四枚、請取れと投出す。

疊の上は勿體なやと慌たゞしく、取上げ、兩手に載せて推戴き、內懷に納めて坐に還るを、一同きよろりと、鳶めに油揚攫はれた顏色。力は落すな。今日にも限らず、是はといふほどの立案を申出づるものあらば、其出來に因り等に順ひ、何時にても褒美の高は今言ひし通りなれば、隨分肝膽を摧きて玉蓮樣の御爲になるやうな事を工夫せよ。

さあ／＼酒が奮まぬ。十寸穗殿平常のやうに飮ましやらぬか。酌が氣に入らずば遠慮なしに安栗を側に引着けたまへ。空々しい顏しても知てゐるぞえ。鼎殿謳はしやらぬか。小車、瑞枝、磯菜も三味彈け噪げ、浮かぬ／＼と尊師の言葉に、謳うても褒美は出まいと呟き、やがて妙音喝采の二上り新內。神妙に聽きゐるも少時の間、いつか三味線幾所に散りて、

思ひ〳〵の歌謡し。吭も疲れてこれからは手足の働き。闇雲に騷げと寒夜を恐れぬ酒機嫌、蛸が月夜に浪を出てゝ、畑の芋を堀越貢が陰藝の始まり。赤裸になりて坐敷の眞中に躍出て、常から尖口をいとゞ尖らせ、鼻を皺めて眼を瞋らせ、合方入の芋堀の身振、可笑さ堪らず、涙を流して笑ひ轉け、免せ〳〵といはるゝ大當り。

我も負けじと其次に現はれたるは大船梶麿、向鉢巻裙褰片肌脱となりて、沖の闇いのにと大聲揚ぐれば、心得て引出す二挺三味線に浮かされ、こりや面白しと又一人、男ばかりは雜風景。之を一寸から借りて、躍れ躍れと喰て蒐り、神子隨一の容色美、下枝樣の「かつぽれ」見よと無體に肌を脱がすれば、牡丹忽ち紅なる長襦袢の袂ほら〳〵。あれよと遁げまはるを座敷中逐ひかけ、遂に捉ておさへて、さあどうだ。躍らずば飲ませると德利片手に責められて、免れぬ所と澁々立上り、知らぬものを無理なと迷惑さうな顏を、情ある神官の一人が見かねて、殺生な事をしたまふ

なといへば、梶鷹首を打掉り、下枝殿躍などは知らぬとは此大船がいはしませぬ、と隠されぬ身上は十四の年まで赤坂の半玉、その名残を爰にいざやと躍れば、尊師も目鏡を懸けて、絶妙々々。

（八）

白木眞教會の抱へ車に乘りて、二重外套に焦茶の高帽といふ服裝。小形の手鞄は外に出る毎に放す事なけれど、いつも中に物らしき物のある例を見ざるに、今日こそは昨夜の二十圓と笑はれて出でたるが、中村福雀とは識る顏なり。彼も苦しがりの張本、千に一も此相談に否はいふまじ。喜ばせて酒なりとも奢らすべき目算して飛込めば、今目覺めて盥嗽する處、これは珍らしやと奥へ通されぬ。

次間に廿歳ばかりの娘は、これまでに見馴れぬ女、一寸見たばかりなれども萬更ならぬ代物。はて心得ぬ、と入らざる苦勞も女子ゆゑなり。

福雀赤き目を摩り〳〵座に着きて、今日は何として早朝より。おつと、此方の用よりまづ開きたきは、近頃之が出來たかと小指を出せば、我商賣には大の禁物、小皺の出るまでも持つ事ではない、といはせも果てず、

さらばと隣を指さし、彼は何物。親方返事は何と〳〵。見露はされしが殘念なれど、此方なれば明すべし、とひそ〳〵聲して、彼は麻布邊の古着屋の娘、二年越の贔屓が高じ、數度の馴染が不了簡の發端、二三日前に家を駈出し、何程いうても歸らぬとすねて、本宅より人の足を運ぶこと、昨日までに四度に及べとも、肯かぬに持餘し、あのまゝに捨ては置けど、いつまでも居られては迷惑、と堅氣なる語氣。其は大嘘。金にする氣で留められるだけ留めて置くとは此眼で睨むだ。　やれ聲高しと制すれば、相も變らぬ其凄い腕を見懸けて、賴むやうな儲けさせるやうな口がある。まづ一杯附けてもよからう。　樂屋入は午前、相手は出來ねど、と弟子を呼びて酒の用意を急がせ、其儲口は？　三四時間で日一圓の內職、とばかりにては合點が行くまじ。委細は云々と語れば、福雀莞爾と打笑み、日一圓は月三十圓。此暮の凌ぎの足ともなるべし。相談が定るからは一日延びて一圓の損。早速今夜から參詣に取懸かり、

玉蓮樣と我との人氣競。譯も無い事萬々承知とあれば、扨手附は今宵手づから親玉が渡すとの事なるが、大方話にも聞きつらむ。その老女は舊時さる屋敷方のお末から諸國を流浪し、何して來たやら性の知れぬ大曲者、男勝りの奸才長けて、惡事に懸けては拔目なき狼婆の、人間らしき志ほらしさは男に脆く、三度の膳に平は長芋、大方は之にて知るべし。野暮に底の底まで敎ずとも、如才無き此方の事なれば、定額の外の餘祿は働き次第。金は弗箱に夜啼するほど確に有れば、好い株劵握つた氣で身に染みて勤めて見よ、と馳走酒の禮心に口傳を許せば、福雀眼前に千圓札のちらつく如き心地して、芝居だに無くばこれからでも諂らうものを。最早時刻と弟子の報知に、さらば〳〵と別行く。

（九）

此立案時を夏の夕なりせば、納涼をかねていとゞ人の出盛るべきに、冬の夜の口惜さは、神より佛より巨燵焼芋の尊く、寒氣に負けて出無性勝の折から、信に願ある人の外は詣るものゝ絶々なるを、鈍帳福助の素顔一つが何程の藥になるべき。全く、冬と夏とを顚倒たる白木が智惠立、これ寒中に團扇の居開、仕損じ掌を指すが如し、と儕輩の陰言は褒美取外しの遺恨、と白木は氣にも留ず。別に一策を案じて、寒の夜詣のものゝ爲に、特に隔夜說敎を開く旨を貼出し、其夜は門に高張を點し、御燈の光神前賑々しく、事有り氣に粧ひて、人目の着きやすき處に中村福雀を坐ゑたるに、知らぬものも緋の袘裏の媚かしき姿に役者と見て、老年をしたる女房までが、含羞みて傍へ寄着かず。御存じのお女中方は、人の後から珍しげに眺めて打噪ぐばかりなり。

やう〳〵說敎始まらむとすれば、衆多くなりて席も次第に塞がり、其近所にはいつか若き女輩どもの聚りたる敏捷。此等の口が廣告になりて、思ふ壼に入る人足繁く翌夜からの參詣。その賽錢神水料を算用すれば、役者の顏代外に蠟燭油錢、其他の諸雜費を引去りて、幾分の利益はさせる事にあらねど、人氣の增すを第一と、計略圖に當りて尊師の滿足、白木が鼻は二束、此通りといふ間十日も經たずして、福雀の素顏も飽かれ、日毎に夜の冴增るに、僞信心漸く剝げて、初夜の半分も人は來ずなりにけり。

白木が面目を失ふより、なほ氣毒なるは中村福雀丈、空腹に飯一膳の物足らぬ思ひ、果敢なや今日か明日は御暇を賜はるべき身上。扨は大分の算用違ひ、月卅圓の覺悟で近頃贅澤の仕過し、後の祟を氣遣ひつ、此時ぞ白木が口傳の虎の卷、と尊師に擦込む胡麻の臭、四邊の目鼻に染みわたるばかりなれども、昵近瀧澤宇佐美目を圓くして各自持口を固むれば、

とても之は成らぬ事に諦めて、慾を捨つれば色となる心の秤、神子の中に下枝といふ女は、間違うて女房にしても人に自慢のなるほどありて、此家の寶と見るほど手に入るゝに効あり、と機會を待てども時の到らざるに、賽錢の音は夜毎に幽になりゆきて、福雀が傳らぬ鼻も白みてぞ見えける。

我をと毎夜招ばるゝ効はなくて、夕暮に僅少の參詣はあれども、說敎聽くものは其十分一。廣間席に餘りて疊寒く、處々の人影さながら松島の景色に對して、歌俳諧は興もあるべし、說敎は一向張合無く、尊師も力拔けて、どうもならぬと白木に愚痴を吐せども、今更已められぬ仕誼となりて、聽く人よりは說く人の眠たさに、三十分ばかりにして形附くれば、冬の夜長の八時にもならず。福雀も歸りて用無き身の、誘はるゝままに白木の部屋に入込み、痴談の種も大方盡くる頃、牛鍋にて熱燗一杯、此勢で歸れと飮始め、思はず醉うたと暇乞も鼻唄まじり、廊下の闇をふらふら辿りて、拜殿の口まで來たる時、神子の部屋の方に手燭の光、此方に來る人の顏其火影に見えて、優曇華の花咲きかゝる下枝なり。福雀頷きて、小走りに近き座敷に駈入り、細目に明けて待ちかくる襖の

陰に、十人前の裀に重ね〳〵の仕合と腰を懸けて、足音の近づくを樂み、今や〳〵と頸を延して待つに來らず。いかゞせしと顏を出して窺へば、先刻に見し處に立留りて、神子の瑞枝と語らふなりけり。空座敷の寒さに身顫ひして、長いぞ〳〵と大欠一つ出れば、後から三つ四つ、いつかとろりと眠りて、隙洩る風に攪され、鼻の捥げるほどはつ嚔、人や聞かむと氣遣ひて、また顏を出せば、待ちに待ちたる手燭の火は見えずして、戀の闇は物凄く、また火事か、一打警鐘の音霜に凍りて陰々〳〵と響きぬ。

不覺の睡事の敗。大不出來をやりたるぞ。長くは睡らざりしと想へども四面の此間寂。夜は更けたりと覺ゆるぞ心元無き。はや戸鎖して寐たる人を起さむは氣毒なり。白木の部屋に一泊せむと座敷を出でゝ、足探手探に廊下を傳うて、行けども〳〵其ぞと想はしき處に出でず。之を芝居てすれば、敵なり知人なり出で來て探合ひ、ヤヽとか南無三と

か、善かれ惡かれ形の附く方もあれ。案內覺束なき家の、奧も知られず濶き中を、まご〳〵徘ひ行く間に風引きて夜の明くるのみ。狼狽て柱に頭を打着け、行過ぎて流元に轉落ちざるを仕合にして、有合の座敷に入り、戶棚の中になりとも一夜を明かし、早朝人に知られぬ間に歸るが上策。されども此處は那邊か、杖をはなれたる盲人滅法難儀の折から、誰か小便に起出づるものはあらざるか。この寒夜に冷ゆる奴の一人二人はありさうなもの、と恨の一念徹りてや、遙の方の襖の隙より、光線の射すを見たる時の嬉しさ。

今宵の一圓は差上げてもなか〳〵苦しからざる心地して、火影を目標に急げば、間近くなる頃襖開きて、立出づる女の寐衣姿しどけなく、燈火持つ手も撓ゆげに寢惚眼を摩り〳〵、彼方へ行くを誰とも判然に見識りかねたれど、此女に賴みて火を借り、白木の部屋を聞かばや、と歸りを待ちて入口に佇めば、こゝに一列神子の部屋の中は、僕も食傷やすべき

明朝之を語らば、夜とは想はれぬ賑はしさ。齒切寢返寢言鼾、夢の色々。誰も嘘と澄ます顔目に見えて可笑かりき。やがて足音して歸來る女と顔を見合へば、此方ゆゑにかゝる難儀も下枝樣！おやまあ福雀樣！互ひにおや〳〵〳〵。

（十二）

裏の井戸なる釣瓶竿に、霜は未だ消えざる曉の寒さを、面は淺黃縮緬のお高祖頭巾に防ぎ、黑の帽子を其上に冠りて、肩被に身を裹みたる男玉蓮敎會の裏門より出づれば、寢衣姿の女門外まで見送りて、二三間行きたる男を卒然逐懸け、肩に縋りて、忘れると唯は置かぬぞえと突遣れば、そんな邪見な女に思ひを遺すものか、と毒口吐きて駈出せば、女は笑顏に袖して門に入りけり。

夜明けて掃除男階段の下なる男の下駄を認けて、事務所に通ずれば、誰か遺れたる。杖傘は忘るゝといふ事あれど、下駄は忘られぬ理なり。見覺え無きかと衆人聚りて見るに識るものなし。

昨夜の事を憶へば、媚かしき鼻緖にも著し、これ福雀の木履なるべし。

白木の部屋にて醉うて、其處等に今朝までも仆れては居らざるか、と探

せども影なし。

醉うても木履を置遣るゝといふ上戸はあらじ。察するに神子の中に、と可愛がられざる神官の一人が言出せば、いづれも其は何とも知れぬと噪ぎて、神子の顔だに見れば誰彼の用捨無く、お前か〳〵と弄れば、夢にも知らぬものは腹立つもあり、迷惑するもありて、樣子ばかりを見れば、どれも潔白さうな女ばかり。此中に一人はどうでも食隱の口を拭てゐるものあるぞ、と自家が嘗てわざと戸惑せし事などは棚に上げて、法界悋氣の口懊惱、自然尊師の耳に入りたれど、聢としたる證據無さに噂に寢みて、この詮義女の方には難しければ、目を睨て福雀の擧動を見よ。今宵彼奴もし來らずば、我等の嫌疑は事實なり、と待てばのそりと此夕も來りけり。

常に異りて、出て來る神官も〳〵、皆我顔を事ありげに見るに氣味惡く、扨は心に懸かる下駄の一條より、昨夜の始末露顯に及びたるか。いよい

よ日一圓も今宵限りに御秡箱と胸を据ゑて、八時過には參詣全く絶えたる頃、何食はぬ顏して白木の部屋に行き、昨夜の挨拶して此方から先に下駄の事をいへば、彼ゆゑに云々と浮名の次第を語り、何として遺れたる。はや手に入れたか。對手は誰だといへば、懸直なしの大酩酊。いかに索せども木履見當らず、まゝよと足袋跣にて飛出し、門外から車に乘りて歸りしが、其樣な旨い話は氣毒ながら夢にも見ざりし。嘘だ。嘘でない。詐だ。大信實と水掛論の乾かぬ處へ、神官五七人口々に成駒屋大當りと噪ぎ込めば、飛だ迷惑と福雀益眞顏になり、參詣の女ならば相手は嫌はじ。彼をと指揮もあらば、石で出來たる奥樣にても孃樣にても、屹度墮して御覽に入るべし。其爲にお抱への此方が、いかに閒なる身なりとて、仲間を喰ふやうな事は、玉蓮樣も照覽あれ、爲ざる男と立派なる言分。手懸りの木履にも言草附けて、外には責道具もあらざれば、疑團解けねど其なりに事濟みぬ。

濟まぬは下枝の心の中。人の噪ぐに驚かされて、姿は見れども側へも寄られず。白木の部屋に大勢集りて、罵り笑ふ聲は我戀人を苛むなるべし。樣子を聽かむと竊に廊下に忍び出づれど、なほ距たりたれば聲は明かに聞えず。此處の闇に身を陰して歸りを待ち、一寸なりとも會うて言ひたき事ある、此心も知らで長話も好加減にして、早く歸れかしと悶ふるほど待ちける効も無く、やれ嬉しや歸ると見れば、福雀の後に七八人どやどやと燒餠の一團、歸際の首尾もやと入らざる苦勞して見送に跟けば、視眼覰鼻恐ろしや、身の大事と拔足して小陰に入り、さらぬ方へ廻道して我部屋に還りぬ。

其折ともかくもせざりし下駄一足が戀の邪魔となりて、福雀の影身を放れぬ人目の嚴しさに、夜毎に來てはつい鼻前にゐれど、餘所々々しく過す思ひは、逢はで惱むにも劣らず、心は苦しかりけり。

かくても再回の首尾は、此家にてはなり難かるべし。外へ出らるゝ此身ならば、底知ぬ谷に架ける獨木橋を渡りつゝ、菓子喰ふやうな戀はすまじけれど、我にも限らず、此家にゐるほどの神子は籠中の鳥ぞかし。鐵鎖で繋れぬばかりの囚人とは、綺羅衣て脂粉して、笑うて噪ぐ我等を、見る人はあるまじけれど、內幕聞かば可憐ともおもふべし。

抑も此教會を立てたる、尊師の主意の深き事は知らねども、我等の見る所にては、神を表面に飾れる私窩子宿なり。

女の色ばかり賣るは不自由なりとて、女には又男を勸め、人の妻も娘も

嫌はず、金ずくにて伽するものを神官に裝へ、我等は神子にして男に玩ませ、老女め一人懷中を暖めて、爲たいまゝの榮耀はすれど、固より其筋の目を眩ましたる曲事なれば、事の露顯を恐れて其々に手を廻し、用心屆きて今日までも無事に過ぎぬ。されば我等を雇ふに、向何年と定めて身代を拂ひ、證文の外の約束は、年季中は親兄弟にも此方から會ひに行く事を許さず。いかなる事のありとも、一切外出を禁じたるは、事の泄れむを氣遣ふゆゑなり。年季の間は、親が死ぬとも伯母が煩ふとも、門の外の土は踐むと協はず、生きながら地獄に落ちたる身なれば、死ぬるほど逢ひたくても外へは出難く、されぱとて此家にて首尾は覺束なし。之を思へば、野飼の身は自由が利くだけも藝者は德なりしを、强慾なる叔父の食物となりて、十六の春赤坂を無理に退かされ、吉原に賣るといふを、命を取られても不肯と言張りければ、世話する人のありて、此處

に賣られたる年季は五年。此先なほ二年は長し。それも女郎するほどの苦勞とてはあらず、藝者するほどの氣骨も折れず、些細なれども小遣もらひ、糊口は先方任にして、前借の種となるは衣類のみ。地獄の中にては極樂ともいふべき處なれば、さして外に用なき身の、少しの不自由は辛抱して勤むるに苦はなけれど、其は思ふ男の出來ざる前の思慮。今福雀といふ愛き人を持てる身には、之に百倍の苦勞も氣骨も厭はぬ換り、好た男とは思ふさま逢引のなるやうな、戀は爲放題の身上こそ願はしけれ。言うても繰言は無益の物思ひ。二百圓に餘る前借背負ふ身は、釣鐘に伏せられたるも同じ事、身動かなはぬ不運は諦めて、其に換ふる樂の出來たと思へば、咲く傍から花に嵐、此邪魔無しにどうかならぬ物か。古手なれども思ひ着きたる事を一筆認め、今宵手渡さむと暮るを待ちて機會を覗ひ、說教濟みて歸る衆の混雜に紛れ、內のもの丶目を忍びて聢と握らせければ、此文流石に心懸りとなりて直に歸りね。

下枝は人の寐息を覗ひ、裏の木戸の締を外し、待つ夜は更けて寐床にさへ寒さに、戸外を來る人はさぞ、と猫火鉢に床を溫め、鐵瓶に湯は沸えて燗も直附くまでにして、あれほどの文を何と讀みたる。來ぬのか、人の氣も知らで。

（十三）

其夜も更けて忍男の思ひは盡きざれど、明方近き空を氣遣ひて、はや歸らむと身支度を急げば、逢ふには附物の別れなれど、いつとても同じ思ひに惜まれて、言遺したる事二ツばかりあり、と外套被て帽子まで冠りたる男を無理に坐らせ、ひそ〳〵話壁隣なる安栗が不圖寐覺の耳に入りて聞捨て難く、床を匍出て、何者か歸姿を見むと襖を少し開けて候へば、雜炊の塊の如き人影の出づるを、其と見る間に廊下の闇に消えて、足音も聞えずなりにけり。

下枝は此朝寐忘れて人に呼覺まされ、慌てゝ起出づる處へ御用召。もしやと胸躍り、食事は後にして不取敢尊師の居間に出づれば、今お目覺かと皺面に冷やかなる笑ひ。少時後の言葉は無くて、獨り舌鼓して茶を啜りぬ。

何の御用と尋ぬれば、老女は下枝の顔を屹と見て、昨夜のお客は何處のお方ぞ。人も寐鎮まりたる夜更に、何用あるお客様が、其が聞きたさに呼びましたと空嘯けば、下枝は思ひも寄らざる顔して、昨夜のお客様とは何所に參られし御方か、下枝は少しも知らぬ事。知てゐるとは横着者の口からも流石に吐かされまじ。假令吐かさぬまでも確の證據は、忍合ふ處を眼に見し者のあるぞ。さる不義を御尊師が見しとならば是非はいはじ。遺恨などあるものゝ告口を、一圖に信としたまふか、情無やと涙を落せば、人の告口を信とする我にあらず。二重外套被たる男を裏門より送出せしを確に見たり。我が確に見たるぞ。かくてもなほ知らぬと吐すか。吐かせ〳〵と煙管の笞股の邊を三四つ毆たれ、発したまへ、この濡衣を干すよしなきかと泣けば、老女は冷笑ひ、馬鹿女、男旱魅する家に棲みはせじ。對手が欲しくば神官部屋を覗いて見よ。逞しき男が十人でも十五人でも轉げてゐる中に、どれなりと撰取にして樂むと

も、此老女は眼を瞑りて粋を通し、家内の不義は默許に見るも、世間を忍びて色を賣らする弱身あれば、金出して傭ひたる奉公人にも氣兼して、入らざる義理をも立つるぞかし。

心冝き老女と侮りて、人も無げなる我儘の擧動、此上募らば前借を踏倒し、駈落して男の傍は知れた事なり。さう旨くは問屋で卸さぬ。對手を吐かさぬならば吐かさぬでよし、罪も科もおのれに在れば、可愛男の爲と辛抱して、當分鹽を舐めくされ、と奥の一間に押籠められ、此寒さに火氣も無く、三度の食事は名ばかりの獻立。わざと焦飯を盛り。澤庵の尻尾三切に鯖の頭三ツばかり。誰が喰餘しか、見るに胸惡し。朝は臺所に暖かき味噌汁の香鼻に入りて、此寒凌ぎにあれを一杯と吭の鳴る目前に、ほろ〳〵と凍れる冷飯に、日和水のやうなる湯をあてがはれ、之も空腹の否はいはず。食へば胃を痛めて一日の心不快。夜は燈火も此處には入れずして、袷のやうなる敷蒲團の、處々裂けて垢に光り、異な香の

するに、同じほどの夜衣一枚。フラテルの枕當して、湯婆まで入れて寐し身は、抓りても感かぬほどに冷亘り、此苛らしき仕方を怨みて、涙出づれば頬の寒し。潜りて睡らむとすれば、爪頭外に出でゝ、裾より風の入るに堪らず、幾度か反側して悶ふる間に、疲れて纔にまどろめば、いつもの朝寐鳥より先に覺めて、庭の梅までかゝる日影の此處には達かず、のそ〳〵と椽を傳ふ猫までが羨ましかりき。

隱したりとて尊師に知られたる事を、いらざる意地よりかゝる苦艱をうけ、心中立にもならざるを、我にもあらず愚なる事なり、と折よく前を過ぎて深切なる言葉をかけてくれし神官を呼留め、身の婬行を後悔して、相手の名も始終の樣子も白狀せむほどに、此仕置をゆるさるゝやう、尊師まで取次ぎたまへと歎きければ、よくぞ其處に氣が着かれたる。あの氣性なれば善惡ともに悖はぬが手なり。但ひたあやまりに誤りて、しほらしき顏色をだに見せたまはゞ、尊師の機嫌は即坐に直るべし。少時待

ちたまへ、只今取次ぎて進ずべしとて其人は去りぬ。頓て事務の某鍵を持來り、一間の戸を開けて、尊師のお召なり。御居間までといひ捨てゝ行きぬ。足掛け四日目にて浮世に出づる嬉しさ。亂れたる髮も姿もわざと繕はず、實よりは疲れたる體にもてなし、足元も覺束なげに尊師の居間に入るより、仆るゝやうに領伏して、泣聲まじりに段々の不埒を侘び、相手の名まで白狀して、向後の身をきつと愼まむと誓へば、老女は可ともいはず、不可ともいはで、悔悟したるからは窮命は釋すべし。部屋へ退がりませう、と金緣の眼鏡越しに、誰も懼るゝ睨みを與れて、此老女が無事では放すまじきに、然りとは嬉しや、部屋に還りて神妙なる顏して日を暮らし、深夜に尊師の居間に忍び入り、弗箱の鍵の在所も知れば二百五十圓摑出し、我室の窓を破りて、背負はるゝほどの衣類一包、提げらるゝほどの一包には目ぼしき品を搔入れ、身も共に其處より脫けて、闇に紛れてぞ失せにける。

夏小袖

一寸の間

娘　おそめ
店の者　和七

和七　お孃樣、あなた大相鬱ぎの虫で、どうなさいました、待人不來といふやうな姿でございますね、どうかなさいましたか、もし、
と袖を牽けども、お染は知らぬ顏で、じつと考へてゐる、
和七　分りました、あなたは私とかういふ譯におなんなすつたのを、つまらない眞似をしたと、今更悔むでゐらつしやるのですね、どうせ左樣でございましやう、私風情のやうなものは、お否におなんなさるのも御尤でございます、
そめ　あれ和七や、さういふ譯ぢやないのだよ、
和七　えゝ、どうせさういふ譯ぢやございますまいよ、

と拗てくるりと後向になる、

そめ　あれさ、そんなに怒らなくつてもいゝぢやないか、そんな譯ぢやないつていふのに、

和七　そんなら、どんな譯なのでございます、

そめ　あのね、私はね、お前とね、かういふね、譯にね、なつたのはね、

和七　どうも「ね」ばかり多くつて、さつぱり理が分りませんね、

そめ　それ御覧、お前だつて「ね」を附けるぢやないか、

和七　此「ね」は入用の「ね」で、貴孃のやうな不用の「ね」とは違ふのでございます、

そめ　お前の「ね」はえらうございますよ、

和七　まあそんな事をおつしやらずと、後をお話しなさいまし、

そめ　あのね、お前とかういふ譯になつたのは嬉しいけれどね、いくらお迭ひに思合つても、とても夫婦にはなれまいと思つてね、それが私は苦勞でならないよ、

和七　へえ、それは一躰どういふ譯でございます、

そめ　父樣はあの通りだし、力に成て口をきいてくれる親類は無し、それよりまだ苦勞になるのは、お前の變心……。

和七　變心？　誰が、私が？　何日變心をいたしました、いゝえさ、何時の何日に變心をいたしましたよ、お孃樣それを聞きましやう、はい、其譯を聞きましやうかい、私はどんな事があらうとも、貴孃の事ばかりは、死でも忘れません、生れかはつても忘れはいたしません、七生までも忘れません、その位にまで念つてゐるものを、何を證據に變心なんて、多度そんな事をおつしやいまし、

そめ　口ぢやいくら立派な事をおいひでも、

和七　どういたしました、

そめ　ちやあんと知れるよ、

和七　どうして知れます、

そめ　ちやあんと知れるよ、

和七　唯「ちやあんと知れる」では通りません、かういふ仕打があつたとか、こんな素振があつたとか、確な處をおつしやつて下さい、

そめ　さうさ、あんな仕打もあつたし、あんな素振もあつたし、あんな事だの、あんな事だの、あるとも〳〵、

和七　獨で承知してばかりゐらつしやらずと、はつきりと分るやうにおつしやいまし、

そめ　いはなくつても私には分つてゐるよ、

和七　おつしやれますまい、おつしやれる理がない、まあそんな事をおつしやつて、多度私をおいぢめなさるのが宜しいのでございます、嘸好お慰みになりましやう、私は馬鹿でございますから。

そめ　和七、和七つてば、

和七　私は馬鹿といふ名でございます、

そめ　そんな事をいはないで、和七い、

和七　和七は今朝ほど出まして、留守でございます、

そめ　もうそんな事をいはずに、返事をしておくれよう、

和七　和七は昨夜から出て未だ歸りません、何だかお孃樣に嫌はれたとかいつて、それを苦に病でをりましたが、あゝいふ氣の小さい男のことでございますから、惡くすると、身でも投げたかも知れません、可哀さうな事をしましたよ、

そめ　緣起の惡い、もうそんな事をおいひでないよ、

和七　いはせる人があるから申します、

と慳貪にいふ、お染はづゝと寄て、和七の中指と食指を握て、

そめ　私が惡かつたから堪忍しておくれ、と曳たり、振たり、

和七　私は何も貴孃に、堪忍してくれと、あやまられます覺はございません、私は奉公人、あなたは御主人樣、その御主人の貴孃が、蹋やうと撲

かうと、どうしやうと御勝手次第、何もそんなにお詫をなさることはございません、

そめ　そんな事をいはないで、眞箇に堪忍しておくれつてば、今私のいつた事は皆虚言で、お前が變心をしないのは、ようく知てゐるよ、冗談にいつたのだから、どうぞ堪忍しておくれつてば、よう和七、

和七　夫ぢやあ、今おつしやつたのは御冗談でございますか、

そめ　あゝ、　と氣毒さうな顔、

和七　あなたも…………、

とお染の膝をぐつと抓る、

そめ　あいたゝ、

和七　好加減になさいまし、惡い洒落をなさる、私は眞に受けました、

そめ　覺えがあるからさ、

和七　そこらで口説はやめにして、ちと身に染みたお話をしやうぢやござ

いませんか、

そめ　それぢやね、身に染みた話をするが、お前私が可愛いとおもうなら、辛からうけれど、後生だから父様の御機嫌を取て、何でも彼でも和七和七といはれるやうに、御氣入になつておくれでなくつちやいけないよ、

和七　へえ、それはもう萬々呑込むで、お氣に悖はないやうに、御意に入るやうにと、精々働いてやつてをる積りでございます、

そめ　それから又、兄様にも取入てね、可愛がられるやうにしておくれよ、父様は老年の事だから、お前との譯なんぞに氣の附く氣遣ひは無いけれど、あゝいふ兄様の事だからね、お前がお氣入でさへあれは、私達の味方になつておくれに違ひないから、兄様にも父様にも、双方へも甘く取入て……、

和七　それは困ますね、旦那樣と若旦那とは、まるで氣性が違つてゐらつしやるのですから、片方のお氣に入れば、片方の御氣に入らず、彼方立

てれば此方が立たぬで、兩方立てる譯には參りませんね、ですから、銘銘に請持を極めて、私は父樣掛を勤めますから貴孃は一つ兄樣掛といふのをお引請なすつて下さいまし、宜しうございますか、うまい折を見て、兄樣へ貴孃の思はくをほのめかして、亭主に持つなら店の和七のやうな男を、といつたやうな調子に、

そめ　そんな事を私が……、

内證話

若旦那徳之助
妹おそめ

徳之助　お染少しお前に話したい事があるのだ、

そめ　何でございます、

徳之助　極りが悪いな、今度にしやうか、

そめ　おつしやいなね、人ぢらしな、

徳之助　思切つていはうかな、何だか極りが悪い、私のいふ間お前目を瞑つておいで、

そめ　否な、

徳之助　後生だからよ、

そめ　かうですか、と眼を瞑る、

徳之助　否だぜ、薄目で見たりなんぞして、次手に下をお向き、

そめ　かうですか、

徳之助　今度は上視をつかふね、それぢや目を瞑つて下を向いて、後面をお向き、

そめ　かうですか、

徳之助　さうだ〳〵、今日は髱がよく出たが、根がちつと下つたやうだ、

そめ　お世話を焼かないで、早くおつしやいな、

徳之助　何といふきたない足袋だらう、

そめ　ようございますよ、

徳之助　お前は飛だ坊主頭だ、

そめ　もう私は否、と立懸ける、

徳之助　あやまつた〳〵、これからは眞面目だよ、さあ眞面目となると極りが悪い、

そめ　兄様も男らしくもない、さつさとおつしやいなね、

徳之助　賢も不肖もおしなべて、愚痴になるのが此道の常だよ、野暮めが、

そめ　話といふのはそんな事なの、

德之助　これは冒頭だ、實はお染、私は惚れた女がある、

そめ　えゝ、

德之助　吃驚したか、

そめ　いゝえ、

德之助　感心だ、賴もしい奴だ、話せるわえ、

そめ　そうして、惚れたがどうしたのでございます、

德之助　どうもかうもするものかな、其先はお定まりの、女房に持ちたいといふ寸法だが、就ては、父樣が承知をしてくれなければ、どうすることも出來ないけれど、御存じおかるゝ通りのわからずやだから、私がかういふ女を女房に持ちたい、なんぞをいはうもんなら、途方もねえ、ぐらゐで逐拂はれるのは知れてゐる、處でお前も同胞といふのは私一人、其一人の大事の兄樣を助けると思つて、どうかね、父樣を旨くくるめて、

私の願ひの成ふやうにね、お染樣々々とこの通り拜むよ、後生だからね、おい、其代り又お前が、かういふ人といふ男があつた時には、この恩報に、私が結ぶの神になつてあげるから、

そめ　きつと成つて下さるか、

德之助　おや！

そめ　兄樣、きつと、あなた、なつて下さるか、

德之助　おや！お前心當りがあるのか、

そめ　少しばかり、

德之助　ある？へえ、さうだらう、どうも私が惚れた女があるといつた時に、びくともしなかつたのは、ちつと度胸がよすぎると思つたよ、誰だい、合手は、

そめ　いゝ人、

德之助　のろけなさんな誰だよ眞箇に、

そめ　私はまあ後から申しますから、兄様先へおつしやい、誰様？　さぞ可愛らしい方でしやうね、

徳之助　難有い、

と額をぴしや／＼たゝいて、

徳之助　羞かしながら、ちよびと物語らうかね、裏通りの、それ寫眞屋の横町の、角から三軒目に、餘り奇麗でない格子造の二階家があると思召せ、家内二人で、二人とも女子だと思召せ、若いのと老年と思召せ、老年が母様で、若いのが娘だ、其娘の美しさといつたら、憚り多いけれどお前のやうな……、

そめ　はい、私はお多福、

徳之助　いゝえさ、お前のやうな譯にはいかないけれど、隨分美しいのだ、これさ機嫌を直して聞てくれといふのに、

そめ　私はどうせお多福、

徳之助　さう拗ねずにさ、それはお前も容色は好のさ、

そめ　もの字附で、まことに難有うございます、

徳之助　困るなあ、どうも、ぢやあ、お前は言ふまでも無くか、

そめ　今度は「ぢやあ」になりましたね、

徳之助　好加減にしねえか、そんな事をいふなら頼まねえ、その代り我も頼まれまい、

そめ　あれ御免なさい、兄様その娘はどんなに美しいのですよう、

徳之助　へん、急に胡麻を磨りやがる、もう美しい處は端折つて、其母様といふのが人仕事をして、親子細々と暮してゐるのだが、其女がさ、母様を優しくするの、深切にするのつて、難有涙がこぼれて見ちやゐられやしない、先此通孝行でよ、閑雅でよ、容色が好つてよ、針は利く、手は書く、書は讀む、茶をやる、花を活ける、三味線がいけて、按摩が巧者で、香物漬けるのが上手で、ちよいと料理の眞似もする、どうだい、申

分の無い女もあつたもんぢやないか、ええ、お染どうだい、我は其深切に惚れたね、其情合の渥い處に惚れましたね、男と生れた効にも古い臺辭だが、ああいふ女子を女房に持てさ、ああ難有い、持ちたい〳〵、と變な聲をする、

そめ　そりやあ一體誰の事？

德之助　裁縫の師匠の家の八重樣よ、

そめ　まあさう、

德之助　好容だらう、

そめ　お目出たう、

德之助　まだ早え、所が聞いてくれ、二人の間に、約束はちやあんと、もう出來てるのだから嬉しいぢやないか、

そめ　お目出たう、

德之助　ええお染、その八重樣の曰くさ、あなたの樣な方と夫婦になるなら

本望です、とはいふものゝさ、私は其日暮しの貧乏人、あなたは大家の若旦那、とても、此縁は纏まらない、てね、お染、八重樣がね、お染、涙ぐむでね、お染、おれの膝へ顏をこすりつけて、フヽ、其涙をおれの衣類で拭いてくれた、稍ありてやう〳〵面をあげさ、さうは念つてゐるものゝ、もしも添はれなかつたらと、じつと思入が多分あつて、私は生きてはゐません、とかういふぢやないか、それは私だつて其通り……、

そめ　もう澤山、頭痛がして來た、

德之助　でもござりましやうが、もう少々〳〵、

そめ　否々、私はもう參りますよ、

德之助　待ちなよ、それぢや簡單に後を話すから、これから先が肝心の用なんだね、今いふ通り、二人の間は話が着てゐるし、母親だつて、二つ返事は知れてゐる、先方は萬々善のだけれど、惡いのは此方の親父だ、あゝいふ強慾の代物だから、私の嫁には、跛者でも隻眼でも、癩病の血統

でも轆轤首でも、そんな事に文句はいひつこ無しの、唯それ○次第で、當人は少々足りないかはりに、持參が二萬圓なんていふのを心懸けてゐるのだから、八重樣は駄目な話だ、なるほど私は大家の若旦那には相違ない、けれど、父親が我張て弗函の番をしてゐる間は、月々少額の小使の外は、五錢の白銅一つだつて自由にはならない身の上だから、今こゝで親父に、ならぬと威脹られて見ると、金錢がなければ先方だつてもくれはせず、さうかといつて、これほど思つて居る女を、他人に奪られるのは殘念だ、また八重樣だつて、私と添はれない事なら、生きてゐる效がないから死でしまふといふ、まあこれほどの中なんだ、どうだいお前の了簡で、父樣が承知しやうか、

そめ　さうですね、私も其事で兄樣を賴まうとおもつてるのですけれど、

德之助　お染、度胸をすゑて驅落と洒落やうか、

そめ　驅落ですか、

徳之助　お前も思ふ男があるといふなら、一所の驅落、二組の道行、こいつは新しくつて、きつと好ぜ、第一お互ひに道中が心丈夫だ、それから一つ長屋の隣同士か何かで、大中好で暮さうぢやないか、

そめ　さうねえ、

徳之助　それにつけても、先立つものは金子だが、こいつ又一苦勞だ、

そめ　母樣が生きてゐたらと、思はない日はありませんよ、

徳之助　父親の聲がする、來た〳〵、それぢやお染晩にゆつくり、えへんえへん、

無理暇

主人　五郎右衛門
店のもの　佐助

五郎衛　出て行け〳〵、おのれのやうな奴は一刻も家に置く事はならねえ、

佐助　出て行けなら出ても參りますが、何咎あつて出されるのでございます。

五郎衛　口巧者なとをいふな、氣に食はねえから出すのだ、

佐助　それぢや私に咎は無いのでございますね、咎が無けりや出される因緣はございません、長い年月には、お互ひに氣に食はないぐらゐな事の、ちつとやそつとは有內でございます、どうぞまあ、此度の處は御勘辨なすつて、

五郎衛　ならねえ、

佐助　それは旦那因業といふものでございます、

五郎衛　因業だ？ 因業いふのと、不味もの食ふのは、先祖からの家風だ、

佐助　御家風とあれば仕方はございません、出て參りますが、若旦那に御用を頼まれてをりますから、一寸お目に懸かつてからお暇を戴きます、

五郎衛　德之助に用があるなら戶外で待がいゝ、家に置くことはならねえ、一躰おのれは虫の好かねえ奴だ、否な眼色をして我の顏を見たり、其處等を見廻はしたり、物でも遺ちてゐたら引攫つて行かうと思やがつて、

佐助　へ、遺しておく風かい、

五郎衛　何だと、

佐助　あなたが人に何を取らせるものでございます、大根葉さへ土藏の中へ干して、鍵は腰へぶらさげて、夜晝不寢番ぢやございませんか、

五郎衛　おのれ其まで知てゐやがる、だから眼色に否な處があるといふのだ、人相でいふと、おのれの眼は盜眼といふのだ、

佐助　難有てえ、旦那の頭は南瓜か、

五郎衛　盜眼といふのはな……、

佐助　葛かけに限るかッ、相手は芝海老で、

五郎衛　血迸りて筋あり、神定まらず、盗を好み、不實の商賣又は博奕の類に心を迷はせ、果は非期の死を遂げるとしてある、

佐助　さうなつた日にや泣くものがありやす、

五郎衛　手を見せろ、長くはねえか、

佐助　爪を見せろ、長くはねえかといつてもらひてえ、

五郎衛　何だと、おのれの樣な奴は、おれが庭へ金を埋けておくまで知つて風聽する奴だ、油斷のならねえ、

佐助　へえ、旦那は庭へお金を藏してお置きなさるのでございますか、不用心な事でございますね、

五郎衛　何も金なんぞを藏した覺えはないけれど、そんな事でもあるやうに、しやべり散らすのは、おのれのやうな奴だといつたばかりなんだ、白痴めが、

佐助　へえ左様でございますか、
五郎衛　えゝ、もう文句をいふにや及ばねえ、さつさと出て行け、
佐助　出るなとおつしやつても出て参ります、
五郎衛　これ待て、
佐助　待てとおつしやつても出て参ります、
五郎衛　用があるから待てといふのに、
佐助　用があるなら戸外へお出なさいかツ、
五郎衛　この業突張め、待たねえか、
佐助　何をなさるんです、
五郎衛　用があるから待て、おのれは何か持て出やしねえか、
佐助　何を持て出ました、
五郎衛　手を見せろ、
佐助　へえ御覧なさい、

五郎衛　汚ねえ手だ、

佐助　上を見做ふ下で、先月の初湯に入つたばかりだ、

五郎衛　懷中を見せろ、

佐助　御念の入た事だ、それ御覧じろ、えゝ擽つてえ、其は臍だ〳〵、

五郎衛　大きな臍だ、臍も大きいが、馬鹿に張た硬え腹だ、どうも此頃飯が入るとおもつたら、皆おのれの仕業だな、腹八分目といつて、少し空加減が體の爲だといふのに、命知らずの馬鹿めが、喰やあがつたことわ、これ、まるで張立の大鼓のやうだ、

と下腹をぐい〳〵指頭で壓せば、佐助は好心地さうに、げえいと大きな噯氣を出して、

佐助　挽切麥だから直に減ります、

五郎衛　體の爲をおもへばこそ、消化のいゝものを喰はせてやるのだ、主人の情を仇におもふ、おのれは餘程罰あたりだ、

佐助　罰はあたつてもいゝから、鰻飯とビフテキを煩ふほど食て見たい、

五郎衛　其喰て見たいが高じて人の物が欲しくなるのだ、袂を見せろ、

佐助　あい袂、

五郎衛　それ在つたぞ、いはねえ事ぢやねえ、えゝ、こりやあ南京豆の殻だ、

佐助　實なら一つくれだらう、

五郎衛　何だと、

佐助　吝嗇爺め、好加減に殪るがいゝ、

五郎衛　何だ、何といつた、

佐助　へえ、吝嗇爺は好加減に殪るがいゝと、

五郎衛　いつたか、そりや誰の事だ、

佐助　吝嗇爺の事で、

五郎衛　吝嗇爺とは誰の事だ、

佐助　吝嗇爺の事でございます、

五郎衛　分らねえ奴だ、その吝嗇爺とは、誰を指したのだと聞くのだ、

佐助　別段誰を指したといふ事もございません、唯から漠然と、

五郎衛　嘘をつけ、我の事だ、

佐助　おや、あなたは吝嗇爺でゐらつしやいましたか、それはどうも、つひつひお見外れ申しまして、

五郎衛　默れ、此奴が彼いへばかういふ、仕樣のねえ惡たれ野郎だ、用はねえからさつさと、出て失やがれ、

佐助　何だ、用は無えから出て失せろだ、

と張臂で詰寄る、五郎右衛門氣味惡く退歩する處を、

佐助　この老耄め、

と横面を撲はせると、五郎右衛門も奮然となりて佐助に組附き、揉合ふ中に黃楊木の義齒を落す、慌てゝ拾はむとするを、佐助うんと踏碎いて遁出す、

縁談（上）

五郎右衛門
徳之助
おそめ

五郎衛　やれ〳〵、あの佐助めをやう〳〵の思ひで逐拂つたが、どうも好かねえ野郎だつた、まことに此金持といふ奴は、片時も安心のならぬ、氣骨の折れる役だぞ、之を思ふと、世中に金の無い奴は氣樂なものであらうて、いや其處で昨日請取た三千圓は、裏庭の桐木の根に埋けておいたが、どうも氣になつてならぬ、と獨語をいひ〳〵來ると、土藏前に徳之助とお染がこそ〳〵話をしてゐる、

五郎衛　や仕舞うた、誰も居ぬと思つたら、二人め、こりや聞いたかも知れぬわい、こら、其處で何をしてゐるのだ、

徳之助　おや父樣、

五郎衛　お前達は疾から其所に居たのか、

そめ　いゝや、唯今、

五郎衛　何か我のいつて居た言を聞いたか、

そめ　いゝえ、

徳之助　何も、

五郎衛　いや聞いたに違ひない、

徳之助　いゝえ決して、

そめ　何も聞きはいたしません、

五郎衛　否聞いた〳〵、聞いたなら聞いたでいゝが、我の今獨言をいつてゐたのは、あれは餘所の人の事だ、ある人が三千圓ほど金を拵へて、置場に窮つてゐるさうだが、羨ましい身分だといつてゐたのだ、我の事だとは思ふまいぞ、

徳之助　はい、

五郎衛　お染もさうだぞ、
そめ　はい。
五郎衛　一躰お前達は、我が千圓も持つてゐると想ふか、
徳之助　一向存じません、
五郎衛　千圓も持つてゐたらさぞ好からうの、
徳之助　同じ持つなら最少し欲しうございますな、
五郎衛　慾張つた事をいふな、金といふ奴は怖いもので、餘り持つてゐると、金祟といつての、身にきつと祟が來るものだ、さう澤山慾しいとは思はぬがいゝ、
徳之助　此上に不足はあるまいと、世間では我家の事をさう申してをります、
五郎衛　馬鹿をいへ、不足は無いなどゝは滅相な事だ、誰がそんな事をいつた、皆迹形もない嘘だ、子とはいふものゝお前達は、おれの讐敵も同然なものだ、

徳之助　そりや何故でございます、

五郎衛　お前達が無暗と錢を遣ひ散らすものだから、何でも五郎右衛門の家には金がうんと在るに違ひないといふわ、それをまた悪漢が聞きつけて我の體は黄金でゝも出來てゐる事と想つて、忍び込むで殺しに來ないともいへない、して見りやお前達はおれの讐敵ぢやないか、

徳之助　でも私は人目に附くほど費ひました覺えはございません、

五郎衛　白痴め、手前の衣物を見ろ、一圓か二圓で出來たものぢやあるまい、衣物といふものは、寒暑を凌げば、それで事は足りたものだ、物の本を見ると、上代には木葉を綴つて身を蔽ふとしてある、之が貴人がかうしたものだ、それから末々は赤裸もあれば、少し身分のあるものが草を結むで褌にした、染は何を笑ふのだ、眞の事だ、其を考へると、我々がかうして織た衣服を身に着けるといふのは、分に過ぎた、勿躰も無い事だ、上代なれば我々は赤裸の仲間だ、年に三枚も四枚も拵へてどうしやうと

いふ氣だ、少しは冥利といふことを考へて見ろ、染もさうだぞ、何一つ働きも無い癖に、人間尋常の贅澤ばかりしたがつて、上代は皆木葉の衣だ、

德之助　もう分りました、

五郎衛　分つたら以來は氣を着けろ、それから外にちつと二人に談したい事がある、

此時同胞目語をする、

五郎衛　何だ、目語なんぞをして、どうする了簡だ、

德之助　ちつとお願ひ申したい事がございまして、お互ひに先へ話せと、その合圖をいたしたのでございます、

五郎衛　うむ、話したい事といふのは何だ、

德之助　緣談で、

五郎衛　いや不思議だ、我の方も緣談だが、

そめ　えゝ！

五郎衛　えゝとは何だ、えゝといふのは驚いた時か、呆れた時か、より外には出ない言葉だ、何故えゝだ？

と苦い顏をしてお染をじろり、

五郎衛　まづ徳之助から話をするが、お前はあの末松のお八重といふ娘を知てゐるか、

徳之助　よく存じてをります、

五郎衛　さうかお前はあの娘をどう思ふ、

徳之助　可愛らしい、子でございますな、

五郎衛　氣質はどうだ、

徳之助　内氣な、おとなしい、

五郎衛　うむ、あゝいふ子は惡くないのう、

徳之助　結構ですな、

五郎衛　あゝいふ娘を女房に持つたら仕合だな、

徳之助　それは、もう、

五郎衛　第一約しくつて、賢くつて、

徳之助　大人しくつて、行渉つてゝ、

五郎衛　亭主になるものは大仕合せだ、

徳之助　それは、もう、

五郎衛　けれどもな、此所に一つ難といふのは、彼所の家には金といふものが無いからの、女房よりは其方が、實は望みくらゐのものだけれど、

徳之助　金々とおつしやるけれど、當人が氣質がよくつて、顔色が申分ないといふのですから、其でまづ辛抱をするのでございますね、

五郎衛　そんなやうなものゝ、又此女房をもらふといふ奴は、誠に持参金が樂みでの、

徳之助　そんな事をおつしやらずと、彼にお極めなさいまし、

五郎衛　お前に異存がなければ、彼に極めやうかの、
徳之助　難有い、
と小さな聲でいふと、後からお染が跖を擽る、
五郎衛　もらはうかの、徳之助、
徳之助　至極結構でございます、
五郎衛　ちつと年齢が不釣合だからの、
五郎衛　どういたしまして、丁度似合はしい水の出花同士で、
五郎衛　さういはれると我は羞しい、
と五郎右衛門顔を横にして頭を撫でる、徳之助は合點のゆかぬ顔をして、
徳之助　でも、あなた、先方が十八で此方が二十四、
徳郎衛　當事もない世事をいふな、我は今年もう六十三になるのだ、
五之助　それはあなた、舅は六十が七十、百でも百六でも、構つた事はございません、

そめ　それぢや、あのお八重をもらはうとおつしやるのは、

五郎衛　誰だとおもふ

徳之助　あの私では無いのでございますか、

五郎衛　我だよ、我の事だよ、

徳之助　ひえゝ、

そめ　あの父親が?

五郎衛　おいよ、

徳之助　あゝお染、

そめ　兄様、

徳之助　情ない事になつたなあ、

五郎衛　何だ、情無いとは?不吉な事をいやあがる、

縁談（中）

五郎右衛門
おそめ
和七

五郎衛　德之助には、心當りの寡婦があるから、其をもらつてやることに極めたが、お前には瀧造樣が似合はしいと思ふが、どうだ、

そめ　あの瀧造樣？

五郎衛　さうよ、金滿家だぜ、子供は無し、年齡だつてまだ五十にはならず、ま彼位な器量人も寡ないもんだ、信州から出て來る時には、財布の底に二百しきや無かつたのが、土方から取附いて、今ぢや五萬の聲が懸る身代だ、仕上げたものさ、

そめ　父樣、私はお嫁なんぞにゆくのは否でございます、

五郎衛　お染や、私はお嫁にやるのが大好でございます、

そめ　どうぞ父樣、あの人の所へ嫁くのばかりは勘忍して下さい、

五郎衛　どうぞお染や、あの人の所へ嫁くのは今晚にして下さい、

そめ　今晩？
五郎衛　今晩！
そめ　私は否でございます、
五郎衛　それは否でございます、
そめ　否、
五郎衛　否、
そめ　そんな無理壓制な事をなさらずとも、宜しいぢやございませんか、
五郎衛　どんな無理壓制な事をしても、宜しいぢやございませんか、
そめ　斷て嫁けとおつしやるなら、私は、死でしまひます、
五郎衛　死ぬには及ばない、嫁けばそれで事が濟むのだ、一躰子たるものが親人に對して、そんな我儘をいへたものか考へて見ろ、
そめ　親たるものが子に對して、そんな無理な事をいへたものか考へてごらんなさい、

五郎衛　馬鹿が、こんないゝ口を否といふ奴があるものか、誰に聞かせたつて、皆これは結構な縁だといふわ、

そめ　そんな事をいふものは、皆沒分曉漢でございます、

五郎衛　おゝ和七が來る、彼に聽かせて、何方が是か、裁判さして見やう、

そめ　それが宜しうございます、

五郎衛　もし和七が是といつたら、承知するか、

そめ　和七さへ是と申したら、きつと承知をいたします、和七のいふことなら私は何でも聞きます、

五郎衛　面白い、和七や、今我と染と少し言合つてゐるのだが、お前はまあ何方が正と念ふ、

和七　それはもう旦那樣が正しいのに極つてをります、

五郎衛　お前は此處で何を言合つてゐたか、知てゐるか、

和七　それは一向存じませんが、旦那樣の正しいには極つてをります、

五郎衛　む、實はな、今晩染をあの瀧造樣のところへ嫁にやらうといふのに、否だといつて我意を揑ねるのだ、なるほど染のいふのが道理か、但しは我が道理か、どうだ何と思ふ、

和七　どうも……其は……まことに……成程、

五郎衛　我が道理か、

和七　さやうでございますな、

五郎衛　染の方が理があるか、

和七　なるほど、

五郎衛　成程では分らぬ、何方が是とか、非とか、聢とした所をいへ、聢とした所を、

そめ　和七、お前いゝかい、屹度だよ、

和七　萬々飲込むでをります、

五郎衛　どうだ、和七、

和七　へい、其は何でございますな、あなたのおつしやいます所もお道理なり、またお孃樣のおつしやる所も御無理ではないやうに考へられます、

五郎衛　何故兩方が道理だ、瀧造樣なら此上もない結構な婿ぢやないか、考へて見やつしやれ、第一、紳士だ、金持だ、器量人だ、子供は無し、年齡は更けてはゐず、何と結構ぢやあるまいか、

和七　なるほど一々御尤で、どういたして、そんな結構な口が又とあるものではございません、これと申すも旦那樣の御交際がよろしくつてゐらつしやるから、かういふ御縁談もあるといふものでございます、

五郎衛　お前は理窟が分つてゐるよ、若いのに賴もしい、

和七　へゝゝゝゝゝどうも恐入ります、えゝお言葉ではございますが、今お話で今お返事といふのは餘り速急で、それではお孃樣の御分別をあそばす間が無いといふやうな譯で、何か御無理のやうに聞こえまして可笑くございませんから、どうぞ少しの間御猶豫を、

五郎衛　否々、それはなるまい、少しの間でも猶豫をして、破談にでもなつたら大事だ、實は瀧造樣と支度金千圓といふ約束をしたのだから、御意の變らぬ内に、早く返事をしなければならない、
和七　あの支度金を千圓おとりなさるので、
五郎衛　左樣さ、こんな結構な口は又とはあるまいがな、
和七　へえ、何御不足も無い御身上でゐらつしやりながら、支度金とは、
五郎衛　どうしたと、
和七　結構な事でございます、今晩まで御猶豫をなさいますなら、お孃樣の御得心あそばす方もございますけれど、唯今とおつしやつては、
五郎衛　何、方がある？
和七　御坐いますと申しまするのは、お孃樣の思召には、嫁入といふのは、人間一生涯の大事で、一度添てからは、否になつたからと申して、つひ一寸と別れるといふやうな譯には參らぬものでございますから、念には念

を入れて、それはもう此上は無い結構な御縁談ではございますけれど、末の末まで十分に御考へあそばして……、

五郎衛　支度金の千圓は奮むだよ、

和七　御身の御運定めといふ、嘴の仕事でございますから、隨分よく／＼御思案を遊ばしませんと、後々に紛擾が持あがつて、どうもかうも成らないやうな始末になるものでございます、

五郎衛　千圓とは奮むだよ、

和七　えゝもう是非がございません、唯一粒のお孃樣より、金錢の方が愛いといふ親御樣だから、私は何も申しますまい、

五郎衛　千圓とは馬鹿に奮むだやつさ、

和七はお染の顏を見て、

和七　まあ／＼御心配なさいますなよ、

そめ　和七、私は死でしまふ、

と泣聲になる、

五郎衛　おや裏で犬が吠える、こりや誰か桐の……、一寸見て來にやなるまい、

と五郎右衛門はきよと〳〵出て行く、

縁談（下）

和七
おそめ

そめ　和七お前は實が無いよ、なぜもつと一生懸命になつて、彼所へ嫁かないやうに、さういつておくれてないのだい、お前は實がないよ、

和七　あなたはさうおつしやるけれど、實がある無いのつて、あの父様ですもの、和七の手に乘るこつちやございません、此通り額から油汗をたらして、一心不亂で辯じたのですけれど、萬事支度金の千圓で立切て、私のいふ事なんぞは少しも耳へ入れないのですもの、どうにも仕様がありやしません、さうかといつて、憖ひ反對へ廻つて、氣に障るやうな事でもいつて御覧なさい、尚さら仕様がございません、少し方寸に在る事がございますから、あなたまあ、父様のいふ事を唯と聞いておゝきなさいよ、方寸にありますから、

そめ　ほんとに方寸にあるかい、

和七　ありますから大丈夫、
そめ　屹度かい、方寸に無いときかないよ、
和七　在りますよ、
そめ　でもお前今晩嫁けといふのだよ、いゝかい、どんな方寸だか、安心するやうに聞かしておくれな、
和七　今晩いざといふ眞際に、あなた卒倒ておしまひなさい、
そめ　卒倒るつて、あの目を眩すのかい、否だねえ、
和七　否だねつたつて、あなた一大事の場合でさあね、思入れ目をお眩しなさい、
そめ　私は未だ一度も眩した事がないから、もし眩はしそくなつて、父様に見附かつたら大變だね、
和七　眩はした事が無いつて誰が平常稽古をしておくものがあるものですか、うんとか何とかいつて、引くりかへつて手足を突張て、齒を切しめ

て、何となく死だ眞似をなさいな、

そめ　どんな風に？

和七　どんな風につて、困りますね、

そめ　一寸して見せておくれなね、

和七　一寸たつて、絶息の振附は困りますね、

そめ　然て見せておくれよ、形だけでいゝから、

和七　困りましたねえ、ぢやまあ一寸形をしてお目にかけますから、一度ですつかり覺えて下さい、度々は私もあやまります、

そめ　あゝ一度で覺えるから、よく見てゐるよ、

和七　よう御坐いますか、卒に撞と、かう仆れて、あ、痛！

と顔を顰める、

そめ　そこで顔を顰めるのだね。

和七　えゝお洒落なさんな、あゝ痛、ほんとに脊骨を打ちました、

そめ　傷めはしないかい、

和七　まあよう御坐いますから、先を御覽なさい、かう仆れてから、手足を硬く突張て、うゝんと、此呻聲が身上です、さも苦しさうに齒をくひしばつて、眼を白黒かういふ鹽梅に、

そめ　あゝ否だ、氣味が惡い、和七もういゝよ、

和七　もういゝよぢや御坐いません、これが一番難しいのですから、もう一度、それからいふ鹽梅に、

そめ　その眼色だけは堪忍しておくれな、

和七　あなた死ぬのに外見も色氣もあるものぢやございません、

そめ　そうしてお醫師樣が來たら、直に虚死といふ事が分つて、しまふだらうね。

和七　それは此方にちやんと仕掛がしてあるのですから大丈夫なものです、それぢやもう直に、胸が痛いといふやうな、絕息の徵候に取懸からなく

つちやいけませんよ、

五郎衛　やれ〳〵難有い、例の處へ人でも來たかと思つたら、誰も來たのではなかつた、

和七　旦那樣お孃樣は今晩いらつしやるやうに御得心をなさいまして、子として親の目鏡で持てといふ夫に好惡をするのは勿體ない事で、まして千圓の持參金とは、此上も無い結構な事だ、と大層お喜びでございます、

五郎衛　うむ、利口ものだ、賢こい奴だ、お前にも色々〳〵御苦勞だつたの、

和七　どう仕つりまして、然しまあ御目出たうございます、とわざとお染に中てゝいふ、

そめ　そんな事をおいひなら私は……、

和七　まあ〳〵お目出たい〳〵、とお染を宥める、

五郎衛　いや目出たいとも〳〵、

和七　あなたもこれで御安心でございます、

工面

徳之助
佐助

徳之助 佐助、お前何處をうろついてるのだ、先刻からどんなに探したか知れやしない、

佐助 うろついてるとは情無い、若旦那、私は酷い目に遇ひました、突然旦的が暇を出すといふぢやありませんか、何も落度の無いものが、暇を出される譯は御坐いませんやね、然し、そんな理窟をいつたからつて、分かる奴ぢやありませんから、少々惡躰をついて出て參りましたが、どうも窮りました、

徳之助 それは窮つたな、然しお前の身は我がどうともするから、心配をするな、其はさうと、一件はどんな鹽梅だ、私の方にも大事が持上がつて、恐入つたよ、

佐助 何でございます、

徳之助　驚くなよ、彼女に惚れてるものが亦一人現はれたのだ、

佐助　何の事です、美女なら愛人のあるのは知れた話ぢやございませんか、何百人が何千人あつたつて、びくともする事ちやございません、佐助といふものが附いてゐます、

徳之助　何だ宿無しの癖に、佐助といふものが凄まじい、それがよ、ちつと尋常ならぬものが惚れてゐるのだ、

佐助　化物ですか、

徳之助　まあ其に似たものだ、

佐助　はてね、誰でしやう？

徳之助　驚くまいぜ、親父だ！

佐助　何處の親仁？

徳之助　我家の親父よ、

佐助　我家の、あの、若旦那御冗談をおつしやい、

徳之助　冗談でないから我も驚くのだ、

佐助　眞實ですか、

徳之助　情無いとには眞實だ、

佐助　呆れたもんだ、彼くたばり損ひが、一體どういふ了簡でしやう、色狂だな、

徳之助　大方そんな事でゞもあらうよ、我を呼附けて、彼を女房に持たうとおもふが、どうだと來た時には、ぎやふんとして氣が遠くなつたよ、

佐助　其處で、私が先口だ、とあなた一本參らしておやんなすつたか、

徳之助　いゝえ、

佐助　いけませんね、何故です、

徳之助　其處でそんな事をいつた日には、なほ此方の大望の障碍になると思つたから、何も知らない顏で、それは結構な事でと出し抜いて、一策回らさうといふ肚だが、あの樣子はどんなだつた、

佐助　金兵衛といふものが中へ入つて周旋するのですが、話しました所が、承知をしたと、

德之助　おやあ、三千圓はいよ〳〵借りられるね、

佐助　其はもう慥に借りられます、ですがね、借主は誰だか、其を聞かなければ、先方も安心をしませんで、

德之助　これは左様だらう、その貸主は何といふ男だ、

佐助　其は未だ話しませんでしたが、出來る事は請合だと申します、所で其貸方に、あなたがお會ひなすつて、此方の身分を聽いた上で、金を渡さうといふのですが、あなたが一言父樣の名をおつしやれば、話はすぐに纏まります、

德之助　それは難有い、いろ〳〵御苦勞だつた、

佐助　それから、金兵衛が、かういふ振合だからと申して、利の所を話しました、

徳之助　な、

佐助　利は一割五分でございますが、

徳之助　な、

佐助　實は其貸方も今手許に三千圓は無いので、ちと高うございますが、二割の利で他から借りるのださうでございますから、其利は此方で持てもらひたいと申します、

徳之助　そんな金貸があるかい、

佐助　餘り類はございませんな、

徳之助　そりやまあ、どんな高利を借りた所が、どうせ親父に尻を拭かせるのだから、可いやうなものゝ、餘り酷いな、

佐助　さすがに親子の情でな、

徳之助　洒落なさんな、

佐助　酷いやうではございますが、あゝいふ因業ですから、懲罰の爲にい

血が一つ見えなくつても、五錢の白銅が一つ見えなくつても、血
いかも知れません、

徳之助　懲罰ぐらゐで濟めばいゝが、五錢の白銅が一つ見えなくつても、血眼で暴れまはるのだから、これぢや氣でも違つて首を縊るかも知れない、

佐助　さう行きやお誂へ、あの身上は若旦那の所有、一番々々頭が佐助樣、

徳之助　馬鹿なことをいふな、

佐助　と行きや豪的だが、あの慾深だもの、未練があつて死ねるものか、御心配はいりません、若旦那、思切てお借りなさいまし、

徳之助　さうして、貸方の手許にあるといふ金は若干ばかりだ、

佐助　千五百圓は手許にありますが、あと千五百圓は二割の口でございます、

徳之助　それぢや千五百圓が一割五分て、半分は二割此方持の又一割五分か、

佐助　左樣々々其外にもう少々文句がございます、五分の口の千五百圓の中、五百圓は品物で取てくれといふので、

德之助　何だと、

佐助　其品は此に認めてございます、

と書付を出して見せる、

德之助　何々〳〵、えゝ、一ポンプ一臺、一專賣特許精米器械一臺、一二人乘人力車三輛、一上等櫻炭五十俵、一蒔繪重箱一組、一刺身皿十人前、一鮓屋床店道具一式附、何の事だ、馬鹿々々しい、何處まで行ても、こんな瓦落多ばかりぢやないか、驅落するものが、こんな、物をどうしやうといふのだ、まるで判じものだ、

と書付をたゝきつける、

佐助　〆て百三十七品、これで五百圓は高うございますか、

之之助　高くたつて、安くつたつて、古道具屋を始るのぢやない、驅落をするのだ、無代もらつたつて、こんな物がどうなるものか、誰が道具を借りやうといつた、金子が欲しいのだ、金子を借りやうといふのだ、いか

に人の弱味につけこむといつても、冥利といふものがあつたものだ、一割五分の利なら過ぎてるのに、半分は三割五分だといやあがる、其上に抵當流れの瓦落多なんぞを推附けやがつて、それで又五分の利を取る氣が凄ましい、不法な事をしやあがる、其貸方は何處の何といふ奴だ、盗人め、畜生め。さあ我が敵手だ、刺違へて死ぬ、

佐助　若旦那、どういふもんでございます、そんな事を此處でおつしやつたつて仕樣はございません、

徳之助　仕樣が無くつても、餘り太い事をしやあがる、

佐助　太い事をするとおつしやつても、まだ金を借りた譯ではないのですから、そんなに御立腹なさるとはございません、

徳之助　借りなくつても太い奴だ、

佐助　それは太くつても細くつても、先方の勝手でございます、

徳之助　勝手とは何だ、

佐助　そんなにおつしやつたつて、私の知た事ではございません、今此所で御不承をなさいませんと、外に都合をする所はございませんが宜しうございますか、

徳之助　金も何も入るものか、

佐助　金が無ければ、お八重様と夫婦にはなれませんよ、

徳之助　お八重も何も、

佐助　入りませんか、若旦那、

徳之助　それは入るよ、

高利　五郎右衛門
金兵衛
徳之助
佐助

金兵衛　旦那様、一つ口があるのでございますが、これはさる大家の若旦那で、急に入用だといつて、大變急いでをるのでございますから、例の話を持ちかけました所が、どうやら唯といひさうな樣子でございます、

五郎衛　ふうむ、確かい、身分の所はどんなもので、何處の何といふものだ、

金兵衛　何處の誰とまでは未だ名乘りませんが、其番頭から言込むで參つたので、その者の申すには、いづれ主人が直にお目にかゝつてお話を申しまする、名前を申せば、屹度二ツ返事で承諾をなさるに相違ない、と大相えらがつてをりましたが、實際餘程しつかりした身代ださうで、母親は疾に亡なつて、今の親父も、半年も經てばお目出度なるのださうでございます、

五郎衛　確實なものなら貸しても好いの、

佐助　おや、金兵衛が旦と話をしてゐる、

德之助　あれかい、金兵衛といふのは、奸惡い面をしてゐるなあ、

佐助　旦那と比べると、いづれ劣らぬ鬼閻魔、凄いのが揃ひましたね、

金兵衛　おやこれは、どうして此處へ、旦那、あれが借主の番頭樣て、

五郎衛　番頭樣がお出だと、

金兵衛　あなた此方へ、此方が彼件の……、

五郎衛　何だ、うぬは佐助ぢやねえか、

德之助　父樣！あなたは太い事をなさる、此中金兵衛と佐助は遁げる、

五郎衛　何だ手前か、三千圓なんぞといふ大枚の金を借りやうといふのは、

德之助　あなたですか、五百圓は古道具で渡して、三割五分といふ高利を取

らうといふのは、

五郎衛　高利だ、その高利を借りて、さ何處から返さうといふのだ、今金兵衛から聞けば、半年も經てば親父が死ぬと、途方もねえ事を待つてゐやあがる、誰が死ぬものか、

德之助　死なゝいなら死なゝいでもようございますが、

五郎衛　此奴が〳〵、そりや誰にいふ言葉だ、

德之助　あなた、父樣、高利貸とは何事です、

五郎衛　これ德之助、高利借とは何事だ、

德之助　實はあなたが、こんな非道な事を成さると知たから、わざと借主となつて、手證を捉まへて意見をしやうとおもつたので、

五郎衛　何の生意氣な、我も手前が金を借りたがつてゐると聞いたから、懲惡の爲に……、

德之助　いけません、あなたの高利貸は誰でも知てをります、

五郎衛 おのれの高利借こそ誰でも知てる、

お饒舌

店のもの佐助
口入婆お勘
五郎右衛門

佐助　いやはや飛でもねえお茶番だつた、高利貸出會て見れば親父なりか、若旦那もあれには一番面くらつたらうが、流石の親仁が魂消たらう、

おかん　おや佐助樣、久しぶりだね、

佐助　いやお婆樣、いつも達者だね、おめえ何しに此處へ來たのだ、

おかん　何ちつと賴まれた事があつてね、旦那にお目にかゝりに來たのさ、

佐助　へえ、どんな事を、

おかん　少し儲かる話さ、お禮がもらへるといふやうな筋でね、

佐助　禮が？此家の旦からか、

おかん　さうさ、

佐助　へゝゝゝよしねえ、骨折損だ、おめえの黑人にも似合はねえ、野

暮なものだぜ、こゝの旦が何をしたからつて、禮の眞似もする風かい、赤本の話じやねえが、鍬を入れりや馬糞の出るばかりだ、

おかんさうでないて事さ、お前なんぞはまだ若いからいかねえ、どんな揺屋でも、其は又相應に、仕向次第でどうともなるものだ、切放れのいゝ人ても、懐合のをかしくないのは、いびり効が無いが、いくらしまり屋でも、此處のゝやうに性目の確なのは樂みといふものだ、

佐助口のやうな譯に行きやお慰みだが、雷樣が鳴ても放さねえといふのは、ほんに此處の旦の事た、さういふ事ならやつて見るも好いが、後で馬鹿を見なさんな、

おかん御意見は難有てえが、此方にも少し山があるのだから、何でもかでも一つ遣つて見る氣さ、首尾好くいつたら一盃呑らうよ、

佐助いや御免だ、そんな酒からは得て火が焚るものだ、もし旨く行つたら、我の方から一盃振舞はう、請合しくじることだ、

おかん　けちを附けなさんな、縁起でもねえ、まだ口開前だわな、
佐助　口開前で樂みなものよ、蓋を開けたら蛙ぢやねえか、
おかん　まだそれほど腐くつてはゐねえよ、
佐助　どうだか知れたもんぢやねえ、近日借りにいくぜ、
おかん　うめえ口だ、はゝゝゝゝ、
佐助　そんなら、あばよ、
おかん　はい左様なら、
おかん　おや、これは旦那様、御機嫌よろしう、いつもまあ〳〵お達者な事で、ほんとにお目に懸りますたんびに、お若くおなり遊ばしますよ、
五郎衛　さうでもあるまい、
おかん　いゝえ、あなた、ほんの事でございますよ、さう申しては艶のやうでございますが、どうお見上げ申しても、四十、左様さね、二三でゝもゐらつしやいますか、

五郎衛　もういかねえ、六十一だよ、

おかん　お六十一、結構ぢやございませんか、殿方は六十を越してからが花だと申します、これからが、あなた盛でございます、

五郎衛　さうでないよ、せめてもう二十年若けりやのう、

おかん　あなた、飛でもない事を、何が二十年若けりやあでございますよ、旦那様は確に百歳まで請合といふ、御格服でおあんなさいますから、お樂みてございます、

五郎衛　さう見えるかの、

おかん　見えるばかりではございませんよ、争はれないものぢやございませんか、御相にちやあんと表はれてをりますよ、

五郎衛　相に表はれてゐるり・

おかん　其お額の太い文の間に、ちよい／＼と縦に微かい文のあるのが、長命の相なのでございますよ、

五郎衛　これが何かい、長命の相だと？

おかん　左様でございますよ、滅多にかういふ御相の方はないものでございますよ、お手を一寸それ、あなた、まあ／＼どうも、これが百まで御長命の文で、此文が拇指の腋から、それ、如此づうつと、かう引いて、此處へ繫がつて、かう又づうつとそれ、おや／＼／＼、之は百と二十生きる相でございますよ、

五郎衛　眞箇かい、そりや難有い、百二十まで生きりや十分だ、時に彼話はどういふ鹽梅だ、

おかん　御心配は御無用になさいましよ、從來何十年私が口をきゝました事に、纏まらなかつた例は、あなた、唯の一度もありはいたしません、人樣が遣て纏まらなかつたお緣談でも、此婆が中へ入りさへいたせば、あなた、不思議に纏まるぢやあございませんか、

五郎衛　なるほどの、

おかん　先方は大承知で、此方の御都合次第で、何日でも宜しいと申すので
ございますよ、

五郎衛　而して荷物はどれほどあるえ、

おかん　荷物よりも、あなた、持參金がございますよ、

五郎衛　持參金がある？ 耳よりの事だ、

と眼色を變へて乘出す、

おかん　年五百圓の利がね、あなた、入るんださうでございますよ、

五郎衛　其持參金がな、すると、一割の利と見て五千圓、五分と見て一萬圓、
なるほどな、

おかん　それがね、あなたどういふ譯で五百圓だと申しますのに、年で其で
ございますから、月割にいたしますと、四十圓餘でございます、なぜ月
四十圓餘だと申しますのに、其娘と申すのが、親の躾が嚴しいものでご
ざいますから、誠に育ちがよろしうございましてね、三度の食事はお菜

といふもの入らずで、おまけに少食でございますから、これが月に致せば二圓から違ひます、芝居が嫌ひで、これが二三圓は違ひますよ、それから髪は獨で結ひまして、入湯が嫌ひで、これで五十錢は違ひます、まことに儉しい子で、衣類は好まず、頭飾はねだらず、これが月に割て四五圓は違ひます、御酒は飲かず煙草は呑まず、お菓子は嫌ひ、お茶は嫌ひ、物見遊山は嫌ひ、これがどんな事を致しても、五六圓違ひます、其に御化粧が嫌ひでございますから、臙脂、白粉、白粉下、香水、油、石鹸の類が入りませんから、これで一圓は違ひます、其に絹手帕の縁縫を上手にいたして、月に五圓は稼ぐさうでございます、それから、臺所の用をいたして御膳炊をしますから、これで四圓は違ひますし、お妾の代用をいたしますから、之れが十圓の違ひ、お子供衆が出來れば乳母もいたしますから、之が五圓の違ひて、何やかや合切勘定を遊ばしたら、月五十圓は大丈夫でございますよ、でございますから、年にいたして五百

圓の利でおほせの通り、原金に致しましたら、一割と見て五千圓、

五郎衛　何だ、現金の話かとおもつたら、馬鹿々々しい、夢で金を拾つたやうなものだ、まあ其は五百圓でいゝとして、外にちつと心配なのは、どうも我とは餘り年齢が違ひ過ぎるからの、若い奴は兎角年寄を嫌つて、末始終納まらぬやうな事はあるまいかと、其がどうも苦勞でなう、

おかん　其所で、まだ申上げる事があるのでございますよ、その娘は至つて若いものが嫌ひで、年寄は行屆いて、深切で、よいと常住申して、大の年寄好なのでございますよ、

五郎衛　はてね、

おかん　其にまだ申上げたいのは、どういふものか、若い奇麗な男を見ますと、胸がむか／＼して、頭痛がいたして惡寒がして來るほど、蟲が好かないのださうで、品の好い寄年の、可成年齢を取つたほど好きで、六十歳以下では、どうもまだ十分に好かないのださうで、此間も縁談があつ

たのださうでございましたが、其方は五十六とやらで、見合の時目鏡を掛けてゐなかつたのが、氣に入らないといふので、とう〳〵破談にしたさうでございますよ、

五郎衛　はてね、年寄が好きとは殊勝な、

おかん　それにあなた、此間も行て見ますと、あなた、下着でも、襦袢の半襟でも、羽織の裏でも、皆翁の面の摸樣のあるものばかりで、戸外へ出るのに杖を撞いて見たいなんてね、そんな事を申して、母親に叱られてをるのでございますよ、

五郎衛　はてね、變つた、面白い、我なども老人が大好だから、女であつたら、亭主には老人を持つさ、年寄の事だ、

おかん　さうでございますともね、あなた、そりやあもう人間は年寄の事でございますよ、矢張この菓物のやうなものでも、十分實が入らなければ、味といふものは出るものではございませんよ、

五郎衛　そこの理窟だて、若い奴らが盛りだの血氣だのといつても、我の眼から見ると、いやはや多愛のないものだ、

おかん　さうでございますもね、

五郎衛　扨それで、格別話す事もなしとして、それから日を取極める一條だが、其は私の方にも都合があるから、いづれお前までいはうから、其節はまた頼むよ、どうも御苦勞だつた、ゆつくり相談をしたいけれど、今日はこれから寄合があるので、出掛けなければならないから、これで御免を蒙るよ、色々どうも御苦勞だつたね、いづれ又、

おかん　旦那樣あの何でございますが、

五郎衛　今日は忙しいから、此次に又、

おかん　それでは私が誠に、

五郎衛　此次に〳〵、

と奥へ立て行く、お勘は茫然置去を食つて、

おかんえゝ笑かしやあがらあ、助兵衛爺の癖に、

結納

花嫁お八重
おかん
徳之助
おそめ
五郎右衛門

お八重　お勘さん私はそんな老人は否ですよ、

おかん　あなたは慾をお知なさらないから困りますよ、六十一といふ老爺ですもの、此先何時まで生きるものですか、長くて精々一年か、二年、うまく行きや半年經つか經たない内に、ぽつくり往生をしてさへしまへば、形が附くのぢやございませんか、さうすれば一萬とか二萬とかいふ金を握つて彼家を出て、どんなにでも若い、好きな婿樣をおもらひなさいましなね、ほんの少しの辛抱ですから、夢を見るのだと思つて、我慢をなさいましよ、

お八重　それだつて、人の死ぬのを待つといふのは、餘りな話ぢやありませんか、私はそんな思ひをして、お金持になりたくはありませんから、此

縁談は破談にして下さい、

おかん　今更そんな事をおつしやつちや困りますよ、おや、それ、車が來ましたよ、あれ、はい入らつしやいまし、さあ、もういけませんよ、お出でなすつた、

お八重　あれ、私はどうしやうね、

五郎衛　お勘樣や、これが何かい、御縁女？はい、さうかい、はい、私は灰吹屋の五郎右衛門で、此度は不思議な御縁で、はい、どうぞ幾久敷、はあ、どうもお美しい、私には過ぎものだ、お勘さんや、御縁女は先刻から下ばかり向いて、氣分でも惡いのではないかい、

おかん　いゝえ何、お若いお方でございますから、お羞しいので、おほゝゝほゝゝゝゝ、

五郎衛　德之助とお染が來たやうだ、

おかん　おや入らつしやいましたよ、
徳之助　父様大層遲くなりました、
五郎衛　おう悴、此方が御緣女だ、御挨拶を申しな、
徳之助　これは始めまして……、
お八重　始めまして………おや、あなたは！
と吃驚、徳之助は目で制して、
徳之助　お目には懸かりましたが、しみ〴〵御挨拶もいたしませんで、私は五郎右衛門悴徳之助と申すもので、此度は不思議な御緣で、何分幾久敷、
お染も同じやうに挨拶する、緣女はついと坐を立て、お勘を小蔭に招き、
お八重　お勘さん、大變な事になりましたよ、今來た息子さんは、私は疾から識てる方なの、
おかん　識ておいでなら、なほい丶ぢやあございませんか、
お八重　あら、識てゐるのですよ、少し事情があつて、

おかん出來てるのですか。

と圓い眼をしてお八重の顏を見れば、櫻色になつて下を向く、

おかん　おやまあ、困りましたねえ、

お八重　私は歸りますよ、

おかん　まあ貴孃、今あなたの姿が消えてしまちや、私が中へ入つて當惑しまさあね、後生ですから、もう一度お坐敷へ行てお坐んなすつて下さいましよ、私がまあどうともしますから、

お八重　私は面目無くつて……歸りますよ、

と泣顏になるのを、無理に坐敷へ推込む、

德之助　あなた、親父の指環の金剛石のやうな、大きいのを御覽になつた事がございますか、

五郎衛　これ、べら〳〵と餘計な事をしやべるな、

お八重 いゝえ未だ、大相結構なのでございますこと、
徳之助 父様一寸其を御覧にお入れなさい、(と無理に取て)御覧なさいまし、
お八重 まあお見事な、
徳之助 一寸はめて御覧なさいまし、おや丁度宜しうございますね、貴嬢がおはめなさると、一層引立て見えます、
お八重 飛んだ事を、
徳之助 それは甚だ輕少ではございますが、親父からあなたへ御結納の驗までに進上いたます、
五郎衛 これ〳〵何だ、
徳之助 幾久しく御受納下さいますやうに、
五郎衛 飛でもない、
お八重 どういたしまして、
と返さうとする、

徳之助　どうぞお納め下さいまし、どうぞ御遠慮なく、

五郎衛　途方も無い、

徳之助　あなたがお受け下さいませんといつて、あの通り親父が不機嫌でございますから、

五郎衛　飛でもない、おのれは、

徳之助　どうぞ其はお納め下さいまし、

と眼で知らせる、

お八重　それではお預り申しておきます、

五郎衛　いづれどうぞお返し下さいまし、へゝゝゝゝ、

徳之助　返へすなどゝいふことは、此席で、忌詞でございます、

五郎衛　黙つてゐろ、

久藏　へい、旦那樣は此方でございますか、久藏でございます、

五郎衛　久藏か、何ぞ用か、

久藏　唯今お客樣がお出になりまして、

五郎衛　間拔め、今我の取込むでるのを知てゐるぢやねえか、何故斷らねえのだ、

久藏　何だか金談があるとおつしやいますから、

五郎衛　左樣か〳〵、そんならさうと、早くいへばいゝに、小言を食ふのが好な奴だ、急用で人が參りましたから、一寸はい御免を蒙つて、直に參ります、

と緣女に會釋して、

五郎衛　德之助行て來る、いや貴孃や、お見送には及ばない、

と門に出てからお染を呼び、

五郎衛　指環を氣を着けてくんなよ、

德之助　八重樣餘りだね、

ぽんと煙草の吹殼をはたく、

おかん　それはね若旦那、全く物の行違ひで、おい、八重樣、我を蹈附にするに
德之助　お前に何も聞かうとはいはねえ、あれほど堅く約束をしておきながら、否になつた
も節があつたもんだ、あれほど好た男の所へ嫁くのも、惡いとはいは
なら離れるのもいゝや、新出來の好た男の所へ嫁くのも、惡いとはいは
ねえ、人もあらうに、現在親父の所へ來てくれなくつてもいゝおやねえ
か、それも切て望みなら言草はいふめえ、其代り今までの約束は、唯て
反古にやさせねえよ、離れるなら離れるやうに、奇麗に形をつけてもら
はうか、さあ、どうして呉るんだ、
おそめ　兄樣まあ、そんなに暴々しい事をおつしやんなよ、お八重樣どうい
ふ事情なのでございます、
お八重は手巾で涙を拭きながら、
お八重　決して變心なんぞをいたした譯では無いのでございます、母が貴孃、
私へ相談もしずに、お約束をいたしてしまつたものですから、今更否と

も申されず、此家までは參りましたものゝ、いよ〳〵と事が極まれば、
私は生きてはをりません覺悟で、

おかん　若旦那お聞きなさいまし、お可哀さうぢやございませんか、眞にまあ、おいとしい、おう〳〵、死ぬといふ覺悟で、若旦那へ申譯に、おや左樣でございましたかい、でもまあ、此處でかうやつて、お逢ひなすつたのが、盡きない御緣と申すものでございますよ、

お八重　さういふ私の心も知らずに、今のやうにおつしやると、私は口惜つて口惜つて

おかん　おう〳〵、さうで御坐いましやうとも、さう事が分りさへしたら、若旦那だつて、いつまでお腹を立てゝゐらつしやるもんですか、ねえ若旦那、お互ひ惚過ぎるから喧嘩も起る、又つひ其なりに解易く、さあさあ仲直りといたしましやう、

おそめ　あなた、どうぞ御機嫌を直して、兄樣も機嫌を直して下さいよ。

德之助　何だか知れたもんぢやありやあしねえ、

お八重　まだあんな事を……、

おかん　おや又ですかい、好加減になさいましな、此處には寡婦ばかりでございますよ、

おそめ　兄樣何ですね、貴孃もう御了簡なさいまし、

お八重　どうも貴孃には面目もございません、

おそめ　いゝえ私も兄から貴孃のお噂を聞きまして、よく存じてをるのでございます、此間愚父が貴孃をといふ話をいたしたので、兄も私も吃驚いたしてしまひまして、毎日氣ばかり揉でをりましたのでございます、

お八重　難有う存じます、色々御心配を懸けまして、此後とも何卒お力におなりあそばして下さいまし、お勸さん、何とか好智惠を出して下さいなね、

おかん　好智惠たつて、私も呆れてしまつて、智惠も工夫も急には出やあし

ませんわね、若旦那がかう、といふ事を存じてをりましたら、旦那樣へお世話なんぞを申すのでなかつたのでございましたけれど、ほんに一向存じませんものでしたから、つひ〳〵こんな事になつてしまひまして、何ともかとも申譯がございません、若旦那、どうぞまあ、何事も年齡に免じて御勘辨下さいまし、お八重樣、まことにどうも濟まない事をいたしました、何も惡氣があつて、いたした、わけでは無いのでございますから、

德之助 いゝやな、過ぎた事は仕方がない、それよりは、此處を一つ振替へて、八重樣を此方の物にする工夫はあるまいかな、

おかん さうでございますね、かうつと、おゝ有りますよ、私の近所のものに、四十ばかりの後家がございますが、士族の零落でね、眞に上品な女でございますから、これを大商人の後家樣に仕立てゝ、旦那樣に惚れて、是非一所になりたい、持參金が二萬圓で、地所が七ヶ所、家作が何軒と

いふやうな事を吹いて、お話をいたしたら、あゝいふ慾の、おや御免下さいましよ、いひ附けてをるものでございますから、つひ口が辷りまして、あゝいふお方ですから、此方の話は否になつて、其をとおつしやるに違ひございません、其内に此方を急いで、お取極め遊ばして、萬々好い處まで、其後家樣の口を釣ておきますから、これはどうでございます、可なり面白いぢやございませんか、ねえ貴下、

徳之助　なるほど此奴は妙だ、あの親父なら一盃食ひさうだ、

おそめ　きつと食べますよ、

お八重　それおや、母の方は貴下の父樣がお談じなすつたのですから、貴下どうか旨くおつしやつて、破談になすつて下さいましな、

徳之助　おつと、それは心得てるよ、

鞘當（上）

五郎右衛門
徳之助

五郎衛 徳之助どうだ、彼女は人柄な、飛だ樣子の好い娘ぢやないか、

徳之助 左樣でございますかね、

五郎衛 何だ、左樣でございますかねとは、此間は好といつて大層譽めたぢやないか、

徳之助 此間は好と思ひましたが、今日よく〳〵見ましたら、一向好い事はございませんな、あんなものはおよしなすつた方が宜しいかと思ひます、父樣は御存じでございますまいが、彼女は疵物でございますよ、

五郎衛 疵物だ？ そりやどうも以ての外な、

徳之助 髷にお氣が着きませんか、あの高島田は附髷で、地は赤禿の丸藥鑵、そいつを黒油で塗かくしの、それが又馬鹿に巧く粧へてあるから、一寸分らないので、之を見付けたのがお染でございます、さういはれて見る

と、なるほど、胡亂な頭髪でした、

五郎衛　疵はそれだけか、

德之助　まだ御入用ですか、あとは左樣さ、左の脚が一寸五分ばかり短い處に、お氣は着かれますまい、

五郎衛　それだけか、

德之助　未だ許多でもあります、藥罐も跛者も我慢が出來るとして、こゝに一つ、どうでも辛抱の出來かねる大疵がございます、吭の左側に、これ位な梅干を貼てゐますから、はて變つた處で頭痛のする女だ、吭の渇かないお呪か知らんとおもつて、よく〳〵見ると、これが大疵だ、引釣！梅の吹出した痕です、彼女は私窩子をやるに違ひありません、如何でございます、流石のあなたも私窩子は驚きましたらう、灰吹屋の五郎右衛門が私窩子を内へ入れたとあつては先祖のお位牌へ濟みますまい、私も私窩子の母樣はあやまります、渡邊綱は鬼を叔母樣に持たことがあるが、

鬼の母様は類無しで、餘り珍し過ぎます、

五郎衛　いや、其處までは氣が着かなかつたが、そんな事實であつて、見れば、灰吹屋の家名に關る事だから、

徳之助　御尤、

五郎衛　破談にして、

徳之助　御尤、

五郎衛　折角約束もしたものだから、お前の嫁にもらふのは、どうだ、

徳之助　私だつて嬉しい事はござりませんが、父様が下さるといふものを、否だなんぞと申しては不孝にあたりますから、

五郎衛　いや然し、お前の嫁にしても暖簾を汚すに異は無いから、之はいつそ破談にしやう、なんぼ親だといつて、我子の嫁に鬼を持たせては、義理が濟まない、さつぱりと破談にしやう、

徳之助　いえ何、父様結構で、私のやうな不肖なものには、私窩子の嫁が相

當してをります、

五郎衛 いや、そんな女を持たせては、親の義理が濟まない、

徳之助 今日に限つて親の義理を、そんなに振廻はさなくつても、團子買つたら串やらうの平素の格で、どうぞ私の嫁におもらひなすつて下さい、

五郎衛 お前は知るまいけれど、彼女は疵物だ、高島田は義髷で、地は禿藥鑵だ、

徳之助 存じてをります、

五郎衛 左脚が一寸五分短い、

徳之助 存じてをります、

五郎衛 それから未だ、梅干が頭痛をする、

徳之助 吭で頭痛をするのでしやう、

五郎衛 さうだ〳〵、それから梅干が引釣になつた、

徳之助 毛虫が蝶になつて、親父が高利貸になつた、

五郎衛　默らつしやい、知るまいとおもつても、皆知つてゐるぞ、
德之助　何でございます？
五郎衛　何も糸瓜もあるものか、手前は彼女に惚れてゐやがるのだ、
德之助　さう知れましたら、何もかも打明けて申してしまひます、なるほど私は彼女に惚れてをるので、彼女も亦私に惚れてをるので、所謂相惚の中でございます、憚りながら、父様より私の方が先口でございます、虚だと思召すなら、先方の女にお聞きなすつて御覧なさいまし、
五郎衛　默らしやい、親の前で怪しからぬ言を吐す奴だ、惚れてゐるもゐないも、入つた話ぢやねえ、我が女房に極めたものに、指でもさすと承知しねえぞ、
德之助　父様が何とおつしやつても、私が先口でございますし、當人も亦命を賭けて私の女房にならうと、いふくらゐな中でございますから、彼はもう私の女房も同樣で、其を設ひ親であらうが、鬼であらうが、横取を

するといへば唯は舍きませんから、さう思つて下さい、
五郎衛　これ何だ、好加減にしやべれ、親を鬼と同一にする奴があるか、
德之助　息子の嫁を橫取するやうな了簡の親なら、鬼と大した相違はありません、
五郎衛　橫取々々と他聞の惡い言をいふな、何も橫取をした覺えはないぞ、おのれこそ誰に斷つて、彼を嫁にしたのだ、
德之助　御本尊樣の當人が承知で、
五郎衛　當人の體ぢや無いぞよ、親掛りの中は親の持物だ、其親の承知がなければ、斷り無しに人の物を盜むも同然だ、橫取とはおのれの事だ、
德之助　親ばかりが承知したつて、どうなるものですか、何より肝心なのは、當人の心で、親が〳〵と御大相におつしやるけれど、あなたは親をおもらひなさるのですか、
五郎衛　口の減らねえ事を吐かしやあがる、何が何といつてもな、親には勝

でねえものに極つてゐる、彼女だつて、親にいはれたからこそ得心して、我の所へ來る氣があるから、昨日も見會ひに來たのぢやねえか、否なものなら昨日來る事は無い筈だ、それでちやあんと譯が解つてゐる、彼女は親孝行な者だ、親の言葉を背かずに、あゝやつて、なう、彼所へ嫁に行け、唯といつて、孝行なものだ、子たるものは、あゝあるのが當然だのに、おのれの樣に、何かといふと面白半分に親の反對へ廻る奴が、此世の中に又とあるものか、

徳之助　あなたの樣な父親も亦多度は無いものですから、似たもの親子で、丁度好のでございます、

五郎衛　おのれのやうな奴に似られて堪るものか、

徳之助　其はお互ひ樣て、此方でも堪りませんからな、

五郎衛　何といつても、彼女は我の女房にするのだ、お前は好母樣を以て仕合せものだ、

徳之助　へヽ何とあなたがおつしやつたつて、私の女房にして御覧に入れます、父樣あなたは、好い嫁をお持ちなすつて、結構なことでございます、

五郎衛　何だ、生意氣な、彼は我の女房だよ、

徳之助　御冗談ものですね、私のに極つてをります、

五郎衛　我のだよ、

徳之助　私のですよ、

五郎衛　我のだといふのに、

徳之助　私のですよ、私の、〱〱〱〱、

五郎衛　我の〱〱〱〱〱〱、

鞘當（下）

下男権平
五郎右衛門
徳之助

権平　旦那様、若旦那様、どういふものでございます、お靜になさいまし、隣へ聞こえても、見ともなうございますわな、

五郎衛　権平か、まあ聞てくれ、忰めがの、我の家内にしやうといふ女をの、自分の女房だといつての、親に向つて種々な雜言をいふぢやねえか、そんな理窟があるものか、無いものか、考へて見てくれ、

権平　其はどうも、飛でもない事でございます、若旦那がよろしくございません、

権平　若旦那どういふものでございます、どうも父様に惡口なんぞをおつしやるのは、貴下がよろしうございません、

德之助　其がよ權平、親父が無理だらうぢやないか、おれの約束した女を横取して、女房に持つといつて、じや〳〵張るのだ、考へて見な、あのちつとはもう婆婆氣を離れて、天氣の好い日はお寺へでも參つて、極樂の捷道でも聽くやうに心掛けるがいゝやな、馬鹿々々しい、おへねえ助兵衛親仁だ、

權平　御尤でございます、

權平　旦那樣、只今若旦那樣の御了簡をお聞きまをしました所が、貴下の思召してゐらつしやるほど、無理な言をおつしやつてはゐらつしやいませんで、色々口答をしたのは惡かつた、あれは全く蟲の居所が惡かつた爲に、つひ心にもないことをいつて、今更誠に面目ない、これからは父親を大事にして、どんな事でもおほせは背きませんから、どうか今までの事は水に流して、可愛がつて下さい、年寄つた親に苦勞を懸けては濟

ないと、な、こんなにおつしやるものでございますから、どうぞまあ御勘辨をなさいまして、今日の所は何分にも、

五郎衛　それはな、あれがさう下手に、おとなしく出れば、何も敵同士といふぢやなし、親子の睦ましいのは、何より結構な事だから、我だつて何をいつまで腹に念つてゐるものか、彼女を念切つて、我の家内にする事に就て故障をいはないといふことなら、我も勘辨して、此後とも可愛がつてやらうから、よくさういひ聞かしてくれ、

權平　御尤で、

權平　若旦那樣、只今色々旦那樣の御了簡を伺ひました處が貴下の思召してゐらつしやるほど、父樣だつて何も譯も解らない事をおつしやつてゐらつしやるのではございません、どんな事でも、お前の願ふ通り聞いてやらうから、以來はどうか優くして、親子睦まじくしたい、とこんなに

おつしやるのでございますから貴下もそれで御勘辨なすつて、父様は父様のやうに、大事に遊ばさなくちやいけませんよ、

徳之助　そりやあ、父様が彼女を私の嫁にしてくれるといふことなら、其上の願ひは無いのだから、以來は生れ替つたやうに孝行な人間になつて、夫婦して大事にするわな、權平、親父は眞箇に我の願ひは何なりとも聞いてやるといつたか、

權平　えゝ、おつしやいましたとも、

權平　旦那様、それぢや御機嫌をお直しなさいまして、若旦那様、此方へお出なすつて、謝罪をなさいまし、

五郎衛　どうも權平いろ〳〵世話になつたのう、待ちな、と懐中へ手を入れる、權平は若干金に有り付事と手をむづ〳〵さして待てゐると古手拭の洟布を出して、ちんとかみ

五郎衛　之を一つ洗つてくれ、

徳之助　父様、どうぞ御勘辨なすつて下さいまし、

五郎衛　何の謝る事はない、おれも惡かつた、

徳之助　どういたしまして、皆私の不心得からでございます、

五郎衛　さういはれて見ると面目が無い、柳の枝に雪折は無し、何と思ふものかな、

徳之助　それぢや御勘辨なすつて下さいますか、

五郎衛　勘辨とも〳〵、大勘辨だ、

徳之助　それはどうも早速に難有うございます、やれ〳〵、こんな嬉しいことは無い、すんでの事に命をも捨てる所であつた、

五郎衛　どうしたと、

徳之助　あの女と添へないものなら。私は命をも捨てると申したのでござい

ます、

五郎衛　ふうむ、

徳之助　所をお蔭様で、まあ彼女を女房に持てますので、

五郎衛　ふうむ、

徳之助　私はこんな嬉しい事はございません、

五郎衛　その彼女といふのは誰の事だ、

徳之助　父親冗談ばかりおつしやいまし、焦れぬいたお八重の事でございます、

五郎衛　何だ、お八重？　あの我の見會をしたお八重か、

徳之助　そのお八重で、

五郎衛　ふざけた事をいふな誰があのお八重をやるといつた、

徳之助　これはどうも、只今思切て、私の嫁に下さるとおつしやつたぢやございませんか、

五郎衛　途方も無い、誰がそんな事をいつた、
德之助　おや、可笑いな、でも今添はしてやると、
五郎衛　手前こそ思切つて、父様に讓るといつたぢやないか、
德之助　途方も無い、誰がそんな事を、
五郎衛　おや變だわえ、
德之助　全く變だよ、
五郎衛　變も何も無え、お八重はおとなしく父様に讓つてしまへ、
德之助　あなたこそ奇麗に息子へお讓りなさいまし、その年齡て女房の沙汰でもございますまい、
五郎衛　そんな指圖を手前に受けるほど耄碌はしねえ、
德之助　耄碌しな過ぎて、息子がえらい迷惑をする、
五郎衛　何だと、おのれの樣な不孝ものは、我家には置かれねえ、子とは思はねえから、さうおもへ、

徳之助　親とも思はないから、合事でよいさの、
と拳を打つ眞似をして、五郎右衛門の鼻頭へ鐵砲を出す、
五郎衛　何をしやがる、
徳之助　よう色男の八重樣泣かせ、にう
と妙な手摸をして遁げて行く、

掘出し　一同惣出

佐助　若旦那、

徳之助　佐助かい、何處にゐるのだ、眞闇な晩ぢやないか、

遠寺の鐘がボーンと鳴る。

徳之助　えゝ薄氣味が悪い、

佐助　かういふ晩でなけりやあ、仕事は出來ません、

徳之助　泥坊じみた事をいふなよ、

佐助　でも泥坊ぢやあございませんか、

徳之助　なるほど左樣だつた、どうした、在つたか、

佐助　一寸お手をお出しなさい、

と徳之助の手を執て、曳ずつてゐる麻風呂敷の中へ突込ませる、

徳之助　いや、あるわ〳〵、

とむやみに攪旋はして、
徳之助　畜生！　好い音がしやあがる、
佐助　銅貨の音とは又格別ですね、
徳之助　天子様と平民ほど違ふからな、
佐助　私にもちつと弄らして下さい、
徳之助　弄るのは好いが、指の腋なんぞへ挾みつこなしだよ、
佐助　闇夜だから知れやしませんね、
徳之助　怪しい事をいふなよ、おい、三千圓あるかい、
佐助　勘定はして見ませんが、ありましやう、
徳之助　ありましやうで濁して、指の腋の手品は否だぜ、
佐助　大丈夫ですよ、
徳之助　やつぱり彼桐の根方にあつたかい、
佐助　五尺ばかり下に、水瓶が埋けてありましてね、其中にずつしり、

徳之助　底にまだ遺つてはしないか、お前はいつでも茶碗に二粒ぐらゐ飯粒を遺すの疾だから、

佐助　麥飯と金貨とは、大分氣の持方が違ひます、

徳之助　はヽヽヽヽヽ御苦勞だつて、褒美はしつかりするぜ、

佐助　何分お願ひ申します、

垣の外にて犬が頻りに吠える、

徳之助　馬鹿に吠えやがる、畜生め、泥坊なみに扱やがるな、

佐助小石を拾つて二つ三つ打着ける、

佐助　親指が目を覺ますといけませんから、早く參りましやう、少し手をおかしなすつて、

徳之助　爭はれないものだ、麥飯はかういふ時にいけねえ、

佐助　それは、御同樣です、何と無く下腹に應が無いから恐れる、大變大變、提灯が見えます、

徳之助　親父だ〳〵、見巡に來たのだ、
佐助　親父？大變だ、若旦那、其方は下水です、

五郎衛　奪られた〳〵、泥坊、大泥坊、桐の根が掘てある！瓶が虚になつてる、徳之助！和七！權平！あゝ、奪られた〳〵、
とじだんだを踏むで泣出す物置の陰から徳之助ぬつと出て、
徳之助　父様、何でございます、
五郎衛　奪られてしまつた、
徳之助　何を奪られたのでございます、
五郎衛　大事の〳〵三千圓、
徳之助　三千圓?!大層澤山にどうも、そんなに持てゐらしつたのですか、
五郎衛　まあ持てゐたのだ、
徳之助　はてな、此間は千圓も無いとおつしやつた癖に、

五郎衛　二三日前に、ふいと出來たのだ、實は人の預物だ、預物だから大事だと、此桐の根に埋けておいたのを、奪られてしまつちやあ、我はもう生きてはゐられない、德之助、我は死んでしまふ、

德之助　その三千圓は命にも換へられないとおつしやいますか、

五郎衛　あゝ命にも換へられない、大事の〳〵金だ、我はもう死んでしまふ、

德之助　もし其金があなたの手へ還りましたら、どうなさいます、

五郎衛　えゝ、我の手に還る、還つたら嬉しい、

德之助　嬉しいばかりぢやいけません、お八重を私の嫁にして、お染を店の和七におやんなさいますか、

五郎衛　お八重でもお染でも、金の入らない物なら、何でも遣る、

德之助　一命をも捨てやうと、いふほど大事の金であつて見れば、これはかうありさうな事でございます、あなたが屹度お八重を私の嫁にして、お染を和七に添はせるとおつしやるなら、私が働きで三千圓の在所を見附

けましやう、

五郎衛　三千圓の在所を？　頼む、頼む、此通り、

と大地に兩手をついて、ぺた〳〵お辭義をする、

徳之助　さういふ事なら、どうかして見附けましやうから、一札お認めなさい、

五郎衛　一札でも二札でも、

徳之助　それぢや奥へいつて、

五郎衛　はい〳〵、何分願ひ上げまする、

徳之助　染も和七もよくお聞き、權平は證人だ、

權平　へい〳〵、

徳之助　今話した通り、父樣が桐木の根に埋けておいて、盜まれた三千圓を私が明日中に探出せば、褒美として、お八重を私の嫁に下さる、それか

らお染を和七に添はせるといふのだが、後日違變のないやうに、父様が、
證文を入れやうといふのだ、

權平　へい成程おもしろうございますな、

五郎衛　權平何がおもしろい、

權平　御免下さいまし、

そめ　兄様、あなたそんな事を請合つて、いゝですか、

和七　若旦那、ようございますか、

德之助　心得てるよ、方寸だよ、それから、まだ一つ父様お願ひがございます、先日暇をお出しになつた佐助な、あれが改心したと申しますから、どうか勘辨をして、おやんなさいまして、

五郎衛　三千圓さへ出れば、何でも好てことさ、

德之助　それぢや、その様にお認め下さい、

證

一此方大事の三千圓、裏庭の桐の根方四尺下に埋置候事實正也、然る所、今晩盜難にあひ、一方ならず力を落し、既に命をも捨むと存候所貴殿明日中に右金子別條無く、此方の手に戻可申約束致候に於ては、萬一約束通りの首尾に相成候はゞ、右禮として、八重事は其方の嫁につかはし、娘染事は和七に添はせ、且又佐助の歸參許しつかはすべく、

權平　其處へ一寸、權平の給金倍に致しとらすべく、とお書入れ下さるやうに願ひます、

五郎衛　いゝとも〳〵、且又權平の給金倍に致しつかはすべく、後日の爲一札如件、

德之助　宜しうございます、

と證文を懷に入れて、外面の方を向いて、大聲に、

德之助　佐助々々、

佐助　へい、皆様お目出たう存じます、

と彼風呂敷包を解いて、金貨を山のやうに積上げる、

五郎衛　やあ、あつた〳〵、無事でゐたか、

と飛蒐つて、金貨を掻込む、

徳之助　目出たい、

そめ　目出たい、

和七　目出たい、

佐助　目出たい、

權平　目出たい、

と一同噪ぎ出せば、五郎右衛門も釣りこまれ、金貨の上に腹這になつて、

白髪頭を振立て〳〵、

五郎衛　目出たい〳〵、

（廿五年八月）

戀の病

（一）夫婦喧嘩

木樵七兵衛
女房おかま

七　ええ、喧しいやい。我が稼いだ錢で我が酒を喰ふのに、何が不思議があるのだ。嬶と猫は飯さへ喰はしておけば言分はねえのだ。

か　何だと、もう一遍いつてみろ。

七　謂へねえでどうするものか。嬶と猫は飯さへ……。

か　何だ、この野郎。妾を畜生と同一にしやあがつて、それで義理が濟むと思ふか。（泣聲を出して）これでもな、嫁に來た時には……。

七　新造だつたか。

か　知らねえやい。嫁に來た時にはな、夏冬の着物の四通りや五通りは持つてゐたのを……。

七　べらぼうめ、狐の嫁入だつて駕輿に乘つてらあ。素裸で飛込まれて、おたまりこぼしが有るものか。我の家は湯屋ぢやねえよ。

か　湯屋ならまだしもだ。木拾ひに少しばかり毛の生へた木樵ぢやねえか。御大相なことを謂やがるな。

七　何だ、木樵がどうした。これ、木樵だの杣だのと、餘り下直に謂ふなえ。かう見えてもな、憚りながら生れからの木樵ぢやねえ。

か　知れた事だ。誰だつて生れたては赤兒で、胎の中から柴を背負て出る奴があるものか。

七　此畜生洒落臭えことをいやがる。今こそ馬鹿な面してゐる木樵だが、舊時は何の某といふ醫者のお弟子樣で、小學問の一つもした男だ。

か　聞飽きたよ。

七　折と場合によつちや理窟も謂やあ、四角い文字も書く男だ。

か　女房の身の皮を剝いで、酒も啖やあ博奕も打つ男だらう。木樵をす

るのに理窟も糸瓜も入つたことかい。そんな事は採用にはならねえから、飲むのと打つのを罷めて、此歳暮には世間普通に餅でも舂いてよ……。

七　それは大きに御馳走樣だが、手前一體何しに此處まで跟いて來やがつた。

か　何しに汝のやうな野郎の後に跟いて來るものか、妾の前へ汝が立て行きやがるのだ。

七　此愚婦、撲しつけるぞ。

か　撲されにや來ねえ。

七　何爲に來やがつた。

か　何爲にも凄まじい。晩に食ふ飯がねえから、持てる錢を寄來せ。

七　こりや七兵衛樣が飲代だ。

か　飲むにや當らねえ。飯を食はなきやあ人間の干物が出來らあ。

七　晩の肴にそれでも燒いておけ。

か　巫山戯やがるな。

と哭きながら七兵衛にかぶりつく。

七　よせ、放せ、此獸は。

力まかせにおかまの横面を一つ喰はせる

か　さあ殺せ。飯を食はなけりや、どうで死ぬ體だ。殺されて執着いて

やるから、殺すなら其つもりで殺せ。

（二一）仲　裁

（木樵七兵衛　女房おかま　木樵作藏）

七　殺されるのに註文が入るものか。思ふ存分撲つてやるから神妙にしてゐろ。

か　撲られるのに神妙にしてゐる癡人が何處の國にあるものか。一つ撲りやがつたら一つ噬ひつくから、さう念やがれ。

七兵衛は刈りたる柴の中より手頃の枝を擇取り、掌に唾をつけてぐつと握り、

七　さあ撲つてやるから覺悟をきやがれ。

か　噬ひついてやるから用心しやがれ。

七　此匹婦！

とおかまの背をうんと撲く。

か　あ痛た、た、た、た、た。

七　噬ひつけるなら噬ひついて見ろ。

か　噬ひつかつなくて何するものか。あ痛、痛、人殺し、人殺しい。

七　樣見やがれ。此畜生、此畜生。

滅多打に打ちすゑる。

か　人殺しい〳〵。助けてくれえ、誰か。

と悲鳴を揚げて逃廻るを、七兵衛は逐懸け追回はして、散々に撃ちたゝく處へ、木樵仲間の作藏が駈着けて、

作　これさ、何したものだ、七兵衛殿。手暴なことをゑなさんな。

七　作藏殿放しねえ。手暴なことをゑても可いわけがあるから爲るのだ。

か　作藏樣放しておやりよ。さあ此野郎、殺すなら殺しやがれ。

作　さう悖つちやお前も善くねえ。早く遁げなせえ、我が呑込むゐるからよ。

か　否遁げないよ。悍りながら遁げないよ。遁げも躱れもしねえから、

野郎撲て、さあ殺せ。

七　作藏殿放しねえ。放しねえといふのに。我が拐まへられてると念やあがつて氣の强えこと謂やがる。汝の指圖を承けねえても、腹の癒えるまで撲きのめしてやる氣だ。作藏殿放しねえよ。

作　腹も立たうが勘辨しねえ。他人ぢや無し、可愛女房の事だから。

七　うんにや可愛くねえ。こんな匹婦はちつとも我は可愛かねえ。

か　可愛くねえのはお互樣だ。

作　これさ〳〵。お前が一體良くねえといふ事に。默つて彼方へ行きねえつてば。

か　何處へ行かうとお前の世話にはならねえよ。他の事よりお前こそ彼地へ行きねえな。

作　我だつて何も好き好むで、こんな面白くもねえ處へ來てえことはねえけれど、死にさうな聲を出して、誰か助けてくれといふから、わざわ

ぜ駈着けて來たんぢやねえか。

か　お前に助けてくれと賴みはしねえよ。

作　好い加減に巫山戲たことを謂へ。面白もねえ。我が仲人に入らなけりや、手前は今頃半死になつてるのだ。そんな憎まれ口を吐く手間で、大きに御厄介になりましたと、禮の一つも謂ふがいゝ。なんぼ物を識らねえお多福だつて、餘り了簡方が無法過ら。最一言謂つて見ろ、佛性の作藏樣だつて、さう〳〵勘忍はしてゐねえぞ。

か　勘忍せざあ何するのだ。

作　から爲る。と飛蒐からむとするを、今度は七兵衛が背後から抱住めて、

七　作藏殿腹も立たうが堪辨してくんねえ、我が過るから、嗅が惡いんだから。

か　惡いことは無え。何も過るにや當らねえ。作藏殿堪忍せざあお前ど

うする氣だ。

作　どう爲するものかと。　身悶して拳骨を揮揚げながら、七兵衞殿、後生だから此處を放してくんねえ。こんな甚太づう〴〵しい匹婦は、打遣らかしておくと癖になるから、思入れ懲してやる。

七　その深切は有難えけれど、微傷でもついた日には我の難儀だから、どうかまあ了簡してやつてくんねえ。

か　お前何もそんなに詫ることは無えよ。作藏殿、何だえ、打遣らかしておくと癖になるから、思入れ懲してやると大きにお世話だ。癖にならうとなるまいと、お前の嚊ぢやねえよ。折檻されるなら七兵衞といふ亭主に折檻されるよ。他の嚊の世話を燒かずとも、己が嚊の買食でもちつと謂つてやるがいゝ。こゝはお前のやうな鈍痴兒の出しやばる幕ぢやねえから、其地へ引込むで鼻毛でも拔いてゐやあがれ。

作　先刻から默つて聽て居れば、我が醉興で爰へ出しやばつたやうな言

をいふぢやねえか。道樂で喧嘩の仲人にや入らねえ。

七　尤だ〳〵。腹も立たうけれど……。

作　おゝ、腹も立ちやあ、癪にも障らあ、それが何した。七兵衛殿、お前に文句を謂ふのはちつと筋が違ふか知らねえけれど、一體お前の嚊といふのは、近所でも評判の惡たれ匹婦だ。

七　尤だ〳〵。

か　何が尤だよ。手前の嚊の惡口をいはれて、尤だ〳〵と嬉がる野郎も無えもんだ。

作　又あんな言をいやがる。七衛兵殿放しねえ。我は肚の中が沸えくり返るやうだ。

七　尤だ〳〵。

作　嚊のこんなに増長するといふのは、亭主の躾が惡いからだ。七兵衛殿、お前が餘り不斷のろ過ぎるよ。

七　我が惡かつた。これから何分氣を着けるから。

作　味噌ぢやねえけれど、我の家のお樽よ、そりやあ眞箇におとなしいもんだ。我がかういふ氣だから、隨分無理もいやあ邪慳な事もする、お前も知てゐらあ。

七　尤だ〳〵。

作　それでもお前我のやうなものでも亭主だと思やあ、無理も邪慳も辛抱して、毫釐ほども逆はずに、唯々といつてゐるぢやねえか。そこで衆樣が皆さうおつしやつて下さらあ、作藏の家の嚊はありや貞女だ。木樵風情の女房には過物だ、と謂はれると嚊ばかりが良やうだが、亭主の我といふものゝ躾が良くなからうものなら、何處の女子だつて皆此の通りだ。七兵衛殿、惡い言は謂はねえから、これからお前ちつと氣を着けて、嚊は嚊らしくのう、味噌ぢやねえけれど、我の家のお樽が好模範だ。

か　作藏殿、茶請でも買てからにしねえな。しと面白くもねえ、仲人に

入りながら、己が嚊の惚話を謂ふ奴もねえもんだ。だから其地へ行つて鼻毛でも抜きねえといふんだな。

作　此匹婦は口の減らねえ。　と七兵衛の止めるのを振拖つてお鎌の頭を三ツ四ツ搏りのめす。

か　此野郎撲ちやがつたな。

作　おゝ撲つた〳〵。最一つか。

と又ぽか〳〵と喫はせる。お鎌は泣聲を出して。

か　堪忍しねえぞ。我は堪忍しねえぞ。

七　作藏殿、お前誰に斷つて我の嚊を手込にするんだ。

作　喧嘩をするのに誰が一々斷りを謂ふ奴があるものかな。此匹婦が餘り癪に障ることを吐しやがるから撲りつけるのだ。それで惡きあ何ともしねえ。

か　あゝ痛い〳〵。頭顱が割れさうで、眩暈がして動けねえ。

七　おゝ痛からうとも〳〵。今我が讐を取てやるから、少しの間我慢しろ我慢しろ。

か　先刻撲たれた背も痛い〳〵。次手に其讐も取てくんねえ。

作　其讐は我が取てやるから、少しの間我慢しろ〳〵。

七　さあ作藏、何で我の魂の頭顱を劊りやがつた。それだから謂はねえ事ちやねえ、もしも微傷でもついた日にや、我の難儀になることだから、手暴なことを爲てくれるなと、彼程頼むだぢやねえか。

作　お前は頼むだかも知らねえけれど、我は頼まれた覺えはねえ。

七　覺えがなきや若毫碌だ。ちつと性をつけてやるべえ。　と柴をおつ取て撃てかゝると、作藏は一目散に逸げ出す。

七　樣を見やがれ。はゝゝゝゝゝ蹶づいて轉びやがつた。飛だ弱虫ぢやねえか。あれ〳〵まだ一生懸命に逃げて行きやあがる。　と柴を捨ててかゝまの側へ寄つて、

七　お前まだ泣てるな。痛えか、何した。

おかまは默然。

七　どれ〳〵ちつと撫つてやらう。

か　入らねえよう。

七　さう腹を立てるない。我が惡かつたから堪忍しねえ。お前先刻晩の米代が無えといつたけな、さぞ困るだらう。爰に少しばかりあるから、之を持て行きねえ。仕事を仕舞やあ又幾許か持て歸るから。

と懷から錢を出しておかまの袂の中へ入れる。

か　我はどうで人間の干物になるんだから、錢なんざ入りやしねえから、お前勝手に酒でも飮みねえ。

七　そんな皮肉なことを謂ふない。機嫌を直して。さあ〳〵早く家へ歸つた歸つた。

か　構つておくれでないよ。私は爰で餓学になつて死ぬのだから。

七　そんなに謂ふなえ。夫婦喧嘩は犬も食はねえといふぢやねえか。

か　そりやお腹の張つた犬の事だらう。私なんざ夫婦喧嘩でも可いから十分に食べて見たいよ。

七　だからよ、晩の米代を爰へ。

とおかまの袂を摑むと、入れておいた錢は何の間にやら無し。

七　ふゝゝゝゝゝ。

か　何を笑ふんだい、面白くもねえ。

七　お前餘程餓じいと見えて、爰へ入れておいた錢まで食つちまつたな。

か　お巫山戯でないよ。

七　いや、やう／＼山神の御機嫌も直つたところで、一稼ぎして來やうか。おい、晩に一盃中直りをやらうぜ。

か　勝手にしねえ、

七　ほい仕舞た。　と斧を擔いて、鼻唄で山路を奧へたどりゆく。

（二）尋ねもの

女房おかま
店の者源助
仝　多七

おかまは七兵衛の後影を見送りて、

「野郎、覺えてゐやがれ。科も何も無えものを、能くもこんな目に遭はせやがつたな。此讐は乾度取てやるから、然う思つてやがれ。あゝ痛い、痛い、背骨が折れさうだ。それも其理かい、こんな太い物で撲しやがつたのだ。犬猫なら一息に死てしまはあ。あんな邪慳な無鐵砲な野郎もねえもんだ。何の因果であんな奴の嚊になつて、食ふものも碌に食はずに、非道い目にばかり遭されるのだらう。あれでも亭主に持たてには、可愛いこともあつたッけが、今ぢや面見ると他人より憎くつてならねえ、何かと謂ふと直にぽん骨だ。お寺の木魚ぢやあるまいし、年中たゝかれてばかりは居られねえ。

向ふより二人連の男頻りに話しながら來る。

源　多七様の前だけれども、若い中にはあり勝の事だよ。無理もないのさ。

多　やつぱり思ひつめたのだね。

源　そこが生娘の身上さ。戀わづらひとは感心だよ。我もどうか都合して、一生の中に一度はやつて見たいと、疾から念つてゐるのだけれど、まだ運が向かないと見える。

多　まにらの富籤かい。

源　何、戀わづらひといふ奴をよ。

多　御無用になさればいゝに。はゝゝゝゝゝ。

源　冗談はのけて戀わづらひも可が、啞になるとは何たる因果だらうなあ。

多　それだからよ、お愁しいといふのだ。芳紀は十九の花盛、御容色は尋常すぐれて、御性質は善と來てゐる。外に病症もあらうのに。

源　之も前世の約束だから仕方が無い。
多　でもさうは諦められまいぢやないか。それも御不器量でもあるのなら、また何とか了簡もしやうけれど、あの御容色だ。多七やあ、なんぞとお召になる其聲の好さといつたら、ぶる〳〵つと身顫ひが出るぢやないか。それを啞娘とは、あゝ味氣無い浮世だ。
源　御不便は如何にも御不便よ。親御樣のお心がおもひやられる。
多　どうしても何かね、旦那樣は彌三郎樣を御婿にはなさらないのかね。
源　其戀男の彌三郎樣にさへ添はせてあげりや、啞でも聾でも即治らうといふものだけれど、其處が頑固の旦那だから、ならねえと白髮頭を掉り通しだ。
多　へえ、やつぱり前世の約束だ。でも唯一粒のお孃樣を、生れもつかない不具にするよりは、不承して彌三郎樣を婿にしたらよさゝうなもんぢやないかね。

源　そこが前世の約束だ。

多　前世の約束もいゝけれど、上手のお醫者〳〵と毎日騒ぎ廻はつて、今日までに三十七人お醫者を更へたけれど、ちつとも驗が見えないといふので、かうして名醫を索しには出たものゝ、見當のつかないには閉口したね。これも前世の約束かい。

源　それに前世の約束が入るものか。お醫者樣より草津の湯より、戀のやまひを治すにはつて、彌三郎樣を婿にするのが早手廻しなのだ。どんな名人上手を持ていつたつて、戀煩ひの嗌が治るものかな。

多　さう謂つて見りやそんなものだけれど、大事のお主の御病氣だから、とも〳〵に御心配をしなければ濟まない譯だ。

源　これも前世の約束かい。時に唯かうぶら〳〵あるいたつて、醫者が其處等に遺ちてゐる譯でもないのだから、何處かで一つ訊ねて見やうぢやないか。

多　訊ねるのは可いが、餘り雜談に浮かれて山へ入つて來た。麓へ返らなけりやならない。

源　おゝ彼處に女がゐる。彼に一つ聞いて見やう。

多　道を聞くのかい。

源　なに醫者をよ。

多　山で醫者を聞くのは可笑いな。

源　これも前世の約束かい。

源　もし、ちつと物がお訊ね申したい。

か　はい、何でございますかね。

源　この近所に上手なお醫者はありますまいかね。

多　此近所で無くつても、何處かに上手なお醫者の在るのを知ておいでなら、どうか誨へて下さい。源助樣、何と私の方が尋ねやうが巧者だらうが。

源　それが何の巧者なものか。我がやれば先からうだ。もしお前樣、上手なお醫者を知つておいでなら、どうぞ誨へて下さいな。とかう謂へば、近所とも遠方ともいはずに、ちやあんと旨が分るといふものだ。口數の多いばかりが巧者ぢやない。言草少で此方の胸が通じるやうでなけりやいかない。何と恐れ入たか。

多　何で恐入るものか。お前のはまだ〳〵口數が多いよ。まづかういふ調子でやつてもらはうかい。上手な醫者を誨へて下さい。何と此でちやんとわかるだらう。

源　へゝゝ、まだ口數が多い「上手醫者誨へろ」は何だ。

多　そんな言を謂つたら、誨へるものはありやしない。

源　やつぱり舊の通りが可さゝうだ。もしお神さん、此邊に在りますまいかね。

か　左樣さ、あるにはありますけれど、

多　少しお下手ですは過るぜ。

か　まぜつけえすなら聞かねえがいゝ。

源　多七樣默つてゐなよ。もしお前樣了簡して下さい。此男は一躰口が惡くつていけない。私に誨へると思つてね。

か　お前樣方は上手な醫者を尋ねてどうなさるのでございますえ。

源　はて、どうするものかね、大病人があるからさ。

多　病氣にお醫者、死人に僧侶、牡丹に唐獅子、竹に虎、こりや謂ないでも附物だ。

源　默つてゐなよ、三十七人まで醫者を更へたけれど、少しも功驗が無いといふもので、家中大心配で、毎日手分をして醫者を探しにあるくといふ始末さね。へえ、上手な醫者がありますかい。

か　ありますがね、其病氣といふのは何ですえ。

多　この代脈ぢや、ちと怪しいものだ。源助さん魅まれない内に行かうよ。

源　啞さ。戀わづらひから啞になつた娘だがね。

か　それはまあ仕合な、啞や聾、盲目に跛なんぞといふ不具には、二人と無い名人の先生がありますよ。

源　啞や聾、盲目に跛なんぞといふ不具には、無類といふ上手の大先生

がありますとえ。
多　それはいゝや何とも難有い事で。やれ〳〵源助樣よいお方にお目に懸つて、こんな仕合せな事は無い。
源　もしお前樣は助ける神だ。
多　少さな聲で神樣にしては御服裝が惡いやうだが、やつぱり塵紙樣の方だらう。背中に瘰癧があるやうだ。
源　そうして其お醫者樣のお宅は何地ですかね。
か　居宅は此山の奧の奧で、とても人の往來は出來ない處ですが、每日今頃は米を刈りに、これから五町ほど奧まで出懸けてお出なさるから、それへ行つて賴むでござらんなさい。
多　へえ、お醫者樣が木を刈りに。なるほど藪ではないといふ看板だ。
か　まあお聞きなさいましよ、其先生はね、謂はゞ偏人さね、世間に名が知れて療治を囑まれるのが懊惱いつてね、お前樣、こんな山中へ引籠

むて、まことに汚ない衣服をして、蓬々と髭髯を生して、そりやあ誰が見たつて、正銘の木樵でございますけれど、療治にかけたら大先生さ。

源　なつ、名人先生といふものは皆然うしたものだ。一寸見ると木樵で、業にかけると古今の大名醫。なつ、よくある奴だ。噫、慕はしい。金側の時計や象牙の木槌で威かすのとは類が違ふ。身には襤褸を纏ふといへども、心に錦を飾るといふ奴だ。それが眞の名人といふのだ。そうして其先生のお名前は。

か　名は七兵衛……。とぎつくり塞る。

多　名は七兵衛、變だね、

源　變てないよ。變でないてことさ。さういふ變つた先生の事だから、どんな名をお附けなさるか知れやしない。七兵衛先生とおつしるかね。

か　本當は何とか難しい覺えにくい名があるのださうでございますけれど、皆が七兵衛といひますよ。

源　なるほど、別に立派なお名がおあんなさるのだけれど、世を忍ぶところから、俗に七兵衛とは、あゝ好くお附けなすつた。

多　八兵衛だつたら嘸可笑からう。

源　そりやお前の在所の飯盛だ。

多　飛だことをいふ神田子に在所があるものか。

源　其先生の療治のお話をしやうなら、現に私の知てゐるので、こんな事がありましたつけよ。

源　なるほど。

か　今年の春の事でね、お前樣、つい近所の妻さんが産後で死にましてね。

源　やれ〳〵。

か　跡には乳呑ともに三人も子供がゐて、其日暮しの貧乏人といふもんだから、目もあてられない始末さね。それを先生が聞いて、餘り不便だ

からつてねお前樣、我が其女を助けてやるつてねお前樣、十日も日子の經つた死人を掘出して、

源　はてね。

か　二日の間療治をしますとねお前樣、どうでせう、三日目の午餉にはお粥を食べましてね、今ぢやぴん／＼して働いてるぢやありませんか。

源　ふうむ、はてね。

多　其技倆ならお孃樣の啞なんぞは、お茶子さい／＼だ。

源　え、どうだい。多七樣、宏大な先生もあつたもんぢやないか。

多　（小さな聲で）狐樣でも役ふんぢやないか。

源　滅多なことをいふなよ。お蔭樣でまあ大事の人一人が助かりました。それぢや此からいつて、其先生を是非お賴み申して來やう。定めし旦那樣は大お喜びだらう。いづれお禮にあがります、お前樣のお宅は何地で。

か　そんな御心配には及びませんけれど、其先生は容易な事ぢや療治を

引承けてくれませんから、それで何時でも衆が弱り果てますのさ。

源　引承けてくれない。それは成程大弱りだ。

多　そりやあどういふものでね。

か　やつぱり其偏人からでせうけれど、衆が囑みにいくと、我は醫者ぢや無い、此通り木樵だ。それは人違ひだらうなんぞつて、自悔けて合手にしなさらないから、いつも皆が窮りますのさ。

源　なるほどね。講釋で聞くと、昔時蜀の元帥諸葛亮字は孔明といつた人は、其始田舍に隱れて、自から鍬を取て耕してゐたといふ。百姓に身を窶してゐたのだ。七兵衛先生の木樵もやつぱり孔明の百姓と同じ格だ。こゝに豪傑の世を忍ぶと聞いた劉備字は玄德が、此人を大將に賴みたいばかりに、三たび其蘆を訪れて禮を盡したので、流石の孔明も唯といつたさうだ。

多　口說事は兎角第一押さね。

源　今熟考へて見るのに源助多七は玄德關羽だ。

多　どつちが玄德だい。

源　どつちでも可ぢやないか、これは物の比喩だ。

多　だからさ、どつちを玄德に喩へるのだよ。

源　分別のある方が玄德さ。

多　さしづめ我だな。玄德字は多七。

源　はゝゝゝゝゝ弱さうな字だ。

多　お前が關羽字は源助。

源　後の方で青龍刀を持てる人の名のやうだ。まあ、どつちでも可いとして、七兵衛先生が諸葛孔明さ。何でも禮を盡して叮嚀にお頼み申したら、承知をして下さるだらう。

多　此山へ三度も來るのは御免だね。

多　そんな不性な玄德があるものか。

多　今度からは玄德字は米吉を差遣はすことにしやう。

源　不可々々。やつぱり玄德字は多七さ。もし叮嚀に大先生扱ひにしてお願ひ申したら、七兵衛先生も引承てくれましやうね。

か　そんなちよろつかな事ぢや無効さ。

源　はてね。

多　關羽大きに凹むだな。玄德是に於て則ち弱つた。

源　それぢや何したら承知して下さるだらうかね。

か　かうするのが一番さ。まづ始めは叮嚀に一通りお頼みなさい。先生は請合つて、我は木樵だと不知を切るから、疊みかけてお頼みなさい。それでも自晦けたら、其時はお前樣方は、ぐつと癪に障つたやうなかほをして、

多　一寸待つた。源助樣、お前癪に障つたやうな顏が出來るかい。

源　色男の顏をしろといふ註文なら、ちよいと間に合ひかねるかも知れ

ないけれど、癪に障つた顔なら、一寸したところて、こんなものよ。
と齒を喰ひしばつて鼻に皺を寄せて、張臂をして見せる。

多　は丶丶丶丶丶丶腹を立つたり癪に障つたりする時は、眦の釣昂がるのが例たのに、お前のは釣垂つてるよ。

源　それは平時よ。

多　餘所行でも同じくだ。

源　そんな不景氣なことがあるものか。よく見な、そら。
と又前のやうな顏をすると、お鎌も多七も哄と失笑す。

源　さあもう眞面目だ。そこでお神さん、癪に障つたやうな顏をして奈何しますね。

か　取捉まへて、どし〳〵撲りつけて……。

源　誰をね。

か　七兵衛の……先生樣を。

多　取捉まへて撲る？

か　さうですよ。

多　源助樣、そろ〳〵眉毛に唾だよ。どうも初手から話が可笑いとおもつた。

源　さうさね。病人を賴まうといふお醫者を、どし〳〵撲りつけるは、ちつと手暴いやうだね。

か　それがお前樣傳授なんですよ。もし醫者だといふことを白狀しなければ、いつまでも撲るぞ。さあ醫者か、これでも醫者でないか、と無茶苦茶に亂打すと、仕舞には實は醫者だが、病人はどんな樣子だと、やう〳〵口が開きますから、何でも思入れ手酷く引ぱたかなけりやいけませんよ。誰でも皆然うして賴むので、外には賴みやうはありやしません。

源　へえ〵、唯不思議だね。そんなに撲たれても痛くは無いのか知らん。

多　お手前もの〵打傷の膏藥で、鏁帷子でも拵へて着込でゐるものだら

う。

か　いゝえ、撲れて痛いから、仕方無しに白狀するので、これが道樂といふのぢやありませんとさ。

源　誰がまた撲れるのが道樂といふ奴があるものか。だが、眞箇にそんな無法な事をして可いのかい。

か　可い段ぢやございません。さうしなければいつまでも不知を切るので、誰も氣毒だとは思ひながら、取捉まへてどし〳〵やるのですよ。

多　それでも先生は憤らないかね。

か　極氣の小さな方だから、ひい〳〵泣きながら過りますのさ。

多　過る？　泣きながら。さう聞いたら急に腕が唸つて來た。かねて覺えの一刀流の極意といふところで、曳！と聲をかけて、竹刀を持つやうな手摸をして、飛蒐つて源助の肩を打つ。

源　あゝ痛、えゝ吃驚すらあ。

多　此骨でいくから堪るまい。最一つ曳!!
源　あゝ危ねえ。稽古なら其地の方でやつてくれ。
多　茶巾搾の手裏といふ奴で、それ、かういふ鹽梅しきに、曳!!!と又跳る。
源　これさ、危いといふのに、もう好加減にしないか。
多　敵が氣が小さいと來てゐるから、大きに腕前が顯し能て。
源　又曳！を御免だぜ。それぢやお神さん、二人で散々な目に遭はせるが可いかね。
か　思入れ撲きのめしておやんなさい。
源　もし話が違つて、怒られたら奈何せう。
多　私はお先へ御免蒙つて駈出すよ。
源　先方は木樵で鍛へてあるから力がある。此方は二人とも………………あゝ氣味が惡くなつて來た。

多　源助様、某未熟なりといへども、北辰一刀流の心得があるから、曳！

（と撃込の眞似をして）此調子だから安心をおし。

源　逃出ながらの曳！なんぞは、一向頼みにはならないからね。

か　お前様、そんなに御心配なさることはありませんから、まあ行て御覧なさいよ。

源　然うかねえ、屹度心配はいらないね。

か　大丈夫。

源　多七様。それぢや出掛けやうかね。お神さん大きにお世話様。

多　大きに難有うございました。

か　そんなら行ておいでない。

二人は話しながら登つて行く。お鎌は跡を見送つて。

か　行きやがつた〳〵。こりや面白い、野郎め、卒然に先生なんぞと謂はれて、狼狽するところを亂打されて、どんなに吃驚しやがるだらう。

はゝゝゝゝゝ好氣味でならねえ。

（五）先生樣（木樵七兵衞 / 全店の者 源助 / 多七）

多　源助樣もう大分來たぜ。此處等にゐさうなものだがね。

源　然うさ。　と小立りて四邊を見まはす中に、唄をうたふ聲が聞こえる。

源　や、聲がする。

多　何か謳つてる。

「酒とナア酒とナア、酒と女はナアヤレ。

源　多七樣、お前の好きさうな唄だぜ。

「どちらもナア好いが、

多　なるほど尤だ。

「女買たとてナアヤレ醉ひはヨイコノ醉ひはしよまい。（木を伐る音こつんこつん）

源　結末がちつと不得心だらう。

多　だらうと謂ふと私ばかりが然うのやうだけれど、お前だつて同斷だらう。第一癪に障つた顏の出來ないといふ人だもの。

多　そんなに謂ふことはない。これでも相應に女は出來る奴さ。

多　やあ、居るぞ〳〵。源助樣、例物は彼處に居る。

源　どれ〳〵。なるほど居らつしやるわい。斧を腰に插して樹から下りて來る恰好は、どう見ても木樵の七兵衞だ。

多　あゝ辷つた〳〵、此奴は面白い。

源　何が面白いものか。早く行て賴まうよ。忘れても麁細な詞遣ひをしちやいかないぜ。

多　承知々々。それから後が一刀流か。何か得物が無くつちや可笑くない。此木の枝を一本宛用意していかう。

源　毆る時の用意にはいゝが、最初からこんなものを持てちや良くない。

多　でも、それッと謂ふ時に得物無しは窮るね。

源　彼所等に何か遺ちてるだらう。

多　そりやいけない。武道に心を寄せないものは、直にそんな言をいふけれど、

源　お前のぶだうなら栗鼠が喜ぶだらう。

多　憚りながら甲州の本場だ。

源　今年は外れださうだね。

多　この位の奴が一房八錢ぐらゐさ。

源　直に直段のことをいふ男だ。

多　懷中に其物が滿とあるからさ。

源　そりや內の旦那の懷中だらう。

多　能く御存じ樣で。

源　や、もうお前は直に冗言をいふから用が辨じなくつていけない。さ

あさあ早く行かう。

多　直に直段をいつたり、直に冗言をいつたり、私も忙がしいことだ。

源　それが冗言だといふだ。

多　それむだことか。こりや巧い、こりや好い洒落だ。歸つたら早速手帳へ記めておかう。

源　まあ何でも可いから早く行かうよ。

多　源助樣、そんなに野暮に急ぐことはないよ、可哀さうに足弱を伴れながら。

源　何處に足弱を伴れてるのだ。

多　此處にさ。多七樣といふ……。

源　呆れて物が言へない。足弱の向脛にそんな熊のやうな毛が生へてゝ堪るものか。

多　これで心が弱いのだ。

源　ちつと三里でもすゑるがいゝ。

多　灸は熱くつてね。

源　それぢや水灸といふ奴が可からう。

多　へえ、水灸といふのは始めてだ。何するのだ。

源　並の灸は艾に火を着けるのだが、水灸は艾の頭へ水を滴らすのだ。すると、艾がじと〳〵になつて、宛然粕庭羅のお茶漬といふ鹽梅になる。

多　なるほどね。

源　さうすると冷りと感じます。これ則ち水灸さ。

多　それで利かうか。

源　考へても見るがいゝ、利かう理がない。

多　何だ、くだらねえ。

（十八）

七　おや、向ふから來る奴がある、何だらう。はあ、道に迷つたのだな。

樹下にて瓢簞を取出して飲み始める。

七　あゝ甘露々々も古いが、これだから廢められねえ。可愛い嚊と釣換の酒だから、麁末に飲むと嚊罰があたる。ちび〳〵大事にいたゞく事だ。おつとゝつと散ります〳〵か。はあ面白い。酒といふ奴は對手が無くつちや旨くねえものになつてゐるが、お對手も可けれど、多度も無え酒が減るので否でならねえ。そこで獨りで差いつ押へつか、これが一番いゝ。

源　多七樣あれ〳〵先生は瓢簞酒と洒落出した。いかさま凡人では無い處がある。

多　瓢簞の酒を飲で凡人でなけりや、花見時分には凡人で無いだらけだ。

源　わからない事を理窟ぽく謂ふ男だ。我の凡人で無いといふのは、瓢

簞の酒を飲むばかりで謂ふのぢやない。それで凡人で無けりや、此間の晩臺所へ忍びこむで、菰被の呑口から喇叭をやつたお前なんざ、極凡人で無いわけ

多　翌日早速露顯して、旦那の前で恐入た形なんぞは、あれで餘り凡人のしない藝だ。

源　はゝゝゝゝお前は罪が無いから可愛いよ。

多　奴も似たことを謂やがつたつけ。

源　直それだから、憎い。

多　それぢや可愛いのか。憎いのか。

源　和ぜて二分にしやう。

多　何分宜しくお賴ん申します。

この中七兵衛の傍近く來る。

源　さあもう默然だよ。えへむ。

多　えへむ。

源　先生樣これにお在でございましたか。

多　今日は結構なお天氣樣で。

七兵衛はまご〳〵して、

七　何でございますかね。　と瓢簞を隱す。

源　手前どもは直この筋違町の鶴屋の店のものでございますが、先生樣に是非お願ひ申したい事がござりまして。

七　私は七兵衛といふもので、何か大方人違ひでございませう。

源　(小さな聲で)始まつたぜ。

多　(小さな聲で)待てゐました。

源　否もう決して人違ひでは無いので。

七　人違ひではございません、やつぱり木樵の七兵衛に何か御用で。

多　(小さな聲で)來たね。

源　是非先生樣でございませんければ、外に療治を願ふお醫者樣はございませんほどの病人でございまして、手前主人の娘でございまするが、今年十八歳に相成まする。

七　十八歳？へえゝ盛だ。

多　(小さな聲で)こりやあ成程酒と女はだ。

源　ところが先頃近所の息子を不圖思ひ染まして。

七　出來ましたかい。

源　是非彼人と夫婦になりたい。もし此願が愜はなければ私は死でしまふと、此樣にお孃樣はおつしやるのでございまするが何分にも身分が釣合ひません所から、旦那樣は御承引がございませんで、もしもの事があつてはと、一間へお孃樣を推籠めておゝきあそばしますと、その戀ひしい戀ひしいが高じて、此頃では啞におなんなさいましたので、旦那樣の御心配といふものは尋常ではございません。百人近いお醫者樣に診てい

たゞきましたが、一向驗が見えませんで、御病氣は募りまするばかり。これは先生樣の御藥でなければ到底治るまいと、かねぐ\御名前を承まはり及んでをるものでございますので、手前ども二人がお迎ひにあがりました。何卒まあ格別の思召をもちまして、手前宅までお來臨を願ひたいわけで、

多　へい何分どうかお　ひ申しまする。

七兵衞は希有な顏をして、

七　へい。　と唯呆れてゐる。

多　これから直に御隨從をいたしまして。

七　私を醫者だとおつしやるのかい。

源　御意にござりまする。世間に御名が知れて持囃されるのが懊惱とかおつしやるやうな思召で、

多　洒落に木樵なんぞと姿をお變へなすつて、皆最存じてをります。

失ながらかお幽しいことに存じまする。

多　お醫者の孔明だなんぞと、世間では專らお噂を申上げてをりまする。

七　飛でもねえ。私は此通り生れからの木樵でございまさあ。木樵に病氣が治せるもので。馬鹿々々しい。

源　先生樣お蔽しなすつてもいけません。

七　何を蔽すもんで。木を伐て山から背負出すより外に、藝は無い七兵衛でございまさあ。

多　それが先生樣お蔽しなさると申するものでございます。

七　否何も蔽しませんよ。誰でも知てる事だ。

源　それ〳〵、誰でも知てるとおつしやるのは、先生樣のお蔽しなさることでございます。

多　一人娘を不具にする親の身にもおなりあそばして、何卒まあ今度の所は。

源　お慈悲でございまする。

七　そりやあ病氣を治せるものなら、何だつて蔽しますものか。知らねえ事は奈何も仕方がございませんよ。

多　源助樣、そろ〳〵始めやうぢやないか。

源　最よからう。もし先生樣。

七　私は七兵衛といひますよ。

多　そんなら七兵衛先生樣。たつて貴下が不知をおきんなされば、甚だ失禮ではございますが、手暴いことをいたしましても、白狀をおさせ申しますが宜しうございますか。かう見えても手前は北辰一刀流を少々心得てをりますよ。

源　先生樣、固執お蔽しなさるのは罪でございます。

七　設ひ何が何であらうとも、そで無いものは仕方がございませんよ。

源　それぢや手込にいたしても白狀おさせ申しまするが、いよ〳〵宜し

うございますね。

七　手込とは。

多　毆打るのでございます。

七　毆打る？　こりや堪らねえ。　と迯出す。

多七は手早く木枝を拾つて、後から七兵衛を袈裟掛に撲く。あつといふ所を源助が飛蒐つて、領を執て曳倒す。

源　多七樣、さあ一刀流だ。

多　よし來た。奈何だ一番。これでも醫者でねえか。醫者か、醫者でねえか。

と滅多打に打ちすゑる。

七　人ごろ………しい。助けてくれえ、助けてえ……。

源　命を取らうとは申しません。こんな事をいたしますのも、先生が餘りお蔽しなさいますから。

多　一刀流の袋だゝさ、何と利きますか。
七　あゝ待た、待てくれ。
源　それぢや白狀なさいますか。
多　白狀しない內は、曳！やッ！
七　疼い、たい〳〵死ぬ〳〵。
多　曳！やッ！
七　あゝ白…………白狀する。
源　多七樣少し待ちな。それぢや先生白狀なすつて下さいますか。
七　それでも醫者でも何でも無えものを。
多　曳！　と聲を懸かて枝を揮冠る。
七　あゝ情無え。私が醫者なら何としなさる。
源　何と爲るものでございますか。前申上げまする通り、お孃樣の戀わづらひの御療治をお願ひ申したいので。

七　私の醫者だといふことは、誰からお聞きなさいました。
源　世間一統誰でも存じてをりまする、なう多七樣。
多　知らぬは亭主ばかりなりッ。
源　これ。　と目授て叱る。
多　皆存じてをりまする事で。先生樣の御療治で、死人が生回つて、二日目にはお粥を食べたことなどは、知らないものはございません。
源　然う〳〵、恐入りましたもので。何分手前主人の娘にも右樣の不思議の御療治をお願ひ申上げまする。
七兵衛は暫時思案せしが、卒に樣子を變へて、ぐつと大風に、
七　二人のもの。
源助多七一度にへい〳〵と腰を屈める。
七　折角の需ぢやによつて、診てとらせやうかの。
源　へい〳〵、難有う存じまする。

多　只今の失禮は幾重にも御勘辨を願ひ上げまする。
七　あゝ苦しうない。免すぞ。
多　へい〳〵。難有う存じ上げまする。
七　時にお前の名は何と謂ふかの。
源　手前事は源助、此者は多七と申しまする。
七　源助に多七か。時に源助や、
源　へい〳〵。
七　我は此服裝の外には羽織一枚持たんでなそれでも自分は一向苦しうないが、病人が信仰せまいと思ふによつて、やつぱり醫者らしうして行かずばなるまいとおもふが、
源　御意にござりまするとも。
七　途中で一寸衣更へて參りたいが、新しいのには及ばんからの、古着屋でゞも調へたいものぢやが、お前少々持合せがあるかな。

源　へい。　と多七の方を向いて小聲に、

源　お前若干金ある。

多　四十五錢と青錢が少しばかり。

源　窮つたな。私は壹圓が一枚に白銅が三ツに五厘が一ツだ。

七　奈何ぢやの。

源　へい〳〵唯今。併せて二圓にはならずと。

多　それぢや仕樣がない。

七　二圓が如何いたした。

源　へい〳〵。それぢや鶴屋の顏で借りて、惠比須屋で何か見て差上げやうぢやないか。

多　それが可い。然しやうよ。

七　どうぢやの。相談は附いたか。

源　へい宜しうございまする。それでは此から直に手前方へ。

七　行かうよ。　と諸事顋て物を言ふ。

多　御苦勞樣に存じまする。

（七）御診察

鶴屋龜右衛門
店の者　源助
仝　　　多七
乳母　　おむら

源　へい旦那様、

多源　唯今歸りました。

龜　おゝ大分晩かつたが奈何だつたな。

源　旦那樣、お懽びなさいまし、無類極上といふ上手のお醫者がございました。

龜　いや其は何よりだつた。御苦勞々々々々。何邊にお住居の先生だな。此近邊には然ういふ名人のお醫者樣は無い理だが。

多　ところが隣村の山中にゐらつしやいまして。

龜　迷子にでもなつてゐらしつたのかい。

源　どういたしまして、之には段々深い因縁がございますが、搔摘むで

お話をいたしますれば、其先生といふのは殊外の偏人で、世間に知られるのが可厭だといふので、山へ引籠むで木樵をしてゐらつしやるので、途で遭ひました女から其事を聞きまして、早速先生へお願ひ申しに出ました所が、なか〳〵御承知が無いのを、無理にお願ひ申して參じました。

龜　いや、それは色々御苦勞だつた。山氣の無い然ういふ先生に限つて、業は屹度確なものだ。さうして先生の御名前は。

源　お名前は……御本名は深く秘してゐらつしやいますので、誰も存じたものはございませんさうで、俗に七兵衛先生とおつしやいます。

龜　七兵衛とえ。

源　左樣でござります。

龜　早速これへお通し申して。

多　畏まりました。　と立て行く。　入違ひに乳母のおむら、

む　おや源助樣、お歸んなさいまし。

源　唯今。お嬢様の御容躰は如何でございます。

む　どうもお宜しくないので、御心配申してをりますよ。唯今一寸うかがひますれば、大層上手なお醫者様がお出になりましたさうで、まことに結搆なことでございますが、お嬢様の御病氣は到底お藥劑で御本復なさることではございませんと存じまするから、此間から冗くお願ひ申しまするやうでございますが、お嬢様もあんなに思召してゐらつしやるのでございますから、彌三郎様をお婿様に…………。

龜　成りませんよ。それを承知するくらゐなら、始めから何でこんなに騒ぐものか。

源　御尤でございますとも。

む　源助様、お前様默つておいでよ。

源　それはもう旦那様のおつしやるのが、御尤でございますとも。

む　お前様の口を出すところぢやないよ。

源　私の口を私が出すのに、お前の指圖を受けるものか。

む　えゝ惡臭い口だよ。（と鼻に袖をあてる）

源　へん、毎朝鹽磨にする口だよ。此口が臭けりや鯛の刺身も腥さいのさ。

む　鯛の刺身なんざあ大嫌ひだ。

源　刺身に聞いて見な。乳母殿なんざ鯛の方で御免だと謂わあ。第一お前鯛の刺身を嫌ひだといふが、食べたことがあるのかい。此間御年回のお膳に醋味噌で食べたのは、ありや蒟蒻の刺身だよ。

龜　何處の國で精進に鯛をつかふものか。

源　それは左樣でございますが、乳母殿が餘り分りませんから。

む　源助樣、乳母殿々々々といふのは、よしておくんなさいよ。

源　それぢや今度から乳母樣、按摩樣とも聞こえれば、鈍間さんとも聞こえる。皆似たものだ。

む　えゝ大きにお世話だ。一廉手柄顔に何處の藪だか竹子だか知れもしないものを引張て來て、御大相なことを謂つて、御病氣が治らなかつたら可笑なものだ。

源　治つたら可笑なものさ。

む　治るなら治して見るがいゝ。

源　治さなくつて奈何するものか。今日おつれ申した先生を、尋常の先生と思ふと大きに豫想が違ふよ。憚りながら十日や廿日ぐらゐ經た死人なら、この先生が手掛りや、二日目にはむく／＼起きて、お粥を食はうといふ腕前だ。吃驚するなよ。

む　あの御病氣が治つたらお目に懸かるよ。

源　その難病を治すのが名醫先生だ。

む　何といつたつて治りつこは無いよ。

龜　縁起でもないことを謂ふな。乳母といへば字で書けば乳の母だ、親

も同然なものだ。子の病氣なら些とも快くしたいとおもふが人情だのに、治りつこは無いと極めてゐるといふ法があるか。

源　さうでございますとも。一躰乳母樣は不人情でございます。

む　治りつこは無いと申しましたつて、お孃樣の御病氣の治らないやうにと念つてをります譯ではございません。また何で私がそんな事を念ひませう。旦那樣餘りな事をおつしやいます。昨日や今日御奉公にあがりました私ではございません。慾や德で乳母なんぞが勤まるものではございません。私は今年で十五年御奉公いたしまして、在所から嫁の口があるから、餘り老けない内にお暇を戴いて歸れと、一時は懊惱申して參りましたが、お孃樣にお牽かされ申して、來年は來年はと、一寸逃れの返事ばかりいたして、一向お暇を取らないものでございますから、兩親も怒てしまひまして、そんな奴は子では無い、子とは思はないからとほろほろ涙を流して歸つて來るには及ばない。一生奉公でも何でも勝手にし

ろ。此後どんな事があつても、家へは入れないから左樣思へと、私は勘當されてしまひました。何だか恩にお被せ申すやうではございますが、私の兩親に捨てられましたのも、お孃樣のお側が離れられませんばつかりでございます。其節此事をお孃樣へ申上げましたら、村やお前は其ほどまでに私を思つておくれかい。私も蚤く御母樣を亡くして、お前のお蔭でこんなに大きくなつたのだから、私はお前を實の御母樣と思つてゐる。

龜　尤だ〳〵。と龜右衞門も泣出す。此中で源助獨り野分を知らぬ酉瓜哉といふ態で大いにてれてゐる。

む　後生だから村やお前一生私の側を離れずにゐておくれ、とこんなにおつしやつて下さいますのに、私はなほ〳〵お可愛くつて、(とめそ〳〵泣く)

龜　だからよ、我は何もお前を不人情だと謂ひはしない。源助が謂つた

のだ。

源　おや〳〵。と頭を搔く。

む　源助樣がそんな事を申しても何とも御叱責のないのは、旦那樣がおつしやつたのも同じでございます。

源　えゝ此乳母は惡く附上りやがる。

龜　源助お前が良くない。

源　へい。

龜　お村にお詫びなさい、唯今は惡い言を申しましたと。

源　私が過りますか。そんな覺えはございません。

龜　覺えが無いとはいはせない。十五年も何一つ落度無く奉公して、主人の爲に兩親の勘當まで受けたほど實意のあるものを、お前は不人情だといつたぢやないか。それが良くないから過んなさいと謂ふのだ。

源　おや〳〵、全然風が變つてお藏に火が着いた。

龜　縁起でもないことを謂ふな。早く詫びなさい。

源　氣が利かない話だ。乳母なんぞに過るのか。

龜　何でも可いから早く詫びなさいよ。

源　唯今支度をしてをります所で。

龜　詫をいふのに支度がゐるものかな。

源　詫にも種々ございます。乳母には乳母のやうに詫びますから。旦那樣それぢや詫まする。乳母樣まあ御免なさいまし。

む　知らないよ。

折から襖の外にて、七兵衛先生の容體咳、えへむ、えへむ。

（八）

龜　さあ先生様此方へ、どうぞ此方へ。

七　あい、お構ひ下さるな。

龜　今日は好うこそお出下さいました。手前が當家の主人龜右衞門にござりまする。

七　はい／＼左様で。

龜　早速ながら願ひまするは、娘でござりまするが、

七　なるほど、

龜　先月の末頃よりいたして、卒に痞に相成まして、

七　なるほど、逢ひたいが癪、見たいが病、あゝ道理でごす。

龜　へい。

七　若い内には有る事で、道理でごす。

龜　へい。よく御存じ様で。

七　はッはッはッ、それは直に識れまするて。まづ病家へ參ると、此病人は何を煩つてゐるといふことは、四五町手前から明かに識れるてな。其家の家棟にそれ〲の邪氣が立つことで、之を觀て、あゝ何の病症だなと鑑定するぢやて、

龜　へえい。　と無上に感心するゆゑ七兵衛は圖に乘りて、

七　然れば今日も鑑定したやぢて。お宅の屋棟の上の方にあたつて、男女和合の氣がむんむと昇騰つてをつたから、はゝあ、これは色戀の邪氣を感じたものだなと。病人の脈を執てから、病を候るやうなことでは、否まだ〲青いて。

龜　へい〲。

七　御主人私の診察が違ひましたかな。違ふまい、違ふ道理が必ずしも無い。爭はれんもので、この病人の住居する家の屋棟には、それ〲の

邪氣が立つもので、名醫は之を觀て忽ち鑑定するぢやて。時に孃樣のお名前は何とおつしやるかな。

龜　娘の名前の邪氣などは立ちますまいでございませうか。

七　諸の病症の邪氣は立つことであるが、名前は恐らく病氣であらんから邪氣は立たんな。

龜　左樣でございますか。娘は類と申しまして、當年十八歳に相成まする。

七　ほゝう、鬼も十八とか謂つて娘盛り。色氣といふ邪氣の立つ頃だ。

龜　如何でございませう。瘖など〻申すものは、すつぱり治るのでござりませうか。

七　治る瘖もあれば、治らぬ瘖もござるてな。御主人唯今彼所の唐紙の陰から隙見をいたした婦人は、彼は何者でござるかな。

龜　へいどうも恐入りました。これ、失禮な、何の事た。

七　否々御叱責には及ばん。彼は御内賓でござるか。

龜　いえ彼は娘の乳母でございまする。

七　孃樣のお乳母？あゝ美婦でござるな。

龜　へゝゝゝゝどう仕りまして、

七　否全く美婦でござるよ。何歳ぐらゐでござるな。

龜　三十五か六かでござりました。へい。

七　若い、それは若い。あゝ好い年紀だ。三十五六は年增盛と醫書にもあることぢやて。

（九）

龜　先生樣、それでは恐入りまするが、娘の居間へ御出を願ひまする。

七　お居間には今のお乳母もをりまするかな。

龜　へい夜晝附切つてをりまする。

七　それは結構。　と立上がる。龜右衛門先に立つて、

龜　此方へどうぞ。

七　はい〳〵、時に御主人あのお乳母の名は何と申しまするな。

龜　村と申しまする。

龜　お村樣かな。はゝゝゝゝゝ。

娘の室の外に乳母は出迎へる。七兵衛恐悦にて、

七　いや是は〳〵御出迎かな。

とお村の肩を一寸擲くと、おほゝゝゝゝゝと無理に愛嬌笑ひをする。

七　これ然う愛嬌を振撒いて。男が迷つたら奈何する氣だ。醫者などは實に惚れッぽいものじやに由て、氣を附けんければならんよ。

む　あんな御冗談ばつかり。

七　冗談では無い。　と乳母の側へ寄つて行く。

龜　村何の事た。　と睨む。

七　否御叱責には及ばん。お前これへお出。

む　はい。

龜　はいでは無い。彼地へ行て早くお茶でも持て來い。

七兵衛は乳母の立て行くを見送つて、

七　あゝ後妻も好い、褄外れも準繩だ。

龜　お褒めて恐入ります。

七　御主人彼は定し御秘藏のお乳母でござらうな。

龜　否格別秘藏と申すこともございませんで。

七　虛言をおつしやるな。御秘藏に相違ない。

龜　何か左樣な邪氣でも立まするでございますか。

七　如何樣、邪氣、邪氣、萬事邪氣で顯れるで爭はれんて。御秘藏に相違ござらんよ。

龜　秘藏と申すほどのことはございませんで。

七　それでは彼は主無き花でござるかな。

龜　何とおつしやいます。

七　いや時に御病人は。

龜　先刻から彼に控へてをりまする。

七　おゝ成程美婦であらつしやる。

ゐ　あゝ、えゝ、あゝゝ。

龜　あの通りの始末でございまする。

七兵衞はおるゐの顏をじつと視てゐる。

龜　先生樣、先生樣。

七　噫美婦だ。惜いものを瘖になすつた。

龜　好き好むであんなにいたした譯ではございませんが、これも前の世から定まる因縁でゞもございませう。と凋れる。

七　否然し御心記には及ばん。之は治ります。

龜　あの此病氣が治りまするか。

七　治ります。御主人先刻のお乳母は如何いたしましたな。

龜　何か御用でございますか。

七　孃樣の平素の御樣子が種々お訊ね申したい。

龜　それは手前から申上げましても……。

七　否それは乳母に限ると、醫書にもあることじやて。

（十）

龜　唯今此へ召びまするで、兎も角も娘を御診察下さいまするやうに。

七　はい〳〵（と席を進めて）お手を。噫、好肌理であらつしやる。餅膚、羽二重膚、絹漉膚、白玉膚、など種々あるが、之は何と謂つたものであらうか、好肌理だ。　と頻りにお類の下臂を摩つたり、握つたり、抓つたり、

る　あゝゝ、うゝゝゝ。

龜　よし〳〵、痛いか、然うか。最少しだから我慢しな。

七　痛いとおつしやるか。やはり病氣の加減じやて。と子細らしく脈を候て、

七　なるほど、邪氣停滯して口中に在り。頗る可恐々々。

龜　先生樣、これは何いふもので瘖になりましたのでございませうか。

七　其は畢竟口をきくことが出來んからじやてな。

龜　へゝゝゝそれは解つてをりますが、其口のきけなくなりましたのは。

七　それは畢竟口中に邪氣が停滯して、舌の筋が釣れるところからな。

龜　へい〳〵成程、それで其舌の筋の釣れまするのは何いふ理由でございませうか。

七　それは其、その其は、舌といふのものは一體口中に在つて、咽喉の入口に蝶番の仕掛け附いてをるものじやに由て、動くわけになつてをるじやて。

龜　へい〳〵御尤樣で。

七　之を動かすものは筋じやてな。話轉つて、凡そ人間の腹中には、五臟六腑といつて、其數十一の臟腑がある。之は鹽辛にしても一向食へんものとしてある。胃袋、膽、百尋、或は腎な、肝、肺などは人の能く知

つてをる臟腑じやて。て、此五臟六腑には各筋があつて、其筋が皆舌の根の處に來てをる。じやに由て、舌の動くのは畢竟此筋の動くので、筋の動くのは、弛びたり張むだりするわけの仕掛で、其又筋の動くのは、人間が今日活きてをるからであると、醫書にもあることじやてな。

龜　へい〳〵。深く窮理をいしたものでございますな。

七　深く窮理をしたものじやて。扨右の筋なるものが動くのは、專ら五臟六腑が此腹中にて活動してをるが故なりで、其五臟六腑の舌を繋ぐところの十一本の筋といふものは、皆一處に弛びたり張むだりするて、自然舌の動活といふものが自由自在なので、舌が自由に働くから、語も自由にいへるといふ、まづ之が理窟じやて。此十一本の筋が一本でも調子が狂つたら、どんなものであらうかな。近い喩が彼紙鳶じやて、一本でも絲目が曲つておつたら、決して揚がる理合のもので無い。

龜　へい〳〵御尤樣で。

七　奈何でごす、それで舌と筋の理合がお分りになりましたか。

龜　へい〳〵。

七　扨これから孃樣の病の根本といふところをお話いたさう。時に御主人、まだお乳母は見えませんかな。

龜　唯今しがた此へお茶を持て出ましてございましたが。

七　いや、さつぱり心着かなんだ。後に一寸彼も診て進ぜやう。

龜　彼は別に何處も不快ことはございませんで。

七　否それがいかない、所謂素人了簡。

龜　左樣でございますか。まことに達者でございまして、年に一度風を引くこともございませんが。

七　其が素人了簡。醫書にも、餘り丈夫過ぎるのは近い内に大病をする前表としてあるて。あゝ可恐々々。

龜　左樣なれば後刻御診察を願ひまする。唯今のお話續きを何卒。

七　よろしい。扨五臟六腑の中で、胃袋は食物を掌り、膽玉は度胸を掌り、心臟は種々の思慮を司るて。また腎といふ臟腑は色戀を司る。今孃樣の腎といふものは、一方ならん活動をしてをる爲に、甚しく疲勞してをるじやて。之が爲に舌に繋がるところの筋が弱つてしまうて、一度張むだまゝで之が弛びん。そこで舌が釣れる、釣れるから自由に動かんじやて。之を療治するには、先づ腎の臟の活動を和げんければならん。

龜　腎の臟の活動と申しますると。

七　色戀を司る臟腑の働が強過るから、之をぐつと和げるじやて。

龜　へい／＼成程、それで如何なもので、彼の腎の臟とやらの働が強過るのでござりませうか。

七　はて野暮な、戀ひしい男に添ひたい／＼、一心に思ひつめるばかりで、其願ひが協はんところから、それ腎臟甚しく活動するて。俗に云ふ戀わづらひてごす。

龜　へい〳〵。

七　それで服藥は朝晩晝の三度、食事の前に、慈姑の大きいところを十個づゝ。それに百舌鳥の黑燒を、これは一羽を一日三度に飮ませる。但し水や白湯では利かんから、胡麻の油でな。

龜　へい〳〵。

七　早速右の品々をお用ひなさい。明日にもまたお見舞ひ申さう。必ずしも御心配には及ばん。今月の末には何分か驗が見えませう。時に御主人お乳母は如何いたしましたな。

龜　唯今一寸出ましたさうでございます。

七　それは殘念な。一寸診察して進ぜやうと思つたに。歸られたら手前が宜しう申したとお傳へ下さい。

龜　畏まりましてございます。

七　左様なら最お暇を申さう。

龜　左様でございますか。今日は態々御出で難有う存じました。

七　最何も御用はござらんかな。と躊躇してゐる。

龜　つひ失念いたしてをりました。之は御診察料で。

と紙包を出す。

七　何でござるかな。

龜　經少ではございまするが、御診察料で。

七　診察料？はゝあ世間の醫者はかういふ物を取るか知らんが、手前は流儀違ひでな、錢金の爲に醫者はいたしてをらんから。

と衝と立上がる。

龜　先生様それではどうも私の氣が濟みませんて、何卒此は。

七　折角ではござるが、手前は錢金の爲に療治はせんのだから。

龜　御尤ではございまするが、御診察を戴きまして、お禮を仕つりませんては。

と無理に七兵衛の袖の中へ推込む。

七　手前は世間の醫者とは流義違ひで、かういふ物を取らうといふ、そんな陋い了簡でないのだから、それでは却つて手前迷惑する。

と斷りながら戸外へ出て、袂の中へ手を入れて四邊を見廻し、そつと包を出して中を見ると、二圓札が一枚。

七　難有え〳〵。醫者といふ奴はうめえ家業だぞ。體の好い盗人だ。これで彼乳母が手に入りや、畜生め、一日醫者をした日にや生涯罷められねえだらう。ウム難有え〳〵。

(十)　おねがひ（七兵衛　彌三郎）

紙幣を眺めて無上に悦喜してゐる七兵衛の後から、
彌　もし先生。
七　えゝ吃驚した。何だ、突然に大きな聲をしやがつて。
彌　これは大きに失禮をいたしました。少々先生にお願ひがございまして。
七　診察なら宅へおいで。往來中で脈が取れるものか。
彌　私は病人ではございませんので。
七　それにしては血色が良くない。餘り脂肪質を食んと見えるな。鹿角菜に油揚、干葉の味噌汁、古漬の澤庵なんぞて、今日人間が活きてゐられる理のものでない。會には天麩羅の立喰も藥だから遣るがいゝ。而して願ひといふのはどういふ事だ。

彌　いかゞはしい事をお訊ね申しまするやうて甚だ恐入りまするが、貴下はあの鶴屋へお見舞にお出になりました先生でゐらつしやいますか。

七　妙に戸籍を調べたものだ。鶴屋へいつた先生なら奈何すのだ。

彌　へい。それでは彼娘を御診察なすつたのでございませうな。

七　其通りだ。

彌　彼娘の病氣は全く瘖でございませうか。

七　能く色々な事を穿鑿する男だ。彼娘は瘖だよ。

彌　先生眞實の瘖でございますか。

七　數多の醫書を研究したが、虚の瘖といふ病症は無いな。

彌　へえ、眞實に瘖でございますか、先生。

七　懊惱い男だな。一體お前は何者だえ。

彌　それは唯今申上げますが、最少々お聽かせ下さいまし。彼娘の瘖になりましたのは、どういふやうな原因でございませう、先生。

七　それを聞かせると、お前達の毒になることだから言ふまい。

彌　戀わづらひが原因だと申しますが、左様でございますか。

七　それほど知てゐながら聞く奴もないものだ。

彌　先生の御診察なすつたところでも、やつぱり戀わづらひからでございますか。

七　私の診察したところでも、戀わづらひに相違ないてな。

彌　へえ、それで、戀わづらひをするほど惚れた男といふのは、何者でございませう。

七　近所の息子だといふ噂だて。

彌　何といふ息子だか御存じでございますか。

七　たしか彌三郎とかいつたよ。

彌　へえ。戀わづらひで餘程瘦せましたかな。

七　それは何しろ病ふことだから瘦せたな。

彌　其男に逢ひたいと申してをりましたか。
七　そんな言もいはんやうだつた。
彌　先生、言はない理、考へて見ましたら瘖でした。
七　えゝ人を馬鹿にするな。考へて見なくつても瘖だ。
彌　先生。
七　何だ。
彌　折入て先生にお願ひがございますが。
七　能くお願ひのある男だ。これから二三間病家廻りをせんければならんのだから、お前の願ひなんぞを聞く隙は無い。
彌　てはございませうが、　と紙入より五圓紙幣を取出し、わざと見えるやうに紙に包むで、
彌　これは些少でございまするが、御用のお間をお缺かせ申しまするお詫の印でございます。何卒お納め下さいまして。

七　左樣かね、折角だから之は納めておくよ。願ひといふのは何いふ筋だね。

彌　先生、實は私があの鶴屋の娘の…………彌三郎でございますが、

七　えゝ、あの彌三郎！あの娘の戀わづらひをしてゐる……。畜生！旨くやつてるぜ、こりや五圓ぢや濟まされねえ。

（十一）魂膽（七兵衛・彌三郎）

彌　其處は又何とか味を附けますでございますから。

七　これは左樣ありたいて。ところでお賴みといふ一件は、內々艶書といふ奴を屆けてくれなどゝの見當だらう。

彌　まづ其見當でございます。

七　先では可笑くない。ぎり〳〵決着の所は。

彌　最ちつと罪の深いことで。

七　はてな。逢はしてくれろか。

彌　へゝゝゝゝ其處でございます。

七　それはお斷りだ。苟も醫者たるものが其の樣な……。

彌　もう五圓

七　もう五圓？　これは考へものだ。

彌　御思案は御損でございますよ。さあ〱是でござい。
と五圓紙幣を七兵衛の鼻頭で振りまはす。

七　苟も醫者たるものだが、紙幣たるものには換へられない。
と紙幣を取つて懷中に入れる。

彌　決して先生の御迷惑や、御厄介になるやうな事はいたしません。私の方に極妙といふ計略があるのでございます。

七　逢はせ賃を出した上で、計略の御持參は御念の入た事だ。其計畧といふのは。

彌　芝居でするると、耳の端へ口を寄せて、ムニャ〱で解るのだが、まづ其子細一通り……………あゝ合方が欲しいものだ。

七　何の事だか一向解らねえ。之は醫書には無い事だ。

彌　そこで其計略の筋といふのは、

七　矢張この舌根の處に來てゐる、じやに由て舌が自由に活動する理窟

かな。

瀬　何の事だか一向に解りませんね。

七　解るまい。之は盡く醫書にある事じやて。

瀬　何處に在るのか存じませんが、まづ私の胸にある筋を申します。先生に唯手引をお願ひ申したゞけて、中々あの鶴屋の奧へ忍びこむことが出來るわけのものではございません。

七　また直に忍びこめるくらゐなら、大枚十圓といふものをくれる理も無い。

瀬　そんな皮肉をおつしやらずに、まあお聞き下さい。ですからずつと大手を振つて鶴屋へ乘込の、公然にお顙に逢はうといふ魂膽があるのでございます。

七　適れ〳〵。そこで……。

瀬　其魂膽は、私が先生のお弟子といふ觸込でございます。

七　なるほど、代脈だ。代脈があるとなると、先生の沽券がぐいと上がるといふものだ。それから、

彌　そこで此者は修行中でござるから、見習旁今日伴れて參つたといつた樣なことを先生がおつしやつて下さいまし。

七　あゝ謂ふとも。それで最外に言草は無しかい。

彌　餘は私の仕草でございます。

七　それが見ちやゐられまい。どうかしてもらひたいものだ。

彌　左樣でござゐますね、私の方でも亦其塲は水入らずの對座といふ奴の方が勝手なのでございますから、かういふ事になすつて下さいまし。私は全然代脈といふ扮裝で、帽子目深の色眼鏡か何かで、反身になつて先生の跡から娘の室へ通りませう。そこで以て、今日は家傳秘密の療治をするのだから、他見無用だに由てお人拂ひに願ひたい。

七　感心々々。

彌　ですがね、まるで人拂ひといふ註文だと怪くおもはれますから、乳母だけは格別を以て允すといふ事にいたしませう。

七　感心々々。「乳母だけは格別を以て」は感心々々。

彌　乳母だけは格別を以て允すのは何故だと申しますと、實の所彼女は二人の中をちやんと心得てをりますので、謂はゞ私の結ぶの神でございます。そこでまづ先生と御一所に彼娘の室へ通りませう。誂への通り乳母は側に附いてをります。私と彼とが對座になります。

七　畜生め、奈何してくれるのだ。

彌　對座になつて見ますれば、色々そこの處に色々又入込むだ事がございまさ。

七　どうでも「ございます」が可さ。

彌　恐入りますが、其間先生は室の外で張番といふ奴をなすつて下さいまし。

七　我は外で張番、お前は中で對座、それぢやちつと冥利が惡からう。

彌　へゝゝゝお氣毒樣ではございますが、何事も十圓と御諦めなすつて、一つそこの處を願ひます。

七　えゝ之も醫者の情だ。醫は仁術なりと醫書にもあることだ。仕方がねえ、やつゝけろ。

彌　それは早速の御承知で有難う存じます。それでは明日は何時頃御見舞でございます。

七　丁度晝飯前とふ時刻にな。

彌　では其迄に私は此處、此處へ參つてお待ち申してをりますから、どうぞ御間違ひ無く。

七　何事も十圓と諦めたよ。

（十二）全快

七兵衛
彌三郎
龜右衛門
おむら

龜　へい、これは先生様入らつしやいまし。昨日は又有難う存じました。

七　はい〳〵お加減は奈何でござるな。

龜　どうも未だ變りましたこともございませんやうで。

七　さうで御座らうとも、せめて四五日經たんではな。時に御主人今日は弟子を連れましたよ。これは手前の代脈でござるがな、まことに師匠勝りの巧者でな、今日はその……………療治をするので……………人拂ひだて。
何故人拂ひだといふと……………療治をする。
と附燒刄が剝げて、ごまかしかねてゐる。

彌　先生今日は家傳秘密の御療治を。

七　それ〳〵家傳秘密。御主人家傳秘密でござるて。ぢやに由て御無用

になさい。

龜　何を無用にいたしますので。

彌　他見は無用でござりますから。

七　さう〱他見々々、他見雀は躾度よく宿る。御主人無用は他見でござるて。お人拂ひに願ひたい。然し乳母だけは格別を以て免しますよ。

龜　夫は何いふ次第で。

七　や、あれは結ぶの神じやに由てな。

彌三郎恘へかねて七兵衛の袖をぐい〱曳く。

彌　先生、松屋でもお見舞を待ちきつてをりまするから、早速家傳秘密にお懸りになりましては。

龜　定めしお忙しなくつてゐらつしやいませう。御案内をいたしませう

村や、村や。

む　はいお召あそばしましたか。

龜　先生を御案内申して。

む　はい何卒此方へ、先生樣。

と彌三郎の顏を見て吃驚。

む　おや！　といふのを彌三郎は目授するゆゑ、

む　先生樣いらつしやいまし。　と七兵衛への挨拶にする。

七　いやお村どのかな。はゝゝゝゝゝ。

三人お類の室に入る。

彌　先生お約束ですから一寸外へお出なすつて、十圓の諦め一件を願ひます。

七　もう逐出される事かい。好い器量だ。

彌　それでもお村が後で先生に是非お話し申したいことがあるつて、浮浮してゐますぜ。　と七兵衛の肩をとんと拊く。

七　眞實かい。

彌七　大概様子でもお分りになりさうな者ぢやございませんか。うふゝゝゝゝゝゝ。と首を縮めながら室を出て行く。

（十三）全快（つゞき）

おむら
彌三郎
おるゐ
龜右衛門
七兵衛

む　彌三樣、まあ〳〵好くお出なすつて下さいました。お嬢樣、あなた此方へいらつしやいましよ。

彌　一寸拗ねたところさ。

る　よう御座いますよ貴下は眞個に……。

と大きな聲を立てる。

む　あれ靜にあそばせよ。そんな大きな聲をする痞があるものでございますか。

る　おほゝゝゝゝゝ痞は苦いねえ。

彌　私もね、彼醫者から痞だと聞いた時、はて變だと思つたが、矢張其通りだつた。

む　お話は後にして、あなた彌三樣。

と彌三郎の耳に口を寄せて、むにや〳〵〳〵。

む　ね、宜しうございますか。

彌　有難い。拜む、拜み奉つる。

む　お孃樣、早くお支度をなさいましよ。彌三樣しつかりお頼み申しましたよ。

彌　萬事心得たよ。ぢや跡は何分ね。お類樣、さあ出懸けやう、早いとこ早いとこ。

ろ　あれまあ忙しない。村や、一寸お前其方の櫛を出しておくれな。

む　あなた櫛どころぢやございませんよ。早く遊ばさないと邪魔が入りますから。あれ〳〵旦那樣のお聲がいたしますよ。早くいらしやいまし。彌三樣何分お願ひ申します。お孃樣左樣なら御機嫌よろしう。

と部屋を出る。

七　乳母樣、先刻傳言の內々の話といふのは。

む　何でございますえ。

七　私へ內々話があるといふのは何だえ。

む　私は何も貴下へお話はございませんが。

七　含羞たまふな。其の話といふのを一寸承まはらう。

む　眞箇に何もお話なんぞはございませんので。

七　と先激したものさ。內々お話申したいは賴もしいよ。

む　貴下御冗談ばつかりおつしやいますよ。

と行かうとする袖を捉へて、

七　御冗談？それは此方で謂ふ口上さ。先刻彌三郞樣にあれほど傳言けた癖に、

む　あれまあ、あんな御冗談ばつかり。此處をお放しなすつて下さいましよ。私は御用があるのでございますから。

七　此方にも大分御用があるのだから。

むえゝもう。　と力一杯に七兵衛を衝仆して逃出す、逐懸ける、出合頭に座敷から龜右衛門、血眼になつて、

龜　これ先生。

七　おや此は。

龜　娘は奈何いたしました。

七　孃様かな。　孃様はお部屋で………。

龜　貴下は何をしておいでなさる。　醫者が病人を打遣つて、までついてゐるといふ法は無い。　さあ一處にお出でなさい。

七　何方へ參るかな。

龜　知れた事だ、娘の部屋へ一處に來い。

七　これは怪しからんことを。　苟くも醫者たるものに向つて、

龜　えゝ何をぐづ〱謂やがる。

と七兵衛を引張つて、お類の室へ入ると誰も在ず。

七　おや／＼　と吃驚。

龜　此野郎め、おや／＼も無えもんだ、人の娘を拐帶しやがつて、皆來い皆來い。

源助多七を始めとして、店の若いもの五六人どか／＼と駈來り、七兵衛をおつ取卷て、

撲つちまへ／＼。

（廿六年五月）

紅葉全集卷之貳終

遺友　石橋思案　校



明治三十七年四月十五日印刷
明治三十七年四月十八日發行

紅葉全集第貳卷
定價金壹圓八拾錢

著者　尾崎德太郎

發行者　大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　石川金太郎
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所　株式會社秀英舍
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

十千萬堂藏版

